

北谷町文化財調査報告書 第26集

伊礼原遺跡

— 伊礼原B遺跡ほか発掘調査 —

2007年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

い れい ばる
伊礼原遺跡

— 伊礼原B遺跡ほか発掘調査 —

2007年3月

沖縄県 北谷町教育委員会



巻首図版 1 上：キャンプ桑江の航空写真（南側から）
下：伊礼原遺跡の上空写真（ブルーシート部分）



巻首図版2 上：低湿地区の発掘状況（南側から） 下：第14層出土の笊保存資料



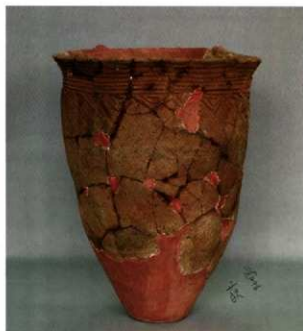
巻首図版3 上：砂丘区の発掘状況(東側より)
下：E-19グリット第1住居址(南側より)



卷首図版 4 上：復元土器（集合） 下：石器（集合）



卷首図版5 復元土器① 上左：爪形文式土器・上右：曾畑式土器
中左：室川下層式土器・中右：面縄前庭式土器
下左：面縄東洞式土器・下右：面縄東洞式土器



卷首図版6 復元土器② 上左：萩堂式土器・上右：縄文晩期系土器（浅鉢）
 中上左：縄文晩期土器・中下左：弥生式土器（壺底部）
 中上右：縄文晩期土器（深鉢）・中下右：貝塚後期土器（尖底）
 下左：グスク土器・下右：フェンサ下層土器



巻首図版7 チャート製品・黒曜石・翡翠・主な石器

上左：打製石器（チャート製品）

中上左：磨製石鏃・磨製片刃石斧

中下左：黒曜石製品

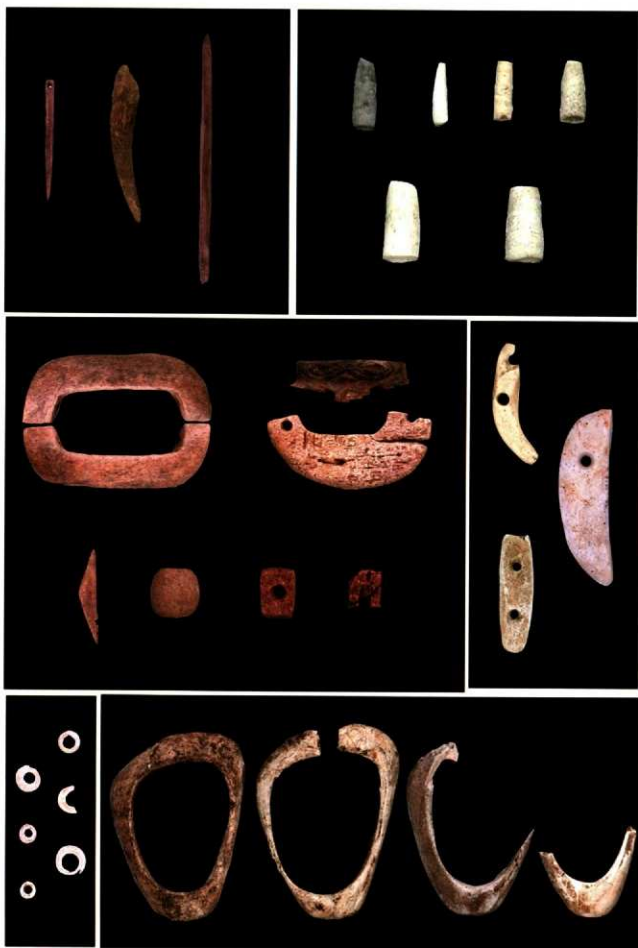
下左：磨製片刃石斧

上右：局部磨製石斧

中上右：翡翠製品

中下左：磨製石斧

下右：石皿



卷首図版8 上左：骨製品・上右：貝製品
 中左：骨製品・中右：貝製品
 下左：貝小玉 ・下右：ゴホウラ製腕輪

本文目次

はじめに	
例言	
巻首図版	
第I章 調査に至る経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査体制	4
1. 試掘調査の組織	4
2. 範囲確認調査の組織	5
第3節 発掘調査の経過	8
1. 低湿地区	8
2. 砂丘区	19
第4節 出土遺物保存処理事業	25
第II章 遺跡の位置と環境	29
I 伊礼原遺跡の立地としての地形・地質 大城逸朗	29
II 位置と環境	33
第III章 層序と年代	37
I 低湿地区 辻誠一郎	37
II 伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋設地形と中央区・南区にみられる古地質痕跡 松田順一郎	44
第IV章 調査の方法と成果	61
I 低湿地区	61
第1節 調査の方法	61
第2節 層序	61
第3節 遺構	74
第4節 出土遺物	78
1. 土器	78
2. 石器	114
3. チャート製品 長野真一	120
4. 骨製品	129
5. 貝製品	134
6. 木製品	139
7. グスク時代以降の遺物	145
(低湿地区図版)	149
II 砂丘区	223
第1節 調査の方法	223
第2節 層序	223
第3節 遺構	231
第4節 出土遺物	256
1. 土器	256
2. 石器	314
3. 骨製品	324
4. 貝製品	337
5. 翡翠製品	350
6. チャート	351
7. 輝石	353
8. グスク時代以降の遺物	355
(砂丘区図版)	365
第V章 理化学的分析	433
I 伊礼原遺跡の植物遺体群 辻誠一郎・大松しのぶ・辻圭子	433
II 伊礼原遺跡から出土した木材の樹種 能城修一	445
III 沖縄県北谷町伊礼原遺跡出土の縄文人骨 松下孝幸	467
IV 伊礼原遺跡から出土した骨椎動物遺体群 樋泉岳二	480
V 貝類遺体からみた伊礼原遺跡 黒住新二	535
VI 沖縄県伊礼原遺跡出土黒曜石製石器の化学分析による産地推定 角縁進・小畑弘己	556
VII ヒスイ分析 新里貴之	561
第VI章 総括	562
第1節 環境と生業 辻誠一郎	562
第2節 遺跡のまとめ	565
報告書抄録	573

挿目次

第1図	北谷町の位置図	26	第53図	上：試掘穴No3 検出の平面図・断面図・ 下：試掘穴No4 検出の平面図・断面図	234
第2図	北谷町の遺跡分布図	27	第54図	E-20グリット検出の貝殻類土坑	236
第3図	地形図及びグリット位置図	28	第55図	E・D-19グリット検出の第1号住居址	238
第4図	模式地形断面(東-西)	30	第56図	C・D-18・C・D-19グリット検出の第2号 住居址	240
第5図	北谷町の地質	32	第57図	C-19北グリット検出の第1号集石	241
第6図	伊礼原遺跡とその周辺の地形分類図	44	第58図	C-19・20グリット検出の第2号集石	242
第7図	E-14、E-18、E-19、C-23トレンチで採取 した堆積物試料の粒径頻度分布	48	第59図	上：E-19グリット検出の第3号集石・ 下：G・H-19グリット検出の第4号集石	243
第8図	E-14、E-18、E-19、C-23トレンチで採取 した堆積物試料の粒径頻度分布	50	第60図	E-20グリット検出の4の土坑	245
第9図	粒度分析試料中の砂の平均粒径、標準偏差、 歪度を比較した散布図	51	第61図	E-20グリットが址4と遺物検出状況	246
第10図	砂に含まれる岩石起源砕屑粒子(ほとんど石英 粒子)の百分比を示す多角形グラフ	51	第62図	E-20グリットが址4の完備状況	247
第11図	砂丘区Eラインにおける海浜、砂丘区地形変遷 の模式図	53	第63図	E-14・15グリット検出の柱穴平面図	249
第12図	グリッド設定図(低湿地区)	62	第64図	E-16・17グリット検出の柱穴平面図	250
第13図	低湿地区 層序	69	第65図	E-11・15・16・17グリットの柱穴断面図	251
第14図	南区サブトレバ層検出状況	71	第66図	上：F-19グリット検出の井戸状遺構と犬骨・ 下：犬骨平面図・断面図	254
第15図	北東区 層序	73	第67図	上：C-18グリット検出の溝状遺構と人頭蓋骨・ 下：人頭蓋骨平面図・断面図	255
第16図	荒検出状況	75	第68図	室川下層式土器①	260
第17図	荒上面の状況	76	第69図	室川下層式土器②	261
第18図	木製容器(上)・構築材出土(左下)状況	77	第70図	室川下層式土器③	262
第19図	爪形文土器	81	第71図	面縄前庭式土器①	273
第20図	曾畑式土器①	85	第72図	面縄前庭式土器②	274
第21図	曾畑式土器②	86	第73図	仲泊式土器①	275
第22図	曾畑式土器③	87	第74図	仲泊式土器②	276
第23図	曾畑式土器④	88	第75図	仲泊式土器③	277
第24図	曾畑式土器⑤	89	第76図	仲泊式土器④	278
第25図	曾畑式土器⑥	90	第77図	面縄東洞式土器①	288
第26図	曾畑式土器⑦	91	第78図	面縄東洞式土器②	289
第27図	曾畑式土器⑧	92	第79図	面縄東洞式土器・嘉徳I式土器・ 市来式土器③	290
第28図	面縄前庭式土器・仲泊式土器・面縄東洞式土器	100	第80図	面縄東洞式土器・嘉徳I・II式土器④	291
第29図	縄文晩期土器	103	第81図	面縄東洞式土器・嘉徳I・II式土器⑤・底部	292
第30図	貝塚後期土器	109	第82図	伊波式土器・筑室式土器・ カヤウチンバタ式土器	294
第31図	貝塚後期土器	110	第83図	縄文晩期・貝塚後期土器①	305
第32図	グスク土器	113	第84図	縄文晩期・貝塚後期土器②	306
第33図	石斧の刃の模式	115	第85図	縄文晩期・貝塚後期土器③	307
第34図	チャート製品①	120	第86図	貝塚後期土器④	308
第35図	チャート製品②	124	第87図	貝塚後期土器⑤	309
第36図	チャート製品③	125	第88図	貝塚後期土器⑥	310
第37図	チャート製品④	126	第89図	貝塚後期土器⑦	311
第38図	骨製品①	132	第90図	縄文晩期・弥生土器⑧	312
第39図	骨製品②	133	第91図	縄文晩期・貝塚後期土器・底部⑨	313
第40図	貝製品	138	第92図	骨製品①	334
第41図	木製品①(櫛)	141	第93図	骨製品②	335
第42図	木製品②構築材・不明品・角材	142	第94図	骨製品③	336
第43図	木製品③柄・杭	143	第95図	貝製品①	343
第44図	木製容器	144	第96図	貝製品②	344
第45図	グスク時代以降の遺物	148	第97図	貝製品③-a	345
第46図	グリッド図(砂丘区)	224	第98図	貝製品③-b	346
第47図	試掘穴No1、2の層序	227	第99図	貝製品④	347
第48図	試掘穴No3、4の層序	228	第100図	貝製品⑤	348
第49図	19ライン西壁面層序	229	第101図	貝製品⑥(二枚具有孔製品)	349
第50図	Eライン南壁面層序	230	第102図	青銅製品	350
第51図	上：試掘穴No3 検出のが址1・ 下：試掘穴No4 検出のが址2	232	第103図	チャート出土状況(左-砂丘区・右-低湿地区)	351
第52図	上：試掘穴No1 検出の柱穴平面図・断面図・ 下：試掘穴No2 検出の柱穴平面図・断面図	233	第104図	軽石出土状況	354

第105図	グスク時代以降の遺物①白磁・青磁・染付・ 褐釉陶器・華南三彩・天目・瑠璃軸・神繩施 軸陶器・沖繩無釉陶器	363	図版8	上: 伊礼原遺跡の遠景(西側上空より) 下: 伊礼原遺跡の中景(西側より)	151
第106図	グスク時代以降の遺物②備前焼・本土産陶器・ 沖繩無釉陶器・砥部焼・本土産磁器・滑石製 品・滑石混入土器・円盤状製品・キセル	364	図版9	上: 伊礼原遺跡 低湿地区の伐採後の状況 (南側より) 下: 伊礼原遺跡 低湿地区の伐採後の状況 (西側より)	152
第107図	位置図	468	図版10	上: 伊礼原遺跡 低湿地区東側奥のウチヌスカイ湧水 下: 伊礼原遺跡 低湿地区湧水から流れる小川跡の水イモ	153
第108図	人骨の残存部(アミカけ部分)	469	図版11	上: 低湿地区の発掘状況 下: 低湿地区のグリット設定状況	154
第109a図	伊礼原遺跡(低湿地区)におけるイノシシ下顎 第3大臼歯計測値の分布	532	図版12	上: 低湿地区の土層断面状況(中央区南壁面) 下: 低湿地区の土層断面状況(北区東壁面)	155
第109b図	伊礼原遺跡(低湿地区)・神縄先史時代・弥生 時代遺跡産イノシシ及び現生イノシシの下顎第 3大臼歯	532	図版13	上: カワナを多量に含む上位層の状況 (中央区東壁面) 下: 低湿地区北側の旧水田跡(第3の層)	156
第110図	計測値の比較(平均±標準偏差)	532	図版14	上: 同上 下: 同上	157
第111図	伊礼原遺跡(低湿地区)と他遺跡の脊椎動物 遺体群の比較	533	図版15	上: 中央区西側水田跡に見られる亀甲状クラック の状況 下: 中央区南壁面の状況(手前北側には岩盤石灰 岩の水摩を受けた痕跡が見られる)	158
第112図	伊礼原遺跡(低湿地区)と他遺跡の魚類遺体群 の比較	534	図版16	上: 中央区北壁面の状況 (中央の第11~16層が欠ける)	159
第113図	伊礼原遺跡における食用海産貝類の優占種	549	図版17	上: 南区第11層の樹根の検出作業状況 下: 西区第11層の樹根検出状況	159
第114図	伊礼原遺跡における食用海産貝類の生息場所 類型組織	549	図版18	上: 中央区西壁第11層の樹根層壁面に出土した フェンサ下層式土器 下: 南区南壁面と第14層礫層上面の状況 (左側が木製容器、右側が板状樹根と石器類 出土状況)	160
第115図	伊礼原遺跡における陸産貝類の生息場所類型 組成の時間別変遷	549	図版19	上: 南区南壁面と第14層礫層上面の状況 下: 南区第14層上面の木製容器の出土状況 (容器内部に泥が混入している)	162
第116図	分析資料実測図	557	図版20	上: 南区第14層礫層上面の状況 (木製容器の取り上げ後) 下: 西区第14層礫層上面の状況	163
第117図	X線ラインプロファイル	558	図版21	上左: 南区第14層上位面(右側)と 中位面(左側)の状況 上右: 同上上位面の掘り下げ後の状況 下左: 同上上位面掘り下げ後の建築材の 出土状況 下右: 同上土層断面と建築材の状況	164
第118図	Rb/Sr Sr/Zr図	559	図版22	上: 中央区西側の第14層中位礫層の露出状況 下: 中央区北側の第14層中位礫層(左側) 下位礫層(右側)の露出状況	165
第119図	Rb/Sr Fe/Zn図	559	図版23	上: 中央区西壁面 (中央やや左、黒い部分下で櫛が出土) 下: 櫛の検出状況 (上層からの溝下で見られる)	166
第120図	ヒスイ分析、新里貴之	561	図版24	上: 中央区東側、第14層中位礫層の露出状況 下: 同上、試掘穴断面に検出された遺構	167
第121図	伊礼原遺跡の土器変遷	571	図版25	上左: 中央区東側、中位礫層、灰の上位に検出 された板状樹木 上右: 灰の検出状況 下左: 灰の検出状況	167

図版目次

巻首図版1	上: キャンプ桑江の航空写真(南側から) 下: 伊礼原遺跡の上空写真 (ブルーシート部分)		図版19	上: 南区第14層上面の木製容器の出土状況 下: 南区第14層上面の木製容器の出土状況 (容器内部に泥が混入している)	162
巻首図版2	上: 低湿地区の発掘状況(南側から) 下: 第14層出土の灰保存資料		図版20	上: 南区第14層礫層上面の状況 (木製容器の取り上げ後) 下: 西区第14層礫層上面の状況	163
巻首図版3	上: 砂丘区の発掘状況(東側より) 下: E-19グリット第11居住区(南側より)		図版21	上左: 南区第14層上位面(右側)と 中位面(左側)の状況 上右: 同上上位面の掘り下げ後の状況 下左: 同上上位面掘り下げ後の建築材の 出土状況 下右: 同上土層断面と建築材の状況	164
巻首図版4	上: 復元土器(集合) 下: 石器(集合)		図版22	上: 中央区西側の第14層中位礫層の露出状況 下: 中央区北側の第14層中位礫層(左側) 下位礫層(右側)の露出状況	165
巻首図版5	復元土器①		図版23	上: 中央区西壁面 (中央やや左、黒い部分下で櫛が出土) 下: 櫛の検出状況 (上層からの溝下で見られる)	166
巻首図版6	復元土器②		図版24	上: 中央区東側、第14層中位礫層の露出状況 下: 同上、試掘穴断面に検出された遺構	167
巻首図版7	チャート製品: 黒曜石・翡翠: 主な石器		図版25	上左: 中央区東側、中位礫層、灰の上位に検出 された板状樹木 上右: 灰の検出状況 下左: 灰の検出状況	167
巻首図版8	上左: 骨製品・上右: 貝製品 中左: 骨製品・中右: 貝製品 下左: 貝小玉・下右: ゴホウラ製腕輪				
図版1	伊礼原遺跡の地質層序と編年(1)	41			
図版2	伊礼原遺跡の地質層序と編年(2) 試掘穴No.143	42			
図版3	伊礼原遺跡の地質層序と編年(3) 年代測定試料	43			
図版4	中央区・南区の断面利き取り標本と築遺構 の保存処理標本の側面にみられる変形構造	60			
図版5	チャート製品①	127			
図版6	チャート製品②	128			
図版7	伊礼原遺跡周辺の戦前の米軍航空写真	149			

	下右: 穴の南面隅(右下側)で網穴の境が見られる	図版51	復元土器 1 (第29図2) 2 (第30図20) 3 (第31図1) 4 (第32図6) 5 (第32図10) …194
図版26	上左: 北区第14層遺物出土状況	図版52	石器① …195
	上右: 同左、石斧の出土状況	図版53	石器② …196
	下左: 同上、石斧の出土状況	図版54	石器③ …197
	下右: 板状石器の出土状況	図版55	石器④ …198
図版27	上左: 中央区南壁第14層、荒近くシイの実のレンズ状の堆積状況	図版56	石器⑤ …199
	上右: 荒の北面側に広がるシイの実の状況	図版57	石器⑥ …200
	下左: 荒の北側外に集中するシイの実の状況	図版58	石器⑦ …201
	下右: 南区東側に見られるシイの実の状況	図版59	骨製品① …202
図版28	上: 南区サブトレッチ第14層の貝層の検出状況(1回目)	図版60	骨製品② …203
	下: 同上	図版61	骨製品③(上)・チャート(下) …204
図版29	上: 南区サブトレッチ第14層の貝層の検出状況(2回目)	図版62	貝製品 …205
	下: 同上	図版63	木製品①櫛 …141
図版30	上: 南区サブトレッチ第14層の貝層の検出状況(3回目)	図版64	木製品②構築材・不明品・角材 …206
	下: 同上	図版65	木製品③柄・杭 …207
図版31	上左: 南区第14層貝層の検出状況	図版66	木製品④木製容器 …208
	上右: 同左 下左: 同上、海獣骨(図版75)の出土状況 下右: 同上	図版67	グスク時代以降の遺物① …209
図版32	上: 南区サブトレッチ第14層下位雑層の検出状況	図版68	グスク時代以降の遺物② …210
	下左: 同上、サブトレッチF-15交差部の状況	図版69	魚1・2 …211
	下右: 同上、南区から中央区を望む	図版70	魚3 リクガメ・ネズミ・カエル …212
図版33	上左: 中央区サブトレッチ第14層(G・H・I)の状況	図版71	ウミガメ1・2 …213
	上右: 南区サブトレッチ第14層(A・B・C)の状況	図版72	イルカ・ジュゴン …214
	下左: 中央区サブトレッチ第14層(16・17・18)の状況	図版73	イノシシ1・2 …215
	下右: 西区サブトレッチ第14層(19・20・21)の状況	図版74	イノシシ3・4 …216
図版34	上左: 低湿地区水没状況	図版75	鳥類・クジラ …217
	上右: 発掘作業員(沖縄市シルバー)	図版76	イヌ・イノシシ・糞石・琥珀 …218
	中上左: 低湿地区の崩落状況	図版77	貝類①(巻貝) …219
	中上右: 同上	図版78	貝類②(上: 巻貝・下: 陸貝) …220
	中下左: 低湿地区の水没状況	図版79	貝類③(二枚貝・他) …221
	中下右: 同上	図版80	上: 木の実 各種
	下左: 低湿地区の作業状況		下: 木の实(東区曾畑層) …222
	下右: 発掘作業員(北谷町・沖縄市シルバー) …177	図版81	砂丘区調査状況1
図版35	瓜形文土器① …178		上左: No.1試掘穴東壁面
図版36	瓜形文土器② …179		中左: No.2試掘穴東壁面
図版37	曾畑式土器① …180		下左: No.4試掘穴東壁面
図版38	曾畑式土器② …181		上右: No.1試掘穴白砂層下レキ面検出状況
図版39	曾畑式土器③ …182		中右: No.3試掘穴平面 炉址検出状況
図版40	曾畑式土器④ …183		下右: No.4試掘穴平面 炉址検出状況 …365
図版41	曾畑式土器⑤ …184	図版82	砂丘区調査状況2
図版42	曾畑式土器⑥ …185		上左: E-19グリット第1号住居址検出状況
図版43	曾畑式土器⑦ …186		下左: C・D-18グリット第2号住居址検出状況
図版44	曾畑式土器⑧ …187		上右: E-19グリット第1号住居址検出状況
図版45	面縄前庭式土器・仲泊式土器 …188		中上右: E-20グリット炉址及び貝集積検出状況
図版46	面縄東洞式土器 …189		中下右: C-19北グリット第1号集石検出状況
図版47	縄文晩期土器 …190		下右: C-19・20グリット第2号集石検出状況 …366
図版48	貝塚後期土器① …191	図版83	砂丘区調査状況3
図版49	貝塚後期土器② …192		上: GH-19グリット第4号石集積検出状況
図版50	グスク土器 …193		中左: GH-19グリット第3号石集積検出状況(北東角)
			下左: E-20グリット土坑及び炉址の状況
			上右: ATP-20グリット
			下右: E-20グリット炉址の状況(縄文晩期) …367
		図版84	砂丘区調査状況4
			上左: E-16グリット柱穴完掘状況(グスク時代)
			下左: E-14グリット柱穴完掘状況(グスク時代)
			上右: 中上右: C-18グリット人頭蓋骨検出状況(縄文晩期~弥生期)

	中下右: E-14グリット柱穴内の敷敷状況 (グスク時代)	図版123	骨製品②	407
	下右: E-15グリット柱穴と下層の堆積状況	図版124	骨製品③	408
図版85	砂丘区調査状況5	図版125	骨製品④・石製品	409
	上左: F-19グリット井戸状遺構上面検出状況	図版126	貝製品①	410
	中左: 井戸状遺構内の状況	図版127	貝製品②	411
	下左: 井戸状遺構完掘状況	図版128	貝製品③	412
	上右: 犬骨検出状況	図版129	貝製品④	413
	中右: 犬骨検出状況(下位)	図版130	貝製品⑤	414
	下右: 井戸状遺構石積み状況	図版131	貝製品⑥(二枚貝有孔製品)	415
図版86	砂丘区調査状況6	図版132	翡翠製品	350
	上左: E-20グリット海獣骨(クジラ) 検出状況	図版133	チャート①	416
	中左: E-19グリット貝輪検出状況	図版134	チャート②	417
	下左: E-19グリット市来式土器検出状況	図版135	軽石	418
	上右: C-18グリット海亀胸骨検出状況	図版136	グスク時代以降の遺物①	419
	中右: E-18グリット石斧3点検出状況	図版137	グスク時代以降の遺物②	420
	下右: H-19グリット仲泊式土器検出状況	図版138	魚1・2	421
図版87	室川下層式土器①	図版139	リクガメ・ウミガメ	422
図版88	室川下層式土器②	図版140	ヘビ・鳥類・コウモリ	423
図版89	室川下層式土器③	図版141	カエル・ネズミ・カニ	424
図版90	面縄前庭式土器①	図版142	クジラ	425
図版91	面縄前庭式土器②	図版143	イノシシ1・2	426
図版92	仲泊式土器①	図版144	イヌ 上: 頭骨及び歯牙 下: 四肢骨	427
図版93	仲泊式移行型式土器②	図版145	イヌ・ジュゴン・イルカ	428
図版94	仲泊式土器③	図版146	馬・牛・イノシシの歯	429
図版95	面縄前庭式土器・仲泊式移行型式土器④	図版147	貝類①(一枚貝・巻貝)	430
図版96	面縄東洞式土器①	図版148	貝類②(巻貝・他)	431
図版97	面縄東洞式土器 a	図版149	貝類③(二枚貝)	432
図版98	面縄東洞式土器 b	図版150	試掘No143曾畑式土器包含層産出の 種実遺体(1)	441
図版99	面縄東洞式土器・嘉徳I式土器・市来式土器③	図版151	試掘No143曾畑式土器包含層産出の 種実遺体(2)	442
図版100	面縄東洞式土器・嘉徳I式土器④	図版152	試掘No143曾畑式土器包含層産出の 種実遺体(3)	443
図版101	面縄東洞式土器(上)・(下左) 萩堂式土器	図版153	試掘No143曾畑式土器包含層産出の 種実遺体(4)	444
図版102	面縄東洞式土器・嘉徳I式土器・底部⑤	図版154	伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した 木材の顕微鏡写真(1)	459
図版103	伊波式土器・萩堂式土器・カヤウチマント式 土器	図版155	伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した 木材の顕微鏡写真(2)	460
図版104	縄文晩期・貝塚後期土器①	図版156	伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した 木材の顕微鏡写真(3)	461
図版105	縄文晩期・貝塚後期土器②	図版157	伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した 木材の顕微鏡写真(4)	462
図版106	縄文晩期・貝塚後期土器③	図版158	伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した 木材の顕微鏡写真(5)	463
図版107	貝塚後期土器④	図版159	伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した 木材の顕微鏡写真(6)	464
図版108	貝塚後期土器⑤	図版160	伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した 木材の顕微鏡写真(7)	465
図版109	貝塚後期土器⑥	図版161	伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した 木材の顕微鏡写真(8)	466
図版110	貝塚後期土器⑦	図版162	頭蓋骨	478
図版111	縄文晩期・弥生土器⑧-a	図版163	大腿骨・脛骨	479
図版112	縄文晩期・弥生土器⑧-b 上: 縄文晩期土器 中: 浅鉢土器 下: 弥生産底部	図版164	分析資料写真	557
図版113	縄文晩期・貝塚後期土器・底部⑨-a 上: 表面 下: 裏面			
図版114	縄文晩期・貝塚後期土器・底部⑨-b 上: 表面 下: 裏面			
図版115	石器①			399
図版116	石器②			400
図版117	石器③			401
図版118	石器④			402
図版119	石器⑤			403
図版120	石器⑥			404
図版121	石器⑦			405
図版122	骨製品①			406

表目次

表1	伊礼原遺跡の放射性炭素年代	40	表48	伊礼原遺跡(低湿地区)(試掘穴No.143)堆積物サンプルBから水洗選別で検出された脊椎動物遺体	514
表2	瓜形土器観察一覧	80	表49	伊礼原遺跡(砂丘区)E-20グリッド「貝集積」ピックアップ資料の同定結果	515
表3	曾形土器観察一覧①~③	82	表50	伊礼原遺跡(砂丘区)E-20グリッド「貝集積」フルイ資料の重量と分析率	516
表4	面縄前庭式土器・仲泊式土器・面縄東洞式土器観察一覧①~③	97	表51	伊礼原遺跡(砂丘区)E-20グリッド「貝集積」フルイ資料の同定結果①~②	516
表5	縄文晩期土器観察一覧	102	表52	伊礼原遺跡(砂丘区)Eトレンチで採集した堆積物サンプルの概要	518
表6	貝塚後期土器観察一覧①~③	106	表53	伊礼原遺跡(砂丘区)Eトレンチの堆積物サンプルから検出された脊椎動物遺体	518
表7	グスタ土器観察一覧	112	表54	伊礼原遺跡(砂丘区)出土魚類遺体の同定結果(CDに収録)	518
表8	石器観察一覧①~④	116	表55	伊礼原遺跡(砂丘区)出土カエル類・ヘビ類遺体の同定結果	518
表9	チャート製品の計測一覧	123	表56	伊礼原遺跡(砂丘区)出土リクガメ類遺体の同定結果①~②	519
表10	骨製品観察一覧①~②	130	表57	伊礼原遺跡(砂丘区)出土ウミガメ類遺体の同定結果	521
表11	貝製品観察一覧①~②	136	表58	伊礼原遺跡(砂丘区)出土鳥類遺体の同定結果	522
表12	グスタ時代以降遺物観察一覧①~②	146	表59	伊礼原遺跡(砂丘区)出土ネズミ科遺体の同定結果	522
表13	E-14~17グリッド 柱穴計測一覧	252	表60	伊礼原遺跡(砂丘区)出土オオコウモリ科遺体の同定結果	522
表14	室川下層式土器観察一覧	259	表61	伊礼原遺跡(砂丘区)出土イノシシ歯一覧①~②	523
表15	面縄前庭式・仲泊式土器観察一覧①~④	269	表62	伊礼原遺跡(砂丘区)出土イノシシ(歯以外)一覧①~⑥	525
表16	面縄東洞式・市末式・番塚I式土器観察一覧①~④	284	表63	伊礼原遺跡(砂丘区)出土ウマ・ウシ遺体の同定結果	531
表17	縄文晩期土器へグスタ晩期観察一覧①~⑦	298	表64	伊礼原遺跡(砂丘区)出土ジュゴン遺体の同定結果	531
表18	石器観察一覧①~⑧	316	表65	伊礼原遺跡出土貝類とその生息場所類型	550
表19	骨製品観察一覧①~⑦	327	表66	低湿地区における海産腹足類(タカラガイ類を除く)出土詳細 CDに収録	550
表20	貝製品観察一覧①~③	340	表67	低湿地区におけるタカラガイ類の出土詳細CDに収録	550
表21	チャート観察一覧	352	表68	低湿地区における陸・淡水産貝類の出土詳細CDに収録	550
表22	瓦観察一覧	358	表69	低湿地区における海産二枚貝類の出土詳細CDに収録	550
表23	グスタ時代以降遺物観察一覧①~④	359	表70	伊礼原遺跡の土壌サンプルから確認された貝類遺体	553
表24	伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した木材の	454	表71	伊礼原遺跡の剥ぎ取り断面(中村, 2006)で確認された貝類	554
表25	伊礼原遺跡(低湿地区)跡ほかから出土した木製品と自然木の樹種	458	表72	伊礼原遺跡(低湿地区)のフロンテーションで得られた貝類遺体(固定標本: NISP)	555
表26	出土人骨一覧(Table 1. List of skeletons)	467	表73	低湿地区における海産腹足類(タカラガイ類を除く)出土詳細 CD収録	555
表27	年齢区分(Table 2. Division of age)	469	表74	低湿地区におけるタカラガイ類の出土詳細CD収録	555
表28	顔面蓋計測値(男性 mm)	474	表75	低湿地区における陸・淡水産貝類の出土詳細CD収録	555
表29	顔面頭蓋(男性 mm, 度)	474	表76	低湿地区における海産二枚貝類の出土詳細CD収録	555
表30	大顎骨計測値(男性, 右 mm)	475	表77	資料の属性および試料番号・時期	556
表31	脛骨(男性, 右, mm)	475	表78	分析試料の元素組成比	559
表32	顎頭蓋(mm)	476			
表33	顔面頭蓋(mm, 度)	476			
表34	鼻根部(mm, 度)	476			
表35	大顎骨(mm)	477			
表36	脛骨(mm)	477			
表37	形態小変異	477			
表38	伊礼原遺跡(低湿地区)の魚類遺体(全資料一括)	493			
表39	伊礼原遺跡(低湿地区)の両生類・爬虫類遺体(全資料一括)	494			
表40	伊礼原遺跡(低湿地区)の鳥類・哺乳類遺体(イノシシを除く全資料一括)	494			
表41	伊礼原遺跡(低湿地区)のイノシシ上顎骨の詳細①~③	495			
表42	伊礼原遺跡(低湿地区)のイノシシ下顎骨の詳細①~⑤	498			
表43	伊礼原遺跡(低湿地区)のイノシシ道離歯の詳細①~⑨	503			
表44	伊礼原遺跡(低湿地区)のイノシシ下臼歯数(全資料一括)	512			
表45	伊礼原遺跡(低湿地区)のイノシシ遺体(頭・歯以外・全層準一括)	512			
表46	伊礼原遺跡(低湿地区)の脊椎動物遺体の組成(全資料一括)	513			
表47	伊礼原遺跡(低湿地区)(試掘穴No.143)堆積物サンプルAから水洗選別で検出された脊椎動物遺体	513			

はじめに

伊礼原遺跡はキャンプ桑江地区北側が平成15年3月に返還される事前の埋蔵文化財試掘調査で平成9年3月に発見された遺跡です。

九州縄文時代前期の曾畑式土器を主体とする低湿地遺跡で、土器、石器の人工遺物をはじめとしてイノシシ、リクガメ、魚貝類等の自然遺物よりもはるかに多い種子や樹木などの有機質が出土しました。

発見当初からこの膨大な有機質には削られた木片や綱代が想定できる竹ヒゴがみられ、往時の技術の高さが予想以上に高く関係者を驚かせました。専門家からはこれまで南島では未知の世界であった古環境が再考できると狂喜し、関係者に知られることになりました。

このような重要な内容から、平成10年から平成14年にかけて手掘りによる範囲確認調査を行ってきました。その結果、遺跡の背後丘陵の麓に位置する「ウーチヌカー」湧水を利用して縄文時代前期の曾畑式土器期の水辺遺構だけでなく、縄文時代、弥生時代相当期、グスク時代、さらには戦前の集落まで人々の痕跡が連続と認められ沖繩諸島の先史時代編年が網羅できるほどの履歴が判明しました。

直接九州から持ち込んだ曾畑式土器、同時期の川底にシイの実を保存する為の竹製の笊容器、縄文時代中期の木製容器、縄文時代晩期の木製櫛など大変貴重な新資料の発見がありました。

砂丘地域では平成14年から平成16年には縄文時代中期の遺構と縄文時代後期の石組住居跡の発見があり、南北に石組群が数ヶ所にあり拡がる事が再確認されました。砂丘地域には縄文時代中期・後期・晩期、弥生時代平行期、グスク時代の生活址が新しくなるにつれ海側へ拡がる事が確認されました。

このように永く先人の育んだ足跡をたどれる遺跡、そして自然環境との共存関係を確認できる遺跡は沖繩諸島内においてこの伊礼原遺跡以外にはないことから、文化庁や関係研究者の方々から重要性を告げられ、今後は国指定重要遺跡として保存・活用する方法を検討するようにとの助言もいただきました。

今回、これまでの調査で判明したことを報告書としてまとめ、町民をはじめ、県内外の方々及び研究者や関係機関に紹介し、伊礼原遺跡の重要性をご理解して頂き、活用できれば幸いに存じます。

今後とも文化財の保存と活用之际し、町民の方々のご理解と研究者や関係機関のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

北谷町教育委員会
教育長 瑞慶覽 朝宏

例 言

1. 本報告書は「伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業」として文化庁補助を受けてキャンプ桑江北側返還に伴う範囲確認調査、平成10年度から平成17年度まで実施した伊礼原遺跡の調査成果を収録したものである。
2. 遺跡・遺物の同定は下記の方々から御指導・御教示を頂いた。記して謝意を表します。
石 質：大城 逸朗（北谷町文化財審議委員：理学博士）
堆积学：松田 順一郎（史跡 鴻池新田会所管理事務所）
貝 類：黒住 耐二（千葉県立中央博物館上席研究員）
獣魚骨：樋泉 岳二（早稲田大学非常勤講師）
古環境：辻 誠一郎（東京大学大学院 新領域創成科学研究科教授）
樹 種：能城 修一（森林総合研究所博士）
入 骨：松下 孝幸（土井ケ浜人類学ミュージアム館長）
石 器：長野 真一（鹿児島県立埋蔵文化財センター）
黒曜石：角緑 進・小畑 弘己（熊本大学埋蔵文化財調査室）
翡翠：新里 貴之（鹿児島大学埋蔵文化財室）
3. 辻誠一郎氏・大城逸朗氏・長野真一氏・松田順一郎氏・黒住耐二氏・樋泉岳二氏・松下孝幸・能城修一・角緑進・小畑弘己氏には玉稿を頂いた。記して謝意を表します。
4. 本報告書の執筆分担は下記のとおりである。まとめは中村忍が行った。
中村 忍 第I章・第II章II・第IV章I第1・2節・第4節1-②・第VI章第2節
東門研治 第III章I第3節・第4節1-③④・第4節5・第IV章II第1節～第4節1-①②③
松原哲志 第IV章I第4節1-①⑤・第IV章II第4節1-④⑤⑥
島袋春美 第IV章I第4節2・4・5・第IV章II第4節2～6
細川 愛 第IV章I第4節7・第IV章II第4節7・8
長野真一 第IV章I第4節3
5. 資料整理は下記の人員で行った。
新城とよ子 稲嶺恵利奈 上原恵 上間真寿美 尾木綾 呉屋広江
佐久間クリエ 瑞慶覧亮 知念栄子 知念真衣 照屋元子 富平砂綾子
豊里初江 花城尚子 東順子 西原美草 山城小百合 山田奈美
(50音順)
6. 表紙の揮毫は北谷町文化財審議委員の仲本朝信氏に依頼しました。記して謝意を表します。
7. 本書に掲載した出土遺物の全ては北谷町教育委員会に保管している。

第 I 章 調査に至る経過

第 1 節 調査に至る経過

伊礼原遺跡は沖縄県中頭郡北谷町字伊平伊礼原144番地を中心とする低湿地区と、同字伊平伊礼原163番地を中心とする砂丘区に拡がる遺跡である。両者をもつ遺跡の様相は南島でははじめてであり、しかも、総面積約15,000㎡とわりと大規模な遺跡で、先史時代編年体系からしても沖縄諸島の先史時代からグスク時代まで（縄文時代早期～弥生時代平行期～15世紀）の痕跡が連続と追え、沖縄の編年体系が網羅できるほどの重要な複合遺跡である^{※11}。

発見当初、低湿地区を伊礼原C遺跡、砂丘区を伊礼原A遺跡と呼び、試掘調査・範囲確認調査・整理作業を行ってきたが、事業の進捗状況に伴い両者の遺跡は性格を異にするが、同時期の複合遺跡であることが判明し、文化庁からの助言や「伊礼原C遺跡保全構想策定業務」^{※21}の先生方からのご指摘があり、北谷町文化財調査審議委員会でも同様な建議^{※22}があった。よって、平成18年4月1日から「伊礼原A遺跡」・「伊礼原C遺跡」両者をまとめて「伊礼原遺跡」^{※23}として呼称することとした。

伊礼原遺跡の発見の発端はキャンプ桑江北側返還に伴う跡地利用が考慮され、それに先立つ埋蔵文化財の有無の把握が跡地利用に多大の影響が危惧されたことによる。キャンプ桑江北側返還は平成5年時点で平成13年3月末日とのことが明らかになったので、その対応策として文化庁・沖縄県文化課の指導・助言を受け、平成7～9年度の3ヶ年間の補助事業として約40.5haを試掘調査することとした^{※12}。

しかし、諸々の発端は北谷町に文化財担当者が配置され、北谷町内域の60%（当時）を占める米軍基地内に地の利の良い、戦前の集落や田畑が接収されていて埋蔵文化財も同様な地域に存在する可能性が高いことが判断されたからである。開発行為の試掘調査には時あることに基地内外を問わず立ち会いを行い、基礎資料の収集に努めてきた。結果的には当初の予想通り米軍基地の中に埋蔵文化財の所在が多数確認され、北谷町内の遺跡発見の80%が米軍基地の中に存在することが判明した。現在、48遺跡が確認され、平均年間一遺跡のペースで発見され今日に至っている。

今回の補助事業の名称にもなっている「伊礼原B遺跡ほか発掘調査」の伊礼原B遺跡は原因者那覇防衛施設局の河川工事に伴う事前の試掘調査の立ち会いにより発見された遺跡で、伊礼原遺跡の北側を西流するナガサ川の西側約300m先の河口、国道58号と接する地域で緊急発掘調査をおこなったものである。昭和63年度事業として調査・報告した結果^{※24}、遺跡は下層に二次堆積であるが条痕文土器・瓜形文土器・面縄前庭式土器・仲泊式土器・伊波式土器に貝・骨製品等、沖縄先史時代暫定編年早～後期（縄文時代後期相当期以前）の遺物が出土し、上層では大規模な石垣を廻らすグスクでしか出土しない15～16世紀の質の良い青磁が出土した。伊礼原B遺跡の上流域に遺跡本体の可能性が考えられるが、それ以上の立ち入りはできなかった。

伊礼原遺跡はキャンプ桑江北側返還に伴う事前の試掘調査事業として2回目の平成8年度事業にあたる平成9年2月12日から同年3月18日間おこなった最終日。試掘穴No143で発見された遺跡で

ある。試掘穴No143は標高約6mの表土下約3.5mから多量の有機質と貝殻、九州縄文前期の曾畑式土器が出土した³¹⁾。その周辺部に前後あわせて5ヶ所の試掘穴を設けたが数点の土器片や礫が確認されたのみで、試掘穴No143以上の成果は得られなかった。その範囲が極めて狭い範囲に限られている様相に受けとめられた。これらの有機質の保存については試掘穴No143の東約35mの谷間に存在する湧水、地元ではウーチヌカー（内側あるいは内陸部にある湧水という意味か）と呼ばれている流水に起因することは明らかであった。

幸いにも、試掘穴No143の周辺地域は当初、いまだに稼働している米軍高圧電力施設があり試掘調査が許可されなかった地域で、1本限定の試掘穴の了解が一週間前に下りたこと、また、これまでキャンプ桑江やキャンプ瑞慶覧内の平坦部の試掘調査で、表土下約3mから地下水に伴い泥炭層が広い範囲に確認されていることなどから古環境の専門家の所見の必要性があった。幸運にも掘り上げに際しては招聘した国立歴史民俗博物館歴史研究部の辻誠一郎先生の立ち会う好機に恵まれ、有機質（植物遺存体）の状態や樹木の加工痕、木製破片、網代製品の可能性のある竹加工品等の助言を得、有機質の洗別方法、今後の発掘や取り扱い方について指導して頂いた。当日の辻先生の日程は午前中に縄文後期の低湿地遺跡の発掘中である宜野座村前原遺跡でオキナワウラジログアシがストックされた十数個の網代束の視察をおこない、午後は九州縄文前期の曾畑式土器期の有機質層を立ち会い確認した一日で、南島の縄文時代の低湿地遺跡を一気に把握した運の強い方である。

平成9年度事業では平成19年にキャンプ桑江南側半分（約58.5ha）の返還予定地を第3区分した試掘調査と平行して、試掘穴No143から出土した数トンの有機質の洗浄を約6ヶ月間かけて行った。その結果、多量の種子と樹種の検出ができ概報として報告した³²⁾。

平成10年度は伊礼原遺跡の低湿地本体の手掘り範囲確認調査と平行して、曾畑式土器期の住居址を求めて丘陵部を含め、周辺で11本の試掘穴（第11図）を実施した。

平成11年度には試掘穴No143から北側丘陵部にかけての平坦部を旧表土まで掘削し、水田址の確認と丘陵部の接点の状況確認を行った。後半からは丘陵部の基盤石灰岩間の堆積状況を把握するため、試掘穴No143を中央区として北側丘陵部まで幅5mのトレンチを北区として設定した。その延長線として南側に5×5m、東側に5×5m、西側に5×5mの各グリットを設定した。この名称は南区、東区、西区とし、結果的には中央区を中心にして十字状の範囲確認調査区になった。さらに基盤石灰岩のノッチ下に生活址を求めて8×9mのグリットを5m北東側に設定し北東区（第14図）とした。

砂丘区については、平成8年度段階でいまだ機能している米軍ソフトボール場があり、許可されたのが一塁コーチボックス地点、セカンドの後方地点、外野側のライト、センター、レフト各地点の合計5地点であった。いずれの地点も表土下約1.5mに包含層があり、縄文時代中・後期相当期の土器が多量に出土した。ライト側ではグスタ時代の柱穴と共に青磁も出土することから。ソフトボール場域内にはこれまで返還跡地内で発見例のない大規模な縄文時代からグスタ時代までのプライマリーな遺跡が存在することが予想された。

しかしながら、いまだ機能していることからソフトボール場と東側丘陵部との間に略南北に走るアスファルト道路の狭間に5本の試掘穴を設定することが許可された。この地域は東側の丘陵部と砂丘との接点地域にあたり、砂丘の形成から判断すると、より古い遺跡の存在することが予想され、

縄文前期の曾畑式土器期の遺跡の発見を予定して試掘穴を設定した。包含層上面まではバックホーで掘削し、包含層からは手掘りで調査を行った。その結果、試掘穴No.3・4で縄文中期相当期の縄前庭式土器期の炉址と柱穴を確認することができ、試掘穴No.5では海岸砂利層から条痕土器が出土した。

返還期日が平成15年3月末日と決まり、またソフトボール場も代参施設ができたことなどから、平成14年7月にソフトボール場に略東西に幅5m、長さ70mのトレンチを横断して設定することが許可された。これは平成8年度の試掘調査で縄文時代後期相当期からグスク時代までの遺物が出土するが、層位的に把握できるのか、遺構の有無、拡がりほどの範囲まであるのかの情報を収集するのが第一義的な目的であった。その結果、丘陵部近くに古い遺跡が存在し、現海岸線にいくにつれ新しい時期の遺跡が拡がる様相が確認された。特に平野部の中央部に確認された15～16世紀のグスク時代の柱穴群は、現在のナガサガー河川を超えて伊礼原D遺跡まで拡がるのが判明し、約8,000㎡の集落であったと判断された。返還跡地の地権者説明会で報告したところ、かなりの反響を呼び我が古の集落であり残せる手だてではないものかと、関心の高さを示していた。

平成15年10月には当時、普天間飛行場埋蔵文化財発掘調査支援検討調査事業の一環として地中レーダー探査の調査が行われる予定であったが、普天間飛行場の立ち入りが許可されず、文化庁・沖縄県文化課との調整で伊礼原遺跡の低湿地区、砂丘区で行うこととなった。地中レーダー探査は10月14日～21日と11月17・18日の2回行われた。砂丘区では幅5m、長さ70mのEトレンチの北側と南側で行い、検出されていた1号堅穴礎敷住居(第55図)と同様な陰影が両側で確認された^{註1)}。以後、その陰影の検証発掘調査に当たった。Eトレンチの北側にC-18～20トレンチ、C・D-19トレンチ、C-17グリット、D-17グリットの275㎡。南側にF・G・H-19トレンチで125㎡を設け確認をおこなった。Eトレンチの350㎡を加えると砂丘区の範囲確認調査面積は750㎡になる。

さらに現状のナガサガー河川にそったアスファルト道路があるが、戦中の米軍航空写真や戦前の地積図から見るとその河川は戦後改変したらしいことがうかがえたので、返還後の原状回復を終えてアスファルトが撤去された後、包含層の確認とどれほど河川工事の影響を受けたのかを把握するため道路の中央部に5本の試掘穴を設けた。その結果、V字状にカットしてコの字状に河川のコンクリート壁が作られていることから道路半分は表面まで攪乱を受けていたが下位にいくにつれ包含層は残っていることが判明した。また対岸の伊礼原D遺跡まで同一の遺跡であることが判断された。

引用・参考文献

- 註1 北谷町教育委員会 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—北谷町文化財調査報告書 第23集 2005年3月』
- 註2 北谷町 『伊礼原C遺跡保全整備基本構想策定業務』報告書 平成16年度大規模駐留軍用地跡地等利用推進費 2005年3月 北谷町教育委員会』
- 註3 2005年12月9日 北文調査委発5号 『伊礼原C遺跡保全整備基本構想について』(答申)で記載される。
- 註4 北谷町教育委員会 『伊礼原遺跡—図録集— 北谷町文化財調査報告書 第25集 2006年3月』
- 註5 北谷町教育委員会 『伊礼原B遺跡—旧メイ・モスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査— 北谷町文化財調査報告書 第8集 1989年3月』

註6 東門研治 「〈注報〉伊礼原C遺跡」『考古学ジャーナル』No.454 ニューサイエンス社 2000年

註7 沖縄県教育委員会・社団法人物理探査学会『物理探査を利用した埋蔵文化財広域発掘調査手法』平成15年度文化庁支出委任 埋蔵文化財広域発掘手法検討調査事業 報告書 2004年3月

第2節 調査体制

1. 試掘調査の組織

平成7・8・9年度の試掘調査の組織体制は以下の通りである。

調査主体	北谷町教育委員会	
調査責任者	教育長	當山 憲一 (平成7～9年度)
	文化課課長	松田 盛 (平成7～9年度)
調査総括	文化課係長	中村 愿 (平成7～9年度)
調査担当	文化課主事	山城 安生 (平成8・9年度)
	文化課主事	東門 研治 (平成8～18年度)
調査補助員	文化課嘱託	山城 安生 (平成7年度)
調査事務	臨時職員	徳吉美奈子 (平成7年度)
		安里 利枝 (平成8年度)
		我那覇智美・伊禮 一恵 (平成9年度)
		安里 美紀 (平成10年度)
		瑞慶覧朝子・並里美奈子 (平成11年度)
	主任主事	比嘉ゆかり (平成12～16年)
	主事	太田 有紀 (平成15年度)
		鈴木 典子 (平成16～18年度)
調査指導	辻 誠一郎	(国立歴史民俗博物館 歴史研究部助教授 現東京大学教授)
	能城 修一	(森林総合研究所 木材利用部組織研究室)
	甲元 真之	(熊本大学文学部教授)
	渡辺 誠	(名古屋大学文学部教授)
	山崎 純男	(福岡市教育委員会文化財部課長)
	樋泉 岳二	(早稲田大学・東京農業大学非常勤講師)
	黒住 耐二	(千葉県中央博物館上席研究員)
	西谷 大	(国立歴史民俗博物館考古学研究部助手)
	島袋 春美	(沖縄県教育庁文化課嘱託)
調査協力	ポール・宜野座	(在沖海兵隊基地施設部不動産事務所所長)
	和宇慶 修	{ 同上 不動産専門官}
	ロミー・宇良	(キャンプ・コーディネーター事務官)
	クリス・ホワイ特	(在沖海兵隊基地環境保護課 自然・文化財保護官)

平敷 兼直 (在沖海兵隊基地環境保護課 自然・文化財保護係)

エリック・ウイリアムズ (同上 考古学専門官)

喜友名朝重 (在沖海兵隊基地施設営繕部部長)

臨時職員 赤嶺 健・上間 庄二・儀間 哲二 (平成9年度)

日々雇用 平成7年度

喜友名勇人	金城 志哉	与那嶺昌司	国吉 康隆	宮城 弘樹	島袋かおり
仲嶺久里子	山里 千春	仲宗根 禎	玉城 優香	蔵本 雅美	伊藤 有砂
赤嶺 健	花城 可時	渡久地政英	知念 清	渡口 英孝	名嘉 實
我如古 清	仲宗根順次	安里 盛安	上間 常貞	横田 栄喜	島袋 林吉
下地 寛勝	富村 朝盛	金城 貞夫	湧田 春子	普久原文子	稲田セツ子

平成8年度

名嘉 實	我如古 清	喜屋武盛基	仲宗根順次	宮里 盛安	植田 操治
金城 良夫	上間 常貞	下地 寛勝	宮平 孝重	渡久地政英	平良 松芳

平成9年度

砂川 政幸	花城 可時	浜元 業月	町田 史野	島尻 綾野
-------	-------	-------	-------	-------

委託 平成9年度 (沖縄市シルバー人材センター)

名嘉 實	我如古 清	喜屋武盛基	宮里 盛安	金城 良夫	上間 常貞
渡久地政英	平良 松芳	郡山 隆彦	新城 正雄		

2. 範囲確認調査の組織

補助事業に伴う平成10・11・12・13・14・15年度の範囲確認調査の組織体制は以下の通りである。

調査主体	北谷町教育委員会				
調査責任者	教育長	當山 憲一 (平成10～11年度)			
		瑞慶覽朝宏 (平成12～18年度)			
事務総括	教育次長	伊禮 喜正 (平成10～16年度)			
		阿波根 進 (平成17～18年度)			
	文化課長	嘉手納 昇 (平成10～14年度)			
	社会教育課長	幸地 清 (平成15～16年度)			
調査総括	文化係長	中村 愿 (平成10～15年度)			
調査担当	文化課主任	山城 安生 (平成10年度)			
		東門 研治 (平成10～15年度)			
事務担当	臨時職員	伊禮 一恵 (平成10年度)			
	主任主事	比嘉ゆかり (平成12～15年度)			

(平成10年度)

日々雇用

與那覇政之 上間 庄二 花城 清哉

委託 (シルバー人材センター)

高良 良夫	上間 常貞	渡久地政栄	平良 松芳	新城 正雄	喜屋武盛基
安里 盛安	宮平 孝重	金城 良夫	宮里 盛安	我如古 清	名嘉 実
渡久地真栄	川満 恵清	郡山 隆彦	花城 可順	町田 宗弘	浜元 盛徳
渡久地盛英	宮城 文義	下地 寛勝			

日々雇用

(平成11年度)

真喜屋 隆	田仲 康理	花城 清哉	新里 尚也	砂川 正幸	安里 美紀
岸本 竹実	井上 美里	天久 朝海	我如古真弓	宮里 光	奥那瀬 徹
松田 勇治	伊波 静江	安仁屋郁子	新垣千代子	伊波 千代	富山 敏子
東 康博	吉田 昌博	安里 盛保	棚原 将也	仲元 浩哉	松本 文喜
金城 義彦	棚原 潤也	崎浜 聡	宮城 好枝	目取真貴子	

委託 (シルバー人材センター)

町田 宗弘	宮平 孝重	花城 可栄	渡久地真栄	郡山 隆彦	名嘉真盛義
金城 良夫	上間 常貞	座覇 政仁	平良 松芳	金城 良勝	三輪 弘司
亀谷 長勇	親富祖行平	金城 健治	下地 寛勝	我如古 清	

(平成12年度)

臨時職員

喜友名単人	玉城 和美	我那覇智美	照屋 高之	井上 美里	花田 建治
砂川 正幸	成田満利子	目取真貴子	尾木 綾	森田 直哉	金城 善彦
崎山 聡	大浜 永寛	宮城 修	屋嘉比邦之	喜瀬 乗幸	喜友名朝代

委託 (シルバー人材センター)

郡山 隆彦	親富祖行平	平良 松芳	我如古 清	上間 常貞	座覇 正仁
金城 建治	亀谷 長勇	町田 宗弘	渡久地真栄	三輪 弘司	玉城 清忠
照屋 寛栄	奥那瀬政栄	金城 良勝	松島 正吉	小浜 守市	

(平成13年度)

臨時職員

松原 哲志	安里 美紀	屋嘉比邦之	中村 馨	金城 直子	宮城 修
照屋 高之	島袋 採人	東 順子	山内 盛英	照屋 元子	仲田 浩二
宮平 諭					

委託 (シルバー人材センター)

渡久地真栄	座覇 政仁	亀谷 長勇	町田 宗弘	照屋 寛栄	名城 政信
屋良 朝正	津波古充盛	仲村 幸有	安里 盛保	宮城 長助	平良 宗二

(平成14年度)

臨時職員

照屋 高之	島袋 春美	前川 恵子	菊池 恒三	金城 麻紀	島袋 保
東 順子	山内 盛英	照屋 元子	比嘉 光彦	富平砂綾子	八田 夕香
富山 悠太	知念 均				

委託（シルバー人材センター）

天久 和彦	大城 明孝	小渡 善昌	大塚 ユキ	喜屋武盛忠	古謝 亀吉
佐久川正喜	島袋 隆子	高江洲安廣	德里 栄子	根間 平雄	比嘉 喜永
目取真久子	宮里キミ子	屋我 清子	屋良 朝正	宮城 長助	内間 千福
吉元 光清	儀間 義忠	比嘉 トヨ	石川 光江	安里 盛保	仲村 幸有
中山昭一郎	大嶺 明文	吉田 昌博	平良 宗二	牧志 宗保	仲間 勝
松本 文喜	山川 守真	我如古 清	座間 政仁	町田 宗弘	渡久地眞栄
照屋 寛栄					

（平成15年度）

嘱託職員

島袋 春美	菊池 恒三
-------	-------

臨時職員

真喜屋 隆	尾木 綾	松原 哲志	砂川 正幸	縄田 雅重	上原 恵
秋本 真孝	八田 夕香	上間真寿美	知念 真衣	田仲美智子	東 順子
佐久間クリエ	山城小百合				

委託（シルバー人材センター）

平良 宗二	安里 盛保	根間 平雄	内間 千福	儀間 義忠	宮城 長助
大嶺 明文	石川 光江	大城 明孝	儀間 文子	仲間 勝	比嘉 トヨ
仲村渠春義	比嘉 有仁	大塚 ユキ	宮里キミ子	喜屋武盛忠	中山昭一郎
吉元 光清	屋我 清子	山川 守真	目取真久子	小渡 善昌	宮平千代子
牧志 宗保	瑞慶寛美智子	仲村 幸有	島袋 隆子	松田 洋子	大嶺トシコ
吉田 昌博	花城ヨシ子	仲村渠正男	喜屋武長生	松本 文喜	喜友名朝昇
稲嶺 盛忠	比嘉 清	古謝 好章	津嘉山イク子	伊礼 長孝	萩堂 栄子
津嘉山淳昇	稲嶺ツルコ	松田 正盛	平田 盛和	上与那原美知子	新垣 政一

（平成16年度）

嘱託職員

島袋 春美	尾木 綾	縄田 雅重	菊池 恒三	上原 恵	細川 愛
上間真寿美	八田 夕香	富平砂綾子			

臨時職員

仲田 浩二	豊里 初江	島袋 保	知念 均	佐久間クリエ	山城小百合
東 順子	金城 拓真	田仲美智子	照屋 元子	佐久本盛翔	宮里 伊織
棚原 優樹	山岡 由治	浦崎 誠	照屋 博之	大嶺 一貴	亀谷 幸伸

委託（シルバー人材センター）

仲村渠正男	宮城 長助	吉田 昌博	内間 千福	比嘉 清	山川 守真
喜屋武盛忠	牧志 宗保	津嘉山イク子	上与那原美知子	宮里キミ子	目取真久子
仲村渠春義	島袋 隆子	伊礼 長孝	大塚 ユキ	花城ヨシ子	儀間 義忠
松田 洋子	儀間 文子	石川 光江	大嶺 明文	大嶺トシ子	比嘉 トヨ

大城 明孝	稲嶺 春子	比嘉 秀子	喜友名朝昇	屋我 清子	荻堂 栄子
瑞慶覽美智子	叶 福才	砂川 秀市	石川 光江	仲村渠春幸	中本 安彦
為 清一	小渡 善昌	徳里 栄子	野原ミヨ子	屋良 朝正	屋良 朝喜
島袋 洋子	山川 正子	辺土名ツル子	上江洲智明	松本 文喜	東江 芳一
東 康秀	屋我 平助	比嘉 澄江	福本サナエ	仲地 初子	小浜 トシ
喜屋武長生	普久原朝善	宮里 正雄	佐久田守史	松川 清史	楯原 教宏
平川 啓喜	伊良波幸行	比屋根方文	仲松 弥一	川上 ヨシ	仲嶺ミヨ子
普久原朝顕	宮里 清善	呉屋 盛吉	島袋 光盛		

(平成17年度)

嘱託職員

島袋 春美	尾木 綾	細川 愛	菊池 恒三
-------	------	------	-------

臨時職員

仲村 毅	徳嶺 里江	島袋 保	照屋 元子	田仲美智子	呉屋 広江
瑞慶覽 亮	稲嶺恵利奈	富平砂綾子	花城 直子	西原 美草	八色 篤史
新城とよ子	山田 奈美	知念 栄子	宮城 康	三宮 央意	安達 美奈
提 祥雄	興那覇洋子	鏡波エリカ	仲栄真盛史	鏡波 春菜	徳平久美子
宮城 奏子	兼城エミ子	砂辺 未来	宜志 晴菜	砂辺つゆき	上間 玄
常真 圭祐	山城 翼	長田 祐一	中里 直哉	東恩納寛人	名嘉 俊也

委託 (シルバー人材センター)

安里 盛保	石川 光江	上江洲シズ	大塚 ユキ	儀間 文子	喜屋武長生
島袋 隆子	瑞慶覽美智子	為 清一	仲間 勝	仲村渠春幸	比嘉 清
辺土名ツル子	松田 正盛	宮里キミ子	宮城 長助	目取真久子	屋我 清子

(平成18年度)

嘱託

島袋 春美	宮里 光	呉屋 広江
-------	------	-------

臨時職員

西原 美草	山田 奈美	新川美和子	比嘉 美絵	大城 梨乃	池原恵梨香
仲里 知子	湧川 卓	松長 稔	比嘉 学	喜友名正和	古謝かなえ

第3節 発掘調査の経過

1. 低湿地区

伊礼原C遺跡 (低湿地区) の経過と概要は以下のとおりである。

平成8年度事業

平成9年3月17日 国立歴史民俗博物館 歴史研究部 古環境 辻誠一郎先生を招聘

3月18日 試掘穴№143で縄文時代前期の曽畑式土器期の低湿地遺跡発見

3月19日 有機質サンプル・土壌サンプル・洗浄方法を指導 最終便で帰路

3月21日 平成8年度の試掘調査終了

3月24日 有機質の洗浄 28日まで

3月26日 朝日新聞東京本社から伊礼原C遺跡の取材あり 27日まで

平成9年度事業

平成9年4月7日 国立歴史民俗博物館 辻誠一郎先生 科学研究費にて来町 9日まで

6月20日 文化庁 小池信彦調査官 基地内文化財視察

6月27日 神縄文化課嘱託 鳥袋春美 試掘穴No.143の獣骨骨鑑定招聘

6月28日 国立歴史民俗博物館 辻誠一郎先生 試掘穴No.143の植物遺存体の鑑定・指導
招聘30日まで

7月28日 国立歴史民俗博物館 西谷大先生 他3人 科学研究費にて来町 試掘穴No.143
出土の曾畑式土器胎土分析の資料収集

7月28日 平成9年度事業の為、キャンプ桑江立ち入りについて(要請) 在沖海兵隊へ

8月18日 江坂輝彌先生 来町 試掘穴No.143の土器鑑定

8月21日 在沖海兵隊基地環境保全課から立ち入り許可英文あり

9月21日 鹿児島県立埋蔵文化センター 宮田栄二・桑波田武志・中原一成氏 来町
試掘穴No.143出土の打製石器の鑑定

10月3日 平成9年度の試掘調査スタート

10月21日 国立歴史民俗博物館 西谷大先生 科学研究費にて来町 試掘穴No.143出土の
土器分析結果の報告

10月24日 文化庁 岡村道雄主任調査官 現地指導と試掘穴No.143の重要性について指導
助言

11月7日 熊本大学 白木原和美先生 来町 曾畑式土器の指導・助言

11月17日 朝日新聞東京本社から来町 試掘穴No.143出土の遺物について取材

12月14日 名古屋大学 渡辺誠先生 原文化課 盛本勲氏 来町 植物遺存体の指導・助言

12月21日 北谷町教育長 全史協臨時東京大会参加 文化庁へキャンプ桑江返還に伴う試
掘調査の成果を報告

12月25日 熊本県菊池市嘱託 古閑啓示氏 来町 曾畑式土器の助言

平成10年1月30日 国立歴史民俗博物館 辻誠一郎・能城修一先生 来町 植物遺存体の中間報告・
再調査 種子74種 樹木34種を確認

3月3日 小池伸彦調査官 基地内文化財視察

3月9日 熊本大学 甲元真之先生 福岡市文化財部 山崎純男課長 来町 出土遺物の
指導・助言 11日まで

3月18日 福岡市立歴史博物館 山崎龍雄氏 来町 石製品の同定

平成10年度事業

平成10年9月24日 伊礼原C遺跡(試掘穴No.143)の範囲確認調査のため周辺の伐採作業開始

10月7日 伐採後、掘り始めの写真撮影

- 10月8日 バックホーによる米軍産業廃棄物の撤去 撤去は米軍が行う
- 10月9日 試掘穴№143を中心として範囲確認調査を始める。階段掘りを前提として南北に8m、東西に11mのグリットを設定。バックホーにより試掘穴の埋め戻し部分を、周辺部は客土までを撤去。
- 10月12日 手掘り作業のスタート。階段掘り
- 10月13日 試掘穴№143の北側丘陵麓の岩盤に当たる場所に試掘穴を設定しバックホーで開けるが、地下水の流出が激しく継続を断念し、埋め戻す。以後、丘陵上や東の谷間に範囲確認のために11本の試掘穴を設ける
- 10月16日 台風10号の対策、単管パイプで覆いを作る。12月末まで雨の日が続く。
- 10月19日 日本考古学協会1998年度 沖縄大会 伊礼原C遺跡見学 バス3台
- 11月11日 試掘T.P№3、カワニナ層1/3レベルより戦前の鎌が出土。
- 11月16日 試掘T.P№8、表土下5.1mで岩盤確認。中位の灰色シルト層から面縄前庭式土器が出土。
- 11月21日 試掘T.P№11、表土下2mで包含層検出 第6層で嘉徳I式土器・面縄前庭式土器、第9層で曾畑式土器、第10層の緑色砂層中に獣骨が包含、第10層は上下に礫層があり下部から瓜形文(ヤブチ式)が出土
- 12月7日 低湿地区周辺の地形・試掘穴ポイントの平板測量を行う。試掘穴№143の北側・西側部分の第5層検出。
- 12月8日 NHK沖縄の取材あり
- 平成11年3月9日 文化庁技官 県文化課島袋洋係長・鶴元主事 宜野湾市文化課呉屋義勝係長現場視察
- 3月29日 試掘穴№143を全体的に第6層まで下げ年度内の作業は終了した。

平成11年度事業

- 平成11年8月5日 平成11年度の範囲確認調査を始める草刈り作業
- 8月6日 北谷町小学校教諭遺跡見学会で現場見学 米海兵隊エリック・ウィリアムズ考古担当 現場視察
- 8月16日 第6・7層で土器が出土し始めた。
- 8月31日 第8層は東側に確認できるが西側になく第9層が露出する
糸満市文化課の湖城清・大城一成氏が現場視察
- 9月7日 札幌大学高宮広士先生 現場視察
- 9月10日 NAVY TIMESの取材 米海兵隊考古担当エリック・ウィリアムズ同行
- 9月14日 第8層(乳白色泥炭化物土層)掘り下げ後、第9層上面写真撮影
- 9月16日 ジョン米海兵隊司令部視察 米海兵隊考古担当エリック・ウィリアムズ同行
- 9月17日 北谷町小学校教員の遺跡見学会
- 10月6日 全国史跡整備市町村協議会大会 沖縄県浦添市
- 10月7日 文化庁 岡村道雄主任調査官 現地視察(全国史跡整備市町村協議会沖縄大会)
- 10月8日 奄美大島笠利町歴史民俗博物館 中山清美館長 現場視察

- 10月12日 第9層 樹根層全体的に掘り下げ 土器出土 写真撮影
- 10月13日 第9層最下部で石匙出土 写真撮影
- 10月15日 琉球大学 植物学 立石庸一先生 樹根層についての助言あり
- 10月22日 樹根層の平面実測 樹根下に口縁・胴部の土器片出土
- 10月29日 田村晃一先生 現場視察
- 11月4日 第10層(暗褐色細砂層)掘り下げ キャンプ桑江地主組合現場視察
- 11月13日 樹根露出平面写真をスカイ・マスターで撮る
- 11月16日 樹根の取上作業 コンテナ15個分
土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 松下孝幸館長 具志頭村教育委員会
新里尚美主事 現場視察
- 11月18日 戦後の米軍客土が崩落が激しいため試掘穴No143を中心とするグリットの周辺
部分の撤去をバックホーで行う
- 11月19日 グリット西側で客土撤去中、電話線が露出 青写真ない配線と米海兵隊考古担
当エリック・ウィリアムズ回答
名護市文化課 島福善弘係長 仲宗根植主事 現場視察
- 11月24日 宜野座村社会教育課 知名定順主幹・早稲田大学大学院生 大松志伸 現場視察
- 11月26日 グリット北西部の客土撤去後の旧表土面に水田畦らしきもの確認、石灰でライ
ン引き 金武正紀先生 現場視察
- 11月29日 ウーチヌカーからの小川をバックホーを使い、南側へ迂回させる作業を始める
12月4日まで
- 12月7日 水田畦の遺構を写真撮影して終了 試掘穴No143の西側に5×5グリットを設
定する。西区とする。
- 12月8日 バックホーにより遺跡の北側丘陵部の麓を掘削し、客土を撤去する。戦後の石
積みが露出した。下には基盤の石灰岩岩盤の露頭がみられた。試掘穴No143は
谷間に形成された遺跡であることが再確認された。
- 12月10日 NHK解説委員 毛利氏来町 現場視察
- 12月13日 西区を第8層まで掘り下げる。
- 12月14日 試掘穴No143西壁面中央部、第9層落ち込みより木製櫓が出土
- 12月15日 文化庁 岡村道雄主任調査官 県文化課 知念勇・島袋洋 現場視察
- 12月16日 第11層掘り下げ 曾畑式土器の層が全体的に出始める
- 12月17日 大雨あり グリット周辺の土手作り
- 12月22日 グリット北側壁面崩落する
- 12月24日 グリット北側壁面崩落部分の土砂撤去作業する
- 平成12年1月6日 渡辺誠先生 来町 現場視察
- 1月11日 試掘穴No143の北側に北側丘陵部まで幅5mのトレンチを設定する。
長さ約11m、バックホーにより第5層まで掘り下げ、その後手掘り作業
- 1月18日 試掘穴No143の南側に5×5mのトレンチを設定する。南区とする。

- 1月18日 バックホーにより第8層まで掘り下げ、その後手掘り作業
- 1月19日 試掘穴No143の東側に5×5mのトレンチを設定する。東区とする。
バックホーにより第5層まで掘り下げ、その後手掘り作業
試掘穴No143を中心として東西南北の四ヶ所にグリット設定したことになる。
試掘穴No143を中央区、以下、東を東区、西を西区、北トレンチを北区、南を南区がそろう。
- 1月21日 中央区と東区の北側麓に石灰岩基盤との境目を確認するため6×8mのグリットを設定する。北東区と呼ぶ
- 1月24日 各グリット第7層まで掘り下げる
札幌大学 吉崎昌一先生 高宮広土先生
米海兵隊考古担当エリック・ウィリアムズ 現場視察
- 1月26日 北区は遺物のドット上げ、東・南区は第8層まで掘り下げる。北東区は第6層上面までバックホーで掘り下げる
- 2月7日 各グリットをポンプにより水揚げ作業
- 2月8日 中央区南東隅で板状木片が出土
- 2月10日 中央区第11層下部で曾畑層の礫群の拡がりが見られる
- 2月15日 沖縄県立埋蔵文化財センター準備室長 知念勇先生 現場視察
- 2月25日 北谷町議員文教厚生常任委員会 現場視察
- 3月15日 熊本大学 甲元真之先生 他学生 現場視察
- 3月17日 中央区南西隅、西壁面下にサブトレンチを設け曾畑層を掘り下げる遺物取り上げ、北区東壁面下にサブトレンチを設け掘り下げ、淡黄灰色シルト層より瓜形文土器(東原式)出土
- 3月23日 国立歴史民俗博物館 辻威一郎・能城修一先生 来町 樹木サンプリング
- 3月27日 高倉先生 現場視察
- 3月28日 千葉県立博物館上席研究員 黒住耐二先生 土壌サンプリング
- 3月29日 南区川跡実測後掘り下げ 面縄前庭式土器多数出土
- 3月30日 木製櫛を記者会見発表

平成12年度事業

- 平成12年4月17日 グリット冠水 ポンプで排水作業 25日まで
- 4月20日 米キリン小学校4年生 現場説明会 米海兵隊考古担当エリック・ウィリアムズ案内
- 4月25日 中央区・北区の壁面が崩落 確認
- 4月27日 北・南・東・西区で再び大雨のため冠水
国立歴史民俗博物館 設楽博己先生 現場視察
- 5月1日 各区排水作業開始 8日まで
- 5月2日 沖縄県立公文書館 岸本義彦 現場視察
- 5月9日 木製櫛のC14年代が判明 2580±40とでる

- 5月26日 平成12年度事業として発掘調査開始
- 5月30日 文化庁 記念物課課長
- 6月1日 北区西壁面崩落 復旧作業
- 6月5日 現場近くの米海兵隊兵舎を無償で借用 (399F) 米海兵隊考古担当エリック・ウィリアムズの手配
- 6月12日 東・西・北・北東区に雨水が溜まる 排水作業 15日まで
- 6月14日 米軍環境保全課の現場視察
- 6月15日 那覇防衛施設局・沖縄県・北谷町・米海兵隊・米環境保全部による 現場視察
- 6月27日 北区灰白シルト・オリープ灰色シルト層から爪形文土器出土
爪形文土器に伴い炭化物あり 写真・実測後サンプリング
- 6月28日 各区の名称を再確認を図る
- 7月11日 中央区北側壁面崩落 復旧作業
- 7月12日 北区西側壁大きなひび割れあり、バックホーにより壁面成形する
- 7月14日 文化庁 坂井秀弥調査官 現場視察・指導
- 7月18日 中央区と北区・南区との間の畦を掘り下げる、雨水対策の為
- 7月21日 中央区内東側曾畑層の雑群の実測
- 7月26日 台風対策6号
- 7月28日 ポンプ電気不良の為、中央・北・西・東区が一晩で冠水 ポンプを入れ替え排水作業 8月9日まで
- 8月4日 台風対策 7日まで 台風8号
- 8月14日 中央区と南区の畦にある樹根の平面実測、中央区東側雑群と遺物の平面実測
- 8月17日 中央区西側壁面・北区北側壁面崩落あり、掘上作業
- 8月28日 台風対策 台風11号
- 8月29日 中央区・北区間の畦 第14層の遺物実測
- 8月30日 中央区で排水作業
- 8月31日 米人教員の女性リーダー研修 現場視察 米海兵隊考古担当エリック・ウィリアムズ案内
- 9月8日 台風対策 12日夜半台風通過 台風14号・15号
- 9月13日 北区東側・西側壁面で崩落、中央区は半冠水 東区・西区・北東区は冠水
- 9月19日 文化庁 岡村道雄主任調査官 県文化課 金城亀信主任専門員 現場視察
- 9月25日 宜野座村社会教育課 知名定順主幹 現場視察
- 9月27日 南区 第14層 (灰色粘質シルト層) を掘り下げ後、木製品を確認 (木製容器)、写真撮影
- 9月28日 米海兵隊環境保全部 平敷兼直他3人 現場視察
- 10月2日 南区、木製容器の出土状況実測後、取り上げ
- 10月3日 南区、南側出土の板状木片と石斧の出土状況実測
- 10月4日 南区、西壁面土壌積んで補強

- 10月6日 中央区北側壁・西側壁土層断面図作成後、土嚢を積んで補強
- 10月11日 北区、東側壁面、土嚢を積んで補強
- 10月12日 北東区 西側壁面に架かる石灰岩基盤の状況確認掘り下げ
- 10月25日 北谷町長以下職員 視察（跡地利用促進対策委員会）
- 10月26日 台風対策 19号週末接近とのこと
- 10月30日 北東区 西側壁面崩落掘り出し作業
 沖縄国際大学 江上幹幸・上原静先生 新里貴之・鳥袋綾乃OB諸氏 現場視察
- 11月1日 台風の影響大雨 台風20号
- 11月8日 北東区 サブトレンチ土嚢を積んで補強 崩落部分掘り上げ
- 11月8日 那覇市教育委員会文化課 金武正紀課長 高弘係長 現場視察
- 11月9日 各区雨天対策 14日まで
- 11月15日 北東区西側壁面、平面実測終了、NHK取材あり
- 11月30日 調査区南側の丘陵 隊舎No.399の周辺部に試掘が許可されたので設定する
- 12月6日 北東区 写真撮影・断面実測後埋め戻しにはいる
- 12月7日 北区 北側半分写真撮影・断面実測後埋め戻しにはいる
- 12月11日 中央区 東壁面写真測量・床面写真測量
- 12月22日 中央区 東側礫群実測
- 1月9日 中央区 東側第11層掘り下げ 遺物ドットで取り上げる
- 1月18日 中央区 東側曾畑層掘り下げ 木片出土 写真撮影
- 1月22日 中央区 東側の南隅でオキナワウラジログシ5～6個の集中あり 撮影後ドット上げ
- 1月24日 中央区 東側 シイの実集中部分あり掘り上げ
- 1月29日 中央区 東側 シイの実集中部分あり、写真撮影後取り上げ
- 1月30日 同上のシイの実の拡がり十字に切り対面を掘り下げる
- 1月31日 中央区 東側 別のシイの実集中部分あり 部分掘り上げ 2月22日まで
- 2月1日 中央区 東側 シイの実集中部分の近くで網代出土 拡がる可能性あり
- 2月8日 網代現在の段階で写真撮影後、実測する
- 2月16日 中央区 北側礫群 ユニックを使用し写真撮影
- 2月27日 網代を本格的に露出作業にはいる
- 3月1日 網代は方形か隅丸方形が想定される
 文化庁 榎田佳男調査官 県文化課 金城亀信主任専門員 仲座久宣専門員
 現場視察
- 3月6日 南区 第14層から東側壁面よりに幅1mのサブトレンチを設け、掘り下げる
- 3月9日 南区 棒状の木製品（第41図）出土
- 3月12日 中央区 東側落ち込み掘り下げ後 東壁面に土嚢を積んで補強する
- 3月13日 中央区 東側 南東隅壁面整形
 南区 第14層（礫層）の落ち込みは第10層の土壌があり、流水によって削られ

た穴と判明

- 3月14日 中央区 東側 南東隅壁面整形 第11層(泥質層)出土の流木実測にかかる
- 3月19日 南区 第14層(礫層)最下部 遺物出土状況の平面実測
- 3月21日 熊本大学名誉教授 白木原和美先生 宜野湾市文化課 豊里友哉主任主事現場視察
- 3月27日 南区出土の木製容器C₁₁の年代が判明 4480±50y.B.P. 面縄前庭式土器と重なる
- 3月30日 中央区 東側 南壁崩落除去作業 網代の平面プラン確認
南区第14層(礫層)下(灰色細砂)管畑層の混貝土層で遺物取り上げ

平成13年度事業

- 平成13年5月11日 台風対策 沖縄県立埋蔵文化センター 知念勇所長 現場視察
- 5月21日 平成13年度の発掘調査スタート
- 5月24日 西区 北・西壁崩落
- 6月8日 網代平面実測
- 6月18日 南区 シイの実層掘り下げ
- 6月22日 中央区 網代周辺部掘り下げ実測
- 6月29日 中央区 西側 南区サブトレンチに連続する部分を掘り下げ 混貝層上面を検出中 遺物多量
- 7月2日 網代の内部を掘り下げ中 オキナワウラジロガシが網代に接して出土
南区サブトレンチ混貝土層(管畑層)上面検出 以後 継続
- 7月9日 古環境研究所 早田勉先生 土壌サンプル採集(特に軽石採集)
- 7月13日 北区 西壁面の崩落 取り上げ
- 7月24日 熊本大学 甲元真之教授 杉井健助教授 現場視察
- 8月6日 南区サブトレンチ 南東側でオキナワウラジロガシ集中あり、写真撮影
北谷中学校 狩俣先生 初任者研修で実習
- 8月15日 中央区 網代周辺の礫群 取り上げ終了
- 8月17日 台風対策 台風11号
広島大学 古瀬清秀先生 現場視察
- 8月27日 南区サブトレンチ 混貝層遺物取上内の管畑式土器に滑石混入土器あり
町内親子遺跡見学会 現場見学 東門研治案内
- 8月30日 南区サブトレンチ 混貝層 北側イノシシ頭蓋骨 他多量の骨あり 12月11日まで
- 9月7日 台風対策 台風16号 12日最接近
- 9月19日 文化庁 加藤真二調査官 現場視察
- 9月25日 台風19号の影響あり 現場冠水
- 9月27日 熊本大学 甲元真之先生 来町現場視察
- 10月1日 国立歴史民俗博物館 辻誠一郎先生 他13人 植物遺存体の実見
- 10月5日 台風対策 台風20号

- 10月9日 中央区と西区間の畦掘り下げにかかる
- 10月15日 台風対策 台風21号 17日最接近
- 10月25日 南区サブトレンチ北側暗灰貝層掘り下げで海獣骨長さ75cm大が出土
- 11月7日 中央区と東区の畦掘り下げ始める
- 11月9日 中央区と西区間 第11層(川跡)掘り下げ
- 11月12日 中央区と西区 第11層(樹根)検出作業
- 12月14日 南区サブトレンチ写真撮影後、東壁・西壁の断面実測に入る 1月17日まで
- 12月18日 雨のため1月22日まで現場ほとんど進まず
- 平成14年1月29日 文化庁 平成12年度国庫補助事業実態調査 「発掘調査等」
- 1月31日 文化庁 坂井秀弥調査官 現場視察・指導
- 2月6日 中央区と東区間に排水用の溝を掘る作業、溝にかかる倒木・樹根の取り上げをおこなう
- 2月14日 中央区と西区間の混雑砂層、曾畑層を確認したところ間の中央付近で切れるようである。
- 2月19日 中央区南壁の樹根取上、直下の砂層を掘り下げ中人骨出土(大腿部)
- 2月20日 東区樹根検出、取り上げ時木製品出土 杭か
- 2月28日 東区サブトレンチ混雑砂層の掘り下げ中、木製品棒状製品出土
- 3月1日 中央区サブトレンチ 曾畑層上面としている礫層からは土器の出土はなくこの礫層を取り上げた後の混貝砂層から曾畑式土器が出てくるものと思われる。
- 3月7日 網代(笹)を保存処理するため切り取りの準備に入る。周辺幅1mの余裕を残し掘り下げる。中央区と東区の間でも網代の破片が出土する
県文化課 大城慧課長補佐 仲座久宜専門員 現場視察
- 3月9日 中央区と東区間サブトレンチでシイの実集中部あり。バインダーで固め取り上げる。
- 3月11日 中央区サブトレンチ及び笹周辺部の掘り下げ終了。その下位の緑灰色砂層、その下位は緑灰シルト層になる。
- 3月12日 中央区サブトレンチ緑灰色砂層中よりクガニ様石器と軽石混ざりの溝跡のようなものが確認された。
中央区笹北側拡張部に枝サングの集中地が確認された。レベル的に礫集中部よりも下位にある。
- 3月14日 文化庁 岡村道雄主任調査官 県文化課 金城亀信主任専門員 仲座久宜専門員 現場視察・指導
笹の遺構切り取りの段取り
- 3月18日 笹をH鋼枠にあわせるための切り取り調整
- 3月19日 笹遺構切り取り。クレーンを使用しH鋼枠を設置作業
- 3月20日 笹H鋼設置後、下面に鉄板をジャッキで押し込み固定する。取上完了。
10tトラックで京都へ輸送

- 3月25日 国立歴史民俗博物館 辻誠一郎・能城修一 植物遺存体のサンプル採集
現場で曾畑層出土の樹木に加工痕のある石斧の柄末製品を発見
- 3月26日 東区サブトレんチの東側は縄文時代晩期の土器が混在していたが、今日ではほぼ
曾畑層上面を検出したと考える。
- 3月28日 笠利町歴史民俗資料館 中山清美館長 早稲田大学 樋泉岳二非常勤講師
千葉県立中央博物館 黒住耐二上席研究員 自然遺物サンプル及び所見指導

平成14年度事業

- 平成14年4月10日 中央区南壁面実測
- 4月15日 サブトレんチ南北ラインH区・I区の石皿、シャコ貝、石材の実測
サブトレんチ東西ライン1～8区の遺物取り上げ、2区より縄文晩期の土器出土
- 5月15日 名護市教育委員会文化課 岸本利枝 現場視察
- 5月23日 平成14年度の発掘調査のスタート
- 5月31日 サブトレんチ南北ラインM～P区オリーブ褐色砂層掘り下げ。爪形文土器出土。
写真撮影
- 6月3日 サブトレんチ南北ラインM～P区オリーブ褐色砂層掘り下げ後、下層の灰オリーブ
砂層の軽石集中部、骨、爪形文土器を検出。
東区南壁が週末の雨で崩落
- 6月5日 サブトレんチ南北ラインM～O区軽石の下から礫が出土、露出作業。
M区より爪形文土器出土
- 6月10日 台風対策
- 6月17日 現場冠水 ポンプ1台増やして排水
- 6月20日 サブトレんチ東西ライン16～22区 緑灰砂層3回目の遺物取上げ、下から礫群と樹
根群が出土、検出作業
サブトレんチ南北ラインM～P区 灰オリーブ砂層の軽石群の取り上げ。下から礫
群が出土。J～L区の礫群と同じと考えられる。
V・W区の軽石群の清掃。爪形文土器出土。
- 6月25日 中央区 南壁面崩落 撤去作業
- 6月28日 古環境研究所 杉山真二氏 土壌サンプリング
沖縄国際大学 江上幹幸教授 現場視察
- 7月1日 古環境研究所 早田勉氏 軽石サンプリング
桑江中・北谷中の生徒体験学習、一週間
台風対策
- 7月4日 台風5号
- 7月11日 台風対策
- 7月19日 サブトレんチ南北ライン 緑灰砂層下礫層A～L区、N～W区、一回目、二日目写
真撮影、実測、取り上げ
- 7月29日 電源切られ冠水 排水作業

- 7月30日 青山大学名誉教授 田村晃一先生 沖縄国際大学 江上幹幸先生 現場視察
- 7月31日 県文化財審議委員長 嵩元政秀先生 来町 現場視察
- 8月6日 サブトレ南北ライン 緑灰砂層下礫層A~L区、四回目 B区で爪形文土器、石器出土
サブトレ東西ライン 緑灰砂層下礫層 16~18区 四回目 取り上げ
- 8月14日 サブトレ南北ライン N区より北側は色調により3種(黄褐、暗灰、暗ナリブ)に細分していたが、それらは軽石と炭の包含によるものと判断される。
サブトレ東西ライン19~22区の流木群は白色の粘土質に乗っている状態で検出
- 8月15日 熊本大学 甲元真之教授 小畑弘己助教授 現場視察
- 8月16日 サブトレ東西ライン緑灰砂層下礫層6回目 16・17区出土 局部磨製石斧
- 8月20日 サブトレ東西ライン緑灰砂層下礫層5回目16~22区 下の泥炭層まで掘り下げる 安全確保のため北側に拡張する。
- 8月21日 サブトレ南北ライン緑灰砂層下礫層 L区北東壁サポートパネルで補強する 中央区南壁、西区南壁にサポートパネルを設置の段取りをする。
- 8月28日 台風対策 30日 台風15号
- 9月3日 台風対策 5日 台風16号
- 9月9日 南区南壁崩落 応急処置 台風のため
- 9月12日 サブトレ南北ラインN~Q区 白色粘質土層の除去、北区東壁が崩落 作業中止
- 9月19日 サブトレ東西ライン緑灰砂層下礫層 19~22区樹木密集レベル 石斧、爪形文土器出土
- 10月1日 サブトレ東西ライン 青灰砂層 19~22区の掘り下げ
褐色粘土質土層下の青灰砂層より、火種に使ったと考えられる木製品とインシシ骨が出土、遺物包含層であることが確認された。
- 10月11日 サブトレ東西ライン 褐色腐食土層 16~22区 掘り下げ
サブトレ南北ライン 褐色腐食土層 F~H区 掘り下げ
- 10月16日 サブトレ東西ライン 16~22区の清掃 分層
サブトレ南北ライン F~H区 西壁面の実測
- 10月31日 実質的な発掘は終了
- 11月1日 図面整理と出土遺物の分類 11月29日まで
- 平成15年2月12日 壁面剥ぎ取り 県文化課 岸本義彦専門員の指導
- 2月28日 文化庁 坂井秀弥主任調査官 現場視察
- 3月11日 国立歴史民俗博物館 辻誠一郎・能城修一 植物遺存体サンプル採集
- 6月11日 町文化財審議委員長 大城逸朗先生 現場地質調査
- 7月18日 砂を入れ埋め戻し伊礼原遺跡低湿地区終了
町文化財審議委員長 大城逸朗先生 現場最終確認
- 8月1日 遺物整理作業入る
- 12月18日 文化庁 坂井秀弥主任調査官 来町指導

2. 砂丘区

砂丘区の調査は低湿地区で確認できなかった曾畑期の遺構、特に住居址を特定するため南側砂丘地に調査対象を求め、平成13年度から平成17年度まで調査を実施した。以下、年度毎にまとめて述べることにする。

・平成13年度（平成14年2月8日～3月29日）

平成13年度は低湿地区と南西側の米軍施設ソフトボール場の間に道路があり、それに沿ってソフトボール場側に5本試掘穴を設置して調査を実施することにした。2月8日に4m四方の試掘穴を北西から南東方向に試掘穴№1から5まで設定し、12日より調査を開始した。また、米軍施設が機能しているため、埋設管等の破損や安全確認を目的に磁気探査を行いながら包含層まで重機掘削を行った。その結果、18日～28日において、各試掘穴とも縄文時代後期～晩期の包含層が確認され、特に縄文時代後期の面縄東濶式土器などの奄美系土器が目立ったが、同期の遺構は確認されなかった。その後、更に掘削を行い、28日に試掘穴№3において縄文時代中期の炉址が検出された。3月1日に試掘穴№1より条痕文土器が検出され、試掘穴№1から3までに縄文時代中期の広がりが存在することが判明した。3月12日に試掘穴№4においても縄文時代中期の炉址が検出され、その範囲が更に広がることが判明。3月中旬から29日までの調査は試掘穴№3・4で検出された炉址遺構に関する作業が中心に行われた。炉址の底部において焼土を確認、また、面縄前庭式土器や獣骨などが碎うことが確認された。周辺に柱穴も検出されているが、屋内炉なのか屋外炉なのかの判断は掴めなかった。年度内に完掘することができず新年度に継続することとした。調査期間中、以下の現場視察があった。

- 2月13日 在沖海兵隊環境保全課文化財担当エリック・ウィリアムズ氏と真郡覇政氏が視察。
- 2月25日 読谷村教育委員会 仲宗根求氏現場視察。
- 3月7日 県文化課長補佐 大城慧氏と専門員の仲座久宜氏現場指導視察で来町。
- 3月14日 文化庁岡村道雄主任調査官現場指導視察、県文化課金城亀信主任専門員、仲座久宜専門員随行。

・平成14年度（平成14年4月1日～3月31日）

平成14年度は前年度の継続調査とソフトボール場内での調査を計画した。まず、継続調査で堆積状況と北西-南東軸における遺跡の範囲を把握し、その情報を基に今度は北東-南西軸をソフトボール場内に調査トレンチを設定して堆積状況と範囲を確認することとした。

継続事業は4月1日より6月27日まで行った。4月上旬は試掘穴№2～4で確認された柱穴及び炉址、各試掘穴の壁面図作成を行った。中旬は雨天が多く壁面の崩落が見られ、その除去作業を余儀なくされた。その後は、№2から№4において柱穴が確認され、半裁作業と図面作成を行った。柱穴は白砂層より検出され、その上位の層である縄文時代中期の所産であることが柱穴内の覆土や出土遺物から判明した。4月の下旬に試掘穴№2の掘り下げが進み、白砂層中の際限じりより条痕文土器が出土し、この時点では1点のみの出土であった。5月に入ると試掘穴№3・4の柱穴が完掘し、掘り下げを行った。これまでに確認された柱穴は明確なプランは見つからなかった。

柱穴完掘後の掘り下げは白砂層で、基本的には無遺物層として判断していたが、前述したとおり、試掘穴No.2において条痕文土器が確認されたことから各試掘穴の掘り下げを行うこととした。5月の下旬には同試掘穴より条痕文土器と爪形文土器が出土し、試掘穴No.3では獣骨片や貝殻が出土した。これら出土遺物は摩耗が見られ二次堆積の可能性があるかと判断された。白砂層の下位は粗砂から砂利へと変わり、試掘穴No.2では最下に岩盤を確認した。周辺の試掘穴は崩落が著しくなり、これ以上の掘削は行わず6月24日に埋め戻しを行い、試掘調査を終了した。この試掘調査の成果は縄文時代前期から後期までの文化層と範囲（北西-南東軸方向の）が確認され、しかも、中期にいたっては遺構が存在することが判明したことであった。これを基に今度は北東-南西軸で遺跡の範囲を把握するためソフトボール場内の調査を行うこととした。

調査を実施する事前に米軍へ発掘調査許可の申請を平成14年5月14日に行った。米軍からは6月28日に許可の回答を得ることができ、範囲確認調査を実施する運びとなった。

範囲確認調査は7月23日より準備を行い7月23日から3月31日まで実施した。トレンチ設定は試掘穴No.3を軸に北東-南西方向の5×70mのトレンチを設けEトレンチとした。調査は7月24日に磁気探査調査を入れ、翌日よりバックホウによる表土掘削を行い、2日間で表土掘削を終えることができた。本調査区域は米軍の埋土が薄い状況であった。

7・8月は米軍の埋設物や廃棄物など様々な掘削痕があり包含層が破壊されている部分も多々見られ、これら除去作業から行った。殆どが水道パイプで、包含層を切っている場所が3ヶ所、廃棄物も包含層を掘削している状況であった。9月から包含層掘削作業を行ったところ、丘陵側は黒色砂層の第6層の上面を掘り下げたところ、グスク時代の古手の資料と貝塚後期、縄文時代晩期の遺物が混在して出土し、その広がりやE-18グリット北東側まで確認された。9月27日にはE-19グリットでゴホウラ製の貝輪2点重なった状態で検出された。10月上旬はトレンチの中央部E-17・16の黒色砂層の第5層を掘り下げ、15世紀から17世紀のグスク時代の遺物と貝塚後期の遺物が混在して出土する状況が確認された。中旬から下旬にかけてはE-15・14グリットの黒色土層の第4層の掘り下げを行い、15世紀から17世紀のグスク時代の遺物が出土した。このように、Eトレンチでは丘陵側、中央部、海側とではレベル的にはそれほど差はないが堆積状況が異なることが判明した。

11・12月には、丘陵側のE-20グリットでは第6層において縄文時代晩期の石囲いと考えられる炉址が1基、12月15日にはE-19グリットの北壁に接した状態で第1号住居址が、E-17~15グリットにおいては柱穴が数十基検出されるなど遺構が確認されるようになった。12月は殆どこれら遺構の掘削作業や図面作成が主な作業となった。1月はE-19グリットの住居址の露出作業とあらたにE-20グリットで土坑8基が検出され、その掘削作業や図面作成作業を行った。E-14・15の柱穴の完掘後、白砂層の掘り下げを行うが無遺物層であることが確認された。2月はE-14・15・16のセクション図作成作業を行う。また、E-20グリットの土坑やE-19グリットの住居址の掘り下げを行い、両遺構から面縄東洞式土器など奄美系の土器が出土することから縄文時代後期であることが判明した。3月はこれら遺構の掘り下げと図面作成に従事したが終えることができず、平成15年度へ継続することとなった。調査期間中、以下の現場視察があった。

平成15年1月22日 小島調査官

1月23日 内閣府

- 2月26日 千葉県中央博物館 黒住耐二氏員分類調査指導
 3月6日 文化庁 榎宜田佳男調査官 現地指導 県文化課 盛本勲・知念隆博専門員
 3月12日 文化庁 岡田調査官 現地指導 県文化課

・平成15年度（平成15年6月25日～平成16年3月31日）

調査は4～6月中旬は整理作業を行い現場は6月25日より平成14年度事業の継続調査を実施した。7月～8月にかけては主に掘り下げを行い、7月30日にE-20グリットで土器が一括して出土し図面作成を行った。遺構は前年度検出されたE-19グリットの住居址の調査が終了していなかったため継続作業を行い輪郭が確認された。遺構は壁面に接しているため規模は把握できないが、形状が隅丸方形を成すのではないかと判断された。周辺には石皿や叩き石が伴っていた。8月の下旬に沖縄県教育庁文化課より北谷町で地中レーダー探査が行えないかの打診があった。これは在沖米軍基地の返還または一部返還や移転が進められているなかで、埋蔵文化財の分布を効率よく把握する手法として地中レーダーの導入を検討する「埋蔵文化財広域発掘調査手法検討委員会」が平成13年度に設置されていて、当初、宜野湾市の普天間基地で実施していた。しかし、平成15年度の調査は米軍側の要請で実施できない部分が生じ検証が行えない状況となった。そこで、返還された本町の伊礼原遺跡で探査を行い、検証したいということであった。ちょうどEトレンチのみの掘削であったため、南北方向の広がり気が気になっていたこともあり、地中レーダー探査を行い検証発掘調査を行うこととした。調査は10月14日から21日と11月17・18日の2回実施した。調査区は低湿地区の南東側と南東側の丘陵（通称399）、Eトレンチの北西側と南東側の4箇所で約5,000㎡を地中レーダー・電気探査・反射法地震探査の3種類実施した。その解析の結果、Eトレンチの19・20ラインの北西側と南東側に遺構と思われる反応が確認でき、19ラインの南北方向を検証発掘することとなった。11月25日より重機掘削を行い、12月1日より手掘り作業を開始した。この地中レーダー探査の結果の詳細は『埋蔵文化財広域手法検討調査概要（Ⅲ）』²⁵⁶で報告されている。

11月27日より砂丘区の北東側の丘陵上（通称399）の試掘調査を行うこととした。当該地これまで米軍施設があり詳細な調査が行えなかった部分で、低湿地区の調査時より曾畑期の住居址などの遺構が所在するのではないかと期待を寄せていた。施設の撤去作業も済み、地中レーダーの探査の反応では撤去時の土の掘り起こし痕または米軍施設の基礎址の反応で遺構が破壊されているのではないかと思われた。試掘穴は低湿地区側を中心に4×4mの16本を設置し、重機で掘削を行った。その結果、丘陵上は殆どが地山で米軍によって平坦に削平していることが判明した。ただ、北側の斜面地の近くでは旧地形が残っていることが確認できたが遺構に繋がる遺物や遺構の検出は得られなかった。

探査結果によって新たに設置されたグリットは北側にC-18西側、C・D-19グリット、C-19・20グリット、南側にF-19、G・H-19グリット、北東側にC-23・24グリットを設け掘削を行った。12月3日にF-19グリットで、地中レーダーで反応のあったポイントにおいて井戸状遺構（第66図）が検出され、探査の解析どおりで実証された形となった。また、12月17日にはD-19グリットでも礫の集中が検出され、この遺構も解析どおりであった。本遺構は後に住居址であることが判明した。12月19日Eラインを北東の丘陵麓に新たにE-22・23グリットを設け掘削を行った。1月7日井戸状遺構内の掘り下げ中に1体分の獣骨が確認された。1月30日井戸状遺構内より検出され

た獣骨が犬であることが判明（図版144・145上）し実測作業を行った。また、E-19グリット検出の住居址も平面図作成を行なった。2月に入ると殆ど雨天で現場作業ができない状態であった。2月下旬はC-19グリットの北壁にテーブルサンゴの配石が検出され、状況から埋葬の可能性が考えられることから更に北側へ拡張し、C-19北トレンチとし掘削を行うこととした。これまでに埋葬遺構が未検出であったため、埋葬地の区域が判断されるのではないかと期待された。3月に入ると拡張した各グリットより遺構が検出され始めた。C-18西側グリットは遺構が確認されず無遺物層の白砂層まで掘り下げを行い完掘した。しかし、東壁側の崩落に伴い人骨の頭部が露出し、壁面に土塊状の凹みが見られ、前述のテーブルサンゴの配石された遺構にも近いことから更に期待が高まった。そこでC-18グリットの東側を確認する必要が生じ掘り下げを行った。

D-19グリットの南側では集石が確認され、E-19グリットの北壁に接して検出された住居址の北側部分であることが判明した。そこで、住居址の規模が確認できるようになった。拡張によって確認された遺構は年度内で調査ができなかったため、次年度も継続して行うこととした。調査期間中、以下の現場視察等があった。

- 平成15年6月30日～7月4日 町内の中学2年生10名の職場体験学習を受入れ発掘作業を行った。
- 7月10日 文化庁 金城調査官 県文化課 金城亀信主任専門員 中山晋専門員
- 10月1日 西村康委員長（埋蔵文化財広域発掘調査手法検討委員会） 県文化課 金城亀信主任専門員 現場視察
- 10月6日 宜野湾市教育委員会文化課 仲村健氏 現場指導
- 10月30日 埋蔵文化財広域発掘調査手法検討委員会 現場視察
- 11月17日 物理探査学会デモ
- 11月18日 物理探査学会デモ 県文化課 金城亀信主任専門員 現場視察
- 12月3日 県文化課 金城亀信主任専門員 中山晋専門員 沖縄県埋蔵文化財センター 知念隆博専門員 名瀬市博物館 高梨 修氏 現場視察
- 12月5日 沖縄県埋蔵文化財センター 瀬戸哲也専門員 現場視察
- 12月10日 糸満市教育委員会 大城一成氏 現場視察
- 12月11日 沖縄県教育長 総務部長 文化課 島袋洋係長 金城亀信主任専門員 宜野湾市教育委員会 森田直哉 現場視察
- 12月18日 文化庁 坂井秀弥主任調査官 現場視察及ぶ指導 県文化課島袋洋係長 金城亀信主任専門員 随員 宜野湾市教育委員会文化課 呉屋義勝係長 森田直哉 現場視察
- 12月25日 西村康委員長（埋蔵文化財広域発掘調査手法検討委員会） 県文化課 金城亀信主任専門員 現場視察
- 3月4日 文化庁 玉田芳英調査官 現場指導 伊礼原遺跡は国指定遺跡の要件を満たしているとの報告がなされた。
内閣府審議官 現場視察
- 3月17日 福岡県福岡市埋蔵文化財センター 比佐陽一郎 千葉県中央博物館 黒住耐二 早稲田大学 樋泉岳二 現場指導
- 3月22日 大分県教育委員会文化課 高橋信武主幹 現場指導

・平成16年度（平成16年4月5日～平成17年3月31日）

平成15年度の継続事業で4月5日より5月12日まで調査員で掘削作業及び図面作成に従事し、翌日の13日より始動した。平成16年度は調査区が東西南北に広がったため、作業員を四方に配置して作業を行った。南北の拡張したグリットは遺構が検出され始めてきた状況であったため、遺構の性格や時期を把握する必要があった。C・D-19の北西側での西壁に接して確認された集石の調査を行ったところ、一部米軍の埋設管工事で破壊されていたが、ある程度の形状が把握できる住居址であることが判明し、遺構内や周辺から面縄東洞式土器などの奄美系土器が出土することから縄文時代後期であることが分かった。

6月13日に伊礼原遺跡の地権者に対し現場説明会を開いた。区画整理事業の換地作業の問題に伴い、伊礼原遺跡の国指定予定範囲を区画整理事業内から除外する旨の説明会であった。

C-19・20グリット及びG・H-19グリットにおいて集石が3基検出された。露出作業と規模及び出土遺物の確認、平面図作成を行い詳細な遺構調査は行わず保存することとした。7月中旬はE-20グリットで縄文時代後期の炉址を調査していたところ、更にその下位に貝の集積が確認された。そこで、貝の集積の範囲確認するため周囲の掘り下げを行い、円形状に堆積していることが判明した。堆積状況を確認するため東西方向にサブトレンチを設けて掘削を行い、断面が碗状で堆積に貝種の特徴が見られた。遺構内から出土する土器は縄文時代中期にお面縄前庭式土器や伸泊式土器が出土し、人骨の大腿骨も含まれていた。周辺に埋葬地があるのではないかと想定された。また、前年度に検出されたC-19北グリットのテーブルサンゴの配石は当初、埋葬施設と想定していたが、調査の結果、配石の下位には遺構は確認されなかった。しかし、周辺の集石の配置を考慮すると住居址の可能性があるのでないかと判断した。

各グリットの調査の状況から縄文時代の遺構はE-18グリットのほぼ中央から北東側に集中し南西側に広がらない状況であった。それが何故なのか判然としなかったが、11月下旬に砂丘の堆積に詳しい東大阪市文化財協会の松田順一郎氏に分析をお願いしたところ、Eトレンチ内で3回ほど砂丘が自然災害（大波・台風の影響など）により削れている状況が確認できるということであった。その影響で、南西側のE-14・15グリットはグスク時代（15世紀から17世紀頃）の遺構のみで、E-16・17・18グリットの中央より南西側は弥生時代相当期の遺構、E-18グリット中央より北東側は縄文時代の遺構が存在する状況が把握することができた。

1月～3月にかけては、ほぼ各グリットの掘削は白砂層に達し、遺構の検出も見られなくなり、これまでに検出された遺構の図面作成や、壁面図作成作業を行った。年度内で終えることができなかったため次年度も継続することとした。調査期間中、以下の現場視察等があった。

5月14日 町議員現場視察

5月26日 県文化課長 名嘉政修 係長 島袋洋 現場視察

5月28日 稲嶺崇知事 現場視察

6月28日～7月2日 町内の中学2年生の職場体験学習を受入れ発掘調査作業を行った。

8月4日 山口県土井ヶ浜人類学ミュージアム 松下孝幸先生 現場視察

- 8月5日 文化庁 清野孝之技官 県文化課 金城亀信主任専門員 中山晋専門員 随員
宜野湾市教育委員会文化課長 呉屋義勝係長 現場視察
- 10月15日 山口県土井ヶ浜人類学ミュージアム 松下孝幸先生
宜野湾市教育委員会文化課 森田直哉 現場視察
- 11月29日～12月1日 大阪府東大阪市文化財協会 松田順一郎 砂丘堆積の分析指導
- 11月30日 宜野湾市教育委員会文化課 呉屋義勝係長 森田直哉 現場視察
- 12月14日 町文化財審議委員 大城逸朗先生 現場視察
- 12月17日 山口県土井ヶ浜人類学ミュージアム 松下孝幸 人骨調査指導
- 1月5日 文化庁 坂井秀弥主任調査官 岡田調査官 現場視察及び指導
- 1月6日 文化庁 文化財審議委員 現場視察
- 1月7日 文化庁記念物課長 岡田調査官 現場視察
- 1月27日 伊礼原C遺跡保全整備基本構想委員 県文化課職員 現場視察
- 2月10日 熊本大学 甲元眞之教授 笠利町歴史民俗博物館 中山清美氏 現場視察
- 2月21日 兵庫県教育委員会文化財室 山本誠氏 岡山大学 稲田教授
- 3月1日 奥郡駒町議員視察
- 3月25日 大阪府東大阪市文化財協会 松田順一郎 千葉県中央博物館 黒住耐二 早稲田大学
樋泉岳二 現場指導

・平成17年度（平成17年4月1日～平成18年3月31日）

平成17年度は現場作業が終盤を向かえ、前年度の継続作業とこれまでの出土した遺物の整理作業及び、低湿地区の調査成果として報告書作成を行うこととした。

現場作業は主に遺構図の作成と壁面図の作成に従事し、埋め戻しを考慮し最終確認作業を行った。そこで、次のような処置を行い範囲確認作業を終えることとした。遺構は遺構調査を行ったE-19・D-19グリットにまたがる住居址、C・D-18・19グリットにまたがる住居址の平面図、断面図の最終確認作業を行い保護砂で覆い保存、C-19・20、G-19、GH-19グリット検出の集石については平面図と断面図のみで詳細な調査は行わず、保護砂で覆い現状保存することとした。

整理作業は現場作業プレハブと整理作業プレハブの2箇所で行った。前者は主にこれまでの範囲確認調査で出土遺物の洗浄作業や分類作業を行い、後者は低湿地区の遺物整理を行った。調査期間中、以下の現場視察等があった。

- 平成17年6月27日～7月1日 町内の中学2年生の職場体験学習を受入れ発掘作業を行った。
- 8月3日 町内の小中学校の新任教員の初任者研修を受入れ発掘作業を行った。
- 9月20日 区画整理町作り協議会現場視察（16名）
- 10月20日 本町教育委員現場視察
- 11月17日 韓国KCTV現場取材

・平成18年度（平成18年4月3日～平成19年3月30日）

平成18年度は平成10年度～平成17年度まで実施した試掘及び範囲確認調査の資料整理を行い本報告書の作成を行った。

第4節 出土遺物保存処理事業

発掘調査や遺物整理作業と平行して、平成14年度、平成15年度には埋蔵文化財出土遺物保存処理事業の名称として「伊礼原B遺跡ほか出土木製品等の保存処理」を平成13年5月に発見された約1×1×1mの穴を、2×2×1mで取上、京都の吉田生物研究所に保存処理の委託を行った。

平成14年度の主な委託は強度の関係から現地で穴内部を掘り抜かず、塊として移動したことから京都の保存処理先で内部の削り抜き作業からお願いをした。約6ヶ月を掛けて削り抜きを行い、その後、約1ヶ年を掛けて水分除去のため低アルコールから高アルコール、樹脂への置換処理の工程を経て整形・化粧直し・ケース入れを行い、京都と沖縄の気温の差が少ない春に帰郷した。

穴の保存処理後の大きさは約1.5×1.5×0.7mで陳列ケースに内蔵され、そのまま展示できるように保護されており、現在、北谷町ニライセンターの入口ロビーに公開している。

他に穴の網代がもぎとれた塊が2個体と木製針葉樹で太さ6cm、長さ2mの建築用材1点を保存処理した。

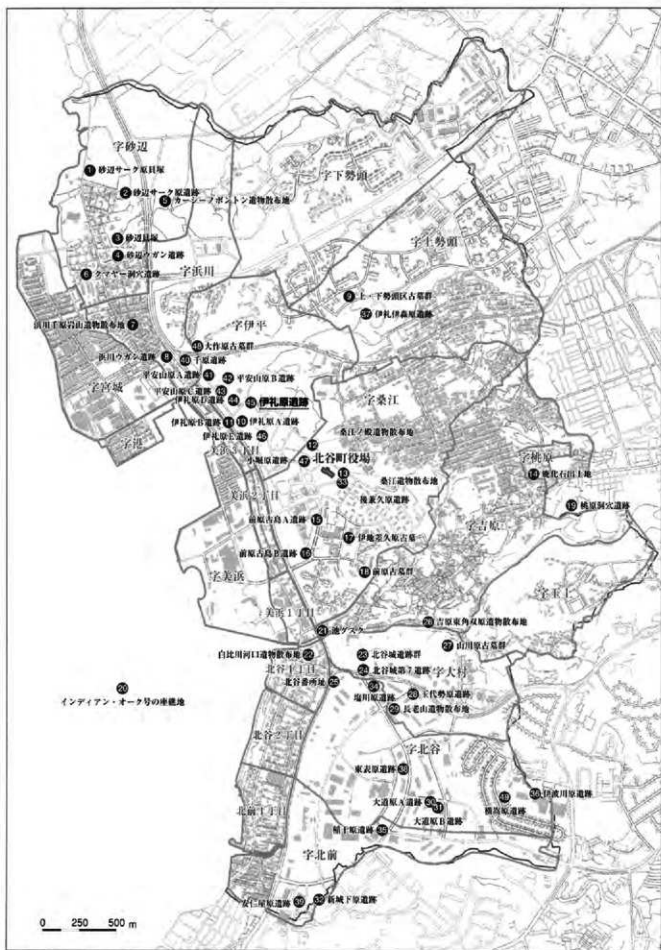
これらの経過については「伊礼原C遺跡の語るもの」(2004)として概要を報告してある^{註1)}。

引用・参考文献

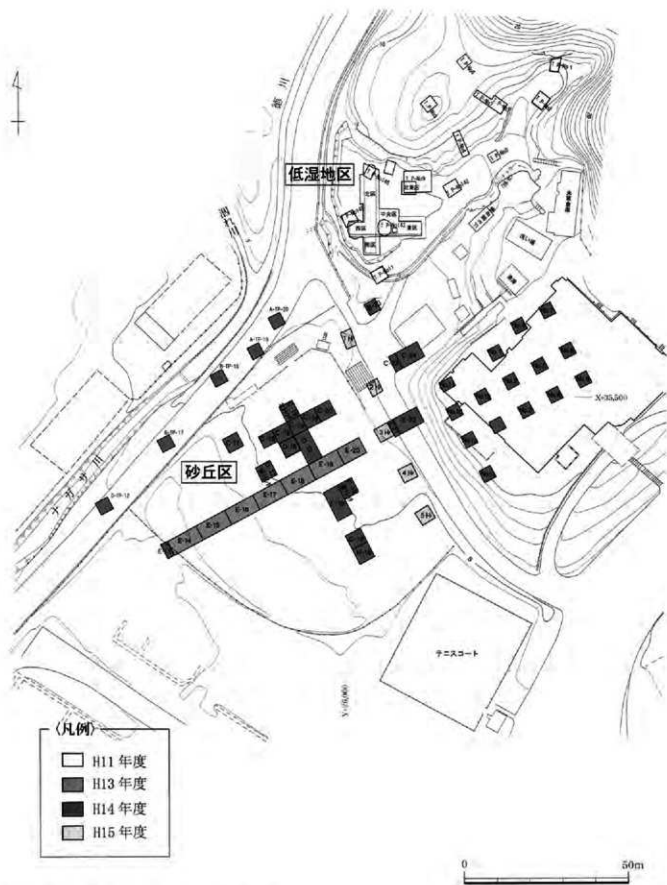
註1 北谷町教育委員会 「伊礼原C遺跡の語るもの」—伊礼原B遺跡ほか出土遺物保存処理事業— 2004年3月



保存処理された穴の展示 (北谷町ニライセンター)



第2図 北谷町域の遺跡分布図



第3図 地形図及びグリッド位置図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

I 伊礼原遺跡の立地としての地形・地質

大 城 逸 朗 (北谷町文化財調査審議会委員)

はじめに

国道58号線側から町役場側を眺めると、その背後は一段と高くなった段丘地形になっている。段丘は石灰岩の地層からなり、同岩相は伊礼原遺跡の立地する低位面の砂層や砂礫層の基底でも認められる。そのことから判断すると、段丘のつくる崖地形は地質構造に起因する断層崖と考えられる。

低位面は、米軍基地でもあったため人工的な変容を受けているが、かつては背後に崖を有する海岸で海浜砂が堆積し、さらに陸側から浸食作用でもたらされた粘土や砂礫が堆積し、そして不整合部からの湧水が湿地帯をつくるなど多様な環境変化を伴ったところである。遺跡発掘のグリッド断面では、そのような環境変化を示す堆積物が海水面の変動と深く関わりながら、海側へ前進あるいは後退をくり返ししながら発達したことが分かる。なお、各グリッドの詳細な記述については、別項を参考にしていただきたい。

以下では、遺跡の立地としての地形と地質について、その概要を述べる。また参考のため北谷町の地質図と模式地形断面を示した。

1. 地 形

町役場の背後には、比高15～20mの明瞭な段丘地形が見られる。段丘は、①10～15m以下の低位面、②35～70mの中位面、③100m以上の高位面の3つに区分できる。なお、これらの3面は、沖縄島の中南部では共通に認められる。

①の低位面は、北西～南東方向に発達する中位面のつくる崖面に平行に発達している。面の広がり、遺跡の立地するあたりでは、国道58号側から幅およそ250m、さらに南側へかけて次第に広くなり、幅1kmにも達する。低位面は、かつて海岸砂や砂丘が発達し、陸側から流れ込んだ粘土の堆積で水田となり、さらに集落地になるなど地域の変遷を知ることができる重要な地形発達史を秘めている。

②の中位面は、吉原一帯、桑江から上勢頭を経て北東側へ高度を増しながら緩傾斜した一帯、さらに嘉手納町や沖縄市側へかけて広く発達している。当時の地形を米軍用航空写真(図版7・1945年)や軍用地形図(1948年)で調べると、中位面は浸食作用で形成された北東～南西方向のリッジ地形が多数発達していたことが読み取れる。これを現地形と比較すると、特に北谷町側では多くの地域は造成され住宅地となるなど丘陵を刻む浅い谷はほとんど埋め立てられ変容していることが容易に分かる。

③の高位面は、北谷中学校付近から沖縄市の南桃原や山里、それに白比川を挟むその南側の米軍基地(キャンプフォスター)一帯から北中城村にかけて発達している。つまり高位面は、北谷町の

南側から東側へかけて発達しているが、このことは沖縄島の中～南部地域では一般に東で標高が高く、西側にかけて次第に低くなる島の地史との関わりが考えられる。

町の北側（県道23号線の北）、それに嘉手納基地から沖縄市の知花にかけて小高く丸い形をした山が点在している。小山は底部が広く、比高50～80%で頂部にかけて次第に尖塔状になった“円錐カルスト”である。石灰岩層からなる地層が浸食作用や溶食作用を受けてできた石灰岩地域特有のカルスト地形である。伊礼原遺跡の周辺に見られる小山も、やはり同様の形態と考えられる。

中位及び高位面は地質が石灰岩層からできていることもあって、ウキンジュガマ（全長140%以上）、クマギーガマ、マタヨシガマ（全長150%以上）など幾つかの洞穴が知られている。洞穴は、一般に基盤岩類との不整合部に形成されている。しかし石灰岩層は砂質で固結度が弱いと容易に侵食され、洞穴の形態は複雑で、しかも重層型になっている。洞内の堆積物の状況から、かつては水量が豊富だったようだが、現在は地表部が改変されたためか流水は少なく、また鍾乳石類のような二次生成物は風化しつつある。湧水は中位面の基部付近の数カ所で認められる。なお、段丘面に形成された洞穴の流水方向は、総じて南西方向に緩傾斜した地形を反映し、低位面方向へ流れている、洞穴から流れ出たと思われる湧水もある。

北谷町の南側には、東側の沖縄市付近を源として流路を西側に有する白比川（全長3.2%）がある。川は、中位面や高位面を侵食しているため、川に面したところでは基盤岩まで深く浸食され比高40～70%の崖を形成している。白比川をはじめ北側の比謝川、南の普天間川、比屋良川、牧港川などは、いずれも東側を源として西のシナ海側へ注ぐ川である。これらの川の形態は、沖縄島中～南部地域の地質や地質構造から判断し、東側が高所で西側に低いという島の成り立ち（地史）と深く関わっているようである。



第4図 模式地形断面（東-西）

2. 地質

沖縄島の地質は、中部の読谷村、嘉手納町、沖縄市、それにうるま市を結ぶあたりで変化し、北部と南部の地層の境界となっている。沖縄島北部の主要な構成層である名護層（今から1億4～5千万年前、中生代白亜紀中期）は、粘板岩、千枚岩、黒色片岩、砂岩、砂質片岩、それに緑色岩からなり、変成作用で片岩化しているのが特徴である。この種の岩石は読谷村の座喜味城址付近、比謝川上流、沖縄市の倉敷ダム付近、天願川上流あるいは天願ダム付近でも認められる。沖縄島中部地域より以南では、地下深所に分布し、天然ガス調査のため那覇市奥武山付近で実施されたボーリングでは、地下およそ800mで名護層が確認されている（福田ほか、1970）。即ち名護層は沖縄島北部から中部まで分布し、そこから以南では地下深所に認められ、沖縄島中南部の鳥尻層群の基盤となっている。また、沖縄島中部では、名護層上部の嘉陽層（今から5,500万年前、新生代始新世中期）は、地表では認められない。しかし沖縄市の八重島では、嘉陽層の砂岩が琉球層群の基底レキ岩として露出しており、地下では沖縄島中部まで分布している可能性が考えられる。

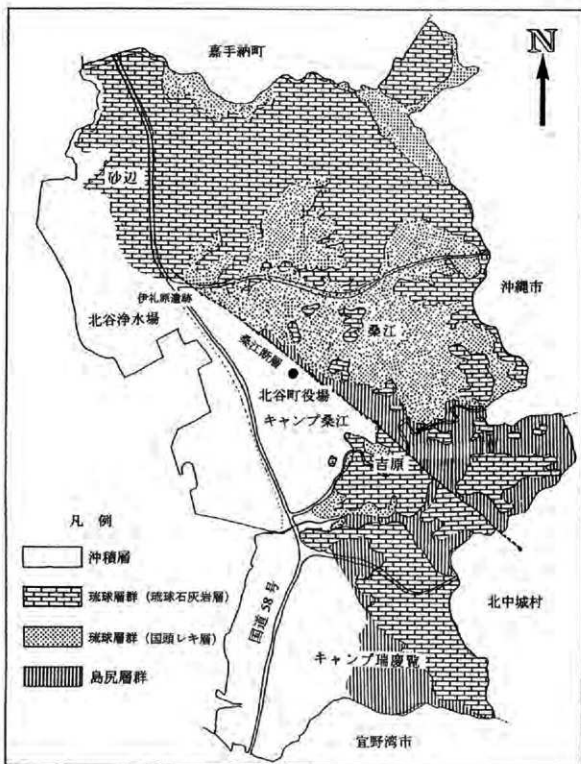
北谷町を含む沖縄島中部以南の地質は、片岩化した名護層を基盤にして、これを不整合に覆う鳥尻層群と琉球層群からなる。鳥尻層群は、新生代中新世後期から鮮新世にかけて（今から1,000万年～500万年前）の堆積物で、主として青灰色のシルト質粘土からなり、宜野湾市、北中城村から那覇市にかけては砂岩層が卓越する。琉球層群は、新生代更新世（今から130万年～数10万年前）のサンゴ礁性の堆積物と砂礫堆積物（国頭レキ層）からなり、基底部には砂層（知念砂岩層）を伴う。古地理的には、サンゴ礁の海が発達していたころ陸域では砂礫層が形成され、それが海域に流れ込み、サンゴ礁の海が隆起に転じるころ砂礫堆積物と指交関係を示すようになったと推測されている。

遺跡は沖積層からなる低位面に形成されていて、周辺の地質は鳥尻層群を基盤に、それを不整合に覆う琉球層群からなる。鳥尻層群は、低位面と接する中位面の基部（崖斜面）で認められ、基底部の不整合部からは数カ所で湧水もある。遺跡の北西側のウーナヌカー（湧水）もそのような形態の湧水である。なお、中位面や高位面に形成された洞穴内でも、基盤岩の鳥尻層群は認められる。

琉球層群は、琉球石灰岩と呼ばれる石灰岩と砂岩や礫岩からなる地層で、そのうち石灰岩層は黄色～黄褐色をした砂のような感じのものである。石灰岩層は、下部に大きなホタテ貝の化石が密集するところがあり、中部から上部にかけては堆積時の波の動きを示す葉理や斜交層理が発達している。遺跡の立地するところでは、遺物包含層の基盤は石灰岩層の下部に相当する黄褐色の石灰質砂岩層からなり、南側の伊礼原E遺跡南端では同岩層が露出している。この種の石灰岩は固結度が弱く、地下では浸透水で浸食され空洞ができていたりして、かつて県道23号線（国体道路）で道路陥没等が生じた例は、このような岩質の地質が原因である。

参考文献

福田 理他24名（1970）：第5次沖縄天然ガス資源調査・研究概要。地質調査所月報。21巻11号。627-672



第5図 北谷町の地質 (地質調査所 (1987) の地質図を一部改めた)

II 位置と環境

伊礼原遺跡は沖縄県中頭郡北谷町字伊平伊礼原144番地を中心とする低湿地地域と、同163番地を中心とする砂丘地域に所在する複合遺跡である。

沖縄本島は略南北約100km、幅約7～10kmの細長い島で、北谷町は南端から約30km、沖縄県庁所在地の那覇市から約20kmの西海岸の東シナ海に面して、北谷町域は南北約6.0km、東西約4.3km、総面積13.63km²で人口約27,000人（2007年2月現在）あまりの町である。

沖縄本島は地勢的には高島と低島の両方をもつ島で、北側が高島で南側が低島となっている。高島は標高300～500mの山脈がみられる古い地質（名護層）で、低島は標高100mを頂点とする下位の島々で地質的には新しく隆起石灰岩から形成されている³¹⁾。高島は鉱物を起源とする酸性土壌で水は軟水である。低島はサンゴを起源とする隆起石灰岩からなり弱アルカリで水は硬水である。土壌の特性は植物相にも影響を与え弱酸性を好む植物相、弱アルカリを好む植物相に棲み分けがみられ、それらはまた動物相にも影響を与えたという³²⁾。

北の土壌を国頭マージ、南の土壌を島尻マージと呼び、土壌と植物の相制の良し悪しを批評する際の使い分けに一般的に使用されている。樹木では特に6月の「うりずん」の頃、山野にイジュの花が咲き乱れ弱酸性土壌の特性を示し、視覚的に区域区分の目安にできるという。北谷町はその境目の低島側に位置するが、イジュ林の花が季節になるとみられ、隆起石灰岩地帯であるが表層には高島からの二次的な土壌の流入がみられ両者の特徴をもつフアジーな地帯でもあるという。

この高島と低島の境目地域は平らな台地が広がり、そこに米軍嘉手納飛行場が位置している。低島の標高約100mの稜線は略南北に沖縄本島南部まで続いている。その稜線は東側の太平洋側と西側の東シナ海側の分水嶺にもなっている。東側は不透水性の島尻層の斜面になっていて、西側は隆起石灰岩の海岸段丘に乗った状態になっていて雨水や河川がほとんど西流し、東シナ海に注ぎ、湧水も段丘下に点在している。

北谷町域の標高約100mの稜線ラインは東の沖縄市との行政境になっていて、そこから西側平野部までに三段の段丘がある。①標高約100mライン、②標高約60mライン、③標高約30mラインと沖積層の平坦部へとつづく。伊礼原遺跡の位置する旧キャンプ桑江地域は一見すると沖積層の平坦部と見受けられるが、試掘調査の結果、石灰岩基盤の露頭や表土下1m、表土下2m、表土下3mに石灰岩岩盤が確認でき、戦前までは石灰岩基盤と沖積層の小起伏があったことが判断できる³³⁾。この旧キャンプ桑江平坦部と北東側の標高20～30m丘陵部との段差は直線で略北西から南東部にかけての断層であり³⁴⁾、西側の平坦部が約20～30m陥没したことに由来するらしい。この段差の間にはウーチヌカーとナルカー（奈留川）の湧水があり周辺には戦前まで平安山・伊平集落の、後者は伊平・桑江集落の水田址があった。このウーチヌカー湧水の水田址地域の真下に伊礼原遺跡の低湿地帯は形成されている。さらにその前面の沖積世平坦地に砂丘区は展開している。

砂丘区は海岸砂地に基本的に形成された遺跡で、現在、縄文時代中期平行期の条痕土器や面縄前庭式土器の炉址や竪穴数石住居址などの生活址が確認されている。これらの低湿地帯を含め砂丘区の遺跡の形成場所は従来の貝塚時代編年であつかわれる遺跡の立地概念とはやや異なる立地である。

沖縄本島中南部の隆起石灰岩台地では、一般的に標高100m前後の段丘下の岩陰に貝塚時代前期(縄文時代後期)の遺跡があり、代表的な遺跡が国指定史跡である伊波貝塚、萩堂貝塚や熱田原貝塚等の立地である。それにつづく貝塚時代中期(縄文時代晩期)では標高100m前後や標高60m前後の段丘上の平坦台地の縁辺部に生活址が確認されている。これは周辺離島の低島の隆起石灰岩段丘でも同様な立地をしている。国指定史跡の宇佐浜遺跡や伊計島仲原遺跡、宮城島シヌグ堂遺跡、旧具志川市地荒原遺跡や宜野湾市普天間飛行場台地の西側縁辺部も同様な立地である。貝塚時代後期(弥生時代平期~7・8世紀)になると海岸線近くの砂丘地に厩を構え黙々広く大型の貝殻が集散する、いわゆる砂丘遺跡と呼ばれる立地で、生活址が明確に確認しにくい状況にある。つづくグスク時代(11世紀後半)になると独立丘陵に厩を構え、小丘陵から大がかりな丘陵へと移行していく変遷が立地としてうかがえる、と言うように初心者や概説書等に立地の変遷過程を説明している。

それらに相対して沖縄本島北部や高島の離島では上記の変遷過程は当てはまらず、貝塚時代前期から海岸近くの砂丘地で、山の麓で古い遺跡が確認され、新しくなると海岸線へ近くなるという水平分布の遺跡立地を示している形状がうかがえる。

それらの立地の要因として古く多和田真淳氏は貝塚時代前期以前の津波説、貝塚時代中期については、植物学の多和田真淳氏や民俗考古学の国分直一氏の根栽農耕の起源等を新田重清氏なりに遺跡の立地や貝殻が出土しないこと、遺跡数の拡大や平坦なオープンサイトの立地などから貝塚時代中期の根栽類農耕を仮説として立てその論を提唱し、人為的な棲み分けをおこなったのではないかとこの予察をおこなった。しかしながら、いまだその検証はおこなわれていないが、概説的には良く説明に使われている。

伊礼原遺跡は高島と低島の中間のやや低島に位置していて、上記の一般的な立地からすると背後に隆起石灰岩の河岸段丘をもち中南部的な立地に当たるが、遺跡自体の立地は丘陵部麓から海岸砂丘地に形成される高島的な遺跡となっている。地勢では低島で、立地では高島に当たり両者の特性を持ちこれまでにない新知見の遺跡の立地である。そのような地勢で伊礼原遺跡を概観すると上記の研究史でみられるような立地条件に一石を投じることになるかと思われる。

北谷町内域で低島的な立地を保持しているのが北の砂辺貝塚(貝塚時代前・中期、グスク時代)である。この砂辺貝塚は標高約30mの残丘カルストの台地上に生活址があり崖下に貝塚が形成されている複合遺跡である。いわゆる台地上に方形縦穴敷石住居址があり、崖下が投棄した貝塚である。このような生活址と貝塚との使い分けで、沖縄本島中南部の低島の隆起石灰岩の段丘上・下の遺跡の立地を追っていくと両者は対になることが分かる。それらを含めて今後整理する必要が求められるし、その先駆けの資料になるかと思われる。

残丘カルスト台地は北谷町の北、砂辺地域から始まり、嘉手納飛行場の南側を連なり、東側の旧具志川市(うるま市)天願地域まで東西にみられる。これは前述の高島と低島の境界の指標と地質学的にされていて、隆起石灰岩の中で最も古いものとされている。この残丘カルスト台地一帯はグスク時代(14世紀以後)天願グスク、安慶名グスク、知花グスク、国直グスクと城塞的に利用されるが、それ以前の先史時代においては沖縄市の八重島貝塚(貝塚時代中期)を例外として人々の痕跡は確認できない。この地域が開墾されるのは近世の18世紀ごろまで待たねばならず、沖縄本島南部の首里・那覇の人々が入植して後のことである。入植者をヤードイ(歴取)と呼び残丘カルスト

台地一帯にヤードイ人口の6~7割近くが入植したという³⁸⁶⁾。彼らは本村のように集落を形成せず、散村を形成し近親者を絆として開墾していったという。これは伊礼原B遺跡の発掘調査でも「壺屋陶器」以後の黄褐色シルト層の堆積が2~3mにおよび、上流地域が急激な開墾をおこなった結果であることが判断できた。それらの状況を逆に解すれば、先史時代以来、近世まで人々の痕跡が薄い手付かずの地域で、植物相も本来の安定した状況が予想される。また、シシグマイ（イノシシのいる窪地）と呼ばれる地名が聞かれることから、相違くはない時期までイノシシはこのあたりまで徘徊していたと考えられる。

戦前の北谷町の集落は沖積層の平坦部やその地域に近い低丘陵部に位置していて、現在、確認されている遺跡も重なるようにして分布している（第2図）。中でも北谷町域の北側の砂辺地域と、南側の北谷城一帯の丘陵部から平坦部にかけて集中して分布している。今回のキャンプ桑江返還に伴う試掘調査でも丘陵部から沖積世平坦部にかけて10個の遺跡が発見されており、町内城の中央部でも遺跡が集中していることが判明し、県内でも異例の遺跡の集中地域であることが分かる。そのことは隆起石灰岩の河岸段丘下からの湧水地域が点在することも必要な条件であるが、より以上に背後の植物相や前面のイノー（リーフ）は直線で約1.5kmと遠く生業の糧を得る十分な条件が備わっていたかに他ならないと判断される。

さて、伊礼原遺跡の低湿地区は南西側を前面背後に背後三方を標高20~30mの石灰岩丘陵部の尾根に囲まれ、その麓の標高6~7mの場所にウーチヌカーの湧水が位置し、つねに湧水の流れに満たされた地域である。この流水は西流して大きなナガサガーに合流して約300m先の河口に至る。この合流地域には上流地域からの土砂とサンゴ砂による海成砂や砂丘の堆積が相前後としてみられる。その互層は低湿地区と砂丘区で明確に分かれているが、その接点では不明である。ただ、低湿地区と砂丘区の境地域には標高-5mに地層境界ラインが確認され、砂丘区のEトレンチより北側には標高-10m、南側には標高-4mの石灰岩基盤が電気探査³⁸⁷⁾で確認されている。前者が海成砂と陸生土砂の境で、後者が石灰岩基盤層の位置と確認されている。

低湿地区には海生砂はなく、すべて陸生の細砂で形成されている。これら陸生細砂は背後の丘陵部からの流入である。背後の丘陵部は隆起石灰岩地域で基本的には石灰岩の風化土壌であるが、部分的に石英砂を含む土壌も含まれている。

砂丘区は沖積平野に展開しているが、基盤層は東隣にある標高約10mの丘陵（米軍隊舎No.399があった）麓の試掘穴では標高約7mに石灰岩基盤が確認できた。そこを基点として海成堆積砂、海成砂丘が形成されている。試掘調査の結果から、出土遺物を見ると海岸砂丘が形成され拡がる形状にあわせ新しくなるにつれ海岸方向へ新しい遺跡の展開している様相が確認できる。

引用・参考文献

- 註1 目崎茂和 『琉球弧をさぐる』 あき書房 1985年
- 註2 中村憲 『貝塚後期文化の食生活』『新 弥生紀行』—北の森から南の海へ— 編集 国立歴史博物館 発行 朝日新聞社 1999年
- 註3 北谷町教育委員会 「キャンプ桑江北側返遊に伴う試掘調査」—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業— 北谷町文化財調査報告書 第23集 2005年3月
- 註4 沖縄タイムス社 「奄美・沖縄地質図」別冊『沖縄大百科事典』の手引き』1983年3月
- 註5 田里友哲 『論集 沖縄の集落研究』離宇宙社 1983年
- 註6 沖縄県教育委員会・社団法人物理探査学会 『物理探査を利用した埋蔵文化財広域発掘調査手法』—物理探査実施マニュアルおよび解説— 平成15年度 文化庁支出委任 埋蔵文化財広域発掘手法検討調査事業 報告書 平成16年3月

第三章 層序と年代

I 低湿地区

辻 誠一郎 (東京大学大学院新領域創成科学研究科)

1. 低湿地区の概要

かつて6地区(伊礼原C遺跡)と呼ばれた遺跡の北東端の調査区である。この調査区では試掘穴Na143を中心に試掘調査が実施され、曾畑式土器を多量に含む堆積物およびその上下の堆積物が水成かつ沼沢地成であることから、指標される環境にちなんで低湿地区と呼ぶことにした。現在では琉球石灰岩からなる台地から伸びた尾根に囲まれた平坦な低地になっているが、ふもとは湧水(ウーチヌカー)があって、これが南方に流下し、ときには滞水することによって沼沢地が形成されたと考えられる。

平成9年3月18日に実施された試掘穴Na143の調査において、最下部の第14層から曾畑式土器および動植物遺体群が多量に検出され、縄文時代前期の生活文化に関する資料・情報をもつ低湿地区遺跡として認識された。その後の試掘穴Na143を中心とした試掘調査においても、第14層がさらに複数の層位単位からなること、貝や骨を主体とする動物遺体群やシイ属の果実破片を主体とする植物遺体群が単位をなすこと、オキナワウラジロガシの果実をともなった編み物ザル(パーク)の出土などが確認された。さらに下位の第15層から爪形土器が、上位の第13層・第12層から容器や櫛といった木製品が出土するなど、低湿地区遺跡でしか保存が期待できない遺物の出土が相次いだ。また、第16層が低湿地区特有の泥炭層からなること、第6層も同様の泥炭層からなり、立ち株がそのまま埋没した埋没林を包含することが分かり、沼沢地環境の変化が記録されていることが明らかになってきた。一方、低湿地区遺跡ゆえに保存が良好な動植物遺体群が下部から上部に間断なく検出されるため、高精度な放射性炭素年代測定が実施され、とくに重要な第14層を中心に多数の年代値が得られた。以上のことから、試掘穴Na143における地質層序を低湿地区の模式地に設定することができる。したがって、伊礼原遺跡の統一的な層序確立の一翼を担うことになるであろう。

2. 試掘穴Na143と周辺の地質層序

平成9年3月18日での試掘調査およびその後の継続的な調査から、試掘穴Na143の地質層序は最上位の第1層から最下位の第17層の17層に区分された。これらのうち第1層と第2層は表土および客土からなり、新しい人為攪乱層である。第17層から第3層までが沼沢地成の堆積物からなっている。

第17層から第15層：第17層は灰白色シルトあるいは砂質シルトからなり、下位層との関係は明らかでない。第16層は暗褐色シルト質泥炭層からなり、木本類の根および貝類の破片を含む。最大で50cm前後の厚さとなり、泥炭層で特徴付けられるので、ここでは鍵層として下部泥炭層と呼ぶことにする。第15層は灰白色砂質シルトあるいは粘土層からなるが、場所によって砂層と暗褐色の有機質砂層との細かい互層に変化する。下部から爪形土器の破片が出土している。

第14層：礫層、砂層、動物遺体層、植物遺体層からなり、曾畑式土器の包含層である。模式的には、礫層、砂層、動物遺体群を含む砂礫層、「どんぐり塚」を含む有機質砂層の順に下位から上位へ累積するが、礫層の水平方向および垂直方向への堆積状態の変化が顕著である。動物遺体群はサラサバテイラやハイガイ、シャコガイが目立つ。「どんぐり塚」はいわゆるどんぐりと呼ぶブナ科果実の破片のみからなる。大半がシイ属果実の破片からなるが、オキナワウラジロガシ、ウラジロガシ、マテバシイ属などの果実破片ももっている。

第13層と第12層：第13層は植物遺体片を混在する白色砂層からなり、20~30cmと厚さが著しく変化する。第12層は白色砂層からなるが、しばしば有機質となり下位層と層相が類似する。両層とも水平・垂直方向への層相変化が著しく、海側で堆積した枝状あるいは塊状サンゴの砂礫からなるバーム堆積物および直上の一連の砂丘砂と同時堆積物かそれらの二次堆積物と考えられる。

第11層と第10層：第11層は暗褐色泥炭層からなり、根を張った多数の立ち株からなる埋没林を包含する。埋没林は木材組織が赤褐色を呈する単一の樹種からなるようであるが、樹種は不明である。灼熱消費量は最大で35%に達する。泥炭層で特徴付けられるので、ここでは前述した下部泥炭層に対して上部泥炭層と呼ぶことにする。第10層は白色の砂層からなるが、第11層の堆積環境を絶つように堆積し、水平方向の連続性が悪い。レンズ状に引き千切られており地震による攪乱の可能性が高い。

第9層から第3層：これら7層は泥層あるいは粘土質シルト層からなり、わずかな層相の違いから細分される。下部の第9層から第5層にはヌノメカワニナの貝殻が多数含まれる。灼熱消費量は下部の7%からしだいに第6層の25%に上昇し、上部では20%前後と安定する。

3. 放射性炭素年代の測定

放射性炭素年代測定は表に示したように17試料について行った。これらのうち試料番号にRH記号を付したものは国立歴史民俗博物館の縄文時代の高精度編年プロジェクトによるもので、米国のベータ社において測定されたものである。また、測定コード番号にNUTA 2が付された2試料は、名古屋大学年代測定総合研究センターにおいて測定されたもので、渡辺誠氏に託されたものである。

曾畑式土器が出土した第14層から採取した試料が最も多く、試料の種類も多岐にわたっている。植物遺体についてのものは、5010から5280炭素年が得られており、約5000から5300炭素年と見られる。土器に付着した炭化物すなわち「おこげ」については5090と5360炭素年が得られており、植物遺体についての年代と大きく違わない。動物遺体では、リュウキュウイノシシの骨が5040炭素年と植物遺体のそれに近似するのに対して、シャコガイの貝殻が5700炭素年と古くなっている。これは $\delta^{13}C$ が+2.5%と異常な値を示しているように海洋リザーバ効果によって相当古くなっていることが分かる。リュウキュウイノシシは、植物性食料に依存していた個体の可能性が高い。これらの結果から、曾畑式土器包含層である第14層の年代は、今のところ多少の幅をもって5000~5400炭素年としておきたい。

上位の第13層ないし第12層から出土した木製の容器のAMS法による年代は、ベータ社と名古屋大学ともに近似しており、4460ないし4480炭素年とみなせる。これは縄文時代中期中頃の年代である。また、第12層から出土した木製の櫛の歯先の年代は2580炭素年であり、縄文時代から弥生時代

への移行期のいわゆる縄文-弥生ミステリーゾーンあるいは2500年問題にかかる年代である。

第11層の埋没林の年代は1080と1140炭素年で近似しており、約1100炭素年とみなせる。この年代は本州での平安時代にあたる。最上位の第7層のヌノメカワニナの貝殻の年代が2460炭素年と下位の埋没林より大幅に古く測定されている。これは $\delta^{13}C$ が -7.5% と異常な値を示しているように、食性など何らかの原因によって相当古く測定されたものと考えることができ、この炭素年を用いることは控えなければならない。

ところで、試掘穴No.143の調査の前日の平成9年3月17日に実施された試掘穴No.144の調査では、低湿地区よりはるかに外側（海側）に形成されたサンゴ砂礫からなるバーム堆積物とその上位の砂丘砂が確認された（図版1の写真参照）。このサンゴ砂礫の上下2試料について放射性炭素年代測定を行った結果、上位のものが4780炭素年、下位のものが4790炭素年と近似した年代が得られた。 $\delta^{13}C$ から明らかなように海洋リザーバ効果によって相当古く測定されていると考えられ、単純に400年古く測定されたとみなすと、約4400炭素年と見積もられる。この年代は上述した木製の容器の年代に近似し、第13層および第12層の形成が外側のバームと続く砂丘形成と同時か二次的であることを示唆している。

表1 伊礼原遺跡の放射性炭素年代

トレンチ名	層位	試料番号	試料	測定法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代	校正暦年代 最上段は交点	測定 コード番号
No143	第7層	RH-45	ヌノメカワニナ	β 線	-7.5	2480 \pm 50	145cal BC 1 σ :190-70cal BC	Beta-111790
No143	第11層	RH-44	木材	β 線	-32.0	1140 \pm 60	885cal AD 1 σ :865-885cal AD	Beta-111789
No143	第11層	RH-229	木材 (No22)	β 線	-27.0	1080 \pm 60	980cal AD 1 σ :895-1010cal AD	Beta-142667
No143	第12-13層	RH-228	木製品 (櫛)	AMS	-29.6	2590 \pm 40	790cal BC 1 σ :805-780cal BC	Beta-142455
No143	第12-13層	RH-226	木製品 (容器)	AMS	-21.9	4480 \pm 50	3270,3240,3110cal BC 1 σ :3340-3080cal BC 3060-3040cal BC	Beta-152883
No143	第12-13層	5 (No1)	木製品 (容器)	AMS	-23.8	4460 \pm 30	3097cal BC 1 σ :3313-3232cal BC 3104-3083cal BC 3066-3031cal BC	NUTA2-2213
No143	第12-13層	RH-42	木炭	β 線	-28.4	4410 \pm 70	3030cal BC 1 σ :3100-2915cal BC	Beta-111787
No143	第14層	RH-43	アダン果実	AMS	-27.0	5280 \pm 60	4070cal BC 1 σ :4220-3995cal BC	Beta-111788
No143	第14層	RH-224	シイ属果実	AMS	-28.3	5010 \pm 40	3785cal BC 1 σ :3915-3880cal BC 3800-3720cal BC	Beta-142452
No143	第14層	RH-225	シイ属果実	AMS	-28.3	5120 \pm 60	3955cal BC 1 σ :3975-3925cal BC 3870-3805cal BC	Beta-142666
No143	第14層	RH-226	土器附着炭化物	AMS	-22.2	5360 \pm 40	4230cal BC 1 σ :4250-4210cal BC 4195-4160cal BC 4100-4065cal BC	Beta-142453
No143	第14層	RH-227	土器附着炭化物	AMS	-26.4	5090 \pm 40	3940cal BC 1 σ :3960-3915cal BC 3880-3800cal BC	Beta-142454
No143	第14層	RH-102	貝 (ジャコガイ)	β 線	2.5	5700 \pm 80	4165cal BC 1 σ :4245-4095cal BC	Beta-116064
No143	第14層	RH-103	骨 (リュウキュウイノシシ)	AMS	-21.6	5040 \pm 60	3800cal BC 1 σ :3945-3770cal BC	Beta-116065
No143	第14層	6 (No2)	果実 (ドングリ)	AMS	-28.0	5020 \pm 30	3885,3795cal BC 1 σ :3936-3877cal BC 3804-3764cal BC	NUTA2-2214
No144	サンゴ礁層	RH-49	サンゴ (No2)	β 線	-1.1	4780 \pm 70	3060cal BC 1 σ :3175-2940cal BC	Beta-111792
No144	サンゴ礁層	RH-50	サンゴ (No4)	β 線	-0.1	4790 \pm 70	3070cal BC 1 σ :3240-2970cal BC	Beta-111793



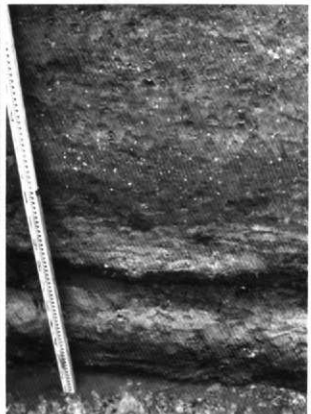
試掘穴No.127の地質断面、縄文時代のサンゴ礫層とその上位の砂丘砂層



試掘穴No.144の地質断面、下部のサンゴ礫層のサンゴ2試料(RH-49,50)を年代測定

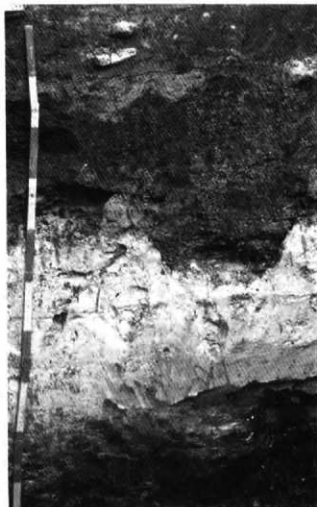


試掘穴No.143の地質断面、中部の試料採取層準が第Ⅻ層の年代測定試料



試掘穴No.143の地質断面、最下部に曾根式土器包含層(第Ⅹ層)、その上位に第Ⅺ層と泥炭・埋没林からなる第Ⅻ層

図版 1 伊礼原遺跡の地質層序と編年(1)層序断面



最下部に下部泥炭層（第XVI層）、それを覆う白色砂層（第XV層）、さらにそれを曾畑式土器を包含する「どんぐり塚」が覆う



中央部の黒色部が古代の上部泥炭層



上部泥炭層中の埋没林の根張り



「どんぐり塚」の断面、主にシイ属果実の破片からなる

図版2 伊礼原遺跡の地質層序と編年（2）試掘穴No.143



表



表



裏



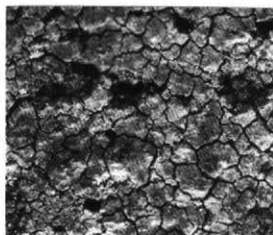
裏



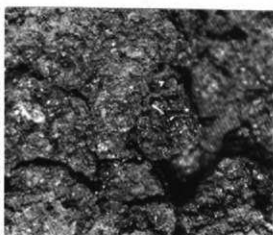
試料RH-226 曾畑式土器

試料RH-227 曾畑式土器

試料RH-228 椰の破片



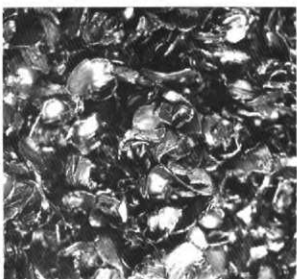
試料RH-226の附着炭化物



試料RH-227の附着炭化物



試料RH-224「どんぐり塚」果皮片



試料RH-225の「どんぐり塚」果皮片

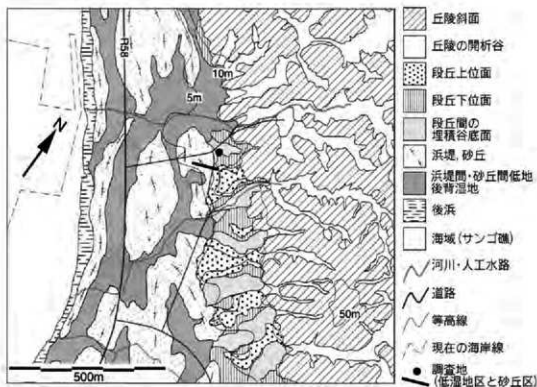
図版3 伊礼原遺跡の地質層序と編年(3)年代測定試料

II 伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と 中央区・南区にみられた古地震痕跡

松田 順一郎 (史跡 鴻池新田会所管理事務所)

1. はじめに

伊礼原遺跡の砂丘区東部で、丘陵ないしは段丘縁辺の斜面基部から、南西方の現在の海岸に向かって帯状に設定されたE-14~22トレンチ(第7図a)では、東から順に縄文時代中~晩期、弥生時代、古く時代の遺構・遺物が検出された。これらの分布を生じた原因や、ほとんど砂からなる遺構の基盤、その上位の堆積物累重中の埋没地形を明らかにするため、上述トレンチとより丘陵寄りのE-21・22、C-23・24トレンチで堆積物の累重を調査した。その際、遺跡北部、低湿地区の中央区・南区の境界付近で採取された掘り取り標本にみられる堆積物の累重も参考にした。この標本には堆積物の著しい変形構造がみとめられたので観察し、その成因を推測した。



第6図 伊礼原遺跡とその周辺の地形分類図。

1945年米軍撮影の空中写真にもとづく、等高線は国土地理院、2万5千分の1地形図による。

2. 伊礼原遺跡とその周辺の地形・地質条件

調査地周辺の空中写真の判読による地形分類を第6図に示す。調査地東側標高10m以上には第四系琉球石灰岩と、その中に鳥状に分布し同時異相をなすといわれる国頭礫層からなる丘陵地帯がひろがる。丘陵縁辺の尾根の末端は調査地付近では約20~50mで、南東方に高度を増す。開析谷は密に発達しており、段丘化した支谷底や主谷縁辺の平坦面が部分的にみとめられる。丘陵縁辺には沖繩島を北西南東に横切る桑江断層が知られており、沖積低地側との間に明瞭な変位がみとめられる。名取・影山(1987)によると、調査地北東側丘陵の基盤岩はおもに更新統琉球層群の嘉手納砂層(砂岩)からなり、部分的に北方の嘉手納飛行場方面から分布を拡げる那覇石灰岩、南東側には断層に沿って鮮新統島尻層群豊見城層の泥岩が分布する。これらの一部は、埋没残丘状あるいは丘陵側から尾根状に伸びて低地地下に伏在することが、調査地一帯で行われた考古学的試掘調査であきらかになっている(中村ほか 2005)。空中写真の判読では、調査地より南東側の丘陵縁辺、低地との間に丘陵尾根を延長した標高5~10mには、頂部が比較的平坦な段丘地形が分布し、丘陵開析谷よりも幅広い谷底面を挟む。段丘面は2、3段あるが、第6図では、谷底との比高は小さく、もっとも新しいと思われる面のみを低位として区分した。この段丘面は丘陵の高度とともに南東方に増し、国郭南東部では丘陵が鳥状の残丘ないしケルンバットとして分布する。

丘陵縁辺から現在の埋め立て地を除外した汀線まで、300~450mの幅で低地面がひろがる。この領域にはひじょうに緩やかな尾根状の高まりが汀線に平行ないしわずかに斜交して断続的に伸びる。これらは、縄文海進最盛期以後の海退とともに発達した浜堤ないしは海岸砂丘と考えられる。この一部には砂岩の上に乗るとされる琉球石灰岩の残丘がみとめられる。浜堤間、砂丘間低地の領域には浜堤を横切る人工的な排水路と耕作地で改変されたように見える所もある。図示していないが、汀線から磯縁までは、使用した空中写真では700~900mである。

調査地の内、砂丘区は砂丘と予想された高まりの頂部から後背湿地にあたり、低湿地区は、丘陵から段丘に隣接した奥行きのない谷の出口で、砂丘背後の後背湿地にあたる。調査時点の地表面の標高は砂丘区が低く約4m、低湿地区は5.5~6mであった。なお、調査地北側のナガサ川はかつて谷口から現在の水路より北側を西流していたといわれる。

3. 砂丘区堆積物の観察・分析方法

砂丘区での現地調査は2004年11月25日から12月1日まで行った。考古学的な調査終了面をさらに掘削していただき、E-19以西のトレンチでは、ほぼ連続して高さ約2mの断面を観察できた。現地では各トレンチで柱状断面図を作成し、層序対比は累重中で比較的連続のよい層理面と侵食面の対比によって行った。これらの垂直・水平の組み合わせによって認定できるほぼ同時期の起伏面とその構成堆積物の粒径組成・構造を確かめ、すでに知られた上部外浜から後浜、海浜砂丘およびその後背湿地の地形モデルと堆積作用の事例(たとえばFriedman 1961; Goldsmith 1978; Sunamura 1984; Sellwood 1986; Komar 1998; Hesp 1999など)を参照し、堆積物の累重過程と地形発達過程を復元した。

堆積物の粒径組成を確かめるため、粒度分析試料をE-14、18、19で採取した。C-23では後日、発掘担当者に採取していただき試料を得た。粒度分析は、細礫より粗い堆積物を篩別法で、砂は沈

降管粒度分析装置で、シルト以細の堆積物はピベット法で行った。沈降管での分析は Syvitski et al. (1991) を参考にして、Komar and Cui (1984) の計算式を用いた。ただし、後述する炭酸塩堆積物の量比に応じ、沈降管分析で得た生のデータを、堆積物密度を変えて計算し直し、粒径頻度分布を求めた。これらの結果得られた累積度数分布図から Folk and Ward (1957) にしたがって、平均粒径、淘汰度 (標準偏差)、分布の歪度を計算した。砂の生物骨格粒子と岩石起源の砂粒子の量比を調べるため、粒度分析試料は後に炭酸塩堆積物 (石灰岩をわずかに含む) を塩酸で溶解させて除去した試料を秤量して求めた。

4. 結果

1) 砂丘区 E-14 ~ 20, C-23 トレンチの堆積物と埋没地形

調査トレンチで観察された堆積物は極粗粒の中礫からシルト・サイズまでの造礁サンゴ骨格の破片、有孔虫殻、貝殻からなる生物源炭酸塩堆積物と、主に石英粒子からなる砂、若干の砂岩、石灰岩礫であった。これらの量比は場所によって異なる。遺構検出面付近の層準では、人為的に擾乱されるとともに、土壤生成の影響を受け、有機物と泥分を含む堆積物が累重上部全体に分布していた。また、各トレンチの堆積物の累重を示す柱状断面図と層序対比の結果を第7図cに示す。第7図bは柱状断面の位置を考古学的調査の断面図中に置いたものである。

2) 堆積物の累重と埋没地形

調査トレンチでもっとも古い堆積物は、E-19、20トレンチの EL.3.2~3.4m以下にみられる礫質砂で、E-19トレンチでは EL.2.7m以上から上方細粒化する。その上位には比較的細粒で淘汰のよい砂が、不明瞭だがおおむね現在の海側にわずかに傾く層理をなして載る。E-20トレンチで、この累重の EL.3.6m付近で縄文時代中期の土壌が検出された。E-19トレンチのさらに上位層準、EL.3.8mでは、縄文時代後期の住居跡が挟まれる。砂の累重は E-19、20トレンチともに EL.4.2m 付近までで、その最上部10数cmの垂直範囲には土壌化し、有機物と泥を含んで暗色を呈する。この範囲には縄文時代からグスク時代までの遺物が含まれる。また人為的に擾乱され、上面の層界は起伏をなす。この上位には砂質シルトないしシルト質砂からなる近世以後の耕作土層が載る。この堆積層は調査地西端の E-14トレンチまでほぼ連続して分布する。E-14トレンチでの下面は EL.3.4mである。

E-19トレンチの EL.3.8m付近、縄文時代後期の住居跡の層準以下の堆積物は E-18トレンチ東部でより西側の砂の層理で切られて途切れる。この侵食面には住居跡の石材や縄文時代後期の土器が挟まれていた。EL.3.8m以上の比較的細粒の砂は西方のやや粗い砂に漸移し、人為的な擾乱を受けた暗色部分は高度を上げ、上位の耕作土に切られて分布が途切れる。

E-20トレンチの北東方約60mの C-23トレンチでは、掘削底の EL.約3.0mから4.0mまでに、E-20トレンチの EL.4.1mまでと同様の累重がみられる。EL.4.0m以上の耕作土層に相当する垂直範囲では上方細粒化し、下位よりシルト質砂、暗色のシルト質砂、シルト質砂、カワナナの殻を含む生物擾乱の著しい砂質シルトが累重する。

上述した E-18トレンチ東部の侵食面は急な傾斜をなして掘削底以下に続く。E-18、17トレン

子のEL.2.4m以下には、水平かわずかに海側に傾く層理をなす礫質砂が分布する、この岩相は調査区西端部まで連続する。ところによってさらに粗粒な部分を含む。E-17、18トレンチでは、EL.2.4mの層準からEL.3.8~3.9mまでには、より細粒で上方粗粒化する礫質砂の累重がみとめられる。この累重では、下位の粗粒な礫質砂の直上では低角度で数~10m陸側に伸び、そこから傾斜を増して累重上部へと連続する層理が側方に繰り返され、堆積物が海側に付加されていたことを示す。そのもっとも新しい堆積物の海側下端部はE-15の東部EL.2.0m付近に延びる。累重の上面は波長10m前後、高さ数10cmまでの緩やかな起伏がみとめられ、これを比較的細粒の砂がEL.3.9~4mまで覆っている。起伏の頂部から陸側に延びる層理面は緩やかに陸側に傾く。側方の連続は比較的限られるが、E-15、16トレンチでも同様な堆積物の累重がみられる。

これらの側方に連続する層理面の連続を海浜の地形区分にあてはめると、海側の粗粒の礫質砂の上面をなす低い緩斜面は上部外浜の陸側縁部、その陸側でより急な斜面はビーチフェイス、その上端付近からさらに陸側に続く平坦面もしくは陸側に傾く緩傾斜面はバーム、この陸側端にできた浅い窪みはランネルとみなされる。堆積物がさらに沖側に付加されると相対的に粗粒なバーム堆積物の上位に陸側に形成される砂丘堆積物が前進して累重するはずである。このことからE-19~C-23の粗粒な礫質砂に載る細粒で淘汰のよい砂の堆積は、縄文時代後期の侵食面以前に発達していた砂丘堆積物と考えられる。E-18トレンチ以西でもバームの上面と考えられる層理面の上位に淘汰のよい砂が部分的に分布した。

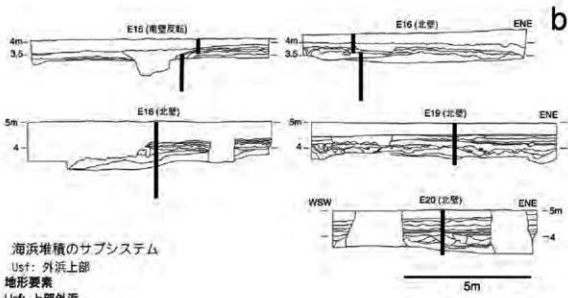
E-16、15トレンチの境界付近には、上述した海側への付加堆積物の累重を切った急な侵食面がみとめられる。侵食面はE-16トレンチの西端、EL.3.7mのグスク時代堆積層直下から落ち、E-15トレンチの西部、EL.2.5m付近で勾配を減じて、E-14トレンチのEL.2.4mで下位の粗粒な礫質砂上面に連続する。この層準で侵食の年代を示唆する弥生時代後期の土器片が出土した。E-14トレンチで、この侵食面の海側および上位EL.3.3mまでには、やや粗粒の礫質砂が累重する。累重下部・中部では数10cm~1.5mまでの間隔で海側に傾いて付加された浜堤状の上面起伏をなす層理、上部ではそれらを覆うほぼ水平の葉理・層理がみられる。その上面を切った窪みはE-14トレンチの東部にみられる。

上述した侵食面上端位置付近から東に、E-18トレンチのEL.4.2m層準までには土壌化して有機物・泥を含み、貝殻や弥生時代の遺物がまじる泥質砂礫からなる暗色の擾乱堆積層が厚さ20cm以下で分布する。また、この上位にはグスク時代の遺構検出面を下底とする土壌化し有機物に富み暗色を呈する礫質砂層が、E-16トレンチでは弥生時代の堆積層を切って載り、さらに西側のE-14トレンチ、EL.3.4m層準までに分布する。これらの堆積層はすでに述べた近世以後の耕作土層に上面を切られて覆われる。

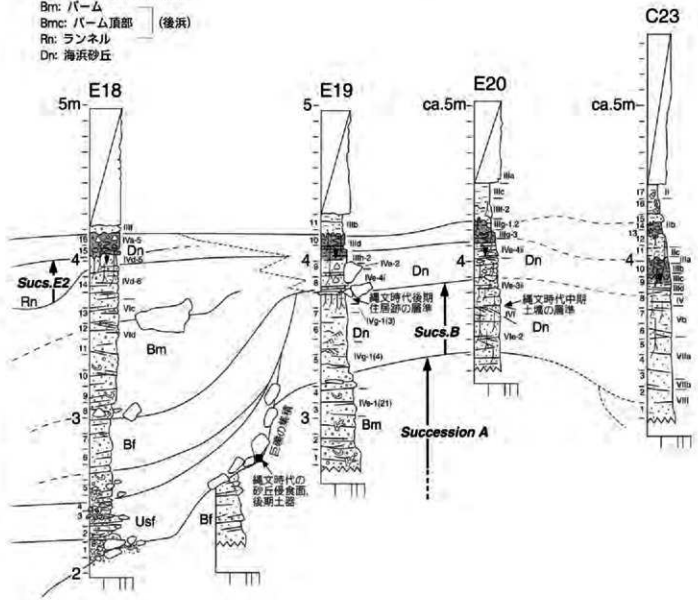
以上に述べたように調査トレンチは段丘基部から現在の海岸に向けて伸びるため、その断面は縄文海進最盛期の後に海側に前進して発達した海浜と砂丘地形の縦断面を表している。

3) 地形要素と堆積相

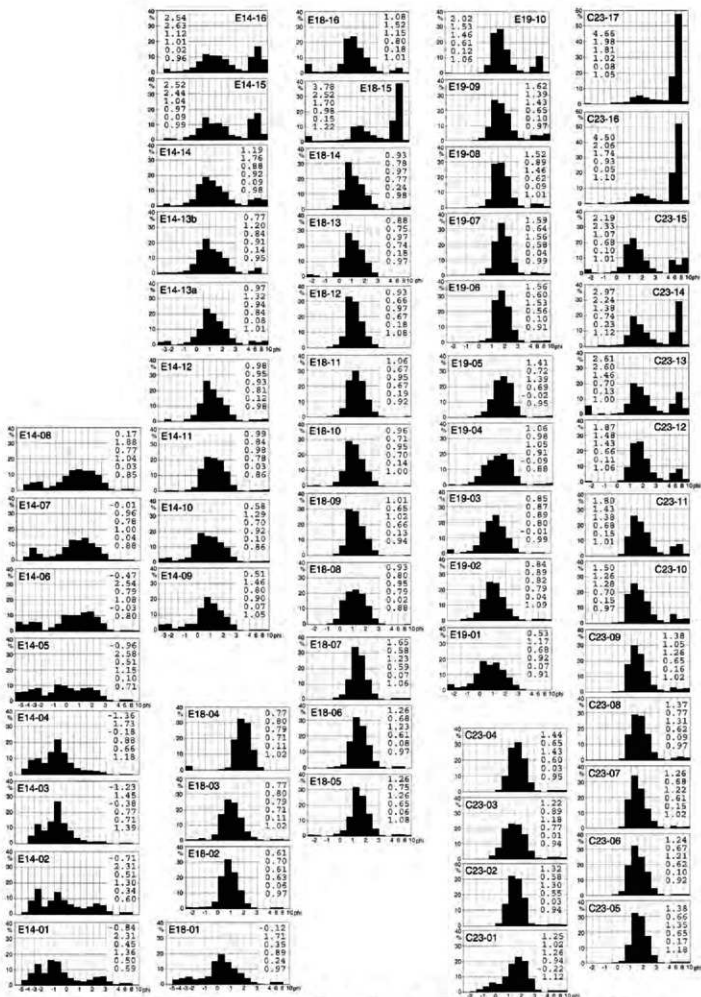
上述した累重中にみられる層界の側方への高度変化から想定される埋没地形の地形要素とそれを構成する堆積物の特徴を以下に述べる。第8図には採取試料の粒度分析結果のヒストグラム、第9



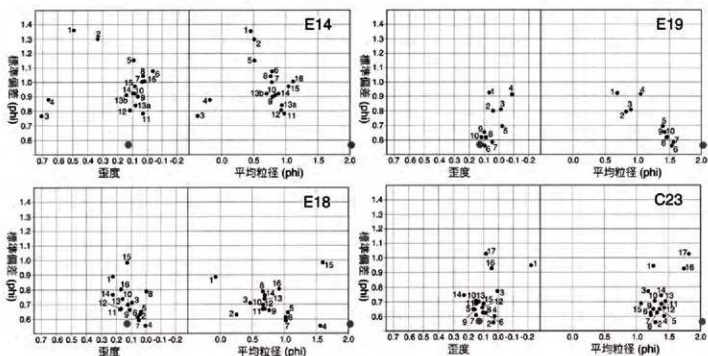
海浜堆積のサブシステム
 Usf: 外浜上部
 地形要素
 Usf: 上部外浜
 Bf: ビーチフェイス (前浜)
 Bm: パーム
 Bmc: パーム頂部 (後浜)
 Rn: ランネル
 Dn: 海浜砂丘



トレンチの柱状断面の位置図(b), 各トレンチの柱状断面図と層序対比(c).

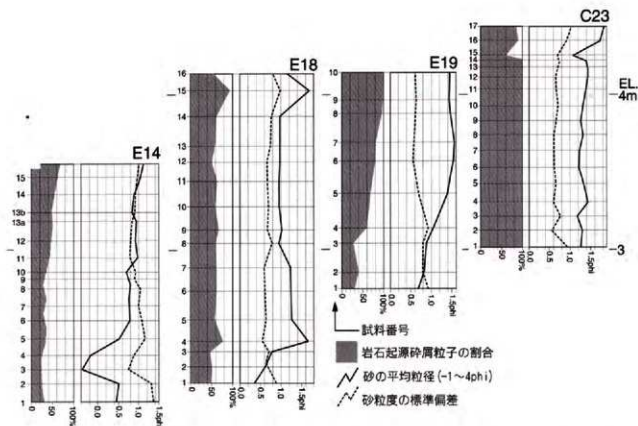


第 8 図 E-14, E-18, E-19, C-23 トレンチで採取した堆積物試料の粒径頻度分布図。
各ヒストグラム中の数値は上から、試料全体の平均粒径、標準偏差、砂のみの平均粒径、標準偏差、尖度。



第9図 粒度分析試料中の砂の平均粒径，標準偏差，歪度を比較した散布図

散布図中の灰色丸印は砂丘区の南方300m付近の盛土直下で採取した砂丘砂試料の統計値を示す。



第10図 砂に含まれる岩石起源砕屑粒子(ほとんど石英粒子)の百分比を示す多角形グラフ。

図にはその粒径頻度分布の統計値、第10図には鉱物質碎屑物の量比を柱状に示した。

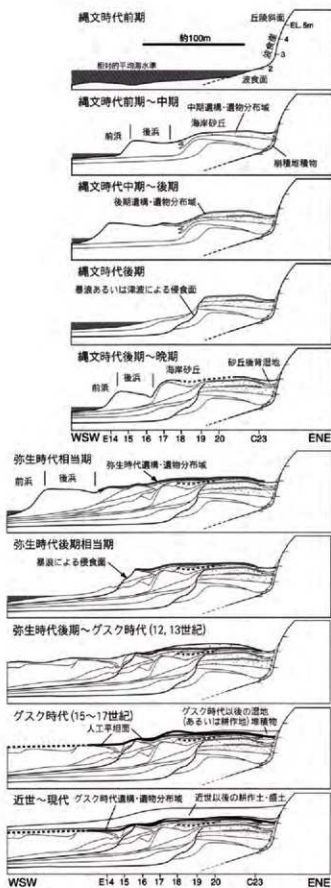
(1) 上部外浜 (U_{sf}): 沿岸の砕波帯から低潮位線までの範囲を指し、その陸側の最上部を想定するが、観察結果には潮間帯の下部に相当する部分も含まれるかもしれない。サンゴ礁海岸では、砕波帯となる礁縁から礁池の陸側汀線までの範囲に相当し、調査地はサンゴ礁に接していないが、わずかな勾配で礁池底に続く波食面をなすと考えられる。E-14~18トレンチの掘削底付近、EL.2.3 mまでの大礫以細の礫とひじょうに淘汰のわるい砂からなり、ほぼ水平か低角度で傾斜した層理をなす (試料E-14の1~5付近、E-18の1~4)。部分的に比較的淘汰のよい砂がレンズ状に挟まれる (試料E-18-4)。また、上部外浜の縁辺は粗粒堆積物が卓越するといわれ、累重中ではビーチフェイス堆積物と比較的明瞭に区分できるが、所によって漸移的に上方細粒化し、粗粒なビーチフェイス堆積物が累重する (試料E-14の1~11)。層理面がひじょうに低角度なため充分確認できないが、上位の前浜・後浜・海岸砂丘堆積物とともに時間横断的な累重をなすと思われる。

(2) ビーチフェイス (Bf) は低潮位線から満潮位線を越え、打ち上げ波が遡上・通過し、引き波が流下する、海側に傾く斜面を指し、その一部は次に述べるバームの海側斜面に重複する。堆積構造は海側に傾く平行層理とところによってそれらの楔形の切り合いなどとともに、部分的に急角度で落ち込む層理がみられた。斜面の勾配は堆積物の粒径に正比例し、波高に反比例するという研究例がある。このことは調査地の海浜における過去の堆積物の供給状況、沿岸地形発達条件、堆積・埋没の季節などによっても異なると考えられる。実際に調査地でビーチフェイスと考えられる層準の堆積物の粒径頻度分布はバームのそれに比べると細粒であり、淘汰度も一定しない (たとえばビーチフェイス堆積物と考えられる試料E-14の8~11と試料E-18の5~7、バーム堆積物と考えられる試料E-14の12~13bと試料E-18の8~14)。

(3) バーム (Bm)、バーム頂部 (Bmc)、ランネル (Rn): バームは汀線に直交する波に運ばれた砂礫が堆積して、ビーチフェイスの陸側に高まりをなす地形で、海側に傾く狭い急斜面と陸側に幅広く平坦面もしくはわずかに傾く斜面からなる。バーム表面が乾燥し、風に運ばれた砂が砂丘をつくる。両斜面の稜をなす境界部分をバーム頂部と呼ぶ。調査地では、バームの海側斜面はビーチフェイスの上部と連続した斜面をなすところが多い。海寄りでは海側に比較的急角度で傾く平行葉理・層理、陸寄りでは水平か低角度で陸側に傾く平行層理がみられた。また、バーム頂部では海側、陸側の層理が切り合うか、海側に傾く層理が卓越していた。バームを構成する堆積物は基本的にはビーチフェイスより粗粒で (たとえばE-16、17、18トレンチ)、粗粒砂を中心として比較的淘汰がわるく、しばしば礫を含む (試料E-19の2、3、4)。

ランネルはバーム陸側の斜面を流下した海水が集まり排水される溝状の凹地である。おおむね汀線とバーム頂部の伸びに平行する。この溝状凹地下底の横断面は幅30~90cm、深さ10~30cmの下に凸な円弧状で、これをトラフ型斜交層理・葉理をなす比較的粗粒な砂が充填していた。ランネルに接した陸側の領域にはおもに海側に緩やかに傾く葉理と、陸側に傾くプラナ形斜交層理をなす、極細粒の中礫以細の礫をわずかに含み粗粒砂を主とする砂 (試料E-18の12、13、14) が堆積する平坦面がみとめられた。これは暴浪時のビーチフェイスと考えられる。この堆積物はより陸側で次に述べる砂丘砂に漸移していた。

(4) 海岸砂丘 (Dn): 乾燥したビーチフェイスの上部とバームの表面では飛砂が生じ、その砂が



第11図 砂丘区Eラインにおける海浜、砂丘地形
変遷の模式図

陸側に堆積して砂丘を形成する。後浜では砂が植生にトラップされ初期の砂丘ができることもある。風成砂の堆積構造は風下側に傾く斜交葉理を内部構造とする平行層理、水平葉理をなす葉理のセットや、リップル葉理、風下側の崩落斜面にみられるセット高が比較的大きい斜交層理などがある。しかし、密な植生にトラップされたり、いったん吹き上がって降下するような場合には、ほとんど塊状をなす。調査地で比較的厚く砂丘砂が堆積したE-19、20、C-23トレンチでは不明瞭で相対的に粗粒な葉層が挟まれる部分でのみ識別できた。粒度分析の結果とその統計値の比較によると、調査地での砂丘砂は、平均粒径が $1.1 \sim 1.6 \phi$ 、標準偏差（淘汰度）が 0.8ϕ 以下で、至度には海浜砂と区別できる特徴的な数値は得られなかった（第9図）。砂丘区の南方300m付近の盛土直下で採取した砂丘砂試料はさらに平均粒径が小さく、淘汰もよい。連続した砂丘地形中の位置や堆積時期によって粒度組成が変化する可能性がある。砂の生物骨格粒子と岩石起源の鉱物質砂粒子の量比（第10図）を調べると、砂丘砂とみなされる試料では約60%以上の鉱物質粒子を含み、これは平均粒径の 1.1ϕ より細粒という特徴と対応する。またこれらの砂粒のほとんどは亜円～亜角状の石英粒子であった。なお、C-23トレンチ最下部の試料1は、上位の砂丘砂にくらべて淘汰がわるく、河成の砂質堆積物のなかでも淘汰のよい堆積物か湖沼性の堆積物である可能性がある。また同トレンチの累重EL. 4m付近から上位にみられる泥質堆積物に混じる砂粒も砂丘砂と同じ特徴を示す。

4) 推測される地形発達

第7図の柱状断面図からも読みとれるが、調査地における縄文時代前期から近現代にいたる10段階の地形断面と遺構・遺物分布域の範囲を第11図に示し、いくつかの課題について述べる。その際、調査地における微地形の発達段階を示すような堆積物の累重をサクセッションA～Fとし、第7図に示した。

(1) 段丘基部の試掘調査(中村ほか 2005)では、EL. 2mを堆積上面として、枝サンゴ礫と砂層がみとめられている。この高度は、E-14～18トレンチの掘削底でみとめられた、極粗粒の中礫までを含む上部外浜堆積物の高度に相当し、縄文時代前期の、おそらく曾畑式土器より古い時期(第7図のサクセッションAより下に相当)の海進最盛期には、汀線がこの地点に達しており、波食崖が生じたと考えられる。この試掘地点から約170m海寄りの試掘トレンチまでの間で、数10cm高まる場所があるが、枝サンゴ礫層・砂層の上面はEL.約1.2mまで低下して緩やかな斜面をなす。その後の海退期においてもほとんど同高度で緩やかな波食面が形成されていたと思われる。

(2) 曾畑式土器の時期をふくむ縄文時代前期の後半(第7図のサクセッションA～B)には、おそらく崖下の波食面を海浜砂が覆い始め、速やかに波食崖の前面に後浜の地形(バームないし浜堤)が発達し、その北への延長が低湿地区付近を閉塞していったと考えられる。さらに、E-19、20トレンチでの掘削底付近の、縄文時代中期の面縄前庭式土器をとまなう中期遺構検出面の30～40cm下で、後浜堆積物の上面がみとめられることから、前浜は少なくとも数10mは沖側に前進し、中期前半には砂丘が古い後浜上に発達し始めたであろう。

(3) 縄文時代中期から後期(サクセッションB)にはさらに砂丘堆積物が載る。その厚みは薄いが、後期遺構検出面下で根系密度の高い部分があり、中期より海側に植生が分布し、地表面が安定したことを示唆する。このようなことから、この時期には先のサクセッションにとまなう汀線がさらに前進し、砂丘砂の運搬領域の主要部分も移動したと思われる。

(4) 縄文時代後期(市来式、面縄東洞式土器の直後と思われる)に、E-19トレンチの中央部東寄りに大きな波力がおよび、住居を含む居住域が侵食された(サクセッションB～C)。筆者の調査中にE-14トレンチ西端から海側へ約6mの地点で、バックホウによって地表下約6mまでの掘削が行われ海成堆積物の下底までを垣みることができた。その結果、E-14トレンチの掘削底付近よりさらに2m深(EL. 0m付近)まで上部外浜の堆積物と考えられる粗粒の枝サンゴ礫や石灰岩礫が続き、この下底付近で中期の面縄前庭式土器が出土した。E-19トレンチの住居石材が散乱した侵食斜面はE-18トレンチの中央部からさらに急傾斜で落ちていたが、上述の侵食面に連続すると予想され中期の土器は、砂丘侵食時に下位層から洗われて礫層中に二次堆積したものであろう。外浜の堆積物をかなり深く侵食していることから、波浪作用限界深が大きい津波の可能性が高い(第11図ではこの侵食下面を浅く表現されているので注意)。この侵食で縄文時代後期の遺構、遺物分布域の海側は明瞭な境界で途切れることになった。侵食の後、海況はただちに回復し、侵食で生じた堆積空間を上部外浜の礫が充填し、波食崖とその前面には前浜が回復したと考えられる(サクセッションC～D下部に相当)。

(5) 縄文時代後期から晩期、さらに弥生時代相当期までは、後浜堆積物がEL. 3.7～3.9mまで累重すると、さらに20m前後の幅で前浜・後浜が前進するプロセスが3回かそれ以上繰り返される

(サクセッションD上部~E1、2に相当)。サクセッションD上部では後浜の累重とともに。さらに陸側のE-19、20トレンチでは、砂丘砂が堆積し、さらに東方のC-23グリットでは泥が堆積する後背湿地に変化しつつあった。サクセッションE1、2でも引き続き砂丘とその背後の堆積が続いたと考えられる。図版4右上の弥生時代の汀線はさらに沖側にあり、人間の活動域も広がったかもしれない。弥生時代の遺構・遺物を含む堆積層は有機物に富み暗色を呈するので人間活動と前後して土壌生成はそれまでより活発で地表は長期にわたって植生が発達していたと考えられる。人間活動はこれを攪乱して行われた。

(6) 弥生時代後期には、沖側に前進していた汀線から弥生人の活動域を含む後浜背後までの地形が暴浪で侵食される。E-15トレンチの東端で、それ以東のかつての後浜と前浜堆積物が侵食されて生じた侵食面がみとめられた。この侵食面をE-14までたどったEL.2.4mの層準で弥生時代後期の土器片が出土した。縄文時代後期の侵食崖より緩傾斜で低く、外浜の侵食も浅いので、大規模な暴浪によるものと思われる。この侵食によって弥生時代の遺構・遺物分布域の西縁にも明瞭な境界が生じた。

(7) 弥生時代からグスク時代(12・13世紀)の期間に、侵食された部分は再び前浜・後浜の地形が回復しさらに汀線が沖側に移動して、調査区より西にも土壌化した地表をともなう陸域がひろがる(サクセッションFに相当)。この時期にはより東側陸域には砂丘砂が堆積した可能性がある。さらに東のC-23トレンチの泥に含まれる砂が砂丘砂と判断されたためである。

(8) グスク時代(15~17世紀)の遺構・遺物を含む堆積層はかなり人為的に攪乱された堆積物で、その下面は人工的な改変面ととらえられる。ただし、E-17、18グリットでは弥生時代の堆積層が残存しており、それを覆う堆積物の高まりがあったと想像される。その高まりより東の低所では、人為的にそれまでの低湿地に湛水(かつ排水)する造作が施され、耕作地となったと思われる。

(9) 近世以後に上述したE-17、18の高まりが削平され、東ではE-19以東、西ではE-16以西にグスク時代以下の堆積層が残存したと考えられる。

以下、なお疑問の残ることについて述べる。(1) ふつう波の進入が活発な前浜に続く後浜では、暴浪時の堆積作用で発達する浜堤地形が卓越するが、調査地付近ではむしろ小規模なビーチフェイスとバームの組み合わせが連続する。沖側に波力を緩和する地形が存在するか、調査地付近がより大きな海浜の一部で、波力の及びにくく、海浜漂砂の末端に位置した可能性がある。(2) サクセッションFでは、E-14トレンチで見るとかぎりでは、堆積物は粗粒で淘汰がわるい、前浜・後浜の微地形規模が小さくなる。つまり、比較的波力の大きい時にのみ堆積が進むという状況が想定される。沖側にバリアが発達した可能性がある。ビーチフェイス堆積物の粗粒化はそれ以前のサクセッションEの上部からみとめられる。(3) 縄文海進最盛期以後の潮間帯下部から潮下帯の堆積物と考えられる上部外浜の粗粒堆積物が、緩やかに沖側に傾きつつも、EL.2m付近にあり、現在の海水準に対してかなり高い。これらの粗粒堆積物を含めてビーチフェイスとすると、上述したバームは定義上、暴浪時の堆積物からなる浜堤に相当するが、暴浪で運搬される粗粒堆積物が少ない。今後現世の海浜地形についても観察し、あり得べき微地形とともに、地盤の隆起についても検討する必要がある。

5) 低湿地区、中央区・南区でみられた古地震痕跡

砂丘区Eライン周辺の古地形推測の参考に、低湿地区、中央区・南区の近接する2か所で採取された断面の剥ぎ取り標本を観察したところ著しい変形構造がみとめられた。これらの標本の写真を図版4a、bに、標本採取位置は第7図aに示す。標本aは中央区南断面、標本bは南区東断面で採取され、互いに直交する面をなす。以下に変形構造の特徴を観察し、成因について検討した結果を示す。なお低湿地区における岩相層序については他節で記載されるので、ここでは省略し、おもに図版4a、b間のローマ数字で示される堆積層名を用い説明する。

6) 剥ぎ取り標本にみられる変形構造

標本aのEL.3.6m付近で、VII層最上部の明色の粘土質シルト層上面が、幅25cm以下、深さ10cm以下の下に凸な円弧が連続ないしそれらが切り合ったような形状を荷重痕をなす。また、円弧の両端は上位層中に引きずり上げられたように短くのび曲がった流線をなす。上位のカワニナの殻が多数含まれるVII層内でも不明瞭だが同様の構造が認められる。これらの特徴は、より上位のVI層ではほとんど見えない。変形の垂直範囲を図版4aにDZ1として黒帯で示した。DZ1下部とほぼ同じ構造がEL.3m付近のXI層ないしX層付近から上方に、DZ1下端までみられDZ2として示した。DZ1の下底がDZ2の上端部の構造をさらに変形ないし切っていると考えられる。標本b上端左寄りに、周囲の葉理を切って下方に半円形の流線パターンシみられるが、DZ2下部の荷重痕と考えられる。

標本a、b最下部のXVI層は、水平葉理をなすが、aでは左から右に向かって反り上がる葉理のせん断面が数か所で見られる。同層上より約15cmの範囲、右寄りでは、右側で反り上がったせん断面が順次右側のせん断面で切られている。せん断面は層の上面を越えて不明瞭になる。上位XVI層内の葉理が、下位層とともに弱くゆるやかに凸な円弧状に同時に曲がったように見える。同層の左寄りにはさらにXIV層の礫が右方向に押し込まれたように集合する部分がみられる。同層は樹木の根の影響もあるが全体に攪乱された印象が強い。下部の明色部分とその直上・直下は長径が約10cm以下のブロックをなして散乱し、中部のシイの実破片を含む堆積層と混ざり合っている。両者の層界は凹凸に富む。シイの実の層も、著しく散乱しており、初生のもと考えられる葉理を残した幅・長さ数cmのブロック状、あるいは板状のシイのみの集中部分が標本左寄りに分布し、右寄りでは細かく分散している。シイの実が上位層中にも散乱し、この上面も凹凸に富む。XIV層の中部では、40~50cmの水平範囲で、左の堆積物がより右側の堆積物の上に引きずられ一部に載るようなパターンがみとめられる。XIV層最上部の礫の散布部分の間を埋めて、XIII層が載る。同層はaではXI層以下に伸びた根の痕跡で不明瞭だが、標本bでは初生の葉理を残し、下方から連続的に続く変形変形範囲の上端と考えられる。標本bではXIV層の礫単に大型の大礫礫以細、中粒の中礫までを主とする礫が集中している。礫の最大長軸とそれに直交する最大長軸をそれぞれa軸、b軸とし、これらを共有する面をab面と呼ぶ。これらの礫のa軸の多くは標本の左方に低く傾いている。またEL.3m付近までのab面は標本手前高く積み重なる覆瓦構造をなす部分が多い。標本手前に低い部分もみとめられる。a軸が20cmを越す大型の大礫にはab面が垂直に立ち上がっているものもある。XIV層上面までは標本の左右にシイの実の層とその上位層に相当する堆積物がみられ、それら

を割るようなかたちで礫が分布する。右方の堆積物は初生の葉理を残し、礫との境界は明瞭だが、葉理は傾いているので、大きな堆積物のブロックかと思われる。左方の堆積物は葉理はなく、中礫大までのブロックが散乱している。標本右端、EL.2.3mには丸いピット状の荷重痕が認められ、左方の細粒堆積物中には、写真では見えないが、シイの実を含む堆積物が上方に脈状に割込んでいる部分があった。以上の一連の変形がみられる垂直範囲をDZ3とした。この上端は標本aでは不明瞭で、変形ゾーン上端部を破線で示したが、標本bでは上位に葉理をなす砂層が載り明瞭である。

DZ1, 2は地震動による変形構造と考えられる。Matsuda (2000)によると、おもに水底下の水分を含む泥質堆積物を想定すると、上部の堆積物粒子はそれらの間隙に水を含み、地震動に即時に応答して流動するが、下方へは流動性や可塑性を減じる。そのため、変形ゾーン中には、上位より流動、含水塑性変形、脆性破壊がそれぞれ起こる垂直範囲が生じる。実際には変形ゾーン中の堆積物の物性は、深度に応じて連続的に変化することはほとんどなく、層界面が不連続面になり、変形のパターンや強度が少し変化することが多い。含水塑性変形する層準の下底付近では下に凸な荷重痕がほとんどの場合にみられる。また加速度や方向が変化する地震動のせん断応力に対し、レオロジカルな応答によっては含水塑性変形と脆性破壊の両方が同じ堆積物で生じることがある。地震イベントの年代は変形ゾーン上端あるいは直上の堆積物の年代に相当する。

複数の地震イベントによる変形ゾーンが連続して重なった場合は、上述した変形ゾーン中の垂直的な変形様式の配列を見極め、それぞれの変形ゾーンに区分できる。剥ぎ取り標本では、DZ2の上端はDZ1の変形で切られていた。

水底下の泥質堆積物の変形構造と地震強度、振動特性の関係は実験と現世地震のデータの検討が行われていないので、未だ不明なことが多い。「東京都による震度階級表」(宇佐美1990所収)の、震度4(中震): プール、池等の水面がかなりゆれ、池の水がにごることもある、震度5(強震-弱): 池や湖の水が泥が攪拌され水がにごる。池・河川・湖が波立って岸に波のあとが残る、震度5(強震-強): 池・プールの水が大きく溢れ出る。震度6(烈震): 水面の大きな波が立つ。プール・池の水が躍って飛び出す、という記載から経験的に判断すると、泥質堆積物の変形は震度5以上の地震によって生じる可能性が高い。

DZ3については、いくつかの異なる堆積層を含むXIV層全体と、XV層、XVI層上部が同時に変形した印象がある。何らかの物体が堆積物中で動き回り、厚さ1mあまりの堆積物を変形させる状況は想像しがたい。大きくは東西断面の標本aで東方へ物質移動がみとめられるので、南北断面の標本bの礫の配向は東方向に礫が押されて積み上がったため生じたと考えられる。細粒堆積物では粘塑性変形と液状化が、最下部にあたるXV、XVI層上部では脆性破壊が生じ垂直的な変形様式の組み合わせとみなせる。また、中央で極粗粒の中礫で細の礫がDZ3の上端に向かって細粒化していることから、礫層中で液状化が起こり、水とともに吹き上がった可能性が高い。以上の特徴はDZ3の変形が地震動で生じた可能性が高いことを示す。

7) 景遺構保存処理標本の側面にみられる変形構造

図版4cは景遺構保存処理標本の側面(南北方向)にみられる変形構造で、図版4a、b間に枠で示した層準に相当する。シイの実層の含水塑性変形を示しており、この堆積物中に設置された景

も変形していた。右下のXV層堆積物の上部は左右から押されて山形に変形し、その上面で引きちぎられた第15層堆積物がシイの実層中に浮いている。また、数cm以下の細かいブロックとして散乱している。その散乱した部分 (B) の右方からの流れが、左方からの流れの上に載った状況が読み取れる。左方からの流れはシイの実層の下部を上下 (Au, Al) に分けている。写真最上部では、細粒のシイの実破片を含むCが右方からのB堆積物に凸入している。

8) 古地震の年代

上述した各変形ゾーンをつくった古地震の年代は、DZ1、DZ2についてはその上端部が不明瞭か、上位の構造で切られているため不確かである。出土遺物から、前者はグスク時代以後で近世の可能性が高い。沖縄島では「球陽」に、1665年、1760年、1768年、1858年の被害地震の記載があるが(琉球大学理学部中村衛研究室HP)、どの地震かを特定しがたい。後者はVIII層に平安時代の遺物が含まれるので、おそらくそれ以後グスク時代までの古地震が想定される。DZ3は上端部直上で出土した面縄前庭式土器から縄文時代中期後半の地震によると推定される。古地震痕跡の編年には年代わかるの検出事例がさらに必要となる。

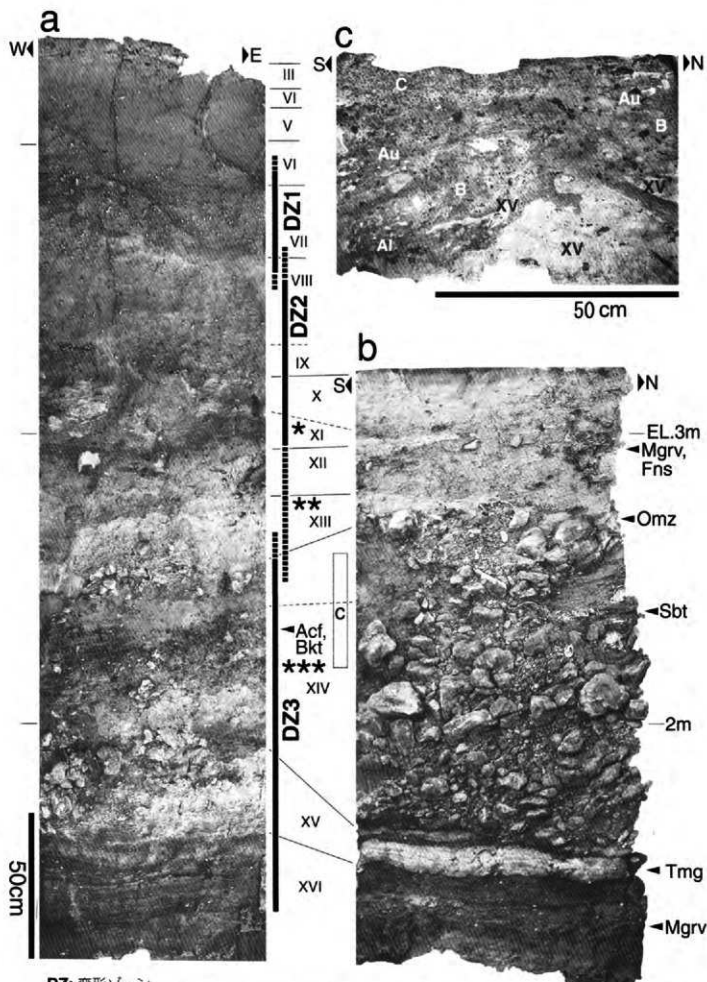
謝 辞

学ぶことの多かった伊礼原遺跡の調査に招いていただき、多くの御教示を賜った北谷町教育委員会の中村憲、東門研治の両氏をはじめ関係者の方々にお礼申し上げます。関西大学地理学教室の恩師木庭元晴教授には沖縄島の沖積低地について御教示を賜り、同門の辻康男氏には現地調査の作業を補助していただいた。

参考・引用文献

- 中村憲・東門研治・島袋春美 (2005) 「キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—」北谷町文化財調査報告書 第25集。北谷町教育委員会, pp.104-105.
- 名取博夫・影山邦夫 (1987) 日本石油・ガス田図「沖縄本島中・南部」(5万分の1)。地質調査所, 『日本地質図大系』編集委員会編 (1995) 『日本地質図大系, 九州地方』, 朝倉書店, pp.112-113.
- 琉球大学理学部中村衛研究室HP 「沖縄の歴史地震」 <http://seis.sci.u-ryukyu.ac.jp/hazard/large-eq/history.html>
- Goldsmith, V. (1978) Coastal dunes. In Davis, R.A. (ed.) *Coastal Sedimentary Environments*. Springer, pp.171-235.
- Folk, R.L. and Ward, W.C. (1957) Brazos River bar: a study in the significance of grain size parameters. *Journal of Sedimentary Petrology*, 27, 3-26.
- Friedman, G.M. (1961) Distinction between dune, beach, and river sands from their textural characteristics. *Journal of Sedimentary Petrology*, 31, 514-529.
- Hesp, P.A. (1989) The beach backshore and beyond. In Short, A.D. (ed.) *Handbook of Beach and Shoreface Morphodynamics*. Wiley, pp.145-169.
- Komar, P.D. and Cui, B. (1984) The analysis of grain-size measurements by sieving and settling tube

- techniques. *Journal of Sedimentary Petrology*, 54, 603-614.
- Komar, P.D. (1998) *Beach Processes and Sedimentation*. Prentice Hall. pp.45-75, 270-335.
- Matsuda, J.-i. (2000) Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan. *Sedimentary Geology*, 135 (99-116).
- Sellwood, B.W. (1986) Shallow-marine Carbonate Environments. In Reading, H.G. (ed.) *Sedimentary Environments and Facies*. Blackwell Science, pp.283-342.
- Sunamura, T. (1984) Quantitative prediction of beach-face slope. *Geological Society of America Bulletin*, 95, 242-245.
- Syvitski, J.P.M., Asprey, K.W., and Clattenburg, D.A. (1991) Principles, design, and calibration of settling tubes. In Syvitski, J.P.M. (ed.) *Principles, Methods, and Application of Particle Size Analysis*. Cambridge University Press, New York, pp. 45-63.



DZ: 変形ゾーン

- ★ 1140±60 yrs.BP (Beta-111789) Acf,Bkt: シイの実破片, 筈 Mgrv: マングローブ樹根
- ★★ 4480±50 yrs.BP (Beta-152883) Fns: フェンサ下層式土器 Omz: 面縄前庭式土器
- ★★★ 5280±60 yrs.BP (Beta-111788) Sbt: 曾畑式土器 Tmg: 爪形文土器

図版4 中央区・南区の断面剥ぎ取り標本と炭遺構の保存処理標本の側面にみられる変形構造

第IV章 調査の方法と成果

I 低湿地区

第1節 調査の方法

低湿地区は平成9年3月18日に発見された試掘穴No143を中心に包含する形でグリットをもうけ、ウーチヌカー湧水の小川に沿って設定したところほぼ東西南北の方向を示し、東西に10m、南北に7mの大きさになった。四壁面の方に試掘穴No143の壁面が重なるように南面に設定した。

第2節 層 序

中央区の層序を基本として、東区、西区、南区、北区、北東区の層序を確定した。基本層序は17層であるが、各層の層序は11枚、5枚、4枚に細分できる(第13図)。

これらの層序を大別すると3枚に区分できる。第2層から第8層の背後から流入した粘性のある褐色土壌の堆積層で、カワニナを含み均等な層順を示している。有機質含量も安定しているという分析結果や、第2d層、第3b層は水田として判断できる人為的な痕跡が強い層である。第8層から以下は水没した層序で、第13層を境として上下に区分できる。第8層から第13層は第9層で特徴的な樹根層がみられウーチヌカーを源とする小川が流れ堆積、流失を繰り返しながら形成された。特に第13層は精練された石英細砂で、一時火山灰の可能性も考えられたが、分析の結果、上流から集められ小川の流路によって精練、形成されているものであることが判断できた。

第14層から第17層までが下層の水没層である。特に第14層は礫層で粗密はあるもののほぼ発掘区全域に確認され、一つのキー層として確認できた。下位には灰色の細砂層の間層を挟んでさらに古い樹木を含む有機質層が3枚互層をなして形成されていたが、文化遺物は確認できなかった。

第1層 現在の腐植土層で厚さ約16cm。

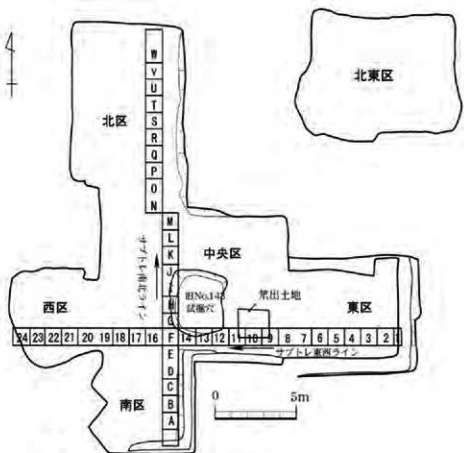
第2層 黄褐色混雑土壌の客土。厚さ約84cm。

上位には米軍による敷設の一部のアスファルトやコーラル(石灰岩破砕礫)、産業廃棄物がある。大半は採取後に行われた造成時に持ち込まれたもので、調査区全域に人頭大の石灰岩礫を多く含む混雑淡黄褐色土(コーラル)や赤土を主体とする。施設用平坦地確保の為周辺丘陵部削平の土砂を持ち込んだ客土と判断される。

第3層 褐色土壌。旧表土で上面に耕作の畝間が北側で確認できた。

3a層 褐色土層 厚さ約10~20cm

戦前の表土で、当時の水田床土と思われる。中央区の北側では上面では畝の畝跡が検出されている。



第12図 グリット設定図 (低湿地区)

- 3 b 層 灰色砂層 厚さ約20~40cm
- 第4層 暗灰色粘質土層 厚さ約26cm
- 第5層 暗灰緑色泥質土層 厚さ約22cm カワニナが散在する。
- 第6層 暗黒褐色粘質土層 厚さ約14cm カワニナが多く、下面に黄褐色の鉄分が水平にみられる。暗褐色でやや砂質が多い。カワニナが多く目につく。同層の下面レベルから上層の堆積層は均一の層順で調査区の全域にみられる。
- 第7層 暗灰色泥質土層 厚さ約18cm
暗褐色で各上層の土質に比較してキメ細かい粘性のある泥質である。カワニナも少量含む。調査区全域に20~25cmの厚さで堆積している。色調や粘性の強弱で a~d 層の4つに細分した。遺物の出土量は上層に比較してやや多く、グスク土器が主体であるが流れ込みによるものと判断される。
- 第8層 黒褐色泥質土層 厚さ約50cm サンプル
灰黒色で調査区全域に厚く堆積する。酸化鉱物を多量に含み暗褐色が強い。カワニナの量はやや多く目につく。出土遺物はグスク土器が主体で第7層に比べ多い。面縄前庭式土器の胴部破片が散見されるが、いずれも流れ込みと判断される。
- 第9層 第8層と第10層の互層 厚さ約12cm。
灰色であるがいずれも砂質が強い。カワニナも散見されるが少量で、同層以下ではカワニナは確認できない。第9層は調査区全域に確認できる。遺物にはグスク土器や面縄前庭式土器等が少量みられる。植物遺存体の量はやや多い。
- 第10層 灰白色細砂層 厚さ約20~30cmである。白色の細砂層でどの壁面でも確認できるが部分的に消える無遺物層である。
- 第11層 暗茶褐色泥炭層 厚さは東側で44cm、西側では18cmと薄い 樹根層
泥質・砂質の2つに細分できる。泥質は暗褐色を呈し、サキシマスオウノキ、サガリバナを主体とする樹木の植生層である。遺物はそのほとんどが植物遺体で、人口遺物は極めて少ない。その植生からマングローブ林の内陸側後背地に接する湿地であったことが伺われる。
砂質は後述する第12層の上面に部分的に5~10cmの厚さで泥質下に堆積している。土質は細砂で泥質と同じく褐色を呈する。遺物は上層から延びる樹根を中心とする植物遺体も出土するが、人口遺物も目につく。土器では「くびれ平底土器」の砂丘形土器を単独に出土する。出土状況から同時期のプライマリーな層と判断される。
- 第12層 淡褐色混砂泥炭層 厚さ約20cm
- 第13層 灰色石英細砂層 厚さ約20~60cm ガラス質
灰白色を基調とし、全体的に堆積のうねりがあり、所により白色、灰色、褐色等の差異がみられ、土質も全体的にシルト質であるが部分的に1mm大の粗砂の堆積する所や粘性の強い所がある。海砂はみられない。全体的に一見、単調にみえるが出土遺物に差異がみられ、同層上下面を中心に出土する土器に曾畑式土器、面縄前庭式土器、仲泊式土器、面縄東洞式土器、仲原式土器、フェンサ下層の土器等が混在している。

第14層 暗灰褐色泥礫泥質砂層 厚さ約22~132cm 文化層(曾畑層)

泥礫砂層は南区と西区で約1.30mと厚く、中央区、東区側へ薄くなり、北区、北東区へは広がっていない。南区、西区では厚さ約1.3mと厚く、中央区の南西角から東側へは80~40cmと随時薄くなる。東区ではさらに薄くなり、東角では人頭大の礫や拳大の礫がまばらになる。中央区の北東側では3重の人頭大の礫群が北東角では途切れる。南西側では南区と同様な1.3mの厚みが随時薄くなり中頃で途切れ、拳大の礫が東西に帯状にみられるが幅約50cmで途切れる。これらの礫層の広がりは東区東南角から中央区北西角のラインを境として北側になく、南側方向へ厚みを増していく。さらに南側のT.P.No.11やB-23試掘穴でも人頭大の礫群が確認されているからその当たりまでは広がる事が確認できる。これら礫層は南区東壁面や西区南壁面での断面観察によると2枚の間層をもつ3枚の礫層に大別できる。①上位礫層は拳大の石灰岩半円礫で厚さ10~15cmで1~3重の堆積で中央部南壁面東角まで確認できるが、それから東側では1重でまばらである。その下位にある間層の緑灰色細砂層は厚さ5~30cmで調査区全域にみられる。

試掘調査の結果から①の礫層から曾畑式土器の層と判断していたが、特に東区の東側では面縄前庭式土器や面縄東洞式土器がやや多く出土したことや、中央区の東側では縄文晩期相当期の土器が出土することから発掘時から問題視してきた。後に南区のこの礫層上面で石斧3点や板状木製破片とともに面縄前庭式土器が数点検出された。東よりでは2/3ほど露出した木製容器が発見された。横倒しの木製容器の内部には①の礫群が流入していて、底面はその下位であった。それからやや北側でサブトレンチを掘り下げた際も長さ約1.4mの建築材と判断された針葉樹も①の礫層下位の緑灰色細砂層からの出土であった。

②の礫層は人頭大の礫を混在する拳大の石灰岩半円礫層で厚さ20~80cmである。この人頭大の礫は層中の中位から下位に位置し、まばらではあるが礫層の最も北側縁まで広がっている。この人頭大の礫層の広がりと人工遺物の広がりは重なっていた。人頭大の礫は石灰岩礫だけでなく、同大の石英核礫や更砂岩、粗板状の石灰岩、その他の石製品はこのレベルに存在していた。中央区南東隅近くで検出された竹製笊の上位やその周辺で人頭大の礫があり、不自然な点在状況から人為的な様相を想起した。特にこの礫層レベルを掘り下げた下位に南区から中央区南壁面、竹製笊周辺、東区南壁面西半分の範囲に破砕されたシイの実がレンズ状や溝状に堆積した状態が確認できた。それらの下位の混貝砂層の遺物群は基本的に曾畑式土器に伴うものと判断された。シイの実層はその下位にはまばらにオキナワウラジログシヤや完形なシイの実の確認されたが、その上位には確認できなかった。同位レベルの混貝砂層はこの礫層間に挟まれた様相で下位の2枚目の間層である緑灰シルト層まで堆積していた。特に南区のサブトレンチと中央区の間に貝層やイノシシ骨・魚骨が集中していて、この周辺に石製品が多かった。下位の③の鶏卵大の礫層上面が調理場の空間として利用されたと想定した。2枚目の間層である緑灰色シルト層の厚さは20~40cmあり、文化層である。

③の礫層は鶏卵大の石灰岩半円礫で厚さ20~40cmである。この礫層は均一の大きさで緻密で基本的に無遺物層ある。西区の西側から乗り上がるような堆積状況があり、しかもその

上位に幅約60cm、厚さ約15cmほどの板状の樹木が横たわっていた。表面をみると海中に生息する木食い虫の穴が多数みられることから明らかに流木と判断できた。しかし同レベルの礫層内にはサンゴ礫等の海に関係する遺物は確認できなかった。この鶏卵大の礫層は中央区西半分までは緻密に堆積している。

よって、この第14層の礫層は①の上位の礫群と1枚目の緑灰色細砂層は基本的に縄文期中期相当期の層で、上流側の中央区東側や東区東側は上下を明確に遮断する礫層がなく後世の遺物が流水やカニ穴等で下降したと判断できる。このような遺物はポットホール状な穴から出土していることでも明白である。②の礫層は基本的に人頭大の礫層を基準として自然状況では点在しない石質があり、しかも石製品として利用された痕跡を含む礫群であることから曾畑層の調理場として想定できる。③の礫層は水圧によって堆積した礫群である。直接、海に関係するものがないことなどから、北側に存在する河川のナガサガーとの関係を考慮した方が良いのであろうか。

第15層 暗灰色砂層 厚さ22～28cm

均一な細砂層で青灰色（オリーブ灰色）で調査区全域に存在する。この層の上面で爪形文土器が南区や北区で出土する。特に北区では土器の約1/3ほどの大きさで、数個体分の破片が2m四方の拡がりで見出された。その中には1m四方に炭の拡がりがあり、火を使用した様な形状が確認された。最下層の文化層である。

この層の下位に中央区の南側壁面中央部や北区の③の礫層が途切れる部分から北側への上がるように火山性の軽石層が薄く堆積している。黄褐色で南から北側へ小粒になりながらみられる。爪形文土器が点在する近くまで存在していた。

第16層 暗茶褐色泥炭層 数枚の互層をなす。

上層の暗灰色細砂層と有機質を多量に含む褐色層が南区の東壁面では厚さ15cmの厚さで互層をなしている。しかし、西区の南壁面では黒みを増し黒褐色で大型な樹木も含んでいる。無遺物層である。

第17層 灰色細砂層 厚さ50cmまで確認したがその下位は未確認である。

緑灰シルト（オリーブ灰色）層である。

各地区の層序

東区

- 第1層 表土層
- 第2層 a コーラル
b 褐色土 (米軍客土)
- 第3層 旧表土層 淡灰褐色粘質土
a～kまで11に細分
- 第4層 暗褐色粘質土層
- 第5層 暗灰緑色粘質土層
a～dまで4に細分
- 第6層 黒褐色粘質土層
a～eまで5に細分
- 第7層 淡暗灰色粘質土層
a～bまで2に細分
- 第8層 暗灰色粘質土層
- 第9層 黒灰色粘質土層
第9層と第10層の互層をなす部分あり
- 第10層 灰色粘質砂層 (第一文化層)
- 第11層 暗茶褐色泥炭層 樹根層
- 第12層 淡褐色泥炭層
- 第13層 灰色砂層 (石英層)
- 第14層 暗黒褐色混礫砂層 曾畑層 第二文化層
a 暗褐色シルト層
b 礫層
c 暗褐色シルト層
d シイの実層
e 貝層
- 第15層 暗灰色砂層
- 第16層 暗茶褐色泥炭層
- 第17層 灰色シルト層

中央区

- 第1層 表土層
- 第2層 a コーラル
b 褐色土 (米軍客土) 褐色土 (米軍客土)
- 第3層 旧表土層 淡灰褐色粘質土 (上面に軟上の波)
a～kまで11に細分
- 第4層 暗灰色粘質土層
- 第5層 暗灰緑色粘質土層
a～dまで4に細分
- 第6層 黒褐色粘質土層 (カワニナが多い)
a～eまで5に細分
- 第7層 淡暗灰色粘質土層 (カワニナ散在)
a～bまで2に細分
- 第8層 暗灰色粘質土層 (カワニナ散在)
- 第9層 黒灰色粘質土層 (カワニナ散在)
第9層と第10層の互層をなす部分あり
- 第10層 灰色粘質砂層 (カワニナ散在) 第一文化層
- 第11層 暗茶褐色泥炭層 (カワニナ散在) 樹根層
- 第12層 淡褐色泥炭層 (カワニナ散在)
- 第13層 灰色砂層 (精錬された石英)
- 第14層 暗黒褐色混礫砂層 曾畑層 第二文化層
a 暗褐色シルト層
b 礫層
c 暗褐色シルト層
d シイの実層
e 貝層
- 第15層 暗灰色砂層
- 第16層 暗茶褐色泥炭層
- 第17層 灰色シルト層

南区

- 第1層 表土層
- 第2層 a コーラル
b 褐色土(米軍客土)
- 第3層 旧表土層 淡灰褐色粘質土層
- 第5層 暗灰綠色粘質土層
a~dまで4に細分
- 第6層 黒褐色粘質土層
a~eまで5に細分
- 第7層 淡暗灰褐色粘質土層
a~bまで2に細分
- 第8層 暗灰色粘質土層
- 第9層 黒灰色粘質土層
第9層と第10層の互層をなす部分あり
- 第10層 灰色粘質砂層
- 第11層 暗茶褐色泥炭層 樹根層
- 第12層 淡褐色泥炭層
- 第13層 灰色砂層(石英層)
- 第14層 暗黒褐色混礫砂層 第二文化層
a 暗褐色シルト層
b 礫層
c 暗褐色シルト層
d シイの実層
e 貝層
- 第15層 暗灰色砂層
- 第16層 暗茶褐色泥炭層
- 第17層 灰色シルト層

北区

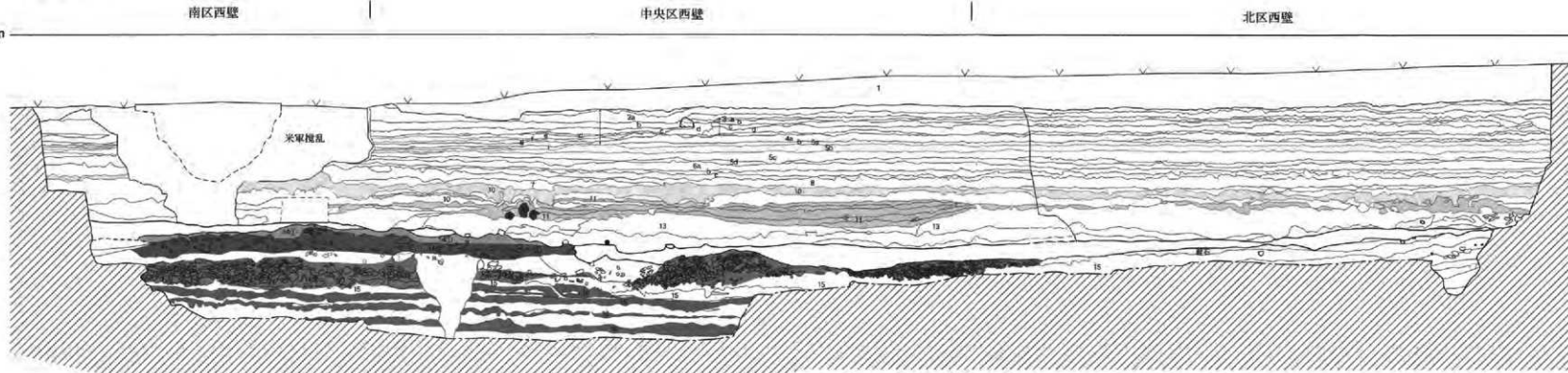
- 第1層 表土層
- 第3層 旧表土層 旧表土層淡灰褐色粘質土層
- 第5層 暗灰綠色粘質土層
a~dまで4に細分
- 第6層 黒褐色粘質土層
a~eまで5に細分
- 第7層 淡暗灰褐色粘質土層
a~bまで2に細分
- 第8層 暗灰色粘質土層
- 第9層 黒灰色粘質土層
第9層と第10層の互層をなす部分あり
- 第10層 灰色粘質砂層
- 第11層 暗茶褐色泥炭層 樹根層はない
- 第15層 暗灰色砂層
- 第16層 暗茶褐色泥炭層
- 第17層 灰色シルト層

北東区

- 第1層 表土層
- 第3層 淡灰褐色粘質土層
- 第4層 暗褐色粘質土層
a・b
- 第5層 暗灰綠色粘質土層
a・bまで2に細分
- 第6層 黒褐色粘質土層
a～cまで3に細分
- 第9層 黒灰色粘質土層
第9層・第10層の混在
- 第11層 暗茶褐色泥炭層
- 第17層 灰色シルト層

南北ライン

EL=6.00m



- は水田址 (第2・5層)
- は灰色粘質砂層 (第10層)
- は樹根層 (第11層)
- は機層 (第14層①) 面縄前庭式土器層
- は機層 (第14層②) 管畑式土器層
- は機層 (第14層③) 無遺物層
- は軽石層 (第15層) 北区で爪形文土器出土
- は褐色泥炭層 (第16層)
- は材木
- は掘出土ポイント

南区

- 第1層 表土層
- 第2層 a コーラル
- b 褐色土 (米軍客土)
- 第3層 暗灰褐色粘質土層
- 第5層 暗灰緑色粘質土層
- a~dまで4に細分
- 第6層 黒褐色粘質土層
- a~eまで5に細分
- 第7層 淡暗灰褐色粘質土層
- a~bまで2に細分
- 第8層 暗灰色粘質土層
- 第9層 黒灰色粘質土層
- 9層と10層の互層をなす部分あり
- 第10層 灰色粘質砂層
- 第11層 暗茶褐色泥炭層 樹根層
- 第12層 淡褐色泥炭層
- 第13層 灰色砂層 (石英層)
- 第14層 暗黒褐色粘質砂層
- a 暗褐色シルト層
- b 機層
- c 暗褐色シルト層
- d シイの実層
- e 貝層
- 第15層 暗灰色砂層
- 第16層 暗茶褐色泥炭層
- 第17層 灰色シルト層

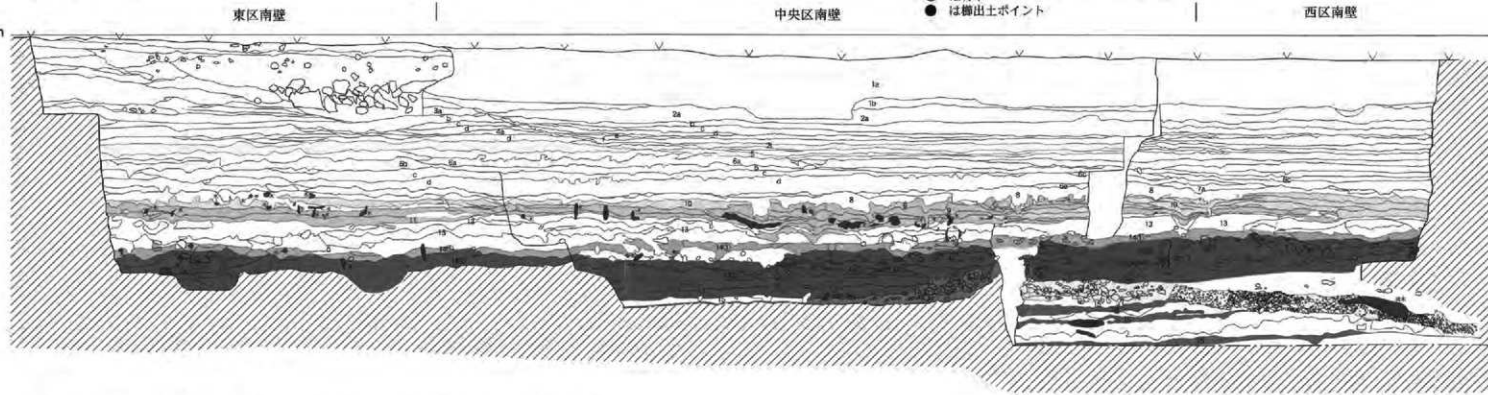
北区

- 第1層 表土層
- 第3層 淡灰褐色粘質土層
- 第5層 暗灰褐色粘質土層
- a~dまで4に細分
- 第6層 黒褐色粘質土層
- a~eまで5に細分
- 第7層 淡暗灰褐色粘質土層
- a~bまで2に細分
- 第8層 暗灰色粘質土層
- 第9層 黒灰色粘質土層
- 第9層と第10層の互層をなす部分あり
- 第10層 灰色粘質砂層
- 第11層 暗茶褐色泥炭層 樹根層
- 第15層 暗灰色砂層
- 第16層 暗茶褐色泥炭層
- 第17層 灰色シルト層



東西ライン

EL=6.00m



中央区

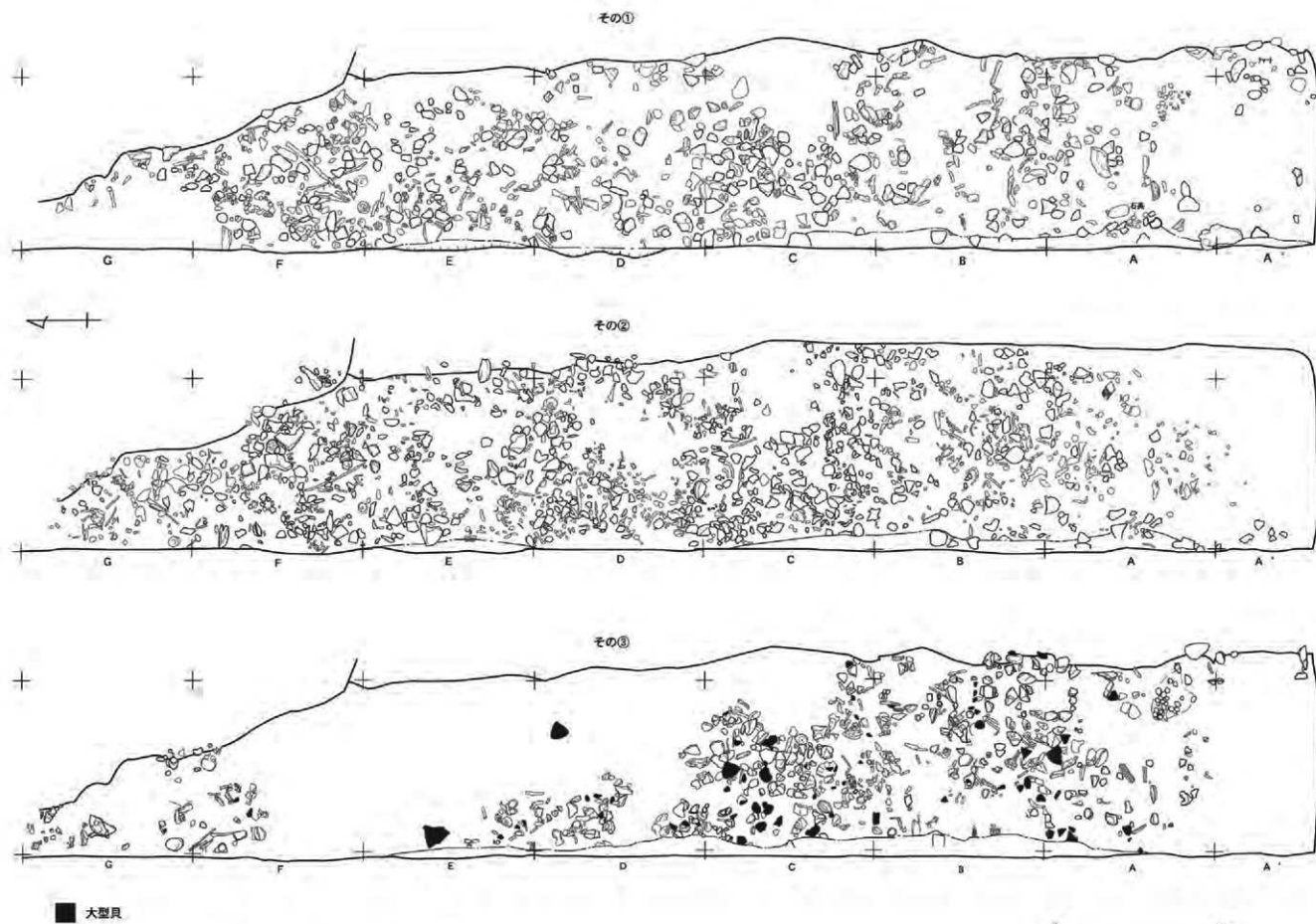
- 第1層 表土層
- 第2層 a コーラル
- b 褐色土 (米軍客土)
- 第3層 旧表土層 淡灰褐色粘質土 (上面に散上の流)
- a~kまで11に細分
- 第4層 暗灰色粘質土層
- 第5層 暗灰緑色粘質土層
- a~dまで4に細分
- 第6層 黒褐色粘質土層 (カワニナが多い)
- a~eまで5に細分
- 第7層 淡暗灰色粘質土層 (カワニナ散在)
- a~bまで2に細分
- 第8層 暗灰色粘質土層 (カワニナ散在)
- 第9層 黒灰色粘質土層 (カワニナ散在)
- 9層と10層の互層をなす部分あり
- 第10層 灰色粘質砂層 (カワニナ散在)
- 第11層 暗茶褐色泥炭層 (カワニナ散在) 樹根層
- 第12層 淡褐色泥炭層 (カワニナ散在)
- 第13層 灰色砂層 (精練された石英)
- 第14層 暗黒褐色粘質砂層 管畑層
- a 暗褐色シルト層
- b 機層
- c 暗褐色シルト層
- d シイの実層
- e 貝層
- 第15層 暗灰色砂層
- 第16層 暗茶褐色泥炭層

東区

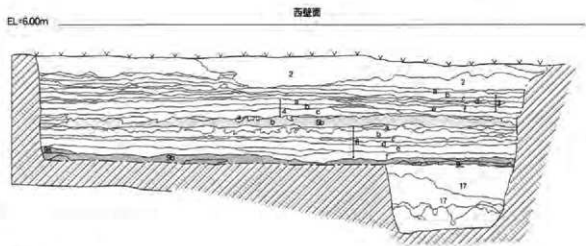
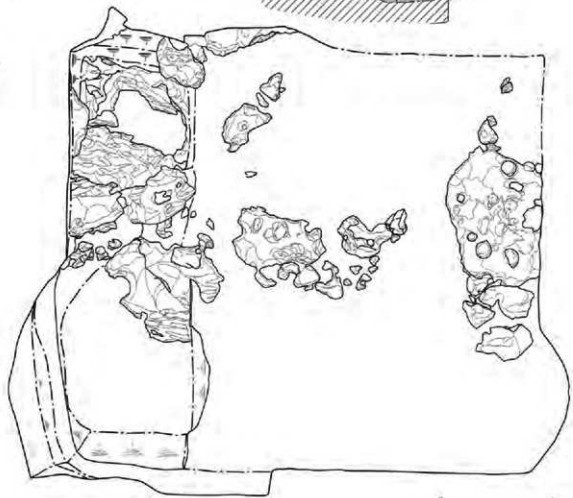
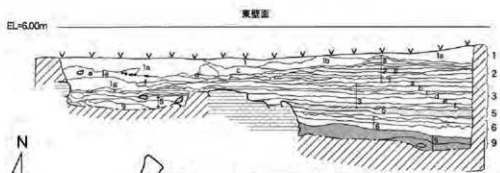
- 第1層 表土層
- 第2層 a コーラル
- 第3層 旧表土層 淡灰褐色粘質土
- a~kまで11に細分
- 第4層 暗褐色粘質土層
- 第5層 暗灰緑色粘質土層
- a~dまで4に細分
- 第6層 黒褐色粘質土層
- a~eまで5に細分
- 第7層 淡暗灰褐色粘質土層
- a~bまで2に細分
- 第8層 暗灰色粘質土層
- 第9層 黒灰色粘質土層
- 第9層と10層の互層をなす部分あり
- 第10層 灰色粘質砂層
- 第11層 暗茶褐色泥炭層 樹根層
- 第12層 淡褐色泥炭層
- 第13層 灰色砂層 (石英層)
- 第14層
- a 暗褐色シルト層
- b 機層
- c 暗褐色シルト層
- d シイの実層
- e 貝層
- 第15層 暗灰色砂層
- 第16層 暗茶褐色泥炭層
- 第17層 灰色シルト層

第13図 低湿地区 層序 上: 南北ライン西壁断面図・下: 東西ライン南壁断面図

0 2m



第14図 南区サブトレ層検出状況 (上:1面目・中:2面目・下:3面目)



第15図 北東区 層序

第3節 遺 構

低湿地区における明確な遺構は縄文時代前期の層より貯蔵穴が1基検出されたのみである。遺構は北東側から「ウーチヌカー」より湧き出る湧水の流路を利用して設置されたと思われる。中央区の南東側で曾畑層掘り下げ時に検出した。

1. 貯蔵穴 (巻首図版2下・第16図)

本遺跡で確認された遺構は1基だけであるが、「ウーチヌカー」からの湧水の流路を利用し、保存を目的とするためのものと考えられる。

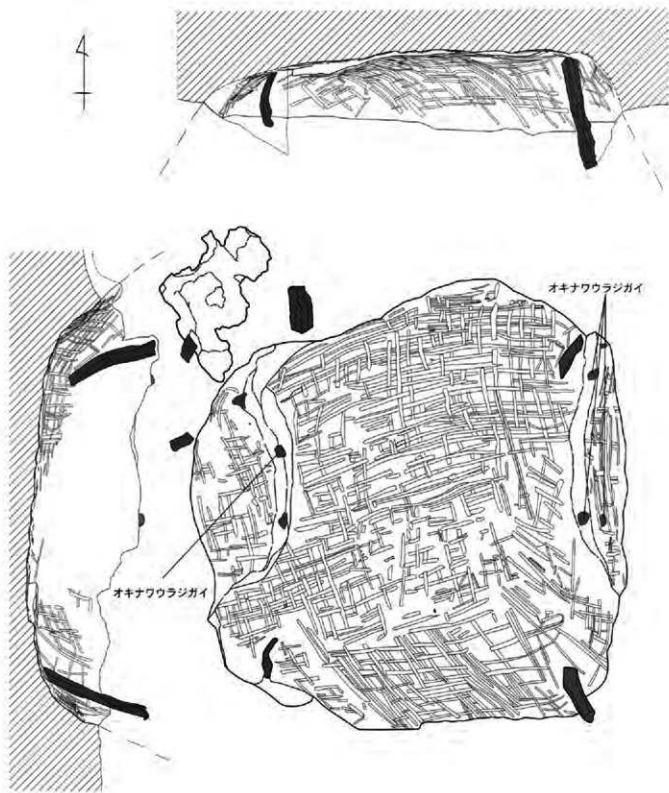
本遺構は中央区の南東側に位置し、そこは北西側に礫が堆積、南東側は礫が散在するこのような境に設置されている。また、礫が散在する地域は種子や堅果類が多く出土し、特に破砕されたシイの実が多い。一方、礫が堆積している場所は獣骨及び貝殻が多く検出されるという特徴が見られる。

検出時は南東側の面が露出し、北西側に傾いていたため穴の内側は南東側と判断して周囲を掘り下げていった。ところが、掘り下げていたところは穴の外側であることに気づき作業を中断した。つまり、穴の上端部が土圧によって内側（北西側）に押しされ、袋状になっていることが判明した。この掘り下げによって南東側の面は10cmほど窪み目が露出した状態となり、内側を掘り下げた場合、傾いた状態を保持するのは困難となるので掘り下げを検討することとした。その結果、本遺構を保存するため遺構切り取りを行い、民間業者に保存処理を委託することにし、掘り下げについては穴と遺構をより良い状態で保存できるよう業者へ移動して掘り下げを行い、その後直ぐ保存処理することとした。

遺構内の掘り下げを行っていくと、穴の上端部は南東側の面と北西側の面が内側に傾いていることが分かり、この両面の内壁を露出する掘り方をすると崩れるので内壁の露出は断念して上端部から底部へ縦に掘り下げを行った。北東側と南西側の面は上端部がなく胴部あたりまで残っていた。この両面は内壁を露出し底部までの状況を確認するできた。

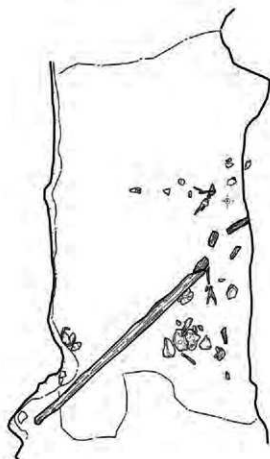
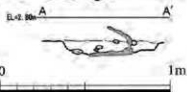
本遺構は最終的には平面形が90cm四方の隅丸方形を呈している。断面は袋状を成しているが本来からの形状ではなく土圧によっての結果と考えられる。深さは18~20cm、底面は約40×50cmを測る。内側の角に木片が3本確認でき、北東側角の内側は覆土を残しているため確認できないが、おそらく4隅に木片を立てているのではないかと推測される。

本遺構と同様出土例は沖縄本島の東海岸の北部に位置する宜野座村前原遺跡で縄文時代中期から後期の層で24基検出している。その中に伊礼原遺跡同様に遺構の内側の4隅に木片を立てている例はなく、遺構の中心部に木片が立てられ目印の可能性が考えられている。伊礼原遺跡検出資料は目印ではなく穴を固定するために立てたものと考えられる。遺構内からはオキナワウラジロガシの果実が数十個出土した。人工遺物は曾畑式土器が覆土の中層部より出土した。



第16図 灰検出状況 平面図・断面図

図版57-63



第18図 木製容器（上）・構築材出土（右下）状況

第4節 出土遺物

低湿地区からは土器、石器、骨製品、貝製品、木製品やグスク時代以降（青磁、白磁・染付・古鏡、沖縄産陶器）などの人工遺物とシイの実、木等の植物遺体、魚類、イノシシ脊椎動物遺体や貝類などの軟体動物遺体などの自然遺物が大量に出土した。

ここでは人工遺物を中心に報告し、自然遺物は第V章で報告する。

1. 土器

低湿地区からは、縄文時代早期の爪形文土器、前期の首頸式土器、中期の面縄前庭式土器、仲泊式土器、後期の面縄東洞式土器、伊波式土器、縄文晩期土器、貝塚後期土器、グスク土器などが出土した。以下、これらの土器の概略を述べ、詳細は各々の土器ごとに観察一覽を示した。

1) 爪形文土器

縄文時代早期の土器として、爪形文土器が155点出土した。接合による個々の破片資料から、口縁部は外反・直口しながらストレートに胴部へ移行し、胴下部で膨れ、丸底の底部を持つという、いわゆる沖縄で出土する爪形文土器の器形（フラスコ状）を確認する事ができた。沖縄県出土の爪形文土器分類としては、渡具知東原遺跡⁴¹⁾や野国貝塚⁴²⁾にて報告されている指頭押圧文（野国タイプ・ヤブチ式）と爪形文（東原式）で大きく分ける方法や、伊藤氏の研究⁴³⁾による指頭痕の形状や施文方法による分類等が挙げられる。本遺跡から出土した爪形文土器は、砂質資料が比較的器厚が薄く焼成良好であり、泥質資料は器厚が厚く脆弱であった。この点に着目し、分類基準を胎土で大きく分け、文様構成は個々に記述する事とした。

1類（第19図1～3）

胎土は砂質で焼成は堅地。器厚は薄く4mm前後。1、3は黒褐色を、2は赤褐色を呈する。3は特に焼成が堅地で、胎土は精練されており輝石を含む。内面は丁寧なナデを横位に施す。1、2は、口縁端部を微弱に外反させる。1・3は逆D字状を、2はD字状の爪形文を全面に施す。

2類（第19図4）

胎土は砂泥質で焼成は良好。器厚は1類同様薄い。外器面は縦位のナデを、内器面は横位のナデを施す。外器面は橙黄色を、内器面は緑黄色を呈す。混入物に石英・砂粒を含む。縦位の沈線を繋がないように施文した後、D字状の爪形文を1条施す。

3類（第19図5～7）

胎土は泥砂質で、焼成はやや悪い。器厚は1、2類より1～2mm程厚くなる。混入物に ϕ 1mm程の石灰粒子を含み、器表面はポーラス状を呈する。器色はオリーブ褐色を基調とする。7の上部は橙黄色になる。5、6はD字状の爪形文を、7は逆D字状の爪形文を全面に施す。

4類（第19図8）

胎土は泥質で焼成は良い。器厚は7mmと厚くなる。混入物に石英粒を僅かに含み、内器面は横位のナデを施す。外器面は橙黄色を、内器面はオリーブ褐色を呈する。文様構成は2類に酷似する。横位の爪形文を逆D字状に施文し、下部では2条施す。

5類 (第19図9～14)

胎土は泥質で焼成は悪い。器厚は5～6mm。器色は橙黄色・緑黄色・オリーブ褐色を呈し、 ϕ 2～5mm大の石英・赤色・砂粒を含む。文様構成は、指頭押圧文に終始するもの(10)指頭押圧文に爪形文がセットになるもの(11・12・13)・逆D字状の爪形文のみを施すもの(14)のほか、9の口縁部資料は、弱く外反する口縁部下に逆D字状の爪形文を横位に2条巡らせ、頸部に斜位沈線2条1組を鋸歯状に施し、以下逆D字状の爪形文を施文する。

爪形文土器は、伊礼原遺跡より出土した土器の中で最も古く、県内でも縄文早期の無文土器に次いで2番目に古い土器とされている²²⁾。本遺跡から南に約3キロ離れた新城下原遺跡出土の爪形文土器を含む層(第9層)では、放射性炭素年代測定値6080±50yBPが得られている²³⁾。本遺跡で爪形文土器が出土した層の炭を測定にかけたところ、5500±40yBPの数値が得られた。泥質の土器(特に3類)は、ローリングを受けた痕が認められ、周辺からの流れ込みが考えられたが、当該期の遺跡本体を確認する事はできなかった。

引用・参考文献

- 註1 高宮廣衛・知念 勇ほか 1977「渡島知東原一第1～2次発掘調査報告」『読谷村文化財調査報告書』第3集 読谷村教育委員会
- 註2 岸本義彦・島袋 洋ほか 1984「野国 野国貝塚群B地点発掘調査報告」『沖縄県文化財調査報告書』第57集 沖縄県教育委員会
- 註3 伊藤 圭 2006「型式比較による南島爪形文土器の位置づけについて」紀要『沖縄埋文研究』4 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 註4 片桐千亜紀・久貝弥嗣・榎原恒寿・金子浩昌・高宮広士・島袋春美(株)古塚地研究所・(株)パリオ2006 新城下原第二遺跡『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第35集 沖縄県立埋蔵文化財センター

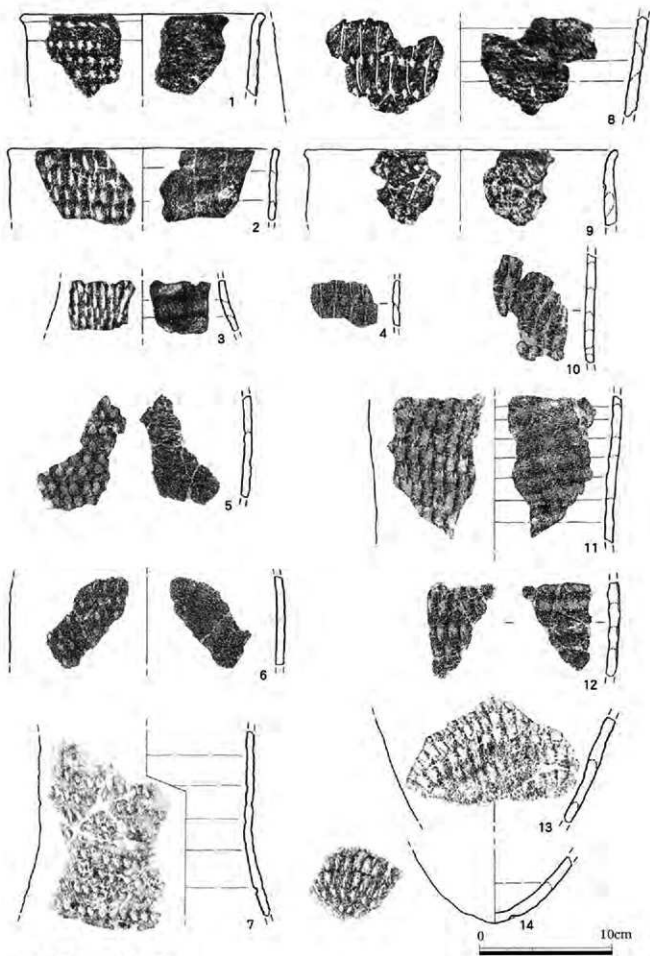
2) 曾畑式土器

曾畑式土器の総数は2250点で、口縁部93点、胴部2091点、底部66点である。器形復元可能なものは口縁部が山形をもつ第27図の1点のみである。今回、九州の曾畑式土器の大きな特徴のひとつである滑石混入の土器が1点ではあるが検出された。水摩を受けた第20図1である。器種は30cm大を越える大形のもの第20図13、第21図、第24図7や、25cm前後の中形の第20図5・6・8・10、第22図1・2・4、第23図4・5、第24図3～5、第27図1などがある。20cm以下の小形のは第26図1～12である。文様構成からみると口縁部の第一文様帯に点刻文を施すものは少なく第20図2・8～11・13、第21図2、第22図1、第26図6である。同じく第一文様帯に数センチの横位の沈線文を施すのは第21図3、第26図3、第27図1で出土中最も多く、縦位に沈線文を施すものは第21図4～6と極めて少ない。胴部の文様は直線的に縦・横・斜めの構図で構成されるのが主体であるが、まれに曲線文を含む第24図2・4～7があり、また、第23図1～5のように無紋のものもある。底部については安定の良い丸底には外底面まで文様を施すものもあるが、やや尖り気味の第23図9、第25図3・6、第26図13は端部までは施さず、他の底部はほとんどが無紋である。器壁は8mmと薄いものは器面調整も丁寧で、焼成も良く暗灰色を呈し混和財も黒色の鉱物や石英を含んでいる。1cm前後とや

表2 爪形文土器観察一覧

挿図番号	時期	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第19図版	1	早	深鉢	口	1	口:18cm 口:丸。文:逆D字。質:砂質。表:黒褐。裏:黄褐。混種:石英。混大:粗。混量:中。焼:中。調:裏面はがれ。厚:7mm。他:口縁直下に斜状の爪形。	中央区サブトレ東西ライン17区第14層台2013
	2	早	深鉢	口	1	口:20.6cm 口:舌。文:D字。質:砂質。表:赤褐。裏:赤褐。混種:石英・石灰質。混大:粗。混量:多。焼:中。調:裏・指頭押圧痕。厚:5mm。	北区(W区)壁面清掃時台2014
	3	早	深鉢?	胴	1	文:逆D字。質:砂>泥。表:黒褐。裏:黒褐。混種:透明・石灰粒。混大:細。混量:少。焼:堅。調:裏・ナデ。厚:5mm。	台2026
	4	早	深鉢	胴	2	文:D字+直線。質:砂質。表:淡橙。裏:淡オリーブ。混種:石英・石灰粒。混大:2mm。混量:少。焼:悪。調:裏面ナデ・1mmアバタ。厚:5mm。	北区第10層台2022
	5	早	深鉢	胴	3	文:D字。質:砂>泥。表:淡灰。裏:淡灰。混種:光・透。混大:細。混量:少。焼:悪。調:アバタ。厚:5mm。他:裏面に煤痕有。	台2023
	6	早	深鉢	胴	3	文:D字。質:砂>泥。表:灰オリーブ。裏:灰オリーブ。混種:石灰粒・透明。混大:2mm。混量:多。焼:中。調:アバタ。厚:6mm。他:ローリング受・裏面に煤痕有。	サブトレ東西ライン22区木の層③台2024
	7	早	深鉢	底	3	文:逆D字。質:泥質。表:灰オリーブ。裏:灰オリーブ。混種:石灰粒。混大:細。混量:少。焼:悪。調:アバタ・表面指頭痕残る。厚:5mm。	
	8	早	深鉢	胴	4	文:逆D字+直線。質:泥質。表:淡赤。裏:暗灰。混種:石英。混大:細。混量:少。焼:良。調:器面不規則。アバタ。厚:9mm。	北トレンチ包含層上面(白色シルト)台2019
	9	早	深鉢	口	5	口:23.4cm 口:舌。文:逆D。質:砂<泥。表:淡赤。裏:灰オリーブ。混種:白・貝。混大:細。混量:少。焼:悪。調:アバタ・裏指頭痕。厚:8mm。他:鋸歯状の沈線文。	台2015
	10	早	深鉢	胴	5	文:指頭押圧。質:砂>泥。表:淡黄。裏:淡黄。混種:石英・橙色粒。混大:細。混量:多。焼:悪。厚:6mm。	台2025
	11	早	深鉢	胴	5	文:指頭押圧+爪。質:泥質。表:淡黄。裏:淡黄。混種:石英。混大:2mm。混量:中。焼:悪。調:裏指ナデ(丁寧)。厚:7mm。積痕有。積幅:2.5/4.2(cm)。他:文様幅7mm。	台2020
	12	早	深鉢	胴	5	文:指頭押圧+爪。質:砂>泥。表:淡黄。裏:淡黄。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:裏指頭痕有。厚:8mm。他:裏面に煤痕有。	台2021
	13	早	深鉢?	胴	5	文:指頭押圧+爪。質:砂>泥。表:淡橙。裏:黄。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:悪。厚:9mm。	台2016
	14	早	深鉢?	底	5	文:逆D字。質:砂>泥。表:明茶。裏:灰茶。混種:茶色粒・石英。混大:粗。混量:多。焼:悪。厚:7mm。他:外底中心無文・表面煤痕有・同心円状に施文。	Nc143A トレンチ西壁除去第11層

<凡例>「観察事項」の項目(口:(口縁部の形態)、文:(文様)、質:(砂質・泥質)、表:(色)、裏:(色)、混種:(混入物の種類)、混量:(混入量)、混大:(混入物の大きさ)、焼:(焼成)、調:(器面調整)、厚:(器厚)、他:(その他など)「地区・台帳番号」の項目|台は台帳番号を示す。低湿地区台帳番号はCDに収録



第19圖 爪形文土器

表3 曾畑式土器観察一覧①

単位: cm

第何・図版	番号	土器形式	部位	文様(表)	文様(裏・口縁)	口径(口)	胴径(口)	底径	器厚(口)	積み幅	観察事項	出土地	土器番号
第20図・図版	2	曾畑式土器	口縁部	①刺突連天文	口唇→無(裏) ①刺突文2条	29.6			11	2.5	泥質、器色(表)黒、黒褐色、(裏)黒褐色、混入物:白色、石英、輝石?光(黄)、0.5mm以下、0.5~1.5。器面調整:表一刺突文、ナデ、指圧痕、裏一刺突もん、ナデ。	No148	1101
	3	曾畑式土器	山形口縁	有文①刺突文2条(横)穿孔	口唇→刺突文裏→無						器色(表)暗褐色、(裏)灰褐色。混入物:石英、珪。器面調整:表一ナデ、裏一指圧痕・ナデ。	南区サブトレ6~7m曾畑層	1258
	12	曾畑式土器	口縁部	①刺突(4条・横) + 縦・斜沈	口唇→刺突文裏→無						器色(表)黒灰褐色、(裏)黒褐色。混入物:白粒貝目立つ光(黄)、0.5mm以下、0.5~1mm。器面調整:表一ナデ、裏一ハケ目。	台374、中央区、バーキ周辺、北側90m拡張部(藤集中部)、曾畑層、020311、第12層	1043
第21図・図版	4	曾畑式土器	口縁部	斜沈線+横斑沈(2条)	無	31.6			11	2.3	泥質、器色(表)茶灰色、(裏)茶褐色。混入物:白色、0.5mm以下、0.5~1.0。器面調整:表一文様有り 裏一ハケ目。	台894、No143北側、第11層下部、000111	1007
	7	曾畑式土器	口縁部	横短沈+斜沈	口唇→無裏→短沈(横)→(深目太)	27.2			7.5	3.0 1.6	泥質、器色(表)橙灰色、(裏)茶灰色。混入物:白色、石英、0.5mm以下、0.5~1.5以上。器面調整:表一施文、裏一施もん、ナデ。	台803、北トレンチ、第9層、No6、000126	1124
第22図・図版	1	曾畑式土器	口縁部	羽取+沈(横+凸)	無	27.8			9	2.3	砂質、器色(表)灰黒色、(裏)黒褐色。混入物:白色、石英、金雲母。器面調整:表一文様有り 裏一口縁部に文様、ハケ目。	台720、中央区サブトレ、曾畑層上面、020807、第12層。+305、中央区サブトレ区画③、曾畑層、020308、曾畑層その①と同じ。第12層	1010
	2	曾畑式土器	口縁部	①縦衝文間に縦沈+横沈(4条)+沈(横+斜)	裏→無	26.6			10	4	泥質、器色(表)黒褐色、(裏)黒褐色。混入物:白色、石英、輝石?光(黄) 石英、0.5mm以下、0.5~1.5。器面調整:表一施文、裏一ハケ目、ナデ。	台718、東区サブトレ、曾畑層、020402、曾畑層その①と同じ。	1102
	4	曾畑式土器	底部	斜沈+横沈	無	23.4			12	2.0 3.2	泥質、器色(表)橙灰褐色、(裏)灰褐色。混入物:白色。器面調整:表一施文、裏一ナデ。	台191、中央区サブトレ、緑灰色砂層、020312、第13層	1103
第23図・図版	1	曾畑式土器	口縁部	無	無						器色(表)黒褐色、(裏)黒灰褐色。混入物:石英、光物。器面調整:表一ハケ目。同図2・3は同一個体	台722、東区サブトレ、曾畑層、020402、曾畑層その①と同じ。第12層	1032
	4	曾畑式土器	口縁部	無	無	25.6			10	4	泥質、器色(表)灰黒色、(裏)黒褐色。混入物:白色、石英、0.5mm以下、0.5~1.5。器面調整:表一ナデ、ハケ目 裏一ハケ目。	試掘No143	1006

<凡例>「観察事項」の項目「粘土、器色、混入物、混入物サイズ、器面調整を觀察」「出土地」の項「台:台帳番号、低湿地の台帳番号はCDに収録。[+]:土器接合

表3 曾畑式土器観察一覧②

単位: cm

第 図・ 版 号	土器 形式	部 位	文様 (表)	文様 (裏・口唇)	口 径 (cm)	胴 径 (cm)	底 径 (cm)	器 厚 (cm)	積 み 幅	観察事項	出土地	土 器 番 号	
第 23 図	5 曾畑式 土器	胴部	縦沈線 (条痕?)	斜沈線 (条痕?)				11	5.0 5.5	泥質、器色(表)灰褐色、一部橙褐色。(裏)黄灰色。混入物:白色。0.5mm以下、0.5~1.5。器面調整:表一ハケ目裏一ハケ目。	台208、中央区サブトレ、混雑砂層、第2回取り上げ、020306、第11層のこと。台307、中央区サブトレ区画②、曾畑層、020309、曾畑層その①と同じ。第12層+台782、No143南東、土取り上げ時、020628、+台837、中央区サブトレ、混雑砂層、020601、+試掘No.143	1008	
第 24 図	6 曾畑式 土器	底部	無	無						器色(表)黒灰褐色。(裏)灰褐色。混入物:白粒、貝。器面調整:表一ハケ目。		1255	
第 24 図	9 曾畑式 土器	口縁部	横短沈 (太1.5mm 程)	無						器色(表)黒灰褐色。(裏)暗灰褐色。混入物:白粒多。器面調整:裏一ハケ。	台712、南区サブトレ、曾畑層(混貝)、E1-2.458m、D.708、010823、D.708、井上。	1082	
第 24 図	1 曾畑式 土器	胴部	蜘蛛の巣 状(曲沈 +斜沈)	曲線沈 (2条)				27.2	9.5	泥質、器色(表)橙褐色。(裏)橙褐色、暗灰色。混入物:白色、石英、0.5mm以下、0.5~1.5。器面調整:表一文様有り裏一文様有り	台4832、No143西側(南よりに)、第9層(砂質)、991025、+台4832、No143西側(南より)、第9層(砂質)、991025	1009	
第 25 図	2 曾畑式 土器	胴部	無	無					10	2.4	泥質、器色(表)黒灰褐色。(裏)黒褐色。混入物:白色、石英、0.5mm以下、0.5~1.5。器面調整:表一編文、ハケ目、裏一ハケ目。	台602、パーキ周辺掘りF17時、日付不明、第12層or第13層。	1110
第 25 図	6 曾畑式 土器	胴部	横沈・縦 沈・横沈 +横沈	無						器色(表)灰褐色。(裏)灰褐色。混入物:光(黒・白)貝、白色。器面調整:表一文様有り裏一指ナデハケ目。	台1767、No143南西、土取り上げ時、020628、	1028	
第 25 図	7 曾畑式 土器	底部	無	無				15	7	泥質、器色(表)灰褐色。(裏)灰褐色。混入物:白粒。器面調整:表一ナデ、撥灰、裏一ナデ。	サブトレ東西ライン7区、曾畑層(シイの実)その③、020501	1122	
第 26 図	8 曾畑式 土器	底部	無	無				11.6	16	器色(表)橙灰色。(裏)黄灰色。混入物:砂粒、白粒無、0.5mm以下、0.5~1.5以上。器面調整:表一ナデ、撥灰、裏一ナデ。	台2387、北トレンテ、第11層、DotNo54、000294、DotNo54、台440	1123	
第 26 図	9 曾畑式 土器	底部	無	無					11		砂<泥、器色(表)灰褐色。(裏)灰茶褐色。混入物:白粒多。器面調整:表一ハケ。	台196、中央区、パーキ周辺、北東側、緑灰砂色層、020312、第13層	1083
第 26 図	1 曾畑式 土器	口縁部	横沈	口唇→刺 突 表→ 斜沈				12.6	67.5	0.8	泥質、器色(表)黒褐色。(裏)黒褐色。混入物:白色。0.5mm以下、0.5~1.0。器面調整:表一文様有り、裏一文様有り。	台191、中央区サブトレ、緑灰色砂層、020312、第13層	1108

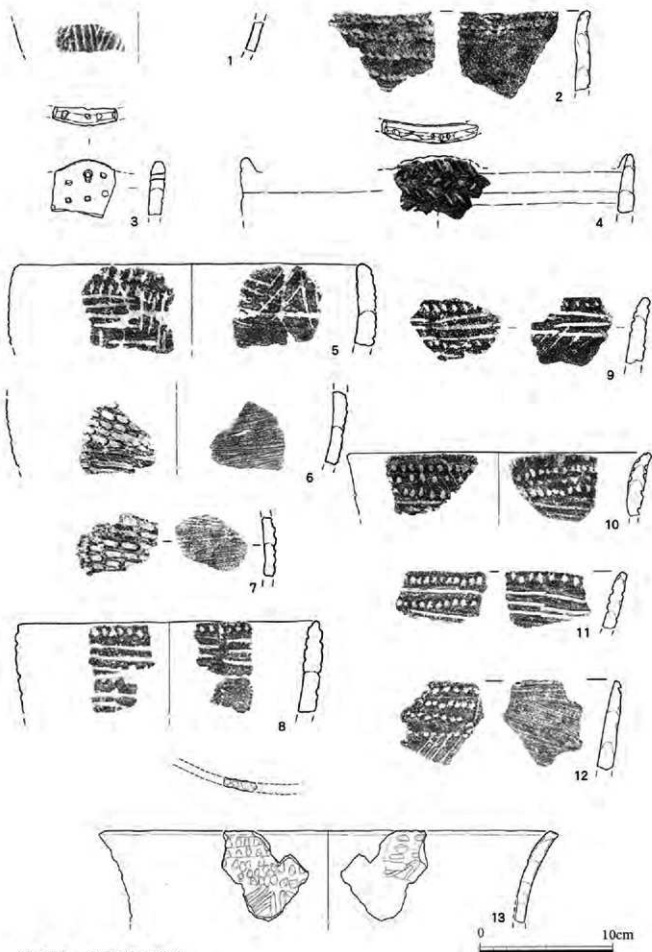
<凡例>観察事項」の項目 胎土、器色、混入物、混入物サイズ、器面調整を観察
「出土地」の項目:台帳番号、低湿地の台帳番号はCDIに収録。「+」:土器接合

表3 曾畑式土器観察一覧③

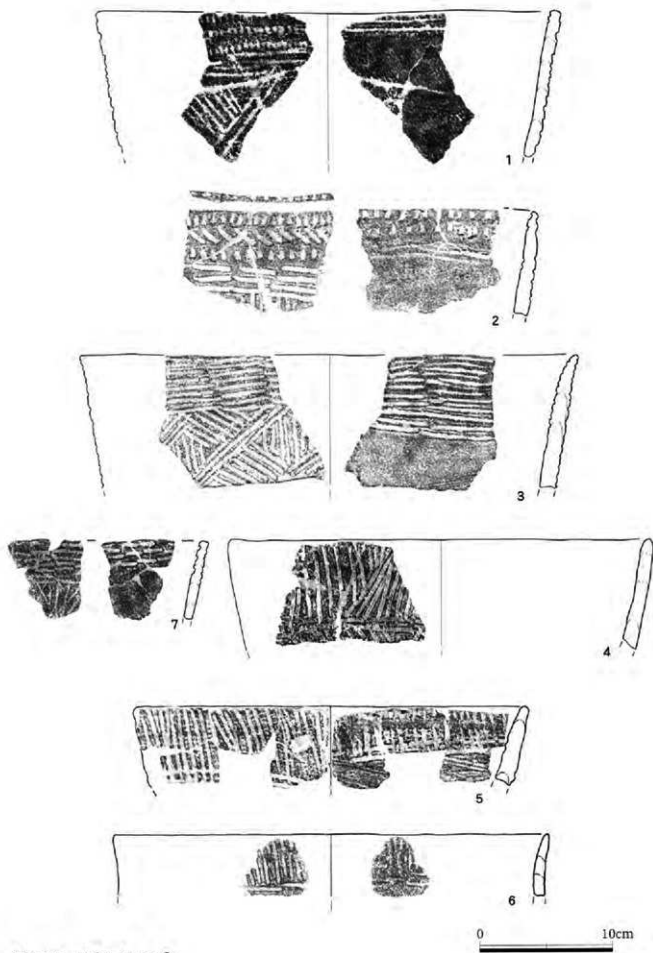
単位: cm

第四・図版	番号	土器形式	部位	文様(表)	文様(裏・口唇)	口径(口)	胴径(口)	底径	器厚(口)	積み幅	観察事項	出土地	土器番号
第6版	2	曾畑式土器	口縁部	刺突(横)+斜沈(曲線)	口管→無表→刺突(横2条)						器色(表)灰褐色、(裏)黒褐色。混入物:白粒、貝(黄)。器面調整:裏→ナデ。	台369,中央区サブトレ、曾畑層,020311、	1073
	7	曾畑式土器	胴部	横沈間に斜沈・縦沈文	無				9		器色(表)黒褐色、(裏)黒褐色。混入物:光(黄)貝、白粒。器面調整:裏→ハケ目。	台746,サブトレ東西ライン(西側)、曾畑層、F区関連物、No.201・202、020404	1040
	10	曾畑式土器	胴部	沈線(横+斜)	無		29.8	29.8	71	2.7	泥質、器色(表)灰褐色、(裏)黒褐色。器面調整:裏→施文、裏→ナデ、指圧痕。	台820,東区サブトレ、曾畑層,020329	1109
	14	曾畑式土器	胴部	沈線(横+斜)	無		12.6		7~8	1.2	泥質、器色(表)黒灰色、(裏)灰褐色、(裏)黒褐色。混入物:白色、輝石、0.5mm以下、0.5~1.5。器面調整:表→文様有り裏→ナデ、指圧痕、ハケ目。	台2455,中央区東側、第11層,000927,台698	1107
	18	曾畑式土器	底部	無	無						器色(表)黒灰褐色、(裏)黒灰褐色。混入物:貝、白粒、光(黄)、石英。器面調整:表→ナデ痕・裏→ナデ。	中央区サブトレ東西ライン17区曾畑層	1264
第7版	1	曾畑式土器	胴部	斜沈+横沈+斜沈	無		34.8		11	2	砂質、器色(表)灰褐色、(裏)灰褐色。混入物:石英、貝。器面調整:裏→ハケ目。	台722,東区サブトレ、曾畑層,020402→台1888,サブトレ東西ライン6区、曾畑層(シイの実)その③、6-16,020422,6-16、7963,サブトレ東西ライン6区、土城状遺構、6-30、020430,6-30	1005
	2	曾畑式土器	底部					6.4	7.0 13.0		泥質、器色(表)灰褐色、(裏)灰褐色。混入物:白色、石英、0.5mm以下、0.5~1.0。器面調整:裏→ナデ。		1121
	3	曾畑式土器	底部					6.4	7		泥質、器色(表)灰褐色、(裏)灰褐色。混入物:白、石英、長石、輝石、0.5mm以下~0.5~1.0mm。器面調整:裏→ナデ有。	台182,中央区サブトレ、曾畑層上面,020308、第12層 注意:人骨、+台369,中央区サブトレ、曾畑層,020311、曾畑層その①と同じ。第12層→台2441、中央区東側、第11層、000901、台978、台2490、南区サブトレ南側、曾畑層、EL=2.441m、D-26、010820、D-26	1221

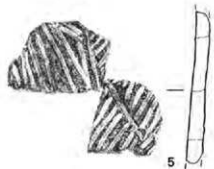
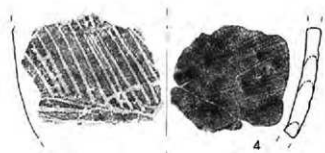
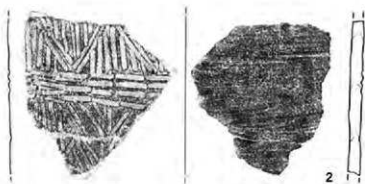
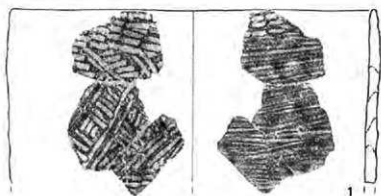
<凡例>「観察事項」の項目「器色、混入物、混入物サイズ、器面調整を説明」「出土地」の項「台:台帳番号、低埋地の台帳番号はCDに収録。「+」:土器接合」



第20图 曾炷式土器①

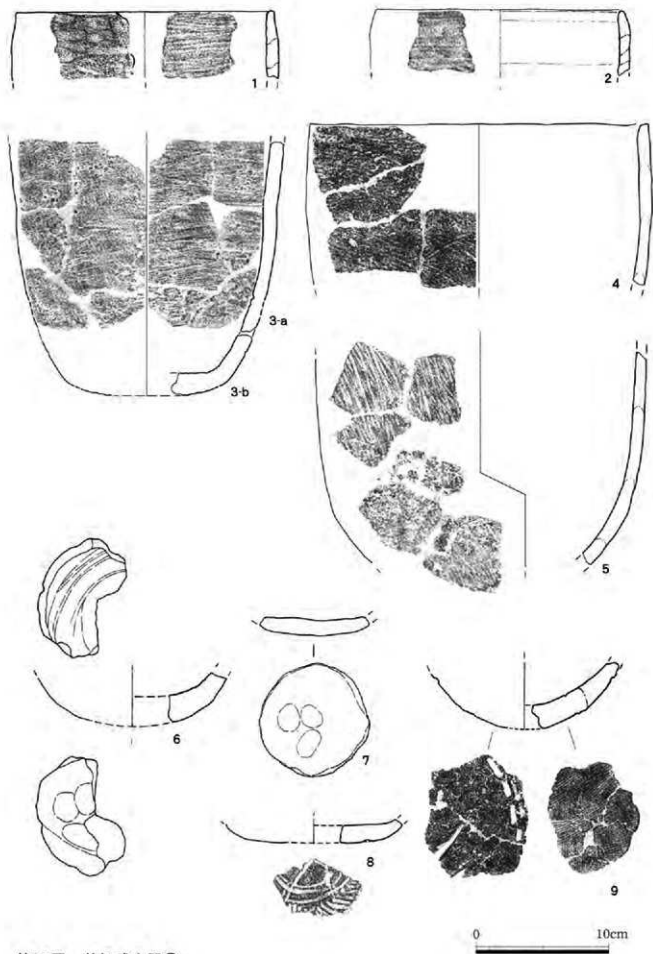


第21図 曾畑式土器②

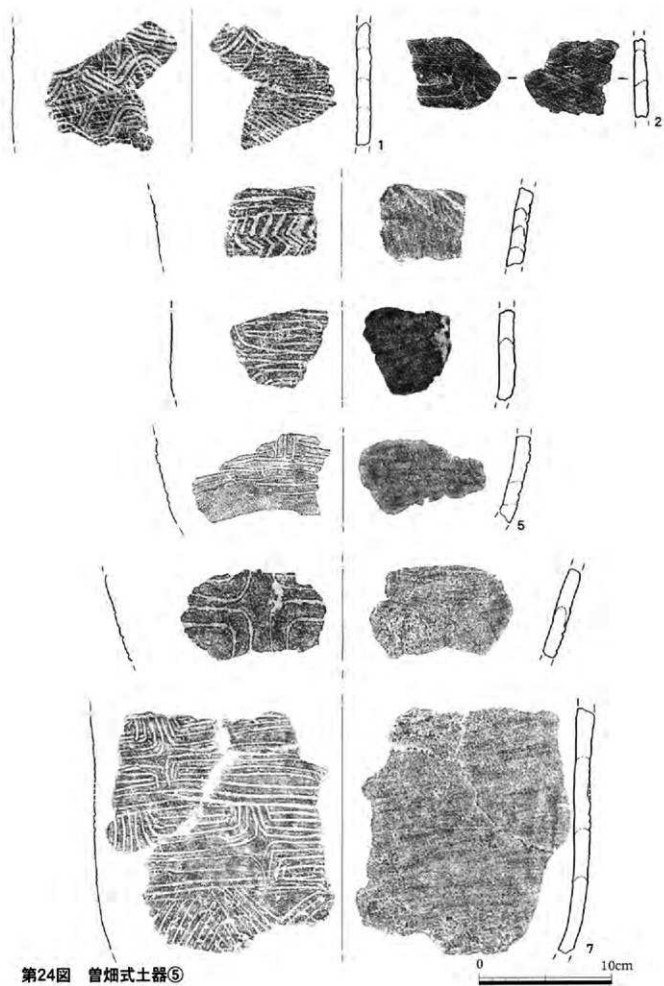


0 10cm

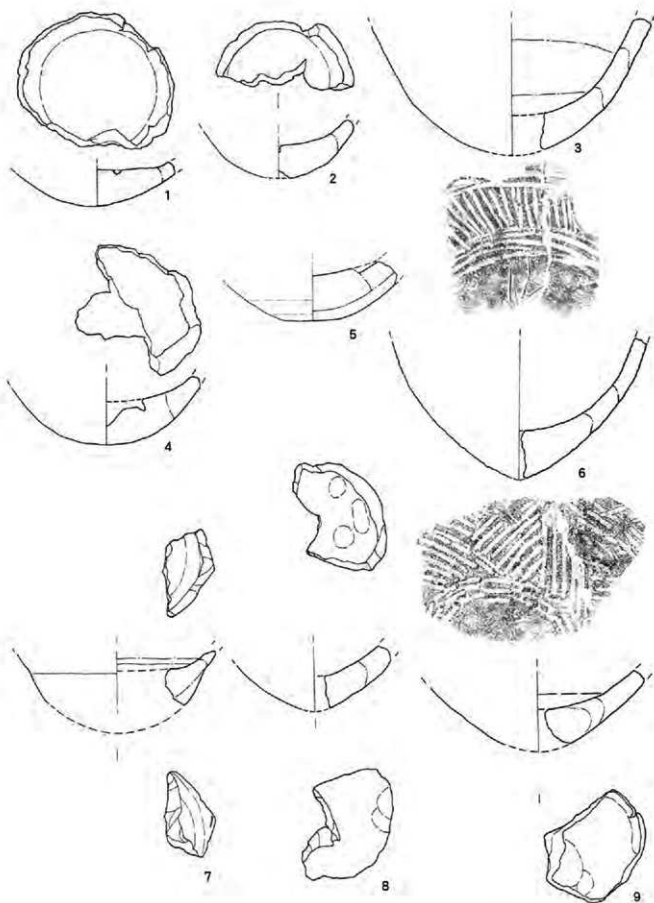
第22圖 曾畑式土器③



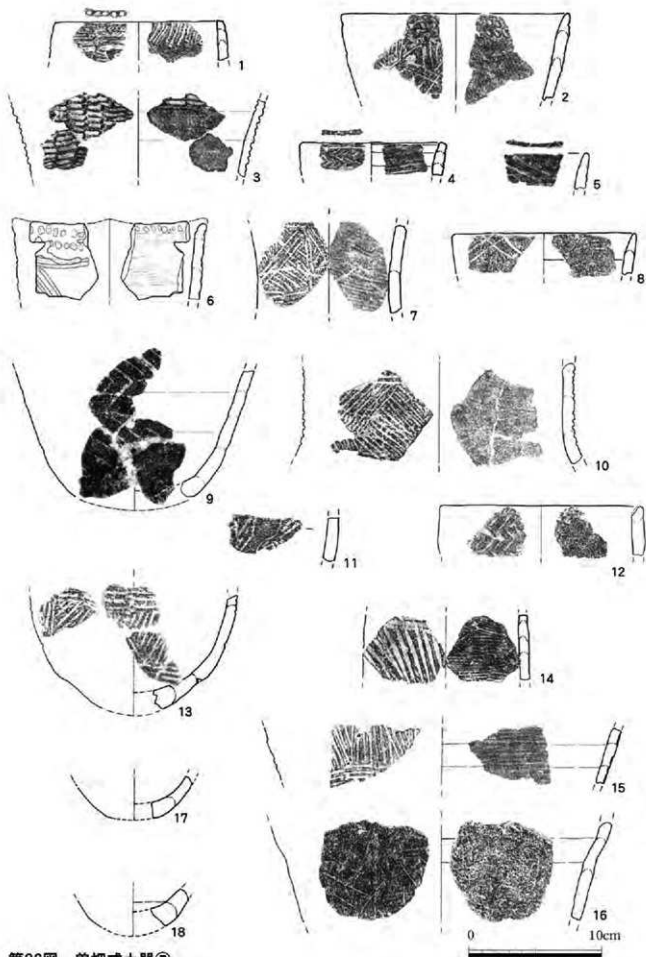
第23图 曾烟式土器④



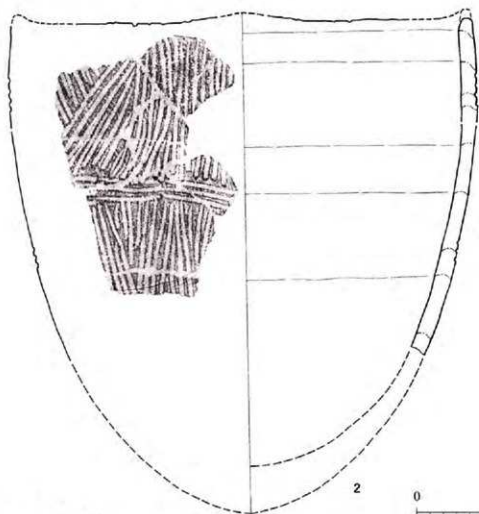
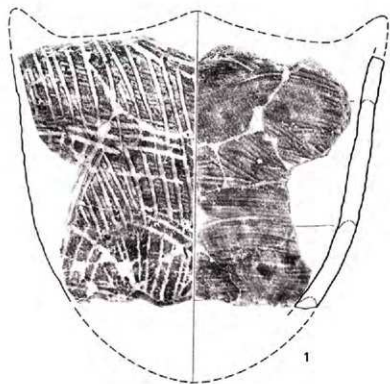
第24圖 曾畑式土器⑤



第25圖 曾畑式土器⑥



第26圖 曾畑式土器⑦



0 10cm

第27图 曾畑式土器⑧

や厚めものは粗いナデや察痕が残し、黒色を呈し混和財に白色のサンゴ砂や砕かれた石灰岩が混入されている。肉眼観察によると前者が搬入品で後者が在土器である。搬入品とみられるのが第20図1・11・13、第21図3・7、第22図1・2、第23図8、第24図2・5、第26図3・6・15、第27図2である。出土総数の約20%がそれにあたる。

第20図3・4は口縁部に小突起部をもち、口唇部と外面に刺突文を施し、内外面を穿つ同図3と、口唇部と外面に羽状文を施す同図4がある。口縁部内面に文様がなから古い様相の土器か、あるいは別系統の土器かとも判断されるが細片のため明確でない。

肉眼観察による搬入品土器について理化学的分析を試みたところ^{註1}、安山岩を含む胎土のあることが確認され、火山性の地域で作られていることが明らかになった。そのことから火山性の島々は北のトカラ列島が、屋久島・種子島にその遺跡が求められ、滑石混入土器の特徴から最も近縁な遺跡として屋久島一松山遺跡^{註2}が考えられる。さらに、チャートを含む胎土も存在することが判明し、沖縄諸島の縄文後期相当期の土器胎土に混入される特徴の一つであることが窺われるようになった。

沖縄県内の曾畑式土器の発見された遺跡として、読谷村渡具地東原遺跡^{註3}を初見として、宜野湾市宇地泊兼久原第二遺跡^{註4}、名護市大堂原貝塚^{註5}と極めて少ない。

第24図1は内外の地文に条痕をもち、その以後、数条の波状沈線文を施す胴部破片である。沈線文は形状から貝殻の復縁部によるものである。胎土は緻密で重量感があり、混和剤として鉱物を含むもので、搬入土器片である。この土器の特徴は轟C式1類に所属するものと判断されるが、この時期のものとしてここで照会したい。

引用・参考文献

- 註1 宜野湾市教育委員会「埋蔵文化財自然科学分析調査基本マニュアル」(埋蔵文化財自然科学分析導入調査業務報告) p14 編集パブリコ・サーブエイ株式会社 2005年
註2 室込秀人・弘岡隆夫「一松山遺跡」[鹿児島県立埋蔵文化センター発掘調査報告書(19)]鹿児島県立埋蔵文化センター 1996年
註3 高宮廣衛ほか「渡具知東原」[読谷村文化財調査報告書]第3集 読谷村教育委員会 1977年
註4 宜野湾市教育委員会「宇地泊兼久原第一・第二・第三遺跡発掘調査記録」-宇地泊第二地区土地区画整理事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査[図録集]-[宜野湾市文化財保護資料]第53集 2002年
註5 岸本利枝「大堂原貝塚の曾畑式土器様式について」[あじまあ]名護市博物館紀要13 名護市博物館 2006年

3) 面縄前庭式土器

面縄前庭式土器は鹿児島県徳之島伊仙町の面縄第4貝塚前庭部の出土土器を標識としている。総数171点出土している。得られた器種は壺形と深鉢形の2種類で、前者は口縁部が2点のみで、他は全て深鉢形であった。文様は凸帯を口縁部と頸部にめぐらし、その間に波状若しくは縦位沈線を施す。凸帯下の胴部はY字状または縦位の沈線文を施す。また、凸帯上には篋状工具による刺突文が数種類みられた。胎土は石英及びびん雲母を含んでいる。壺形土器は小破片のため図録化しなかつたので深鉢形のみ紹介する。分類は凸帯の貼り付け方の特徴から3種類に細分した。

I種 口縁部と頸部に凸帯を横位にめぐらすもの。

II種 口縁部は横位に頸部は波状に凸帯をめぐらすもの。

Ⅲ種 頭部のみの凸帯で波状をめぐらすもの。

Ⅰ種

第28図2・5・7の5点である。図2は口径21.2cmを測る。口唇部は扁平上を呈し、頭部の屈曲は強い。凸帯間の文様は波状をめぐらしている。凸帯上の文様はハの字を連続して施文する。器壁は9mmを測る。器色は赤褐色で、胎土は石英を含む。図4・5の口唇部は前者が丸味を帯び、後者は舌状を呈する。両資料とも凸帯間の文様は縦位の沈線の間隔を設けて施している。凸帯上の文様は図4が刻目文で、図5は弧文を連続して施文する。図4の頭部下は斜位沈線が施されている。出土。図3の口唇部は丸味を帯びる。凸帯間は無文であるが図4・5のように縦位沈線の間の無文部分の可能性もある。図7は口径186cmを測る。凸帯は口縁部のみで頭部は欠損している。現況で波状が見られないことからⅠ種で扱うこととした。口唇部と凸帯上に弧文を連続して施文している。

Ⅱ種

第28図1のみである。口径21.2cmを測る。口唇部はやや扁平状を呈する。凸帯間は無文で、頭部の波状凸帯下より縦位に沈線を施している。凸帯上は弧文を連続して施している。

Ⅲ種

第28図6・21の2点である。口唇部は扁平でハの字の刺突を施している。文様は波状凸帯下より斜位または縦位の沈線を施していると思われる。凸帯上の文様は口唇部と同様である。図21は現況では凸帯が見られないが波状凸帯を有するものと思われる。口唇部は丸味を帯び、斜位の刻目文を刺突する。

・ 胴部資料

第28図8～11の4点である。文様は縦位沈線の図8・9、Y字状の図10が見られる。図8は器壁5mmを測る。図9は器壁6mmを測る。図10は器壁8mmを測る。図11は底部に近い部位で文様は見られない。

・ 底部資料

第28図12～16・49の6点である。面縄前庭式土器と仲泊式土器とも尖底を呈し、各々の文様の特徴も見られないことから分けることができなため一括して扱うこととする。

図49は乳房状尖底、図13は尖底、図12・14・15は丸底、図116は丸底に近い尖底を呈している。図13は器壁が9mmを測る。

4) 仲泊式土器

仲泊式土器は仲泊第4貝塚出土の土器を標識とし、口縁部の肥厚帯に施される文様が貝殻文を施すものと斜沈線を施すものの二者あり、前者を仲泊A式土器、後者を仲泊B式土器の2種に細分されている。総数27点出土している。得られた器種は全て深鉢形であった。分類は上述の口縁部の肥厚帯の文様の特徴を使用した。

Ⅰ種 口縁部の肥厚帯に貝殻文を施す仲泊A式土器。

Ⅱ種 口縁部の肥厚帯に沈線文を施す仲泊B式土器。

Ⅰ種

第28図17～20・22・23の6点である。図17の口唇部は舌状を呈する。肥厚帯幅が2.4cm測る。貝

殻文の圧痕は明瞭である。図18の口唇部は丸味を帯びる。肥厚帯幅は不明。貝殻文の圧痕はややはっきりしている。図19は口唇部が欠損し、口縁部外面は粘土帯の重ね痕が残る。肥厚帯幅は2.6~2.7cmを測る。貝殻文の圧痕はややはっきりしている。図20は、口縁部は開き、頸部は締まる。口唇部は丸味を帯びる。口径27.6cm、肥厚帯幅2cmを測る。貝殻文の圧痕は薄く不明瞭である。図22の口唇部は丸味を帯びる。肥厚帯幅は1.5cmを測る。頸部にひし形状の沈線を施す。貝殻文の圧痕はややはっきりしている。図23の口唇部は丸味を帯びる。肥厚帯幅は1.3cmを測る。頸部は図22同様のひし形の沈線を逆に施している。貝殻文の圧痕はややはっきりしている。

II種

第28図26・27に示した2点は口縁部資料で、肥厚帯に斜位や羽状などの沈線を施文している。図26の口唇部は丸味を帯びる。肥厚帯幅は1.5cmを測る。肥厚帯の施される沈線は斜位の短沈線を3段ほど施文している。図27の口唇部は舌状を呈する。肥厚帯幅は2.2cmを測る。肥厚帯に施される沈線は羽状を施文している。

・その他の資料

第28図24・25・28示した3点は口縁部資料で、横位または斜位の沈線を施文し、仲泊B式土器の文様要素を有する土器である。ただ、肥厚帯の形状が異なることからその他の資料として扱うこととした。

図24の口唇部は舌状で、口縁部は三角形に肥厚し頸部が締まる。肥厚帯幅は2.4cmを測る。肥厚帯下に横位の沈線を施した後に斜位沈線を施文している。市来式土器の可能性もある。図25の口唇部は扁平で、短沈線を横位に連続して施文している。肥厚帯幅は1.6cmを測る。肥厚帯に施される沈線は横位に2段施文し、頸部は斜位沈線を数条施文している。図28の口唇部は舌状を呈し、刺突文が施されている。肥厚帯幅は2.2cmを測る。肥厚帯に施される沈線は斜位で数段施文している。

5) 面縄東洞式土器

面縄東洞式土器は鹿児島県徳之島伊仙町の面縄第四貝塚出土土器を標識としている。掲載総数60点出土している。得られた器種は全て深鉢形である。分類は口縁部の器形の特徴から2種類に細分した。

I種 口縁部が外反するものである。

II種 口縁部が直口するものである。

更に口縁部の肥厚帯の文様の特徴から更に3種類に細分した。

aグループ：筒状工具による押し引き文で曲線^④がみられるもの。

bグループ：筒状工具による押し引き文で横位文のみのもの。

cグループ：筒状工具による押し引き文で横位文が途中で段を設けて施文するもの。

1種

aグループ

第28図29・34の2点である。図29は緩やかな曲線と大きな曲線が施文されている。口唇部は丸味を帯びる。図34は緩やかな曲線を施文している。口唇部はやや舌状を呈する。

bグループ

第28図36・39・46の3点である。図36の口唇部はやや舌状を呈する。横位文が4段施されている。

出土。図39の口唇部は扁平で叉状工具による刺突文が施されている。口縁部外面も叉状工具による刺突が横位に2段施文している。図46は口縁部が半分ほど欠損している資料である。文様は薄く横位文が僅かに見られる。頸部に斜位沈線が見られることから仲泊式土器の可能性もある資料である。

c グループ

第28図31の1点である。口唇部はやや舌状を呈する。横位文からほぼ垂直に下りるように縦に変化している。器壁は1.2cmを測る。器色は赤褐色で、胎土は石英を含む。

II種

a グループ

第28図44・45の2点である。両資料とも口唇部を欠損するもので、緩やかな曲線が見られる。

b グループ

第28図32・33・37・38・40～43の8点である。図32は両面施文対象となっている。外面は4段で、内面は口唇直下に1段、先が扁平な施文工具による押し引き文が施文されている。口唇部は丸味を帯びる。図33の口唇部は舌状を呈する。先が弧を成す施文工具による押し引き文を4段施文している。図37の口唇部は舌状を呈する。先が扁平な施文工具による押し引き文が3段施文されている。図38は口唇部が扁平を呈している。口唇端部と口縁部に刻目の文様が施文されている。図40は口縁部が半分欠損している資料である。図41の口唇は扁平で沈線を施文している。図42の口縁部は丸味を帯びる。図43の口唇部は扁平を呈する。先が弧を成す施文工具による押し引き文を4段施文している。

c グループ

第28図30・35の2点である。篋先が弧を成す施文工具による押し引き文が途中から段を設けている。図30の口唇部は丸味を帯びている。図35の口唇部は舌状を呈する。

6) 伊波式土器

伊波式土器は沖縄県石川市宇伊波の伊波貝塚出土の土器を標識としている。総数11点出土している。

第28図47・48の2点である。図47は口唇部が扁平を呈する。口縁部は篋先が細い施文工具による押し引きによる横位文が施文されている。図48は扁平な篋状の施文工具による鋸歯状の文様と横位文を押し引きにより施文している。

・底部資料

第28図50・51の2点である。図50は図47と同一個体と思われる。底径8cmを測り、底部から開き気味に立ち上がる。図51は底径10.5cmを測り、底部から微弱にくびれて立ち上がる。

引用・参考文献

- ・河口貞徳 「奄美大島の濶年」『鹿児島考古』第9号
- ・牛ノ浜・堂込秀人・西本延広 1985 「面縄貝塚群 第1貝塚 第2貝塚 第3貝塚 第4貝塚」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書』(3) 大島郡伊仙町教育委員会
- ・当真嗣一・上原 静 1982 「伊波貝塚発掘調査について」『南島考古だより』第29号pp. 沖縄考古学会
- ・大山 祐 1922 「琉球伊波貝塚発掘報告」

表4 面縄前庭式土器・仲泊式土器・面縄東洞式土器観察一覧①

図版	挿図	土器形式	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第28 図 版 45	1	前 深鉢	口	Ⅱ	□:21.2cm	口:口唇部に刻目。文:横位+波状刻目凸帯・縦位沈線。質:泥質。表:黒。裏:黒。混種:石英。混大:0.5以下mm。混量:多。焼良。調:表裏-ナデ。擦痕。厚:7mm。積痕:有。積幅:3.0/7.3(cm)。他:弧状の刻目・沈線単位4条1組。	台3013
	2	前 深鉢	口	I	□:25cm	口:平坦。文:横位刻目凸帯・波状沈線。質:泥質。表:茶褐色。裏:茶褐色。混種:白・石英。混大:1.5以上mm。混量:中。焼良。調:表裏-ナデ。厚:8~9mm。積痕:有。積幅:2.5(cm)。他:八字状の刻目・沈線単位4条1組。	西区,第11層,010518,西区,第11層。台3014
	3	前 深鉢	口	I	□:17.6cm	口:丸。文:横位刻目凸帯。質:砂<泥。表:赤茶。裏:赤茶。混種:白・石英。混大:1mm。混量:多。焼:中。調:表-ナデ。厚:8mm。他:弧状の刻目。	台3016
	4	前 深鉢	口	I		口:丸。文:横位刻目凸帯・縦位沈線。質:砂>泥。表:赤褐。裏:赤褐。混種:白。混大:2mm。混量:多。焼:中。調:表裏-ナデ。厚:7~9mm。他:直線状の刻目・沈線単位4条1組。	台3017
	5	前 深鉢	口	I	□:25.5cm	口:舌。文:横位刻目凸帯・縦位沈線。質:砂質。表:茶褐。裏:緑褐。混種:白・石英・黒・赤。混大:1.5以上mm。混量:多。焼良。調:表裏-ナデ。厚:6~11mm。他:八字状の刻目・沈線単位5条1組か?。	南区サブトレ3.5~2m,曾畑層(混貝),010628,南区,曾畑層。台3015
	6	前 深鉢	口	Ⅲ	□:35cm	口:扁平。文:波状刻目凸帯・斜位沈線。質:泥質。表:黒褐。裏:黒褐。混種:白・橙。混大:0.5~1.0mm。混量:多。焼良。調:表裏-ナデ。厚:7~9mm。他:八字状の刻目・沈線単位不明。	南区,第11層(礫上面),001025,南区,第11層。台3018
	7	前 深鉢	口	I	□:18.6cm	口:口唇部に刻目。文:横位刻目凸帯。質:泥質。表:黄褐。裏:淡黄。混種:白。混大:0.5~1.0mm。混量:中。焼良。調:表裏-ナデ。厚:5mm。他:弧状の刻目。	中央区,西壁,第9層(砂質),000809,中央区,第9層。台3019
	8	前 深鉢	胴			文:縦位沈線。質:砂質。表:黄褐。裏:黄褐。混種:石英・雲母。混大:1mm。混量:多。焼:中。調:表裏-ナデ。厚:5mm。	台3025
	9	前 深鉢	胴			文:縦位沈線。質:砂>泥。表:茶褐。裏:黒褐。混種:石英。混大:2mm。混量:中。焼良。調:表裏-ナデ。厚:6mm。他:沈線単位4条1組。	台3023
	10	前 深鉢	胴			文:Y字状沈線。質:中。表:黒褐。裏:黒褐。混種:石英。混大:1mm。混量:多。焼良。調:表裏-ナデ。厚:8mm。他:沈線単位3~7条1組。	台3022
	11	前 深鉢	底			質:泥質。表:茶褐。裏:黄淡。混種:白・黒。混大:0.5~1.0mm。混量:少。焼良。調:表-ナデ。裏:刷毛目状。厚:4~7mm。	№11,第6層,981120,第6層。台3035
	12	前 深鉢	底			質:中。表:灰褐。裏:黒褐。混種:白・石英。混大:2mm。混量:多。焼良。調:表裏-ナデ。厚:8~10mm。他:丸底。	石列南側,曾畑層(崩落土清掃),000527。台3034
	13	前 深鉢	底			質:砂>泥。表:灰褐。裏:灰褐。混種:石英。混大:3mm。混量:多。焼良。厚:7~9mm。他:平底。	伊C143Bトレ,第9層,991213。台3034
	14	前 深鉢	底			質:砂<泥。表:淡茶。裏:淡茶。混種:石英・白。混大:粗mm。混量:多。焼:中。調:内側-ハゲている。厚:8mm。他:丸底。表面擦痕有。	南区サブトレ6~7m,曾畑層(最下),010827。台3034
	15	前 深鉢	底			質:泥質。表:茶褐。裏:黒。混種:白・透明。混大:0.5~1.0mm。混量:多。焼良。調:表裏-ナデ。厚:7~11mm。他:丸底。底部粘土帯直径6.7mm。	中央区-東区間畦,樹根下の層,020225,中央区,樹根下の層。台3059
	16	前 深鉢	底			質:泥質。表:黒褐。裏:黒褐。混種:透明。混大:0.5以下mm。混量:少。焼良。調:アバタ・表裏-ナデ。厚:9mm。積痕:有。積幅:52.5/3.8(cm)。他:丸底に近い尖底。底部粘土帯直径7.0cm。	中央区-東区間畦,樹根下の層,020225,中央区,樹根下の層。台3037
	17	東 深鉢	口	I		口:舌。文:貝殻文。質:中。表:灰褐。裏:灰褐。混種:石英。混大:1mm。混量:少。焼良。調:表裏-ナデ。厚:7mm。	№143。台3039

＜凡例＞「土器形式」の項目「前(面縄前庭式土器)・仲(仲泊式土器)・東(面縄東洞式土器)」を示す
「観察事項」の項目「口:(口縁部の形態)・文:(文様)・質:(砂質・泥質)・表:(色)・裏:(色)・混種:(混入物の種類)・混量:(混入量)・混大:(混入物の大きさ)・焼:(焼成)・調:(器面調整)・厚:(器厚)・他:(その他など)」
「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。低湿地区台帳番号はCDに収録

表4 面縄前庭式土器・仲泊式土器・面縄東洞式土器観察一覧②

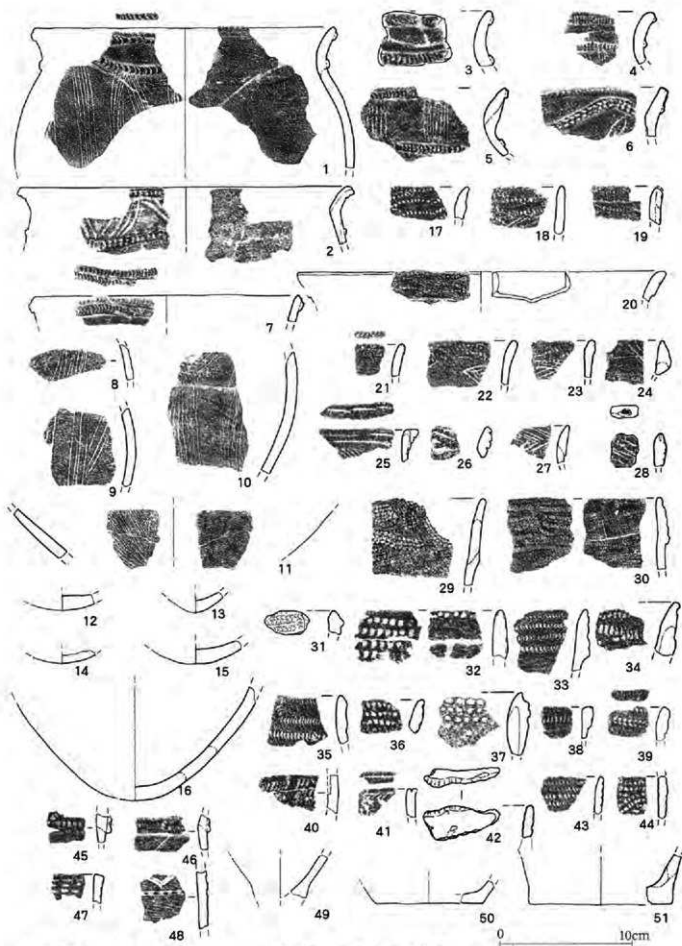
国版	種目	土器形式	形状	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第28 国 ・ 国 版	18	仲	深鉢	口	I		口:丸。文:貝殻文+斜沈線。質:砂<泥。表:茶褐。裏:茶褐。混種:石英。混大:1mm。混量:多。焼:中。厚:7mm。他:ローリング受。	TP-No11第6層 台3052
	19	仲	深鉢	口	I		口:丸。文:貝殻文。質:砂質。表:灰褐。裏:灰褐。混種:石英。混大:2mm。混量:多。焼:中。厚:9mm。	南区第10層,000704 台3028
	20	仲	深鉢	口	I	口:27.6cm	口:丸。肥帯20mm。文:貝殻文。質:砂質。表:暗茶。裏:淡茶。混種:石英・砂粒。混大:2mm。混量:多。焼:良。調:表裏ナデ。厚:6~8mm。	9469,TP.No8灰色砂質泥 炭層,日付不明 台3031
	21	前	深鉢	口	III		口:丸・口唇部に刻目。文:横位刻目凸帯。質:砂<泥。表:赤茶。裏:赤茶。混種:石英。混大:粗mm。混量:中。焼:良。調:表裏ナデ。厚:7mm。他:八字状の刻目。	台3030
	22	仲	深鉢	口	I	口:23.8cm	口:丸。肥帯15mm。文:貝殻文+斜沈線(菱形)。質:砂質。表:黒褐。裏:灰褐。混種:石英・砂粒。混大:粗mm。混量:多。焼:良。調:表裏ナデ。厚:6~8mm。	台3027
	23	仲	深鉢	口	I	口:18.6cm	口:丸。肥帯13mm。文:貝殻文+斜沈線(菱形)。質:砂質。表:灰褐。裏:淡灰。混種:石英・砂粒。混大:粗mm。混量:多。焼:良。厚:6~8mm。	2598,南区,第11層(礫上 面),001025, 台3029
	24	前	深鉢	口			口:舌・三角形・肥帯24mm。文:横位+斜沈線。質:砂質。表:黒褐。裏:暗茶。混種:石英・砂粒。混大:粗mm。混量:多。焼:中。調:表裏ナデ。厚:12mm。	台3021
	25	仲	深鉢	口		口:24cm	口:扁平・口唇部に短沈線・肥帯16mm。文:横位+斜沈線。質:砂>泥。表:暗茶。裏:暗赤褐。混種:石英。混大:2mm。混量:多。焼:良。厚:5~12mm。	9469,TP.No8灰色砂質泥 炭層,日付不明 台3030
	26	仲 b	深鉢	口	II		口:丸。肥帯15mm。文:斜沈線。質:泥質。表:明褐色。裏:明橙。混種:白・石英・チャート?。混大:0.5~1.0mm。混量:多。焼:良。調:表ナデ 裏ナデ。厚:9mm。他:ローリング受。	TP-No11,第6層,981120 台3045
	27	仲 b	深鉢	口	II		口:舌・肥帯22mm。文:羽状沈線。質:砂質。表:黒褐。裏:茶褐。混種:白・石英・チャート?。混大:粗mm。混量:多。焼:良。厚:5mm。	TP-3泥炭層シルト下位, 981022, 台3028
	28	前	深鉢	口			口:舌・口唇部に刺突文・肥帯22mm。文:斜沈線。質:砂<泥。表:茶褐。裏:茶褐。混種:石英。混大:1mm。混量:多。焼:悪。調:裏ナデ。厚:9mm。	台3024
	29	東	深鉢	口	Ia		口:丸・外反・肥帯45mm。文:曲線状押引・三叉。質:砂>泥。表:黒褐。裏:黒。混種:石英・チャート。混大:粗mm。混量:多。焼:中。調:表裏ナデ。厚:5~8mm。	No143 台3044
	30	東	深鉢	口	IIc		口:丸・直口・肥帯34mm。文:有段押引・弧状。質:砂>泥。表:黒褐。裏:黒褐。混種:白・石英。混大:粗mm。混量:多。焼:良。調:裏胡毛目状。厚:6~10mm。	西区サブトレ東西ライン 20区第12層 台3040
	31	東	深鉢	口	Ic		口:山形?舌。文:有段押引・弧状。質:泥質。表:赤褐色。裏:赤褐色。混種:白・石英・チャート?。混大:1.5ミリ以上mm。混量:多。焼:良。調:表ナデ 裏ナデ。厚:12mm。他:市来土器の影響を受ける。	No143西側,第7層(5~10), 990819,中央区,第7層。 台3045
32	東	深鉢	口	IIb		口:丸・直口。文:横位押引・扁平。質:砂<泥。表:茶褐。裏:赤褐。混種:白・石英。混大:粗mm。混量:多。焼:悪。調:表裏ナデ。厚:10mm。他:口縁裏面にも繪文。	中央区試験No143第11層 台3055	
33	東	深鉢	口	IIb		口:舌・直口・肥帯37mm。文:横位押引・弧状。質:砂<泥。表:黒褐。裏:淡茶。混種:石英。混大:粗mm。混量:多。焼:中。調:表裏ナデ。厚:7~12mm。	TP-No11第6層 台3041	
34	東	深鉢	口	Ia		口:舌・外反。文:曲線状押引・弧状。質:砂質。表:暗灰。裏:淡黄。混種:石英。混大:1mm。混量:多。焼:中。厚:13mm。	南区第11層	

<凡例>「土器形式」の項目(前)〔面縄前庭式土器〕、仲(仲泊式土器)、東(面縄東洞式土器)を示す
「観察事項」の項目(口)〔口縁部の形質〕、文(文様)、質(砂質・泥質)、表(色)、裏(色)、混種(混入物の種類)、
混量(混入量)、混大(混入物の大きさ)、焼(焼成)、調(器面調整)、厚(器厚)、他(その他など)
「地区・台帳番号」の項目(台)は台帳番号を示す。低湿地区台帳番号4CDに収録

表4 面縄前庭式土器・仲泊式土器・面縄東洞式土器観察一覧③

西版	挿図	土器形式	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第28 国 版	35	東	深鉢	口	IIc		口:舌・直口。文:有段押引・弧状。質:砂質。表:黒褐。裏:淡黒。混種:石英・橙。混大:粗mm。混量:多。焼良。厚:8mm。他:ローリング受。	中央区試掘No.143第10層最下部 台3051
	36	東	深鉢	口	Ib		口:舌・外反。文:横位押引。質:砂質。表:灰白。裏:灰白。混種:石英。混大:1mm。混量:中。焼良。厚:8mm。他:ローリング受。	1083,北・中央境,第11層,000810,1135 台3046
	37	東	深鉢	口	IIb		口:舌・直口。文:横位押引・扁平。質:中。表:暗赤褐。裏:茶褐。混種:石英・チャート。混大:1mm。混量:多。焼良。調:裏ナデ。厚:13mm。他:口唇部にも施文。	南区第11層(礫上面) 台3056
	38	東	深鉢	口	IIb		口:扁平・直口・15mm。文:横位押引(割目状)。質:砂>泥。表:淡茶。裏:茶褐。混種:石英・橙。混大:1mm。混量:中。厚:8mm。他:ローリング受。	
	39	東	深鉢	口	Ib		口:扁平・外反・肥帯25mm。文:横位押引・八字状。質:砂>泥。表:淡黒。裏:淡茶。混種:石英・砂粒。混大:粗mm。混量:多。焼中。厚:9mm。他:ローリング受。	1024,伊礼,原C遺跡No.11第8,7層混じり,981120,2005.6.7空番へ入力
	40	東	深鉢	胴	IIb		文:有段押引・弧状。質:砂質。表:灰白。裏:黄灰。混種:石英・透明。混大:2mm。混量:多。焼中。厚:9mm。	
	41	市	深鉢	口	IIb		口:扁平・直口。文:横位押引+縦位沈線。質:砂質。表:灰白。裏:黄灰。混種:石英・砂粒。混大:粗mm。混量:多。焼良。厚:7mm。他:口唇部にも施文。	中央区中央区・西区間畦第7層b 台3028
	42	東	深鉢	口	IIb		口:舌・直口。文:不明瞭。質:砂質。表:茶褐。裏:茶褐。混種:石英・砂粒。混大:1mm。混量:多。焼中。厚:6mm。他:ローリング受。	北区第10層最下部 台3052
	43	東	深鉢	口	IIb	□11.4cm	口:扁平・直口。文:横位押引・4条。質:砂>泥。表:橙褐。裏:橙茶。混種:石英。混大:1mm。混量:少。焼良。調:裏ナデ。厚:7mm。	台3046
	44	東	深鉢	胴	IIa		文:曲線状押引・二又。質:砂<泥。表:橙褐。裏:橙褐。混種:石英。混大:1mm。混量:少。焼良。厚:7mm。	No.143,Bトレンチ,東壁除去,第11層,991220 台3049
	45	東	深鉢	胴	IIa		文:横位押引。質:泥質。表:赤茶。裏:赤茶。混種:白・貝?。混大:0.5~1.0mm。混量:中。焼良。調:表ナデ。厚:5mm。積痕:有。積幅:0.8/1.7(cm)。他:断面サンドウィッチ状で灰色。	No.143百鶴部分,第6層b,10~15cm,990325,中央区,第6層。台3043
	46	東	深鉢	胴	Ib		文:横位押引。質:泥質。表:明橙。裏:淡茶。混種:白・石英・チャート。混大:1.0~1.5mm。混量:少。焼良。調:表ナデ。厚:6mm。積痕:有。	南区サブトレ中央,灰白色(混砂)層,011101,南区,灰白色(混砂)層。 台3042
	47	伊	深鉢	口			口:扁平・直口。文:横位押引。質:中。表:黒褐。裏:淡黒。混種:石英・チャート。混大:2mm。混量:多。焼良。厚:6mm。	台3053
	48	伊	深鉢	胴			文:扁平鋸歯+横位押引。質:砂>泥。表:淡茶。裏:茶褐。混種:石英・チャート。混大:細mm。混量:少。焼良。調:表・刷毛目状。裏:ナデ。厚:7mm。	中央区試掘No.143第10層(淡緑灰色土より1つ下層) 台3054
	49	前	深鉢	底		底:3.8cm	質:中。表:黒褐。裏:黒褐。混種:透明。混大:粗mm。混量:多。焼良。調:表ナデ丁字。厚:7~12mm。他:孔房状。	No.143東側,第9層(砂質),991025 台3034
50	東	深鉢	底		底:8cm	質:砂>泥。表:黄灰。裏:黄灰。混種:石英。混大:粗mm。混量:多。焼中。厚:7mm。他:平底・ローリング受。	東区サブトレ東西ライン4区第12層 台3058	
51	東	深鉢	底		底:10.5cm	質:砂>泥。表:橙褐。裏:黄灰褐。混種:石英。混大:1mm。混量:少。調:表・刷毛目状。裏:ナデ。厚:6~12mm。他:平底。		

<凡例>「土器形式」の項目「前(面縄前庭式土器)・仲(仲泊式土器)・東(面縄東洞式土器)」を示す
「観察事項」の項目「口:(口縁部の形態)・文:(文様)・質:(砂質・泥質)・表:(色)・裏:(色)・混種:(混入物の種類)・混量:(混入量)・混大:(混入物の大きさ)・焼:(焼成)・調:(器面調整)・厚:(器厚)・他:(その他など)」
「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。低湿地区台帳番号はCDに収録



第28図 面縄前庭式土器・仲泊式土器・面縄東洞式土器

7) 縄文晩期土器

縄文晩期の土器は、殆どが小片であり、全形の窺える資料は第29図2のみであった。当該期に属する土器を器形的特徴・胎土等から大きく1～4類に分類した。以下に分類基準を記述する。

- 1類 外反する口縁部から頸部がくびれ、肩部で明瞭な稜を有し直線的に底部へ移行する。口縁部に最大径を持ち、底部は平底になる。いわゆる黒川式土器の影響を強く受けていると考えられる資料である。
- 2類 1類に比べ頸部のくびれは弱く、緩やかな弧状を呈する。口縁部は弱く外反する。石英・赤色・砂粒を多く含むもの。
- 3類 混入物は2類に類似し、外耳を持つもの。2・3類は、器形的特徴等から仲原式の範疇に収まると考えられる。
- 4類 その他の土器。

1類 (第29図1・2)

1は、頸部の屈曲がやや弱く口唇部は平坦になる。内外面とも良好なナデを施し、頸部外面には横位のナデ痕が明瞭に残る。器色は灰色を呈す。胎土は泥質で砂粒を含み、器面はポーラス状を呈する。2は、当該期における土器資料の中で唯一全形が復元できた浅鉢資料である。口唇部はやや丸みを帯び、緩やかな波状口縁状を呈す。外反する口縁は、頸部でく字状に強くくびれ、明瞭な稜を持つ肩を形成し、径の小さい平底の底部へ向けて直線的に推移する。内外面とも良好なナデを施し、頸部外面には横位のナデ痕が明瞭に残る。胎土は泥質で、混入物に石英を含む。器色は黒色で、器面には整形時の指頭痕が残る。鹿児島県口置郡吹上町黒川洞穴遺跡 (1952) 出土の土器 (九州地方縄文晩期標式土器) の影響を強く受けた土器と考えられる。宜野湾市宇地泊兼久原遺跡 (1989) からも黒川式土器の概念で捉えきれぬ土器が報告されている。

2類 (第29図3～8)

3～8は、1類に比べ口縁部の外反と頸部のくびれが弱くなり、直線的になる。肩部に僅かな稜を残す。6は、弱く外反する口縁部資料で、肩部の稜は確認できない。4・5は、肩部に横位の突帯が張り付く。稜線を意識したものか。3～6は口唇面が平坦で、7・8は丸みを帯びる。

3類 (第29図9～14)

9～14は、弧状の耳を持つ。器面調整は内外面ともナデで、混入物に石英・砂粒を含む。10、11は、特に多く含まれる。12～14は直線状の耳を持つ。耳断面形状はそれぞれ異なり、9・12・13は正三角形形状、11は直角三角形形状、10・14は舌状となる。

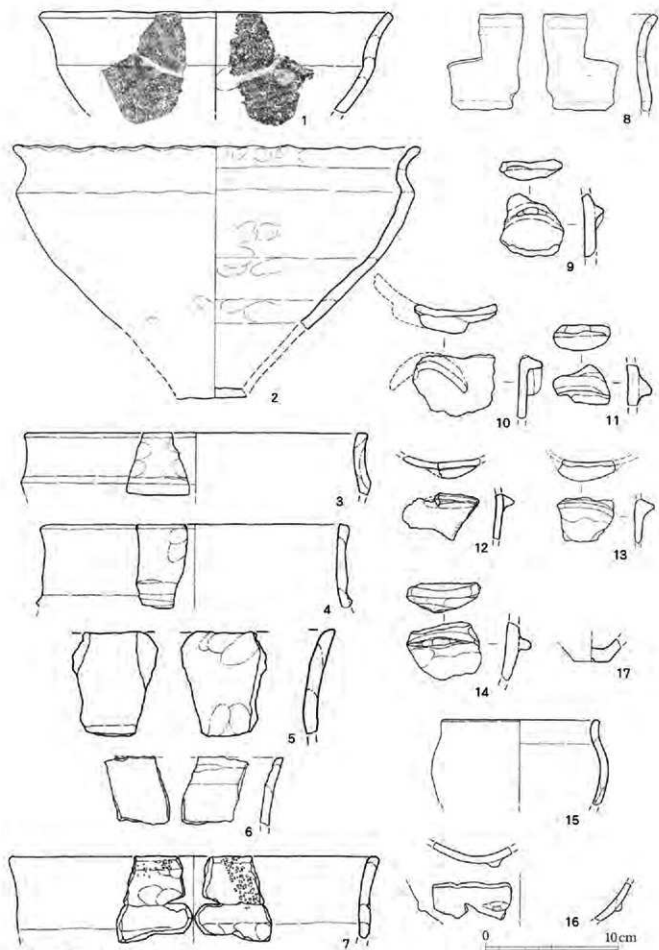
4類 (第29図15～17)

15は、外反する口縁部から頸部が緩やかにくびれ、胴部が球状に近くなる。口唇面はほぼ平坦である。器色は黒褐色を呈し、頸部には焼成時の黒斑が見られる。器面調整は、内外面とも丁寧なナデ仕上げ。混入物に白色、石英、輝石、赤色粒を含む。16は、瘤状突起が添付される胴部資料である。器色は黒褐色を呈し、石英・砂粒を含む。17は、尖底をやや潰して平底状にした底部資料である。外底中央には刺突痕が1つ見られる。胎土は砂質で橙褐色を呈し、石英・砂粒を含む。

表5 縄文晩期土器観察一覧

版	挿図番号	時期	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第29 園 版	1	晩	深鉢	口	1	□:26.8cm	口:角。質:砂<泥。表:灰黄。裏:灰。混種:石英。混大:細。混量:少。焼:中。調:表裏器面調整丁寧。ナデ・アバタ状。厚:9~10mm。	南区第11層(礫層)・中央区-東区間畦サプトレ南 北ライン混雑砂層 台3065
	2	晩	鉢	口	1	□:30.9cm 底:5.5cm 高:18.6cm	質:砂質。表:黒。裏:黒。混種:石英・黒。混大:細。混量:多。焼:良。調:表裏良好ナデ。厚:10mm。積痕:有。積幅:4.7/5.5/1.8/2.0/(cm)。他:表面煤痕有。	東区サプトレ混雑砂層+東区混雑砂層+中央区-東区間畦樹根下の層+中央区樹根下の層+中央区-東区間畦サプトレ東西ライン混雑砂層+中央区混雑砂層、No143東側第5層最下部(砂溜まりのレベルから2cm下付)+中央区第5層、中央区サプトレ南北ライン混雑砂層+中央区第11層
	3	晩	鉢	口	2	□:25.8cm	口:角。質:中。表:橙褐色。裏:橙褐色。混種:白・石英・チャート・黒色粒。混大:2mm。混量:多。焼:良。調:表ナデ、捺痕・裏ナデ。厚:8mm。積痕:有。	南区第11層(礫上面)。 台3064
	4	晩	深鉢	口	2	□:23.3cm	口:角。質:砂>泥。表:橙褐。裏:茶褐。混種:白・石英。混大:1mm。混量:多。焼:良。調:表ナデ・裏ナデ。厚:6~8mm。積痕:有。積幅:1.0/4.0/1.0(cm)。	東区サプトレ混雑砂層、東区混雑砂層 台3071
	5	晩	深鉢	口	2		口:平短。質:砂>泥。表:淡黄褐。裏:淡黄褐。混種:白・石英。混大:2mm。混量:多。焼:良。調:表ナデ・表指痕。厚:7~8mm。積痕:有。積幅:2(cm)。	施埋土、中央区粘質 台3068
	6	晩	深鉢	口	2		口:角。質:砂<泥。表:灰褐。裏:灰褐。混種:白・石英・チャート。混大:2mm。混量:多。焼:良。調:表ナデ・裏ナデ。厚:7mm。積痕:有。積幅:0.7/2.0/2.3(cm)。	No143Bトレンチ第9層、中央区第9層 台3050
	7	晩	深鉢	口	2	□:28cm	口:丸。質:砂>泥。表:明茶。裏:明茶。混種:石英・粘板岩。焼:中。調:表裏ナデ。厚:9mm。	
	8	晩	深鉢	口	2		口:丸。質:砂>泥。表:淡黄。裏:淡黄。混種:石英・灰色粒。混大:粗。混量:多。焼:良。調:裏ニビ痕。厚:8mm。	台3083
	9	晩	深鉢?	胴耳	3		質:砂>泥。表:淡黄。裏:淡黄褐。混種:砂・チャート。混大:2mm。混量:多。焼:中。調:ナデ。厚:6~8mm。他:外耳・弧状。	北区盛土、崩落土 台3075
	10	晩	深鉢?	胴耳	3		質:砂>泥。表:灰黄。裏:黄茶。混種:石英・チャート。混大:粗。混量:多。焼:良。調:ナデ。厚:7mm。他:外耳・弧状。	中央区東側第11層 台3074
	11	晩	深鉢?	胴耳	3		質:砂>泥。表:明赤。裏:明赤。混種:石英・チャート類多し。混大:粗。混量:多。焼:良。調:ナデ。厚:10mm。他:外耳・取手。	No143西側第7層(5~10cm) 台3071
	12	晩	深鉢?	胴耳	3		質:中。表:灰褐。裏:灰褐。混種:石英。混大:3mm。混量:多。焼:悪。厚:5mm。他:外耳。	中央区西側第11層 台3073
	13	晩	深鉢?	胴耳	3		質:中。表:淡黄。裏:淡黄。混種:橙色粒・石英・粘板岩。混大:2mm。混量:多。焼:良。調:ナデ。厚:5~6mm。他:L字口縁・外耳。	北区盛土、崩落土 台3076
	14	晩	深鉢?	胴耳	3		質:砂質。表:灰。裏:灰。混種:石英。混大:1mm。混量:多。焼:良。調:ナデ。厚:8mm。他:外耳。	中央区-東区間畦サプトレ 東西ライン混雑砂層 台3072
	15	晩	鉢	口	4	□:12cm	口:丸。質:砂<泥。表:黒褐。裏:黒褐。混種:白・石英・輝石・橙色粒。混大:細。混量:少。焼:良。調:表丁寧なナデ・裏丁寧なナデ。厚:6mm。他:裏面に煤痕有・1013と接合。	No143東側第9層最下部+中央区第9層 台3066
	16	晩	鉢	胴	4		質:砂<泥。表:黒。裏:黒。混種:石英。混大:1mm。混量:少。焼:良。調:ナデ。厚:5mm。他:裏面に煤痕有・粒状凸部。	東区サプトレ混雑砂層 台3078
	17	晩	底		4	底:2.6cm	質:砂>泥。表:明赤。裏:赤褐。混種:チャート・石英。混大:粗。混量:少。焼:中。厚:7mm。	No143 台3069

＜凡例＞「観察事項」の項目 □: (口縁部の形態)、質: (砂質・泥質)、表: (色)、裏: (色)、混種: (混入物の種類)、混量: (混入量)、混大: (混入物の大きさ)、焼: (焼成)、調: (器面調整)、厚: (器厚)、他: (その他など)
「地区・台帳番号」の項目 台は台帳番号を示す。概説地区台帳番号はCDに取替。「-」は土器接合



第29図 縄文晩期土器

8) 貝塚後期土器

貝塚後期（以下単に後期）の土器は、接続作業により全形の窺える資料が幾つかあった。当該期に属する土器を、胎土・器面調整から、大きく2類に分けた。1類は、砂質～砂泥質の胎土で、ナデによる器面調整が行われているものと、器面に指頭押圧痕が残るものが見られ、後期前葉～中葉の範疇におさまると考えられるもの。2類は、砂泥質～泥質の胎土で、器面調整に刷毛目状工具を使用しているものも見られ、後期後葉の範疇におさまると考えられるものとした。さらに、口縁部・口唇部の形状で下表のように細分した。以下各類毎に記述する。

貝塚後期土器の口縁部・口唇部形状分類表

口縁部	直口 → A	外反 → B	その他 → C
口唇部	平坦 → a	舌状 → b	その他 → c

1 Aa類 (第30図1・2)

1・2・16は、直口口縁で口唇部が平坦になる資料である。1は、口縁部に最大径を持ち半円状の器形を呈す。内外面ともナデ消されずに指頭痕が残る。外器面では口縁付近に、内器面では胴部に焼成時に生じた黒斑が見られる。2は、内面の指頭押圧痕はナデ消されず残り、外面は丁寧にナデ消している。白色・黒色輝粒を含む。

1 Ab類 (第30図3)

3は、直口口縁で口唇部がやや丸くなる資料である。口縁内側に緩やかな窪みを形成する。石英・砂粒を多く含み、焼成は非常に良好である。

1 Ba類 (第30図4～9・15)

4～9は、外反口縁で口唇部が平坦になる資料である。4は、最大径が口縁部と胴上部に位置する。外面は、底部から口縁部に向けて刷毛目状調整を行った痕跡が見られ、頸部は横位のナデを施す。内面は横位に刷毛目状調整を行っている。外面口縁部付近は煤痕が残る。5・6・8は、口唇部を平坦にした結果、口縁端部が若干厚くなっている。7は、他の資料に比べ口縁端部が丸みを帯びる。15は、外面に指頭押圧痕が明瞭に残る。

1 Bb類 (第30図10～14)

10～14は、外反口縁で口唇部が舌状になる資料である。10は、石英・砂粒の混入が多く厚手の口縁である。11・12は、泥質で外器面が灰褐色を呈する。12の外面は刷毛目状調整痕が見られる。11・12は、やや新しくなる印象を受ける。13・14は、器表面にナデ痕が残る。

その他 (第30図16～20)

16・17は小片の為、口縁形状不明。口唇部は、16が平坦、17が舌状になる。18は、壺の口縁部で外反舌状（Bb類）である。胎土は砂質で黄灰色を呈す。19は、壺の頸部で外面に1条の細沈線を横位に施す。外器面は、ナデによる丁寧な器面調整が行われるが、内器面は粗く仕上げている。

20は、尖底に近い丸底の底部から胴部が逆ハ字状に開く資料である。胎土は砂泥質で、器色は暗茶褐色を呈し、輝石・黒色・白色・砂粒を含む。器面調整は、内器面の方が丁寧に刷毛目状調整を行っている。外器面はナデ調整を行っているが、指頭痕が残る。

2Ba類 (第30図3～7)

3～7は、外反口縁で口唇部が平坦になる資料である。3は、外反する口縁部から膨らみの弱い胴部資料で、最大径は口縁部に位置する。内器面は刷毛目状調整痕が見られ、外器面頸部には横位のナデ痕が残る。口縁部には粒状突帯が剥がれ落ちた痕が見られる。4は、口唇部が特に平坦に整形されており、口縁部が逆L字状を呈す。φ2～3mm大の赤色粒が多く混入する。5は、頸部に鋸歯状沈線文を施した後、鋸歯文下部に又状沈線文を横位に施す。口唇部には、半裁竹管による刺突文を不規則に施す。内器面には刷毛目状調整痕が見られる。横位の調整を行った後、頸部以下を縦位に行っている。アカジャンガー式土器の口縁部資料と考えられる。6は、口唇部に規則的な刺突文を施し、外器面の頸部直下には、幅5mm程の浅い押し文を横位に施す。

2Bb類 (第30図8・9)

8・9は、外反口縁で口唇部が舌状になる資料である。8は、横位の沈線文が頸部に1条、胴部から頸部にかけて縦位に1条施される。口縁端部はやや丸みを帯びる。9は、微弱な外反口縁から、頸部らしい頸部を持たないまま胴部へ移行する。口唇直下に1条の沈線文を、胴上部に又状工具による沈線文を1組それぞれ横位に施し、その間を鋸歯文で充填する。

2Bc類 (第30図2・11～16)

2は、口唇面をナデで平坦面を形成しようとした痕跡が認められるが、結果として丸くなっている。内外器面とも丁寧なナデを施す。外器面頸部では、横位のナデが明瞭に残る。内器面胴下部では、縦位のナデが見られる。細沈線文が外器面頸部直下に1条見られる。11は、内外口縁部に指頭押圧による調整痕が明瞭に残り、粘土帯接合部が沈線状に見られる。12～16は小片である。12・16の口唇部は、外器面側で稜を持つが、内器面側はなだらかになる。16は、胎土に橙黄色粒を含み、外器面に横位のナデ痕が見られる。13は、内外器面とも横位のナデ痕が見られる。14は、口唇面がやや平坦になる。外器面には焼成時の煤痕が残る。15は、口唇部を平坦整形しようとしたのか、口縁部が弱い逆L字状になる。口唇面には刺突文が見られる。

2Cc類 (第30図1・10)

1は、接合によりほぼ完全復元が可能となった資料である。口縁端部は、平坦もあれば舌状もあり、口縁部形態は、直口もあれば外反も認められる。頸部では、口縁部から胴部にかけてくの字状に屈曲する箇所もあれば、口縁部からストレートに胴部に移行する箇所も見られる。このように、口縁部・頸部形態は、観察する箇所により様ではない。底部はくびれ平底となる。胎土は泥質で、外器面は橙褐色・こげ茶色を、内器面は橙灰色を呈する。器面調整は、外器面では底部から口縁部に向け垂直にナデ上げ、内器面では底部から口縁部に向け反時計回りに刷毛目状調整を行う。外器面は口縁部と腰部が、内器面は口縁部の一部が煤けている。10は、粗雑な山形口縁の頂部に鞍状突帯を貼付けた口縁部資料である。器表面には4条1組の沈線が施される。

・その他 (第30図17～20)

17～20は、くびれ平底土器の底部である。外器面は全て、にぶい橙色を基調とし、内器面は灰褐色・黒褐色を呈する。胎土は全て泥質で、赤色・17は内器面に、18は外器面に、19は内外器面に刷毛目状調整痕が見られる。

表6 貝塚後期土器観察一覧①

図版	挿入番号	時期	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第30 図版	1	後	深鉢	口	1Aa	□:32cm	質:砂>泥。表:淡黄橙。裏:淡黄橙。混種:黒・橙色粒。混大:粗。混量:少。焼:良。調:表指頭痕・裏指頭痕。厚6~10mm。積痕:有。積幅:4/8.5/4.3(cm)。他:口縁部。	中央区第11層,中央区第11層+北トレンチ第11層+北区第11層+中央区南西隅第11層最下部+中央区第11層 台2030
	2	後	深鉢	口	1Aa	□:31cm	口:角。質:砂>泥。表:淡黄橙。裏:淡黄橙。混種:白・石英・輝石・黒粒。混大:粗。混量:中。焼:良。調:裏ナデ・指痕・裏ナデ・指痕。厚:5~9mm。積痕:有。積幅:3.0/3.0(cm)。	北トレンチ第11層+北区第11層 台2028
	3	後	深鉢	口	1Ab		口:丸。質:砂質。表:淡橙。裏:淡橙。混種:石英・砂粒。混大:粗。混量:多。焼:良。調:裏ユビ痕有。厚:5mm。	TPNa1第6・7層 台3079
	4	後	深鉢	口	1Ba	□:26.3cm	口:角。質:砂<泥。表:橙褐。裏:茶褐。混種:橙色粒。混大:2mm。混量:少。焼:良。調:表擦痕・指圧痕・裏擦痕・指圧痕。厚7mm。積痕:有。積幅:4.5/3.4/5/3.5(cm)。他:口縁部擦痕有。	西区サブトレ清掃中,西区清掃中,北区V区+北区第9層(最下部)+北区+中央区間畦第10層+北トレンチ第9層(西壁崩落土) 台2027
	5	後	深鉢	口	1Ba		口:角。質:砂>泥。表:淡橙。裏:灰橙。混種:石英。混大:2mm。混量:多。焼:良。厚:6mm。	№143Bトレンチ第10層最下部 台3062
	6	後	深鉢	口	1Ba		口:角。質:砂>泥。表:橙褐。裏:橙褐。混種:石英。混大:2mm。混量:多。焼:中。調:裏ユビ痕。厚:7mm。	中央区東側第9層(砂質) 台3093
	7	後	深鉢	口	1Ba		口:丸。質:砂>泥。表:茶褐。裏:茶褐。混種:石英・粘板岩。混大:1mm。混量:多。焼:良。調:ナデ。厚:8mm。	№143壁面崩落土層不明 台3050
	8	後	深鉢	口	1Ba		口:角。質:砂>泥。表:黄褐。裏:茶褐。混種:石英。混大:2mm。混量:少。焼:良。調:裏ユビ痕。厚:9mm。	中央区・西区間畦混雑砂層第1回取り上げ 台3063
	9	後	深鉢	口	1Ba		口:角。質:砂。表:淡茶。裏:淡茶。混種:石英。混大:2mm。混量:多。焼:良。調:裏面アバタ。厚:10mm。	№143壁面崩落土及び雨天後床面清掃 台3069
	10	後	深鉢	口	1Bb		口:丸。質:砂質。表:灰黄。裏:灰黄。混種:石英・砂粒・粘板岩。混大:粗。混量:多。焼:中。調:アバタ。厚:12mm。	南区サブトレ3.5~2m層(混貝) 台3082
	11	後	深鉢	口	1Bb		口:角。質:中。表:黒。裏:淡茶褐。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:中。調:裏ユビ痕。厚:8~9mm。他:口縁直下に沈線。	中央区・西区間の畦D-8第9層(砂質) 台3063
	12	後	深鉢	口	1Bb		口:丸。質:砂<泥。表:黒褐。裏:灰褐。混種:石英。混大:粗。混量:少。焼:良。調:表裏器面調整丁寧・表刷毛目・裏ナデ。厚:7mm。	№143壁面崩落土及び雨天後床面清掃 台3104
	13	後	深鉢	口	1Bb		口:丸。質:砂。表:灰褐。裏:灰褐。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:中。調:裏ユビ痕。厚:8mm。	中央区・西区間畦第7層 台3069
	14	後	深鉢	口	1Bb		口:角。質:中。表:淡黄褐。裏:淡黄褐。混種:白・石英。混大:1mm。混量:多。焼:良。調:裏ナデ・裏ナデ・口縁部ユビ痕。厚:6mm。積痕:有。積幅:0.8/2.2(cm)。	サブトレ西ライン19区細灰色砂層+中央区第13層 台3085
	15	後	深鉢	口	1Ba		口:角。質:中。表:淡橙褐。裏:淡橙褐。混種:石英。混大:1mm。混量:中。焼:良。調:有段?裏ユビ痕・ナデ。厚:7mm。	試掘143 台3062
	16	後	深鉢	口	他		口:角。質:砂>泥。表:橙褐。裏:橙褐。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:中。調:裏・口縁部ユビ痕。厚:6mm。	

<凡例>「観察事項」の項目(口:口縁部の形態)。質:(砂質・泥質)。表:(色)。裏:(色)。混種:(混入物の種類)。混量:(混入量)。混大:(混入物の大きさ)。焼:(焼成)。調:(器面調整)。厚:(器厚)。他:(その他など)
「地区・台帳番号」の項目(台は台帳番号を示す。低層地区台帳番号はCD1以降。+)は土器接合!

表6 貝塚後期土器観察一覽②

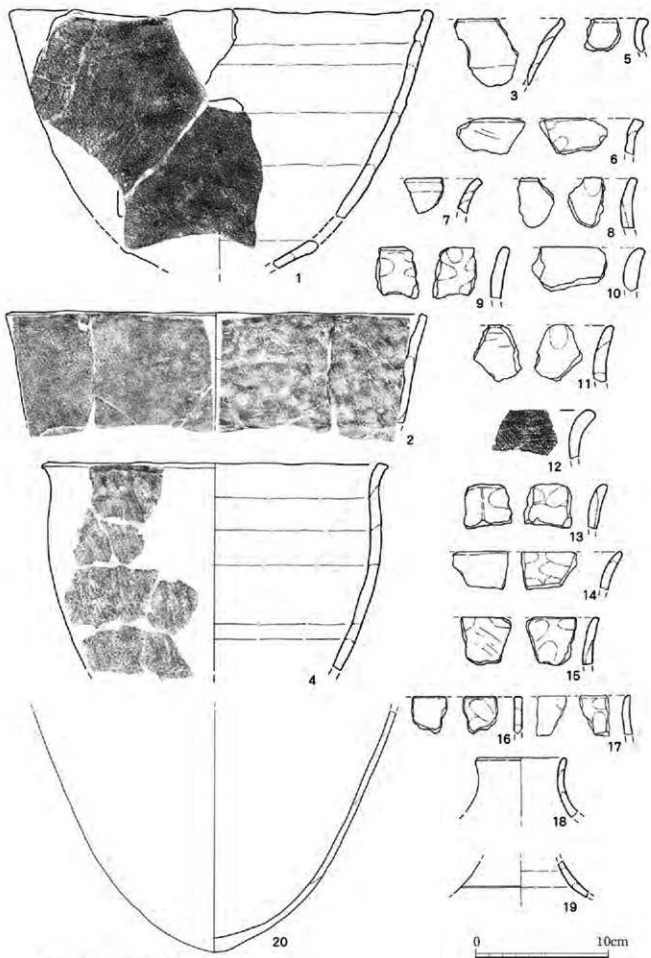
図版	挿入番号	時期	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第30図	17	後深弁	口	他			質:砂<泥,表:茶褐,裏:淡橙。混種:石英,砂。混大:2mm,混量:多,焼:中,調:裏指圧痕,厚:6mm。	南トレンチ第8層(畿下部)台3070
	18	後壺	口	他	口:6.9cm		口:舌,質:砂>泥,表:灰,裏:淡灰褐,混種:石英,混大:粗,混量:少,烧:良,調:表ナデ,厚:5mm,他:ローリング受。	台3100
	19	後蓋	須	他			口:舌,文:沈線,質:中,表:黄灰,裏:黄灰,混種:石英・白色細粒,混大:1mm,混量:中,烧:中,調:表器面調整明瞭,厚:5mm。	南区第11層(礎層)台3081
第48図	20	後深弁	底	他			質:泥質,表:暗茶褐,裏:暗茶褐,混種:白色。混大:1mm,混量:多,烧:良,調:表ナデ・捺痕・指圧痕・裏ナデ・捺痕・指圧痕・刷毛目,厚:5~11mm,積痕:有,積幅:6.5/6.7/6.0/4.3(cm),他:丸底。	中央区-西区間畦第9層(砂質)D-4,中央区第9層,中央区-西区間畦灰層(砂質)D-9,中央区第9層,№143西側炭化木周辺第9層(5~10),中央区第9層,№143西側第9層(砂質),中央区第9層,№143西側炭化木周辺第9層(5~10),中央区第9層,中央区西壁第9層(砂質),中央区第9層,南区サブト北側混砂EL=2.282m,D-535,南区混砂,南区サブト北側杉上面EL=2.282m,D-562,南区シルト,北・中央境畦50cmレベル北半分,中央区,№143西側樹根№3第9層(砂質),中央区第9層
					1	後深弁	外形	2Cc
第49図	2	後深弁	口	2Bc			質:泥質,表:明灰,裏:橙灰,混種:橙色粒・石英,混大:2mm,混量:中,烧:中,調:表裏器面調整丁寧・エビ痕有,厚:6mm,他:L字口縁・玉縁状。	北区第9層台2005
	3	後深弁	口	2Ba	口:29.1cm		口:角,質:泥質,表:茶褐,裏:茶褐,混種:白・橙色粒,混大:1mm,混量:多,烧:良,調:表ナデ・捺痕・指痕・裏ナデ・指痕・捺痕,厚:4~6mm,積痕:有,積幅:1.3/3.5/1.3(cm),他:粒状凸帯剥落。	№143西側第9層(砂質),中央区第9層,№143西側樹根№3第9層(砂質),中央区第9層台2029
	4	後深弁	口	2Ba	口:27.4cm		口:角,質:泥質,表:橙褐,裏:黒褐,混種:白・橙色粒,混大:1mm,混量:中,烧:良,調:表ナデ・捺痕・指痕・裏ナデ・捺痕・指痕,厚:6mm,積痕:有,積幅:0.5/3.0/3.0(cm),他:L字口縁。	中央区-西区間畦第8層,中央区第8層台3090
	5	後深弁	口	2Ba	口:25cm		口:角,文:曲線文+幅広沈線,質:泥質,表:淡茶褐,裏:淡茶褐,混種:白・橙色粒,混大:1mm,混量:多,烧:良,調:表ナデ・捺痕・裏ナデ・エビ,厚:5mm,積痕:有,積幅:2.0/6.5(cm),他:口唇部に半段竹管状刺突文。	北区-中央区間畦,中央区,南区サブト灰白EL=2.408m,D-843?,南区灰白,北区第9層(砂質),北区第9層台3087

<凡例>「観察事項」の項目①②③(口縁部の形態),質:(砂質・泥質),表:(色),裏:(色),混種:(混入物の種類),混量:(混入量),混大:(混入物の大きさ),焼:(焼成),調:(器面調整),厚:(器厚),他:(その他など)
「地区・台帳番号」の項目①は台帳番号を示す。低層地区台帳番号はCDに④(録,「+」は土器接合)

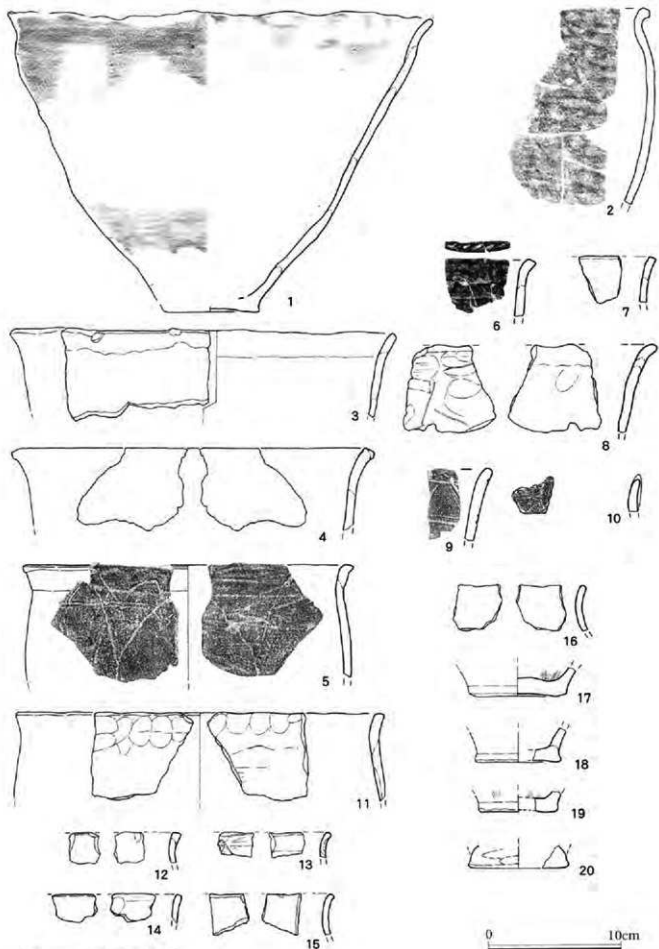
表6 貝塚後期土器観察一覧③

図版	挿入番号	時期	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第31図版	6	後	深鉢	口	2Ba		口:角.文:斜状刻目.質:泥質.表:暗茶褐.裏:茶褐.混種:白・橙色粒.混大:1mm.混量:多.焼:良.調:表ナデ・捺痕.厚:7mm.積痕:有.積幅:2(cm).他:口唇部に半截竹管状刺突文。	Na143第10層(暗灰色細砂)+中央区第10層 台3089
	7	後	深鉢	口	2Ba		口:角.質:泥質.表:橙白.裏:暗橙白.混種:白・石英・イト?・黒粒.混大:2mm.混量:多.焼:良.調:表ナデ・捺痕・裏ナデ・捺痕.厚:5mm.積痕:有.積幅:1.8/1.6(cm)。	南トレンチ第9層(砂質) 台3050
	8	後	深鉢	口	2Bb		口:丸.質:砂<泥.表:灰褐.裏:灰褐.混種:石英・粘板岩.混大:粗.混量:少.焼:良.調:表器面調整丁寧.エビ痕:有.厚:6mm.他:ヘラガキ。	Na143西側樹根No3第9層(砂質) 台3091
	9	後	深鉢	口	2Bb		口:丸.文:斜状沈線.質:砂<泥.表:暗茶.裏:暗茶.混種:橙色粒・粘板岩.混大:3mm.混量:中.焼:中.調:裏ナデ.厚:7mm。	中央区第11層 台2006
	10	後	深鉢	口	2Cc		質:泥質.表:明茶.裏:明茶.混種:橙色粒.混大:細.混量:少.焼:良.厚:6mm.他:縦凸帯文。	Na143北側第6・7層混じり 台3070
	11	後	深鉢	口	2Bc	口:27.7cm	口:角.質:砂>泥.表:茶褐.裏:黄褐.混種:石英・橙色粒.混大:3mm.混量:少.焼:良.調:表裏口縁部エビ痕・ナデ.厚:5~7mm。	中央区西壁第9層(砂質) 台3095
	12	後	深鉢	口	2Bc		口:角.質:砂.表:灰.裏:灰.混種:石英.混大:1mm.混量:多.焼:良.厚:5mm。	サブトレ東西ライン18区混種砂器
	13	後	深鉢	口	2Bc		口:角.質:中.表:暗灰.裏:灰.混種:石英.混大:粗.混量:少.焼:良.調:ナデ.厚:4mm.積痕:有.積幅:2.0(cm).他:幅広沈線。	南区サブトレ中央 台3094
	14	後	深鉢	口	2Bc		口:角.質:砂>泥.表:灰褐.裏:灰褐.混種:石英・白色細粒.混大:2mm.混量:多.焼:中.調:ナデ.厚:4mm.他:煤痕有。	Na143西側樹根下第9層最下部 台3096
	15	後	深鉢	口	2Bc		口:角.質:中.表:暗灰褐.裏:暗灰褐.混種:石英.混大:細.混量:少.焼:良.調:表ナデ・裏指圧痕.厚:25mm.他:口唇部に刺突文。	北区・中央区間セクション第10層 台3094
	16	後	壺	口	2Bc		口:角.質:中.表:暗灰褐.裏:暗灰褐.混種:橙色粒・石英.混大:細.混量:少.焼:中.調:表裏器面調整丁寧.厚:5mm。	北区・中央区間セクション第10層 台3094
	17	後	深鉢	底	他	底:7.4cm	質:泥質.表:にぶい橙.裏:黒褐.混種:白・橙色粒.混大:細.混量:少.焼:良.調:表ナデ・裏捺痕・指圧痕・刷毛目.厚:5~11mm.積痕:有。	南トレンチ川跡(礫面直上の粗砂層). 南区川跡
	18	後	深鉢	底	他	底:6.6cm	質:泥質.表:薄橙.裏:灰褐.混種:白・橙色粒.混大:細.混量:多.焼:良.調:表ナデ・裏ナデ.厚:6~10mm.積痕:有。	Na143西側第9層(砂質)+中央区第9層 台2008
	19	後	深鉢	底	他	底:5.6cm	質:泥質.表:にぶい橙.裏:灰褐.混種:白・橙色粒.混大:細.混量:少.焼:良.調:表ナデ・刷毛目・裏捺痕.厚:8mm。	南トレンチ第9層(砂質)+南区第9層 台2008
	20	後	深鉢	底	他	底:7.6cm	質:泥質.表:黄褐.裏:黄褐.混種:白・橙色粒・石英.混大:2mm.混量:中.焼:良.調:表ナデ・裏ナデ。	不明 台2008

<凡例>「観察事項」の項目(口:(口縁部の形態)、質:(砂質・泥質)、表:(色)、裏:(色)、混種:(混入物の種類)、混量:(混入量)、混大:(混入物の大きさ)、焼:(焼成)、調:(器面調整)、厚:(器厚)、他:(その他など)。「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。無地地区台帳番号はCDに収録。「-」は土器接合



第30圖 貝塚後期土器



第31圖 貝塚後期土器

0 10cm

9) グスク土器

グスク時代のものと考えられる資料を掲載した。確認できた器形に、鍋形・壺形・皿・その他・平底底部があり、全て無文であった。特に分類を行わず、特徴的な遺物のみ図化した。以下、それぞれの特徴を記述する。

・鍋形 (第32図3～8、11)

3は、舌状の口唇部を持つ直口口縁資料である。泥質の胎土に ϕ 1mm大の石英・砂粒をやや含む。外面は刷毛目状調整痕・煤痕が残り、内面は指頭押圧痕・ナデ痕が見られる。4は、口唇部舌状で外傾する口縁部である。胎土は砂質で、粘土帯接合部外面に横位の稜線及び調整痕が残る。5は、泥質の胎土に橙褐色粒を含む。外面は、口縁部に細沈線が1条、頸部に破線が1条施され、頸部以下に縦位の刷毛目状調整痕が明瞭に見られる。内面は未調整で粘土帯接合部が明瞭に残る。6は、多くの接合が可能で、比較的器形を窺い知る事ができた。外反する口縁部は若干厚く、口縁部から底部にかけて緩やかなS字状を呈する。外器面は煤痕(?)が器表面を厚く覆う。内外器面ともナデ調整を行う。胎土は砂泥質で、石英・砂粒を部分的に多く含む。7は、半円状の器形を呈する。胎土は泥質で橙褐色を多く含む。外器面はナデ調整を行い、内器面は刷毛目状調整を行う。外器面には煤痕が見られる。8は、平坦な口唇部を持つ直口口縁資料である。胎土は砂泥質を呈し、石英・雲母・砂粒を含む。内外器面とも丁寧なナデ調整を施す。黒褐色を呈する。11は、浅鉢になると思われる器形である。外面は内外器面とも、刷毛目調整を行う。内器面は灰褐色を、外器面は黒褐色を呈す。口唇部は平坦になる。

・壺形 (第32図9・10)

9は、弱く外反する壺の口縁部破片である。胎土は砂泥質で橙灰色を呈し、橙褐色粒を多く含む。10は、口縁部と底部を欠く壺胴部である。直口する頸部から胴中央部で最大径をとり、底部は丸底になると思われる形状を呈する。胎土は泥質で橙褐色。外器面は縦位にナデを施し、内器面は刷毛目状調整を横位に施す。

・皿 (第32図12)

12は、小片の口縁部資料ではあるが、口唇面から図上の傾きを呈す皿状器形になる。胎土は砂質で石英・砂粒を含む。内外器面とも丁寧なナデ調整が施されている。器色は黄褐色を呈し、外器面には僅かに煤痕が見られる。

・その他 (第32図1・2)

1・2は壺形(?)を呈する資料である。1は、泥質の胎土に橙褐色粒が少量含まれる。2は、平坦な口唇面を持ち内径する口縁部から八字状に胴部が外に開く口縁部資料である。砂質の胎土に石英・砂粒を多く含む。器色は橙褐色を呈する。

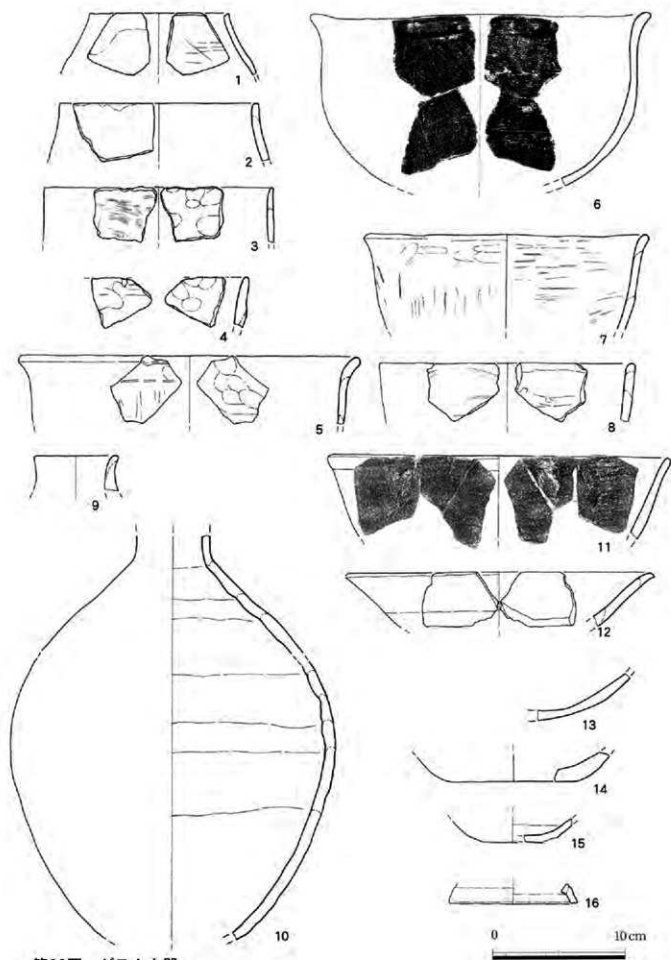
・底部資料 (第32図13～16)

13～16は底部資料である。13・14は、鍋形土器の底部資料になるものと思われる資料で、平底を呈す。13は、砂泥質の胎土に橙褐色粒を多く含む。外器面は下から上に、内器面は横位に刷毛目状調整を施す。外底下部は煤痕が見られる。14は、砂質の胎土を呈し、粗い石英・雲母・砂粒を多く含む。15は、有脚底部資料の脚が剥がれ落ちた痕跡が蛇の目状に器表面に残る。16は、15のような底部についていたと思われる脚資料である。

表7 グスク土器観察一覧

種別	種別番号	時期	形状	部位	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第32回 国版50	1	グ	壺?	口	口:10.6cm	口:舌,質:泥質,表:白茶褐,裏:白茶褐,混種:橙色粒・石英,混大:細,混量:少,焼:良,調:表裏器面調整丁寧,厚:4mm。	北区-中央区間陸第10層 台3099
	2	グ	壺?	口	口:15.1cm	口:舌,質:中,表:淡橙,裏:暗橙褐,混種:白・黒・石英,混大:1mm,混量:中,焼:良,調:表ナテ・裏ナテ・指痕,厚:6mm,積痕:有,積幅:1.0/3.3(cm)。	No143南壁第10層+中央区第10層 台3067
	3	グ	鍋?	口	口:17.4cm	口:舌,質:中,表:黄灰,裏:黄灰,混種:石英,混大:1mm,混量:少,焼:中,調:表器面調整丁寧・裏口縁部エビ痕,厚:4mm。	南区サブトレ南側管渠層
	4	グ	鍋?	口	口:17.4cm	口:舌,質:砂>泥,表:赤茶,裏:黄褐,混種:石英・橙色粒,混大:1mm,混量:中,焼:中,調:表裏エビ痕有,厚:9mm。	南トレンチ第10層上面・流水跡上面N-22・南トレンチ第10層上面・流水跡上面N-24 台3098
	5	グ	鍋	口	口:25.2cm	口:舌,質:泥質,表:灰褐,裏:淡灰,混種:橙色粒,混大:細,混量:少,焼:良,調:表裏器面調整丁寧,表痕位刷毛目・裏口縁部エビ痕,厚:6mm,他:L字口縁・表面保痕有・細線2条。	南区南壁樹根清掃時 台3092
	6	グ	鍋	口	口:27.4cm	口:丸,質:泥質,表:茶褐,裏:淡灰白,混種:白・石英・橙色粒,混大:1mm,混量:少,焼:良,調:表ナテ・指痕・裏ナテ・指痕,厚:6~9mm,積痕:有,積幅:1.5/3.0/5.5(cm),他:表面上部保痕有。	南トレンチ第8層+南区第8層+中央区盛上,中央区・盛上+南区西壁第10層(川跡),南区第10層+南トレンチ第9層(砂質)樹根周辺+南区第9層
	7	グ	鍋	口	口:21.4cm	口:丸,質:泥質,表:白黄褐,裏:白黄褐,混種:白・石英・橙色粒・滑石混入?,混大:細,混量:少,焼:良,調:表ナテ・指痕・刷毛目・裏ナテ・指痕・刷毛目,厚:6mm,積痕:有,積幅:2.5(cm),他:表面保痕有。	中央区筑取り上層部対面北壁崩落土緑灰砂層+中央区第13層+No.143西側(土器集)第9層(砂質)+中央区第9層 台2004
	8	グ	鍋	口	口:19.3cm	口:舌,質:砂>泥,表:黒,裏:黒,混種:埋石・雲母・石英,混大:1mm,混量:多,焼:良,調:表裏器面調整丁寧,厚:7mm。	東区サブトレ混雑砂層 台3095
	9	グ	壺	口	口:6.2cm	口:丸,質:泥質,表:薄橙,裏:薄橙,混種:橙色粒・石英,混大:粗,混量:多,焼:悪,調:表指痕・裏指痕,厚:6~10mm,積痕:有,積幅:2.1/0.5(cm)。	東区サブトレ混雑砂層,東区混雑砂層 台3101
	10	グ	壺	胴		質:泥質,表:茶,裏:茶,混種:白色粒,混大:2mm,混量:中,焼:悪,調:表痕位ナテ,厚:5~9mm,積痕:有,積幅:6.5(cm)。	北区第10層上面+北区第10層上面+北区第10層+北区第11層+北区-中央区間陸第10層+北区第10層+北区壁面崩落土第10層(最下部)+北区第9層(最下部)
	11	グ	鍋	口	口:25.8cm	口:舌,質:砂>泥,表:黒,裏:緑灰,混種:白・石英,混大:2mm,混量:中,焼:良,調:表ナテ・裏指痕,厚:4~10mm,積痕:有,積幅:0.4/1.0(cm)。	東区サブトレ管渠層(シイの実),東区第12層東区サブトレ混雑砂層,東区第11層,サブトレ北南ラインB区褐色粘土層,南区褐色粘土層,サブトレ東西ライン(東区)区管渠層(シイの実),2区-1,東区第12層,No.143西壁部区管渠層(磯崎),中央区管渠層,東区サブトレ混雑砂層,東区混雑砂層,サブトレ東西ラインB区東区落ち込み部(磯崎)その2,東区落ち込み部,東区サブトレ管渠層(シイの実),東区管渠層 台3099
	12	グ	皿	口	口:23cm	口:丸,質:砂>泥,表:淡茶,裏:淡茶,混種:白・石英,混大:2mm,混量:少,焼:良,調:表ナテ・裏ナテ,厚:6mm,積痕:有,積幅:1.0/3.3/1.1(cm)。	東区サブトレ混雑砂層+東区混雑砂層 台3089
	13	グ	鍋?	底		質:砂<泥,表:茶褐,裏:淡灰白,混種:白色・石英・赤色粒,混大:1mm,混量:少,焼:良,調:表ナテ・刷毛目・裏ナテ・刷毛目,厚:8mm,他:保痕有。	南トレンチ第10層上面・流水跡上面N-7,南区第10層+南トレンチ第10層上面・流水跡上面N-27+南区第10層 台3105
	14	グ	鍋?	底	底:9.7cm	質:砂質,表:暗オリーブ,裏:暗オリーブ,混種:石英,混大:3mm,混量:多,焼:悪,厚:8mm。	台3084
	15	グ	底	底	底:4.6cm	質:中,表:暗オリーブ,裏:暗オリーブ,混種:白・橙色粒・石英,混大:1mm,混量:少,焼:良,調:表裏器面調整丁寧,厚:6mm,他:脚台痕。	東区サブトレ混雑砂層 台3103
	16	グ	底	底	底:9.4cm	口:舌,質:砂>泥,表:灰,裏:灰,混種:石英・砂粒,混大:2mm,混量:多,焼:中,厚:4mm。	東区サブトレ混雑砂層

＜凡例＞「土器形式」の項目「グ(グスク土器)」[観察事項]の項目「口」:(口縁部の形態)・質:(砂質・泥質)・表:(色)・裏:(色)・混種:(混入物の種類)・混量:(混入量)・混大:(混入物の大きさ)・焼:(焼成)・調:(器面調整)・厚:(器厚)・他:(その他など)「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。低湿地区台帳番号はCDに収録。「+」は土器接合



第32図 グスク土器

2. 石器

低湿地区出土の石器は石斧86個、石鏃2個、刃器9個、石球6個、円盤8個、蔽き石42個、すり石11個、くがに石1個、くぼみ石2個、石皿、砥石4個、重し8個、石製品1個、尖頭器1個の計240個出土した。ここでは主な製品について概略を述べ、個々の大きさ、石質、出土地については表8の観察一覧に示した。

1) 石斧

打製(44個)、局部磨製(13個)、半磨製(15個)、磨製(14個)の計86個出土している。

打製石斧は短冊形(図版52-1・3・4・5・14)、バチ形(図版52-10・11・12・13)及び未製品(図版52-9・14・15)がある。同図15は扁平の礫を利用して、石斧を作ろうとしているようである。

局部磨製石斧はバチ形(図版52-8、図版53-16・17・18・22・24)、短冊形(図版52-6・7)、長方形(図版52-2)、楕円(図版53-18)がある。

半磨製石斧はバチ形(図版53-19・23)、短冊形(図版53-26・30)、長方形(図版53-21)、他に楕円がある。

磨製石斧は短冊形(図版53-20、図版54-28・29・33・35)、楕円(図版53-31・40)などがある。この中には弥生時代を代表する定角式石斧(図版54-33・35)が含まれている。石質も頁岩や黒色片岩で沖縄に産するものではなく、明らかに持ち込まれたものである。

これらの石斧は形状や刃縁の形や使用痕から縦斧と考えられるもの(図版52-8、53-24・25・26・27)、横斧と考えられるもの(図版52-6・7・12、図版53-19・20)がある。中でも図版52-1・12、図版53-19は湾曲が強い。

2) 石鏃(図版54-34・36)

砂質片岩を3mm程の厚さで木の葉状に加工したもので、2個出土した。

形状はいずれも有茎で、同図36は製品で同図34は平面形が整ってないことから整形途中のものと思われる。前者は北区第11層(混雑細砂層)、後者は出土地が不明である。

3) 刃器(図版54-37~40)

大きさが10cm前後、厚さが1.0cm程度の平行四辺形(同図37・38)あるいは楕円状(同図39・40)を呈するもの計4個出土した。いずれも石斧を二次利用したものである。

4) 石球(図版55-53、56-54・55)

大きさは異なるが球形を呈するものをここにまとめた。53はほぼ全面に蔽きの痕が見られる。54は上部は尖り、下部には円形の剥離が見られるが、他に加工は認められない。55は全体に粉ぼつ、風化気味である。53は蔽き石と考えられるが、後2者は用途は明瞭でない。

5) 円盤状石器(図版55-45・46・47・48・50)

周縁を打割で円形に整形したもので8個出土した。大きさは小(45・46)と中(47・48)、大(50)がある。石質はひん岩、砂岩(片状)、角閃岩が用いられている。46は石斧、48はくぼみ石を二次利用したものである。

6) すり石(図版57-67)

11個出土した。その中でも67は最も大きく、石質は雲母安山岩、7.5kgを量る。他は破損してい

表8 石器観察一覽①

図版番号	大a	中b	小c	残存	寸法	石質	観察事項	出土地	
図版52	1	石斧	打製	片刃	完形	長:16.2cm, 幅:6.3cm, 厚:1.6cm, 重:266g	緑色片岩	平面一短冊, 断面一板状。表裏一研磨。刃部が頭部より細い。上・側面一打割。片凸刃。刃縁は円刃、側面は下弧で湾曲。	北区 第11層 (燧石層) 台2085
	2	石斧	局部磨製	片刃	刃部	長:7.5cm, 幅:4.5cm, 厚:1cm, 重:55.50g	黒色片岩	平面一長方形, 断面一板状。表表面一刃部に近い部分は研磨, 側面は打割。片凸刃。刃縁は直刃、基部より刃部が細い。刃部に対して垂直に使用痕。	南区 第11層 台2332
	3	石斧	打製	扁平	刃一 体部	長:5.7cm, 幅:3.4cm, 厚:0.8cm, 重:28.07g	砂岩	平面一短冊, 断面一扁平。表面部分は研磨, 側面は根打割。片凸刃。刃縁は直刃、刃縁に数回の剥離と垂直に使用痕、ノミ状。	中央区 混雑砂層 台6903
	4	石斧	打製	扁平	完形	長:12.2cm, 幅:4.6cm, 厚:0.6cm, 重:61.3g	砂質片岩	平面一短冊, 断面一扁平。表面は研磨, 側及び頭部は打割。刃部は直刃、刃縁は直刃、基部より刃部が細い。刃部に対して垂直に使用痕。	北区 第10層 台3109
	5	石斧	打製	扁平	刃部	長:5cm, 幅:3.9cm, 厚:1cm, 重:29.62g	砂岩 (片状)	平面一短冊, 断面一扁平。刃部一研磨, 一部破損。刃縁一打割依研磨。片凸刃、刃縁は円刃。	北区 第10層 台6849
	6	石斧	局部磨製	両刃	完形	長:13.4cm, 幅:5.8cm, 厚:0.8cm, 重:125g	黒色片岩	平面一短冊, 断面一板状。表表面研磨、特に表面顕著。側面及び頭部は打割、両凸刃、刃縁は円刃。刃縁に対して垂直に使用痕が顕著に見られる。横脊。	西区 第13層 台961
	7	石斧	局部磨製	片刃	完形	長:7.3cm, 幅:4.1cm, 厚:0.9cm, 重:41.02g	緑色片岩	平面一短冊, 断面一板状。刃縁、打割。長平短片刃のみ研磨。片刃、刃縁は円刃、刃縁に対して垂直に使用痕。小型横脊。	中央区 不明 (dot) 台353
	8	石斧	局部磨製	両刃	刃部	長:5.1cm, 幅:4.8cm, 厚:1.1cm, 重:42.44g	砂質片岩	平面一バチ形, 断面一板状。表・表面の一部研磨, 側面は打割。両凸刃、刃縁は円刃。横脊。	台0
	9	石斧	打製	扁平 未製品	完形	長:11cm, 幅:4.8cm, 厚:1.3cm, 重:112.09g	凝灰岩	平面一短冊, 断面一扁平。側面一打割。刃部一研磨。両凸縁凸片刃、刃縁は直刃。石は柔らかい。	北東区 不明 台6840
	10	石斧	打製	未製品	刃一 体部	長:6.1cm, 幅:5cm, 厚:1.2cm, 重:74.06g	砂質片岩	平面一バチ形, 断面一扁平。表表面及び側面は打割。	中央区 不明 台940
	11	石斧	打製	扁平	完形	長:14.5cm, 幅:7cm, 厚:0.8cm, 重:145g	砂質片岩	平面一ややバチ形, 断面一扁平。側面は打割顕著。刃縁は円刃。未製品。	不明 (dot) 雑炭 台350
	12	石斧	打製	扁平	完形	長:9.7cm, 幅:4.8cm, 厚:1.4cm, 重:84.57g	砂岩	平面一バチ形, 断面一扁平・湾曲。全面に打割、特に側面の打割は丁寧。刃縁は円刃、細かい打割、側面から湾曲する。横脊。	南区 第11層 台2332
	13	石斧	打製		完形	長:7.4cm, 幅:3.3cm, 厚:1.1cm, 重:31g	緑色片岩	平面一バチ形, 断面一扁平。表表面は自然、側・下面は打割。刃縁は円刃。未製品。	中央区 不明 台6878
	14	石斧	打製	扁平	完形	長:14.6cm, 幅:5.8cm, 厚:2.5cm, 重:328g	砂質片岩	平面一短冊, 断面一板状。頭部より刃部が大きい。表裏側面とも荒い打割。未製品。	北区 第11層 台608
	15	石斧	打製	未製品	完形	長:12.7cm, 幅:4.3cm, 厚:1.9cm, 重:175g	千枚岩 (黒色)	平面一方形, 断面一扁平。扁平を打割して利用。刃の部分は打割。刃縁はやや湾曲。	南区 第11層 (燧石) 下川跡、灰色細砂 台2731
図版53	16	石斧	局部磨製	両刃	完形	長:11.7cm, 幅:8.8cm, 厚:0.9cm, 重:458g	輝緑岩	平面一バチ形。表表面部分研磨, 側面は大きく研磨。両凸刃、刃縁は円刃。刃縁に複数の剥離、使用痕が。	北区 第11層 台1341
	17	石斧	局部磨製	両刃	刃部	長:8.8cm, 幅:6.1cm, 厚:2.5cm, 重:181g	輝緑岩	平面一バチ形。表表面は部分研磨, 側面は打割。下面一研磨。両凸刃、刃縁は円刃。	中央区 第11層 雑炭層上面 台962
	18	石斧	局部磨製	両刃	完形	長:10.3cm, 幅:6.2cm, 厚:2.6cm, 重:195g	砂質片岩	平面一楕円。刃部は研磨, 側面及び頭部は打割。使用痕が。片凸刃、刃縁は円刃。刃の中央は打割。	南区 不明 台538

<凡例>「地区・台帳番号」の項目 [台は台帳番号を示す。拡張地区台帳番号はCDIに収録]

表8 石器観察一覧②

国版	採集番号	大a	中b	小c	残存	寸法	石質	観察事項	出土地
58	19	石斧	半磨製	両方一中	完形	長:9.8cm, 幅:6.2cm, 厚:2cm, 重:188g	輝緑岩	平面一バチ形、縦断面一湾曲。表裏と側面の一部を研磨。刃縁は円刃、刃部はつぶれる。横斧。	中央区 第11層台609
	20	石斧	磨製	刃一主体部		長:9.5cm, 幅:5.6cm, 厚:2.3cm, 重:179g	角閃岩	平面一板形。表面は全面、裏面は部分研磨。側面は細かな打割。両凸強凸片刃。刃縁は円刃。刃に数回の剥離、使用痕か。横斧。	西区清柳中1051, 西区サブトレ, 北壁清柳中, 020611台1051
	21	石斧	半磨製	片刃扁平	完形	長:10.8cm, 幅:4.9cm, 厚:1.9cm, 重:175g	砂質片岩	平面一長方形。断面一扁平。表裏面部分的に研磨。側面は打割。刃縁は直刃。	不明 不明台7
	22	石斧	局部磨製	片刃	完形	長:13cm, 幅:7.2cm, 厚:2.8cm, 重:460g	砂質片岩	平面一ややバチ形。断面一扁平。裏面は平坦。表裏および側面に打割。刃縁は円刃。	中央区 不明台940
	23	石斧	半磨製	片刃一未製品	完形	長:17cm, 幅:9cm, 厚:3cm, 重:651g	輝緑岩	平面一バチ形。表裏部分的に研磨。側面および上面は打割。扁平片刃。刃縁は円刃。未製品。	中央区 不明台940
54	24	石斧	局部磨製	片刃	完形	長:14cm, 幅:5.7cm, 厚:2.8cm, 重:313g	砂質片岩	平面一ややバチ形。断面一板状。ほぼ全面研磨。裏面側の縁に打割痕が残る。両平刃、刃縁は円刃。横斧。	中央区 第11層台1480
	25	石斧	磨製	半欠		長:5cm, 幅:4.7cm, 厚:3.5cm, 重:174g	角閃岩	平面一長方形。表面は研磨。他は敲き痕。片断面は厚い。縦斧。	中央区 第11層台2941
	26	石斧	半磨製	扁平	刃部一欠	長:13.5cm, 幅:4.7cm, 厚:2cm, 重:202g	緑色片岩	平面一短冊。断面一扁平。表裏面を部分的に研磨。側面は打割。両平刃。刃縁一円刃、わずかに抉り、片側の側面は厚くなる。縦斧。	北トレンチ 第9層(砂質)台4786
	27	石斧	未製品	刃部一欠		長:13.2cm, 幅:6cm, 厚:2.4cm, 重:291g	砂質片岩	平面一短冊。断面一板状。表裏面荒削り。片側面を研磨。刃縁一円刃。形状から縦斧の可能性が高い。	中央区 第11層台6882
	28	石斧	磨製	両刃	刃部	長:6.3cm, 幅:5.2cm, 厚:2.2cm, 重:127g	輝緑岩	平面一短冊。側面打割後研磨。両平刃、刃縁一円刃。	中央区 第10層台2915
54	29	石斧	磨製	扁平	頭部一主体部	長:8.5cm, 幅:4.3cm, 厚:1.4cm, 重:111.59g	砂岩	平面一短冊。断面一板状。表裏側面一研磨。側面に残線有。側面に打割のあとが残る。頭部に打割痕。	南区 第10層台4780
	30	石斧	半磨製	扁平・小型	完形	長:5.9cm, 幅:3.3cm, 厚:1cm, 重:46g	砂質片岩	平面一短冊。表裏面は部分研磨。側面は打割後、研磨。頭部打割。両凸刃、刃縁一円刃。	南区 灰白台3485
	31	石斧	磨製	両刃	完形	長:9.4cm, 幅:4.1cm, 厚:1.4cm, 重:46.44g	砂岩(片状)	平面一長楕円。湾曲。表裏および側面とも刃部は研磨。軸部は粗い磨き。湾曲、刃縁一円刃、剥離。斜めに背敲走る。	北区 第11層台2001
	32	石斧	磨製	ノミ状	完形	長:11.3cm, 幅:2.4cm, 厚:2.5cm, 重:116g	砂質片岩	平面一方柱状。断面一板状。ほぼ全面研磨。片側面の頭部に敲打のあと、両方・刃縁・直刃、ノミ状。	北区 第9層台2914
	33	石斧	磨製	片刃	刃部	長:4.5cm, 幅:1cm, 厚:1.1cm, 重:7g	頁岩	定角。平面一短冊。断面一板状。全面研磨。側面一横位に研磨痕。刃縁は直刃。	北区 第11層台2942
	34	石鏃	磨製	扁平	刃部	長:4.5cm, 幅:2.1cm, 厚:0.5cm, 重:7.54g		平面一楕円。断面一扁平。表裏面との縁、研磨。先端の形は円味。刃は先端のみ。研磨があまい。未製品か。	台1066
	35	石斧	片刃	刃部	刃部	長:2.6cm, 幅:2.7cm, 厚:1.2cm, 重:19.35g	黒色片岩	平面一短冊。断面一板状。表裏面は研磨。使用痕は刃縁に垂直。片平刃、刃縁は直刃。	中央区 第10層台3812

＜凡例＞「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。低湿地区台帳番号はCDに収録

表8 石器観察一覧③

図版	標記番号	大a	中b	小c	残存	寸法	石質	観察事項	出土地
図版	36	石器	磨製	扁平	刃部	長3.7cm, 幅1.5cm, 厚0.3cm, 重:2.95g	砂質片岩	有茎。平面一楔葉状、断面一扁平。先端に刃こぼれあり。	北区 第11層 (混雑細砂層) 台619
	37	刃器	石斧 転用	扁平	完形?	長2.8cm, 幅5.2cm, 厚0.4cm, 重:12.65g	砂質片岩	平面一平行四辺形、断面一扁平。刃部は研磨、側面一頭部、打割、片刃、刃縁は直刃、二次利用。	中央区 不明 台940
	38	刃器	局部 磨製		刃部	長6.7cm, 幅4.4cm, 厚0.9cm, 重:25g	緑色片岩	平面一平行四辺形、断面一板状。表裏面は部分研磨。下縁が刃部、上面一切揃。片刃で刃縁は直刃、石斧の二次利用。	中央区 第11層 台534
	39	刃器	半磨	両刃	刃部	長6.3cm, 幅6.9cm, 厚1.4cm, 重:59g	黒色片岩	平面一楕円、断面一板状。表裏面は部分的に研磨、黒縁は研磨で刃状、両刃、数か所で弧状。	シイの実層 台2834
	40	石斧	磨製	扁平	頭+ 体部	長7cm, 幅6.5cm, 厚2cm, 重:125g	砂質片岩	平面一楕円、断面一板状。周縁一研磨 表裏面一自然、頭部一打割痕あり。両刃、刃縁は刃刃。	不明 不明 台7
図版	41	石製品	有孔		ほぼ 完形	長3.2cm, 幅2.3cm, 厚2.5cm, 重:24g	延長岩	円筒状、断面一リング状。全面研磨。装飾品か。	中央区 第10層 台3612
	42	敲き石	くびれ		ほぼ 完形	長9.7cm, 幅5.5cm, 厚2.8cm, 重:207g		平面一狭入り、断面一。表裏および側面は研磨、側面は大きくくびれる。上下面の敲痕は大きい。	中央区 粘質混じり 台6903
	43	敲き石	棒状	中型	完形	長11.8cm, 幅4cm, 厚4.2cm, 重:299g	砂岩	平面一棒状、横断面は方形。上下に敲き有、片側面はわずかに自然面を残す。	南区 第11層 (雑層) 台7709
	44	敲き石	中型		完形	長8.1cm, 幅6.1cm, 厚5.3cm, 重:392g	砂岩 (細粒)	平面一円柱状、断面一横断は楕円。上下面に敲打痕、表裏及び側面は風化する。自然石か。	中央区 粘質混じり 台7822
	45	円盤	小型	小型	完形	長7.3cm, 幅5.1cm, 厚2.4cm, 重:148g	砂岩 (片状)	平面一楕円、断面一扁平。表裏面は研磨、周縁は敲打あり、特に上下面は敲打強い。	中央区 崩落土 台4823
	46	円盤		小型	完形	長6.4cm, 幅5.5cm, 厚2.2cm, 重:99g	ひん岩	平面一円形、断面一板状。表面は研磨、表面中央及び側面に打割あり。上面面に敲打有。石斧の二次利用。	西区 第11層 台6883
	47	円盤		小型	完形	長6.3cm, 幅7.1cm, 厚2.4cm, 重:125g	砂岩	平面一略円形、断面一扁平。表面一半分研磨、表面は敲打痕、周縁は両面から打割が顕著。	中央区 第11層 台1141
	48	打製			完形	長9cm, 幅6.6cm, 厚2.5cm, 重:216g	角閃岩	平面一楕円、断面一板状。表面は研磨とくぼみの敲打が残る。表面及び周縁は打割。くぼみ石の二次利用。	東区 緑灰色砂層 台2924
	49	円盤	薄	中型		長9cm, 幅4.8cm, 厚0.5cm, 重:275g	輝緑岩	平面一隅丸方形、横断面一隅丸方形。表面一研磨。右側面及び裏面一打割。敲き石の二次利用。	南区 第11層 (混雑層) 台6949
	50	円盤		板状	完形	長9.2cm, 幅8.9cm, 厚2.1cm, 重:321g	砂岩 (片状)	平面一円形、断面一板状。表面一若干研磨、裏面一自然、側面一打割 広い。	台0
図版	51	敲き石	中			長9.1cm, 幅8cm, 厚2.9cm, 重:304g	石灰岩?	平面一略三角形、断面一板状。片側面を整形か。表面中央に若干の凹み。使用痕は明瞭でない。	No143 台143
	52	敲き石		中型	完形	長12.1cm, 幅10.9cm, 厚4.7cm, 重:877g	砂岩 (片状)	平面一円形、断面一板状。表裏面一研磨、中央に敲打痕、周縁は大きな割痕。	北区 第11層 台610

<凡例>「地区・台帳番号」の項目 台は台帳番号を示す。低湿地区台帳番号はCDに4桁記

表8 石器観察一覧④

図版	種別	大a	中b	小c	残存	寸法	石質	観察事項	出土地
図版55	53	石球				長:4.9cm, 幅:5.1cm, 厚:4.9cm, 重:161g	凝灰岩	平面-ほぼ円形、断面-円形。全体にたつき有。凝灰岩。	南区 灰褐色台6146
	54	すり石				長:8.7cm, 幅:7.4cm, 厚:6.7cm, 重:515g	砂岩(細粒)	平面-梯形、断面-横楕円。全体円味、下面に円形の剥離、自然石か。	中央区 不明台940
	55	石球				長:12cm, 幅:12.2cm, 厚:10.2cm, 重:1500g	砂岩(細粒)	平面-円形、断面-円形。全面に粉ぼっく研磨の様なめらかな面は認められない。	西区 青柳屋台4872
	56	敲き石		小型	完形	長:5.1cm, 幅:4.2cm, 厚:3.2cm, 重:100g	安山岩(角閃石)	平面-楕円、断面-長楕円。上下面に敲打有、表裏面は研磨。	不明 不明台4887
	57	敲き石	中型	中型	完形	長:9.7cm, 幅:5.4cm, 厚:3.8cm, 重:316g	砂岩(片状)	平面-楕円、断面-柱状。上下に敲打有、側面若干少ない、表裏面は研磨。	北区 第9層(砂質)台414
図版56	58	敲き石	小型	中型	完形	長:11.2cm, 幅:6.7cm, 厚:4.1cm, 重:525g	輝緑岩	平面-略三角形、断面-長方形。側面にたつき痕、表裏面は研磨。	南区 第11層(輝緑)台7716
	59	敲き石	中型		完形	長:12.4cm, 幅:8.7cm, 厚:5.3cm, 重:850g	珪質片岩	平面-楕円、断面-長楕円。各面に敲打有、特に上下面顕著、表裏面は研磨。	中央区 第12層台645
	60	敲き石		中型	完形	長:11.7cm, 幅:8.8cm, 厚:4.9cm, 重:607g	砂岩	平面-楕円、断面-やや方形。各面に敲打有、特に上下面は全面に敲打有、表裏面は研磨・打痕。	北区 第11層台6808
	61	くぼみ石	楕円	中型	完形	長:13.9cm, 幅:8.4cm, 厚:6.4cm, 重:862g	輝緑岩	平面-ほぼ楕円、断面-柱状。各面に敲打有、表裏面は研磨。下面及び側面は敲打が顕著。	中央区 第9層台5894
	62	石皿			半欠	長:12.7cm, 幅:15cm, 厚:2.3cm, 重:1000g	砂岩	平面-残存-三角形。表・裏面の一部研磨、表面の縁に大きな剥離、凹みが2.2cmと深い、裏面は湾曲。	南区 第11層(輝緑)上面台6902
	63	石皿			破片	長:18.7cm, 幅:11.5cm, 厚:0.4cm, 重:658g	砂岩(片状)	断面-板状。表面は凹み及び他も研磨顕著、表面は平ら。凹みは4mmと薄くかなり使い込む。	南区 第11層(輝緑)上面台6923
	64	石器	大		破片	長:16.3cm, 幅:15.7cm, 厚:3.2cm, 重:1000g	砂岩(細粒)	平面-略五角形、断面-板状。表面は自然、周縁は自然の割れ、表面はボロボロし、表面は径7cm大の凹みがあり、敲きが顕著。	中央区 第11層台609
図版57	65	石皿			半欠	長:24.4cm, 幅:17.2cm, 厚:4.8cm, 重:3300g	砂岩(片状)	平面-やや三角形、断面-板状。表面はほぼ全面研磨、裏面及び周縁は自然のまま。	中央区 磯野台657
	66	石	重し		完形	長:25cm, 幅:17cm, 厚:10.4cm, 重:6500g	砂岩(片状)	平面-楕円、横断面-楕円。加工痕は認められない。	台0
	67	すり石			完形	長:28.7cm, 幅:18.2cm, 厚:9.7cm, 重:7500g	安山岩(ウンモ)	平面-楕円、断面-長楕円。	中央区 第13層台816
	68	敲石			破片	長:3.1cm, 幅:3.9cm, 厚:1.8cm, 重:27g	凝灰岩	断面-板状。ほぼ全面研磨、特に表裏面は顕著。近世の遺物。	中央区 第12層台143
	69	敲石	?			長:16.2cm, 幅:10.2cm, 厚:1.9cm, 重:564g	黒色片岩	表-研磨、溝状のすじ有、裏-自然、周縁大きな割、自然か。	中央区 混雑砂割台826

<凡例>「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。低湿地区台帳番号はCDに収録

3. チャート製品

長野真一 (鹿児島県埋蔵文化財センター)

石鏃 (第34図1)

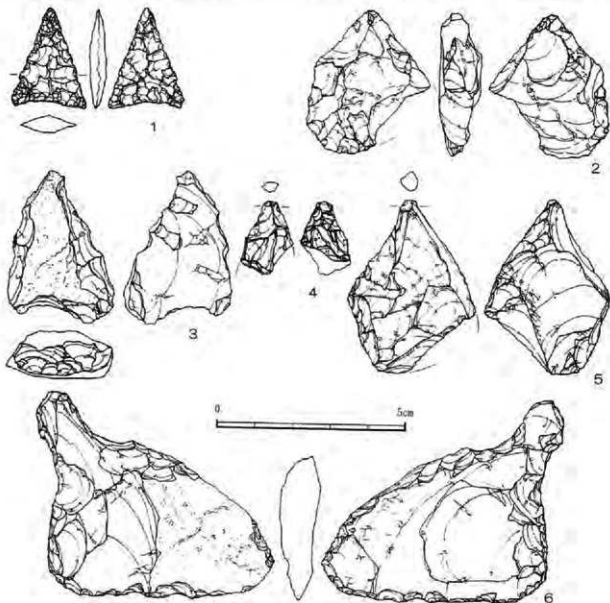
均整がとれた長辺鏃で、底辺は若干内湾気味に調整仕上げを行っている。側縁からの整形角度が明瞭で、体部中央は菱形上の横断面を成す。使用チャートは、灰色を基調とする石材に黒色の縞状斑文が横方向に走る (チャートA類)。

ドリル (第34図4・5)

4は先端部はレンズ状の断面形を成し、側縁に添って小剥離痕が集中する。その形状からドリルないしは刺突具の用途とが想定される。使用石材は水晶。5の右側縁は一部欠損する。厚みのある剥片を素材とし、左側縁部を主に整形剥離が施され、先端方向を尖り気味にイネジク状の形状に仕上げている。ルーペでは、先端部の糜滅が観察される。(水晶)。

石匙 (6)

礫面を残す扁平な剥片を素材とし、背面左側では礫面の除去を目指した剥離が試みているが中程



第34図 チャート製品①

で留まっている。いわゆる“つまみ”は左側縁の偏った位置に設けられるが、刃部は鋭く造り出している。灰白色のチャートで、隣面からは転石でローリングを受けたと見られる。石材は光沢のないほぼ灰白一色のチャートで、不規則であるが白色の縞状紋が走る（チャートB類）。

二次加工痕剥片（第34図2、3、第35図7～11、第35図13～17、第36図18～27、第37図28～37・39）

2は背面の左側縁に添って剥離面を形成し、刃こぼれ状の微細剥離痕が確認できる。左側縁先端部は先行する剥離面で、腹面先端部の剥離及び小剥離等に切られる関係にある。細分類で削器と記載したが、先端部の形状や先端部に残る小剥離及び微細剥離から、彫器様の用途も想定される。石材のチャートは、灰白色をベースに薄い橙色や桃色が斑に混入している（チャートF類）。3は、図面配置が適切か否か疑問を残す。腹面は主用剥離面で、背面の中央部には隣面を残し、蒲鉾状の分厚い剥片を素材としている。二次加工は全て腹面から行い、左側縁は外に弯曲、右側縁はやや内弯、底面では内弯している。3面それぞれの剥離面上に微細な剥離が見られることから、削器様の機能を果たしたと推測される（チャートC類）。7の配置に関しては大いに疑問を残す。二次加工（整形加工？）は腹面から行い、その剥離面に微細な剥離痕が多数残されることから削器としての機能が推定される。灰色を基調に黒色の縞状斑紋が密に入るチャートを使用している（チャートD類）。8中央部の横断面が蒲鉾状を呈す素材で、特に右側縁部に二次加工が集中し、削器的用途とが想定される。灰白色のチャートで、光沢を残している（チャートB類）。9の両側縁の二次加工は明瞭で、全て腹面から行われている。図示した上部が目的部（刃部）とみられ、特に左先端部を主に刃こぼれ等が観察される。小型で不定型の横広剥片が素材で、灰黒色で灰色の縞状紋が並行して走る（チャートE類）。10素材剥片の表裏は逆の可能性もある。二次加工は左側縁に集中し、裏面の平坦な剥離面を底面に刃部が併走する。1の石鏃と類似したチャートを用いている（チャートA類）。

11 不定形剥片を用い、左側縁は腹面から、右側縁は背面方向から二次加工を実施している。素材剥片の選択、刃部形状及び刃こぼれ状の微細剥離痕から9と同様と見られる（チャートD類）。13横広剥片を素材とし、左側縁と底面に二次加工痕と微細な剥離痕が残され、特に左側縁は整然としている。なお、削器としての機能を重視して図示したが、右側縁の尖り部が彫器様の形態を保有している（チャートC類）。14は左側欠損し、底面の主に背面側に二次加工痕と微細剥離痕が残される（チャートD類）。15は縦長方向の剥片を素材とし、右側縁に二次加工、左側縁には微細剥離痕が残される（チャートA類）。16の下半部は欠損し、打面を除去する様に両方向に剥離を行い鋭利な仕上げとなっている（チャートC類）。17は横広の剥片を素材に部分的位置に二次加工を施し、削器としての機能は想定できるが、最終目的は皆目分らない。（水晶）

18 不定形剥片の下端部に腹面方向から二次加工を施し、削器様の刃部が形成されている。光沢の強いチャートで、灰黒色地に黒色の斑紋が走る（チャートF類）。19は素材剥片のほぼ全周に敲打による成形剥離が見られるが、最終形状は明らかでない。下端部は二回以上の剥離面で形成し、使用痕と見られる微細な剥離痕が観察できることから、削器としての機能は果たしたと思われる。灰白色で色調的には6・8に近いが、並行する多数の亀裂が見られる（チャートB類）。20は背面方向からの二次加工をもつもので、下端部に刃部を設けた削器と判断している。破損品の可能性も高い。光沢のある灰黒色のチャートで、良質である（チャートG類）。21不定形剥片の下端部に腹面方向から急角度の二次加工が加えられ、使用痕と見られる微細な剥離痕が観察できる。削器と分

離したが、搔磨的機能も想定できる（チャートF類）。22は打面を上位に図示したが、左側縁と下端部が目的部とみられる（チャートA類）。23は背面の一部に小剥離が残される（チャートF類）。

24の裏面は平坦な礫面で、刃部は裏面から急角度に行い、搔磨的機能も想定できる（チャートB類）。25背面左側の三枚の剥離は主剥離に先行する剥離で、腹面左側の剥離面に後続する。結果としてレンズ状の分厚い形状を成すが、下端部の剥離面が削磨的機能を果たしたと思われる（チャートG類）。26・27は剥片の下端部に刃部を設け、特に、27は急角度となる。2点ともチャートA類を使用している。

28は破損品の可能性が高い資料であるが、右側縁に二次加工痕が残される（チャートF類）。29も28と近似する（チャートF類）。30は破損品の可能性もあるが、上端の狭い平坦面に対し下端部の両面の微細な剥離痕から楔形石器様の機能が想定される（チャートF類）。32厚手の剥片の腹面に小剥離が認められるが、右下縁部の尖り部が目的部の可能性もある（チャートF類）。33は上端・下端の二次加工痕から楔形石器としたが、最終形態は明かでない（チャートB類）。34も楔形石器としたが、腹面上位は成形剥離、背面右側は先行する剥離面と見られる（チャートF類）。35は表裏逆の可能性が高いが、正面には周辺部から浅い角度で裏に連する成形剥離が見られる。削器として分類したが、疑問を残す（チャートA類）。36は直線的な下端に刃部を形成していると判断したもので、石灰岩が素材である。37背面左側と腹面右側に二次加工が重なるが、背面側が先行している（チャートA類）。39は全周に二次加工が認められるもので、削器ないし楔形石器の用途が想定される。

微細剥離痕剥片（第35図12、第37図38）

12の石材は3と同一である（チャートC類）。扁平な横長の素材剥片の上端を除く三面に、微細な剥離痕が残される。38は破損品の可能性もあるが、微細は剥離痕が残される。石材は水晶。

小結

遺跡からは大量のチャートが出土し、それはコンテナケース4箱におよんでいる。大量のチャートは、塊（原石・石核）・剥片・砕片として採取されている。報告書作成に当たり、それらの中から石器の選別と石器の抽出を試みたが、明確な定型石器は石鏃1点と石匙1点と極めて乏しく、結果として二次加工や微細剥離痕等の有無を石器認定の基準とせざるを得なかった。

1の石鏃の造り出しは丁寧で、その保存状態も良好である。4・5のドリルについては、先端部の形状及び残存状況から連続した回転運動を想起できると判断し認定した。6の石匙は本票出土としては希少な一例となるが、管畑式土器に並行する資料であればその同時性は十分理解できる。

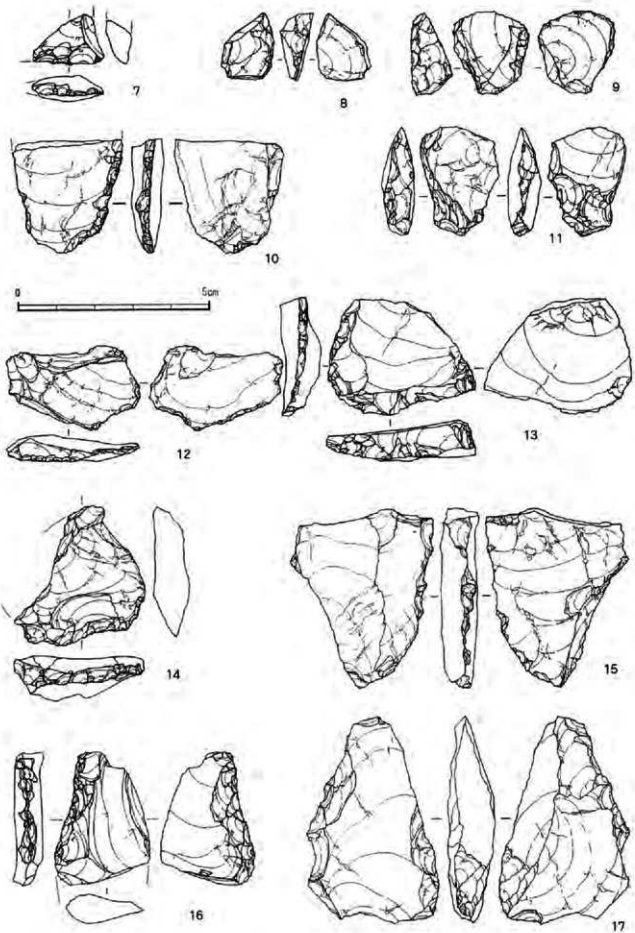
他の資料については、定型的是形態を成さないことから、“二次加工痕のある剥片”と一括して捉えた。当初、2・3については石鏃制作に関わるいわゆる未製品と分類したが、その後、石鏃制作に関連する資料の抽出や資料追加ができないことから、削器とするが、特に3については下端部に快入石器としての機能を想定している。また、3・13・22・32のいずれも削器と分類しているが、3の頂部、13・32の右側の尖り部、22の下端部は彫刻刀様の造り出しが見られ、彫磨的機能を備えていた可能性もある。33・34・39等については、その形状や成形から楔形石器が想起できるが、明確な基準が前提ではない。10・14・15等の削器はサイドスクレイパー、22・29からはエンドスクレイパーとしての機能が想定できる。

今回1点ずつであるが石鎌と石匙が出土しているが、遺跡内で制作が行われたか否かについては確認できなかった。しかし、使用石材がチャートと極めて限定されていること等から、遺跡内あるいは限定された場で制作が行われたとの想定は十分可能である。曾畑式土器文化の流入は、新たな土器制作に促し、石鎌や石匙等の狩猟具や解体具の制作技術も伝わったはずである。

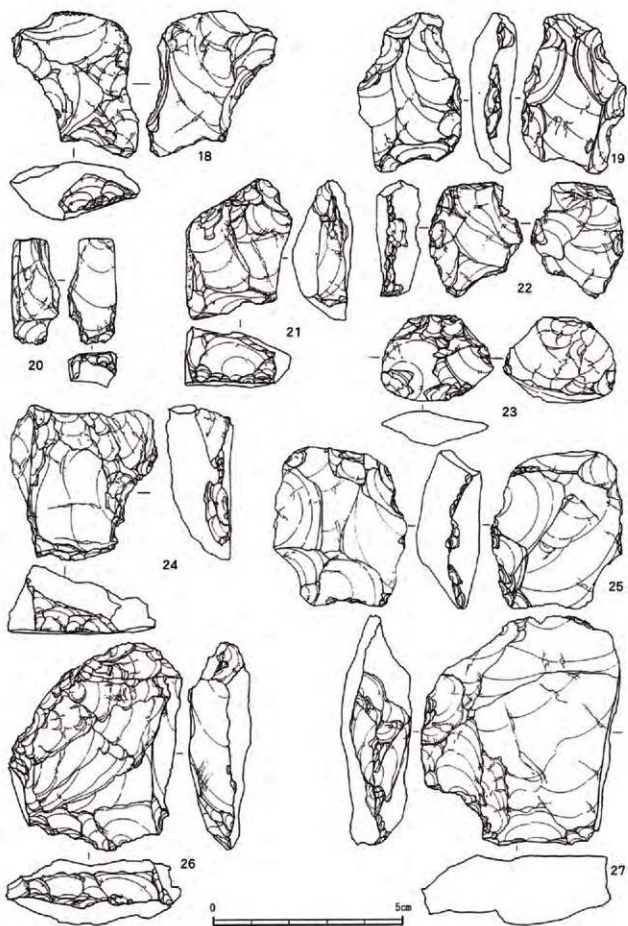
なお、石材チャートをA～Gまでの7類に区分したが、目視での便宜上の判断に困っている。

表9 チャート製品の計測一覧

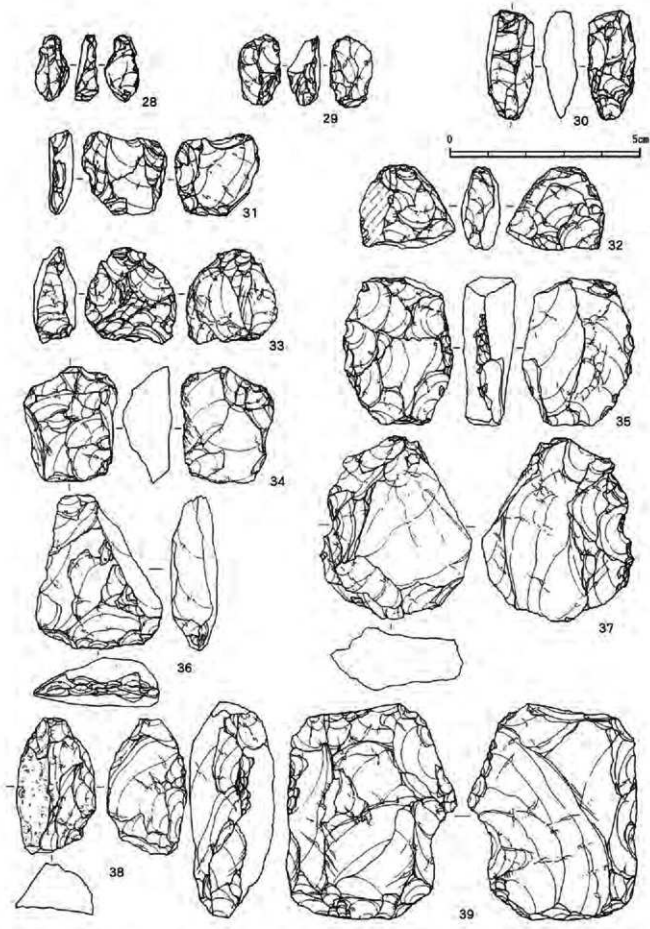
持図 No.	分類 No.	分類 L1	分類 L2	分類 L3	石材 L1	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上 No.	層位	グリッド	
第34図 (図版5)	1	石器	石鎌		CH	26	20	5,0	1,34		14	中央	
	2	石器	二次加工痕	削器	CH	38	32	11	11,08	7710	14	北～中央区	
	3	石器	二次加工痕	削器	CH	36	29	12	12,97	561	曾畑層	サブトレ	
	4	石器	二次加工痕	ドリル	CR	19	13		1,73	573	混貝	サブトレ	
	5	石器	二次加工痕	ドリル	CR	46	34		18,4	3664	11	北区	
	6	石器	石匙		CH	56	60	10	27,86		14		
第35図 (図版5)	7	石器	二次加工痕	削器	CH	12	19	8,0	1,49	569	曾畑層	中央区	
	8	石器	二次加工痕	削器	CH	17	13	7,5	1,63	856	混雑砂層	中央～東区	
	9	石器	二次加工痕	削器	CH	21	19,5	10,5	4,27	4502	12	中央～西区	
	10	石器	二次加工痕	削器	CH	29	29	6,0	7,27	6945	14	北トレレンチ	
	11	石器	二次加工痕	削器	CH	26,5	19,5	8,0	1,5	7631			
	12	石器	微細剥離痕	削器	CH	20	34	6,0	4,48	1470	混雑砂層	中央～西区	
	13	石器	二次加工痕	削器	CH	30	39	9,5	10,3	1816	11	川跡	
	14	石器	二次加工痕	削器	CH	33	32	9,0	9,96	1361	143	崩落	
	15	石器	二次加工痕	削器	CH	44	36	9,5	15,4				
	16	石器	二次加工痕	削器	CH	34	24,5	7,0	5,74	895	11b	中央～西区	
	17	石器	二次加工痕	削器	CR	53	34	12	18,9	4174	曾畑層	南区	
第36図 (図版5・6)	18	石器	二次加工痕	削器	CH	34	31	15	13,8	856	混雑砂層	中央～東区	
	19	石器	二次加工痕	削器	CH	38	28,0	12	11,8	5592	9b		
	20	石器	二次加工痕	削器	CH	28	13,0	8,0	3,62	9027	混貝	南区	
	21	石器	二次加工痕	削器	CH	33	28,0	14	16,2	414	12	北トレレンチ	
	22	石器	二次加工痕	削器	CH	29,5	24,0	11	7,41	5413	14	148A T	
	23	石器	二次加工痕	削器	CH	22	29,5	9,0	5,04	3665	14	北区	
	24	石器	二次加工痕	削器	CH	38	38,5	17	23,66	6881		樹根	東区
	25	石器	二次加工痕	削器	CH	40,5	35	16	22,71	499			南サブ
	26	石器	二次加工痕	削器	CH	53	43	12	38,5	7710	14	北～中央区	
	27	石器	二次加工痕	削器	CH	59	49	18	59,1	3348	14	中央区	
第37図 (図版6)	28	石器	二次加工痕	削器	CH	19	8,5	7,0	10,3	672	曾畑層	中央区	
	29	石器	二次加工痕	削器	CH	19	11	8,0	1,43	7454	12		
	30	石器	二次加工痕	楔形	CH	38	13	9,0	3,19	1372	14	南区	
	31	石器	二次加工痕	楔形	CH	1,95	2,2	6,0					
	32	石器	二次加工痕	削器	CH	21,5	25,5	9,0	5,74	2224	14	中央区	
	33	石器	二次加工痕	楔形	CH	25	24	11	5,78	2064	14	中央区	
	34	石器	二次加工痕	楔形	CH	30	24,5	13	9,16	2176	14	北区	
	35	石器	二次加工痕	削器	CH	38,5	29	13	15,95	6839	14		
	36	石器	二次加工痕	削器		40	33	11	13,5	6866			北区
	37	石器	二次加工痕	削器	CH	48	40	16	26,2	684	14	南区	
	38	石器	微細剥離痕		CR	36	21	12	9,14	210	曾畑層	中央区	
	39	石器	二次加工痕	削器	CH	56	44	22	52	1133	14	南区	



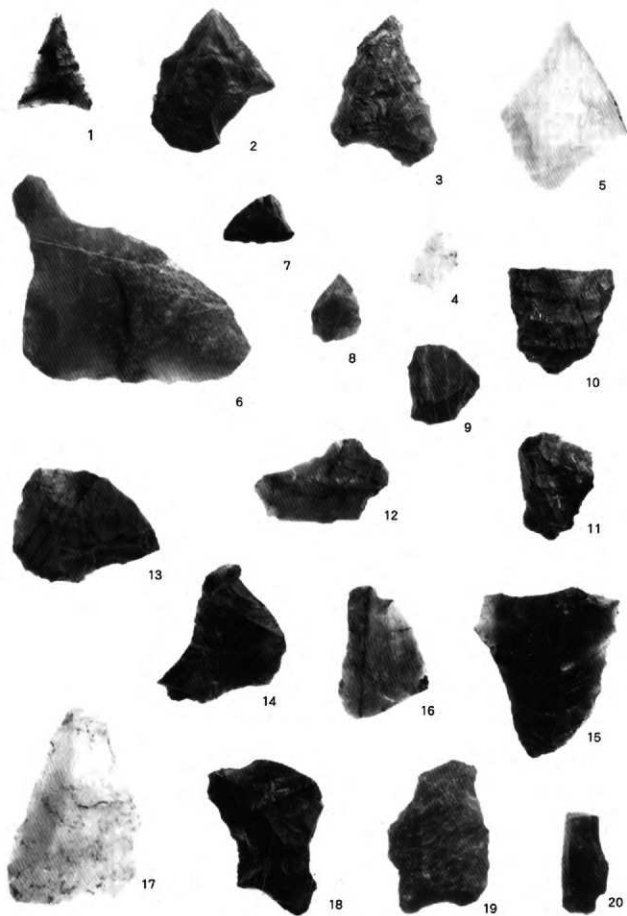
第35図 チャート製品②



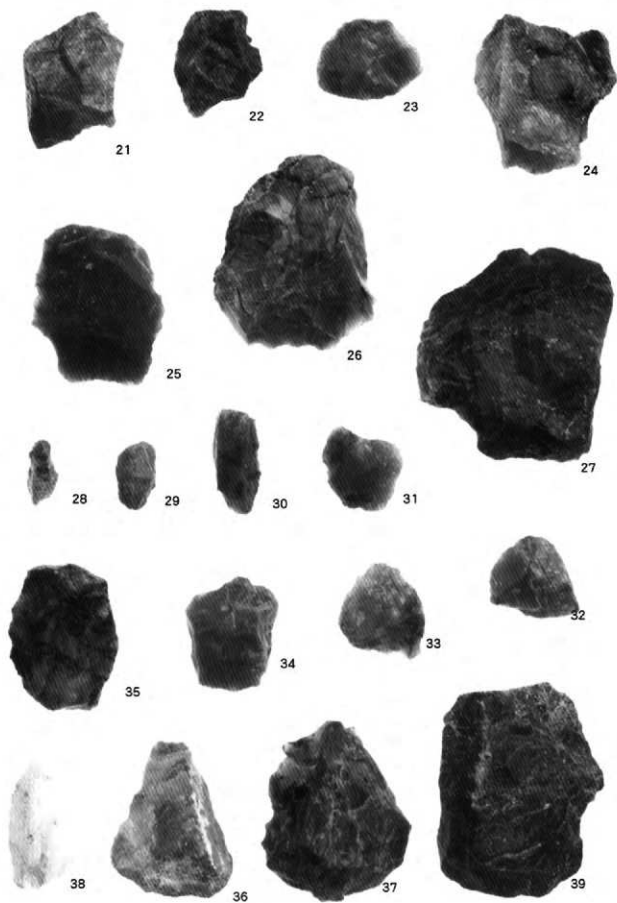
第36図 チャート製品③



第37図 チャート製品④



図版5 チャート製品①



図版 6 チャート製品②

4. 骨製品

本区出土の骨製品は、装飾品と考えられる垂飾品有孔製品、実用品と考えられる骨針、骨錐、ヘラ状、板状、棒状製品とこれらの未製品が出土した。

・垂飾品 (第38図)

素材はイノシシの犬歯 (同図1) 3個、サメ歯 (同図2) 3個出土した。イノシシの犬歯の使用はオスとメス (表3102) がある。サメ歯有孔製品は基部に2孔 (同図②) と1孔 (表3022) がある。ギンカメアジ属 (同図3・4) 稜鱗を境に径2mmの孔を2個施すものである。2個とも南区サブトレで出土している。本品は県内で初めての出土で類例がなく、用途は不明である。孔も含めて類例を待って検討したい。

・骨針 (第38図5・7・10)

主にイノシシの腓骨など細い素材を用い、先端を尖らしたもので3個出土した。両端を尖らしたもの (同図10) と頭部に穿孔したもの (同図5) がある。

両端を尖がらしたものはイノシシの大腿骨を縦に削いて両端を尖らしたものである。短いタイプは報告されているが、長いタイプは初めてである。同図5は完形品で一端は尖らし、他方に小孔を施したものである。縫い針のような用途が想定される。

・骨錐 (第38図9~11)

イノシシの四肢骨の先端を尖らしたもので桡骨、大腿骨、脛骨を用いたものである。中でも脛骨の遠位部を利用するものが多い。出土は試掘No143で3個、他に南区曾畑層 (混貝)、不明でそれぞれ1個出土している。

同図11はシカの角の先端部を研磨、ポイント状に加工したものである。頭部を斜めに削りとっている。大城逸明氏の教示によるとニホンシカの可能性が高いとのことである。沖縄本島ではこの時期にシカは生息していないことから生息の南限である屋久島から持ち込んだことと思われる。

・ヘラ状製品 (第38図8・第39図12)

ヘラ状製品は棒状の骨の先端を扁平状に加工したもので、イノシシの四肢骨を用いたもの1個、ジュゴン肋骨を用いたもの1個の計2個出土した。

同図6は四肢骨、第39図12ジュゴン肋骨を用いたものである。

・棒状製品 (第39図15)

クジラとジュゴンの肋骨を利用したものがそれぞれ1個出土した。同図15は骨質が表面は密で裏面は疎の状況からクジラ肋骨と考えられる。上面に研磨が施されることからヘラ状等の頭部と考えられる。

・板状製品 (第39図14・16~20)

クジラを用いたものが5個した。同14は側面に抉りを有し、同図16は表面に沈文をクロス状に施すもので両者とも装飾品の類と思われる。

図版61はクジラの大きな破片で周縁に切り痕が確認される。

図版61はやや化石化の進んだ骨である。縦幅2mm程度の深い溝が数条走る。製品を作るためか他の意味を持つかははっきりしない。今後の検討資料としたい。

表10 骨製品観察一覧①

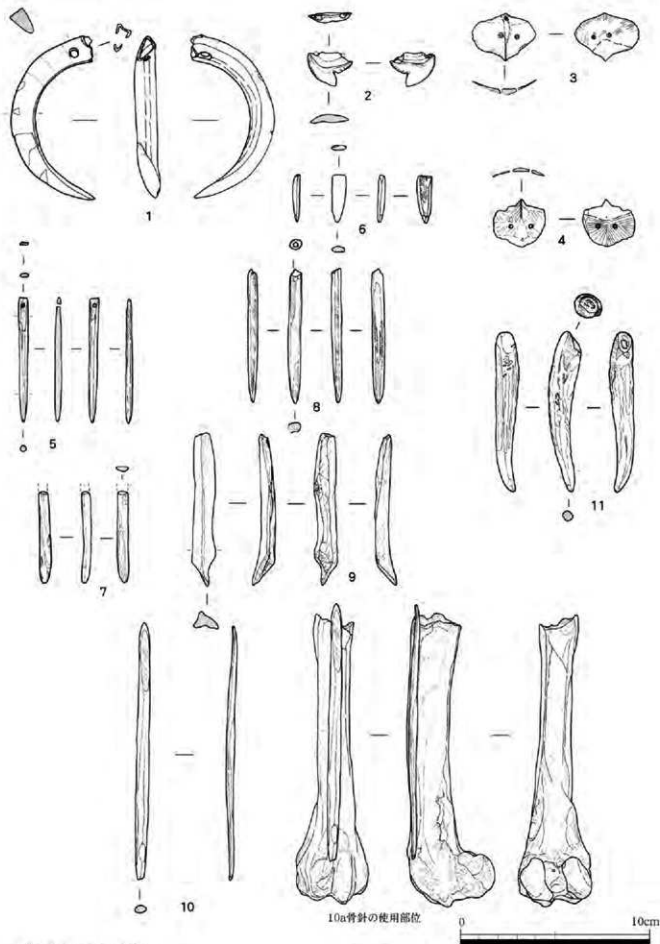
番号	製品名	種類	完・破	縦cm	横cm	厚さcm	重量g	観察事項	出土地	製品番号
1	垂飾品	サメ歯	ほぼ完	1.7	2.3	0.5	1.2	基部に2孔。第38図2	中央区サブトレ、南壁崩落土、混雑砂層、台6093	3007
2	垂飾品	イノシシ、下顎犬歯	破				1.3	横溝	中央区サブトレ西側、曾畑層(シイの実層)[コンテナ番号:206]、台8290	3102
3	垂飾品	イノシシ、下顎犬歯	破	5.4	1.8	0.6	5.5	半截	伊C 143、台143	3021
4	垂飾品	イノシシ、下顎犬歯	完		4.7		12.9	基部に穿孔。第38図1	中央区サブトレ、緑灰色砂層、台6287	3001
5	その他	ギンガメアジ属、稜鱗	完	2.5	3.3	1.2	1.0	孔以外の加工は認められない。2孔、自然の可能性の否定できない。第38図3	南区サブトレ北側、灰白(有機)混土、台6111	3008
6	その他	ギンガメアジ属、稜鱗	完	2.4	2.6	0.5	0.8	同上 第38図4	南区サブトレ北側、灰褐色(混砂)、EL=2.096m、D-232、台7355	3010
7	骨針	イノシシ、肋骨	先端・体部	4.1	4.8	2.8	0.8	先端部は全面研磨、梁位に研磨痕あり。7と同じ加工。	No143曾畑上のシルト層、台983、台9378	3208
8	骨針	イノシシ、肋骨	完	6.5	0.5	0.4	1.2	頭部有孔。第38図5	中央区、サブトレ南北ライン、混雑砂層-第11層、曾畑より上、台6105	3015
9	骨針	イノシシ、	先端・体部	6.9	0.6	5.3	3.0	全面研磨。中央空洞、先端尖る。方柱。第38図6	No143南東、土取り上げ時、台8061	3017
10	骨簪	イノシシ、肋骨、左、遠位端	完				2.4		南区サブトレ3.5~2m、曾畑層(混土)、台4927	3052
11	骨簪	ニホンシカ、角	完	8.4	1.3	1.4	10.9	頭部は4面とも斜めに削る。第38図11	南区サブトレ中央、灰白(有機)混土、台2936	2936
12	ヘラ状	イノシシ、四肢骨	先端	2.4	0.8	0.3	0.4	風化気味、裏面は海棉組織あり。側面は丸くなる。先端部欠損。第38図6	No143西側、第9層(砂質)、台5971	3019
13	ヘラ状	イノシシ、大腸骨	完	13.2	0.7	0.3	3.7	両端尖る。第38図10	伊C 143、台143	3027
14	ヘラ状	イノシシ、肋骨	先端・体部	4.7	0.7	0.4	1.0	近位端を利用。先端部は丸味。第38図7	南区サブトレ、曾畑層、EL=2.460m、D-393、台6361	3018
15	ヘラ状	ジュゴン、肋骨	完	13.9	2.6	1.4	36.0	先端部やや扁平、肋骨の湾曲を利用。一部光沢。先端部欠損。第39図12	伊C 試掘、台0	3003
16	棒状	ジュゴン、肋骨	破	3.9	1.7	1.05	5.2	未加工品、細い	サブトレ東西ライン(西側)、曾畑層、B区間遺物、No52、台903	3103
17	板状	クジラ、部位不明	破	3.2	2.0	1.1	4.1	表面に三角形の沈文を施す。わずかに研磨が認められる。第39図16	南トレンチ、第8層最下部、台5839	3016
18	板状	クジラ、部位不明	破				5.9	有文、沈線、綾紗	中央区試掘穴、南壁崩落土、台7989	3100
19	板状	クジラ、肋骨	破	3.6	3.0	2.9	18.1	簞状か。二段の折り、簞状か。第39図14	中央区、西区間畦、混雑砂層第1層取り上げ、台826	3002
20	板状	クジラ、肋骨	破	4.2	3.0	1.3	15.5	焼け、黒褐色。表面面研磨。折りか2カ所に折り。切断痕。焼けて黒褐色。第39図19	No143Bトレンチ、東壁除去、第11層、台5426	3014

<凡例>「観察事項」の項に挿入・図表番号も加えた。
「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。低部地区台帳番号はCDに収録

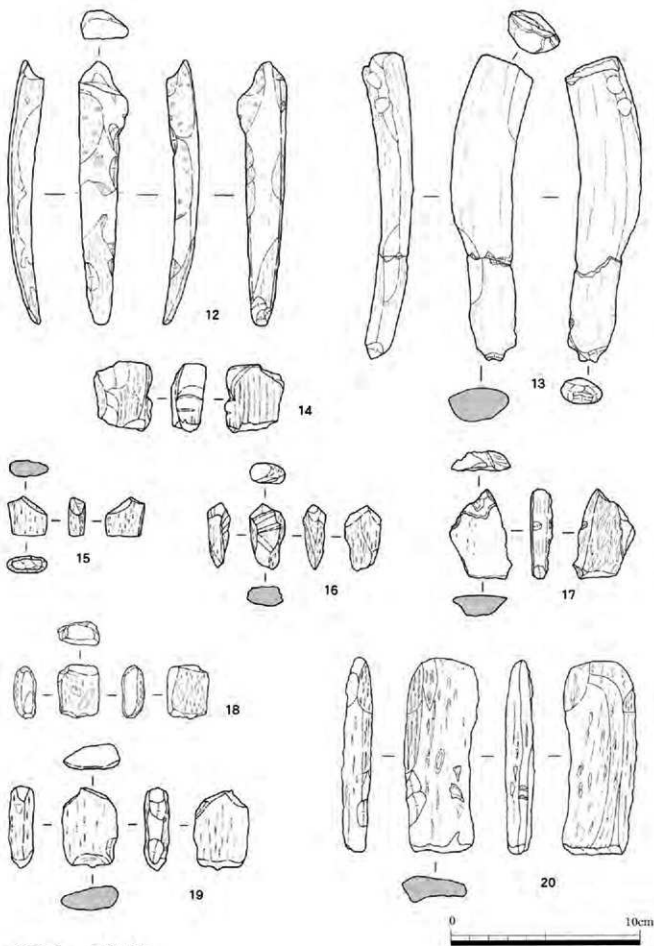
表10 骨製品観察一覧②

番号	製品名	種類	完・破	縦cm	横cm	厚さcm	重量g	観察事項	出土地	製品番号
21	板状	クジラ、肋骨	破	3.6	1.6	1.0	5.6	自然、海綿組織細かい切断痕のみ	中央区、西区間畦、混礫砂層第2回取り上げ、台4837	3112
22	板状	クジラ？、肋骨	破	2.1	2.0	0.9	3.5	ほぼ全面研磨。一部研磨。塊状製品の頭部？ 第39図15	東区サブトレ、混礫砂層、台9071	3018
23	板状 (未製品)	クジラ、肋骨	破				9.0	骨にキズ	サブトレ東西ライン18区、緑灰色砂層、台6132	3204
24	板状 (未製品)	クジラor ジュゴン、肋骨	破				3.1	骨にキズ	N143、日トレンチ、第9層、台1815	3205
25	板状 (未製品)	クジラ、椎体？	破	4.6	3.0	1.2	9.6	表および側面研磨。表面は海綿組織。海綿組織が露出 第39図17	南区、第11層(礫上面)、台1374	3012
26	板状 (未製品)	クジラ、部位不明	破	2.7	2.2	1.3	7.0	全面研磨。塊状製品の頭の部分か。塊状製品の頭部か 第39図18	北区、盛り土、台424	3011
27	板状 (未製品)	クジラ、肋骨	完	15.5	6.1	2.7	137	自然、キズキズ 切痕切痕切痕半加工キズあり。 図版61-22	南区、第11層礫層、台3698	3004
28	板状 (未製品)	クジラ、肋骨	破	4.2	2.9	1.8	9.0	削り、海綿組織の露出海綿組織割れ割れ割れ切断痕	N143Bトレンチ、第10層最下部、台5417	3201
29	板状 (未製品)	クジラ、肋骨？	完	10.1	3.9	1.5	33.5	海綿組織露出。側面に切断痕。先端に細くなる。半加工。 第39図20	不明、台5547	3005
30	板状 (未製品)	クジラ、肋骨？	完	7.5	3.1	2.1	41.3	複数の切断痕。海綿組織。挟り痕が2段。 図版61-21	中央区、第9層(砂質)、台7720	3006
31	未製品	ウミガメ	破				2.6	キズ有り	中央区-東区間畦サブトレ(南北ライン)、混砂シルト層、台6749	3101
32	未製品	クジラ、肋骨	破	3.4	2.3	2.2	11	表面研磨。表面は海綿。	サブトレ東西ライン19区、混礫砂層、台6668	3110
33	未製品	クジラ、肋骨	破				5.4	切り痕。	南トレンチ、川跡(礫面直上の粗砂層)、台6399	3203
34	未製品	ジュゴン、肋骨	完	16.0	3.4	2.0	85.1	切痕がある。 第39図13	N143Bトレンチ、第10層最下部、台5842	3020
35	未製品	ジュゴン、肋骨	破				6.0	骨にキズ、棒状？	サブトレ東西ライン18区、緑灰色砂層、台6132	3205
36	未製品	ウミガメ、腹甲板	破				6.0	挟り痕3カ所	籠埋土[コンテナ番号:34、袋:88、層位:灰白色土、土量:10.5L、フルイ:HF、作業日:030625]、台7557	3207
37	未製品	クジラ、部位不明	破	3.5	15.2	0.8	2	切痕のみ、くず	サブトレ東西ライン19区、混礫砂層、台6668	3111
38	未製品	クジラ、部位不明	破				11.3	若干のキズ	西トレンチ、流水跡(第9・10層混じり)、台7957	3202
39	不明	イノシシ	破				4.9	穿孔か	中央区西側、第11層、台2248	3053
40	自然？	クジラ、椎体？	完	9.6	6.7	3.6	206	自然の可能性あり 縦に2本の溝。化石化。 図版61-23	北区、第11層、台6861	3009

＜凡例＞「観察事項」の項に挿入・図版番号も加えた。
「地区・台帳番号」の項目(台)は台帳番号を示す。低湿地区台帳番号はCDに収録



第38図 骨製品①



第39圖 骨製品②

参考文献

- ・中村 照ほか 1993『玉代勢原遺跡』北谷町教育委員会
- ・山城安生・東門研二・松下孝幸・黒住耐二・川島由次ほか 2008『後秦久原遺跡—庁舎施設に係る文化財発掘調査報告—』『北谷町文化財調査報告書』第21集 北谷町教育委員会
- ・金武正紀・鳥袋春美・鳥 弘 1991『御細工所跡—城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告—』『那覇市文化財調査報告書』第18集 那覇市教育委員会

5. 貝製品

本区出土の貝製品はツノガイ・ノシガイ・マガキガイや小形のイモガイを用いた貝小玉、中型イモガイ・タカラガイ・サラサバテイラ・チョウセンハマグリなどを用いた装飾品36個、タカラガイ製鎌・ヤコウガイ螺蓋製品などの実用品2個、また、ヤコウガイやニシキミナミなどの未製品2個が出土した。地区別には中央区15個、南北ライン7個、東西ライン5個、不明13個である。

貝製品は代表的なものは第40図に図化した。それ以外は表11に示し、本文には4ケタの製品番号で示した。

・装飾品 (第40図・表11)

・ツノガイ製品：貝層で2個、混砂層1個、曾畑層6個、不明11個の合計20個出土した。種の明瞭なものマルツノガイ (4042、4043)、また、ゴカイ接管? (4044) を利用したものもある。これらは顕著に研磨され、両端を整ったものと加工が明瞭でないものがある。図1は全面研磨し、上下面も整う。灰色を呈し、細かいアバタが確認できる。4016、4020、4023、4025、4066、4102、4103、4105には研磨がみられる。特に (4066) は、二面に研磨がみられ、4020は研磨が著しく、面取りされているように思われる。ノシガイ (4039) は貝殻全体は摩耗気味で、腹面に小孔が施されたものである。

・貝小玉：マガキガイや小型イモガイの螺塔部を円盤状に加工し、さらに殻頂に2～3mm前後の小孔をしたものである。マガキガイが7個、小型イモガイ1個の合計8個出土した。

層別には曾畑層で1個、磯層で1個、緑灰色砂層で1個、不明5個の計8個である。

これらは加工が明瞭なもの4017、4013、4033、4034、4036、4037、明瞭でないもの4001、4035がある。殻の状況を見るとアバタがみられるものは4013、4017、4033、4034、(未4036、4037)で、死貝が用いられている可能性が高い。

・中型イモガイ (4031) は前者と同じく螺塔部を円盤状に加工し、殻頂に穿孔するものである。試掘穴Na143西側の第5層最下部 (マンガン直上) で出土した。

タカラガイ製品：ハナヒラダカラ、フシダカキイロダカラ (4003) の背面を打割して穿孔、孔は楕円を呈する。側面は研磨されるが、殻は風化気味である。南区サプトレ北側の灰白 (有機) 混貝層から出土。Na143西壁部拡張時、曾畑層 (磯層) から出土。

ハナマルユキ (第40図13) も背面を打割し、さらに殻軸を破損している。第1層から出土し、民具の網の鎌に酷似していることから本品も網の鎌と考えられる。

サラサバテイラ (第40図15) に加工を施したものが3個出土した。すべて破片で、加工は4012、4040は殻底、4101は内縁に研磨が施されていることから貝輪の未製品と考えられる。

出土は東西で2個、試掘穴№3の泥炭層で1個。

- ・チョウセンハマグリ (4041) は殻が小さく、外殻は研磨され、その結果、孔となるものである。殻が小さく、研磨されていることから装飾品と考えられる。

- ・未製品

ニシキミナミガイ (4058) の殻頂、および腹面に研磨痕が確認される。試掘穴№143東側の第6層 (45~50) で出土した。本貝は毒針を有する貝である。

考 察

以上、貝製品を略述した。これらを層別にみると第1層ではハナマルユキ製貝錘、第5層では中型イモガイの殻頭部を円盤状に加工したもの1個、第6層ではニシミナシガイの未製品1個、灰貝層1個、また、ツノガイが貝層で2個、混砂層で1個、曾畑層で7個出土している。曾畑層 (礫層) では貝小玉1個、泥灰層1個、東壁崩落土1個、木の層1個、緑灰色砂層4個、緑灰色砂層下礫層1個、礫層1個、出土不明ではツノガイ11個、貝小玉5個の計16個であるが、これらは灰埋土やブルイ土から見つかったことから曾畑層の時期の可能性が高いと考える。

表11 貝製品観察一覧①

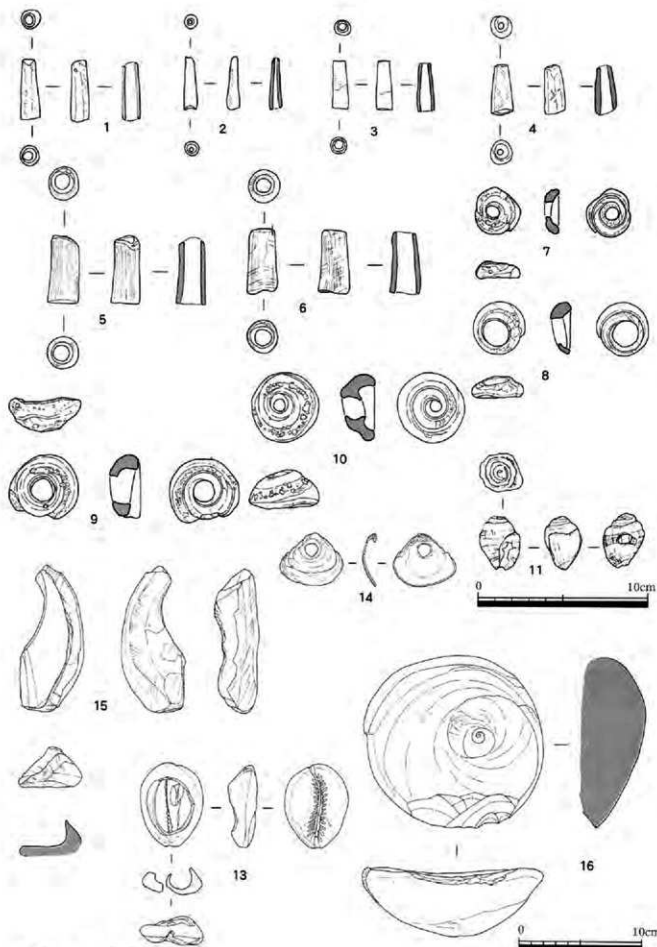
図版番号	製品番号	種類	縦径高 cm	横径長 cm	厚さ (cm)	孔 穴 径 (mm)	孔 穴 径 (mm)	重量 (g)	観察事項	出土場所 台帳番号
図 版 62	4018	ツノガイ	1.7	0.55	0.55	2.5 (0.4)		0.36	体層。ほぼ全面研磨。殻は細かいアバタ。泥炭層のため灰白色を呈す。第40図1	
	4025	ツノガイ	1.5	0.7	0.7			0.63	体層。表裏研磨。面取りされる。殻はアバタやみずすれあり、死貝。第40図4	
	4020	ツノガイ	1.5	0.4	0.4	1.5 (2.5)		0.16	体層。殻表の一部研磨。上下面は摩耗。上下→破損。第40図2	
	4023	ツノガイ	2.0	0.9	0.9			1.05	体層。表裏面研磨。上下面は一部破損するが研磨あり。殻文様明瞭。第40図5	
	4102	ツノガイ	1.5	0.45	0.5	2.5 (3.5)		0.22	表裏面研磨。上面研磨。下面摩耗。貝の成長線が確認できる。第40図3	伊礼原BほかNo.143曾 畑層 台8086
	4104	ツノガイ	1.85	0.25	1.0	4.5 (7.5)		1.17	色残。摩耗が研磨は明瞭でない。上下面は整う。殻は風化。第40図6	伊礼原BほかNo.143曾 畑層 台9097
	4030	ツノガイ	1.5	1.1	1.0	3	4	0.79	背面穿孔。殻頂摩耗。殻は細かいアバタ。第40図11	サブトレ東西ライン16 区、東壁崩落土 台88
	4041	チョウセンハマグリ	2.6	3.1		6	6	1.44	研磨→穿孔。殻は風化、わずかに色残。研磨→穿孔加工。第40図14	中央区サブトレ、緑灰 色砂層 台194
	4013	マガキガイ	2.0	1.8	1.25	7	7	1.77	殻頂摩耗。研磨摩耗。アバタ顕著、あきらかに死貝。第40図9	サブトレ南北ラインJ 区、曾畑層下2層層第 2面取り上げ 台1064
	4034	マガキガイ	2.0	1.9	0.8	5	5	2.38	殻頂。表裏面研磨。アバタ多し。第40図10	中央区サブトレ、緑灰 色砂層 台194
	4017	小型イモガイ	1.3	1.3	3.5	4	4.5	0.41	殻頂。穿孔。ほぼ全面研磨。殻はアバタあり。第40図7	不明
	4033	マガキガイ	1.65	1.6	0.4	8	8	0.88	殻頂。ほぼ全面研磨。アバタ有。第40図8	
	4008	ヤコウガイの蓋	7.7	8.5	2.4	×	×	181	蓋。下縁に2回の割線。殻は風化。一部灰色。第40図16	サブトレ東西ライン17 区、緑灰色砂層の③ 台3574
	4005	アンボンクロザミ(大形イモガイ)	8.3	5.0				31.22	加工一、表一自然、裏一自然、側面一自然、上面一自然、下面一自然、殻一灰色、殻頂にアバタ有。加工、泥のしみた殻。アバタ有→殻頂	伊礼原Bほか、No.143、 灰色細砂層 台3337
	4044	ゴカイ棲管? ツノ	1.7	0.5	0.6	2.5 (4.0)		0.3	棲管。殻は風化、表面は摩耗。ツノガイと同じ使用。	南区サブトレ中央、曾 畑層(混貝・混砂) 台3026
4021	ツノガイ	2.0	0.6	0.6	0.18 ()		0.64	体層。殻は摩耗。		
4022	ツノガイ	1.9	0.7	0.6			0.56	体層。殻表面残。		
4024	ツノガイ	2.6	0.9	0.9			0.95	体層。殻は風化。アバタあり。		
4026	ツノガイ	3.8	0.8	0.8			1.34	体層。断面→方形。殻は風化気味。	南区サブトレ北側、灰 褐色(混砂) 台3204	
4027	ツノガイ	1.75	0.6	0.55			0.35	体層、加工一、表一、裏一、側面一、上面一、下面一、殻一、加工。上、下→破損、殻表一文様残		

<凡例>「観察事項」の項に挿入・図版番号も加えた。
「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。低湿地区台帳番号はCDに収録

表11 貝製品観察一覧②

観 察 番 号	製 品 番 号	種 類	縦 (殻高) cm	横 (殻長) cm	厚さ (cm)	孔 テテ (mm)	孔 ヨコ (mm)	重量 (g)	観 察 事 項	出 土 場 所 台帳番号
	4028	ツノガイ	1.3	0.8	0.75			0.37	体層。殻表面一文様残。褐色付着。	
	4029	ツノガイ	2.0	0.9	0.9			0.65	体層、加工一、表一、裏一、側面一、上面一、 下面一、殻一、加工。貝の模様のある	No.143北東、土取り上 17時 台3843
	4030	ツノガイ	1.3	0.8	0.8			0.63	体層、加工一、表一、裏一、側面一、上面一、 下面一、殻一、加工。管口→自然?	庵裡土[コンテナ番号: 33、袋番号:33、層位: 灰白色土、土量:12L、 フルイ:HF、作業日: 030625] 台7054
	4100	ツノガイ	1.9	0.4	0.4			0.16	加工下面研磨。	伊礼原B遺跡ほかNo.143 管埋層(シイの実集中) 台3105
	4105	ツノガイ	1.25	0.9	0.85	0.45 (0.5)		0.75	体層。加工一表表面及び側面研磨。殻は風 化。	伊礼原BほかNo.143管 埋層 台9148
	4106	ツノガイ							加工一、表一、裏一、側面一、上面一、下 面一、殻一、加工	伊礼原BほかNo.143管 埋層 台1013
	4066	ツノガイ類	0.7	0.4	0.4			0.06	研磨あり。	旧試掘穴No.143南西側 台8271
	4058	ニシキミナミ	7.2	3.5	3.2	10	9	55.34	表裏面にわずかに研磨痕。上面は打割で孔。 色残。図版62・17	No.143東側、第6層(45 ~50) 台889
	4004	ハイガイ	4.5	5.1	-	1.0	-	22.41	全、加工一成長線に沿って割れる。殻頂穿 孔。表一自然、裏一自然、側面一自然、上 面一自然、下面一自然、殻一風化、貝文様 はあり、成長線に沿って割れる。殻頂穿孔 加工、穿孔(自然?)→殻頂	南区サプトレ北側、灰 褐色(洗砂) 台3204
	4038	ハナヒラタカ ウ	2.3	1.8		1.6	1.2	1.75	背面打ち割り。殻なし。	No.143西側部拡張時、 管埋層(障層) 台764
	4000	フシダカキイ ロダカラ	1.9	1.4	0.6	9	6	0.92	体層、加工一背面穿孔、表一背面、打割穿 孔、裏一自然、側面一研磨、上面一自然、 下面一自然、殻一風化、背面穿孔加工、穿 孔(自然?)→背面 図版62・12	南区サプトレ北側、灰 白(有機)混貝 台7961
	4001	マガキガイ	1.75	1.65	0.7	5	5	1.48	殻頂穿孔。殻は風化。	
	4035	マガキガイ	1.6	1.6		6	5.5	1.24	殻頂。スレ。	サプトレ南北ラインF ~K区、西壁清掃時 台95
	4036	マガキガイ	2.1	1.7	8	6	-	1.86	殻頂研磨。殻はアバタ痕着。	サプトレ東西ライン15 区、東壁崩落土 台88
	4037	マガキガイ	1.7	1.5	6	4		1.15	殻頂。裏面はやや水平。殻頂アバタ多し。	No.143西側部拡張時、 管埋層(障層) 台764
	4042	マルツノガイ	1.5	0.6	0.5	5(6)		0.26	体層。全体に摩耗気味。	南区サプトレ中央、灰 白貝層 台2853
	4043	マルツノガイ	1.85	9.5	9			0.96	体層。全体に摩耗気味。	南区サプトレ北側、暗 灰(貝層)
	4011	ヤコウガイ	9.9	4.6				98.81	研磨あり、後世の可能性あり。	伊礼原Bほか、No.143、 灰色細砂層 台3337
	4032	大形イモガイ	4.0	3.6	0.5			12.64	上面摩耗。	
	4031	中型イモガイ	3.3	2.8	0.6	5	4.5	6.36	殻頂。穿孔。表面研磨、表面摩耗。殻は風 化著しい。	No.143西側第5層最下 部(マンガン直上) 台6876

<凡例>「観察事項」の項に挿図・図版番号も加えた。
「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。低湿地区台帳番号はCDに収録



第40圖 貝製品

6. 木製品

低湿地区より出土した木片はコンテナ数十箱分ある。これら木片には自然遺物と加工痕が認められる人工遺物がある。前者は縄文時代前期のものと同層（グスク時代初期頃）のものに分かれる。後者の人工遺物は、曾畑式土器が認められた縄文時代前期の遺物が主体で、縄文時代中期は大型の容器が1点、縄文晩期は櫛が1点確認できた。

1. 縄文時代前期

1) 笊

第16図はリュウキュウチクを素材とした笊である。水場を利用した貯蔵穴に設置したもので果実類を保存し、流水からこぼれないようにするために作られた資料である。また、貯蔵穴でも述べたように遺構内には4隅に木片を立ており、笊自体を流水から守るための処置が施されている。

笊はリュウキュウチクを幅7mm前後に割いたものを使用している。編み方は底部を見てみると素材を縦と横に組んでいて、基本的に縦横それぞれ2本を1組として交互に潜ったり越えたりする手法を用いていると思われる。底部から胴部へ立ち上がる部分の一部では素材の折返しを確認できる。胴部の方も同様な編み方と思われる、部分的に縦の素材で編み目を詰めている部分が残っている。おそらく横の素材も本来は詰めていたと考えられる。なぜなら、現状では編み目は粗いがこの状態では隙間から果実類が漏れてしまい、貯蔵するのに不適当な笊になってしまうからである。上端部の縁は確認されていないため仕上げ方は不明である。

2) 構築材

第42図2は素材が針葉樹を利用しているが樹種は不明。本資料は直径約6.08cmの丸木を縦に4等分に打ち割り扇状を意識したと思われる。それを更に円弧部分の両端部を削いて円弧面の幅を狭めた五角形状に成形して使用している。本資料の中心部とその両サイドに加工痕が見られ、おそらく磨製石斧による削りと思われる。円弧面で右側に幅3～6mmの蔓もしくは竹材を巻き付けた痕跡が見られる。針葉樹で硬い性質であることも考慮すると蔓や竹材で巻き付けて固定した何らかの構築物の一部として使用された可能性がある。水場に何らかの構築物の存在を示す資料となろう。全長1.46mを測る。

3) 石斧柄

第43図6は石斧の柄で、素材はクチナシである。石斧柄の出土例は南島においては皆無で初の出土例となる。木の幹と枝の部分を利用し、幹の部分が取っ手、つまり握り部で、枝の部分は石斧を固定する部分となる。本資料は未完成品で製作途中の段階ではないかと思われる、刃部と直角になる形状とサイズから手斧と思われる。笊の側（南西側）で検出された。

石斧装着部の間逆の握り部は石斧などで連続して削りを行い扁平に加工し、その面は手のひらが当たるところとなる。その幅は5.5cmを測る。削り痕を見てみると刃部幅は約2.5～4.5cmである。現況では握り部は丸ではなく、石斧装着部に向かって親指で握る面と人差し指などで握る面は斜めになり三角状を呈する。握る部の末端の切断面は、ある程度石斧などで打ち削りをして細くなったところで折って切り離している状況である。

石斧装着部は上部に石斧を装着するため枝を2cm削り取り段差を設け扁平に仕上げている。扁平

に仕上げた面は幅4.7cm、長さ8.5cmを測る。石斧装着部の末端の切断面は掘り部と同様である。柄の長さ32.5cm、石斧装着部の長さ20.5cmを測る。

4) 角材

第42図5は穴の周辺（北西側）からの出土したやや四角形をした木片である。素材は不明である。一辺約9.8cm、長さ19.9cmを測る。本資料は何らかの構築物の素材の一部であろうか。その場合、上述した構架材と関係がある可能性が高い。しかし、尖った部分の先端は石に当たって潰れた状態をしているため杭として使用した可能性もある。

5) 杭

第43図7～9は棒の先端を尖らしていることから杭として使用したと考えられる資料である。本資料は試掘時に曾畑式土器に伴った資料である。いずれも素材は不明である。

第43図7は直径5cmの円形を資料である。木の幹を利用したものと思われる。先端部の上に尖らした打ち削り痕が明瞭に残る。長さ26.5cmを測る。

同図8は木片を半分に削いて四角形状に3.9×4.5cm成形している。先端部を尖らした加工痕が残る。長さ24.7cmを測る。

同図9はやや半円形状をした幹を利用した資料である。棒の両端部は一方は打ち削りにより尖らし、もう一方は火を受けた痕跡が残る。この痕跡は切断するため手法なのか、打ち込んだ後に火を受けたのか判然としない。幅5.8×3.6cm、長さ21.5cmを測る。

6) 不明製品

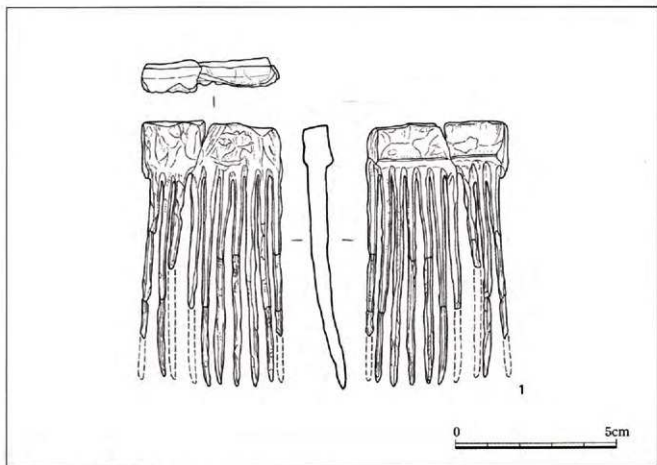
第42図3と4は同一個体と思われる。試掘調査時の曾畑式土器に伴った資料である。素材は不明。図3は縦8cm、横16.3cm、幅3.4cmを測る。表面に幅2～6mmの竹材と思われる素材が横位と縦位に貼り付いている痕跡が残っている。断面は「レ」状を成しその部分にも素材が貼り付いている。表面は破損していると思われる。図4は縦5.5cm、横14.6cm、幅2.1cmを測る。

2. 縄文時代中期

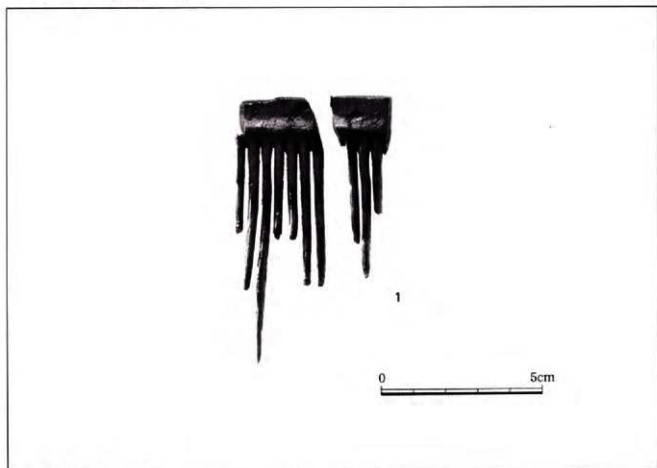
1) 容器

第44図10は第14層の礫層から出土した大型容器である。南島での出土例はなく初めての出土である。素材はショウナンボクで、琉球列島だけでなく本土も含めて現在の日本には全く生育しておらず、台湾か中国の本土に生育している。縄文時代中期の頃に樹生していたかどうか不明で、台湾や中国のとの交流も確認されていない。素材の出自については不明である。

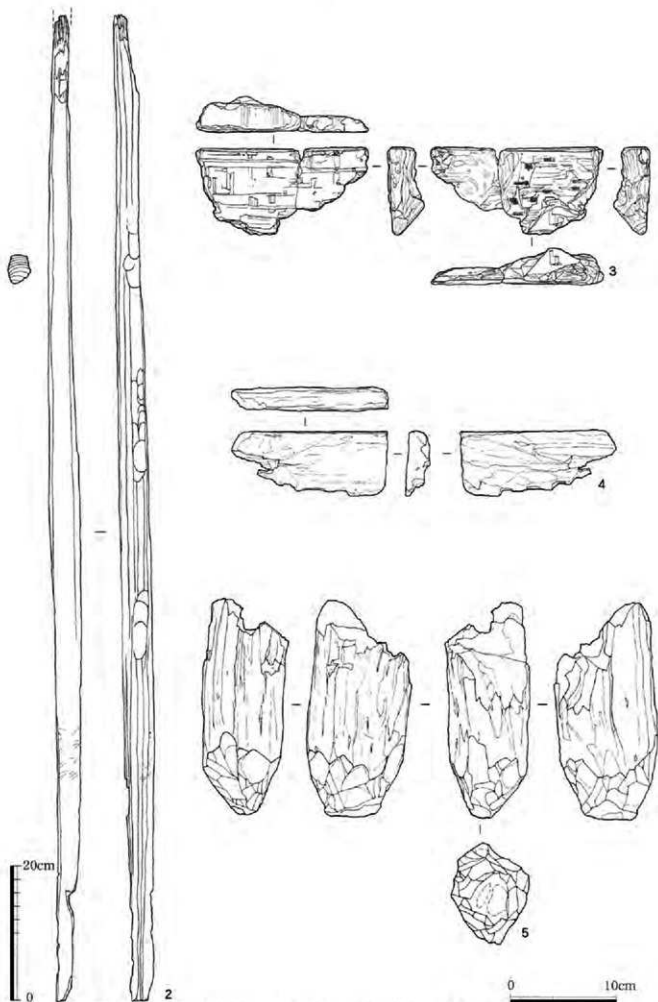
上面形はやや長方形で、側面は船形を呈している。内側はくり抜かれ横臼状を想定させる。くり抜きの詳細な技法は判然としないが、内壁側に僅かに打ち削り痕が見られる。内側の形状は、断面は「U」字状で、側面は袋状で底部の中心部が僅かに盛り上がっている。全面に幅3～4cmの石斧などによる削り痕が見られる。特に底部は安定するように扁平に削りが連続してみられる。本資料のカーボン年代は4480±50値が測定されている。



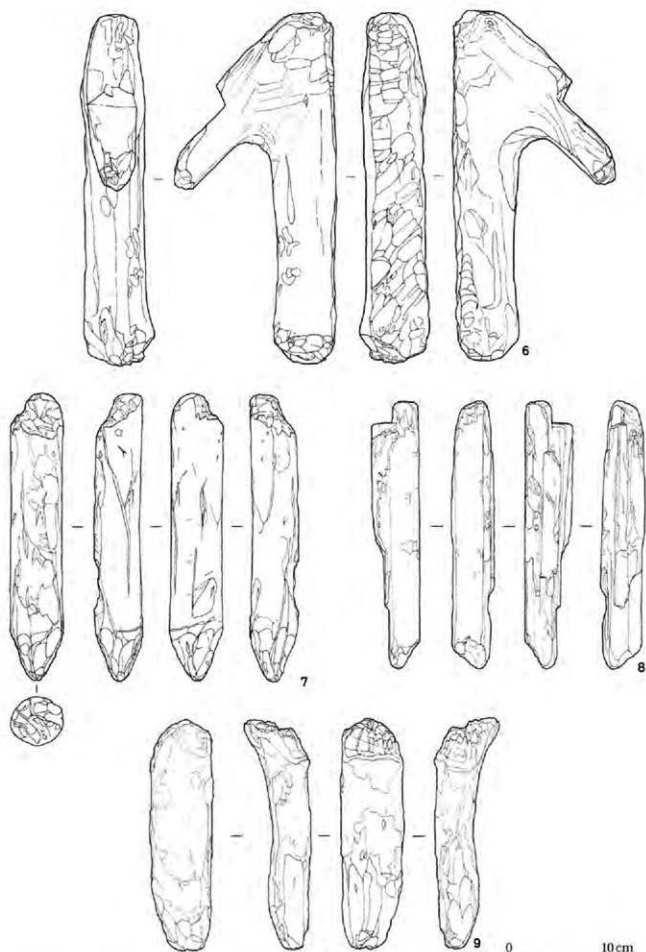
第41図 木製品① 櫛



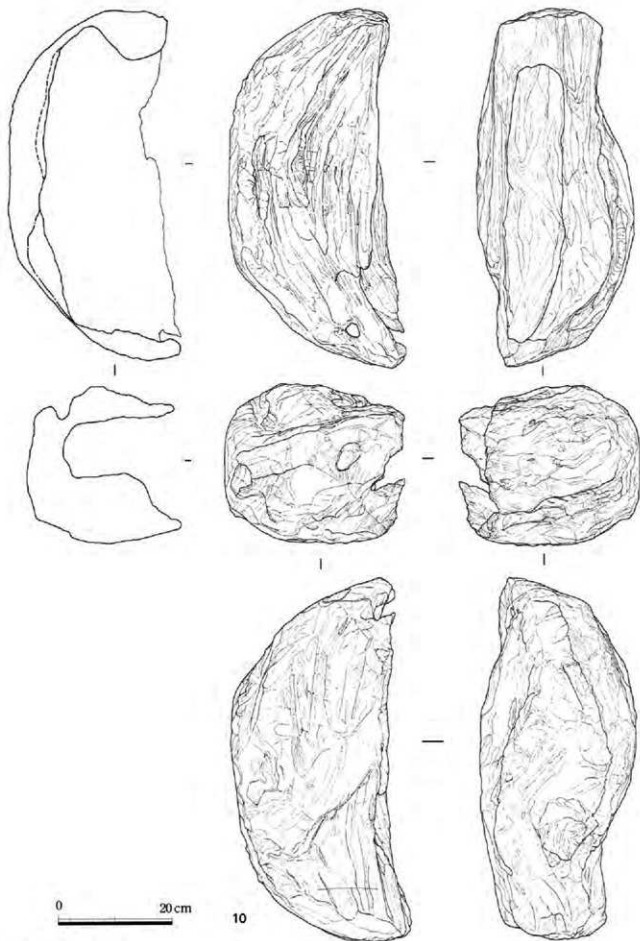
図版63 木製品① 櫛



第42図 木製品② 構築材 (2) ・不明製品 (3・4) ・角材 (5)



第43圖 木製品③ 柄(6)・杭(7~9)



第44図 木製容器

3. 縄文時代晩期

1) 櫛

第41図1は櫛で、第13層の溝の底より出土した。南島において初の出土例である。堅櫛で、長さ8cm、最大幅4.2cm、最大厚0.8cmを測る。一枚板に先端の尖った利器で両面より幾度も溝を削って精巧に歯を作り出す刻歯式技法である。歯は11本持つと思われる、現存または接合した結果、6本は長さが6.3cmから6.4cmと把握できた。4本は途中で、1本は根本より破損している。歯の根元は幅が0.25cmから0.3cm、先端は0.1cmから0.15cm、厚さは根元が0.6cm、先端は0.1cmから0.15cmを測る。櫛の表面は頭部に1cmの幅を有し、歯の根元と段差を設けている。本資料に漆を塗った痕跡は見られなかった。素材はヤエヤマコクタンでカーボン年代は2580±60値が測定されている。

7. グスク時代以降の遺物について (第45図・図版67・68)

今回24点の遺物が確認できた、14～18世紀頃のものと考えている。青磁(1～3)・白磁(4)・染付(5・6)・褐釉陶器(7)・本土産陶磁器(8～10)・沖縄産施釉陶磁器(11～15)・沖縄産無釉陶器(19)・陶質土器(16～18)と寛永通寶について報告する。

第45図の1と7は伊礼原B他試掘時に出土。3の菊皿はNa143東側淡灰褐色土層から出土。17・18はNa143北側旧表土からの出土。2の青磁碗底部と寛永通寶はNa143北から出土。4・12・19は中央区～東区間畦の第2層から出土。8は中央区～東区間畦の第2b層から出土。10は中央区～西区間畦の第2c層から出土。9は中央区～西区間畦の第2a層から出土。11はTP試掘No8から出土。12はサブトレ南北ラインA区緑灰色砂層4面から出土。15は米軍の客土から出土。16は試掘No3(平成10年)泥炭層から出土。5・6・13は表採。ほとんどが四分の一以下の小片である。

寛永通寶は直径2.15cm、重さ2.13gである。背面に「文」の文字を持たないこと、書体などから1697(元禄10)～1781(天明元年)に鋳造された銅銭と思われる。

引用・参考文献

永井久美男編 1994『中世の出土銭 ―出土銭の調査と分類』兵庫埋蔵銭調査会

表12 グスク時代以降遺物観察一覧①

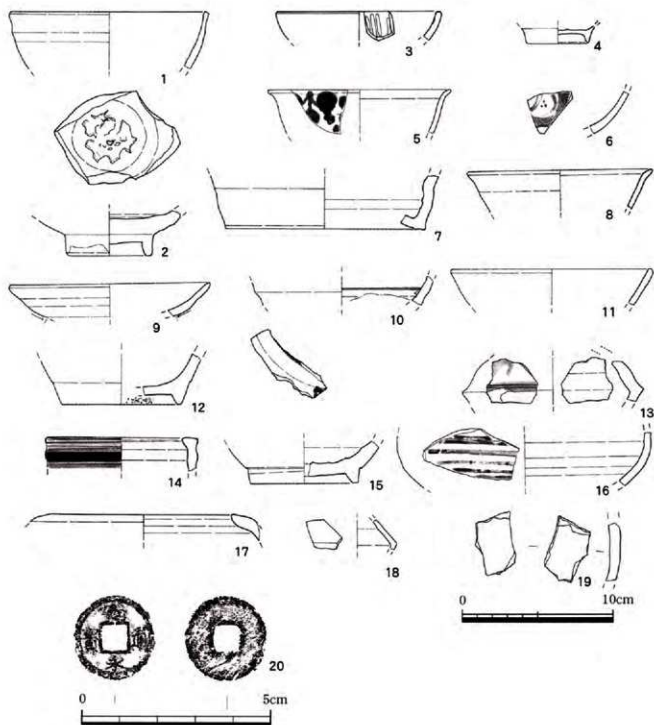
単位: cm

図版	番号	種類	器種	部分	口径	器高	底径	素地	含有物	軸調	貫入	層序
第45 図・ 図版	1	青磁	碗	口縁部	13.2	3.7	—	灰白色やや粗粒子	1mm以下の黒色粒子をわずかに	灰オリーブ色の軸がやや厚くかかる	外面に粗く貫入わずかに	B他 試掘時遺物(上勢)
	2	青磁	菊皿	口縁部	10.9	1.9	—	灰色やや粗粒子	1mm以下の黒色粒子をわずかに	オリーブ灰色の軸がやや厚くかかる	内外に粗く入る	No143 東側淡灰褐色土層(第4層?)
	3	青磁	碗	底部	—	2.9	5.4	灰白色やや微粒子	1.5mm以下の黒色粒子をわずかに	発色不良で不鮮明だが、やや厚くかかる	見られない	No143 北掘り始め(10-15cm)
	4	白磁	小碗	底部	—	1.1	4	白色微粒子	見られない	乳白色の軸がやや薄くかかる	見られない	中央区-東区間畦第2層
	5	染付	碗	口縁部	12.2	2.9	—	灰白色堅緻	1mm以下の黒色粒子をわずかに	明オリーブ灰色の軸が外面にやや厚く、内面に薄くかかる	見られない	表探
	6	染付	碗	胴部	—	2.9	—	灰白色微粒子	1mm以下の黒色粒子をわずかに	灰白色の軸がやや厚くかかる	見られない	調査区北側表探
	7	褐釉陶器	壺	底部	—	3.7	13.1	灰色微粒子	5mmの石英?をわずかに	黒色の軸が薄くかかる	見られない	B他 試掘時遺物(上勢)
	8	本土産陶磁器	碗 染付?	口縁部	12.3	2.6	—	灰白色やや微粒子	微細な黒色粒子	灰白色の軸がやや厚くかかる	内外面に細かく入る	中央区-東区間畦第2b層
	9	本土産陶磁器	碗	胴部	—	—	—	灰白色堅緻	見られない	灰オリーブ色の軸がやや薄くかかる	見られない	中央区-西区間畦第2c層
	10	本土産陶磁器?青磁?	皿	皿	13.4	2.1	—	灰白色やや粗粒子	見られない	灰オリーブ色の軸が内面にやや厚く、外面に薄くかかる	見られない	中央区-西区間畦第2a層
第45 図・ 図版	11	沖繩産施釉陶器	火取	口縁部	10.2	2.2	—	灰白色堅緻	見られない	黄褐色の軸がやや薄くかかる	外面にやや粗く入る	中央区-東区間畦第2層
	12	沖繩産施釉陶器	急須	胴部	—	1.1	—	淡黄 堅緻	1mm以下の黒色粒子をわずかに	灰白色の軸がややうすく	外面に細かく入る	表探
	13	沖繩産施釉陶器	灰軸碗	口縁部	13.4	2.3	—	灰色やや微粒子	見られない	灰オリーブ色の軸がやや薄くかかる	見られない	伊c TP-8(土手上の土洗い)

表12 グスク時代以降遺物観察一覧②

単位: cm

図版番号	種類	器種	部分	口径	器高	底径	素地	含有物	輪調	貫入	層序		
第45図・ 図版68	14	沖縄産施釉陶器	灰釉碗	底部	—	3.3	8	灰白色やや微粒子	1mm以下の黒色粒子を少量	—	見られない	サブトレ南北ラインA区緑灰色砂層4面目	
	15	沖縄産施釉陶器	白磁瓶	底部	—	2.7	7.2	黄灰色やや微粒子	1mm以下の黒色粒子をわずかに	—	見られない	米軍客土	
	16	陶質土器	鍋	底部	—	3.4	—	橙色微粒子	5mm以下の赤色粒子と2mm以下の白色粒子、微細な雲母?をわずかに	—	—	試掘No.3泥炭層(シルト層下位)	
	17	陶質土器	火炉	口縁部	11.6	1.7	—	橙色微粒子	2mm以下の赤色粒子と2mm以下の白色粒子、微細な雲母?をわずかに	—	—	No.143 調査区北側旧表土	
	18	陶質土器	急須	胴部	—	—	—	橙色微粒子	微細な雲母わずかに	—	—	No.143 調査区北側旧表土	
	19	沖縄産無釉陶器	壺	壺	—	2.9	—	にぶい赤褐色やや微粒子	微細な白色粒子わずかに	外面に自然釉?	—	—	中央区-東区 明畦第2層
	20	古銭	寛永通宝		22	1	—			—	—	No.143 北振り始め(10~15cm)	
なし	21	沖縄産施釉陶器	鉢	底部	—	4	—	にぶい黄橙色やや微粒子	2mm以下の暗褐色粒子をわずかに	オリーブ黒色の釉が高台と見込み以外に薄くかかる	内外に細かく入る	No.143 伊B他	
なし	22	沖縄産無釉陶器	壺	胴部	—	7	—	にぶい赤褐色やや微粒子	微細な白色粒子わずかに	—	—	No.143 伊B他	
なし	23	沖縄産無釉陶器	壺	胴部	—	10	—	にぶい赤褐色やや微粒子	微細な白色粒子わずかに	—	—		
なし	24	陶質土器	急須?土瓶?	壺	—	4	—	にぶい橙黄色やや粗粒子	1mm以下の褐色粒子と微細な雲母?、白色粒子をわずかに	—	—	No.143 伊B他	



第45図 グスク時代以降の遺物

低湿地区

图版



図版7 伊礼原遺跡周辺の戦前の米軍航空写真（1945年2月18日撮影） 小さい丸は低湿地区 大きい丸は砂丘区



図版 8 上：伊礼原遺跡の遠景（西側上空より）
下：伊礼原遺跡の中景（西側より）



図版 9 上：伊礼原遺跡 低湿地区の伐採後の状況（南側より）
下：伊礼原遺跡 低湿地区の伐採後の状況（西側より）



図版10 上：伊礼原遺跡 低湿地区東側奥のウーチヌカー湧水
下：伊礼原遺跡 低湿地区湧水から流れる小川跡の水イモ



図版11 上：低湿地区の発掘状況
下：低湿地区のグリット設定状況



図版12 上：低湿地区の土層断面状況（中央区南壁面）
下：低湿地区の土層断面状況（北区東壁面）



図版13 上：カワニナを多量に含む上位層の状況（中央区東壁面）
下：低湿地区北側の旧水田跡（第3の層）



図版14 上：中央区西側水田址に見られる亀甲状クラックの状況
下：同上



図版15

上：北東区南壁面の状況

(手前北側には岩盤石灰岩の水摩を受けた痕跡が見られる)

下：北東区北壁面の状況

(中央区の第12～16層が欠ける)



図版 16 上：南区第11層の樹根の検出作業状況
下：西区第11層の樹根検出状況



図版17 上：中央区第11層の樹根下で出土した縄文晩期土器
下：中央区西壁第11層の樹根層壁面に出土したフェンサ下層式土器



図版18 上：南区南壁面と第14層礫面上面の状況
 (左側が木製容器、右側が板状樹種と石器類出土状況)
 下：板状樹種と石斧2点スリ石1点の出土状況



図版19 上：南区第14層上面の木製容器の出土状況
下：南区第14層上面の木製容器の出土状況（容器内部に礫が混入している）



図版20 上：南区第14層礎層上面の状況(木製容器の取り上げ後)
下：西区第14層礎層上面の状況



図版21 上左：南区第14層上位面（右側）と中位面（左側）の状況
下左：同上位面掘り下げ後の建築材の出土状況

上右：同上位面の掘り下げ後の状況
下右：同左土層断面と建築材の状況



図版22 上：中央区西側の第14層 中位礫層の露出状況
 下：中央区北側の第14層 中位礫層(左側) 下位礫層(右側)の露出状況



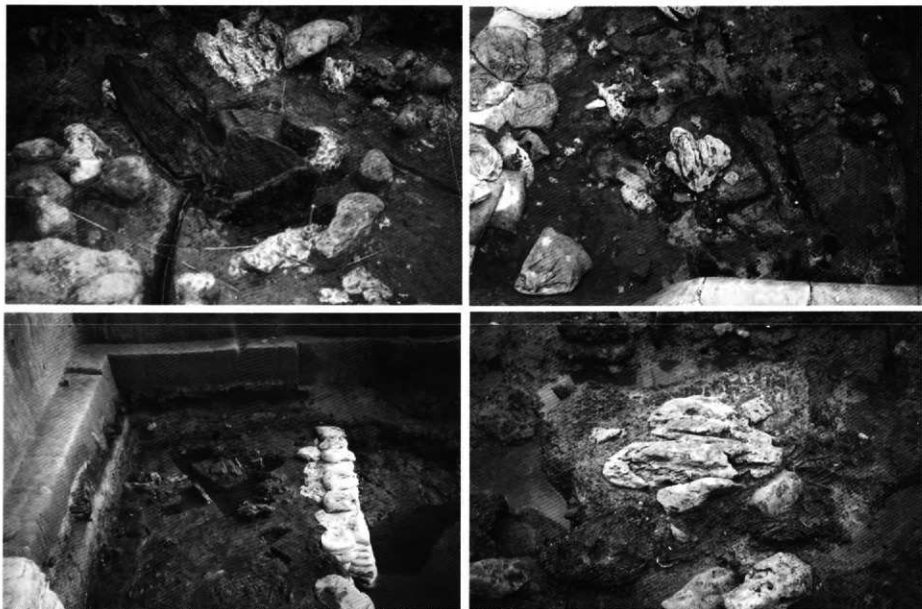
図版23 上：中央区西壁面（中央やや左、黒い部分下で櫛が出土）
下：櫛の検出状況（上層からの溝下で見られる）



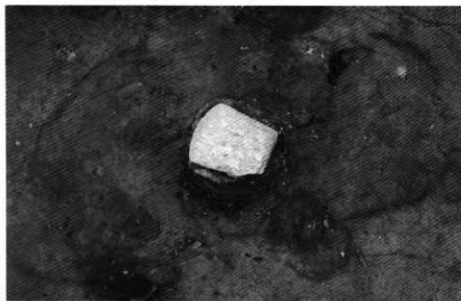
図版24

上：中央区東側、第14層中位礫層の
露出状況

下：同上、試掘穴断面に検出された遺構

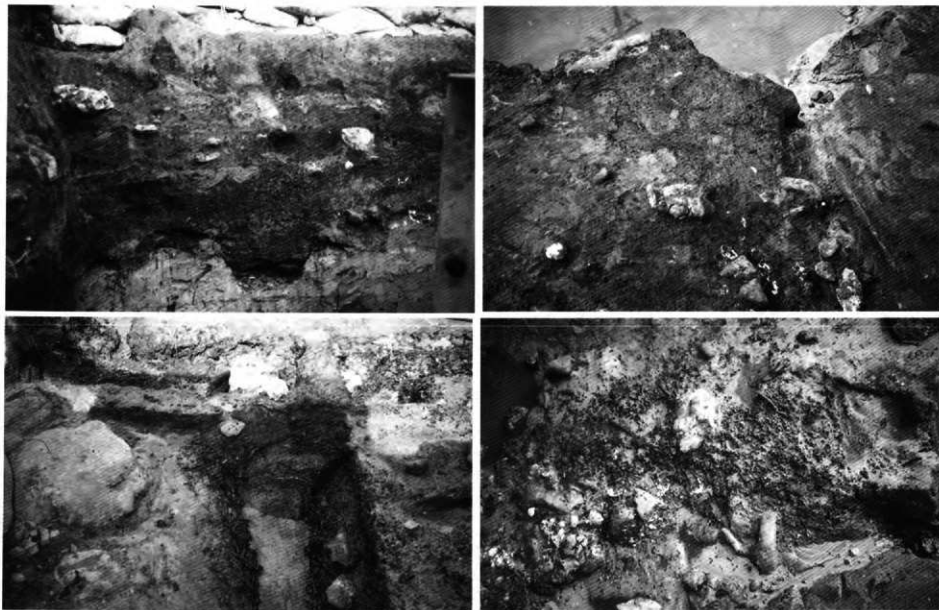


図版25 上左：中央区東側、中位礫層、笹の上位に検出された板状樹木 上右：笹の検出状況
下左：笹の検出状況 下右：笹の南面隅（右下側）で笹の塊が見られる

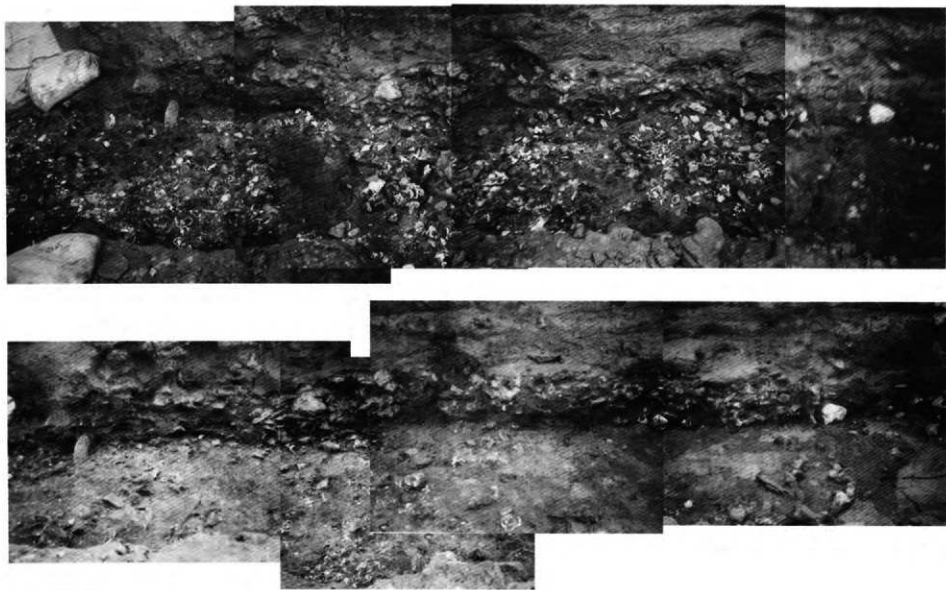


図版26 上左：北区第14層遺物出土状況
下左：同上、石斧の出土状況

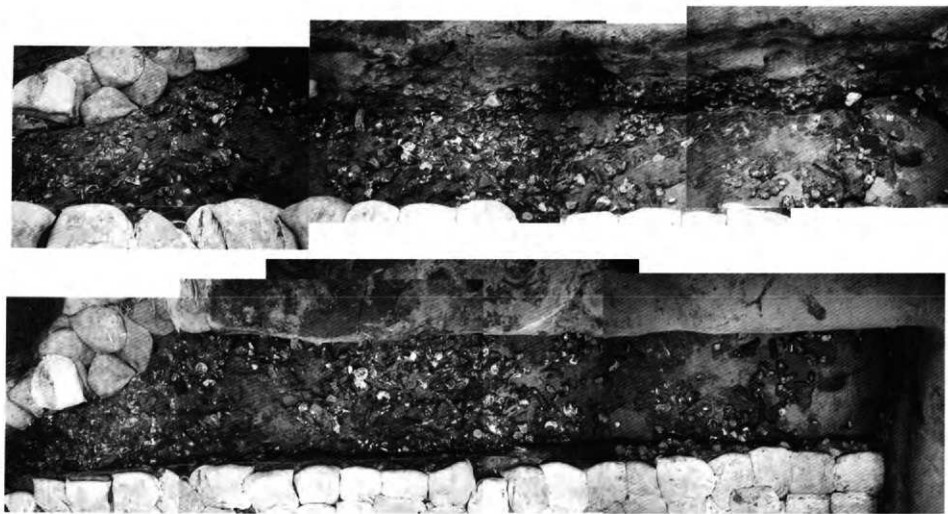
上右：同左、石斧の出土状況
下右：板状石器の出土状況



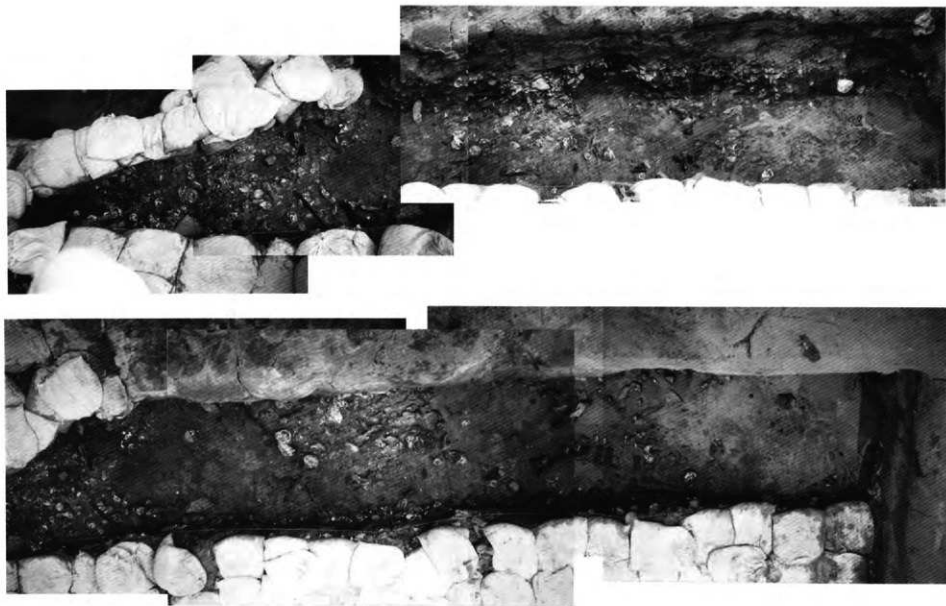
図版27 上左：中央区南壁第14層、竈近くシイの実のレンズ状の堆積状況 上右：竈の北面側に拡がるシイの実の状況
下左：竈の北側外に集中するシイの実の状況 下右：南区東側に見られるシイの実の状況



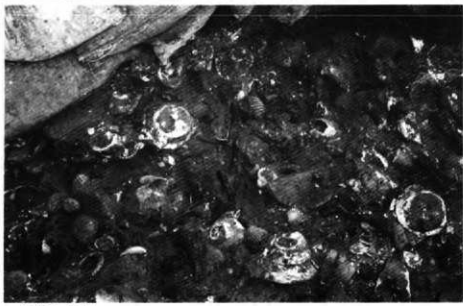
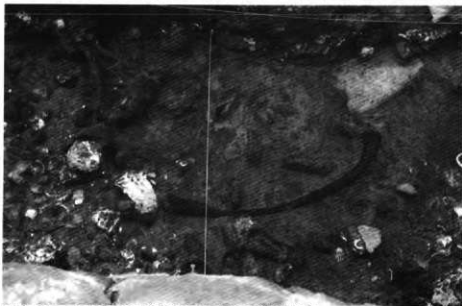
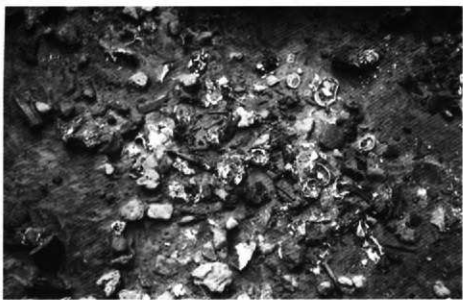
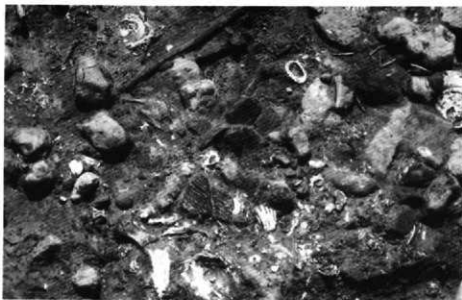
図版28 上：南区サブトレンチ第14層の貝層の検出状況（1回目）
下：同上



図版29 上：南区サブトレンチ第14層の貝層の検出状況（2回目）
下：同上



図版30 上：南区サブトレンチ第14層の貝層の検出状況（3回目）
下：同上

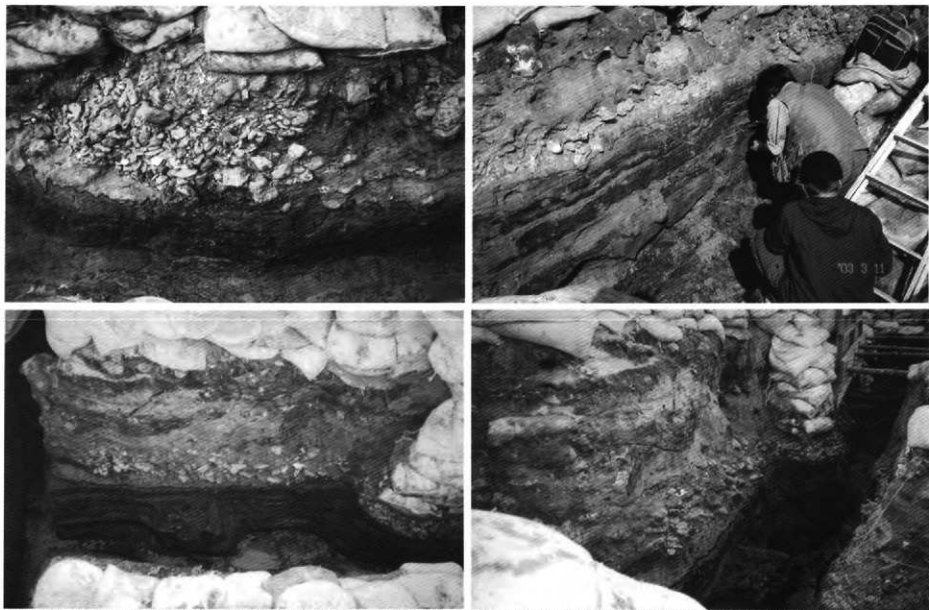


図版31 上左：南区第14層貝層の検出状況
下左：同上、海獣骨（図版75）の出土状況

上右：同左
下右：同上



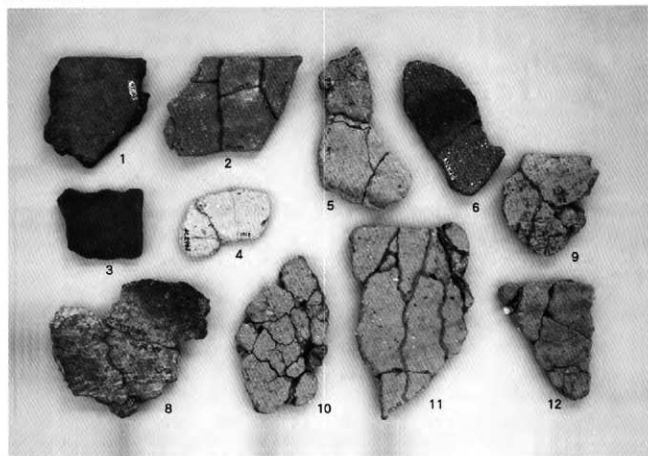
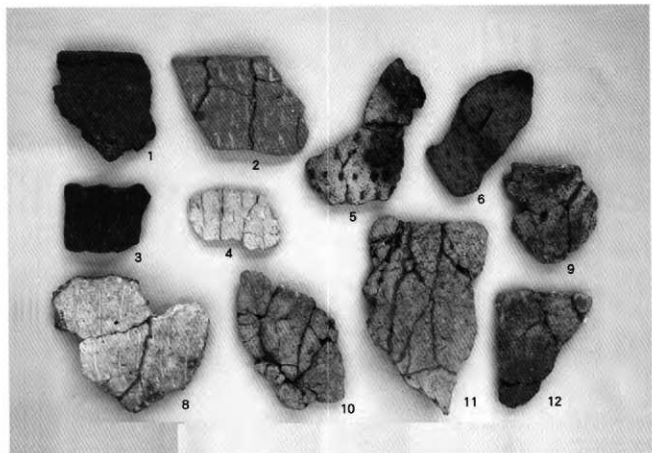
図版32 上 : 南区サブトレンチ第14層下位礫層の検出状況
 下左 : 同上、サブトレンチF-15交差区の状況
 下右 : 同上、南区から中央区を望む



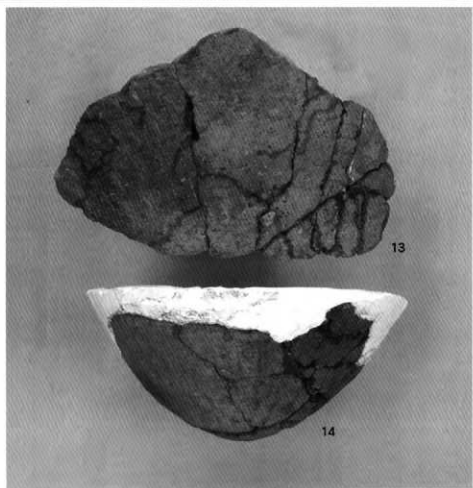
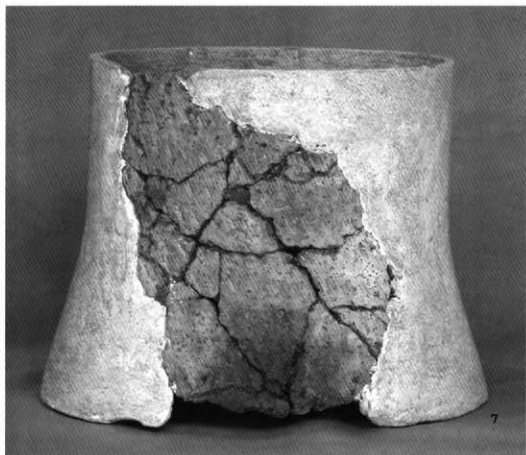
図版33 上左：中央区サブトレンチ第14層(G・H・I)の状況 上右：南区サブトレンチ第14層(A・B・C)の状況
下左：中央区サブトレンチ第14層(16・17・18)の状況 下右：西区サブトレンチ第14層(19・20・21)の状況



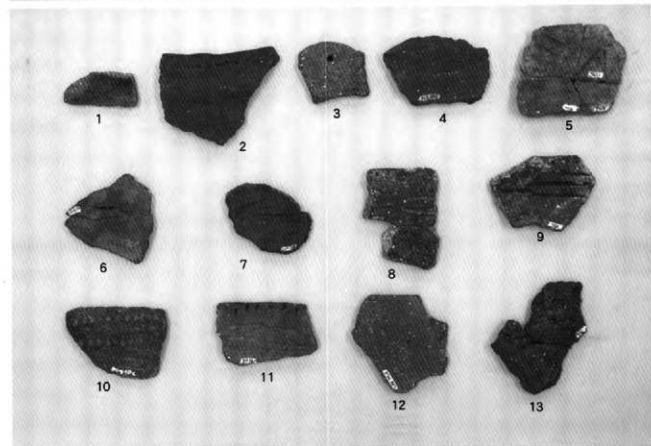
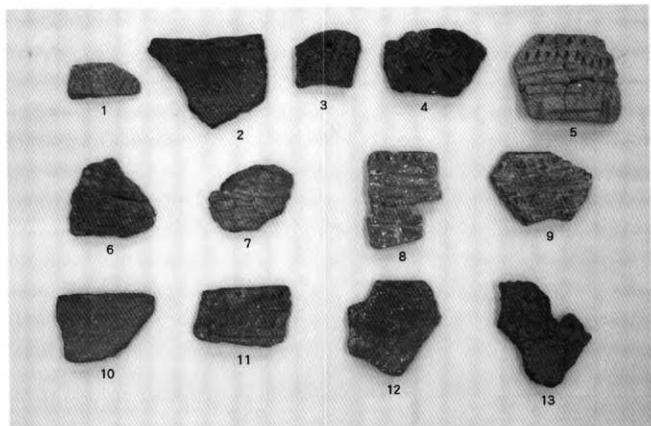
図版34 上 左：低湿地区水没状況 上 右：発掘作業員（沖縄市シルバー）
 中上左：低湿地区の崩落状況 中上右：同上
 中下左：低湿地区の水没状況 中下右：同上
 下 左：低湿地区の作業状況 下 右：発掘作業員（北谷町・沖縄市シルバー）



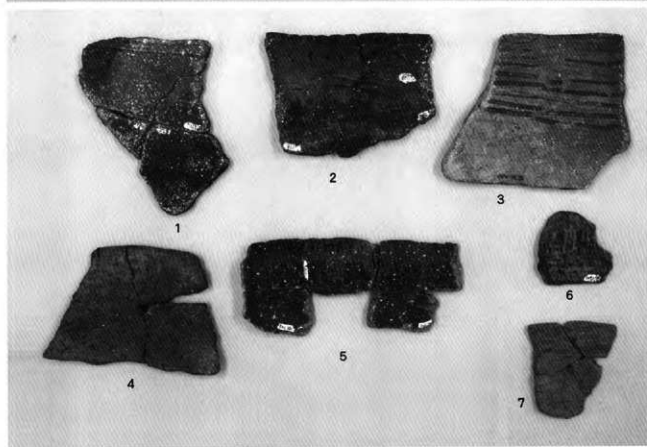
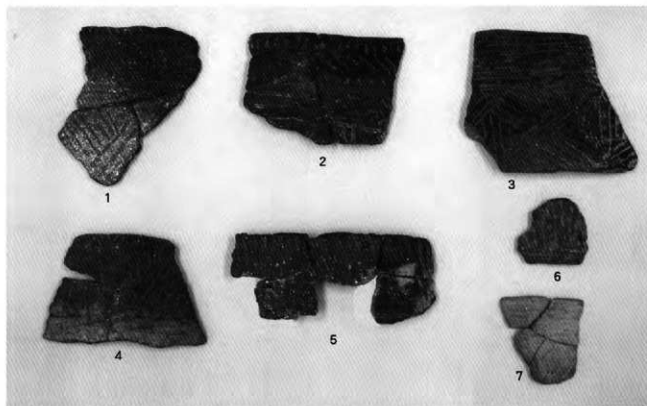
圖版35 爪形文土器① 上：表面 下：裏面



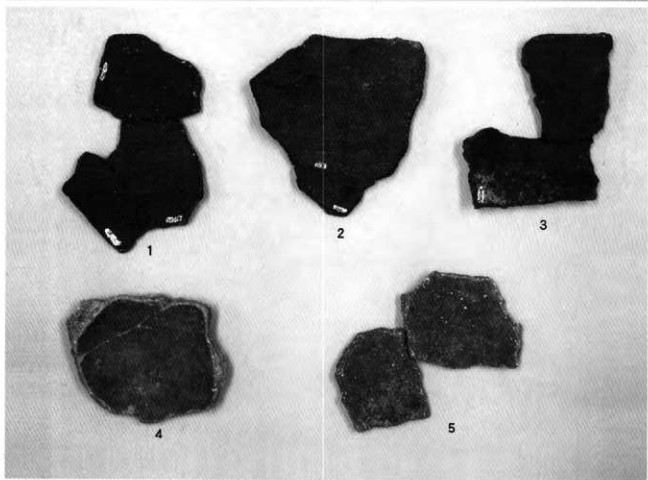
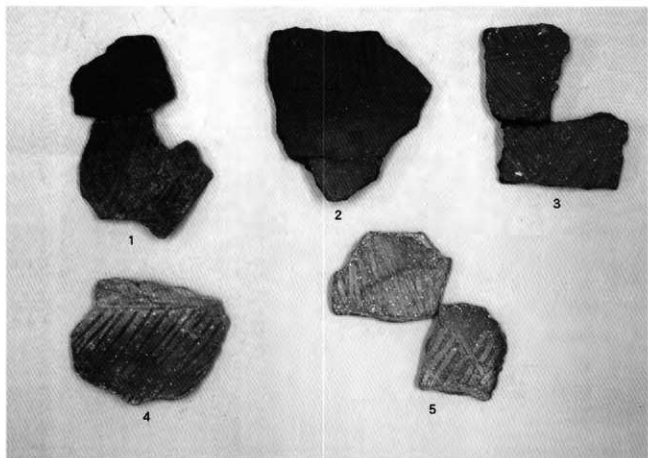
図版36 爪形文土器② 上：第19図7 下：第19図13、14



图版37 曾畑式土器① 上：表面 下：裏面



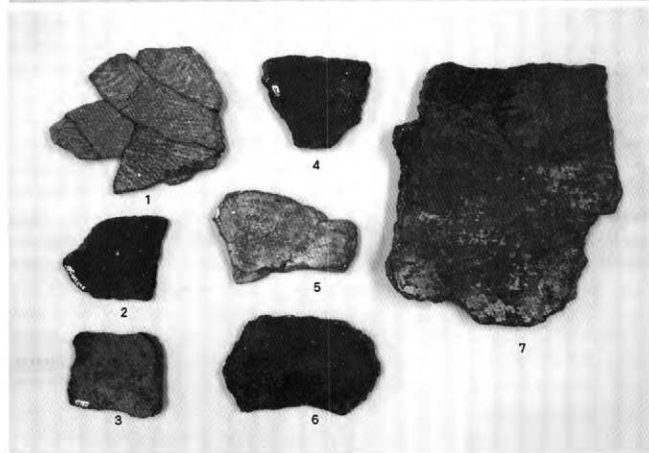
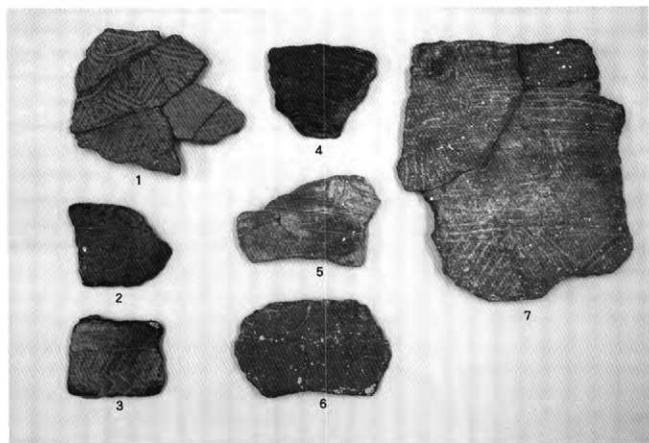
图版38 曾畑式土器② 上：表面 下：裏面



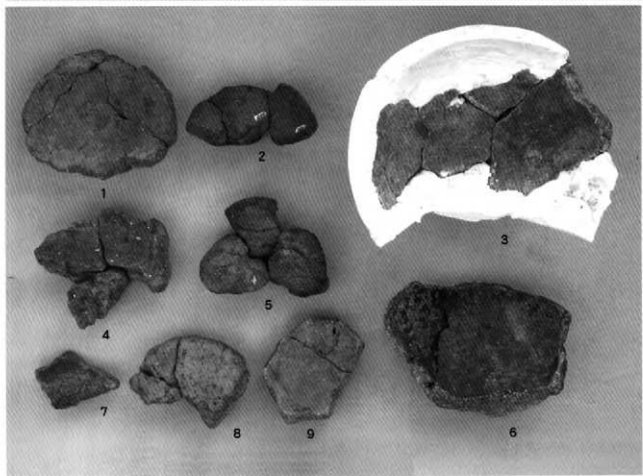
図版39 曾畑式土器③ 上：表面 下：裏面



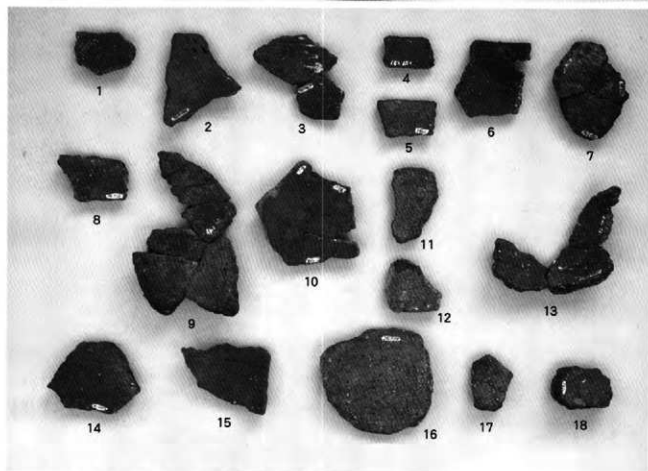
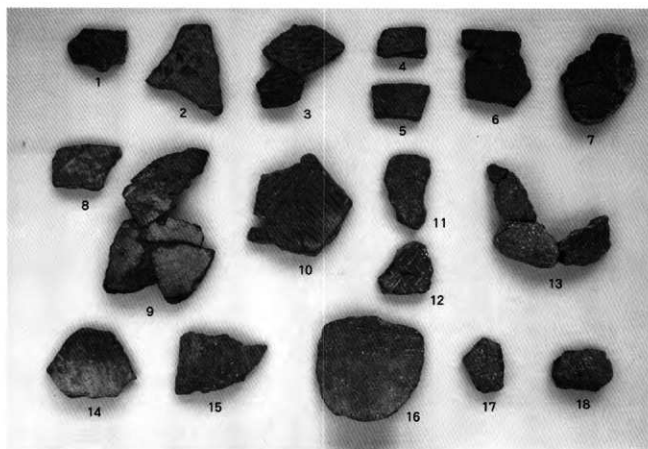
図版40 曾畑式土器④ 上：表面 下：裏面



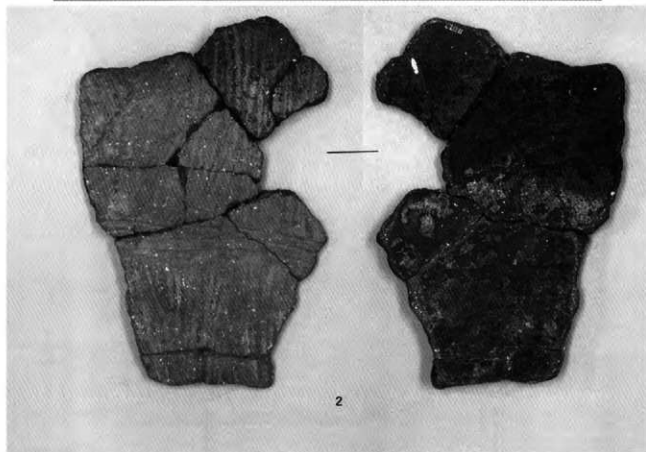
圖版41 曾畑式土器⑤ 上：表面 下：裏面



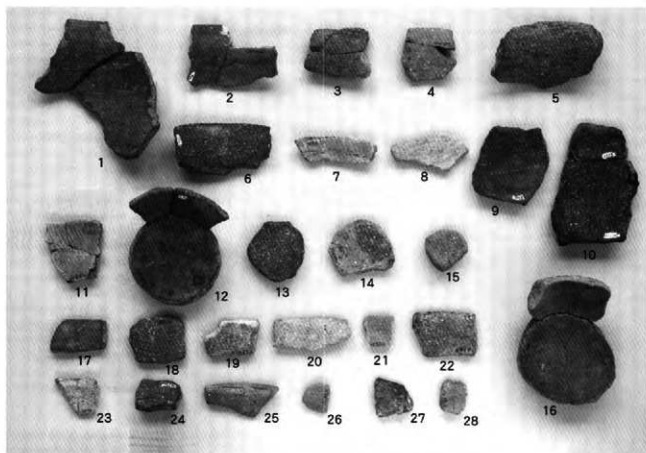
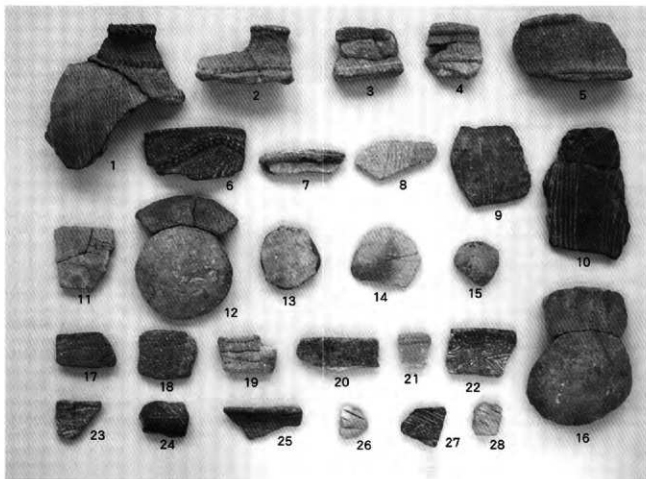
図版42 曾畑式土器⑥ 上：表面 下：裏面



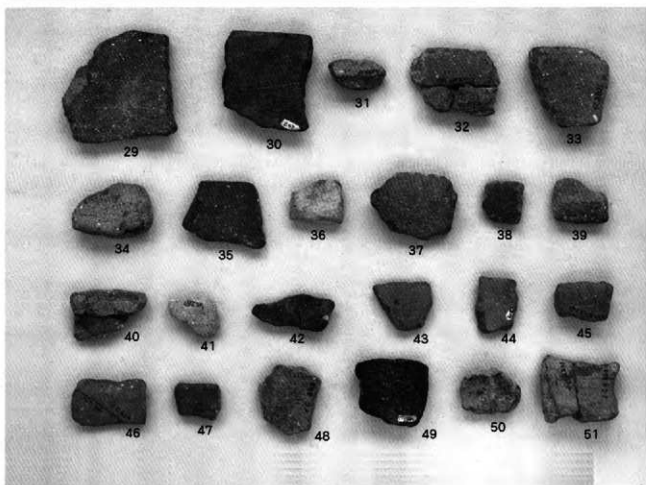
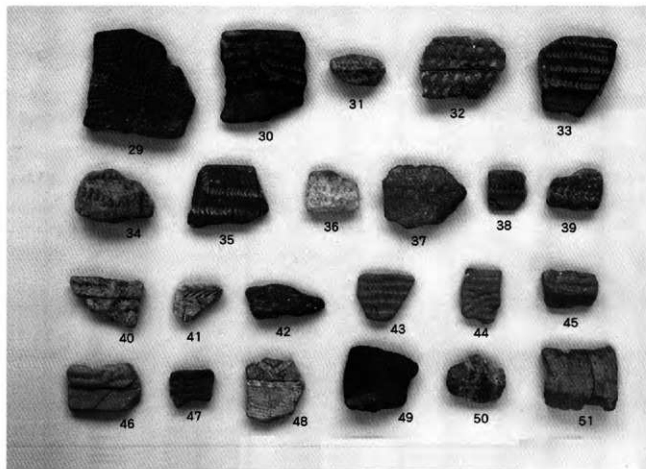
図版43 曾畑式土器⑦ 上：表面 下：裏面



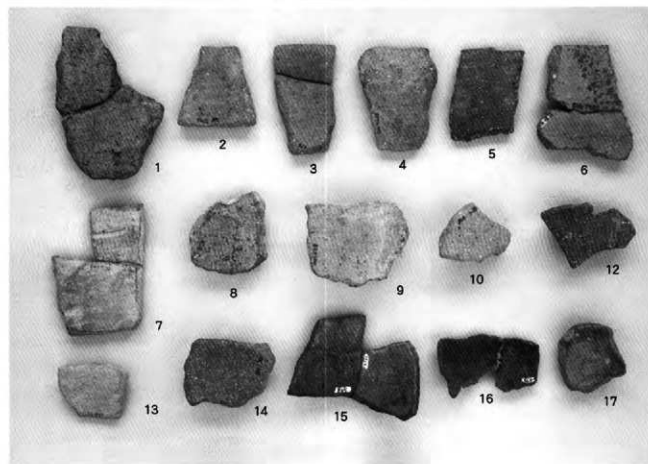
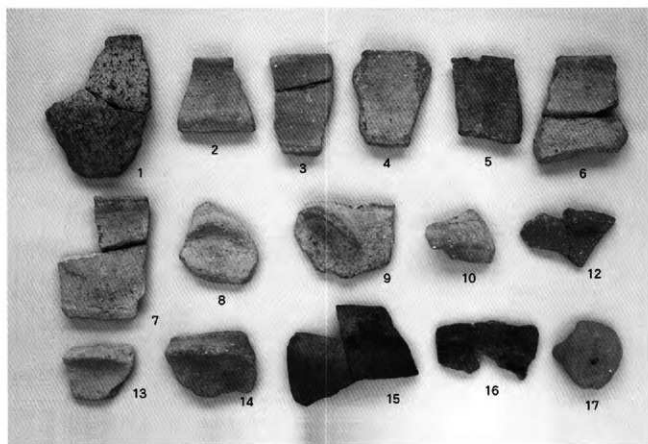
圖版44 曾式土器⑧ 上：復元資料 下：左・表面 右・裏面



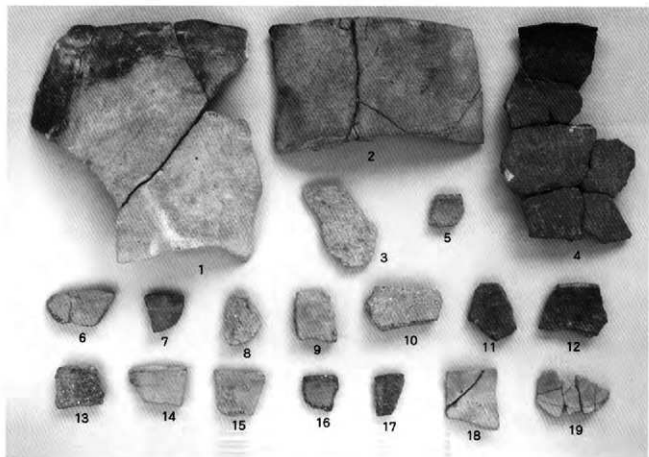
図版45 面縄前庭式土器・仲泊式土器 上：表面 下：裏面



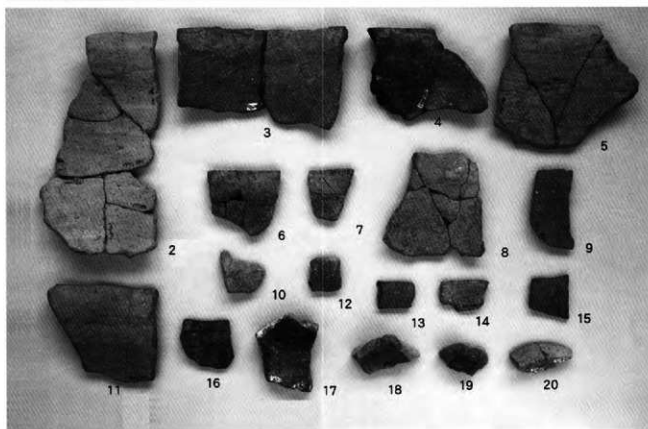
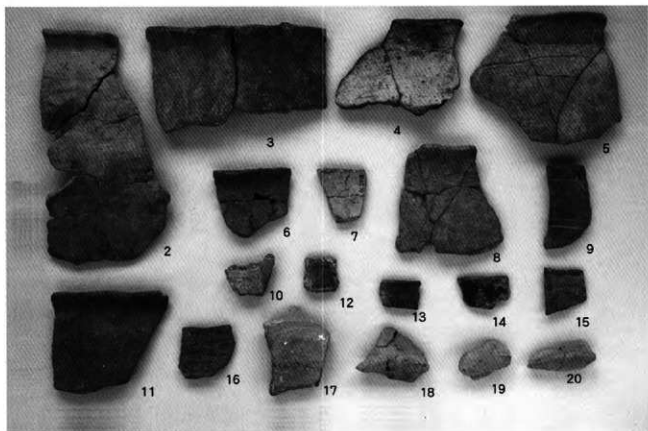
図版46 面縄東洞式土器 上：表面 下：裏面



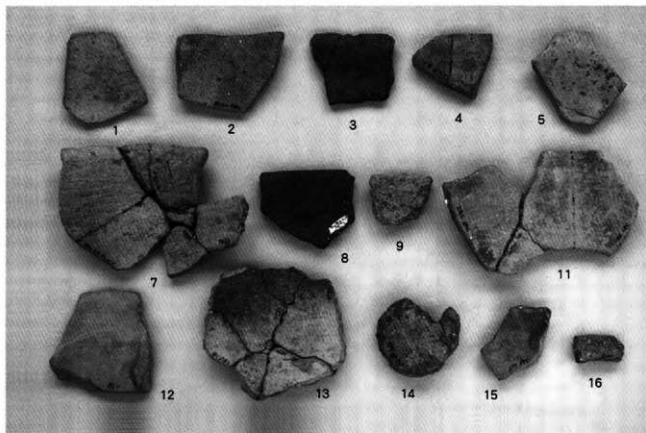
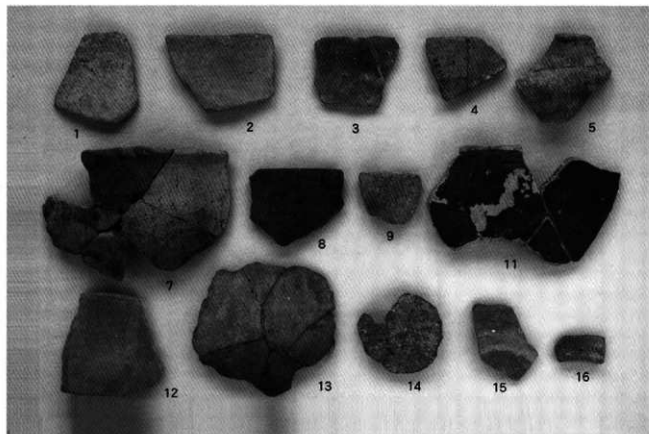
図版47 縄文晩期土器 上：表面 下：裏面



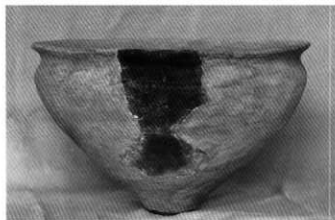
図版48 貝塚後期土器① 上：表面 下：裏面



図版49 貝塚後期土器② 上：表面 下：裏面



図版50 グスク土器 上：表面 下：裏面



1



2



3



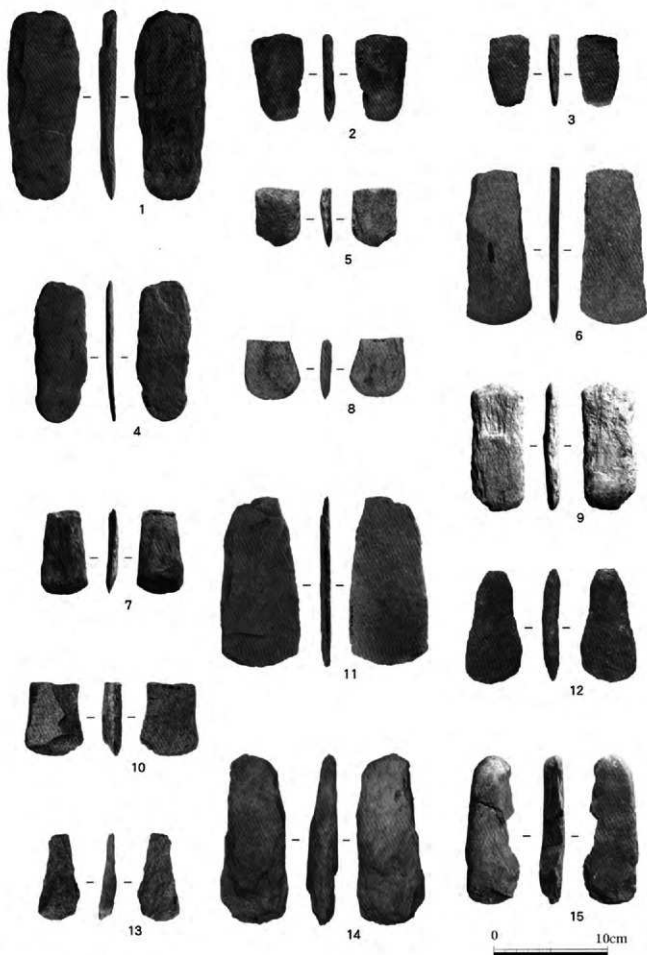
4



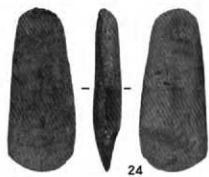
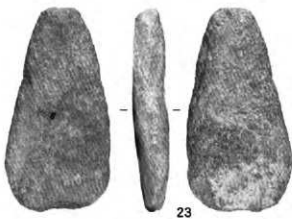
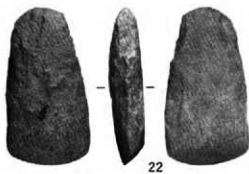
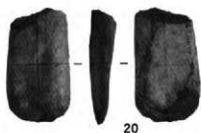
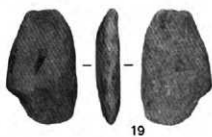
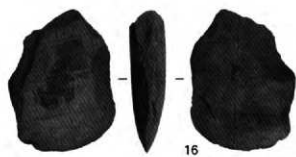
5

図版51 復元土器

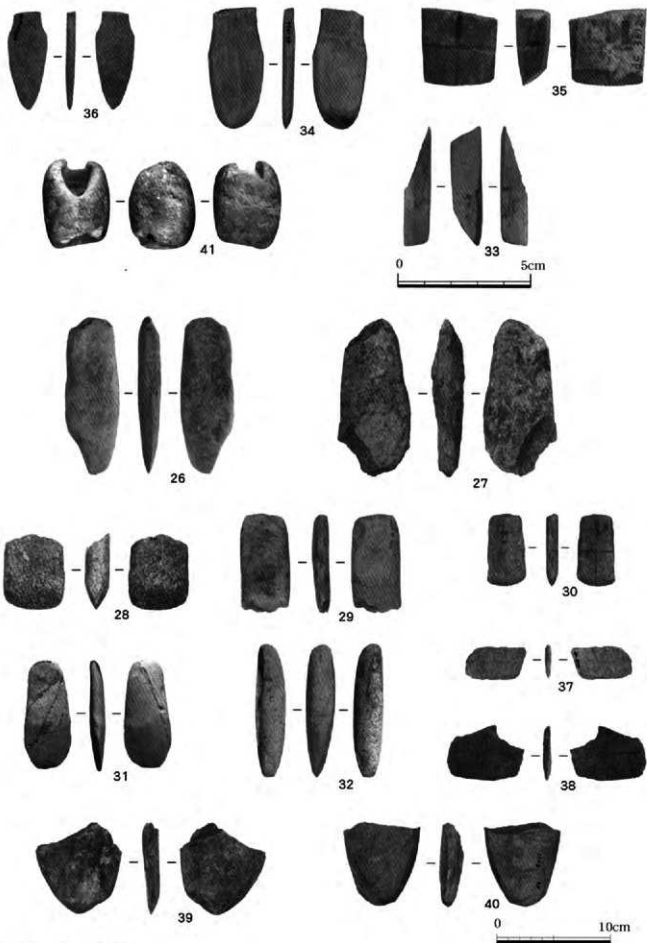
1 (第29図2) 2 (第30図20) 3 (第31図1) 4 (第32図6) 5 (第32図10)



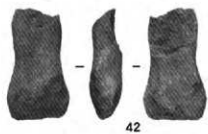
图版52 石器①



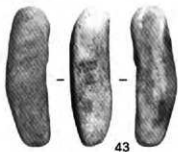
0 10 cm



图版54 石器③



42



43



44



45



46



47



48



49



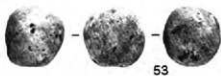
50



51



52



53

0 10 cm



54



56



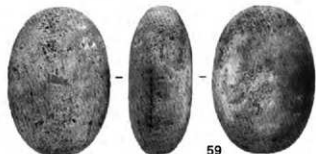
55



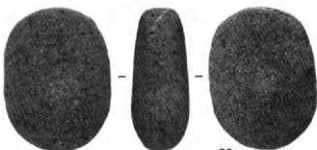
57



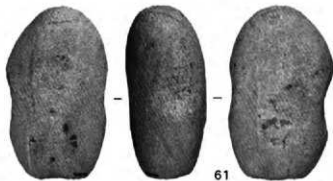
58



59

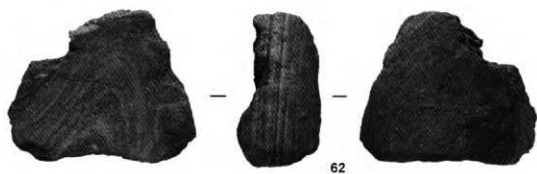


60

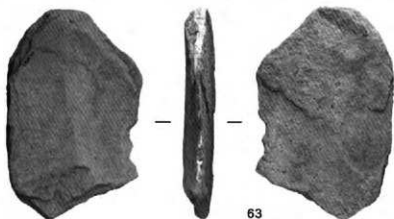


61





62



63

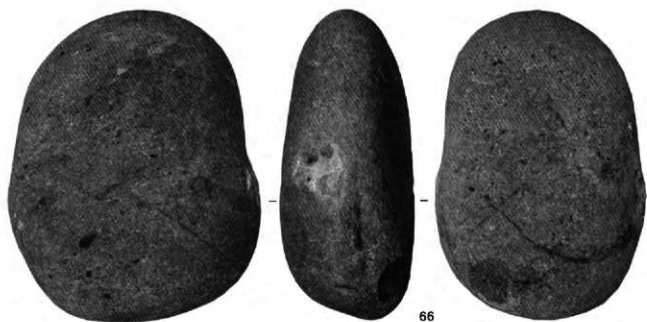


64

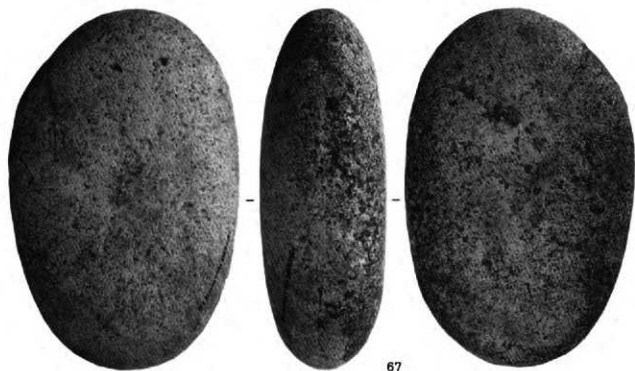


65

0 10cm



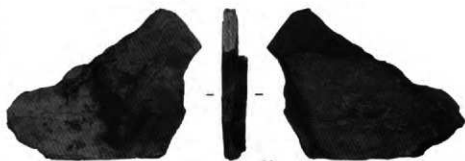
66



67



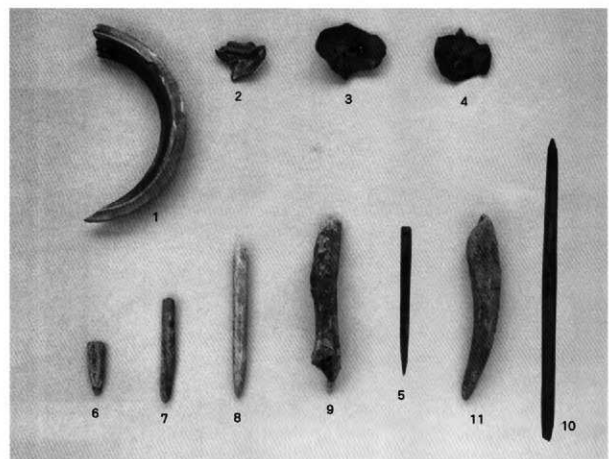
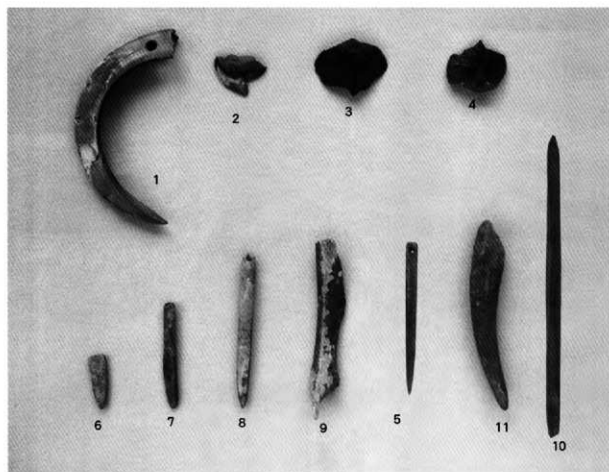
68



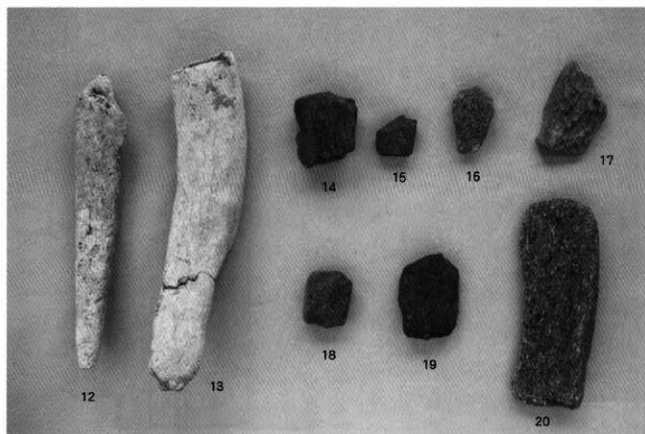
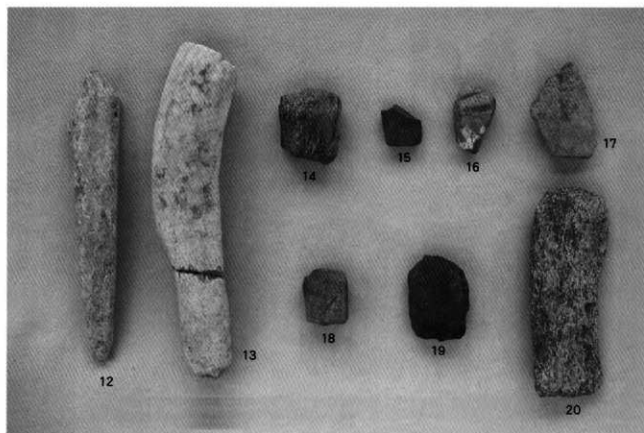
69

0 10cm

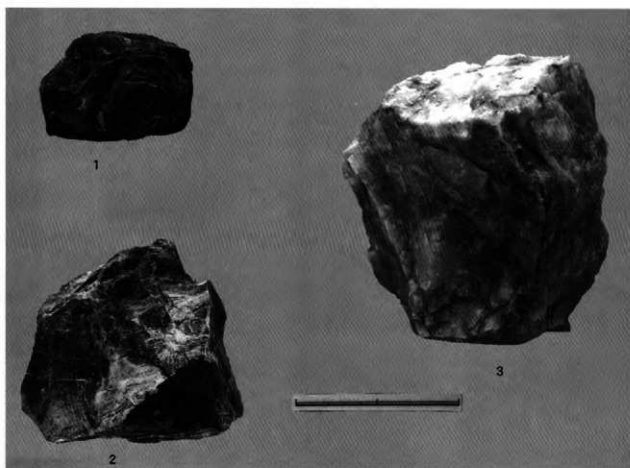
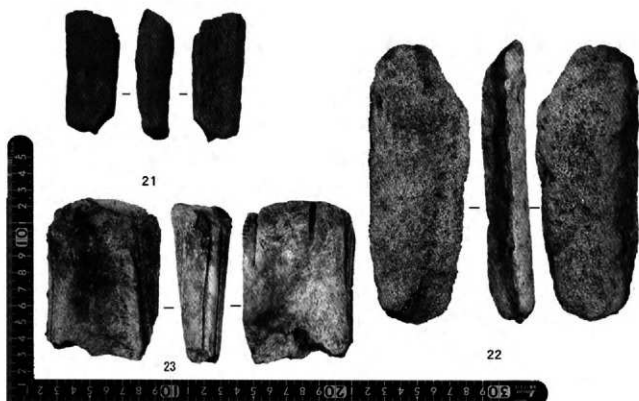
図版58 石器⑦



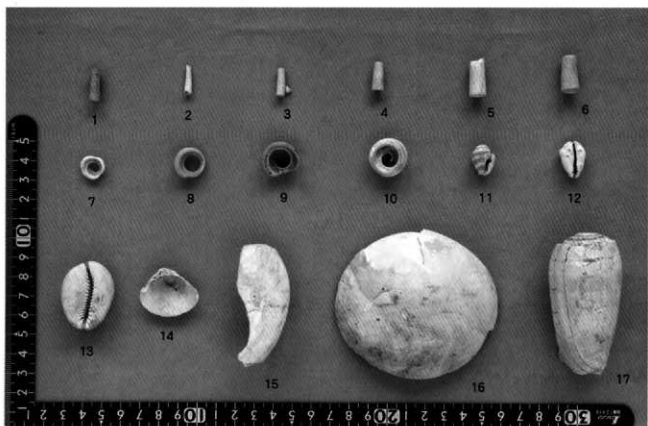
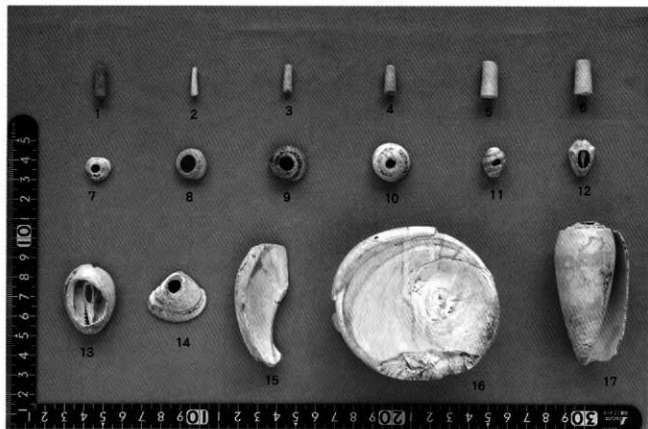
図版59 骨製品① 上：表面 裏：裏面



図版60 骨製品② 上：表面 裏：裏面



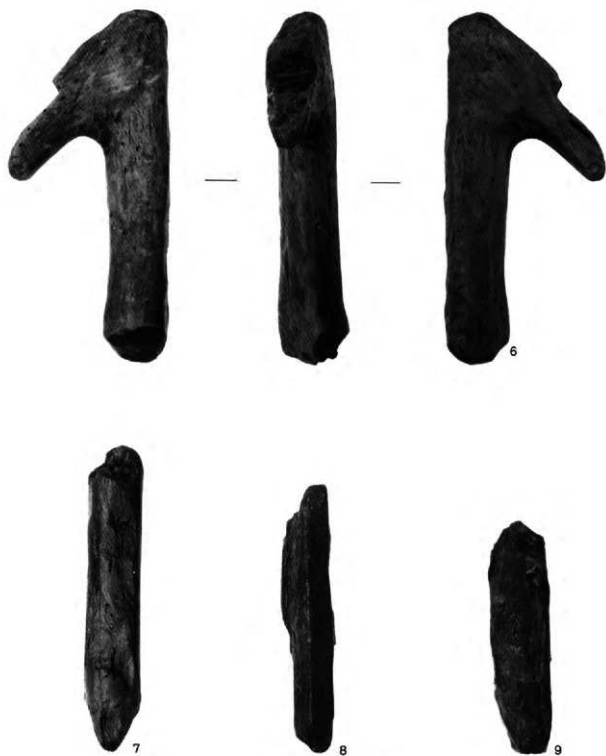
図版61 骨製品③ (上)・チャート (下)



図版62 貝製品 上：表面 裏：裏面

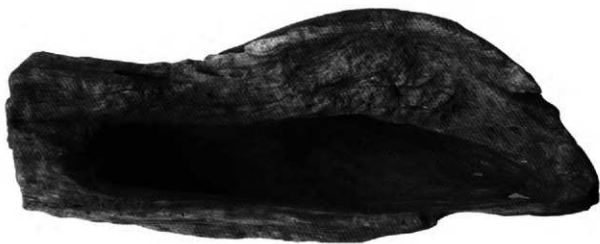


図版64 木製品② 構築材 (2) ・不明品 (3、4) ・角材 (5)



図版65 木製品③ 柄(6)・杭(7~9)

0 10cm



10

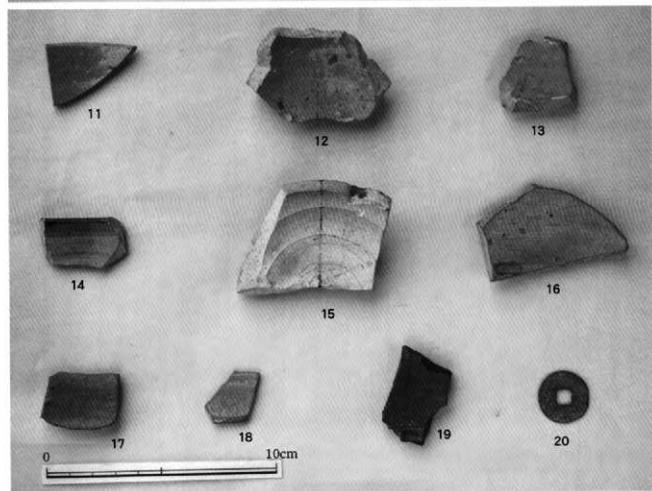
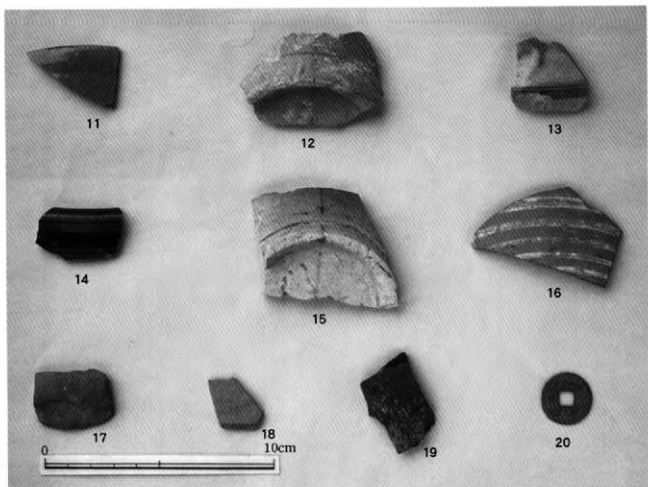
0

10 cm

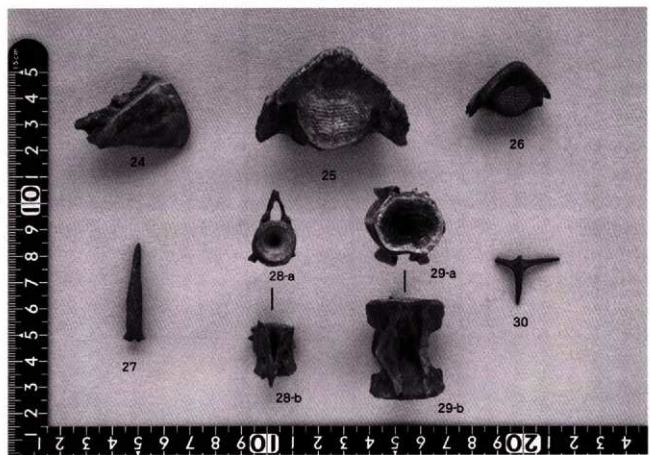
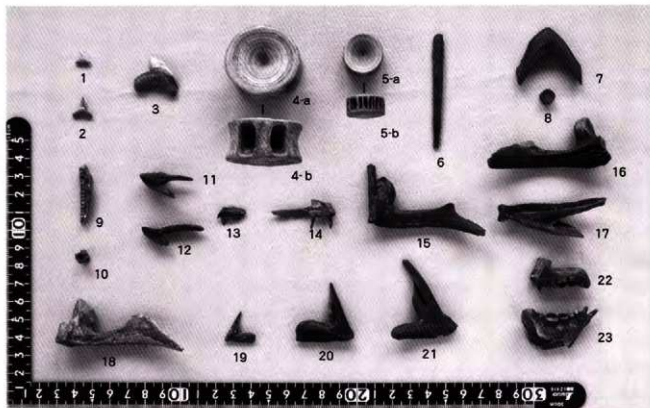
図版66 木製品④ 木製容器



図版67 グスク時代以降の遺物①

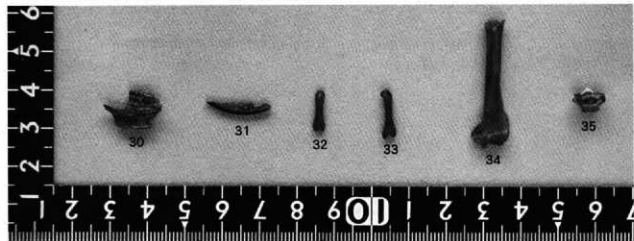
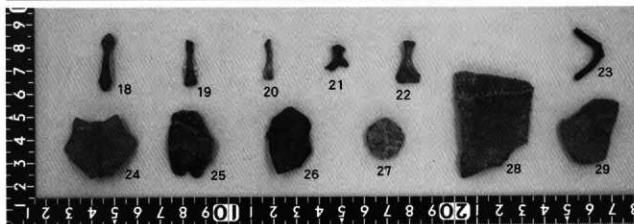
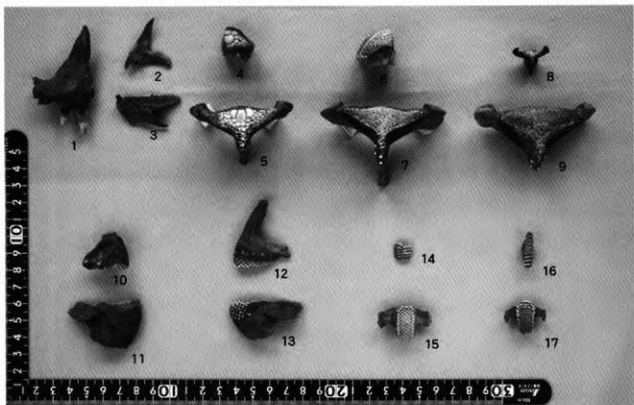


図版68 グスク時代以降の遺物②



図版69 魚1・2

1,2 サメ歯, 3 イタチザメの歯, 4 サメ椎骨, 5 ネズミザメ科椎骨, 6 エイの尾棘, 7 エイ歯板, 8 エイ椎骨, 9 ウツボ前上顎骨(R), 10 ダツ腹椎, 11 ウツボ科肋骨a, 12 ウツボ科肋骨b, 13 ハタ科前鰓蓋骨(R), 14 カマス前上顎骨(L), 15 フェダイ科前上顎骨(R), 16 ハタ前上顎骨(L), 17 ハタ歯骨(R), 18 フェダイ科上顎骨(R), 19 クロダイ前上顎骨(R), 20 ミナミクロダイ前上顎骨, 21 フェキダイ科前上顎骨(L), 22 ヨシマクロダイ前上顎骨(L), 23 ヨシマクロダイ前歯(L), 24 フグ前上顎骨(R), 25, 26 ハリセンボン上顎骨, 27 モンガラカワハギ背鰭棘, 28 サバ科椎骨, 29 マグロ椎骨, 30 ハリセンボン棘



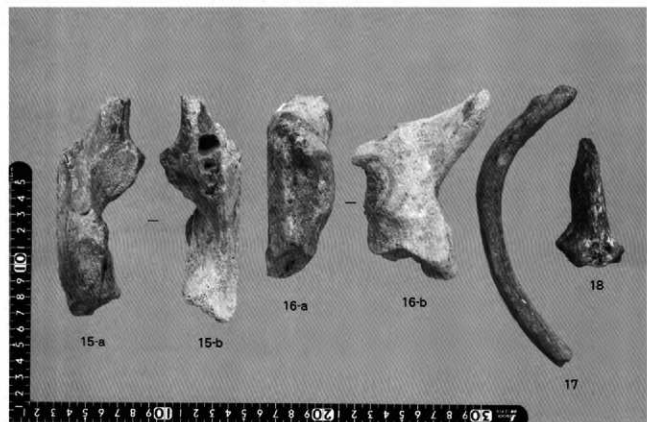
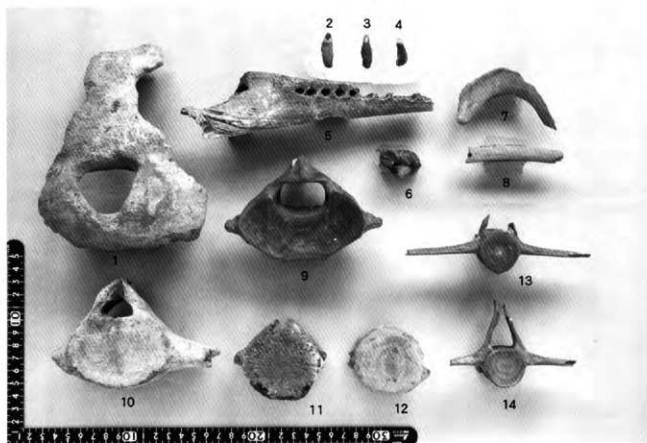
図版70 魚3・リクガメ・ネズミ・カエル

1ペラ前上顎骨(R), 2ペラ前上顎骨(L), 3ペラ歯骨(L), 4ペラb上咽頭骨(L), 5ペラb下咽頭骨, 6ペラa上咽頭骨(R), 7
 ~9ペラa下咽頭骨, 10ブダイ前上顎骨, 11ブダイ歯骨, 12イロブダイ前上顎骨(L), 13イロブダイ歯骨, 14ブダイ上咽頭
 骨, 15ナンヨウブダイa下咽頭骨, 16ブダイa上咽頭骨, 17イロブダイ下咽頭骨, 18上腕骨(R), 19大腿骨(R), 20脛骨(R), 21
 座骨(R), 22腸骨(R), 23鳥口骨+肩甲骨, 24頂骨板, 25肋骨板, 26上腹板(R), 27内腹板, 28中腹板(L), 29刺状腹板(R),
 30ネズミ下顎骨, 31ネズミ科下顎切歯(L), 32小型哺乳類基節骨, 33ケナガネズミ中手・中足骨, 34ケナガネズミ上腕骨・
 遠(L), 35カエル仙椎



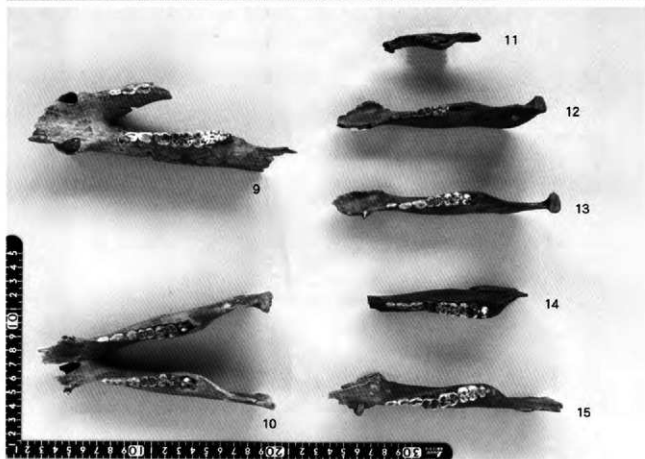
図版71 ウミガメ 1・2

1, 2 肋骨板, 3 頂骨板, 4 腹甲(縁), 5 下顎骨, 6, 7 鳥口骨(R), 8 前鳥口骨(R), 9 末節骨, 10 剣状腕骨(L), 11 上腕骨(L), 12 尺骨(L), 13 桡骨(L), 14 大腿骨(R), 15 脛骨(R), 16 腓骨(L)



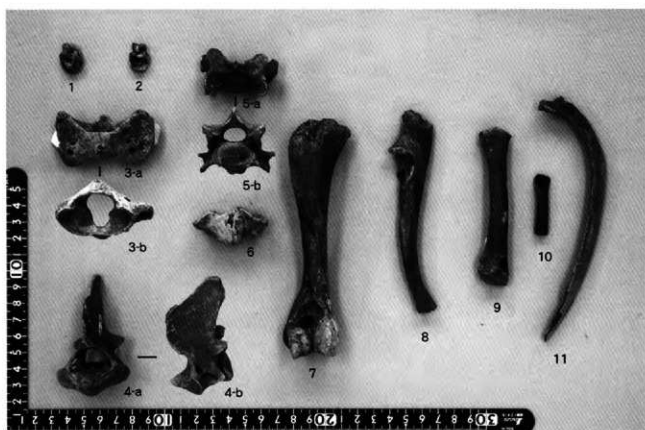
図版72 イルカ・ジュゴン

1 後頭骨, 2~4 歯, 5 上顎骨, 6 耳骨胞, 7 肋骨(近位端), 8 肋骨破片, 9 環椎, 10 椎体, 11 脊椎, 12~14 椎骨
15 上顎骨(L), 16 切面骨(L), 17 肋骨(R), 18 棘突起



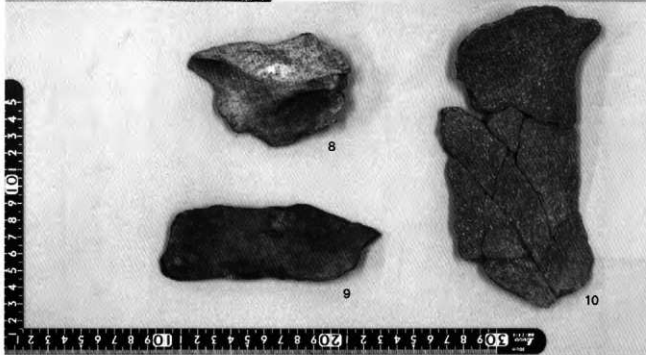
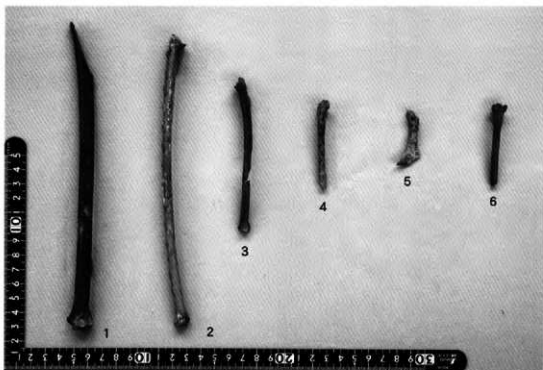
図版73 イノシシ 1・2

1 イノシシの頭骨、2 上顎骨オス(L)、3 上顎骨メス(R)、4 上顎骨(R)、5 上顎骨メス(L)、6 上顎骨(R)、7 上顎骨(L)、8 上顎骨オス(L)、9 下顎骨オス(両)、10 下顎骨メス(両)、11 下顎骨(R)、12~14 下顎骨(L)、15 下顎骨メス(L)



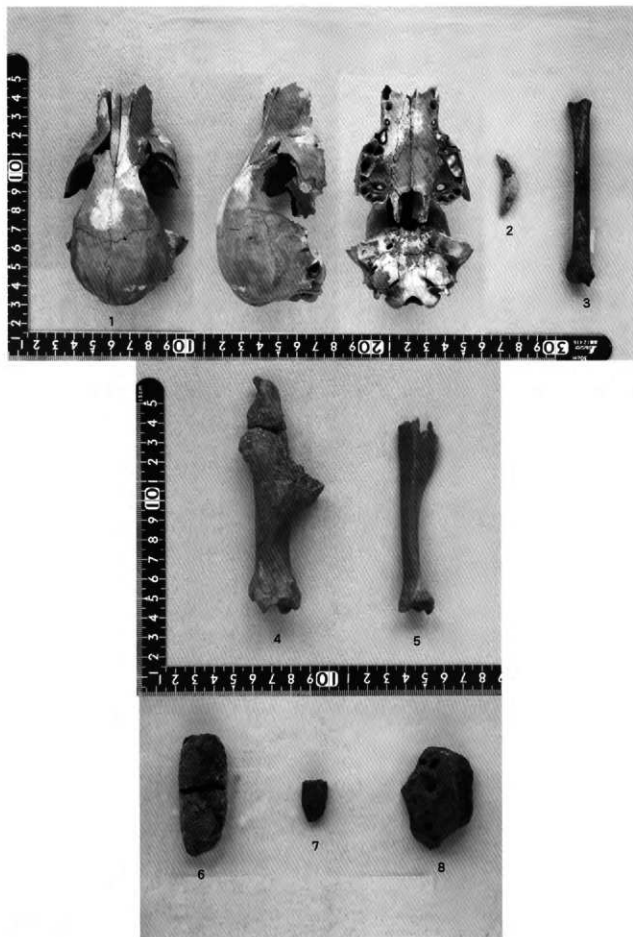
図版74 イノシシ3・4

1, 2 耳骨, 3 環骨, 4 軸椎, 5 頸椎, 6 仙椎, 7 上腕骨(R), 8 尺骨(L), 9, 10 橈骨(L)
 11 肋骨, 12 寛骨(L), 13 大腿骨(R), 14 脛骨, 15, 16 腓骨, 17 頭蓋骨(L)
 18 距骨(L), 19 踵骨(L), 20 足根骨, 21 中足骨, 22 基節骨, 23 中節骨, 24 指骨(末節)



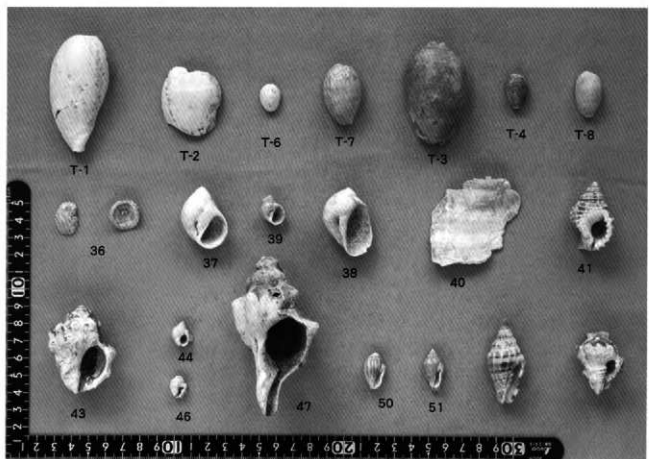
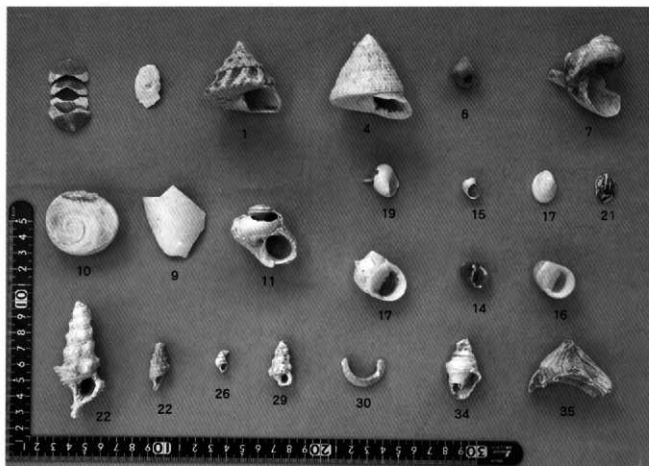
図版75 鳥類・クジラ

1 ワシ科尺骨(近位端・L), 2 サギ尺骨(R), 3 ワシタカ科尺骨(L), 4 カラス尺骨(L), 5 カモメ鳥口骨(R)
6 オオコウモリ科上腕骨(R), 7 クジラ肋骨, 8 頭骨, 9 下顎骨, 10 部位不明



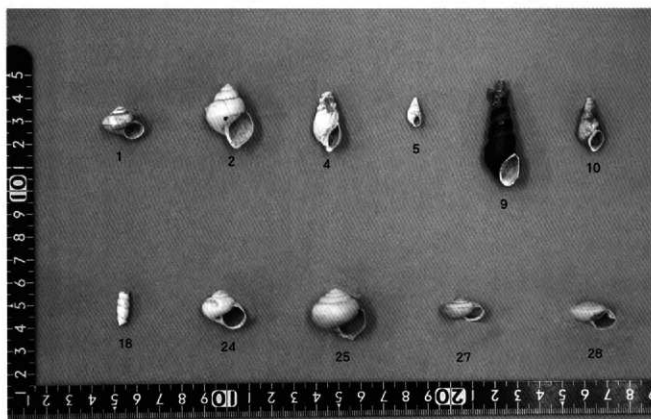
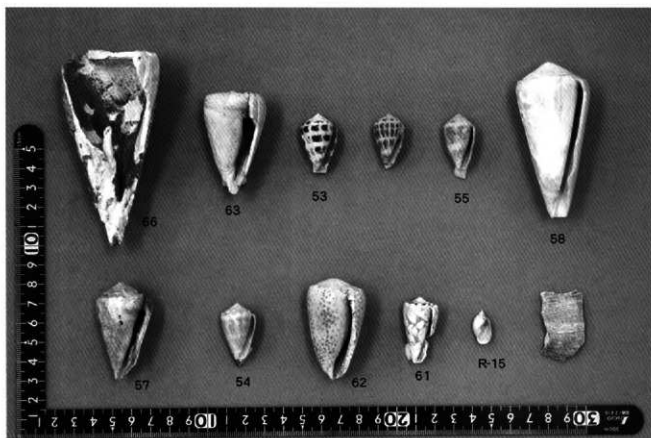
図版76 イヌ・イノシシ・黄石・琥珀

1頭骨、2犬歯、3橛骨(R)、4イノシシ脛骨(変形)、5イノシシ脛骨(正常)、6、7黄石、8琥珀



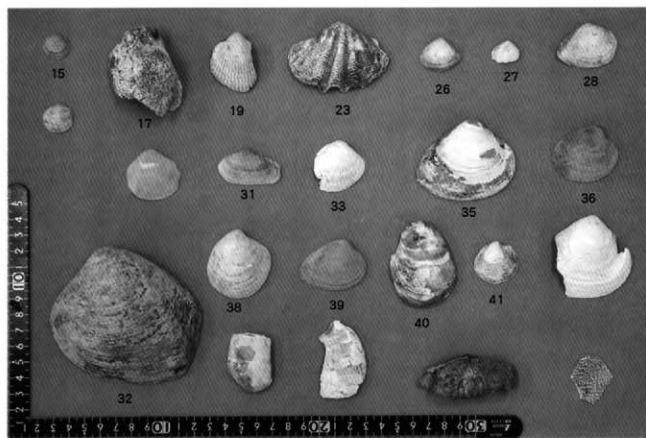
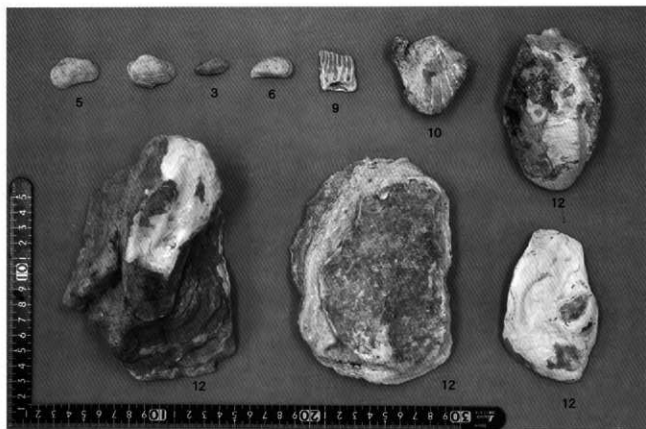
(番号は表73と一致。T-はタカラ貝・R-は陸産貝の番号を示す)

図版77 貝類① (巻貝)

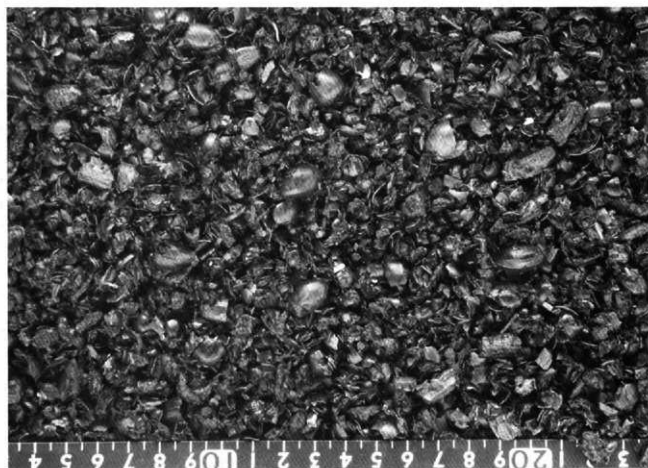


(番号は表74・75と一致 T-はタカラ貝・R-は陸産貝の番号を示す)

図版78 貝類② (上:巻貝・下:陸貝)



(番号は表76と一致。T-はタカラ貝・R-は陸産貝の番号を示す)



図版80 上：木の実 各種
下：木の実(東区曾畑層)

Ⅱ 砂 丘 区

第1節 調査の方法

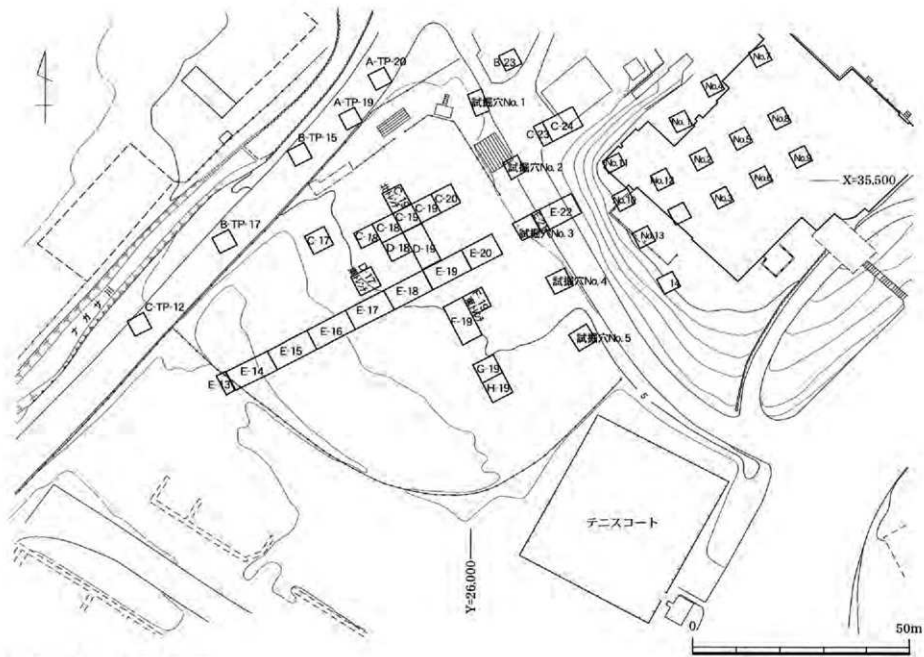
砂丘区における範囲確認調査は平成13年度の試掘調査で確認された遺構の広がりと同東側丘陵米軍隊舎から海岸に向かっての地形等も考慮して調査区（ソフトボール場内）を設定することにした。試掘時のNo.3の試掘穴を基点に南西側に5×70mのトレンチを設定した。任意に北側より南へアルファベットで、西側から東側へ算用数字で表し、グリッドは北西隅を基準とした。

基地内で行う調査は、米軍施設が機能している関係上、調査許可が得られる区域と得られない区域があり、当該地域は許可が得られなかった区域であった。平成8年度の試掘調査では、その周囲を調査した際、縄文期の遺物が出土し遺跡が存在することは明白であった。従って、この範囲確認調査では低湿地区から砂丘区へ、そして丘陵米軍隊舎から砂丘へといった地形と遺跡の性格及び範囲を把握すること、そして、低湿地区で確認できなかった縄文期の遺構などを検出することを最大の目的とし、また、キャンプ桑江北側返還に伴う区画整理事業も実施されることから、今後の開発の際の調整資料としても遺跡の面積・堆積状況・遺構の有無とその密度などの特徴を把握する必要がある、これらの観点から調査を行うこととした。

第2節 層 序

本遺跡は東側の丘陵部の麓から西側の海岸に向かって展開しているが、一気にその空間を利用したのではなく、西側に砂丘が形成される過程に伴い遺跡が展開していく様相がとれる。しかし、ときには自然現象によって、遺跡が展開していた砂丘が削られるという状況が確認されている（註：松田）。この現象が2～3回あることが判明した。地層は丘陵側と西側とでは堆積状況に違いが見られる。丘陵側は丘陵の谷間を流れる川や丘陵麓の湧水などから運ばれる流出土や砂によって湿地を形成し、西側は海岸から打ち上げられる風勢砂や砂利によって砂丘が形成されている。ここでは砂丘区における堆積状況を述べる。

- 第1層：米軍基地建設に伴う埋土で返還地全体に堆積する。基地に関する埋設物や瓶・缶・葉巻などが出土する。
- 第2層：黄色粘質土でグスク時代以降から近世までに堆積した層で、カワナナを含んでいることからこの期は湿地を形成していた。層厚はE-20グリッドで30cmと厚く、E-18グリッドで2cmと薄くなる。堆積の広がりには丘陵側からEラインで確認できているのは18グリッドまでで、南北を見てみるとC・D・Fの19グリッドでも確認できる。本層はE-18グリッドから南西側には広がらない。沖縄産陶器などが出土するがが少ない。
- 第3層：黒色粘質土でグスク時代（15～17世紀頃）から近世までに堆積した層である。層厚は厚



第46図 グリット図 (砂丘区)

いところで50cm、薄いところで6cmである。EラインのE-18グリットからE-14グリットで見られ、南北にも広がると想定される。溝が検出された。出土する遺物は15世紀～17・18世紀の中国産陶磁器や沖縄産陶器などが出土する。

第4層 a: 黒色土層でグスク時代（15～17世紀頃）の包含層である。E-15グリット中央からE-14グリットに堆積する。層厚は20cm前後である。本層は平成11・12年度の範囲確認調査で確認された伊礼原遺跡の北側に分布する伊礼原D遺跡（グスク時代：15・16世紀頃）に類似することからその広がりが及んでいると想定される。出土する遺物は15・16世紀の中国産陶磁器などが出土する。

第4層 b: 海浜の白砂で、IVa層を含んだ柱穴が検出される。E-16グリットからE-14グリットに堆積する。遺物はIVa層期のもので少量見られる。

第5層 a: 黒色砂質土層でグスク時代（15～17世紀）の攪乱層で、グスク時代～弥生時代相当期の遺物が出土する。E-18～E-15グリットに堆積し、南北ではC・D・F～Hの19ラインより堆積が始まっている。本層最下部は弥生時代相当期の堆積と考えられる。

第5層 b: 淡灰色粘質土で無遺物層である。カワニナを含んでおり湿地を形成していた。E-20グリットでは20cm、E-18グリットでは2cmと薄くなる。本層は丘陵側からE-18グリットの範囲まで堆積し、南北ではC・D・Fの19ラインまで広がりが確認できる。

第5層 c: 黒色砂層でグスク時代（12～13世紀頃）の攪乱で、弥生時代相当期までの遺物が出土する。E-20グリット～E-18グリットまで堆積する。南北ではC・D・F・G・Hの19ラインで確認できる。

第5層 d: 海浜の白砂で第5層 a 下部の土を含んだ柱穴が検出される。

第6層 a: 黒色砂層で縄文時代後期・晩期の遺物が混在して出土する。炉址や住居址などの遺構を伴う。E-20グリットからE-18グリットの東側まで堆積し、南北ではC・D・F・G・Hの19ラインで確認できる。

第6層 b: 黒色砂層でやや褐色を帯びている。縄文時代中期の包含層で、C-23・24グリット西側、E-22・23グリット西側、No.1からNo.5 試掘穴、C-19・20グリット東側、E-20グリットの範囲で堆積が確認できる。E-22・23グリット東の丘陵周辺では山砂と海浜砂が混在する部分で遺物や遺構も検出されている。

第7層: 海浜の白砂層である。E-20グリットで住居址と思われる掘り込みに堆積した貝集積が検出された。E-18グリットの北東側まで堆積する。南北を見てもC・D・F・G・Hの19ラインにおいて縄文時代中期の遺物が出土する。

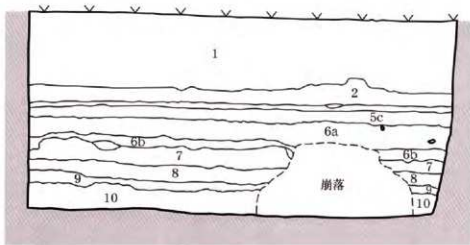
第8層: 海浜の白砂層で非常に粒が細かい。縄文時代中期から前期頃の堆積層と思われる。B-24試掘穴とC-23・24グリットで堆積が確認されている。条痕系の土器が出土する。

第9層: 海浜の白砂層で粒が粗い。遺物の出土は少ないが曾畑式土器が出土。試掘穴No.1・2で堆積が確認された。

第10層: 海浜の白砂層で粒が粗く拳大の礫が散在する。縄文時代前期の堆積と思われる。試掘穴No.1で確認されている。試掘穴No.1から数十m東側が低湿地の南区にあたり、そこでも礫層は確認され対応すると想定される。

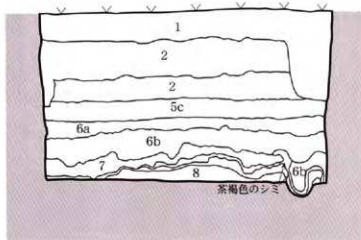
試掘穴No.1 (東壁)

EL=6.00m



試掘穴No.2 (東壁)

EL=6.00m

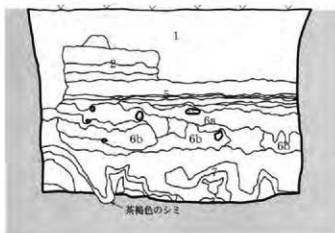


0 2m

第47図 試掘穴No.1・2の層序

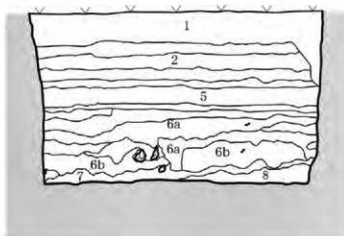
試掘穴No. 3 (東壁)

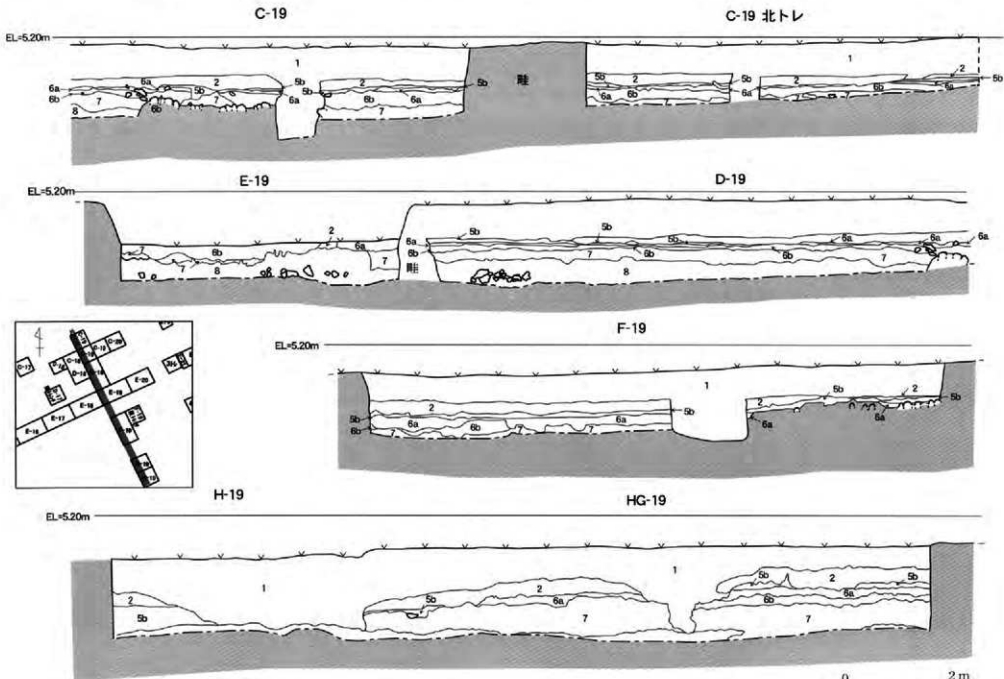
EL=6.00m



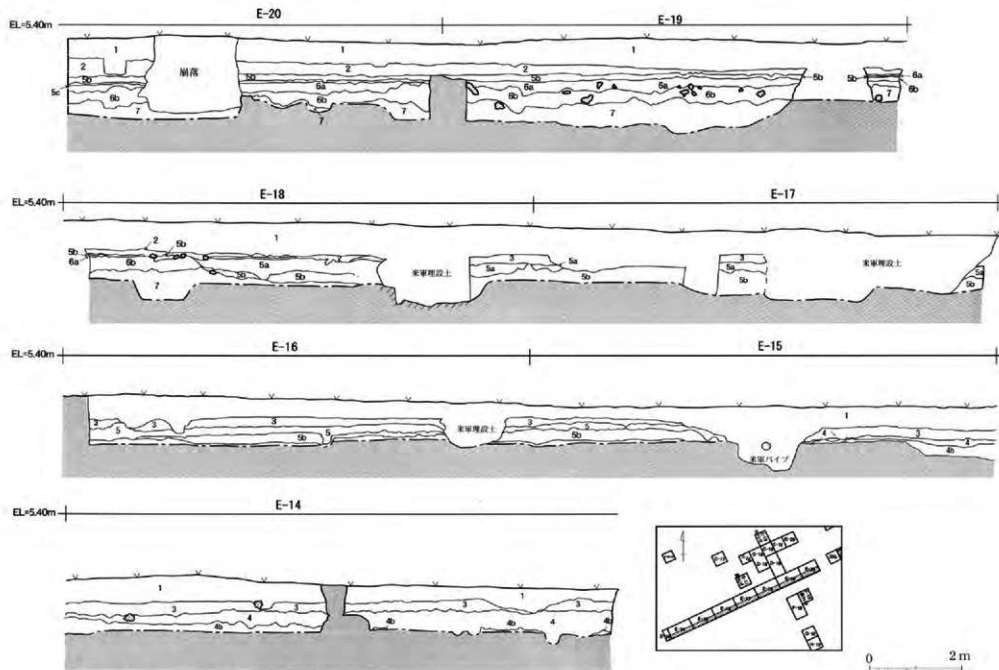
試掘穴No. 4 (東壁)

EL=6.00m





第49図 19ライン西壁面層序



第50図 Eライン南壁面層序

第3節 遺 構

本遺跡の砂丘区における遺構は縄文時代中期から晩期、弥生時代相当期、グスク時代、近世、戦前まで確認できた。縄文時代の所産としての遺構は中期の炉址3基、貝集積1基、柱穴数基、後期は竪穴住居跡2基、石集積4基、土坑8基、晩期は炉址と考えられるのが1基、土坑1基、弥生時代相当期は柱穴群、グスク時代は柱穴群、所属時期が不明な井戸状遺構1基が検出された。近世、戦前の遺構は溝が確認された。

これらの遺構は、各時代の立地の成りたちと深い関係があり、時代が新しくなるにつれ、西側へ展開していく様相が窺える。しかし、縄文晩期以降から弥生時代相当期の間に2回、弥生時代相当期以降に1回の計3回、自然災害によって遺跡が立地していた砂丘の一部が削られて、再度堆積して遺跡が存在し、また削られるなどそれを3回繰り返している過程が確認されている（松田）。従って、各時期の遺構の検出状況に特徴が見られる。弥生時代相当期以降、西側に展開するグスク時代は出土遺物から15世紀から18世紀の集落跡が展開している。そして、その集落がおそらく現在の国道58号線近くに残る戦前の集落跡に移動していったのではないかと想定される。今回の調査範囲においては、近世から戦前の遺構は溝が検出されたが、米軍が基地建設の際の造成の影響を受け、削られたり、鉄屑等の廃棄場として削割されている状態であった。そこで、ここでは縄文時代からグスク時代までの遺構の紹介としたい。

1. 縄文時代中期の遺構

この時期の遺構の所在は低湿地の南東側の丘陵（米軍将校クラブ施設跡地）が砂丘側に舌状に張り出し、その麓周辺に範囲に展開している。東西方向を見てみると丘陵麓からEラインではE-20グリットまで、南北は平成13年度の試掘穴No.1からNo.4まで確認されている。従って丘陵麓の南西側を取り巻くように南北に細長く延び、低湿地に到る分布域となっている。遺物の分布はこれに重なるが広がりを増している。この期の遺構は炉址3基、貝集積1基、柱穴数点確認された。

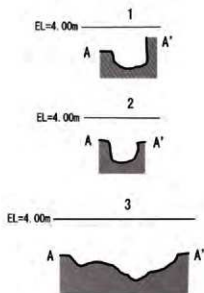
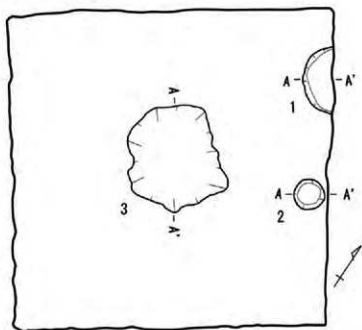
1) 炉址

炉址はNo.3・4試掘穴の第6層bより検出された。平成13年度の試掘調査で米軍施設が機能している関係上、4×4mの狭い範囲内での調査であった。そのため、炉の周辺に柱穴が伴うもののプランが確認できず屋内炉なのか屋外炉なのかは特定できなかった。今後、広範囲な調査において詳細が明らかになることに期待したい。

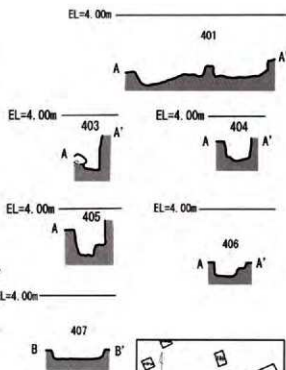
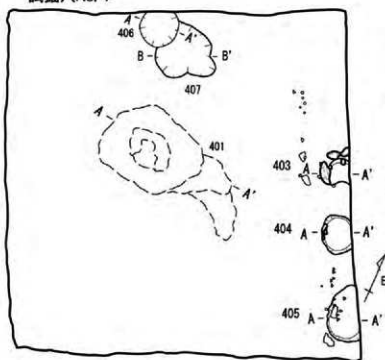
炉址1

第51図上はNo.3試掘穴より検出された炉址である。検出時は北東側に石灰岩が2点見られ、内1点は覆土に覆われた状態であった。炉址の形状はやや不定形な円形を呈し、長軸が約1.1~1.2m、短軸が約1mである。断面を見てみると北側の底部は10cmと浅く、中心部から南に一段低くなった底部は25cmの深さである。北の炉内はほぼ黒色土で、南側は赤褐色土が堆積し、いずれからも炭が検出された。これらを掘り下げていくと遺構の底部が赤色化した焼土も検出され、炉址とした。

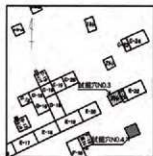
試掘穴No. 3



試掘穴No. 4

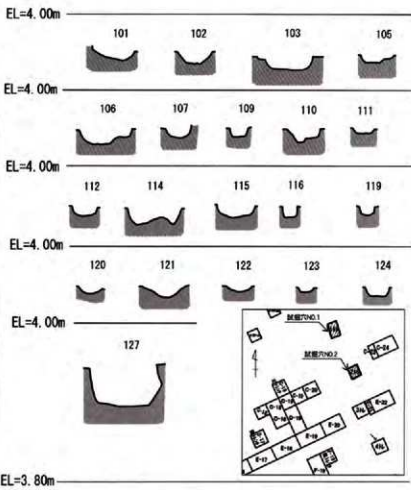
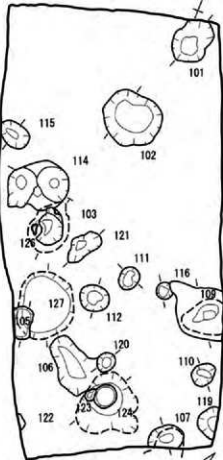


- 軽石
- △ 土器
- ◎ 貝
- × 骨
- ▽ 土

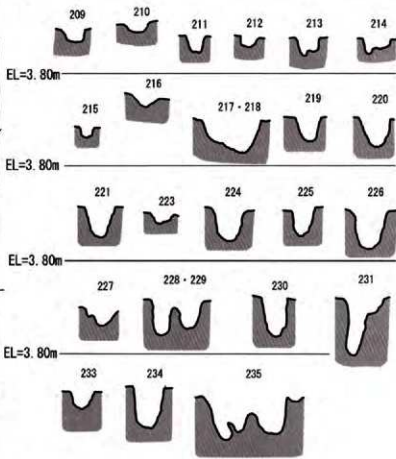
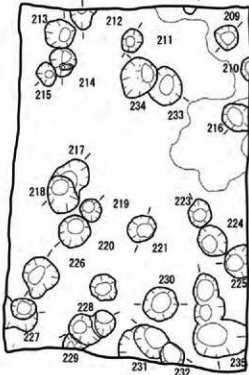


第51図 上：試掘穴No. 3 検出の炉址 1 下：試掘穴No. 4 検出の炉址 2

試掘穴No. 1

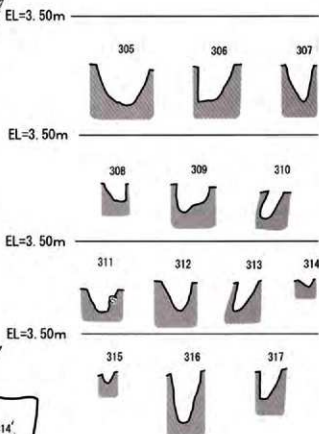
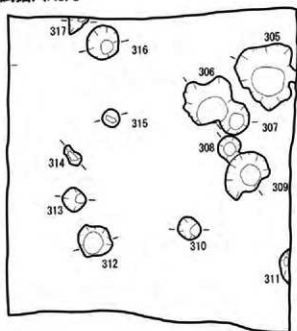


試掘穴No. 2

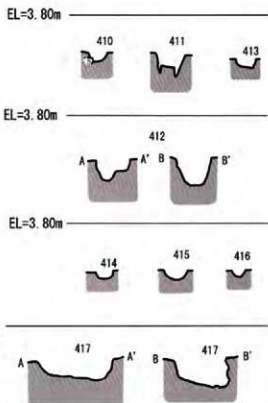
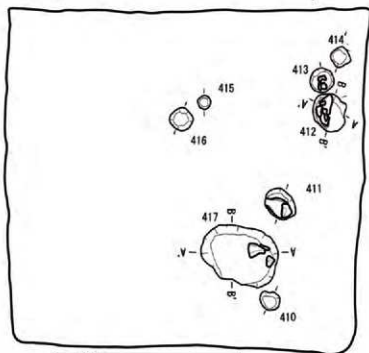


第52図 上：試掘穴No. 1 検出の柱穴平面図・断面図
下：試掘穴No. 2 検出の柱穴平面図・断面図

試掘穴No. 3



試掘穴No. 4



第53図 上：試掘穴No. 3 検出の平面図・断面図
下：試掘穴No. 4 検出の平面図・断面図

遺構内からは獣骨や土器、石器が出土した。土器は面縄前庭式土器であった。炉址は今後の調査において住居内、外のどちらに所在するのか判断を委ね、保存して埋め戻すこととした。

炉址2

第51図2はNo.4 試掘穴より検出された炉址である。炉址の形状は南東-北西方向を長軸に約1.4m、短軸が0.8mと縦長の楕円形を呈する。断面は深さ約10~20cmの窪みで、黒褐色土と褐色土が堆積し、炭や焼土を含んでいる。遺構内から獣骨や土器などが出土した。土器は面縄前庭式土器であった。

炉址3

第54図はE-20グリットの第6層bより検出した。炉址の形状は平面形は円形を呈し、直径1mである。炉の断面は掘り鉢状に窪み20cmの深さである。堆積状況は4枚の層が確認された。上部より、1枚目は石灰岩の集積。2枚目は焼けた獣骨が含まれる黒色砂。3枚目は赤褐色砂。4枚目はやや粘質の灰白色砂で貝片と獣骨片を多く含んでいる状況であった。遺構最下部を掘り下げていくと出土する遺物が貝主体へと変化が見られたことから本遺構と異なった遺構が存在する可能性が生じ、図面や写真などの処理を行った後、広げて確認したところ貝集積遺構の広がりが検出された。このことから炉址は貝集積を掘り込んで使用されていることが判明した。炉址からは獣骨や貝片以外に面縄前庭式土器や石片が出土している。

2) 貝集積土坑

第54図土坑は貝集積土坑である。E-20グリット第6層bの遺構で、炉址3を掘り下げ中に検出した。遺構の規模や形状を確認するため露出作業を行い、その後堆積状況を見るため十字のトレンチを設け調査を行った。その結果、貝集積は2.5×2.5mの円形状で、断面は碗状を呈していることが判明した。更に遺構内の詳細な堆積を見るために北西側の1/4を掘り下げたところ6枚の堆積が確認され、上部の1・2枚目に貝が集中していた。堆積状況は以下のとおりであった。

1枚目はマンガンを含んだ灰色粘質砂層で二枚貝と獣骨、陸産マイマイが多く含まれる。土器や人間の大腿骨も見られた。

2枚目は灰色粘質砂層でマンガンの量が減少し、上部は大型の貝と二枚貝、中間部は二枚貝のみ、下部は二枚貝とマガキ貝に分かれて堆積する。

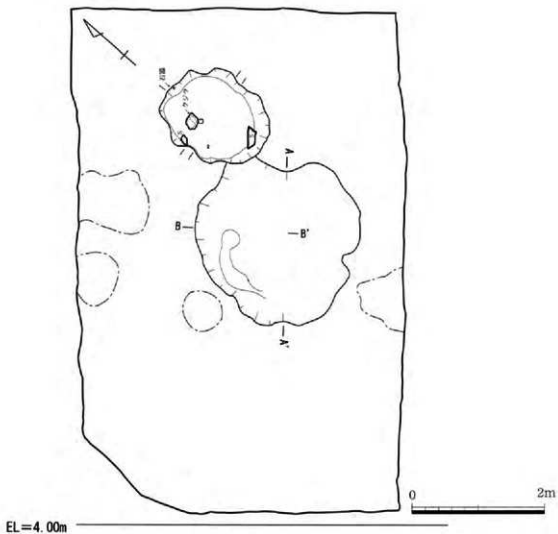
3枚目は淡灰色砂や淡茶色の砂層が混在し貝は減少する。

4枚目は灰色砂層で貝は無く礫が少量含まれる。

5枚目はマンガンと灰色砂層で貝は少量である。

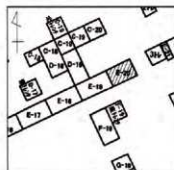
6枚目は白砂に灰色砂の混在で貝と炭が少量含まれる。

本遺構の断面は上述のように碗状を成している。下層の6から4枚目が堆積した後に貝が廃棄されたと思われる。このように、貝の集積は直接掘って廃棄下ではなく、元々別の掘り込みを再利用しているようである。本遺構の北西側縁には30cm大の石が地面に立てられた状況が2点確認されていること、周囲には土坑が見られる、これが柱穴となると堅穴住居址の可能性がある。



〈貝集積土坑内の覆土〉

- 1 灰色粘質砂
- 1a 灰色でマンガンが多い
- 1b 灰色でマンガンは少ない
- 2 淡灰色砂
- 3 灰色砂
- 4 淡灰色砂でマンガンを含む
- 5 灰白色砂質土



第54図 E-20グリット検出の貝集積土坑

3) 柱穴

第52図・第53図は試掘穴No.1～4で確認された柱穴である。直径20～25cm、深さ20～25cm程の柱穴が第7層より検出された。範囲の狭い試掘穴であったためプランは確認できなかったため、今後の広範囲な調査において詳細な成果が得られるのを期待したい。

第54図はE-20グリットの貝集積の周辺に不定形な円形をした直径30～40cmの柱穴と思われる遺構を検出した。前述したように貝集積は二次的に転用されており、当初の遺構は堅穴住居の可能性があるため、柱穴を想定して調査を行ったが深さが5cmと浅かった。

2. 縄文時代後期の遺構

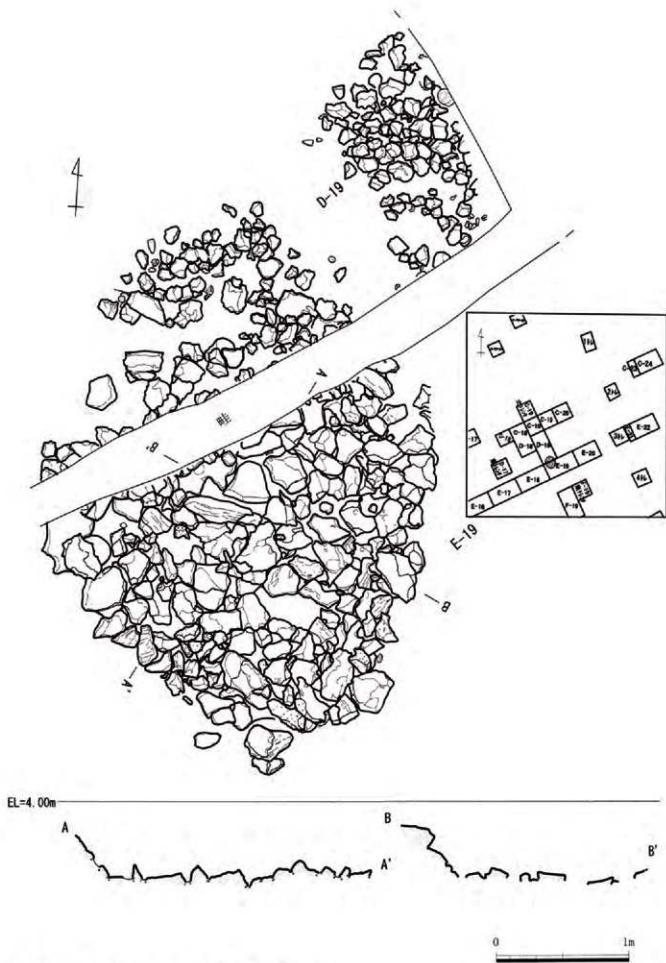
この時期の遺構は20ラインから18ラインの範囲に分布し、縄文時代中期の分布より更に西側に範囲を広げている状況で、南北域も若干広がっている。この期の遺構は住居跡2基、集石遺構4基、土坑8基が確認された。また、今回図化することができなかったが、E-18グリットの東側において30～40cm大の石灰岩が西側（海岸）に向かって、傾斜している状況が確認された。当初は状況が理解できずに自然ではないだろうかかと判断していたが、堆積学の松田順一郎氏（第Ⅲ章Ⅱ参照）に確認して頂いたところ、波によって砂丘が削られているとのことであった。従って、本来はこれから紹介する住居址の可能性が高いことが分かった。

1) 住居址

第1号住居址

第55図はE-19・D-19グリットで確認された堅穴住居址で、第6層aの遺構である。検出当時はE-19トレンチの北西側の北壁で確認され、遺構の規模が不明であったため北側のD-19グリットを拡張し規模及び形状を確認した。

検出当時は礎の平面形が三角形に集積を成し、北壁に接していた。そこで、遺構のプランを確認するためD-19グリットとの境に観察畦を残して北側に拡張した。平面プランは約3×2.8mの隅丸方形を呈し、遺構の内側には貝殻や人工遺物が集中していた。その遺物を取り除くと窪みを成していて、床は平たい礫を敷き詰めている状況であった。壁は40cm大の石灰岩を配して擁壁とし、南東側では約50cm立石との隙間が見られ、また、南東側外に石皿と殻石が出土していることから入り口と推察される。遺構内の床面は礫を敷き詰めていて柱穴は確認できなかった。礫は被熱や煤が付着したものがあたらぬことから屋内炉ではなく屋外炉になると推測される。ただ、観察畦下にある可能性もある。遺構内より出土した遺物は縄文時代後期の面縄東洞式土器・市来式土器・骨製品などが出土している。調査後は保護砂を覆い埋め戻しを行った。



第55図 E・D-19グリット検出の第1号住居址

第2号住居址

第56図はC・D-19グリットとC・D-18グリットで確認された竪穴住居址で、第6層bの遺構である。本遺構も検出時はC・D-19グリットの西壁で確認され、18ラインと19ラインに観察畦を設け西側（18ライン）に拡張し、プランの確認を行った。平面プランは北側が米軍の埋設管の敷設によって破壊されていて全容は不明であるが、約3×2.7mで隅丸方形と推察される。埋設管の溝から遺構の掘り込みが確認でき下層の白砂層（第7層）を掘り込んでいる。床は約10から30cm大の石灰岩礫を敷き詰め、壁は40cm大の石灰岩礫を配していた。第1号住居址と同様南東側に約80cmの隙間があり入り口と推察される。炉址、柱穴は確認できなかった。本遺構も保護砂で覆い埋め戻しを行った。

2) 集石遺構

1号集石

第57図はC-19グリットで確認された第6層aの集石である。グリットの北壁から本遺構に向かって溝が伸びている。遺構はその窪みを利用していると思われる。検出時はグリット中央部で東西方向にテーブルサンゴ（50～70cm大）の配石が見られたことから埋葬に関する遺構と考え掘り下げた。しかし、土壌の掘り込みや人骨は確認することはできなかった。そこで、視点を変え周辺を見直したところ、東西方向に配されたテーブルサンゴの東端から直角に南に石が並び、そこから更に南と西側に石が分布している。平面形は西側が米軍の攪乱を受けているが方形が推察される。第1・2号住居址のように石灰岩などを使用した住居址の可能性が考えられる。本遺構も保護砂で覆い埋め戻しを行った。

2号集石

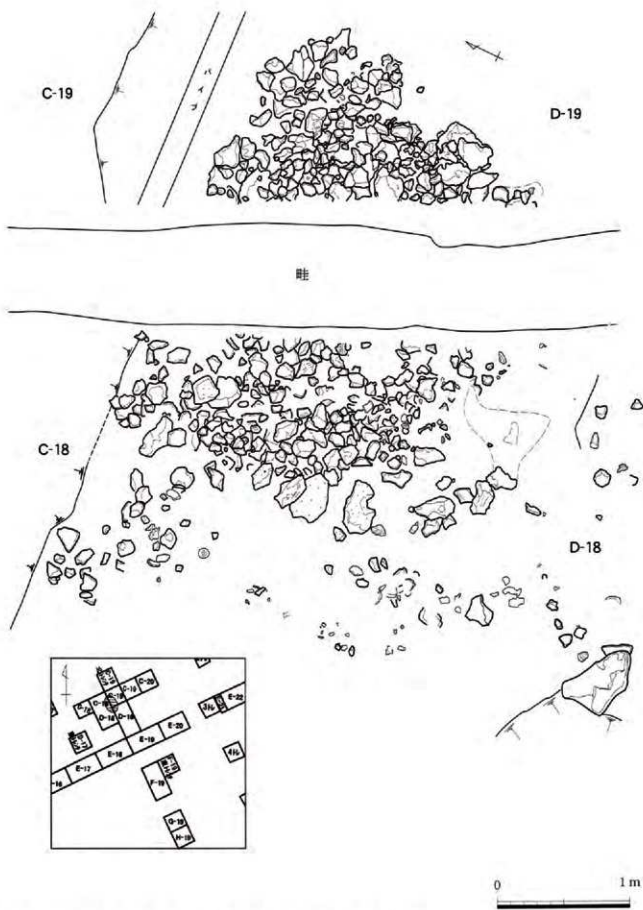
第58図はC-19・20グリットの19ラインから西側に分布する第6層aの集石である。西壁側は礫が少なく窪み、東側は弧を描いている状況である。礫は15～30cm大の琉球石灰岩や砂岩などが散布し、集石の中央部には1.1×1.2cmの範囲で貝殻の集中が確認された。本集石は検出状況をそのまま保持したままである。第1・2号住居址の検出時に類似しているが、40cm大以上の石が少なく、10～20cm大の礫が多いように感じられる。住居跡を想定しているが今回は範囲を拡張せず保護砂で覆い埋め戻しを行った。今後の広範囲な調査によって詳細が明らかになることに期待したい。遺構の上面からは面縄東濶式土器や石器などが出土した。

3号集石

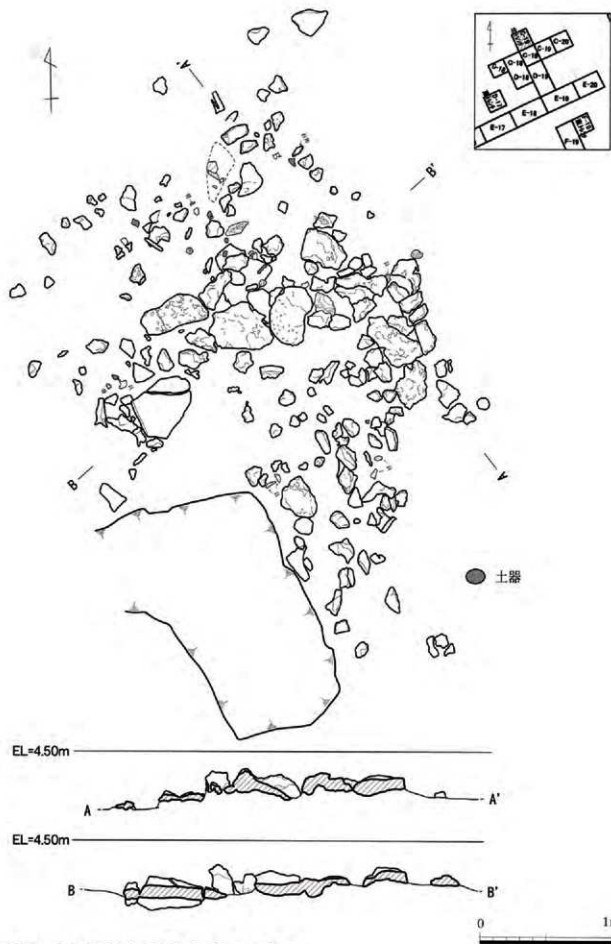
第59図はG-19グリットの北東角に分布する第6層aの遺構である。調査区の制限または、掘り下げを行ったとしても遺構の現況から性格はつかめないとの判断から検出状況の記録に終始した。集石の礫は20cm大の琉球石灰岩が重なっていて、第1・2号住居址の検出状況に類似している。詳細な性格は今後の調査に委ねることとし、現状のまま保存し埋め戻した。

4号集石

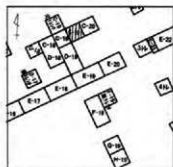
第59図はG・H-19グリットの中央部東側に分布し第6層aの遺構である。3号集石の南側に位置している。集石は東壁に接し北側と南側は米軍の攪乱を受けている。また、本遺構も同様に第1・2号住居址の検出状況が類似していることから住居址の可能性がある。現状では、約2.5×2.7mで、



第56図 C・D-18・C・D-19グリット検出の第2号住居址



第57図 C-19北グリット検出の第1号集石



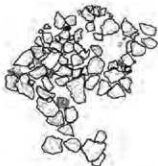
○ 土器

C-19

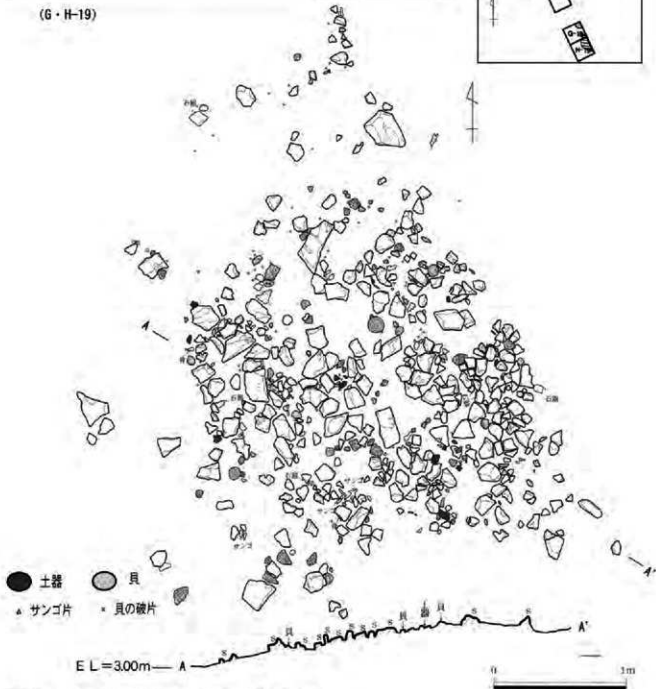
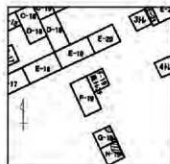
0 1m

第58図 C-19・20グリット検出の第2号集石

(G-19)



(G・H-19)



第59図 上：G-19グリット検出の第3号集石
 下：G・H-19グリット検出の第4号集石

礫は15~30cm大の琉球石灰岩の集石となっている。上述したように住居址の可能性があることから、今回は検出状況のみの記録に終始し、保存することとし、現状のまま埋め戻した。集石からは石斧や面縄東洞式土器などが出土し、周辺には石皿やイカリ石の大型の石器が出土している。

3) 土坑

第60図は土坑である。E-20グリットに集約される。8基確認された。いずれも10~20cmと浅く、最も深かったのは土坑3で40cmである。形状はまばらで、ひょうたん状を成す土坑4(1.4×0.6m)・6(1.2×0.7m)、円形の土坑2(約0.8m)・8(0.7m)、長方形の土坑1(1.1×0.6m)・3(2.2×0.5m)・7(1.3×0.8m)、正方形を成す土坑5(2×2m)がある。土坑の中には15cm以内の小礫が主に見られ、土器片・貝殻・獣骨、石器片、炭等が混在している。覆土内に炭化物が見られたことから炉址を想定したが、底部付近や側面に赤色化した土もなく、焼土は確認できなかった。また、礫についても赤色化は見られず、判然としない。

土坑5は本遺構内では最大で、西側を米軍の埋設管工事の際に破壊され、南西側はE-19グリットとの畦下となり未掘削である。E-19グリットでも埋設管工事の影響を受け破壊されている。現状では2×2mの正方形を成しており、規模からすると住居址の可能性が考えられる。しかし、同時期の住居遺構は前述のとおり礫を使用したもので、本遺構は周辺の土坑同様、土坑内には小礫が散在していることと浅いため、ここで扱うこととした。

3. 縄文時代晩期の遺構

本期は縄文時代後期の分布に重なるが、遺構は炉址1基と落ち込み遺構1基が確認された。

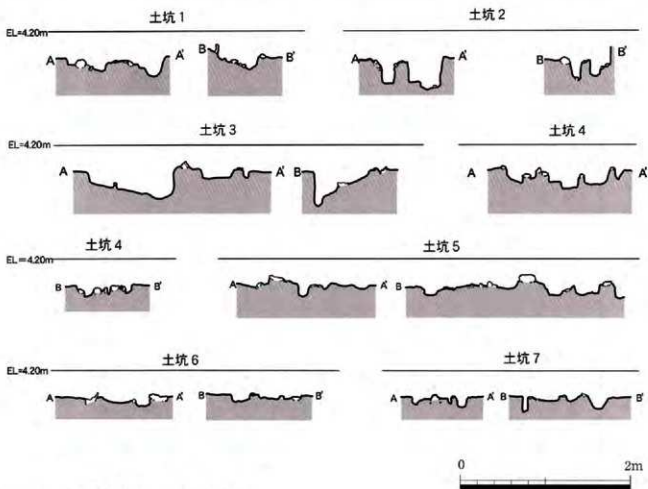
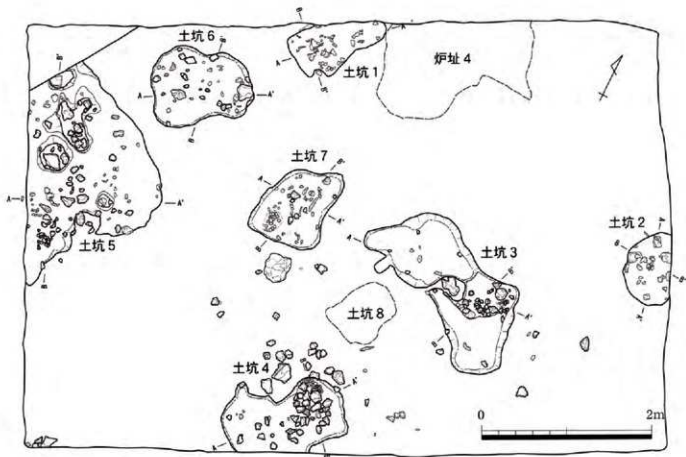
縄文時代後期同様に波によって遺跡が形成されていた砂丘は削られたと考えられる。従って、18ラインまで存在するがそこから西側には縄文時代の堆積は見られない。

1) 炉址4

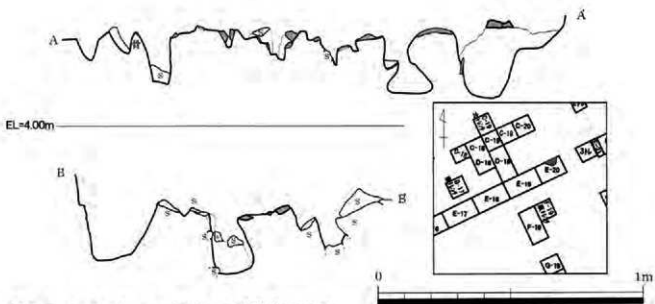
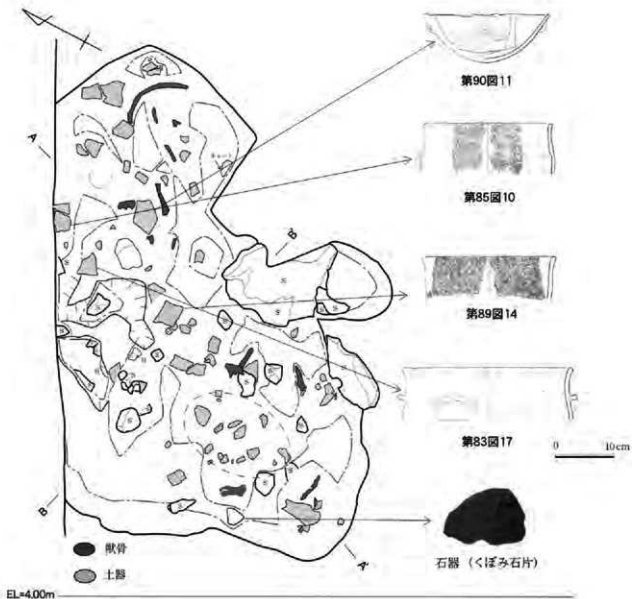
第60図~第62図は炉址である。E-20グリット第6層aの遺構である。グリットの北東側の北壁に礫が見られ、南にも40~50cm大の石灰岩が地面に立てた状態で検出された。遺構の北側は米軍による視察で形状は不明であるが、北壁に石がはまり、南東側に配石が存在することから石囲い炉と推測される。本遺構は北壁に接しているため半分残る状態となることから南側の掘り下げを行った。炉は深さ約50cmで、方形状にほりこまれている。覆土には伸原式土器や炭が検出された。また、本遺構は下層の文化層を掘り込んでいるため面縄東洞式土器や面縄前庭式土器も少量混在して出土した。炉は屋内炉となるのか屋外炉となるのかの判断はできなかった。今後の広範囲な調査で詳細が明らかになるのを期待したい。

2) 溝状遺構

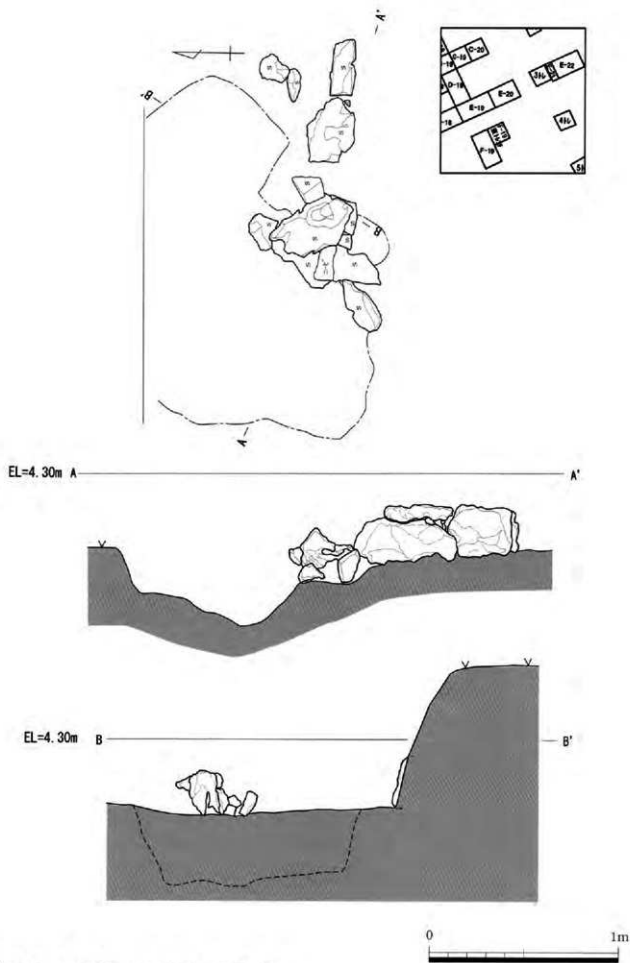
第67図は溝状遺構である。C-18グリットの半分から東側に位置している。当初、C-18グリットは西側半分の4×4mでの調査を実施していた。掘り下げに際して米軍の埋設管工事の影響を受



第60図 E-20グリッド検出の土坑



第61図 E-20グリット炉址4と遺物検出状況



第62図 E-20グリット炉址4の完掘状況

けている状況で遺構は確認できず遺物が散在する状況で白砂層（無為物）まで掘り下げを行い終了する予定であった。しかし、グリットの東壁が一部崩れたことにより、人骨の頭頂部が露出し、掘り込みも見られたこと、また、C-19グリットの第2号住居地の半分が西側に展開している状況であったことからC-18グリットを東側へ拡張して落ち込みと第2号住居地の調査となった。落ち込みは平面形が2.1×1.2mの長方形を呈している。北側は米軍の埋設管が敷設されていたが辛うじて落ち込みは残っていた。掘り下げに際しては十字状に観察畦を設け4ヶ所より行った。西側の掘り下げでは頭骨が現れ、顔を地面に向け南を向いていることが分かった。一方、東側では人骨は検出されなかった。つまり、頭骨のみで、下顎骨も得られていない。この掘り込みは当初は土壌で、規模から屈葬であろうと想定していた。しかし、頭骨のみの検出で、二次葬にしても不自然である。周囲に本来の土壌が存在し、豪雨などの自然災害により頭骨が流れ、たどりついたのではないだろうか。本遺跡の調査において埋葬遺構は未検出である。他の遺構に混在して出土している状況である。今後、伊礼原遺跡の埋葬地がどの地域に求められたのか、本遺跡の立地と、南島における埋葬地の特徴などを考慮する必要がある。

4. 弥生時代相当期の遺構

本期の堆積は遺跡のEトレンチを見ると、東側から19ラインまで擾乱の状況で、18ラインの西側半分から16ラインの間に存在する。範囲としては縄文時代を被り西側に範囲が広がっている。遺構はE-17・16グリットで柱穴が確認された。

1) 柱穴

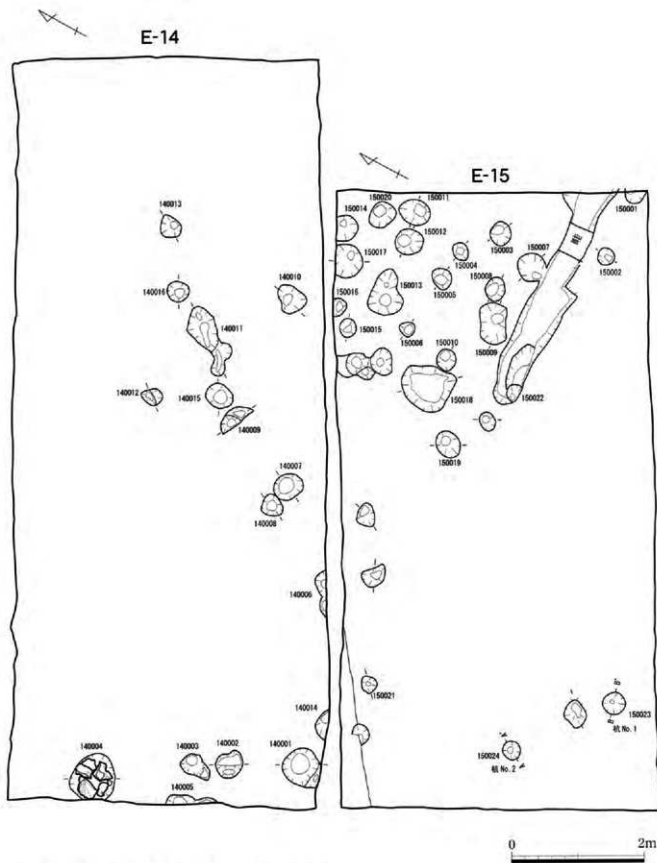
第64図はE-17・16グリットに分布する柱穴である。第5層aの遺構である。E-17グリットは東側と北西側に、E-16グリットは中央部から東側に集中する。明確なプランは確認できなかった。今後の広範囲な調査に期待したい。以下、各グリットの特徴を延べ、個々の柱穴については断面を第65図、計測を表13に示した。

E-17グリットは東側と北西側に分布し、西側は北西側がやや直線的に並びが見られる。

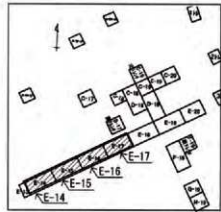
E-16グリットの柱穴は中央部から西側に分布する。北東側は一部米軍埋設工事等による擾乱を受けている。西側に分布する柱穴も米軍の擾乱を受けている。

5. グスク時代の遺構

グスク期の柱穴はE-16・15・14グリットとC-17グリットで確認できる。柱穴が確認できるのは第3層b（黒色砂層）の最下部、第4層の白砂層に変わる部分で確認できる。本地域の地層は層序でも述べたように、E-16グリットとE-17グリットあたりで堆積が異なる。E-16より西側の砂丘は弥生期以降に台風等の自然災害による波によって覆われた痕跡が確認されており、その後にあらたに砂丘が形成されてグスク期の堆積広がっている。遺構の分布はE-16・15・14、C-17グリットで確認され本遺跡の西側に位置している。遺物の分布状況は本遺跡全体で出土している。丘

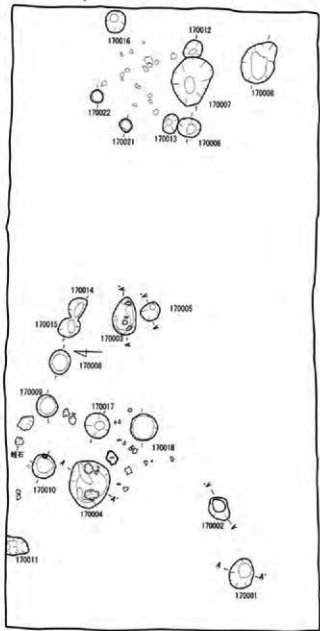
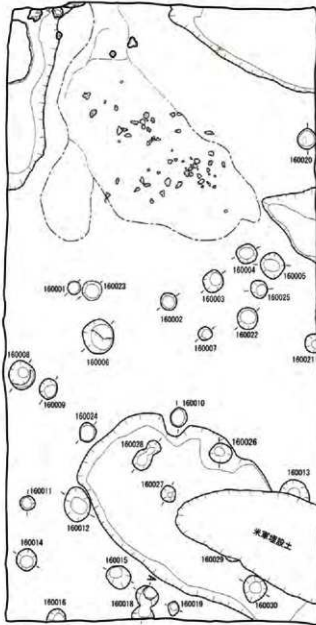


第63図 E-14・15グリット検出の柱穴平面図

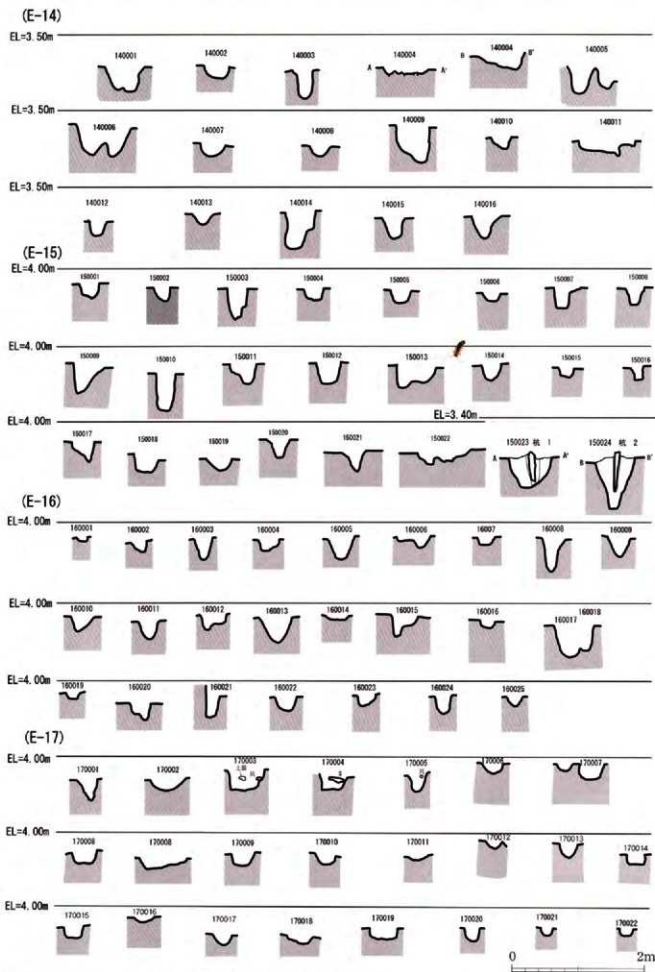


E-16

E-17



第64図 E-16・17グリッド検出の柱穴平面図



第65図 E-14・15・16・17グリットの柱穴断面図

表13 E-14~17グリット 柱穴計測一覧

No.	グリット	柱穴No.	径(cm)	深さ(cm)
1	E-14	140001	62×60	38
2		140002	44×40	20
3		140003	40×30	46
4		140004	72×62	14
5		140004	74	24
6		140005	76	54
7		140006	82	48
8		140007	46×38	18
9		140008	34×26	16
10		140009	50	60
11		140010	40	20
12		140011	90	24
13		140012	28×26	22
14		140013	32	18
15		140014	46	60
16		140015	40×32	32
17		140016	44×32	34
18	E-15	150001	30×26	22
19		150002	26×24	20
20		150003	36×30	44
21		150004	30×28	18
22		150005	34×32	18
23		150006	26×22	10
24		150007	20×42	30
25		150008	30×28	24
26		150009	58×46	48
27		150010	30	56
28		150011	50×40	30
29		150012	42×38	32
30		150013	68×60	34
31		150014	38×30	26
32		150015	28×24	34
33		150016	20	22
34		150017	50×36	30
35		150018	38	30
36		150019	40×38	20
37		150020	42×36	28
38		150021	38×24	30
39		150022	80	80
40		150023	36×32	52
41		150024	28	66
42	E-16	160001	22×18	6
43		160002	24×22	16
44		160003	30	32

No.	グリット	柱穴No.	径(cm)	深さ(cm)	
45	E-16	160004	30	18	
46		160005	40×38	34	
47		160006	50×48	18	
48		160007	26×20	12	
49		160008	42×34	50	
50		160009	36×32	34	
51		160010	36×26	22	
52		160011	30×24	28	
53		160012	40×38	24	
54		160013	50	38	
55		160014	36×32	10	
56		160015	40×30	32	
57		160016	22	14	
58		160017	60	48	
59		160018			
60		160019	22×16	10	
61		160020	32	26	
62		160021	26×20	30	
63		160022	34×32	20	
64		160023	30×28	18	
65		160024	28×26	28	
66		160025	24×22	14	
67		E-17	170001	46×32	32
68			170002	32	18
69			170003	26×20	32
70			170004	34×32	26
71			170005	30	28
72			170006	34×32	16
73			170007	72×62	26
74			170008	38~70×36	18~20
75			170009	36×34	20
76			170010	32×30	18
77			170011	30	6
78		170012	26	12	
79	170013	26	20		
80	170014	26	16		
81	170015	30	20		
82	170016	30	6		
83	170017	38×32	18		
84	170018	40×38	16		
85	170019	46×42	16		
86	170020	26×20	20		
87	170021	20×18	12		
88	170022	20	24		

陵側はやや古手の資料が出土しているが少なく、遺構は検出されていない。E-18より西側は15世紀頃から18世紀頃の遺物第105・106図が出土し、遺構を伴っている。

1) 柱穴

第63図はE-15・14までの範囲に見られる柱穴である。いずれも明確なプランは確認できなかった。しかし、規則的な並びが感じられる部分もあった。以下、各グリットの特徴を述べ、個々の柱穴については断面を第65図、計測を表13にまとめた。

E-15グリットは北西側に柱穴が集中し、E-16グリットは中央から西側に集中している。このことから、両グリットの間で建物のプランが確認できそうである。また、柱穴No150023及びNo150024は杭状の木残っていた。

E-14グリットはE-15グリットとは僅かに空間があり少ない。柱穴No140016から柱穴No140006の北東-南西方向に直線的に並んでいる。また、グリットの南西角より西壁に沿って直線に並んでいる。柱穴No140004は柱穴内に礫が敷かれている状態が見られた。

E-16-14グリット、C-17グリットの柱穴は出土遺物、特に中国産陶磁器から15世紀から16世紀が主体である。これは本遺跡の北に隣接する伊礼原D遺跡と時期、立地ともに類似することからその範疇であり遺跡の南端部に位置すると思われる。

6. 時代不明遺構

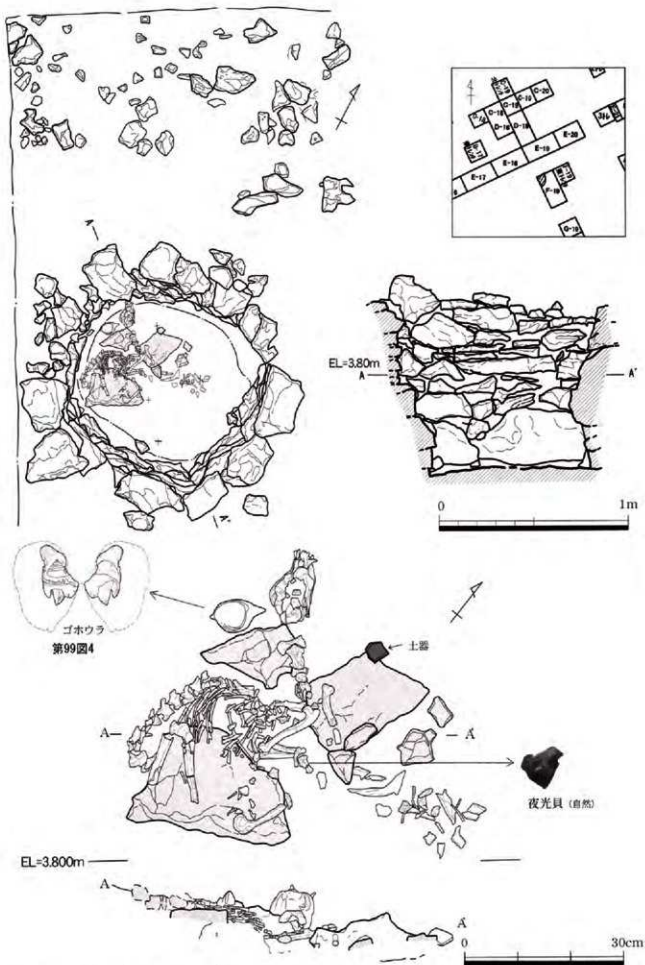
時代不明としたのは、検出状況では弥生時代相当期に属すると考えていたが、遺構の状況がグスク時代の状況を呈していたため、特定できず時代幅を持たせて紹介する。時代の特定については今後の課題としたい。

1) 井戸状遺構

第66図は井戸状遺構である。形状は井戸に見える。しかし、1m弱の深度しかない。井戸の状況を呈しているが断定できないので井戸状遺構として扱うこととする。F-19グリットの北西側の西壁で第3層dから検出された。

遺構周辺は本遺構を造る際の掘り込みが円形状に確認できるが南西側で米軍による埋設管工事で攪乱されている。遺構は第7層を掘り込んでいる。遺構は90cm四方の隅丸形状を呈する。断面はU字状で深さは0.8~1.06mを測る。遺構内の上部は掘り下げを行っている最中に琉球石灰岩約40cm大の集積が露出し、それを除去すると犬の骨が1体検出された。犬の頭蓋骨は潰れている状態で、下顎骨が下で頭頂部が上向きである。身体は右側を上にし長軸が南北方向で四肢骨は東向きである。頭蓋骨付近にはゴホウラと無文土器の小破片が各1点確認された。その後、犬の骨の取り上げを行ったところ直下からも大きめの琉球石灰岩が3~4点確認された。上部からここまでの埋土は60~70cmで黄茶色粘質土が堆積し、上述した犬の骨とゴホウラ・無文土器を伴っている。大きめの琉球石灰岩から底部までの約35~45cmは白砂層で面縄前庭式土器の小破片が出土している。

犬の骨について早稲田大学の樋泉岳二氏により次ぎのような所見を頂いた。四肢骨の脛骨に骨折痕が見られた。しかし、傷は快復していることから、生きていたときは跛を引いていたと推測されるとのことである。遺構内に落ちて折れたものではないことは間違いないようである。



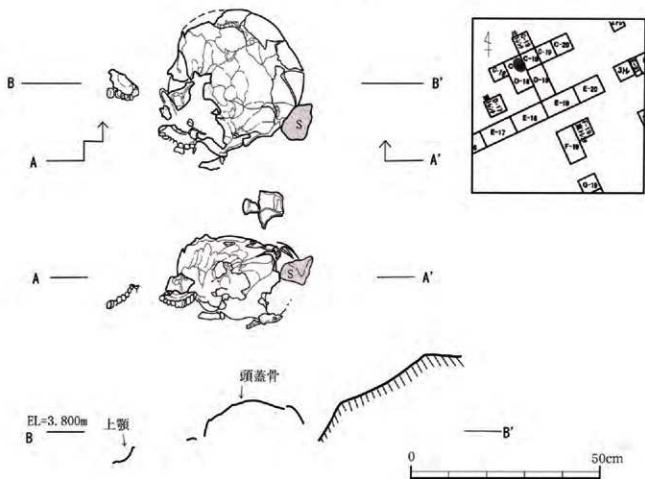
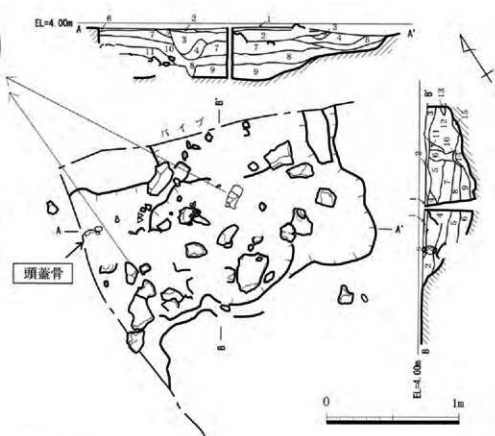
第66図 上:F-19グリッド検出の井戸状遺構と犬骨 下:犬骨平面図・断面図



第90図14

溝状遺構内の覆土

- 1 淡黄灰色粘質土
- 2 黒色砂質土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 黒色粘質土
- 5 淡黒色砂質土
- 6 黄灰色砂質土
- 7 褐色砂質土
- 8 明褐色砂質土
- 9 黄色砂質土
- 10 灰色砂質土
- 11 淡黒色砂質土
- 12 褐色砂質土
- 13 黒色粘質土
- 14 暗灰色粘質土
- 15 黄色砂質土



第67図 上：C-18グリット検出の溝状遺構と人頭蓋骨
下：人頭蓋骨平面図・断面図

第4節 出土遺物

砂丘区からは土器、石器、骨製品、貝製品、滑石、青磁、染付、羽口などの人工遺物と魚類やイノシシ、貝類などの自然遺物などが出土した。

ここでは人工遺物を中心に報告し、自然遺物は第V章で報告する。

1. 土器

砂丘区出土の土器は縄文時代前期の室川下層式土器、中期の面縄前庭式土器、仲泊式土器、後期の面縄東洞式土器、伊波式土器、萩堂式土器、縄文晩期土器、貝塚後期土器、グスク土器などが出土した。以下、これらの土器の概略を述べ、詳細は各々の土器ごとに観察一覧を示した。

1) 室川下層式土器

沖縄県中部の沖縄市室川貝塚の最下層より出土した土器を標識としている。器形は深鉢形で平口縁をなし尖底で砲弾状や乳房状を呈する。文様は器面調整の条痕を施したあと、軽くナデ消すが完全には消されずに残り、その上から口縁部は斜位沈線や横位沈線を施し、頸部は横位や刺突文など、更にその下部の胴部には斜位に貝殻文などを施す。内面は口唇部に斜位沈線や刺突文などが施される。

本土器は総数440点出土で出土地域はB-23及びC-24グリット、平成13年度試掘穴№1・2・4・5トレンチからである。AT.P-20グリットの丘陵側に集中している。

本土器の分類は口縁部の器形から、直口若しくは内湾するものと外反するものの2種に大別し、前者をA種、後者をB種とした。更に文様の特徴から4種類に細分した。

- イ、坦匏による横位や斜位と先端の丸味を帯びた筒状で刺突を組み合わせるもの
- ロ、貝殻縁部の押圧により横位と斜位の施文と先端の丸味を帯びた坦匏で刺突を組み合わせるもの
- ハ、坦匏による刺突を施すもの。
- ニ、無文。

A種イ

第68図1～3・9・に示した4点である。図1は口径24cmを測る。口唇部は丸味を帯びている。文様は内外面とも器面調整の際の条痕がみられ、外面は縦に明瞭に残る。口縁部は斜位の短沈線文と先端が丸味を帯びた大小の坦匏により刺突するが、大きい刺突文を小さな刺突文が上下に囲み横位に施文している。その下部に若干の隙間を設け更に小さな坦匏による刺突文を横位に施し、その下部の胴部より横に間隔を設けて羽状文が縦位に施文するが、羽状文の一単位は向きを変え施文している。内面は条痕を軽くナデ消すが消えきっていない。口縁部内面に羽状文を施している。器壁は1cmを測る。器色は暗褐色で、胎土は石英を多く含む。試掘穴№5出土。

図2は口唇部が舌状を呈している。文様は器面調整の条痕が外面はナデ消しされ、その上から口縁部は斜位の短沈線が先端の丸味を帯びた筒状の刺突文を上下に囲んで施文している。内面の条痕

は横位に明瞭に残る。口縁部上端に先端が丸味を帯びた筒状で横位に刺突し、その下部に横に間隔を設けて、縦位に細かな刺突文を連続して施し、あたかも縦位沈線のような施文をしている。3本確認できる。器壁は8mmを測る。器色は暗灰色で、胎土は石英を含む。試掘穴No1出土。

図3・9は条痕の状態や文様構成、施文方法が類似していることから同一個体の可能性がある。口唇部は舌状を呈している。文様は両面とも横位の条痕で外面は軽くナデ消しされ、内面は図3は明瞭に残り、図9は軽くナデ消しされている。外面の口縁部は斜位の細沈線と刺突文を横位に3段施し、その下部から胴部へ斜位に刺突文を連続してを施文している。内面の口縁部は大きめの丸味を帯びた筒状で横位に上段と下段は向きを変えて刺突文を施している。両資料とも器壁は1cmを測る。器色は図3は暗茶褐色で、図9は褐色で、胎土は両方とも石英を含む。試掘穴No1出土。

A種口

第70図21は図上復元を試みた資料で、口径は27.1cmで口唇部はやや舌状を呈する。器高は推定54.6cmを測る。両面とも器面調整の条痕は残る。外面の口縁部は貝殻腹縁部による圧痕を横位に3段にめぐらし、2段目と3段目の間は大きめの丸味を帯びた筒状による刺突文が横位にめぐらしている。3段目の下部は貝殻腹縁部を斜位圧痕と横位圧痕の組み合わせで縦位または斜位に施文している。内面は口縁部に貝殻腹縁部を縦位圧痕を2段横位にめぐらしている。器壁は1.14cmを測る。器色は暗褐色で、胎土は石英を含む。B-23グリット出土。

A種ハ

第68図6の口唇部は丸味を帯びる。外面は条痕が斜位に施されるがナデ消しされるが僅かに残る。先端がやや扁平をした坦縁により横位に2段刺突文を施している。内面も同様な縁により横位に刺突文が施されている。器壁は1.1cmを測る。器色は暗褐色で、胎土は白色砂粒と石英を含む。出土。

A種ニ

第68図8・10・第69図18に示した3点である。器面調整の条痕のみで、本来なら条痕土器で扱うべきであるが、文様構成を考えた場合、無文部の可能性も捨てきれないことからここで扱うこととした。

図8の口唇部は平坦である。外面は斜位や縦位の条痕を施すがナデ消しするが消えきっていない。内面は間隔を設けて縦位に条痕が残る。器壁は1cmを測る。器色は淡橙色で胎土は石英を含む。E-22・23グリット出土。図10は口径23cmで、口唇部は丸味を帯びる。外面は斜位や縦位に条痕を施すが軽いナデ消しが行われている。内面は横、縦、斜位に条痕が残る。器壁は8mmを測る。器色は淡茶色で胎土は石英を含む。C-24グリット出土。第69図18は口径22.4cmで口唇部は平坦を呈している。外面は縦位と斜位の条痕が胴下部まで施され明瞭に残る。内面は口縁部に横位と斜位、胴部は縦位の条痕を施すがナデ消しが行われている。器壁は8mmを測る。器色は茶褐色で、胎土は石英を含む。C-24グリット出土。

B種二

第68図4・12は口縁部が僅かに反るもので、A種と同様条痕のみの資料である。図4は口唇部がやや舌状を呈する。外面は条痕が横位又は斜位に明瞭に残る。内面の条痕は横位に施されナデ消しが行われている。器壁は1cmを測る。器色は橙色で、胎土は石英を含む。B-23グリット出土。図12は口径14cmで、口唇部は丸味を帯びる。内外面ともナデ調整である。器壁は8mmを測る。器色は赤褐色で、胎土は石英を含む。C-24グリット出土。

・胴部資料

有文胴部資料は4点図化した。文様は斜位の短沈線と丸味を帯びた刺突文の組み合わせ、横位沈線と刺突文の組み合わせ、刺突文と条痕文の組み合わせが見られた。

第68図5・第70図20は条痕と刺突文の組み合わせの資料である。図5はの外面は器面調整の条痕が縦位に施され、軽くナデ消しするが消されずに残る。その上から波状文を横位に2段めぐらし、2段目の下部に筒状による刺突文を横位に施文している。内面は条痕が右上から左下に深く施文し、その上から今度は左上から右下に軽く施文している。器壁は11cmを測る。器色は外面は茶褐色で、内面は暗茶褐色である。胎土は細かい白色砂粒と石英を含む。試掘No.2出土。図20は胴下部の資料で底部は丸味を帯びた尖底を呈する。文様は刺突文を横位にめぐらした後に、間隔を設けて斜位に4条程の沈線を施している。器壁は1.67cmを測る。器色は明橙色で、胎土は試掘No.3出土。

第68図7は斜位の短沈線を横位に3段めぐらし、最上段は細沈線である。その下部に大きめの丸味を帯びた筒状による刺突が横位に施文している。器壁は1.3cmを測る。器色は外面は灰茶色で、内面は暗褐色である。胎土は石英と白色砂粒を含む。ATP-20出土。

・底部資料

底部資料は丸底を呈する第68図13、丸味を帯びた尖底を呈する図15・17、第70図20、乳房状を呈する第68図14・16がある。

図13は丸底を呈する底部である。底部の器壁が8mmから1.5cmを測る。器色は明茶色で胎土は石英を含む。C-24グリット出土。

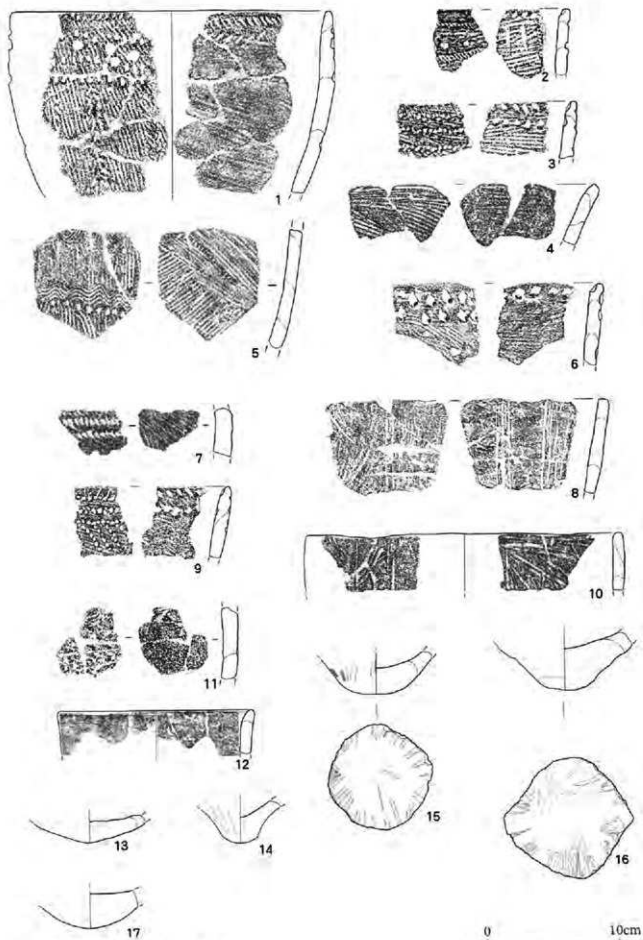
図14・16は乳房状を呈する底部である。図14の底部は胴部への立ち上がりは反るようにして移行すると思われる。外面に器面調整痕が僅かに見られる。底部の器壁は1.6cm、胴部への立ち上がり部は2cmを測る。器色は茶色で、胎土は石英を含む。F-19東グリット出土。図16は乳房状を意識したものと思われる。扁平な筒状による器面調整痕が残る。底部の器壁は3cm、胴部への立ち上がり部は1.5cmを測る。器色は赤褐色で、胎土は石英を含む。試掘No.4出土。

図15・17は丸味を帯びた尖底を呈する底部である。図15は底部をやや扁平を意識している。器色や胎土が図8に類似していることから同一個体の可能性がある。底部の器壁は1.7cm、胴部への立ち上がり部は1cmを測る。器色は淡茶色で、胎土は石英を含む。試掘No.2出土。図17の底部の器壁は2.6cm、胴部への立ち上がり部は1cmを測る。

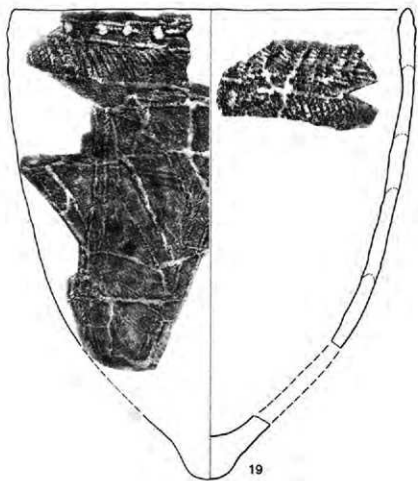
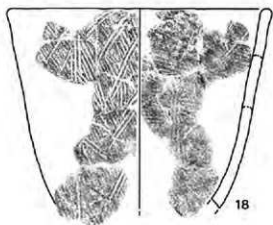
表14 室川下層式土器観察一覧

図版番号	洋区番号	土器形式	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号	
第68 国・ 国版 87	1	室	深鉢	口	Aイ	口:24cm	口:丸・内。文:表・横・斜・沈線・凹文・裏・斜沈2条。質:砂質。表:暗茶。裏:暗茶。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:表・条痕・縦・裏・条痕。厚:10mm。積痕:有。	F-10トレ淡茶褐炭混 台020228-19
	2	室		口	Aイ		口:舌・直。文:表・刻目文・裏・横・凹文。質:砂質。表:暗灰。裏:暗灰。混種:石英。混大:3。混量:多。焼:中。調:裏・条痕・縦。厚:8mm。積痕:有。	1トレ白砂直上 台020313-2
	3	室		底	Aイ		口:舌・直。文:表・沈線・羽突・裏・羽突。質:砂質。表:暗茶。裏:暗赤。混種:石英。混大:1。混量:多。焼:中。調:裏・条痕・横。厚:10mm。積痕:有。	F-19東トレ東壁 擦崩 台050630-16
	4	室		口	Bニ		口:角・外。文:条痕。質:砂質。表:暗灰。裏:暗灰。混種:ナ・ト。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:表裏・条痕・横。厚:10mm。積痕:有。	B-23盛土(黒) 台040930-7
	5	室		胴			文:貝・横・沈線・波状。質:砂質。表:暗赤。裏:暗茶。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:表裏・器面細かい。厚:12mm。積痕:有。	2トレサブ白砂 台020415-2
	6	室		口	Aハ		口:舌・外。文:羽突。質:砂質。表:暗黒。裏:暗黒。混種:石英・白色砂粒。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:表・条痕・斜・裏・条痕。厚:11mm。積痕:有。	1トレ暗茶褐 台020228-8
	7	室		胴			文:貝・横。質:砂質。表:暗灰。裏:暗灰。混種:石英。混大:2。混量:多。焼:中。調:裏・条痕・斜。厚:13mm。	ATP-20盛探 台031224-41
	8	室	深鉢	口	Aニ		口:角・直。文:条痕。質:砂質。表:淡橙。裏:淡橙。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:表・条痕・斜め・縦・裏・条痕。厚:10mm。積痕:有。	E-22・23北深掘 床 台041222-33
	9	室		口	Aイ		口:舌・直。文:刻目文・内面。質:砂質。表:暗茶。裏:暗赤。混種:石英。混大:2。混量:多。焼:悪。厚:10mm。積痕:有。	1トレD5 台020306-8
	10	室	深鉢	口	Aニ	口:23cm	口:丸・直。文:条痕。質:中。表:淡茶。裏:淡茶。混種:石英。混大:1。混量:少。焼:悪。調:表裏・条痕文。厚:8mm。積痕:有。	C-24淡灰白砂 台041201-7
	11	室	胴				文:刺突。質:砂質。表:暗茶。裏:暗茶。混種:石英・砂。混大:2。混量:多。焼:悪。厚:10mm。積痕:有。	5トレ淡褐炭混 台020305-18
	12	室	深鉢	口	Bニ	口:14cm	口:丸・外。質:砂質。表:赤褐。裏:赤褐。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表裏・ナデ。厚:8mm。他:平直。	C-24崩土除 台041201-9
	13	室	底				質:砂>泥。表:明茶。裏:明茶。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:中。厚:8~15mm。積痕:有。他:丸底。	C-24東赤粘土 台040114-8
	14	室	底				質:砂質。表:茶。裏:暗茶。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表・丁塚。厚:20mm。他:乳房状。	F-19東トレ壁擦 崩 台050630-16
	15	室	底			底:4cm	文:条痕。質:砂>泥。表:淡茶褐。裏:淡茶褐。混種:石英。混大:3。混量:中。焼:悪。調:表・条痕・縦。厚:10~17mm。積痕:有。他:尖底。	2トレ白砂槽 台020426-1
	16	室	底				文:条痕。質:砂質。表:赤褐。裏:淡赤褐。混種:石英。混大:2。混量:多。焼:中。調:表・条痕・縦。厚:15~30mm。積痕:有。他:乳房状。	4トレ淡茶 台020515-1
	17	室	底				質:砂質。表:明黄。裏:淡橙。混種:石英。混大:3。混量:多。焼:悪。厚:10~25mm。他:尖底。	C-24崩落 台040126-8
第69 国・ 国版 88	18	室	深鉢	口	Aニ	口:22.4cm	口:角。文:条痕。質:砂質。表:茶褐。裏:茶褐。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:表・条痕・斜・裏・条痕。厚:8mm。積痕:有。	C-24崩落 台040126-8
第70 国・ 国版 89	19	室	深鉢	口		口:30cm 底:3.5cm 高:34.5cm	口:舌・直。文:表・横・刺突+凹文・斜・刺突+縦・刺突・裏・斜・刺突。質:砂質。表:茶褐。裏:茶褐。混種:砂粒。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:表裏・ナデ。厚:11~31mm。積痕:有。他:乳房状。	C-24試掘
	20	室	深鉢	底			口:舌・内。文:横・刺突+斜・沈線。質:砂質。表:明橙。裏:明橙。混種:石英・白色砂粒・チャート。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表・ナデ・裏・条痕。厚:11mm。	3トレ淡茶褐。BT P-23盛探 台020 328-1.040306-20
	21	室	深鉢	口	A口	口:27.1cm 高:54.6cm	口:舌・内。文:表・横・刺突+凹文・斜・刺突+縦・刺突・裏・斜・刺突。質:砂質。表:暗黒。裏:暗褐。混種:石英・砂粒。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表裏・ナデ。厚:9~14mm。積痕:有。	B-23盛探(白)。 台010629-23.041 208-1

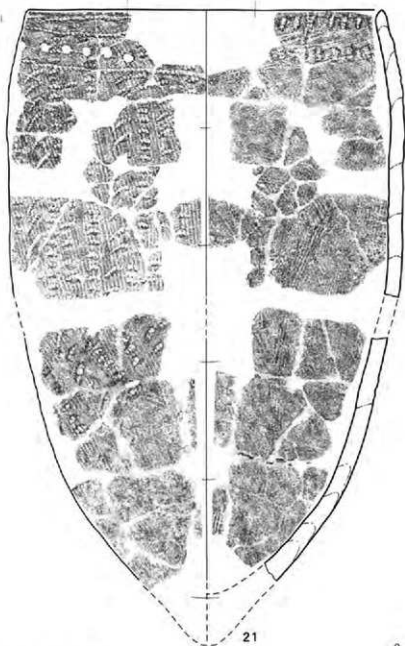
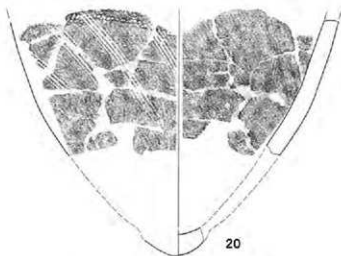
<凡例>「観察事項」の項目「口」:(口縁部の形態、文:(文様)、質:(砂質・泥質)、表:(色)、裏:(色)、混種:(混入物の種類)、混量:(混入量)、混大:(混入物の大きさ)、焼:(焼成)、調:(器面調整)、厚:(器厚)、他:(その他など)「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録



第68図 室川下層式土器①



第69圖 室川下層式土器②



0 10cm

第70図 室川下層式土器③

2) 面縄前庭式土器

総数684点出土している。得られた器種は壺形と深鉢形の2種類である。全形を窺える資料は得られなかった。分類はまず、器種別に壺形と深鉢形の2種に大別し、更に凸帯の貼り付け方の特徴から4種に細分する。また、文様は器種別に大きな差異は見られなかった。そこで、凸帯上に施される文様で更に細分を試みた。凸帯幅が1cm未満の資料を本土器として扱った。

I種：口縁部と頸部に凸帯を横位にめぐらすもの。

II種：口縁部は横位に頸部は波状に凸帯をめぐらすもの。

III種：I類に類似し、口縁部と頸部の凸帯間を縦位の凸帯が繋ぐもの。

IV種：凸帯が見られないもの。

更に凸帯上の文様の特徴から6種類に細分した。

a：弧文 b：刻目文 c：斜行刻目文 d：又状刻目文 e：又状刺突文 f：ハの字状文

・壺形

壺形は頸部の短長で2種類あり、前者をA類（短頸）、後者をB類（長頸）とした。

A類

第71図1・12の資料で2点出土している。図1は外面の文様が山形の斜位沈線を巡らしている。深鉢形の凸帯間の文様で見られる山形の斜位沈線と類似しており、本資料も口縁部と頸部の凸帯を有した壺形が想定される。頸部の径は0.3cm、器壁は5mmを測る。図12は胴部片である。図1と胎土や器色、施文方法が類似することから同一個体の可能性がある。凸帯を有し、図1でも述べたようにII種に属する可能性がある。凸帯上の文様はfのハの字状文である。器壁は7mmを測る。

B類

第71図2・11・13～17・19・第72図21・25・36・37の20点である。以下、分類別に簡記する。

B類I種

第71図2・5・17・19・第72図21・25の7点である。

aグループ

第71図2・19・第72図25の3点である。図2は口径8.3cmを測る。口唇部は丸味を帯びる。頸部の凸帯は欠損しているが、その間は斜位沈線を施文している。内面は粘土帯が明瞭に残る。器壁は4mmを測る。図19は口径23cmを測る。口唇部は丸味を帯び、弧文が連続して施文されている。凸帯間は斜位沈線を施している。頸部の凸帯下より胴部に縦位沈線を施文している。器壁は5mmを測る。図25は口径14.6cmを測る。口唇部は丸味を帯び、弧文を連続して施文している。凸帯間及び胴部は無文である。器壁は5mmを測る。

bのグループ

第71図4・5の2点である。図4は口径5.1cm、口唇部は舌状を呈する小型の壺である。頸部の器壁が6mmで口唇部に向かって薄くなる。凸帯間は斜位沈線で、頸部下の文様は縦位と思われる沈線が僅かに見られる。図5は口径8.2cm、口唇部は舌状を呈する。凸帯間の斜位沈線は明瞭である。頸部凸帯下は斜位の細沈線を施文している。器壁は6mmを測る。

dグループ

第71図17・第712図21の2点である。図17は口径26cm、口唇部は丸味を帯びる。頸部の凸帯は見られないが、凸帯間は斜沈線を施文している。器壁は6mmを測る。図21は口径27.2cmで、口唇部は丸味を帯びる。頸部の凸帯は見られないが、凸帯間は斜沈線を施文している。器壁は7mmを測る。

B類Ⅱ種

第71図8～11・13・第72図36・37の8点である。

aグループ

第71図10の1点である。口径14.6cmで、口唇部は丸味を帯びる。内面にも凸帯をめぐらしている。外面の凸帯間は縦位沈線が明瞭である。器壁は6mmを測る。

bグループ

第71図9・第72図37の2点である。図9は13.4cmで、口唇部は丸味を帯び口唇部にも刻目文を施文している。凸帯間は縦位沈線で、胴部は斜位沈線を施文している。器壁は7mmを測る。図37は口径11.8cmで、口唇部は扁平で刻目文を施文している。凸帯間及び胴部伴に無文である。器壁は6mmを測る。

cグループ

第72図36の1点である。口径8.2cmで、口唇部は丸味を帯び湖心部にも斜行刻目文を施文している。凸帯間は無文で胴部は斜位沈線を施文している。器壁は3mmを測る。

eグループ

第71図8の1点で、口縁部片と底部片である。口径9.4cm、口唇部は丸味を帯び、ハの字状文を連続して施文している。底部は尖底で器壁は7mmを測る。凸帯間は縦位沈線が明瞭である。器壁は5mmを測る。

fグループ

第71図11は口径15.6cmで、口唇部は丸味を帯びハの字状文を施文している。凸帯間及び胴部伴に無文である。器壁は5mmを測る。

B類Ⅲ種

第71図6・14～16の4点である。

aグループ

第71図14は口径15cmで、口唇部は丸味を帯び弧文を施文している。凸帯間と胴部は斜位沈線を施文している。器壁は9mmを測る。

bグループ

第71図6は口径7.4cmで、口唇部は舌状を呈している。凸帯間及び胴部は無文である。器壁は5mmを測る。

eグループ

第71図15・16の2点で、胴部片である。横位の凸帯は山形をなし無文である。縦位の凸帯は頸部の横位凸帯を1cm程越えて貼り付けられている。縦位凸帯に叉状刺突文を施文している。横位凸帯下

は縦位沈線が見られる。図15の器壁は6mmを測る。図16の器壁は6mmを測る。同一個体の可能性がある。

B類IV種

第71図13の1点である。口径11.8cmで、口唇部は舌状を呈し叉状工具によりハの字状文を施文している。波状凸帯を意識してハの字状文を連続して施文している。その下部より斜位沈線を施文している。器壁は7mmを測る。

・深鉢形

第71図18・第71図20・22～24・26～34の14点である。

I種

第70・71図18・20・22～29・31・32の12点である。

aグループ

第71図18第69図20・24の3点である。図18は口径22.5cmで、口唇部は丸味を帯びる。凸帯間は斜位沈線で、頸部凸帯下は斜位と縦位の沈線の組み合わせである。器壁は7mmを測る。図20は口径15.5cmで、口唇部は丸味を帯びる。凸帯間は斜位沈線を施文し、胴部は斜位と縦位沈線の組み合わせである。器壁は5mmを測る。図24は口径18cmで、口唇部は丸味を帯びる。凸帯間は縦位沈線で、頸部下は斜位から縦位沈線に変化し隣の沈線と交わる。器壁は6mmを測る。

bグループ

第72図26・29の2点である。図26は口径11.2cmで、口唇部は欠損している。凸帯間及び胴部は無文である。器壁は6mmを測る。図29は口径8.6cmで、口唇部は舌状を呈する。凸帯間は縦位沈線を施文している。器壁は7mmを測る。

cグループ

第72図23・31の2点である。図23は口径9.5cmで、口唇部は丸味を帯びる。凸帯間と胴部は斜位沈線が施文されている。器壁は7mmを測る。図31は口径16.2cmで、口唇部は扁平で沈線をめぐらしている。口縁部に粘土を貼り付け肥厚帯を作るが横位の沈線をめぐらして2分している。凸帯下は斜位沈線を施文している。

dグループ

第72図22の①点である。口径28.6cmで、口唇部は丸味を帯びる。凸帯間及び胴部は斜位沈線を施文している。器壁は8mmを測る。

eグループ

第72図28の1点である。口径11.8cmで、口唇部は舌状を呈する。凸帯間は無文である。器壁は7mmを測る。

fグループ

第72図27・32の2点である。図27は口径11.3cmで、口唇部は舌状を呈する。凸帯間は無文である。器壁は6mmを測る。図32は口径19.8cmで、口唇部は丸味を帯びる。口縁部は3本の粘土帯を重ねて肥厚部を作る。口唇部もハの字状文をめぐらしている。器壁は8mmを測る。

II種

第72図30・33・34の3点で、全てbグループに属する。図30は口径9cmで、口唇部は丸味を帯び、刻目文を施文している。内面にも凸帯を横位にめぐらしている。器壁は5mmを測る。図33は口径24cmで、口唇部は丸味を帯び、刻目文を施文している。凸帯間と胴部は無文である。器壁は9mmを測る。図34は口径19.1cmで、口唇部は丸味を帯び刻目文を施文している。波状凸帯下より縦位沈線を施文している。器壁は5mmを測る。

・胴部資料

第72図35は胴径6.8cm、器壁は5mmを測る。

・底部資料

第72図38・39の2点である。図38は器壁6mmを測る。図39は器壁7mmを測る。

3) 仲泊式土器

総数913点出土している。得られた器種は壺形と深鉢形の2種類であった。分類は器種別に大別し、細分は低湿地区と同様に肥厚帯に施される文様の特徴から行った。

I種：口縁部の肥厚帯に貝殻文を施す仲泊A式土器

II種：口縁部の肥厚帯に沈線文を施す仲泊B式土器

・壺形

第73図4・7・第74図18の3点で、図4・7はI種に属する。図4は20.1cmで、口唇部は扁平を呈する。肥厚帯下は斜沈線を施文している。肥厚帯幅1.2cm測る。図7は口径25cmで、口唇部は丸味を帯びる。肥厚帯下は縦位沈線と羽状文の組み合わせである。肥厚帯幅は1cmを測る。図18はI・II種のどこに属するか不明である。凸帯下は斜位沈線が施文されている。凸帯上は僅かであるが横位の刺突文が貝殻文が施されている。

・深鉢形

I種

第73図1・3・5・6・8・11の8点である。肥厚帯下に斜位沈線を施文する図2・5、羽状文を施文する図3・6・11、肥厚帯同様貝殻文を施文する図10が見られた。図10は石川市（現うるま市）古我地原貝塚でも出土している。図1は口唇部は丸味を帯びる。肥厚帯に2条の凸帯をめぐらし、凸帯上にも貝殻文が施文されている。器壁は1cmを測る。図2は口径25cmで、口唇部は欠損する。肥厚帯下に凸帯を1条めぐらし、凸帯上にも貝殻文が施文されている。図3は図上復元を試みた資料である。口径22cm、推算器高25cmを測る。肥厚帯は図1と同様である。内面は器面調整の刷毛目が横位に残る。底部は乳房状尖底を呈する。図5は口径23.2cmで、口唇部は丸味を帯びる。肥厚帯に1条の凸帯をめぐらした痕跡が残る。内面は粘土帯が残る。図6は口径21.4cmで、口唇部は丸味を帯びる。内面はナデと刷毛目の調整痕が見られる。図8は口径26cmで、口唇部は丸味を帯びる。図9は山形口縁を呈し、口径は23.3cmを測る。口唇部と内面は斃状工具による器面調整が行われている。図10は山形口縁を呈し、口径23.5cmを測る。口縁端部に凸帯をめぐらし、凸帯上にも貝殻文を施文している。内面はナデ調整が行われている。図11は口径26cmで、口唇部は扁平に仕上げ

ている。内面は刷毛目の調整痕が横位に残る。

II種

第71図12・19第72図21～27の9点である。肥厚帯の文様は斜位沈線を施す図12・19・21・23の4点と、羽状文を施す図24～27の4点がある。図12は肥厚帯がカマボコ状を呈する。横位沈線で斜位沈線を囲む。内外面とも刷毛目調整痕が残る。図19は口径20cmで、口唇部は扁平を呈する。凸帯下は羽状文を施文している。図21は口径14cmで、口唇部は扁平を呈する。肥厚帯下は縦位沈線が見られる。内面は刷毛目調整痕が口縁部下は縦に、その下は横に施している。図22は山形口縁を呈し、山形部の口唇部は凹みを呈する。口径17.6cmを測る。肥厚帯及び頸部は羽状文を施文している。内面は刷毛目調整痕が横位に残る。図23は口径20.2cmで、口唇部は丸味を帯びる。肥厚帯下は羽状文を施文している。内面は刷毛目調整痕が残る。図24は口唇部は扁平を呈し、斜行刻目文を施文している。内面は横位に刷毛目調整痕が僅かに残る。図25は山形口縁を呈し、口径28cmを測る。図26は山形口縁を呈し、口径41.6cmと大型である。山形は二又で、口唇部は扁平で斜行沈線を施文している。頸部は羽状文で胴部は波状を意識した斜沈線を施文している。図27は口径27.5cmで、口唇部は丸味を帯びる。肥厚帯下は無文のようである。

4) 仲泊移行型式土器

仲泊移行型式土器としたのは文様が仲泊式土器の要素を有している土器である。壺形と深鉢形の2種類ある。以下、器種別に略記する。

・壺形

壺形は第74図17の1点である。口径26cmで、口唇部は沈線を施文している。口縁端部に横位に凸帯をめぐらし、更に丸めた粘土帯を貼り付け瘤状となる。瘤状と凸帯下は刻目文を、横位凸帯は斜位沈線を施文している。凸帯状に刻目文を施文するのは面縄前庭式土器に類似する。

・深鉢形

深鉢形は山形口縁と平口縁があり、前者をI種、後者をII種とし、更に肥厚帯の文様の特徴から斜沈線や縦位沈線を施文するものをA、押し引き文をBに細分した。

I種A

第74図14～16・20の4点である。図14は口径14.5cmで、口唇部は丸味を帯びる。凸帯は口唇部より縦位に貼り付け、凸帯上にも縦位の短沈線が施文されている。凸帯の口唇部にも刺突が見られる。口縁部外面は羽状や四角のような沈線が施文されている。図15は口径11cmを測る。山形となる口唇部は扁平を呈し、刺突文が施される。口唇部は沈線が試問されている。口縁部外面は羽状の文様で、頸部はひし形状の文様を施文している。図16は口径9.8cmを測る。口縁部の横位凸帯は、山形口縁部から頸部に縦位に凸帯を貼り付けるためクロスする。凸帯上は刺突文を施文している。横位の凸帯下は斜沈線を施文している。図20は口径15.5cmを測る。山形の口唇部は刻目文を施す。外面は口縁端部に沿って凸帯を貼り付けるが凸帯上は無文である。凸帯下は斜位刻目文を施文している。

I種B

第75図28～31・第76図35の5点である。図28は口径26cmを測る。口縁部の肥厚帯は先が爪形状を

呈する筧状工具による押し引き文を連続して施文している。押し引きは3段施され筧先の方向は上段と下段が同一方向で、中段はその反対方向である。頸部は羽状文を施文している。内面は刷毛目調整痕が横位に残る。図29は口径25.6cmを測る。口縁部の肥厚帯に施され文様は図28と同様である。頸部は斜位沈線が施文されている。図30は口径17.2cmを測る。口縁部の肥厚帯に施され文様は図28と同様であるが4段施文している。口唇部も同筧状工具による刺突文である。また、内面口縁部も施文対象としている。図31は口径22.8cmを測る。山形口縁部は欠損する。口唇部は扁平を呈し、山形口縁部より両サイドの約1.5cmの範囲で爪形状を呈する筧状工具による押し引き文が施文されている。肥厚帯にも同様の工具による押し引き文が3段同一方向に施文し、山形を成す部分も縦位に施文している。図35は口径25.4cmを測る。口唇部は扁平を呈し、先が爪形状を呈する筧状工具による押し引き文を連続して施文し、肥厚帯も口縁部に沿って同様の工具による押し引き文を1条施文しているが、施文の方向は逆になる。頸部は斜沈線を施文している。

II種A

第75図32・33・第75図34・40の4点である。図32は口径15.7cmを測る。肥厚帯幅に筧状工具による押し引き文を2段施文し、頸部は羽状文を施文している。図33は口径27cmを測る。肥厚帯は先が爪形状を呈する筧状工具による押し引き文を3段同一方向に連続して施文している。頸部は山形に斜位沈線を明瞭に施文している。図34は口径31.4cmを測る。口唇部は扁平を呈し、先が爪形状を呈する筧状工具による押し引き文を施文するが不明瞭である。肥厚帯には同様な工具による押し引き文を3段同一方向に施文している。頸部は山形に斜位沈線を施すが施文が浅く不明瞭である。図40は口径16cmを測る。口唇部は丸味を帯びる。肥厚帯は先細の爪形状を呈する筧状工具による押し引き文を交互に向きを変えて6条施文している。内面は刷毛目調整痕が残る。

II種B

第76図36~39の4点である。図36は口径25.6cmを測る。口縁部はやや外反し、口唇部は舌状を呈する。口縁部に羽状の斜位沈線をめぐらし、肥厚帯下にも羽状の斜沈線で口縁部とは逆方向に施文している。図37は口径16.9cmで、口唇部は扁平である。肥厚帯は鋸歯文をめぐらし、鋸歯の隙間に筧状工具による刺突文が軽く施されている。内面は刷毛目調整痕が残る。図38は口径30.5cmを測る。肥厚帯状に凹線をめぐらし、先の尖った筧状工具で頸部と口唇部に刺突で施文している。内面は筧状工具による器面調整が残る。図39は口径31cmを測る。口唇部は沈線をめぐらし、口縁部外面は横位の細沈線をめぐらした後に、斜位沈線を施文、更に口唇部外面に斜位の短沈線をめぐらしている。内面は横位に4条の細沈線をめぐらしたの後に、斜位の短沈線をめぐらしている。

表15 面縄前庭式・仲泊式土器観察一覧①

国図番号	土器形式	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第71区 ・ 区 90	1	前壺	明	A		文:斜沈。質:砂>泥。表:灰黄。裏:灰黄。混種:石英・雲母。混大:3。混量:中。焼:良。調:表裏・ナデ丁草。厚:5mm。積痕:有。他:3条1組。	E-19第4層(仮)下台021113-2
	2	前壺	口	B1a		口:丸。文:横凸2・弧刻・縦沈。V字・縦沈。質:砂質。表:明赤褐。裏:赤茶。混種:白色粒・石英。混大:2。混量:少。焼:良。調:表・ナデ丁草・裏:刷毛目。厚:8mm。積痕:有。他:5~8条単位。	E-20一柵炉跡8台030819-11
	3	前壺	口			口:丸。文:横凸1+弧刻・斜沈。質:砂>泥。表:淡橙。裏:淡橙。混種:石英・混大粗。混量:多。焼:中。厚:4mm。積痕:有。積幅:0.5、0.4、0.3、0.4(cm)。他:4~5条1組・裏面粘土帯擦合部未調整・密に積上。	E-20探検E-20第4層(仮)下。E-20貝集北西掘下。E-20貝集北西台030218-1.030714-6.040903-1.040929-9
	4	前壺	口	B1b		口:舌。文:横凸2・弧刻・斜沈。質:砂<泥。表:淡茶。裏:暗赤。混種:チャート。混大:細。混量:少。焼:中。調:表裏・ナデ。厚:5mm。積痕:有。他:5条1組。	2トレ淡灰混台020307-1
	5	前壺	口	B1b		口:舌。文:横凸2・弧刻・斜沈。質:砂質。表:明黄。裏:明黄。混種:石英。混大:2。混量:多。焼:良。調:表裏・ナデ。厚:5mm。他:6条1組。	E-20第4層(仮)西掘下台030124-12
	6	前壺	口	B1a		口:舌。文:横凸2・弧刻・縦凸1+弧。質:砂質。表:明灰。裏:明灰。混種:黄。混大:3。混量:多。焼:中。調:表裏・ナデ。厚:4mm。	E-20第4層(仮)下西台021210-10
	7	前壺	口			口:舌。文:横凸2・弧刻・斜沈。質:砂>泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英。混大:1。混量:少。焼:量。調:表裏・ナデ。厚:4mm。他:4条1組。	B-23盛土(頂)台040960-7
	8	前壺	口	B1e		口:丸。文:横凸1+又斜・縦沈。質:砂質。表:暗黒。裏:暗黒。混種:石英・黒・黄。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:表裏・ナデ。厚:5mm。他:5条1組。	4トレ黒褐マン混4トレ台020319-2.021807-2
	9	前壺	口	B1b		口:丸。文:横斜凸2・弧刻・斜沈。質:中。表:淡橙。裏:淡橙。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:表裏・ナデ。厚:7mm。積痕:有。他:口唇部に刻目・3条1組。	E-20第5層(仮)東骨集近E-20壁障台030703-6.030313-3
	10	前壺	口	B1a		口:丸。文:表・斜凸2・弧刻・縦沈。裏・横凸1+弧刻。質:砂質。表:淡赤。裏:淡赤。混種:砂粒・チャート。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:表裏・ナデ。厚:6mm。他:3条1組。	C-19-20北トレ第4層(仮)東台040729-1
	11	前壺	口	B1f		口:丸。文:横凸3+ハ。質:中。表:淡赤。裏:淡赤。混種:石英・チャート。混大:2。混量:中。焼:良。調:裏・ハラナデ?。厚:5mm。積痕:有。他:2・3段目の凸背交差。	E-20第5層(仮)平掘西。E-20第4層(仮)西。E-20 D216台031107-1.021106-3.021218-30
	12	前壺	胴	A		文:波凸1+ハ・斜沈。質:砂>泥。表:淡茶。裏:淡灰。混種:石英・黄。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表・ナデ丁草。厚:7mm。他:長距離か。	E-20第4層(仮)台020206-1
	13	前壺	口	B第4層		口:舌。文:ハ斜沈。質:砂>泥。表:明橙。裏:明橙。混種:石英・砂・石。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表裏・ナデ。厚:7mm。他:口唇部にハ状・3~4条1組。	E-20第4層(仮)西台021107-7
	14	前壺	口	B1a		口:丸。文:横凸2・弧刻・縦凸1+弧刻・斜沈。質:砂<泥。表:暗茶。裏:暗茶。混種:石英。混大:1。混量:多。焼:中。調:表裏・刷毛目状。厚:9mm。積痕:有。他:口唇部弧刻・4条1組。	F-19東トレ第4層(仮)掘下。F-19東トレ埋以第4層(仮)南台040816-17.040809-19
	15	前壺	胴	B1e		文:横凸1・縦凸(2)+又斜・縦沈。質:砂<泥。表:暗茶。裏:暗灰。混種:石英。混大:3。混量:中。焼:良。調:表・ナデ・裏:刷毛目か。厚:6mm。他:縦凸帯1つ脱落・横凸間19mm・3条1組。	C-19-20南掘台040713-12
	16	前壺	胴	B1e		文:横凸1・縦凸2+又斜・縦沈。質:砂<泥。表:明茶。裏:暗茶。混種:石英。混大:2。混量:中。焼:悪。調:裏・刷毛目状。厚:6mm。積痕:有。他:縦凸間20mm。	C-19-20台全掘台040913-8
	17	前壺	口	B1d		口:丸。文:横凸1+又斜・斜沈。質:砂<泥。表:淡茶。裏:淡茶。混種:光・黄雲母。混大:粗。混量:中。焼:良。調:表・刷毛目か・裏・ナデ。厚:6mm。積痕:有。他:8条1組。	ATP-20北黒砂台040109-29
	18	前壺	深鉢	口	Ia	口:丸。文:横凸2・弧刻・斜沈・縦沈。質:中。表:明橙。裏:淡黄。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表・ナデ・裏:刷毛目か。厚:6~11条1組。	3トレ中央如D4.3トレ中央如No4台020318-1.020305-20
	19	前壺	口	B1a		口:丸。文:横凸2・弧刻・斜沈・縦沈。質:砂>泥。表:濃赤。裏:暗赤。混種:石英・チャート。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:裏・刷毛目か。厚:5mm。他:口唇部に刻目・5~8条1組。	E-19 D上げ341。E-19-20南壁崩除台021121-40.050912-11
20	前壺	深鉢	口	Ia	口:丸。文:横凸2・弧刻・斜沈。質:砂>泥。表:淡茶。裏:赤褐。混種:石英・チャート。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表・刷毛目か・裏・ナデ。厚:5mm。積痕:有。他:4~7条1組。	3トレ中央如D27台020318-17	
21	前壺	口	B1d		口:丸。文:横凸1+又斜・斜沈。質:砂<泥。表:淡灰。裏:淡黄。混種:石英・黄。混大:3。混量:多。焼:良。調:表裏・ナデ丁草。厚:7mm。他:6~7条1組。	F-19東トレ第5層(仮)灰研台041116-38	

<凡例>「観察事項」の項目□: □(輪郭の形状)。文:(文様)。質:(砂質・泥質)。表:(色)。裏:(色)。混種:(混入物の種類)。混量:(混入量)。混大:(混入物の大きさ)。焼:(焼成)。調:(器面調整)。厚:(器厚)。他:(その他など)。「地区・台帳番号」の項目 台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録!

表15 面織前庭式・仲泊式土器観察一覧②

図版番号	土器形式	部位	寸法	観察事項	地区・台帳番号					
72	深鉢	口	22前	I d	口:丸,文:横凸2+又刷,斜沈,質:砂質,表:暗赤,裏:暗黄,混種:光黄裏母,混大:粗,混量:多,燒:良,調:表裏-ナテ,厚:8mm,積底:有,他:8~10条1組。	Iトレ茶碗シルト 台020226-5				
			23前	I c	口:丸,文:横凸2+斜刷,斜沈,質:砂<泥,表:淡灰,裏:淡黄,混種:石英・光黄裏母,混大:粗,混量:多,燒:悪,調:表裏-ナテ,厚:7mm,積底:有,他:6~8条1組。	盛土 台021121-34				
			24前	I a	口:丸,文:横凸2+弧刷,斜沈,質:砂>泥,表:黒,裏:黒褐,混種:石英・砂粒,混大:粗,混量:多,燒:悪,調:表-ナテ,裏:刷毛目か,厚:6mm,積底:有,他:5~8条1組。	E-20ド仰堂103 台021114-1				
			25前	甕	B I a	口:丸,文:横凸2+弧刷,質:中,表:灰黄,裏:淡黄,混種:石英・砂粒・粒,混大:粗,混量:多,燒:中,調:表裏-ナテ,厚:5mm,積底:有,他:口唇部に刻目。	F-19東トレ東壁掃前,表探 台050630-16,030829-1,030722-4			
			26前	深鉢	I b	文:横凸2+刷,質:砂<泥,表:淡赤,裏:淡赤,混種:石英・金雲母,混大:1,混量:中,燒:中,調:表裏-ナテ丁草,厚:6mm,積底:有,他:7条1組。	E-19北壁清溝,E-19北壁清溝 台041005-18,040612-30			
			27中	深鉢	I f	口:舌,文:横凸2+,質:砂質,表:明赤,裏:明赤,混種:石英,混大:粗,混量:多,燒:中,調:表-ナテ・裏:刷毛目状,厚:5mm,積底:有。	F-19東トレ米垣以第4層(飯)南 台040809-19			
			28前	深鉢	I e	口:舌,文:横凸2+又刷,質:砂>泥,表:暗赤,裏:暗赤,混種:石英・砂粒,混大:粗,混量:多,燒:中,厚:7mm,積底:有。	ATP-20黒砂 台040108-24			
			29前	深鉢	I t	口:舌,文:横凸1+刷,斜沈,質:砂<泥,表:暗赤,裏:暗橙,混種:石英・砂粒,混大:1,混量:多,燒:悪,調:表-ナテ・裏:刷毛目+ナテ,厚:7mm,積底:有,他:4条1組。	F-19東トレ崩落 台050892-2			
			30前	深鉢	I l	口:丸,文:表:横凸1+刷,液凸1+刷,裏:横凸1+刷,質:砂>泥,表:暗赤,裏:暗灰,混種:石英,混大:1,混量:多,燒:悪,調:裏-ナテ,厚:5mm。	不明 台不明			
			31中	深鉢	I c	口:角,文:横凸1+斜沈+横沈+斜沈,質:中,表:暗黄,裏:暗黄,混種:裏:混大:粗,混量:中,燒:中,調:表裏-ナテ,厚:5mm,積底:有。	E-20第4層(飯) 台021004-3			
			32中	深鉢	I f	口:丸,文:横凸1+刷,質:泥質,表:淡赤,裏:淡赤,混種:石英,混大:粗,混量:少,燒:中,調:表裏-ナテ,厚:8mm,他:口唇部にハ状2段目凸部剥落。	E-20第4層 台021205-5			
			33前	深鉢	I b	口:丸,文:横凸1+刷,液凸1+刷,質:中,表:暗赤,裏:淡赤,混種:石英,混大:3,混量:多,燒:悪,調:表裏-刷毛目,厚:9mm,積底:有,他:口唇部に刻目。	ATP-20黒土 台040107-24			
			34前	深鉢	I l	口:丸,文:液凸1+刷,斜沈,質:砂質,表:暗赤,裏:暗赤,混種:砂粒,混大:1,混量:多,燒:中,調:裏:刷毛目,厚:5mm,他:口唇部に刻目4~6条1組。	F-19東トレ崩落南壁 台050726-5			
			35前	甕		文:羽状沈,斜沈,質:砂質,表:淡赤,裏:淡赤,混種:石英,混大:2,混量:中,燒:良,調:表:刷毛目+裏-ナテ,厚:5mm,積底:有,他:7~9条1組。	E-19第4層(飯)中央 台020924-18			
			36前	甕	B I c	口:丸,文:横凸1+斜刷,斜沈,質:砂質,表:暗灰,裏:暗灰,混種:石英・黄,混大:粗,混量:多,燒:中,調:表-ナテ丁草,裏:刷毛目,厚:3mm,他:口唇部に刻目・3条1組。	E-20清溝,E-20第4層下・第5層(飯)上東青石集 台040630-21,030801-2			
			37前	甕	B I b	口:角,文:横凸1+刷,液凸1+刷,質:砂<泥,表:明赤,裏:明赤,混種:砂粒+チャート,混大:粗,混量:多,燒:良,調:表:刷毛目+裏-ヘラナテ,厚:6mm,積底:有,他:口唇部に刻目。	F-19東トレ崩落,D-19 3第4層(飯)東庫,台050803-2,050729-1,050914-16			
			38前	底		質:砂>泥,表:暗赤,裏:暗黄,混種:石英・チャート・金雲母,混大:粗,混量:多,燒:中,調:表-ナテ丁草,厚:5mm,他:尖底。	C-19-20第4層(飯)西掘下,C-19-20石集中央庫,台040323-7,040324-15			
			39前	底		質:中,表:淡赤,裏:明赤,混種:石英・チャート,混大:3,混量:多,燒:中,調:表裏-刷毛目,厚:5mm,積底:有,他:尖底。	C-19-20黒黒砂 台040708-12			
			73	深鉢	口	1中	I	口:丸,文:肥厚31mm 凸2+貝殻,質:砂質,表:黄赤,裏:暗黄,混種:石英・砂粒,混大:細,混量:少,燒:良,調:表裏-刷毛目,厚:10mm。	E-19第4層(飯)下,E-20母ヶ石20011a,台021108-12,020925-24	
						2中	I	I:25cm	文:肥厚35mm 凸3+貝殻,斜沈,質:砂>泥,表:明赤,裏:明赤,混種:砂粒,混大:粗,混量:中,燒:中,調:表裏-ナテ,厚:6mm。	H-19壁平掃 台050721-5
						3中	I	I:22cm 高:24.8cm	口:舌,文:肥厚31mm 凸2+貝殻,斜沈,質:砂>泥,表:淡橙,裏:淡黄,混種:砂粒,混大:2,混量:少,燒:良,調:表裏-刷毛目,厚:2mm。	E-20第4層(飯)土城5覆土 台030124-25
						4中	I	I:20.1cm	口:角,文:肥厚12mm 凸1+貝殻,斜沈,質:砂質,表:淡赤,裏:淡赤,混種:石英,混大:粗,混量:中,燒:中,調:表裏-刷毛目,厚:6mm。	ATP-20黒砂 台040115-33
						5中	I	I:23.2cm	口:丸,文:肥厚15mm 凸1+斜沈,質:砂<泥,表:明赤,裏:明赤,混種:砂粒・石英,混大:2,混量:少,燒:良,調:表裏-刷毛目+表-粘土帯接合部明瞭,厚:6mm,積底:有。	C-19-20第4層(飯)黒土 台040519-11
						6中	I	I:21.4cm	口:丸,文:肥厚18mm 凸1+貝殻,斜沈,質:中,表:淡赤,裏:淡赤,混種:石英・チャート,混大:2,混量:中,燒:中,調:表裏-刷毛目,厚:6mm。	E-19第5層(飯)平掃+以南 台031114-1

<凡例>「観察事項」の項目「口」:「口縁部の形状」,文:(文様),質:(砂質・泥質),表:(色),裏:(色),混種:(混入物の種類),混量:(混入量),混大:(混入物の大きさ),燒:(焼成),調:(器面調整),厚:(器厚),他:(その他など)
「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録。

表15 面縄前庭式・仲泊式土器観察一覧③

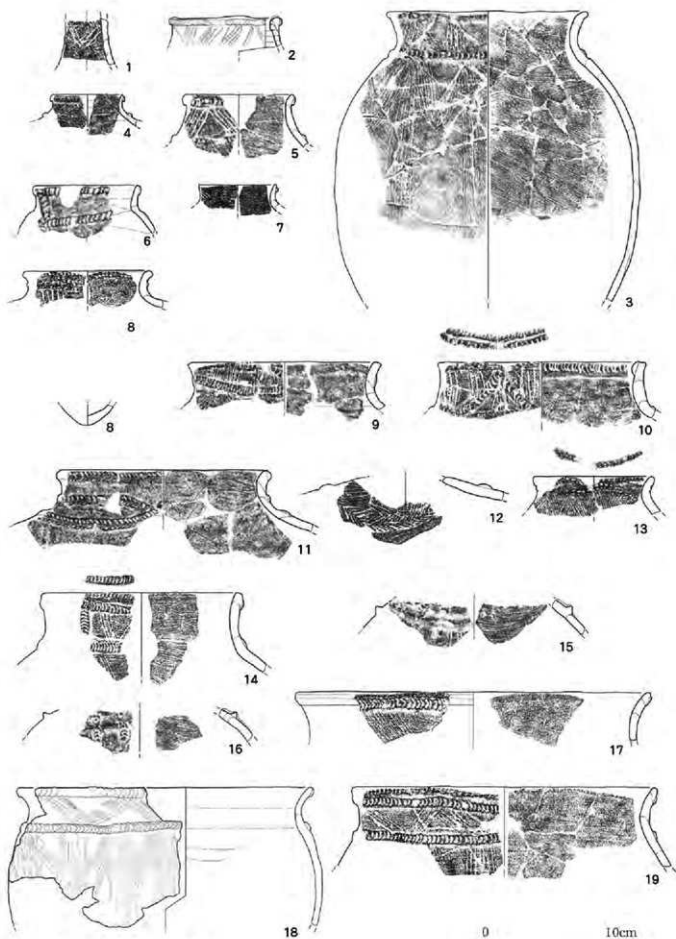
図版番号	土器形式	器形	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号		
73 園・ 図版 92	7	仲系	深鉢	□ I	□:25cm	□:丸・文・肥厚・15mm 凸1・貝殻・斜沈・磁沈・質・砂<泥・表・明赤・裏・明赤・混種・石英・チャート・混大・粗・混量:中・焼:良・調:表裏・刷毛目・裏・押痕・刷毛目・厚:8mm.	E-19第5層(仮)上 台080117-5	
	8	仲系	深鉢	□ I	□:26cm	□:丸・文・肥厚・31mm 凸1・貝殻・質・砂<泥・表・濃赤・裏・赤褐・裏種・砂粒・石英・混大・粗・混量:中・焼:良・調:表裏・刷毛目・厚:6mm.	F-19東トレ第4層(仮)淡灰砂 台041028-28	
	9	仲系	深鉢	□ I	□:23.3cm	□:山・文・肥厚・22mm 凸1・貝殻・斜沈・質・砂>泥・表:明茶・裏:明赤・混種・石英・チャート・混大:粗・混量:多・焼:良・調:表裏・刷毛目・厚:5mm.	C-19第5層白砂清掃 台040513-27	
	10	仲系	深鉢	□ I	□:23.5cm	□:山・文・肥厚・25mm 凸1・貝殻・貝殻・質・砂>泥・表:濃赤・裏:明赤・混種・石英・チャート・混大:粗・混量:多・焼:中・調:表裏・刷毛目・厚:5mm.他:胴部にも貝殻文施文.	C-19・20第4層(仮)黒土・C-19・20清砂・C-19・20第4層(仮)東 台040319-11.040714-24.040702-12	
	11	仲系	深鉢	□ I	□:26cm	□:角・文・肥厚・32mm 凸1・貝殻・斜沈・質:中・表:黒茶燻・裏:暗赤・混種:石英・混大:2.混量:少・焼:良・調:表裏・刷毛目・厚:5mm.積痕:有.	F-19東トレ崩落・F-19東トレ盛採・F-19東トレ第5層(仮)灰砂 台050802-2.041117-2.041119-30	
	12	仲系	深鉢	□ II		□:カマボコ状・文・肥厚・23mm 斜沈・横沈・質:砂>泥・表:明赤・裏:明赤・混種:石英・チャート・混大:粗・混量:少・焼:良・調:表裏・刷毛目・厚:10mm.	F-19壁平掃 台050630-31	
	13	仲系	深鉢	□	□:14.5cm	□:丸・文・肥厚・19mm 縦凸1・縦沈・斜沈・質:砂<泥・表:黄・裏:黄・混種:石英・チャート・混大:細・混量:少・焼:良・調:表裏・刷毛目・厚:5mm.	5トレI盛採 台020218-6	
	14	仲系	深鉢	□ IA	□:11cm	□:山・文・肥厚・13mm 縦凸1・斜沈・羽状沈・着状沈・質:砂>泥・表:黄灰・裏:灰白・混種:石英・チャート・混大:1.混量:多・焼:良・調:表裏・刷毛目・裏:ナテ・厚:4mm.他:山頂部刺突・口唇部沈線.	E-20第4層(仮)D141 台021105-28	
	15	仲系	深鉢	□ IA	□:9.8cm	□:山・文・横凸1後縦凸1・横刺突後縦刺突・斜沈・質:中・表:黄灰・裏:暗赤・混種:チャート・混大:2.混量:少・焼:良・調:表裏・ナテ・厚:8mm.	C-19・20第4層仮中央・東南ナ 台040312-24	
	16	仲系	深鉢	□ IA	□:7.7cm	文・肥厚・20mm 横凸1・斜沈・磁沈・質:砂質・表:明橙・裏:明橙・混種:石英・混大:粗・混量:多・焼:中・調:裏・ナテ・厚:5mm.他:口唇部に刺目.	ATP-20黒土上・ATP-20黒土・ATP-20 台031217-52.040107-23.031222-29	
	17	仲系	明			文・横凸1・貝殻・斜沈・質:中・表:濃赤・裏:濃赤・混種:石英・チャート・混大:粗・混量:多・焼:良・調:表裏・ナテ・厚:6mm.	E-19第4層(仮)直上・西陸近 台020920-4	
	74 園	18	仲系	深鉢	□ I ?	□:20cm	□:角・文・肥厚・11mm 凸1・斜沈・羽状沈・質:砂<泥・表:黄灰・裏:黄灰・混種:石英・金割母・混大:1.混量:中・焼:良・調:表裏・ナテ・裏・ヘラナカ・厚:6mm.積痕:有.	F-19東トレ第5層(仮)灰砂 台041126-1
18 版	19	土器	深鉢	□ II	□:15.5cm	□:山・文・肥厚・9mm 凸1・斜沈・質:砂<泥・表:明茶・裏:明茶・混種:石英・混大:3.混量:多・焼:良・調:表裏・刷毛目・厚:9mm.他:山頂部に刺.	E-19第5層(仮)上 台030117-5	
	20	仲系	深鉢	□ IA	□:14cm	□:角・文・肥厚・12mm 凸1・斜沈・質:中・表:明茶・裏:明茶・混種:石英・混大:3.混量:中・焼:良・調:表裏・刷毛目・厚:7mm.積痕:有.	2トレ盛採上 台020212-12	
	21	仲系	深鉢	□ II	□:17.6cm	□:山・文・肥厚・24mm 凸1・斜沈・斜沈・質:砂>泥・表:灰黄・裏:明黄灰・混種:砂粒・石英・混大:粗・混量:多・焼:良・調:表裏・刷毛目・ヘラナカ・厚:5mm.他:山頂部凹文.	F-19東トレ東崖崩落 台050723-4	
	22	仲系	深鉢	□ II	□:20.2cm	□:丸・文・肥厚・20mm 凸1・斜沈・羽状沈・質:中・表:淡橙・裏:淡橙・混種:石英・混大:1.混量:中・焼:良・調:表裏・刷毛目・厚:7mm.積痕:有.	E-19北西石集 E-19第5層(仮)上 台030115-22.030117-5	
	23	仲系	深鉢	□ II		□:角・文・羽状沈・質:砂質・表:淡橙・裏:淡橙・混種:石英・混大:粗・混量:中・焼:中・調:裏・刷毛目・厚:10mm.積痕:有.他:口唇部刺目.	H-G-19第5層(仮)石集周 台041117-9	
	24	仲系	深鉢	□ II	□:28cm	□:山・文・肥厚・31mm 凸1・羽状沈・質:砂>泥・表:暗茶・裏:明茶・混種:砂粒・石英・混大:3.混量:多・焼:良・調:表裏・ナテ・厚:10mm.	ATP-20 台031222-29	
	25	土器	深鉢	□ II	□:11.6cm	□:山・文・横肥厚・15mm 羽状沈・刺突状沈・質:砂>泥・表:暗茶・裏:暗茶・混種:砂粒・石英・混大:粗・混量:多・焼:良・調:表裏・ナテ・厚:5mm.積痕:有.他:山頂部二文.	E-19溝上付7 台021211-19	
	26	仲系	深鉢	□ II	□:27.5cm	□:丸・文・肥厚・43mm 縦凸1・羽状沈・質:中・表:黄灰・裏:赤褐・混種:砂粒・混大:粗・混量:少・焼:良・調:表裏・刷毛目・厚:10mm.積痕:有.	E-19溝10.E-19北・石集 台021212.8.030114-5	
	75 園・ 図版 94	27	仲系	深鉢	□ II	□:26cm	□:山・方彫・文・肥厚・18mm 押し・羽状沈・質:砂>泥・表:黄灰・裏:黄灰・混種:砂粒・石英・混大:粗・混量:多・焼:良・調:表裏・ナテ・裏・刷毛目・厚:5mm.他:押引3条.	F-19東トレ第4層(仮)南淡茶掘 台040723-12

<凡例>「観察事項」の項目□:□(口縁部の形態)、文:(文様)、質:(砂質・泥質)、表:(色)、裏:(色)、混種:(混入物の種類)、混量:(混入量)、混大:(混入物の大きさ)、焼:(焼成)、調:(器面調整)、厚:(器厚)、他:(その他など)
「地区・台帳番号」の項目 台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録

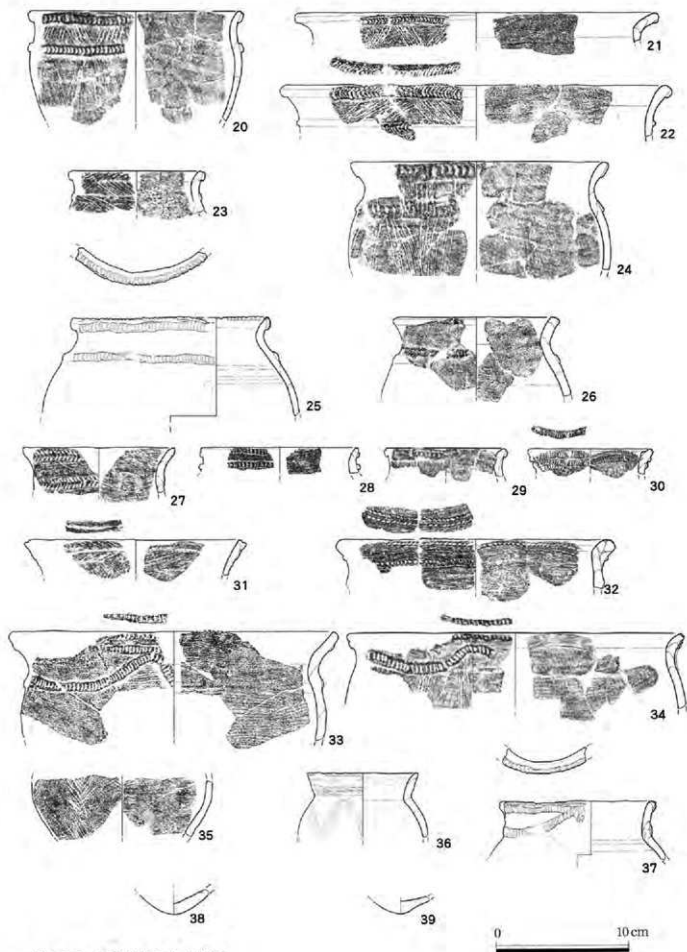
表15 面鏡前庭式・仲泊式土器観察一覧④

国版番号	土器形式	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
75 国 版	28 仲 鉢	口	I B	□:25.6cm	口:山・方形,文:肥厚-17mm 押引・斜沈,質:中,表:明赤,裏:明黄,混種:砂粒,混大:粗,混量:中,燒:中,調:表・ナゲ丁草・裏・刷毛目,厚:12mm,他:口唇引18条。	E-19溝9,E-19第5層(仮)上,E-20第4層(仮)直上 台021202-9,030117-5,020910-1
	29 仲 鉢	口	I B	□:17.2cm	口:山・方形,文:肥厚-20~37mm 押引,質:砂>泥,表:濃赤,裏:濃赤,混種:砂粒・石英,混大:粗,混量:多,燒:良,調:表・刷毛目7・裏・ナゲ,厚:5mm,他:口唇と口縁部裏に1条ずつ押引・口縁押引4条。	C-19-20東清掃 台040630-1
	30 仲 鉢	口	I B	□:22.8cm	口:山・方形,文:肥厚-40mm 押引,質:砂質,表:灰黄,裏:明黄,混種:石英・金雲母,混大:粗,混量:多,燒:良,調:表裏・ナゲ,厚:10mm,他:口唇部に押引・山頂部に縦押引3条・口縁部押引3条・横溝1条。	F-19東トレ第4層(仮)波湯砂 台041029-29
	31 仲 鉢	口	I B	□:15.7cm	口:舌,文:肥厚-22mm 押引羽状沈,質:砂質,表:黒,裏:赤褐,混種:砂粒・石英・チャート,混大:粗,混量:多,燒:良,調:表裏・ナゲ,厚:10mm。	E-22黄茶湯土 台040106-25
	32 仲 鉢	口	II A	□:27cm	口:丸,文:肥厚-22mm 凸1・押引・圓筒状沈,質:中,表:明赤,裏:黄褐,混種:石英,混大:粗,混量:中,燒:良,調:表裏・刷毛目後ナゲ,厚:6mm。	E-20第4層(仮) F379 台030225-21
	33 仲 鉢	口	II A	□:31.4cm	口:角,文:肥厚-22mm 押引・筒筒状沈,質:中,表:明赤,裏:明赤,混種:石英・チャート・金,混大:粗,混量:中,燒:良,調:表裏・刷毛目後ナゲ,厚:6mm,他:口唇部縦押引。	H-C-19マン混 台041118-5
	34 仲 鉢	口	II A	□:25.4cm	口:山,文:肥厚-16mm 凸1・押引・斜沈,質:中,表:暗赤,裏:明赤,混種:石英・チャート・白,混大:2,混量:多,燒:良,調:表裏・刷毛目,厚:8mm,他:口唇部押引。	F-19東トレ清掃 台040914-5
	35 仲 鉢	口	I B	□:25.6cm	口:山,文:羽状沈・横沈・羽状沈,質:砂>泥,表:灰黄,裏:明黄,混種:石英・チャート,混大:粗,混量:中,燒:中,調:表裏・ナゲ,厚:6mm。	H-G-19溝5層(仮)灰砂 台041125-15
	36 仲 鉢	口	II B	□:16.9cm	口:角,文:扁筒状沈・刺突,質:砂>泥,表:明赤褐,裏:明赤,混種:砂粒・石英,混大:細,混量:少,燒:中,調:表・ナゲ丁草・裏・刷毛目後ナゲ,厚:10mm。	E-20盛土フルイ,E-20第4層(仮)西 台021105-8,021031-3
	37 仲 鉢	口	II B	□:30.5cm	口:丸,文:肥厚-15mm 凸1・凹文・刺突・斜沈,質:砂>泥,表:暗黄,裏:暗黄,混種:砂粒・石英,混大:1,混量:中,燒:良,調:表裏・刷毛目・裏・刷毛目・ヘラナゲ,厚:10mm,他:口唇部刺突。	C-19-20第4層(仮)黒土,C-19-20第4層東掘上,C-19-20第4層東掘下 台040319-11,040330-39,040730-23
38 仲 鉢	口	II B	□:31cm	口:丸,文:扁筒状沈・斜沈,質:砂>泥,表:明赤,裏:明黄,混種:石英,混大:1,混量:中,燒:中,調:表裏・ナゲ丁草,厚:7mm,他:口唇部沈凹・口縁部表横沈・斜沈。	D-19第5層(仮)一括 台040109-8	
39 仲 鉢	口	II B	□:16cm	口:丸,文:押引,質:砂>泥,表:黒灰,裏:赤褐,混種:石英,混大:細,混量:少,燒:良,調:表裏・刷毛目,厚:9mm,横溝:有,他:押引18条。	F-19東トレ第4層(仮)波湯砂,F-19東トレ第4層(仮)北,F-19東トレ木理土 台040922-1,040728-11,040622-7	
76 国 版	40 前	口	II A	□:13.9cm	口:角,文:横凸2-割,質:砂>泥,表:赤褐,裏:赤褐,混種:石英,混大:粗,混量:多,燒:悪,調:表・刷毛目・裏・ナゲ,厚:7mm,他:口唇部に刺目。	E-19 F1,F2341, E-20第4層 D272土坑6 台021121-40,030124-67
	41 前	口			口:角,文:横凸1・弧形割,質:砂質,表:淡赤,裏:淡赤,混種:石英,混大:2,混量:中,燒:悪,調:表・ナゲ・裏・刷毛目,厚:5mm,他:口唇部に刺目。	E-20第4層(仮)西 台021107
95 国 版	42 前	口			口:丸,文:波状割,質:砂質,表:茶褐,裏:茶褐,混種:砂粒・石英,混大:3,混量:中,燒:悪,調:表裏・ナゲ,厚:6mm,他:口唇部に刺目。	E-20第4層下東 台021210-4
	43 前	頸			文:曲凸1・割斜沈,質:泥質,表:暗赤,裏:暗赤,混種:石英・チャート,混大:粗,混量:多,燒:悪,調:表裏・刷毛目後ナゲ,厚:5mm。	盛探 台030905-5
44 前	口			口:角,文:短筒横凸4-ハ斜沈,質:砂質,表:暗赤,裏:暗黄,混種:砂粒・石英,混大:2,混量:多,燒:中,調:表・ヨコナゲ,厚:7mm。	E-18南 台030902-16	
45 仲	口		□:20.5cm	口:丸,文:横凸1・質:砂>泥,表:明茶褐,裏:明茶褐,混種:砂粒・石英,混大:2,混量:中,燒:中,調:表裏・ナゲ,厚:8mm,他:口唇部にハ状。	1トレ盛探 台020212-1	
46 仲	口			口:角,文:肥厚-10mm 肥厚部凹文後押引・斜沈,質:砂>泥,表:暗赤,裏:暗赤,混種:砂粒・石英,混大:2,混量:中,燒:中,調:表裏・刷毛目,厚:6~8mm,他:口唇部押引。	盛探 台030120-4	
47 前	明			文:弧形・縦沈,質:中,表:暗黒褐,裏:暗茶褐,混種:石英,混大:2,混量:中,燒:良,調:表裏・ヘラナゲか,厚:6mm。	E-20第4層(仮) F360 台030225-21	
48 前	底			質:泥質,表:暗茶褐,裏:暗灰,混種:石英,混大:2,混量:少,燒:良,調:表・ナゲ・裏・刷毛目,厚:6mm,他:乳房状。	ATP-20黒砂 台040106-26	
49 前	底			口:丸,質:砂質,表:明橙,裏:明灰,混種:黄・石英,混大:1,混量:少,燒:良,調:表裏・刷毛目後エビナゲ丁草,厚:5mm,他:尖底。	2トレ淡茶湯 台020306-9	
50 底				質:砂>泥,表:明橙,裏:明橙,混種:砂粒・石英,混大:3,混量:少,燒:中,調:表・刷毛目後ナゲ,厚:7mm,他:尖底。	E-19第5層南西 台030917-14	
51 底				口:縦沈,質:中,表:明橙,裏:暗灰,混種:砂粒,混大:細,混量:中,燒:良,調:表裏・刷毛目後ナゲ,厚:8mm,他:尖底。	E-20第4層(仮)西 台030207-6	

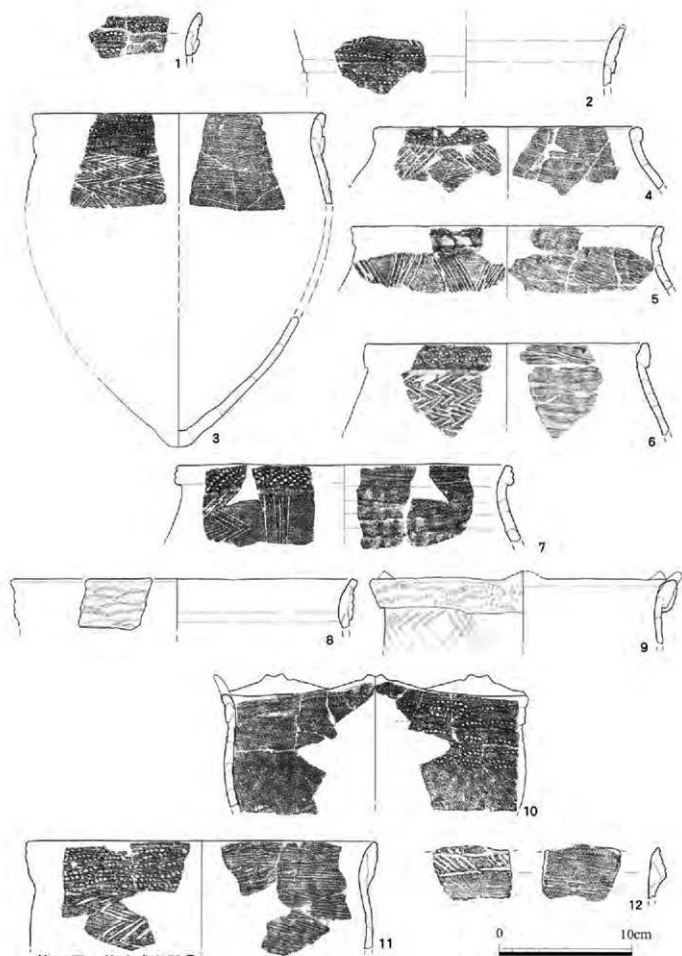
<凡例>「観察事項」の項目(口):口縁部の形態、文:(文様)、質:(砂質・泥質)、表:(色)、裏:(色)、混種:(混入物の種類)、混量:(混入量)、混大:(混入物の大きさ)、燒:(焼成)、調:(器面調整)、厚:(器厚)、他:(その他など)
「地区・台帳番号」の項目 台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録



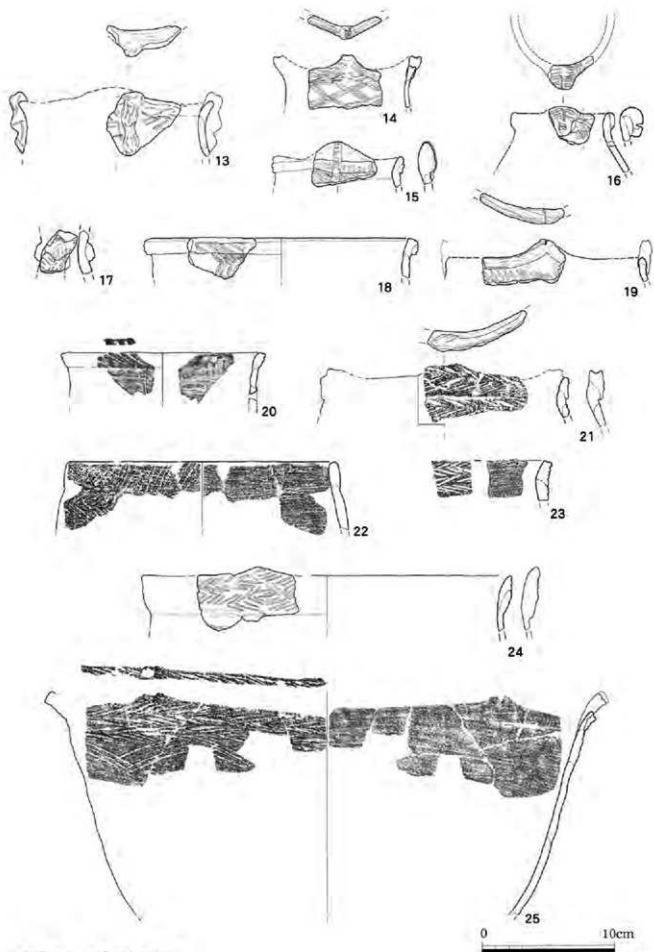
第71圖 面繩前庭式土器①



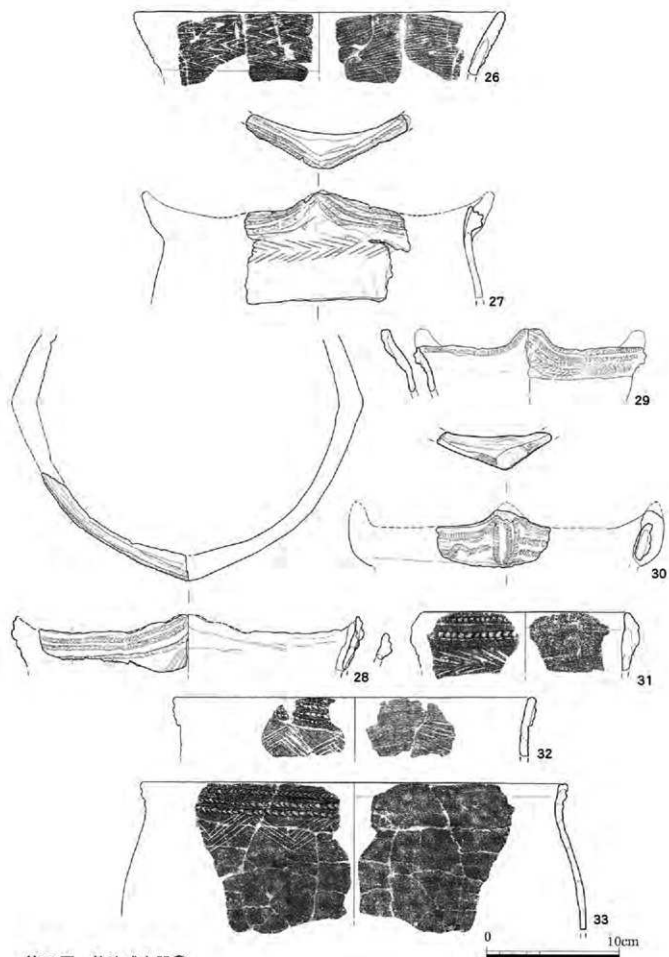
第72図 面縄前庭式土器②



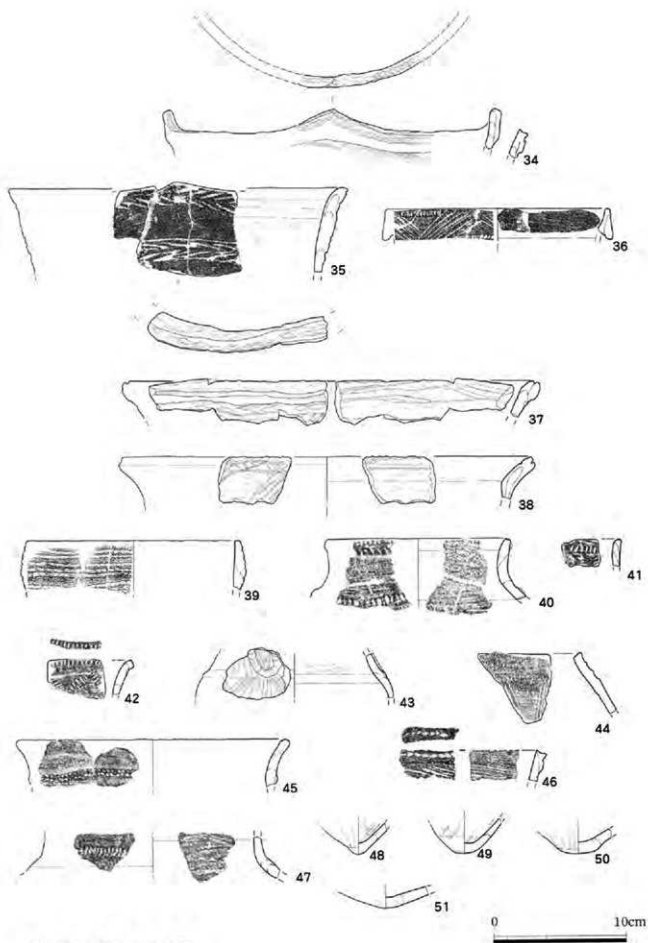
第73図 仲泊式土器①



第74図 仲泊式土器②



第75図 仲泊式土器③



第76图 仲泊式土器④

5) 面縄東洞式土器

当該期の中で最も多く出土し、得られた器種は深鉢形・壺形の2種類である。深鉢形が主体をなし、壺形は2点の出土であった。器種別に略記する。

・壺形

第78図33・34の2点である。同図33は胴径3cmを測る。横位凸帯をめぐらし、凸帯上は先端が針のように尖った篋状工具で刺突し、深鉢形で見られる段を有した文様構図である。同図34は口縁部資料で、長軸の両面が片口注口を呈し、7.8cmを測る。短軸は4.5cmを測る。頸部には横位と縦位の凸帯が貼り付けられ前者は両サイドから口縁部に向かい、後者は東の頸部より片口注口に向かい注口の下部で結合する。口縁部の肥厚部及び全ての凸帯には先端の尖った篋状工具による刺突文を刺突している。特に口唇は細かい。

・深鉢形

深鉢形は器形の特徴からⅠ～Ⅳの4種類に細分した。

Ⅰ種：胴部が膨らみ頸部でしまり、口縁部が開くもの。

Ⅱ種：底部から口縁部まではほぼ直線的で、口縁部が直口若しくは緩やかに開くもの。

Ⅲ種：胴部が膨らみ頸部でやや縮まり、そのまま口縁部へいたるもの。

更に文様の構図からa～gの7種類に再細分を行った。

aグループ：篋状工具による押し引き文で曲線文が見られるもの。

bグループ：篋状工具による押し引き文で横位文のみのもの。

cグループ：篋状工具による押し引き文で横位文が途中で段を設けて施文するもの。

dグループ：篋状工具による押し引き文で籠編み状を施文するもの。

eグループ：篋状工具による押し引き文で横位文と籠編み状の文様を組み合わせるもの。

fグループ：篋状工具による押し引き文で横位文と斜位文または縦位短沈線施文するもの。

Ⅰ種

第77図1～5・7・9第80図67・68の9点である。文様の特徴は4種類であった。

aグループ

第77図1は口径24.2cm、口唇部は扁平である。先端が弧状をなす篋状工具で押し引き文を細かく連続して施文している。口縁部肥厚帯に上段は横位から曲線に変化して袋状の曲線文を施し、下段は横位文を施文している。内面は横ナデが見られる。

cグループ

図2～5・7の7点である。文様はaグループと同様な篋状工具による押し引き文で施文し、横位文から段に変化するものと、横位文と段がそれぞれ単独で施文されて組み合わせるものが見られる。図2・7の2点は後者のタイプで肥厚帯の上下に横位文をめぐらしその間に段を有する文様を施文している。図2は口径18.6cm、口唇部は扁平である。図7は口径10cm、口唇部扁平である。図2に比して段は曲線的で接する様に意識し、籠の編み目の感がする。図3～5は前者のタイプで横位文から段に変化するもので、図2に比して文様が全体的に施されている。図3は口径22.2cm、口

唇部は扁平である。図4は口径20cm、口唇部は丸味を帯びる。内面は条痕の器面調整が明瞭に残る。図5は口径27.4cm、口唇部は丸味を帯びる。内面は器面調整痕が残る。

dグループ

第81図67・68の2点である。図67は図上復元を試みた資料である。口唇部は丸味を帯び、口径16.3cm、胴径12.6cmを測る。推算器高約15.4cm、底径は約5.7cmと思われる。肥厚帯の上下に横位文を巡らし、途中で上下が交り逆になるものである。図68は山形口縁で、口唇部は扁平を呈する。口径20.5cmを測る。

fグループ

第77図9の1点で口径27.2cm、口唇部はやや扁平を呈する。二又状の篋による押し引きの横位文とそれを区切るように斜位の短沈線を施文している。

II種

第77図8・10～17・第78図18～31の23点で最も多い。

aグループ

第77図8・10・11・14第77図22～24・27～29・第79図58の12点である。図8は山形口縁で、口唇部は扁平を呈する。口径11.4cmを測る。口縁の縁と肥厚帯下は横位文でその間は曲線文で波を表現しているように見える。小さい篋による刺突を連続している。図10と第77図29は二又状の篋による押し引き文を連続して施文するものである。両資料とも口唇部は扁平を呈し、図10は口径15.5cmを測る。内面は刷毛目調整痕が施され、肥厚帯下部分はその上から指指痕が残る。図11の口唇部はやや扁平を呈し、口径13.3cmを測る。二又状の篋による刺突を強弱をつけて連続して施文し、Uターンの曲線文を2条施文している。内面は肥厚帯下に指指痕が残る。図14は横位文が袋状の曲線文を施文するもので、文様の構図は図1に類似する。図24は上下に曲線文を連続して巡らしている。縦の曲線文は本資料のみである。図22・28は横位文からUターンする曲線文で、図28は角張ったUターンも組み合う資料である。図22の口唇部は扁平を呈し、口径は22.4cmを測る。外面胴部及び内面は刷毛目調整痕が残る。図23は横位文と曲線文が組み合わされている。口唇部は舌状をていし、口径17.2cmを測る。図28の口唇部はやや丸味を帯びる。内外面とも横ナブが残る。図27は先の尖った篋状工具による押し引き文で数字の「2」状に施文して単独とし、それを巡らしている。口唇部はやや扁平状を呈し、口径18.9cmを測る。図58の口唇部は舌状を呈する。扁平な篋状工具による押し引きによる曲線文を施文している。

bグループ

第77図15・17・第78図25・26の4点である。図15・17は先がやや尖った篋状工具による押し引き文で図15は3段横位に巡らしている。口唇部は舌状を呈し、口径20.6cmを測る。内面は刷毛目調整の後にナゲ調整を行っている。図17は先細の弧状を呈する篋状工具による刺突を連続して施文し、口唇部も同様に施文している。口唇部は扁平を呈している。仲泊式土器若しくは面縄前庭式土器に見られる凸帯に施文される要素をもつ資料である。図25・26の横位の単線は一単位毎に向きを逆にして施文し、3段巡らしている。図25内外面とも刷毛目が見られ、内面の肥厚帯中位と下位に指指痕が残る。口唇部は丸味を帯び、口径は30.4cmを測る。図26はやや丸味を帯びる。口径15.2cmを測る。

cグループ

第78図30・31の2点である。先が尖った篋状工具による押し引きで横位文を施文し、途中で段を設けている。図30の口唇部はやや丸味を帯びる。口径26.8cmを測る。内外面とも刷毛目調整痕が僅かに残る。図31の口唇部は丸味を帯びる。口径19.2cmを測る。外面の肥厚帯下に刷毛目が僅かに残る。口縁部に外面より直径5mmの孔が穿たれている。

dグループ

第77図12・第78図18・19・第79図52・第80図61の5点である。図12の口唇部は丸味を帯びる。二又状の篋による押し引き文で曲線文が交わる。内面は篋状工具による器面調整が残る。図18の口唇部はやや扁平である。二又状の篋による押し引き文は強く施文している。曲線文は交わるのではなく接する直前で止めている。図19の口唇部は丸味を帯びる。二又状の篋による押し引き文は弱い曲線文が交わる。内面に刷毛目調整痕が見られ、口縁部は横位、頸部は縦位に見られる。図52は口唇部は扁平である。曲線文を交えている。図61の口唇部はやや丸味を帯び、刺突文を巡らしている。口径10cmを測る。内面横ナデが残る。

fグループ

第77図13・第78図21の2点である。図13の肥厚帯は刷毛目調整痕を行った後に施文している。文様は肥厚帯下の横位文を先に施文し、その後、口縁部より肥厚帯下に向かって斜位に施文している。口唇部は扁平を呈し、刻み目の刺突文を施文している。図21は先の尖った篋状工具による刺突文を口縁部は横位文を巡らし、その下位より肥厚帯下に向かって斜位に施文している。口唇部は舌状を呈する。

Ⅲ種

胴部の最大径が口縁部よりも大きいのが特徴で文様はb・c・dの3種類確認された。

第77図6・16・第78図20・第78図48の4点である。図6は口径19cm、胴径21.5cmを測る。口唇部は扁平を呈する。文様はcグループに属する。篋状工具による押し引き文を横位から2段段差を設けて施文している。図16の口唇部は扁平を呈する。文様は口縁部肥厚帯に押し引きの横位文が2段向きを変えて施文している。図20・48の文様はdグループに属する。図20の口唇部は扁平を呈し、刻み目の刺突文を施文している。内面は横ナデが見られる。図48は口唇部は扁平を呈し、口径8.4cmを測る。

・底部資料

面縄東洞式土器の底部であるが、壺形か深鉢形は不明である。第78図36・37の2点である。図36は底径7.5cmで、長楕円形を呈する。底部よりくびれてハの字状に開く。底部外面に先の尖った小さい篋による押し引きで横位に2段巡らしている。上下の施文方向は逆になる。外底も同様の施文具で文様を施す。構図は図面を見ると上下対称となるもので、あたかも、果実を割り種がある状態をモチーフにしたかのようである。図37は底径6cmを測る。底部外面を面取りして高台のような底部である。そこからハの字状に立ち上がる。底部外面は先が弧状を呈する篋状工具による押し引きの横位文を巡らしている。外底も同様の施文具を使用し、縁辺部は押し引き文が一刷する。その中は、長軸方向に横位文を施文し、それを弧文で挟んでいる。

6) 嘉徳式土器

嘉徳式土器は鹿児島県瀬戸内町嘉徳遺跡出土の土器を標識としている。総数210点出土し、得られた器種は全て深鉢形である。分類は文様の特徴から2種類に分類した。

I種：押し引き文と沈線文を組み合わせたもので、文様構図は籠目と羽状又は綾杉がみられ、嘉徳I式土器とされるもので前者をa、後者をbに細分した。

II種：施描きによる沈線文を主体とし羽状または綾杉文などを施文する嘉徳II式土器

I種 a

第78図32・第79図51・53の3点である。先の尖った甕による押し引き文で籠の編み目状に施文する。押し引き文は数状1組を沈線図で区画している。図32は山形口縁で、口唇部は扁平で刺突文が巡らされている。口径15.9cmを測る。押し引きは2条1組を沈線で区画して編み目を施文している。図51・53は3条1組を沈線で区画して籠の編み目を施文している。口唇部は扁平で図51は刻み目状に、図53は刺突文が巡らされている。

I種 b

第79図49・第80図56・60の3点である。先が尖った甕若しくは弧状を呈する甕による押し引きの横位文と羽状を施文する。図49の口唇部は扁平を呈する。弧状を呈する文様は2条見られ、一つは口縁部上位に横位に巡らされ、もう一つは緩やかな曲線を描いている。羽状文は弧状と交互に配置されている。図56・60は口縁部は弧状の文様を横位に巡らし、その下位に羽状文を巡らしている。図56の口唇部は扁平で、刺突文が施されている。口径7.3cmを測る。図60の口唇部は扁平で、口径22cmを測る。羽状文は2段施文されている。

II種

第80図59・65・第81図69の3点である。図59・図69は同一個体である。底径は6.4cmを測る。口唇部は欠損する。格子目状の沈線文を施文している。内外面とも横ナデが見られる。図65の口唇部はやや丸味を帯びる。綾杉状の沈線文を施文している。

・胴部資料

第80図63・64の2点である。弧文を横位に数段巡らし、図64は内面にも巡らされている。両資料は嘉徳I式土器か面縄東洞式土器のどちらかに属すると思われる。

7) 市来式土器

市来式土器は鹿児島県日置郡市来町川上宇宮ノ後の市来貝塚出土の土器を標識としている。総数点出土している。本島における1遺跡からの出土数としては最も多い。得られた器種は深鉢形と皿形の2種類である。器種別に略記する。

・皿形

第78図35・第79図39の2点である。両資料とも山形口縁を呈する。図35は口径11.8cmを測る。口唇部外面と口縁下部に粘土を貼り付け、前者は山形をとおり、後者はコーナー部から山形部の口縁

に向かって延び口唇部で結合する。更にコーナー部の外面は下部に横位に短い粘土を貼り付けている。また、コーナーの裏面も両サイドの口縁下部の粘土結合するため粘土を貼り付けている。文様は凸帯部に先が尖った篋状工具による刺突文を連続して施文している。また、内面の口唇部にもやや大きめの先の尖った篋状工具による刺突文を施している。図39は口縁20.7cmを測る。図35に比して大きめのサイズである。凸帯の貼り付け及び文様、施文方法は図35に類似するが、コーナーの横位の粘土帯に施される刺突は3条見られる。また、口縁下部の凸帯が波状を成すのも見られる。

・深鉢形

第79図40・47・50・第80図54・55・57・66の7点である。図40・47は波状口縁を呈する。口縁部の断面は図40が方形状を呈し、図47は三角形状を呈する。文様は弧状を呈する篋状工具による押し引き文と凹線が施文されている。図40は口唇部とその肥厚帯直下の頸部に刺突文が施文されている。また、頸部も弧状の文様が巡らされている。図50は平口縁を呈すると思われる。口縁部断面は三角形状を呈する。縦位短線を横位に連続して巡らしている。

図57は波状口縁を呈すると思われる。口縁部断面は三角形状を呈する。文様は弧状の横位文と沈線が施文されている。図66は平口縁と思われる。刻み目の文様を横位に巡らしている。その横位文の上位に刺突文が施されている。図54・55の器形は市来式土器の要素をもつが、文様が面縄東堂式土器の要素もつものである。図54は肥厚帯に扁平な篋状工具による押し引き文を横位短線を3段施文している。口唇部にも見られる。口縁部は平口縁と思われる。口縁部断面はコの字状を呈する。図55は口縁部と肥厚帯下に先の尖った施文工具による押し引きの横位文を巡らし、その間は横位文から段を設ける文様を巡らしている。コーナーの口唇部に2つの刺突文が施されている。口縁部は波状口縁である。口縁部断面は方形状を呈する。

・底部資料

本期の底部資料は平底であるため一括して扱うこととする。第79図38・41～46・第81図70～74の12点である。図38は脚台となる底部で、脚は欠損している。外面の脚の付け根から外底に向かって斜めに孔が穿たれている。外面は3条1組の押し引きによる籠編み状に施文している。文様から面縄東堂式土器の底部と思われる。類似資料がうるま市の古我地原貝塚より出土している。図41・43・44・第81図72の4点はくびれをもち立ち上がる資料である。底径は図41は5cm、図43は9.8cm、図44は8cm、図72は7.2cmを測る。図42は底部よりほぼ垂直に立ち上がる。底径は8.3cmを測る。図45・4は底部より丸味を帯びながら立ち上がる。図45の底径は6cmを測る。図74の底径は7.6cmを測る。図46・70・71は底部より立ち上がり胴下部で緩やかに開く資料である。図46は底径4cmを測る。図69は底径7.6cmを測る。図71は底径7cmを測る。図73は底部より緩やかに開く資料である。底径8cmを測る。

8) 伊波式土器

伊波式土器は沖縄県石川市（現うるま市）宇伊波の伊波貝塚より出土した土器を標識としている。20数点出土している。得られた器種は深鉢形である。

表16 面縄東洞式・市来式・嘉徳式土器観察一覽①

図版番号	土器形式	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
1	東	深鉢	口	Ia	口:24.2cm	口:角、文:肥厚44mm 曲線状押引弧状、質:砂>泥、表:明赤褐、裏:明赤褐、混種:砂粒・石英、混大:粗、混量:少、燒:良、調:表裏・刷毛目後ナデ、厚:6mm、積痕:有、他:構成・流水。	F-19東トレ清掃、F-19東トレ全清掃、F-19東トレ第4層西掘下、F-19東トレ盛採 台041027-11.040915-15. 040809-12.041116-22
2	東	深鉢	口	Ic	口:18.6cm	口:角、文:有段押引三角状、質:砂<泥、表:明茶、裏:明茶、混種:砂粒・石英、混大:細、混量:少、燒:良、調:表・刷毛目後ナデ・裏・ナデ、厚:6mm、積痕:有、他:流水・I・光・浅。	E-19第4層(仮)D43、E-19 F988、E-17第4層(仮)東 台021105.06.1.021121.40.020800-2
3	東	深鉢	口	Ic	口:22.2cm	口:角、文:肥厚38mm 有段押引弧状、質:砂>泥、表:暗灰褐、裏:暗赤褐、混種:砂粒・石英、混大:S、混量:少、燒:良、調:表裏・刷毛目後ナデ、厚:5mm。	E-19溝10 台021213-8
4	東	深鉢	口	Ic	口:20cm	口:丸、文:肥厚52mm 有段押引弧状、質:泥質、表:明赤褐、裏:明赤褐、混種:石英、混大:粗、混量:少、燒:良、調:表・刷毛目、厚:6mm、積痕:有、他:流水・尖・深。	C-19・20東西集掘掘下、盛土盛採 台040317-12.040618-1
5	東	深鉢	口	Ic	口:27.4cm	口:丸、文:肥厚41mm 有段押引弧状、質:砂質、表:黒黴、裏:赤褐、混種:砂粒・石英、混大:粗、混量:多、燒:良、調:表裏・刷毛目後ナデ、厚:6mm。	ATP-20盛採、ATP-20盛土 台040108-27.040109-16
6	東	深鉢	口	IIIc	口:19cm	口:角、文:肥厚47mm 有段押引弧状、質:泥質、表:明茶、裏:明茶、混種:砂粒・石英・チャート、混大:L、混量:多、燒:良、調:表裏・ナデ、厚:5mm。	C-19・20第4層(仮)黒土、黒砂、中央東・中央・西・中央南黒土 台040227-19.040319-11.040308-10. 040309-17.040311-43.040310-21. 040317-13.040312-32.040702-12
77	東	深鉢	口	Ic	口:10cm	口:角、文:肥厚28mm 有段押引弧状、質:泥質、表:明茶、裏:明茶、混種:砂粒、混大:細、混量:少、燒:良、調:表・刷毛目後ナデ・裏・刷毛目、厚:5mm。	E-20第4層(仮)直上E-20第4層(仮)西 台020910-1.021218-4
8	東	深鉢	口	IIa	口:11.4cm	口:山、文:曲線状押引弧状、質:砂>泥、表:明赤褐、裏:明赤褐、混種:砂粒・石英、混大:2、混量:少、燒:良、調:表裏・ナデ、厚:6mm。	E-19第4層(仮)東E-19第4層(仮) 台020925-12.021107-12
80	東	深鉢	口	II	口:27.2cm	口:角・丸、文:肥厚26mm 横・斜押引弧状、質:砂<泥、表:淡茶、裏:明赤、混種:砂粒・石英・チャート、混大:S、混量:中、燒:良、調:表・刷毛目・裏・ナデ、厚:7mm、他:流水C-丸二又・深。	E-19ド上(7472 台021121-40
96	東	深鉢	口	IIa	口:15.5cm	口:角、文:肥厚30mm 曲線状押引二又、質:砂<泥、表:明茶、裏:暗茶、混種:砂粒、混大:2、混量:少、燒:良、調:表・刷毛目、厚:4mm、他:浅二又・流水。	5トレ淡白茶褐色M混 台020304-28
11	東	深鉢	口	IIa	口:13.3cm	口:角・舌、文:肥厚31mm 曲線状押引二又、質:砂>泥、表:茶赤、裏:暗赤、混種:砂粒・石英、混大:2、混量:中、燒:中、調:表・ナデ、裏・指圧痕残る、厚:4mm、他:流水a1二又・浅・強固有。	不明 台不明
12	東	深鉢	口	II d	口:丸・角、文:龍籠状押引、質:中、表:茶褐、裏:赤褐、混種:石英・チャート、混大:粗、混量:少、燒:良、調:表裏・刷毛目後ナデ、厚:9mm、他:流水J・四角・浅。	E-19北・石集 台050114-5	
13	東	深鉢	口	II f	口:角、文:横・斜押引三角状、質:泥質、表:茶褐、裏:暗赤、混種:砂粒・石英、混大:細、混量:少、燒:良、調:表裏・刷毛目後ナデ、厚:8mm、他:口唇部節目山形・ゆるがた 流水・光・深。	F-19東トレ第4層(仮)南西 台040729-14	
14	東	深鉢	口	II a	口:丸、文:肥厚30mm 曲線状押引弧状、質:砂<泥、表:黒灰、裏:黒灰、混種:砂粒・石英、混大:細、混量:少、燒:良、調:表裏・刷毛目後ナデ、厚:8mm、他:流水I・丸・浅。	E-19北・石集 台030114-5	
15	東	深鉢	口	II b	口:口:20.6cm	口:舌、文:肥厚27mm 横押引弧状、質:砂>泥、表:灰、裏:赤、混種:石英、混大:2、混量:少、燒:良、調:表・ナデ・裏・刷毛目後ナデ、厚:5mm、積痕:有、他:傾・3本・光・深。	C-19・20台合掃 台040913-6
16	東	深鉢	口	III b	口:角、文:肥厚24mm 横押引弧状、質:砂>泥、表:暗茶、裏:暗赤、混種:砂粒・石英、混大:粗、混量:少、燒:良、調:表裏・刷毛目後ナデ、厚:6mm、他:平行・丸・深。	C-19第4層(仮)東壁崩落 台050916-5	
17	東	深鉢	口	II b	口:角、文:横押引弧状、質:砂<泥、表:暗灰、裏:淡赤、混種:石英、混大:L、混量:少、燒:中、調:表裏・ナデ、厚:9mm、他:口唇部節目円滑・尖容か・浅。	E-19第5層(仮)土 台030117-5	

<凡例> 観察事項の項目「口」:口縁部の形態、文:文様、質:(砂質・泥質)、表:(色)、裏:(色)、混種:(混入物の種類)、混量:(混入量)、混大:(混入物の大きさ)、燒:(焼成)、調:(器面調整)、厚:(器厚)、他:(その他など)「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。砂粒は台帳番号はCDに取録。

表16 面縄東洞式・市来式・嘉徳式土器観察一覧②

図版番号	土器形式	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
18	東	深鉢	口	II d		口:角。文:龍編状押引二又。質:砂<泥。表:茶。裏:茶。混種:石英。混大:細。混量:少。焼:良。調:表裏-刷毛目後ナデ。厚:7mm。他:後砂二又深。	E-19南壁崩落台040218-6
						口:丸。文:龍編状押引二又。質:泥質。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:砂粒。混大:粗。混量:少。焼:良。調:表裏-刷毛目後ナデ・裏-刷毛目。厚:5mm。積底:有。他:山形-椅子二又浅。	C-19-20南西石集近掘下台040317-12
20	東	深鉢	口	III d	□:17.4cm	口:角。文:龍編状押引。質:砂<泥。表:黄灰。裏:黄灰。混種:砂粒・石英・金雲母。混大:1。混量:中。焼:中。調:表裏-ナデ丁寧。厚:7mm。積底:有。他:口唇部刻目構成-3D山形。	D-19米軍掘設土D-19第4層(仮)下第5層(仮)上台031128-1.040316-24
						口:舌。文:横<斜押引三角状。質:泥質。表:茶。裏:暗茶。混種:石英。混大:粗。混量:少。焼:良。厚:8mm。他:ローリング受。	F-19北清塚台041028-19
22	東	深鉢	口	II a	□:22.4cm	口:角。文:肥厚43mm。曲線状押引弧状。質:中。表:明茶。裏:暗黄。混種:砂粒・石英。混大:2。混量:少。焼:良。調:表裏-刷毛目後ナデ。厚:5mm。積底:有。他:構成流氷。	H-G-19黄白砂層下H-G-19第5層(仮)黄白砂台041013-2.041027-35
						口:舌。文:肥厚43mm。曲線状押引弧状。質:砂質。表:黄灰。裏:暗灰。混種:石英・金雲母。混大:2。混量:多。焼:中。調:表裏-ナデ。厚:8mm。他:流水レ-丸深。	C-19-20台全掘台040913-6
24	東	深鉢	口	II a		口:角。文:肥厚40mm。曲線状押引弧状。質:泥質。表:暗黄。裏:茶。混種:石英。混大:粗。混量:少。焼:良。調:表裏-ココナデ。厚:5mm。他:成状丸深。	E-20下191台021218-30
						口:丸。舌。文:肥厚28mm。横押引弧状。質:泥質。表:暗黄。裏:暗茶。混種:石英・チャート。混大:2。混量:少。焼:良。調:表裏-刷毛目。厚:6mm。他:流水-d丸深。	E-19平塚北西石集石台031023-20
26	東	深鉢	口	II b	□:15.2cm	口:丸。文:肥厚30mm。横押引二又。質:中。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:3。混量:少。焼:良。調:表裏-ココナデ。厚:13mm。積底:有。他:流水-g丸二又深押引強。	E-20第4層(仮)台020627-1
						口:丸。文:肥厚31mm。曲線状押引弧状。質:砂>泥。表:明赤褐。裏:暗赤褐。混種:砂粒・石英。混大:3。混量:少。焼:中。調:表裏-刷毛目後ナデ。厚:5mm。他:流水。	E-19南壁崩落。E-19第4層(仮)台040218-6.021122-5
28	東	深鉢	口	II a	□:18.9cm	口:丸。文:肥厚40mm。曲線状押引弧状。質:砂>泥。表:赤茶。裏:暗茶。混種:石英・白色粒。混大:2。混量:中。焼:中。調:表裏-刷毛目・表ナデ。厚:5mm。他:山形-流水丸深。	E-19第5層(仮)F14北西石・貝集台030109-15
						口:角。文:肥厚43mm。曲線状押引二・三又。質:砂>泥。表:茶褐。裏:暗赤褐。混種:石英・白色粒。混大:3。混量:少。焼:良。調:表裏-刷毛目後ナデ。積底:有。他:流水-h二又浅。	F-19東トレ第4層(仮)南西台040806-17
30	東	深鉢	口	II c	□:26.8cm	口:角。文:肥厚38mm。有段押引弧状。質:泥質。表:暗茶。裏:暗茶。混種:砂粒。混大:粗。混量:少。焼:良。調:表裏-刷毛目後ナデ。厚:4mm。他:流水-g丸-押引が深。	E-19 F8台030109-22
						口:丸。文:肥厚37mm。有段押引弧状。質:砂>泥。表:橙褐。裏:赤褐。混種:砂粒。混大:粗。混量:少。焼:良。調:表裏-刷毛目後ナデ。厚:7mm。積底:有。他:流水-f丸深。	E-19第5層(仮)F下北西石・貝集台030109-15
32	嘉	深鉢	口	I a	□:15.9cm	口:山。文:肥厚64mm。龍編状押引弧状-沈。質:泥質。表:明茶。裏:灰茶。混種:砂粒・石英。混大:2。混量:少。焼:良。調:表裏-ナデ。厚:5mm。他:口唇部に微細な刺突文。	C-19.20第4層(仮)西掘下-C-19北トレ壁平掘台040323-7.040318-25-041005-6
						文:横凸1+押引。質:砂質。表:明赤。裏:明赤。混種:石英。混大:2。混量:多。焼:中。厚:5mm。	E-19第4層(仮)台020917-14
34	東	底	口		□:6.3cm	口:片口注口。文:縦横凸1+押引弧状。質:砂質。表:暗赤。裏:暗橙。混種:石英。混大:粗。混量:中。焼:悪。調:表裏-ナデ丁寧。厚:5mm。	C-19-20第4層(仮)西台040323-9
						口:山。菱形状?。文:凸+押引三角状。質:砂>泥。表:黄灰。裏:暗黄。混種:石英。混大:1。混量:少。焼:良。調:表裏-ナデ丁寧。	E-19南壁崩落台031017-19
36	東	底	底	7.5cm		文:底部脇と外底面に押引。質:砂>泥。表:黒褐。裏:黄黒褐。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:良。調:表ナデ丁寧。厚:5mm。他:平底。	E-19南壁崩落台050912-20
						文:底部脇と外底面に押引。質:砂>泥。表:茶褐。裏:赤褐。混種:石英・チャート。混大:粗。混量:少。焼:良。調:表ナデ丁寧。厚:6mm。他:平底。	E-19第4層(仮)台021112-13
38	市	底	口		□:20.7cm	文:底部脇に龍編押引弧状。質:中。表:茶褐。裏:暗黄褐。混種:白色粒・石英・チャート。混大:3。混量:多。焼:良。調:表裏-ナデ丁寧。厚:5mm。他:有孔脚台。	E-19第4層(仮)下北.E-19第4層(仮)下台021107-27.021111-11
						口:山。方形。文:凸+押引三角状。質:砂>泥。表:暗茶。裏:暗橙褐。混種:白色粒・石英・チャート。混大:3。混量:少。焼:中。調:表裏-刷毛目後ナデ。厚:7mm。他:口唇部内側に刻目。	C-19-20清塚台040714-23

<凡例> 観察事項の項目 □:口縁部の形状、文:(文様)、質:(砂質・泥質)、表:(色)、裏:(色)、混種:(混入物の種類)、混量:(混入量)、混大:(混入物の大きさ)、焼:(焼成)、調:(器面調整)、厚:(器厚)、他:(その他など)
「地区・台帳番号」の項目 台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録

表16 面縄東洞式・市来式・嘉徳式土器観察一覧③

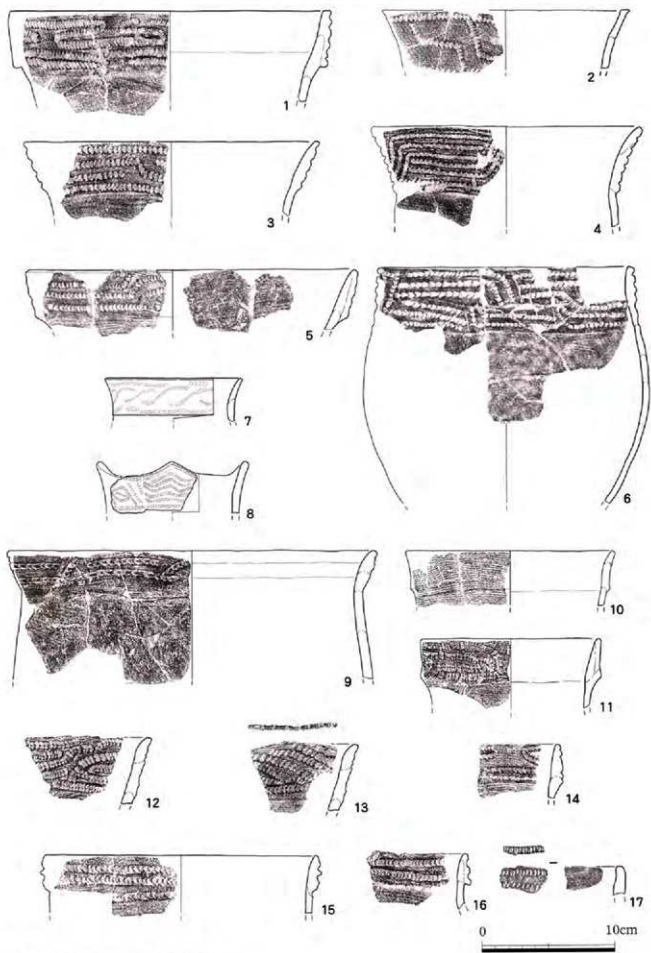
図版番号	土器形式	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第98版	40 市	深鉢	口	口:20.0cm	口:山・方形。文:肥厚32mm 押引弧状・凹文。質:砂>泥。表:黄灰。裏:黄灰。混種:白色細粒・石英・チャート・金雲母。混大:粗。混量:多。燒:中。調:表・ナテ・裏:刷毛目後ナテ。厚:7mm。他:口唇部内面に刺突。	E-20第4層(仮) 台021001-5
				底:5cm	質:中。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英。混大:3。混量:少。燒:中。調:表裏。刷毛目後ナテ。厚:5mm。他:平底。	E-20第4層(仮) 台020912-8
	41 東	底	底:8.3cm	質:砂質。表:明茶。裏:明茶。混種:砂粒。混大:細。混量:少。燒:中。調:調整痕残る。他:平底。	3トレ薄茶褐色 台020227-13	
				質:砂>泥。表:明茶。裏:明茶。混種:白色細粒・石英。混大:粗。混量:多。燒:中。調:表・ナテ・裏:刷毛目。厚:6mm。積痕:有。他:平底。	F-19東トレ水腫土 台040310-22	
	42 東	底	底:9.8cm	質:中。表:淡赤。裏:淡黄。混種:石英。混大:粗。混量:中。燒:差。調:表・ヘラ。厚:5mm。他:平底。	D-19第5層(仮)南平塚下 台031219-9	
				質:砂>泥。表:明茶。裏:明茶。混種:白色細粒・石英。混大:粗。混量:多。燒:中。調:表・ナテ・裏:刷毛目。厚:6mm。積痕:有。他:平底。	F-19東トレ水腫土 台040310-22	
	43 東	底	底:8cm	質:中。表:淡赤。裏:淡黄。混種:石英。混大:粗。混量:中。燒:差。調:表・ヘラ。厚:5mm。他:平底。	E-19第4層(仮)中央 台020925-9	
				質:砂>泥。表:明茶。裏:明茶。混種:白色細粒・石英。混大:粗。混量:多。燒:中。調:表・ナテ・裏:刷毛目。厚:6mm。積痕:有。他:平底。	F-19東トレ水腫土 台040310-22	
	44 東	底	底:2.2cm	質:中。表:淡赤。裏:淡黄。混種:石英。混大:粗。混量:中。燒:差。調:表・ヘラ。厚:5mm。他:平底。	E-19第4層(仮)中央 台020925-9	
				質:砂>泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:白色細粒・石英。混大:粗。混量:多。燒:差。調:表・ナテ・裏:刷毛目。厚:5mm。他:平底。	E-19第4層(仮) F239 台01105.06-1	
第99版	47 市	深鉢	口	口:26.0cm	口:山・方形。文:肥厚52mm 押引弧状・凹文。質:砂>泥。表:黄灰。裏:黄灰。混種:石英。混大:粗。混量:中。燒:良。調:表・ナテ丁寧・裏:刷毛目後ナテ。	E-19第4層(仮)下溝13上 台021205-19
				口:角。文:籠欄状押引弧状。質:砂質。表:暗黄。裏:暗黄。混種:石英。混大:粗。混量:少。燒:中。調:表・ナテ。厚:6mm。	C-19北トレ里砂土 台040622-4	
	48 東	深鉢	口	口:3.4cm	口:角。文:籠欄状押引弧状。質:砂質。表:暗黄。裏:暗黄。混種:石英。混大:粗。混量:少。燒:中。調:表・ナテ。厚:6mm。	C-19北トレ里砂土 台040622-4
				口:角。文:籠欄状押引弧状。質:砂質。表:暗黄。裏:暗黄。混種:石英。混大:粗。混量:少。燒:中。調:表・ナテ。厚:6mm。	C-19北トレ里砂土 台040622-4	
	49 嘉	深鉢	口	口:1.8.3cm	口:角。文:押引弧状・羽状沈。質:泥質。表:明茶。裏:明赤。混種:石英。混大:粗。混量:少。燒:中。調:裏。指正痕残る。厚:5mm。	C-19・20南西石集近堀下。C-19・20第4層辰砂 台040317-12.040308-10
				口:角。文:籠欄状押引弧状。質:中。表:黒茶。裏:明赤。混種:白色細粒・石英。混大:2。混量:中。燒:良。調:表・ナテ。厚:9mm。	4トレ濃マン混 台020307-2	
	50 東	深鉢	口	口:1.8.3cm	口:角。文:籠欄状押引弧状。質:中。表:黒茶。裏:明赤。混種:白色細粒・石英。混大:2。混量:中。燒:良。調:表・ナテ。厚:9mm。	C-19・20第4層東堀下 台040802-15
				口:角。文:籠欄状押引弧状。質:中。表:黒茶。裏:明赤。混種:白色細粒・石英。混大:2。混量:中。燒:良。調:表・ナテ。厚:9mm。	C-19・20第4層東堀下 台040802-15	
	51 東	深鉢	口	口:1.8.3cm	口:角。文:籠欄状押引弧状。質:中。表:黒茶。裏:明赤。混種:白色細粒・石英。混大:2。混量:中。燒:良。調:表・ナテ。厚:9mm。	C-19・20第4層東堀下 台040802-15
				口:角。文:籠欄状押引弧状。質:中。表:黒茶。裏:明赤。混種:白色細粒・石英。混大:2。混量:中。燒:良。調:表・ナテ。厚:9mm。	C-19・20第4層東堀下 台040802-15	
52 東	深鉢	口	口:1.8.3cm	口:角。文:籠欄状押引弧状。質:中。表:黒茶。裏:明赤。混種:白色細粒・石英。混大:2。混量:中。燒:良。調:表・ナテ。厚:9mm。	C-19・20第4層東堀下 台040802-15	
			口:角。文:籠欄状押引弧状。質:中。表:黒茶。裏:明赤。混種:白色細粒・石英。混大:2。混量:中。燒:良。調:表・ナテ。厚:9mm。	C-19・20第4層東堀下 台040802-15		
53 嘉	深鉢	口	口:1.8.3cm	口:角。文:籠欄状押引弧状。質:中。表:黒茶。裏:明赤。混種:白色細粒・石英。混大:2。混量:中。燒:良。調:表・ナテ。厚:9mm。	C-19・20第4層東堀下 台040802-15	
			口:角。文:籠欄状押引弧状。質:中。表:黒茶。裏:明赤。混種:白色細粒・石英。混大:2。混量:中。燒:良。調:表・ナテ。厚:9mm。	C-19・20第4層東堀下 台040802-15		
第100版	54 市	深鉢	口	口:26.4cm	口:方形。文:肥厚35mm 横短押引三义。質:中。表:暗黄。裏:暗赤。混種:石英。混大:2。混量:多。燒:良。調:表・ナテ丁寧・裏:刷毛目。厚:6~8mm。他:口唇部に押引。	E-19第4層(仮)下ド5。E-19平塚台030109-20.021210-12
				口:波・方形。文:横短押引三角状。質:中。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:粗。混量:多。燒:良。調:表裏・ナテ。他:口唇部角に刺突。	E-20第4層(仮)。E-20第4層(仮)。E-19第4層(仮) 台021001-5.020827-1.020918-14	
	55 東	深鉢	口	口:18.3cm	口:波・方形。文:横短押引三角状。質:中。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:粗。混量:多。燒:良。調:表裏・ナテ。他:口唇部角に刺突。	E-20第4層(仮)。E-20第4層(仮)。E-19第4層(仮) 台021001-5.020827-1.020918-14
				口:波・方形。文:横短押引三角状。質:中。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:粗。混量:多。燒:良。調:表裏・ナテ。他:口唇部角に刺突。	E-20第4層(仮)。E-20第4層(仮)。E-19第4層(仮) 台021001-5.020827-1.020918-14	
	56 嘉	深鉢	口	口:7.3cm	口:角。文:横短押引弧状。質:砂>泥。表:赤赤。裏:黒褐。混種:透明。混大:細。混量:少。燒:中。調:表裏・ナテ。厚:6mm。他:口唇部に刺突。	D-19第4層仮東堀下 台040311-23
				口:波・方形。文:肥厚27mm 横短押引弧状。質:中。表:暗黄。裏:暗赤。混種:石英。混大:粗。混量:多。燒:良。厚:5mm。	H-G-19マン混 台041116-5	
	57 市	深鉢	口	口:1.8.3cm	口:舌。文:肥厚32mm 曲線状押引。質:砂<泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・ナテ丁寧。厚:5mm。積痕:有。	E-19溝10 台021212-8
				口:舌。文:肥厚32mm 曲線状押引。質:砂<泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・ナテ丁寧。厚:5mm。積痕:有。	E-19溝10 台021212-8	
	58 東	深鉢	口	口:1.8.3cm	口:舌。文:肥厚32mm 曲線状押引。質:砂<泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・ナテ丁寧。厚:5mm。積痕:有。	E-19溝10 台021212-8
				口:舌。文:肥厚32mm 曲線状押引。質:砂<泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・ナテ丁寧。厚:5mm。積痕:有。	E-19溝10 台021212-8	
59 嘉	深鉢	口	口:1.8.3cm	口:舌。文:肥厚32mm 曲線状押引。質:砂<泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・ナテ丁寧。厚:5mm。積痕:有。	E-19溝10 台021212-8	
			口:舌。文:肥厚32mm 曲線状押引。質:砂<泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・ナテ丁寧。厚:5mm。積痕:有。	E-19溝10 台021212-8		
60 東	深鉢	口	口:1.8.3cm	口:舌。文:肥厚32mm 曲線状押引。質:砂<泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・ナテ丁寧。厚:5mm。積痕:有。	E-19溝10 台021212-8	
			口:舌。文:肥厚32mm 曲線状押引。質:砂<泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・ナテ丁寧。厚:5mm。積痕:有。	E-19溝10 台021212-8		
61 東	深鉢	口	口:1.8.3cm	口:舌。文:肥厚32mm 曲線状押引。質:砂<泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・ナテ丁寧。厚:5mm。積痕:有。	E-19溝10 台021212-8	
			口:舌。文:肥厚32mm 曲線状押引。質:砂<泥。表:明赤褐。裏:明赤褐。混種:石英・チャート。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・ナテ丁寧。厚:5mm。積痕:有。	E-19溝10 台021212-8		
62 土	土器	口	口:15.8cm	口:角。文:横短押引弧状。質:砂質。表:明茶。裏:明茶。混種:石英。混大:細。混量:少。燒:差。調:表裏・刷毛目後ナテ。厚:5mm。積痕:有。	C-19・20南西石集近堀下 台040317-12	
			口:角。文:横短押引弧状。質:砂質。表:明茶。裏:明茶。混種:石英。混大:細。混量:少。燒:差。調:表裏・刷毛目後ナテ。厚:5mm。積痕:有。	C-19・20南西石集近堀下 台040317-12		

<凡例>「観察事項」の項目「口」:「口縁部の形態」、文:(文様)、質:(砂質・泥質)、表:(色)、裏:(色)、混種:(混入物の種類)、混量:(混入量)、混大:(混入物の大きさ)、燒:(焼成)、調:(器面調整)、厚:(器厚)、他:(その他など)「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録

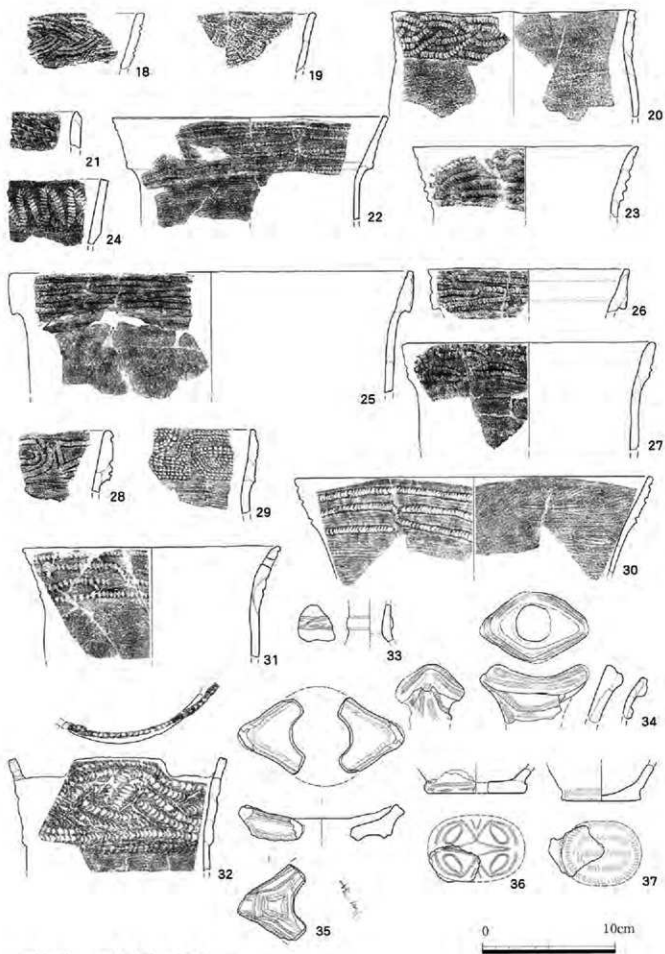
表16 面縄東洞式・市来式・嘉徳式土器観察一覧④

図版番号	土器形式	形状	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号	
第80号	63	東	深鉢	胴		文:幅広押引。質:砂質。表:暗茶。裏:明茶。混種:石英・ナド。混大:粗。混量:多。燒:急。厚:6mm。	2トレ盛採上・2トレ暗茶炭混下 台020212-12.020312-2	
	64	東	深鉢	胴		文:幅広押引。質:砂<泥。表:淡茶。裏:淡茶。混種:石英。混大:粗。混量:多。燒:中。調:表裏・ナド。厚:6mm。他:裏面に幅広押引。	2トレ盛採下 台020212-13	
	65	高II	深鉢	口	II		口:丸。文:綾紗沈。質:中。表:明茶。裏:明茶。混種:白色粒・チャート・赤色粒。混大:粗。混量:多。燒:良。調:表裏・刷毛目後ナド。厚:8mm。	F-19第4層(仮)南 台050121-28
	66	東	深鉢	口			口:丸。文:肥厚16mm。刺突・朝目斜状。質:砂質。表:暗赤。裏:暗赤。混種:石英・黄。混大:粗。混量:多。燒:急。厚:6mm。	E-19第4層(仮) 台020619-14
	67	東	口	I d		口:丸。文:肥厚33mm。龍鬚状弧。質:中。表:茶褐。裏:茶褐。混種:雲母・白色粒。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・刷毛目後ナド・表ナドナド。厚:4mm。	E-19石貝集 台030223-6	
第81号	68	東	口	I d		口:山。文:肥厚80mm。龍鬚状弧。質:中。表:茶褐。裏:茶褐。混種:白色粒・石英・金雲母。混大:2。混量:少。燒:良。調:表裏・刷毛目後ナド。厚:9mm。	C-19第4層仮東壁・D-19第4層(仮)東壁脚・C-19-20一括 台040315.050608.050920	
	69	高II	深鉢	底	II		質:砂>泥。表:淡茶。裏:淡茶。混種:石英。混大:粗。混量:多。燒:良。調:表裏・刷毛目後ナド。厚:5mm。積痕:有。他:平底。	D-19第4層(仮)下南東側掘下/淡灰マンゴン混 台031216-2
	70	東	底				質:砂>泥。表:淡灰。裏:淡灰。混種:石英・雲母。混大:粗。混量:多。燒:良。調:表ナドナド・裏・刷毛目後ナド。厚:5mm。他:平底。	C・D-19東サブ崩落・C-19第4層(仮)東サブ 台040612-10.040611-1.040316-24
	71	東	底				質:砂質。表:明赤。裏:明茶。混種:石英・透。混大:粗。混量:中。燒:中。調:表・刷毛目。厚:5mm。他:平底。	D-19第4層(仮)F第5層(仮)上・D-19第4層仮東掘下 台040316-24.040311-23
	72	東	底				質:砂>泥。表:明茶。裏:暗茶。混種:白色粒・チャート。混大:3。混量:少。燒:良。調:表・横ナド・裏・ヘラナド。厚:6mm。他:平底。	E-19溝F上/F13 台021211-19
第82号	73	東	底			質:砂質。表:明茶。裏:明茶。混種:石英・チャート。混大:3。混量:少。燒:中。調:表・ナドナド・裏・刷毛目後ナド。厚:6mm。他:平底。	E-19 F下/F484・D-19白砂 台021121-40.040304-21	
	74	東	底			質:中。表:暗茶。裏:黄茶。混種:白色粒・石英。混大:2。混量:多。燒:良。調:表・ナドナド・裏・ナド。厚:5mm。他:平底。	C-19第4層(仮)淡灰白色部分掘下/F 台031217-36	
	75	東	底			質:砂>泥。表:黄茶褐。裏:橙褐。混種:砂粒。混大:微。混量:少。燒:中。調:表裏・刷毛目後ナド。厚:8mm。他:平底。	C-19第4層(仮)東掘下 台040318-22	
第82号	1	伊	深鉢	口		口:山・リボン状。文:平行短沈線。質:砂>泥。表:暗赤褐。裏:暗赤褐。混種:石英・チャート。混大:粗。混量:中。燒:良。調:表・ナド・裏・刷毛目後ナド。厚:7mm。他:短沈線は1つ4条(2条1組×2)。	E-20盛採E-19第4層(仮)西一括 台060220-1.021126-12	
	2	伊	深鉢	口		口:角。文:平行沈・鋸歯沈。質:砂<泥。表:表。裏:赤。混種:石英。混大:2。混量:中。燒:中。調:表裏・刷毛目後ナド。厚:7mm。積痕:有。	E-17白砂 台031222-30	
	3	伊	深鉢	口		口:山。文:平行沈・鋸歯沈。質:中。表:茶褐。裏:赤褐。混種:白色粒・石英。混大:粗。混量:中。燒:良。調:表裏・刷毛目後ナド。厚:8mm。	E-19第4層(仮)西一括F上/上げ 台021126-15	
	4	伊	深鉢	口		口:角。文:押引凹・鋸歯凹。質:泥質。表:黒茶。裏:黒茶。混種:石英。混大:粗。混量:少。燒:良。調:表・ナド・裏・刷毛目。厚:7mm。	F-19第4層(仮)下南掘下 台060124-30	
	5	伊	深鉢	口		口:角・逆L字。文:斜削目。質:中。表:赤茶。裏:明赤。混種:白色砂粒。混大:粗。混量:少。燒:良。調:表裏・刷毛目。厚:6mm。他:口唇部に刺突。	F-19南高南東 台050727-2	
	6	東	深鉢	口		口:角。文:肥厚上12mm 下18mm。質:砂>泥。表:暗赤。裏:暗赤。混種:砂粒・石英。混大:2。混量:多。燒:中。調:表裏・刷毛目・裏・ナド。厚:6mm。積痕:有。	D-19第4層(仮)下 台081216-10	
	7	伊	深鉢	口		口:角。文:肥厚24mm。質:中。表:暗茶。裏:暗茶。混種:石英・チャート。混大:粗。混量:多。燒:中。調:表裏・ナド。指圧痕残り。厚:8mm。	C-19北トレ掃 台040329-11	
	8	伊	深鉢	口		口:角。文:肥厚17mm。質:砂<泥。表:暗赤。裏:暗赤。混種:石英。混大:粗。混量:多。燒:中。調:表裏・刷毛目。厚:7mm。他:口唇部に刷毛目調整痕残り。	E-18第4層(仮) 台021114-13	
	9	伊	深鉢	口		口:角。文:肥厚17mm。質:砂質。表:暗茶。裏:暗茶。混種:黒・砂粒・石英。混大:2。混量:中。燒:中。調:表裏・ナド。厚:8mm。	C-19第4層(仮)東掘下・C-19第4層東石集周掃 台040317-1.040528-23	
	10	伊	深鉢	口		口:角。文:肥厚22mm。質:中。表:暗茶。裏:暗茶。混種:透明。混大:微。混量:極少。燒:良。調:表裏・ナド。厚:6mm。	C-19北トレ掃 台040730-16	

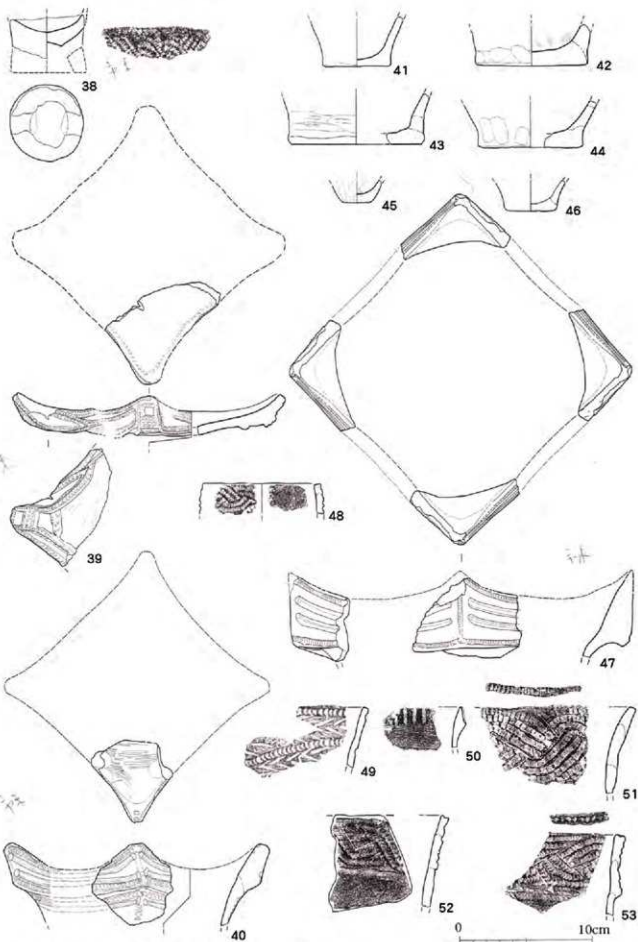
○凡例>「観察事項」の項目 口: 口縁部の形状、文: 文様、質: 砂質・泥質、表: (色)、裏: (色)、混種: (混入物の種類)、混量: (混入量)、混大: (混入物の大きさ)、燒: 燒成、調: (器面調整)、裏: (器底)、他: (その他など)、「地区・台帳番号」の項目 台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収める。



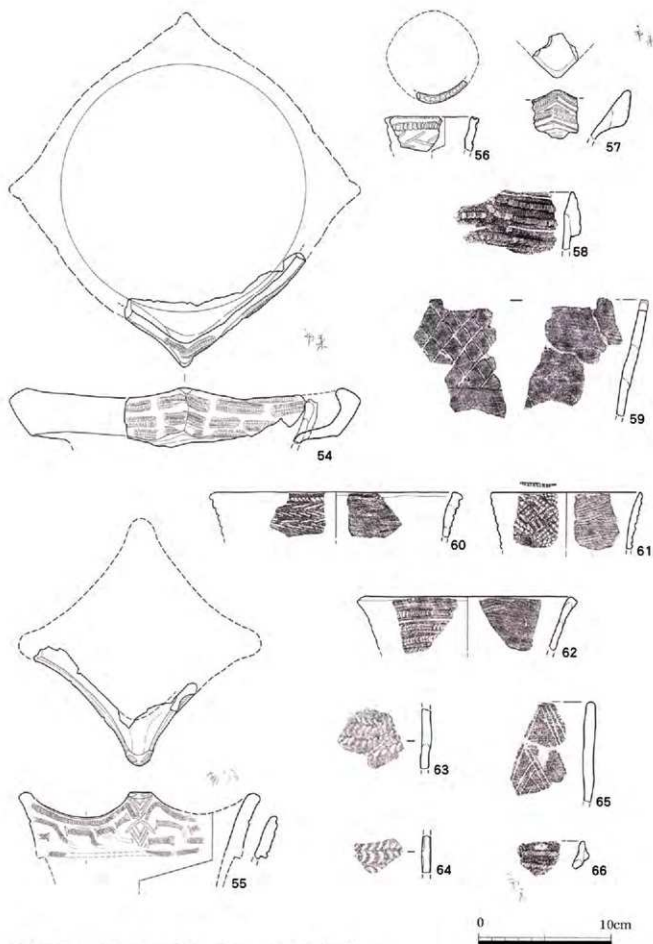
第77図 面縄東洞式土器①



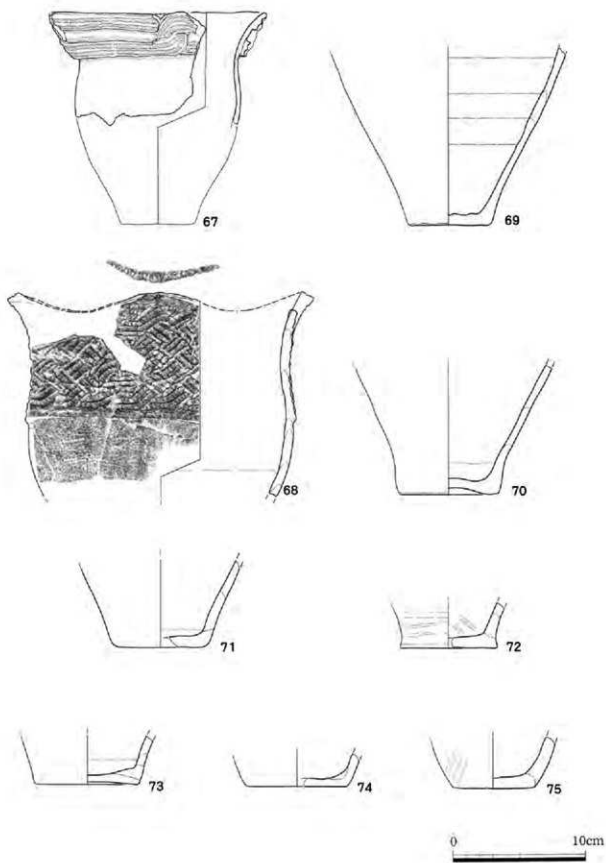
第78図 面縄東洞式土器②



第79図 面縄東洞式土器・嘉徳I式土器・市來式土器③



第80図 面縄東洞式土器・嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器④



第81圖 面繩東洞式土器・嘉徳Ⅰ・Ⅱ式土器・底部⑤

第82図1・5の2点である。図1は山形突起を有する。図1は口径15.2cmを測る。平行沈線文を巡らしている。図5は口縁部資料である。口唇部に叉状工具による刺突文を施文している。外面は斜位の刻目文を巡らしている。

9) 萩堂式土器

萩堂式土器は沖縄県北中城村字萩堂の萩堂貝塚出土の土器を標識としている。20数点出土している。得られた器種は深鉢形である。

第82図2・3・4の3点で、ともに平口縁である。図2は口径15.6cm、胴径18cmを測る。口縁部と頸部は平行沈線文を8条巡らし、その下位は鋸歯文を巡らしている。図3は図上復元を試みた資料である。口径19.7cm、底径6.8cm、器高22.5cmを測る。底部より緩やかに立ち上がり頸部で僅かに締め口縁部が外反する。口縁部は山形突起を有し、文様は平行沈線文を巡らし、その下部に鋸歯文を巡らしている。図4は口径15.5cm、胴径17.5cmを測る。単施工具による横位の押し引き文とその下位に鋸歯文を巡らしている。

10) カヤウチバンタ式土器

沖縄県国頭村宜名真のカヤウチバンタ貝塚出土の土器を標識としている。10数点出土している。得られた器種は深鉢形で、全て無文である。

第82図6～9までの4点である。口縁部の肥厚部は長方形を呈するものと正方形を2段有するのがある。前者は図7～9で、後者は図6である。図6は2条の凸帯を巡らす。図7は口縁部が外反するもので、口径14.4cmを測る。内面は口縁部と頸部に指圧痕が残る。図8は口径17cmを測る。器面全体に刷毛目調整痕が残る。図9は口径23.6cmを測る。内面はナデ調整が見られる。

11) 宇佐浜式土器

沖縄県国頭村辺戸の宇佐浜貝塚より出土した土器を標識としている。10数点出土している。得られた器種は深鉢形である。文様は見られない。

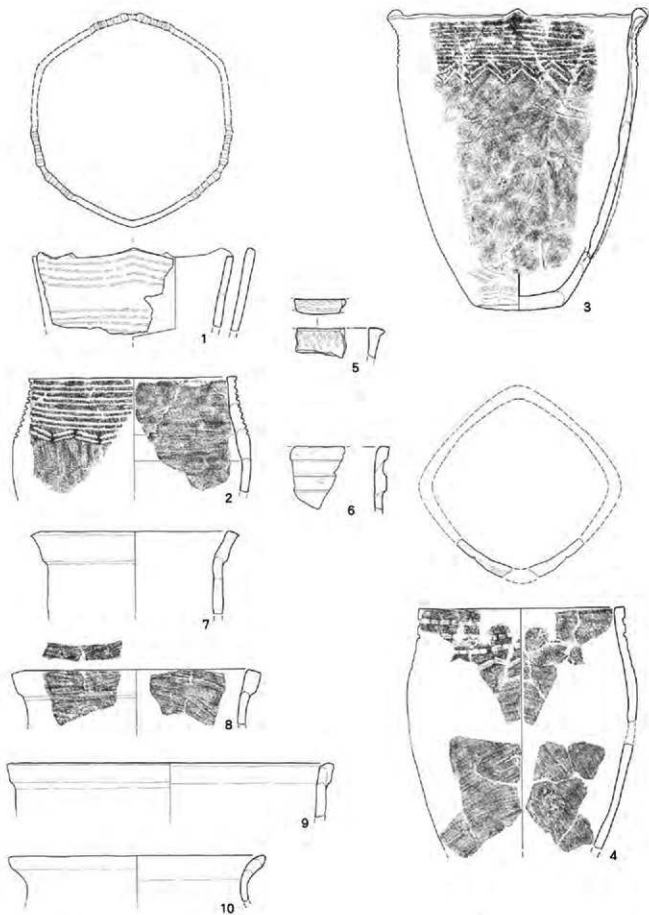
第82図10の1点のみで、口径18.8cmを測る。口縁部は外反し肥厚する。ナデ調整が行われている。

12) 縄文晩期土器

縄文時晩期に比定できると考えられる土器は、総数570点出土し、その中で特徴的な資料を第84図2～7に示した。接合作業により全形を窺う事のできる資料があった。当該期に属する土器は大きく2類に分けた。以下、各類について記述する。

1類 (第84図2～5)

外反する口縁部で最大径をもち、く字状にくびれる頸部から胴部までの断面形状を見ると、緩やかなS字を右傾させた状態を呈し、器高の低い浅鉢形を成す。胎土は砂質で焼成は良く、器色は黒褐色を基調とする。2～4にかけて頸部のくびれは弱く口縁部は立ち上がり、口径に対して器高の比率が大きくなる。黒川式の影響を受けたと考えられる。



第82図 伊波式土器・荻堂式土器・カヤウチバンク式土器

2類 (第84図6・7)

口縁部をやや肥厚させ、胴部との境に明瞭な段を形成する。胎土は砂質で焼成は良く、黄褐色を呈する。

13) 貝塚後期土器

弥生時代～平安時代併行期に属すと考えられる土器を(第84図8～13、～第91図45)に示した。当該期に属する土器を、器形・胎土・文様の有無等で大きく5類に分けた。以下に個々の分類基準を示す。

1類 (第84図8～13、第85図1～7)

外反する口縁部は、C字状にくびれる頸部から稜を持つ肩部へ移行し、球胴状に張る胴部へ至る。内外器面ともナデ調整が主だが、指頭痕がナデ消されず残るものもある。頸部に横位のナデ痕が明瞭に残るものも見られる。胎土は砂質を基調とし、石英・輝石・砂粒を含み、中には橙色粒・黒色粒を含むものもある。器色は茶褐色・橙褐色・黄褐色を呈する。阿波連浦下層式段階の土器と考えられる。口唇部にリボン状突起を持つもの(第84図13、第85図1(2))、頸部のくびれが弱く、口縁部が内傾するもの(第84図8、第85図2～4)等が認められる。第85図2～4は口縁端部が僅かに肥厚する。

2類 (第85図8～第87図13)

1類土器に比べ、頸部のくびれは弱く長くなり、口縁部もより直口に近くなる。肩部の稜は不明瞭になり、胴が張らず直線的に底部へ移行するようになる。口唇部は平坦なものが多く、器面はナデによる調整を施すが、1類に比して内器面の指頭痕がナデ消されない傾向が強くなり、器厚は若干厚くなるようである。胎土は砂質で、黄褐色・橙褐色・赤褐色を呈する。混入物に、石英・輝石・砂粒まれに橙色粒・黒色粒を含む。阿波連浦下層式～浜屋原式段階の土器と考えられる。肩部を持たず、器表面に指頭痕が多く見られるもの(第86図13)は、2類土器の中でも、より3類に近い様相を呈している。

3類 (第88図1～3)

出土点数は多くないが、接合により比較的全体の様相が窺う事ができた(第88図1)。それによると、内彎若しくは直口の口縁部から底部へ向け砲弾状にすぼまる器形を呈する。口唇部には角状突起が貼付されており、残存状況から4つ貼付されようである。器面調整は内外面とも粗雑で、器厚は分厚く1.0cm以上にもなる。胎土は黄褐色・橙褐色を基調とし、混入物には砂粒が確認できるが、種類・量とも少ない。大当原式土器段階の土器と考えられる。

4類 (第83図1～21・第84図1)

外耳を持つ土器(第83図16～21・第84図1)と、上記1～3類に属すると考えられる有文土器(第83図1～15)を4類として扱った。有文土器の文様は、口縁部から肩部にかけての屈曲部に施す事が多く、中には明瞭に区画を設けて文様を充填するものも見られた。施文原体のほとんどは、細沈線によるものであった。その他、幅広沈線(1・3)・刺突文(8)・山形口縁(1)・山形口縁が横に飛び出し外反状になるもの(3)・刻目突帯を貼付するもの(7)等が見られた。施文方法には、施文範囲を口縁部から頸部に限定し施文するものと、そうでないものと大きく分けられ、前述に

鋸齒文(3)・梯子文(4・6・7)・直線文(1・5・9)・直線文と曲線文を併用するもの(4・11)・刺突文を施すもの(8・10)があり、後述に非幾何学的な沈線文を施すもの(12~15)がある。有文土器は、茶褐色・赤茶褐色を呈するものが多く、焼成が良い。混入物は、後述する外耳土器に比して少なく、輝石を含むものがある。外耳土器には、正面観の形状が曲線的なもの(16~19)・直線的なもの(20・21)に分けられる。外耳を有する土器は、総じて石英・砂粒といった混入物の量が多く、黄褐色~橙褐色を基調とする。

5類(第88図4~第90図9)

九州系弥生土器やその影響を受けたと考えられる土器及びその他の土器を5類として扱った。確認された器種として、壺形(第88図4~14・17・18・20、第89図3・8・9・20・21、第90図1~5・7~9)、深鉢形(第88図15・16・19、第89図5~7・13・14)、浅鉢形(第89図16~19)の他、その他の器種(第89図1・11・12・15、第90図6)があり、有文資料が幾つかあった。有文資料には、口縁部を山形状にするもの(第88図13)・細沈線を施すもの(第88図17・19・20、第89図2)・口縁部に逆U字状の突帯を付するもの(第89図1)・口唇部に粒状突帯を付するもの(第89図13)・断面三角形状の突帯を貼付するもの(第89図20、第90図1~6)が得られた。

・底部

縄文晩期~弥生時代併行期にあたる土器底部資料を第90図に示した。底部形状は、丸底・尖底(乳房状尖底含む)・平底が確認され、それぞれを更に細分する事ができた。以下、個々の特徴について記述する。

丸底A(第90図11・14、第91図1・2・6)

底部に稜を持たない丸底である。第91図11・14、第92図1・2は、底部の断面形状が緩い弧状になる。第90図11は、縄文晩期に見られる浅鉢で、口唇部には角状突起が、胴部には把手が貼付する。同図14は底部を欠く資料だが、丸底を呈するものと考えられる。6は、立ち上がりが強く、より丸味を帯びる。内外面ともハケ目調整を行い、外器面はナデ仕上げを施す。胎土は全て砂質である。

丸底B(第91図3~5)

Aに比べ底部は平坦で弱い稜を持ち、厚底を呈する。胎土は砂泥質で、ナデによる器面調整が施される。胴部への立ち上がりに段を有するもの(3)、稜を持つもの(4・5)がある。

尖底A(第91図7~12)

いわゆる乳房状尖底で、底部が非常に厚くなる。バランスは悪いが設置面は平坦部を持ち、立つ事が出来る。胎土は砂泥質で、器表面には指頭痕が残る。

尖底B(第91図13~23)

尖底Aに比べ設置面が小さく立つ事が出来ない。やや潰れて径の小さい平坦部を形成するもの(13~16)、底頂部が丸いもの(17~20)、何らかの道具若しくは指頭により底頂部に刺突・押圧するもの(21~23)等、バリエーションが見られる。胎土は砂泥質を呈する。

平底A(第91図24~29)

底部から胴部への立ち上がりが直線的若しくは外反気味になる。内底は平坦で、立ち上がり部分には緩やかな稜を形成する。胎土は砂泥質を呈する。

平底B (第91図30~33)

底部から胴部への立ち上がりが内彎気味になる。内底は中央が若干窪む弧状を呈し、立ち上がり部分の後は、平底Aに比べより不明瞭になる。胎土は砂泥質を呈する。

平底C (第90図10、第91図34~37)

底部から胴部への立ち上がりが、平底A・Bに比べ外に開くもの。外底が上げ底状になっているもの(第91図35・37)や、底部から胴部にかけて屈曲部を持つもの(第90図10、第91図36・37)、等がある。胎土は砂泥質を呈する。

・その他(第90図12・13、第91図38~45)

丸底・尖底及び平底A~Cと異なる資料を集めたその他底部資料である。胎土は概して砂質~砂泥質を呈する。第90図12は、丸底の底部から脚が剥がれ落ちたもので、第90図13は、脚台の資料である。第91図38は平底の底部に脚を持つ資料である。

丸底資料は、胎土・混入物・器面調整等から、晩期末~弥生時代併行期前半に収まるものと考えられる。第91図6は、ハケ状工具による器面調整を行い、胎土が精練されている事からやや新しくなる印象を受ける。尖底資料は、阿波連浦下層式~大当原期に見られる底部形態であり、器面調整等からも同土器群の範疇と捉えて大差ないものと考えられる。平底には、後期後半に見られるいわゆるくびれ平底土器がほとんど確認できなかった。

引用・参考文献

- ・河口貞徳 1962『黒川洞窟発掘報告』『鹿児島県考古学会紀要』2 鹿児島考古学会
- ・高宮廣衛・中村 恵・金城利枝 1989『立野湾市字宇地泊兼久原遺跡発掘調査報告』『沖国大考古』第10号 沖縄国際大学文学部考古学研究室
- ・島袋 洋・金城亀信・上原 静ほか 1996『平敷屋トウバル遺跡—ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書—』『沖縄県文化財調査報告書』第125集 沖縄県教育委員会
- ・高宮廣衛・中村 恵・知花一正・山城安生・玉城京子・山城直子・西久保教美 1989『波嘉敷村阿波連浦貝塚発掘調査報告書』『沖国大考古』第12号 沖縄国際大学文学部考古学研究室
- ・新里貴之 2004『沖縄諸島の土器』『考古資料大観 第12巻—貝塚後期文化』小学館
- ・宮城弘樹 2005『沖縄貝塚時代後期土器の研究(Ⅲ)—浜原原式土器とその概念整理—』『廣友会誌』創刊号 廣友会
- ・盛本 勲・安原開光ほか 2005『瀬底島・アンチの上貝塚 発掘調査報告書』『本部町文化財調査報告書』第8集 本部町教育委員会

表17 縄文晩期・貝塚後期土器観察一覧①

種別 器名	時期	形状	部位	寸法	観察事項	地区・台帳番号
1	後	鉢	口	4	口:山・平坦。文:幅広く沈線横線縦。質:砂質。表:暗茶。裏:暗茶。混種:砂粒。混大:粗。混量:少。焼:良。調:表・ユビ痕有。厚:7mm。積痕:有。	C-18ノ4以北028, 台040805-7
2	後?	?	耳	4	質:砂>泥。表:暗茶。裏:淡黄。混種:チャート。混大:2mm。混量:少。焼:良。調:ヘナナテ。厚:8mm。他:M字状耳。	北西露土, 台040617-1
3	後	深鉢	口	4	口:山形・リボン。肥厚7mm。文:横筋の順。質:砂>泥。表:暗茶。裏:暗茶。混種:光黒。混大:粗。混量:少。焼:中。調:表・唇面細かい。裏:唇面はがれ。厚:9mm。	D-17黒粘質(貝片混), 台040318-16
4	後	深鉢	口	4	口:角。文:上下沈線。質:砂質。表:淡黄。裏:淡黄。混種:石英。光透。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表裏・唇面細かい。厚:8mm。	D-17東トレ北黒砂-D17東トレ第4層黒土, 台040628-1.040722-31
5	後	壺	口	4	口:舌状。文:沈線・口唇・横1本・シャープ・頸部・横2本・シャープ間に約沈線。質:中。表:明赤。裏:明灰。混種:石英。混大:1mm。混量:少。焼:良。調:表・ユビ痕有。厚:5mm。	E-17第5層(仮)上平埴, 台090310-16
6	後	鉢?	口	4	口:角・口縁端部が外に出る。文:細沈線による梯子状。質:砂質。表:暗茶。裏:暗茶。混種:砂粒。混大:粗。混量:少。焼:良。調:ナデ。厚:7mm。	C-19北トレ壺埴, 台040317-7
7	後	壺	口	4	文:横刻目凸帯・凸帯が細い刻目・細沈線による梯子状。質:砂質。表:淡黄。裏:淡黄。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表裏・ユビコヨコ。厚:6mm。	C-19北トレ第4層(仮)上, 台040319-6
8	後	鉢	口	4	口:舌状。文:横・沈2条(浅い)籠・又状沈線の間に刺突。質:砂質。表:茶。裏:茶。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表・ユビ痕有。厚:6mm。積痕:有。他:浅線形か。	D-18黒砂・C18サテ下黒土, 台040310-5.040228-8
9	後	深鉢	胴	4	文:沈線2条・横線2条。質:砂>泥。表:暗茶。裏:暗茶。混種:石英。混大:粗。混量:少。焼:中。調:表・ナデ丁穿。厚:7mm。	C-18第3層, 台031209-30
10	後	深鉢	口	4	口:角。文:縦位・点刻文。質:砂質。表:暗茶。裏:暗黄。混種:黒。混大:0.5mm。混量:少。焼:良。調:ナデ。厚:5mm。	C-19北トレ壺埴, 台040317-7
11	後?	壺?	口	4	口:角。文:沈線・横文・細沈線。質:砂<泥。表:暗茶。裏:暗灰。混種:黒。混大:粗。混量:少。焼:悪。調:表・ユビ痕有。裏:ユビ痕明瞭。厚:7mm。他:口唇面に指摺痕残る。	D-19西露崩落土, 台050701-
12	後	鉢	口	4	口:角。文:沈線・横面文。質:砂質。表:暗茶。裏:暗茶。混種:黒。混大:粗。混量:多。焼:良。調:表・ユビ痕有。厚:7mm。他:口唇部に沈線文。	盛土表埴, 台021208-33
13	後?	壺	4	4	文:沈線・不規則な沈線。質:砂質。表:明橙。裏:明橙。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:悪。調:表・ユビ痕有。厚:9mm。積痕:有。	D-17東トレ第4層(仮)下南, 台040628-6
14	後?	壺	4	4	文:沈線・瘤輪状。質:砂質。表:明黄。裏:明黄。混種:石英。混大:0.5mm。混量:少。焼:良。調:表・ユビナデ有。厚:7mm。	G-19第3層(仮)北, 台031217-7
15	後?	口	4	4	口:角。文:斜沈線。質:中。表:明橙。裏:明橙。混種:石英。混大:0.5mm。混量:少。焼:良。調:横・ナデ有。厚:7mm。	E-19第4層(仮)中央, 台020927-20
16	晩	鉢	耳	4	口:角。質:砂質。表:淡茶。裏:明茶。混種:チャート。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表裏・ユビ痕有。厚:7mm。他:外耳・弧状。	C-19北トレ第4層(仮)上, 台040319-6
17	晩	深鉢	口	4	口:大状。外反口縁。質:砂質。表:明茶。裏:明灰。混種:石英。混大:粗。焼:良。調:丁穿ナデ調整。厚:7mm。他:弧状の外耳。	E-20トモ全D25, 台021129-4
18	晩	深鉢	耳	4	口:角。質:砂質。表:明茶。裏:明茶。混種:石英。混大:1mm。混量:多。焼:良。調:表・ナデ痕有。厚:5mm。他:弱い弧状。	5トレD上No4, 台020227-27
19	晩	深鉢	耳	4	質:砂<泥。表:暗茶。裏:暗灰。混種:チャート。混大:1~5mm。混量:多。焼:中。調:裏・ナデ。厚:7mm。積痕:有。他:長さの短い弧状の外耳。	E-22-23貫茶掘上E-22赤褐色土, 台040116-31.031219-18
20	晩?	耳	4	4	文:凸帯・丸。質:砂質。表:茶赤。裏:茶赤。混種:石英。混大:2mm。混量:少。焼:悪。調:表・粗。裏:丁穿。厚:17mm。他:直線状の外耳。	E-19第4層(仮)平埴, 台021028-1
21	晩?	耳	4	4	文:凸帯・丸。質:砂>泥。表:明黄。裏:明黄。混種:石英。混大:粗。混量:少。焼:良。調:ナデ。厚:7mm。他:直線状の外耳。	H-G-19第5層(仮)貫茶掘下, 台040930-22
1	晩?	耳	4	4	文:凸帯・三角。質:砂質。表:淡橙。裏:淡橙。混種:白貝。混大:粗。混量:多。焼:中。調:ナデ。厚:10mm。他:直線状の外耳。	E-17第5層(仮), 台030221-3
2	晩	鉢	口	1	口:丸。質:砂質。表:茶褐。裏:茶褐。混種:輝石・石英。混大:粗。混量:少。焼:中。調:表・横ナデ。厚:7~8mm。	E-17第5層(仮), 台030221-3
3	晩	鉢	口	1	口:角。質:砂>泥。表:淡茶。裏:淡茶。混種:輝石・石英。混大:粗。混量:多。焼:中。調:ナデ。厚:5~7mm。積痕:有。他:口縁部僅かに肥厚。	C-18第4層(仮), 台031212-6
4	晩	鉢	口	1	口:丸・外反「く」。質:砂<泥。表:暗茶褐。裏:茶褐。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:中。調:ナデ。厚:8mm。積痕:有。他:頸部屈曲有り。	E-17第5層(仮)上, 台021118-12

<凡例>「観察事項」の項目(口):口縁部の形状。質:(砂質・泥質)。表:(色)。裏:(色)。混種:(混入物の種類)。混量:(混入量)。混大:(混入物の大きさ)。焼:(焼成)。調:(器面調整)。厚:(器厚)。他:(その他など)
「地区・台帳番号」の項目(台)は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録。

表17 縄文晩期・貝塚後期土器観察一覧②

図版番号	時期	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第84図	5	晩鉢	口	I	□:36cm	口:丸。質:砂質。表:暗赤。裏:暗赤。混種:輝石。混:大。粗。混量:多。焼:良。厚:横ナデ。厚6~7mm。	C-19第4層(仮)黒土。台040309-4
	6	晩鉢	口	II	□:31.6cm	口:角。質:砂>泥。表:黄赤。裏:黄赤。混種:石英。混:大。粗。混量:多。焼:中。調:ナデ。厚6~11mm。横紋:有。	E-17第5層(仮)F17.D-18清掃。台030312-21.041119-16
	7	晩?	口	II		口:丸。質:砂>泥。表:淡赤。裏:淡黄。混種:石英。チャート。混:大。粗。混量:少。焼:良。調:ナデ。厚:7mm。横紋:有。他:肥厚。口縁:	D-19第4層(仮)東掘下。台041215-2
	8	後鉢	口	I	□:10.9cm	口:舌。質:砂<泥。表:暗赤。裏:暗赤。混種:白。混:大。2mm。混量:少。焼:中。調:裏ナデ明瞭。表裏:器面細かい。厚:10mm。横紋:有。	D-18東トレ灰粘土。台040226-14
	9	後鉢	口	I	□:18.8cm	口:丸。質:砂>泥。表:暗赤。裏:暗赤。混種:黒。混:大。2mm。混量:少。焼:良。調:表ナデ。裏:コナデ有。表裏:器面細かい。厚:10mm。横紋:有。他:外反。	C-18第4層(仮)。台031212-6
	10	後鉢	口	I	□:16.2cm	口:舌「く」。質:砂>泥。表:暗赤。裏:暗赤。混種:白色。混:大。粗。混量:少。焼:良。調:ナデ。厚:8mm。横紋:有。他:柄上部に煤痕有。	C-17N0005。台050214-32
	11	後鉢	口	I	□:20.3cm	口:丸。有段が玉縁。質:砂質。表:淡橙。裏:黄褐。混種:黒。混:大。2mm。混量:多。焼:中。調:ナデ。厚:7mm。横紋:有。	D-17東トレ北。台040615-7
	12	後鉢	口	I	□:17.4cm	口:丸。外反。肥「く」。質:砂質。表:黄赤。裏:黄褐。混種:石英。輝石。乳白色。混:大。2mm。混量:少。焼:中。調:頸部コナデ。厚:5~7mm。横紋:有。	C-18第4層(仮)。台031216-12
	13	後鉢	口	I		口:丸。質:砂質。表:暗赤。裏:暗赤。混種:チャート。黒。混:大。粗。混量:多。焼:良。調:指頭取残。厚:5mm。他:反耳状突起。	E-20第4層(仮)上。台021114-7
	1	後鉢	口	I	□:33.8cm	口:丸。質:砂質。表:暗赤褐。裏:暗赤褐。混種:赤色粒。石英。混:大。2mm。混量:多。焼:中。調:丁家。厚:7mm。横紋:有。他:反耳突起。	E-17第4層(仮)下F(一括)東畦。台021205-15
	2	後鉢	口	I	□:14.6cm	口:角。質:砂<泥。表:淡赤。裏:淡赤。混種:光黒。混:大。赤色粒。黒白。混量:中。焼:中。調:裏ユビ痕明瞭。表:器面細かい。裏:器面はがれ。厚:5mm。横紋:有。他:山形リボン。	D-17東トレD07.D-17東トレ淡黒砂。D-17平掃。台040722-34.040629-29.050202-10
	3	後鉢	口	I	□:19.6cm	口:角。文:頸部に沈線1条。質:砂質。表:茶褐。裏:茶褐。混種:石英。黒。混:大。2mm。混量:多。焼:中。調:丁家。厚:5mm。横紋:有。他:口縁部肥厚。	D-17灰粘質。台040318-11
4	後鉢	口	I		口:角。質:砂質。表:明橙。裏:明橙。混種:透。赤色粒。混:大。2mm。混量:少。焼:中。調:裏ガラ。厚:5mm。他:口縁部肥厚。	D-17東トレ淡黒砂。台040629-29	
5	後鉢	口	I	□:11.6cm	口:丸。文:凸文横二本。質:砂質。表:淡赤。裏:淡赤。混種:石英。黒。混:大。粗。混量:多。焼:中。調:ナデ。厚:6mm。横紋:有。他:口縁直下凹線。	C-18第4層(仮)下淡灰白色部分掘下。台031217-17	
6	後鉢	口	I	□:10.2cm	口:角。質:砂質。表:淡黄。裏:淡黄。混種:石英。混:大。5mm。混量:多。焼:良。調:表丁家。厚:6mm。他:柄上部に有段。	H-G-19北東西壁崩落。台051011-1	
7	後鉢	胴			質:中。表:暗赤。裏:暗赤。混種:砂粒。混:大。細。混量:多。焼:良。調:表ナデ。裏:コナデ有。表裏:器面細かい。厚:1.1mm。他:頸上部に細沈線1条。	E-20第4層(仮)上。E-17第4層(仮)下。台021114-7.021118-14	
8	後鉢	口	2	□:28.1cm	口:角。質:砂質。表:淡橙。裏:淡黄。混種:白粒。混:大。粗。混量:多。焼:良。調:裏指痕。厚:9mm。	表鉢。台041027-4	
9	後鉢	口	2	□:24.6cm	口:舌。外反。質:砂質。表:橙。裏:橙。混種:光透。赤色粒。混:大。粗。混量:多。焼:良。調:ナデ。厚:8mm。	E-17?。台01?	
10	後鉢	口	2	□:20.8cm	口:直。平。質:砂質。表:暗赤。裏:灰赤。混種:石英。混:大。粗。混量:多。焼:中。調:裏ハケム状?。厚:7mm。横紋:有。	E-20第4層D20。台021129-4	
11	後鉢	口	2		口:角。質:砂質。表:暗黄。裏:茶褐。混種:貝白色粒。混:大。2mm。混量:多。焼:中。調:ナデ。厚:8mm。他:アバタ。	E-18第4層(仮)下第5層(仮)上北壁中央。台030328-11	
12	後鉢	口	2	□:28cm	口:丸。文:柄上部に沈線。質:砂>泥。表:黄橙。裏:黄橙。混種:石英。混:大。粗。混量:中。焼:中。調:裏ユビ痕有。表裏:器面細かい。厚:7mm。横紋:有。	D-18東トレ南一括+D-18D16001。台040227-10.040721-30	
第86図	1	後鉢	口	2	□:28.4cm	口:舌。文:補修孔有。質:砂質。表:淡赤。裏:黄赤。混種:黒。混:大。粗。混量:少。焼:良。調:表裏器面細かい。ナデ。厚:9mm。横紋:有。	E-17第3層(仮)下D19.E-17第4層(仮)下F(一括)東畦。台030312-23.021206-15
2	後鉢	口	2	□:30cm	口:舌。文:反状凸沿。口縁直下に破沈線。質:砂>泥。表:淡赤。裏:灰赤。混種:赤色粒。混:大。2mm。混量:少。焼:良。調:表ユビ痕有。裏:ユビ痕明瞭。ナデ。厚:9mm。横紋:有。他:煤痕有。	E-16平掃。台041111-33	
3	後鉢	口	2	□:23cm	口:角。質:砂質。表:茶褐。裏:赤褐。混種:石英。砂粒。混:大。2mm。混量:多。焼:悪。調:表光沢有。裏ユビ痕有。表裏:器面細かい。厚:7mm。	D-17黒粘質(片片混)。台040318-16	
4	後鉢	口	2	□:12.4cm	口:角。丸。外反。段。質:砂質。表:暗赤。裏:暗橙。混種:輝石。長石。混:大。粗。混量:多。焼:中。調:裏ユビ痕有。表裏:器面細かい。ナデ。裏面には指頭痕有。厚:6~7mm。横紋:有。	C-17北西白砂。台050113-5	

<凡例>「観察事項」の項目「口」:(口縁部の形)、「質」:(砂質・泥質)、「表」:(色)、「裏」:(色)、「混種」:(混入物の種類)、「混量」:(混入量)、「混大」:(混入物の大きさ)、「焼」:(焼成)、「調」:(器面調整)、「厚」:(器厚)、「他」:(その他など)「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録

表17 縄文晩期・貝塚後期土器観察一覧③

図版番号	時期	器形	口径	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第67回 国版	3	後深鉢	口2	口:20.6cm	口:角:質:砂質,表:暗黒,裏:暗茶,混種:黒,透:白色粒,混大:細,混量:多,燒:中,調:表:ユビ痕有,表裏:器面細かい,厚:8mm,積痕:有,他:平。	D-18東トレ灰粘土,台040226-14
	4	後深鉢	口2	口:16cm	口:角:質:砂質,表:暗茶,裏:暗黒,混種:光,混大:細,混量:中,燒:中,調:表:ユビ痕有,表裏:器面細かい,ナデ,裏:丁寧,厚:7~8mm,積痕:有,他:頸部僅ナデ。	E-17第5層(仮)D14,台030312-16
	5	後深鉢	口2	口:23cm	口:角:質:砂質,表:暗橙,裏:暗茶,混種:透:赤色粒,混大:2mm,混量:多,燒:悪,調:表:ユビ痕有,ナデ,厚:7mm。	E-17第5層(仮),台021115-26
	6	後深鉢	口2	口:27.9cm	口:角:質:砂>泥,表:暗赤,裏:暗赤,混種:黒,透:粗,混大:細,混量:少,燒:良,調:表:ユビ痕有,裏:ヘラケスリ,厚:10mm,積痕:有。	E-17第3層(仮),台020809-12
	7	後深鉢	口2	口:17.8cm	口:角:質:砂>泥,表:淡茶,裏:淡橙,混種:石英,混大:3mm,混量:少,燒:良,調:表裏:器面細かい,表面に縦位ナデ痕,厚:8mm,積痕:有,他:く。	C-19・20第4層東黒土.C-19-20第4層灰粘黒土,台040330-39.040308-15
	8	後深鉢	口2	口:12.8cm	口:丸:質:砂>泥,表:淡茶,裏:淡橙,混種:貝光透,混大:1mm,混量:少,燒:良,調:表:ユビ痕有,表裏:器面細かい,ナデ,厚:6mm,他:器形・晩期の流れ?口縁<く>アバタ,粘土帯接合部分より整っている。	D-17黒砂,台040309-2
	9	後壺	口2	口:12cm	口:丸:質:砂>泥,表:暗橙,裏:暗茶,混種:細粒,砂,混大:細,混量:僅少,燒:良,調:表裏:ユビ痕有,表裏:器面細かい,ナデ,厚:3mm。	C-D-18黒砂,台040310-5
	10	後鉢	口2	口:26.3cm	口:角:質:砂>泥,表:暗黄,裏:淡黄,混種:光,混大:2mm,混量:少,燒:良,調:表:ナデ丁寧,厚:6mm,積痕:有。	F-19東トレ細網,台040224-4
	11	後深鉢	口2		口:角:質:砂質,表:淡黄,裏:淡黄,混種:黒,混大:細,混量:少,燒:中,調:器面:丁寧,厚:3mm,積痕:有。	C-19第4層(仮),台031204-14
	12	後深鉢	口2	口:19.9cm	口:角:質:砂>泥,表:淡橙,裏:淡橙,混種:透,混大:細,混量:少,燒:良,調:表裏:器面細かい,厚:7mm,積痕:有,他:く。	D-17東トレ第4層(仮)下,台050715-3
	13	後深鉢	口2		口:丸:直口,質:砂質,表:暗茶,裏:暗赤,混種:石英,黒,混大:2mm,混量:中,燒:良,調:表裏:器面細かい,表面指痕,表面丁寧,厚:3mm,積痕:有。	D-17黒砂,台050202-4
	1	後深鉢	口3	口:28.8cm	口:舌,文:輪状凸帯,質:砂>泥,表:淡黄,裏:淡橙,混種:白色顆粒,混大:細,混量:少,燒:悪,調:内外器面とも粗顆,厚:1.1mm,他:砲弾状の器形。	E-17第4層(仮)下D1,台021115-22
	2	後深鉢	口5	口:25.1cm	口:角:文:幅広窪縁6mm,不規則,質:砂質,表:暗黄,裏:明黄,混種:黒,白色粒,混大:細,混量:中,燒:中,調:表:ユビヘラ,裏:ユビヘラ,厚:6~7mm,積痕:有。	E-17第5層(仮)上D3.E-20(仮)上,台021114-7.021206-39
	3	後?	口3	口:15.7cm	口:丸:質:砂>泥,表:暗橙,裏:暗橙,混種:石英,混大:1mm,混量:少,燒:中,調:表:ユビ痕有,ユビ粗,厚:12mm,積痕:有。	E-18第4層(仮)上,台021023-5
4	後壺	口5	口:18.7cm	口:丸:玉縁,質:砂>泥,表:淡黄,裏:淡黄,混種:白,混大:粗,混量:中,燒:良,調:表裏:器面細かい,内器面:丁寧,厚:5mm,積痕:有,他:口縁部内側に玉縁。	E-17(以北東北壁,台030825-27	
5	後壺	口5	口:19.1cm	口:角:質:砂質,表:暗黄,裏:暗黄,混種:石英,混大:細,混量:少,燒:中,調:表:ユビ痕有,厚:5mm,積痕:有。	C-19北トレ黒土,台040308-7	
67	後壺	口5	口:14cm	口:丸:L,質:泥質,表:赤,裏:暗灰,混種:石英,赤褐色物等混入,混大:3mm,混量:少,燒:中,調:表裏:器面細かい,表面に指痕残存,厚:7mm,積痕:有,他:ややアバタ状。	D-19第4層(仮)東掘下,台041215-2	
7	後壺	口5	口:12.1cm	口:角:質:泥質,表:明赤,裏:暗灰,混種:石英,黒,混大:1mm,混量:中,燒:良,調:表:ユビ痕有,表:器面細かい,裏:器面はがれ,厚:9mm,積痕:有,他:弥生様。	C-17北トレ(以北,台040330-13	
8	後壺	口5	口:13.1cm	口:丸:質:砂>泥,表:暗赤,裏:暗赤,混種:石英,混大:2mm,混量:少,燒:良,調:表:ユビ痕有,裏:ユビ痕明瞭,表裏:器面細かい,外器面ヘラナデか?,厚:9mm。	H-19北畦掘下.H-19灰粘土一黒土,台050904-17.041214-9	
9	後壺類	5		口:角:質:砂>泥,表:淡橙,裏:淡橙,混種:石英,混大:細,混量:少,燒:良,調:表裏:ユビ痕有,裏:ユビ痕顕著,表ナデ,厚:5mm。	E-20ヤブ掘下,台020918-3	
10	後壺	口5	口:19.1cm	口:角:質:砂質,表:暗黄,裏:淡灰,混種:透:黒,混大:細,混量:少,燒:中,調:表:器面細かい,裏:器面はがれ,ナデ,厚:7mm,他:玉縁状。	C-D-18黒砂,台040310-5	
11	後壺	口5	口:10.2cm	口:丸:質:泥質,表:淡橙,裏:淡橙,混種:赤色粒,混大:細,混量:少,燒:良,調:表:器面細かい,裏:器面はがれ,厚:5mm。	E-17平塚第4層,台020808-16	
12	後壺	口5	口:7.4cm	口:角:丸:質:砂>泥,表:茶褐,裏:茶褐,混種:石白顆粒,混大:細,混量:中,燒:良,調:表:ユビ痕有,表裏:器面細かい,厚:7mm。	ATP-20黒土.ATP-20産土,台040107-24.040109-16	
13	後壺	口5	口:14cm	口:角:質:砂質,表:明橙,裏:明橙,混種:透:石英,混大:1mm,混量:中,燒:中,調:表:ナデ,表:器面細かい,裏:器面はがれ,厚:7mm,他:口縁部玉縁,口縁部山形?	D-19第4層(仮)南側,台031204-15	
14	後壺	口5	口:8.5cm	口:く:角,口:平短文,凸:凸帯,三角:質:泥質,表:明黄,裏:明灰,混種:透,混大:細,混量:少,燒:中,調:表:器面細かい,裏:器面はがれ,細かい凸凹有,厚:8mm,他:口縁部趾子。	C-19第4層(仮)掘下D,台031204-14	

<凡例>「観察事項」の項目「口:」(口縁部の形態),質:(砂質・泥質),表:(色),裏:(色),混種:(混入物の種類),混量:(混入量),混大:(混入物の大きさ),焼:(焼成),調:(器面調整),厚:(器厚),他:(その他など)。

「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDI:取戻

表17 縄文晩期・貝塚後期土器観察一覧④

図録番号	時期	器形	部位	編	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第68回 版 106	15	後鉢	深鉢	口	5	口:角。質:砂>泥。表:明赤。裏:明赤。混種:石英。透。混大:粗。混量:多。焼良。調:裏・ヨコナテ。厚:6mm。他:弥生模。口唇部に幅広凹線。	C-18第5層(仮)平面削り下げ。台031224-12
	16	後鉢	深鉢	口	5	口:丸。質:砂>泥。表:淡黄。裏:淡黄。混種:石英。石灰細粒。混大:3mm。混量:多。焼悪。厚:10mm。他:アバラ。	E-17第5層(仮)。台021115-20
	17	後壺	壺	口	5	口:角。文:沈泥羽状。質:砂質。表:暗茶。裏:暗橙。混種:石英。混大:細。混量:少。焼良。調:表裏器面細かい。ハケ目状調整。厚:10mm。積痕:有。他:粘土帯接合部に破損。	C-D-19第3~4層(仮)東壁。台050914-16
	18	後壺	壺	口	5	口:やや尖り気味。質:砂質。表:淡茶。裏:淡黄。混種:石英。光黒。混大:2mm。混量:多。焼良。調:表器面細かい。裏器面はがれ。厚:6mm。積痕:有。他:幅3.5mmの凹線が横位に2条。	C-D-19黄カワ。台040310-25
	19	後鉢	深鉢	口	5	口:角。質:砂>泥。表:明茶。裏:明茶。混種:石英。砂粒。混大:粗。混量:多。焼良。調:表裏・ユビ痕有。表器面細かい。裏器面はがれ。厚:6mm。他:口縁部に細沈泥1条。	E-19第4層(仮)中央。台020920-13
	20	後壺	壺	口	5	口:角。文:斜沈泥+羽状。質:砂質。表:茶褐。裏:暗黄。混種:石英。黒。赤色粒(透明)。混大:2mm。混量:多。焼悪。厚:9mm。他:横位の沈泥2条後羽状・斜沈泥。	E-18米埋土。台030120-6
	1	後?	?	口	5	口:丸。文:凸帯文・U逆じ字状。質:中。表:暗茶。裏:暗茶。混種:石英。混大:2mm。混量:少。焼良。厚:4mm。他:平。	C-19北トレ機平掘平壁掘。台040318-29
	2	後壺	壺	口	5	口:丸。文:斜沈泥。横の條斜。質:砂質。表:明赤。裏:明赤。混種:石英。チャート。混大:粗。混量:多。焼中。調:ナテ。厚:10mm。積痕:有。他:模。	D-19第4層(仮)東掘下。台041216-3
	3	後壺	壺	口	5	口:角。質:砂質。表:黄。裏:黄。混種:透黒。混大:粗。混量:多。焼良。調:ナテ。厚:9mm。積痕:有。他:口唇部に凹線1条。	C-19北トレ第4層(仮)。台040319-22
	4	後鉢	深鉢	口	5	口:角。質:砂>泥。表:淡赤。裏:淡黄。混種:石英。混大:2mm。混量:多。焼良。調:表裏器面細かい。丁寧。厚:11mm。積痕:有。他:口唇部に凹線?	E-20中台全下5。台021129-4
	5	後鉢	深鉢	口	5	口:角。質:砂質。表:淡茶。裏:淡橙。混種:光透。混大:細。混量:中。焼中。調:表裏・ユビナテ。厚:9mm。積痕:有。他:粘土帯接合部より破損。口縁端部外に彫らむ。	C-19-20平壁掘。台040227-19
	6	後鉢	深鉢	口	5	口:丸。文:無文。質:砂>泥。表:淡橙。裏:淡橙。混種:光黒。混大:3mm。混量:中。焼良。調:表・ナテ。裏・ユビ痕有。厚:7mm。他:無文。	5トレ淡刷陶砂。台020325-26
	7	後鉢	鉢	口	5	口:丸。文:細かな凸凹有。質:砂質。表:黄褐。裏:明茶。混種:石灰粒。橙色粒(透明)。混大:粗。混量:中。焼中。調:口縁直下横ナテ。裏横位の刷毛目調整。厚:4mm。他:口縁端部。肥厚。	TP(12)表探。台021125-57
	8	後壺	壺	口	5	口:丸。質:砂>泥。表:暗黄。裏:暗黄。混種:光黒。透。混大:粗。混量:中。焼中。調:表器面細かい。裏器面はがれ。厚:9mm。他:外反。	F-19東トレ全溝掘。台040915-15
	9	後壺	壺	口	5	口:丸。質:砂>泥。表:淡橙。裏:淡橙。混種:黒。石英。混大:2mm。混量:中。焼良。調:表器面細かい。裏器面はがれ。厚:9mm。積痕:有。	C-19-20第4層(仮)灰結黒土。台040308-15
	10	後鉢	深鉢	口	5	口:丸。質:中。表:暗茶。裏:灰茶。混種:石英。チャート。混大:3mm。混量:中。焼中。調:表・ユビ痕有。裏・ユビ調整有。表裏器面細かい。厚:9mm。積痕:有。他:L。	ATP-20。台031222-28
	11	後鉢	鉢	口	5	口:一部L角。質:砂質。表:淡黄。裏:淡黄。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼悪。調:縦。厚:7mm。	C-24日ロジ試掘土下砂50。台041007-9
	12	後鉢	鉢	口	5	口:L-ハブラシ。角。質:砂質。表:明黄。裏:明黄。混種:石英。透。混大:粗。混量:多。焼悪。調:縦。厚:7mm。	H-G-19米埋土。台041116-1
	13	後鉢	鉢	口	5	口:L角。質:中。表:淡黄。裏:淡黄。混種:砂粒。混大:細。混量:少。焼良。調:裏・ユビ痕有。表裏器面細かい。丸粒。厚:8mm。	C-19北トレ黒土。C-19第4層(仮)黒土。台040308-7,040308-4
	14	後鉢	深鉢	口	5	口:丸。質:砂質。表:淡黄。裏:淡灰。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼良。調:表・ユビ痕有。厚:8mm。	E-20中台全下5L。台021129-4
15	グ	罎	口	5	口:舌。質:砂<泥。表:明茶。裏:明茶。混種:砂粒。混大:2mm。混量:少。焼良。調:表・ユビ痕有。表裏器面細かい。厚:8mm。他:蓋の可能性有?	H14-グスク(2256)E-17第5層(仮)F17。台030312-21	
16	後鉢	鉢	口	5	口:L角。質:砂<泥。表:淡黒。裏:茶。混種:石英。光透。混大:細。混量:中。焼中。調:丁寧なナテ。厚:8mm。他:蓋の可能性有?	D-17東トレ北無砂。台040628-1	
17	後鉢	鉢	口	5	口:丸。質:砂質。表:明灰。裏:明茶。混種:透。混大:細。混量:中。焼良。調:表・ユビ痕有。裏・ユビナテ明瞭。表裏器面細かい。厚:7mm。他:表面アバラ状。	D-19第4層(仮)南。台051205-23	
18	後鉢	鉢	口	5	口:角。質:砂質。表:淡橙。裏:淡橙。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼中。調:ナテ。厚:7mm。他:逆く。	5トレ淡刷陶砂。台020225-26	
19	後鉢	鉢	口	5	口:角。質:泥質。表:茶。裏:茶。混種:石英。混大:粗。混量:少。焼良。調:ナテ。厚:5mm。他:浅粒。縦耳。	E-18第4層(仮)下。台021115-13	

<凡例>「観察事項」の項目①口(口縁部の形態)、質(砂質・泥質)、表(色)、裏(色)、混種(混入物の種類)、混量(混入量)、混大(混入物の大きさ)、焼(焼成)、調(器面調整)、厚(器厚)、他(その他など)「地区・台帳番号」の項目①は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCに収録

表17 縄文晩期・貝塚後期土器観察一覧⑤

図版番号	種別番号	時期	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第10図	20	後	壺	頸	5		文:横-三角,肥-凸,質:中,表:橙褐,裏:淡黄,混種:光黒,混大:3mm,混量:多,燒:良,調:裏-ユビ痕有,厚:7mm,積痕有。	C-19北トレ第4層(仮),台040319-23
	21	後	壺	肩	5		質:砂質,表:暗赤,裏:暗赤,混種:石英,チャート,混大:粗,混量:多,燒:中,調:裏-ユビ痕有,厚:9mm,他:横-沈線。	D-19第4層(仮)東掘下,台041215-2
第30図	1	後	壺	肩	5		文:凸横-1條,質:中,表:暗茶,裏:赤,混種:砂粒,混大:細,混量:中,燒:良,調:裏-ユビ痕有,厚:9mm,積痕有。	ATP-20,台031222-28
	2	後	壺	肩	5		口:角,文:厚-三条,凸帯,質:砂質,表:淡黄,裏:淡黄,混種:黒,白色粒,混大:粗,混量:中,燒:良,調:ナデ,厚:8mm。	D-19西壁削除,台050912-26
	3	後	壺	肩	5		文:凸横-2條,質:砂質,表:暗茶,裏:暗茶,混種:透明,白色粒,混大:粗,混量:中,燒:悪,調:表-器面細かい,裏-器面はがれ,厚:7mm。	C-19北トレ準層,台040317-7
	4	後	壺	肩	5		文:凸帯-三角,質:砂<泥,表:淡茶,裏:淡茶,混種:白色粒,混大:細,混量:少,燒:良,調:表-器面細かい,裏-器面細かい,厚:10mm。	C-19北トレ準層,台040317-7
	5	後	壺	肩	5		文:凸帯-三角,質:砂>泥,表:淡茶,裏:暗茶,混種:石英,光黒,混大:粗,混量:多,燒:中,調:表-器面細かい,裏-器面はがれ,厚:9mm,積痕有。	E-18第4層(仮),台021114-13
第30図	6	後?	底	5	底:15cm		文:凸帯-丸,質:砂>泥,表:明赤,裏:明赤,混種:石英,混大:細,混量:少,燒:中,調:表裏-器面細かい,指痕有,厚:8-10mm。	E-18第3層(仮)?,台021028-10
	7	後	壺	肩	5		文:沈-凹,質:砂質,表:明黄,裏:明黄,混種:石英,混大:2mm,混量:多,燒:良,調:裏-ユビ,厚:5mm。	E-20甲(2)全F50,台021129-4
第30図	8	後	壺	肩	5		質:砂質,表:暗赤,裏:暗灰,混種:赤色粒,透明,黒,混大:2mm,混量:中,燒:中,調:裏-ユビ,積み痕,厚:7mm。	D-17東トレ第4層(仮)下北,台040628-3
	9	後	壺	肩	5		文:弧,質:泥質,表:明橙,裏:明黄,混種:白色粒,混大:2mm,混量:中,燒:良,調:表-器面細かい,裏-器面はがれ,厚:6mm,他:補修孔有り,径7mm。	C-17北東白砂,台050201-6
第111図	10	後	鉢?	底	平C	口:81.8cm	表:淡黄,調:表裏-器面細かい,厚:5mm,積痕有。	E-17第4層(仮)下下(一括)東掘,台021206-15
	11	晩	鉢	底	丸A	口:81.31cm	口:舌,質:中,表:淡橙,裏:淡茶,混種:石英,混大:2mm,混量:中,燒:良,調:表-器面細かい,厚:5-6mm,他:夏状突起-縦耳。	E-20甲(2)全D18,台021129-4
第111図	12	晩?	底	平D			質:砂質,表:黄橙,裏:黄橙,混種:石英,混大:3mm,混量:多,燒:中,調:表-丁字,厚:6mm,他:蛇ノ目状の脚洞落。	D-20甲(2)全D11,台021129-4
	13	晩?	底	平D	底:12cm		質:泥質,表:明黄,裏:明橙,混種:石灰?,混大:粗,混量:多,燒:良,調:表裏-器面細かい,厚:5-13mm,他:脚?,アバタ。	H-G-19第5層(仮)黄砂層下,台040929-22
第111図	14	後	深鉢	底	丸A	口:17.1cm	口:角,質:砂質,表:暗橙,裏:暗橙,混種:透明,石英,混大:1mm,混量:中,燒:悪,調:表-丁字,厚:6mm。	C-18人上No.59,50,台041217-22,23
	1	晩	底	丸A			質:砂質,表:暗橙,裏:暗橙,混種:透明,石英,混大:1mm,混量:中,燒:悪,調:表-丁字,厚:6mm。	E-17第5層(仮),台021115-20
第91図	2	晩	底	丸A			質:砂質,表:暗茶,裏:暗橙,混種:黒,透明,石英,混大:2mm,混量:中,燒:良,調:丁字,厚:8mm,他:丸底。	C-19第3~第4層(仮)北壁,台050914-5
	3	晩	底	丸B	底:5cm		質:砂質,表:黒茶,裏:暗灰,混種:白色細粒,混大:細,混量:多,燒:良,調:表-丁字,厚:7mm,積痕有。	C-D-18黒砂,台040310-5
第91図	4	晩	底	丸B			口:丸,質:砂質,表:明茶,裏:暗灰,混種:黒,白色細粒,混大:1mm,混量:多,燒:中,調:表-ナデ,厚:6mm,他:丸底。	D-17黒砂,台040300-2
	5	後	底	丸B			質:泥質,表:淡赤,裏:暗茶,混種:石灰灰,混大:粗,混量:多,燒:中,調:ナデ,厚:6mm。	D-19西壁削落,台050701-1
第91図	6	後	底	丸A			質:中,表:赤茶,裏:暗黄,混種:金雲母,石英,混大:細,混量:少,燒:良,調:表刷毛目後ナデ裏刷毛目,厚:7mm,他:丸底。	E-19下上7418,台021121-40
	7	後	底	尖A	底:3cm		質:砂>泥,表:暗茶,裏:暗茶,混種:チャート,混大:3mm,混量:中,燒:中,調:表-ユビナデ。	E-19第5層(仮)上,台030117-5
第113図	8	後	底	尖A	底:4.5cm		質:砂>泥,表:黄橙,裏:黄橙,混種:棕色粒,石英,チャート,混大:2mm,混量:少,燒:良,調:表-指頭痕残る,積痕有。	E-20第3(仮)下-第4層(仮)直上,台020827-19
	9	後	底	尖A	底:5.9cm		質:中,表:淡橙,裏:淡灰,混種:棕色粒,石英,混大:1-5mm,混量:少,燒:良,調:表-ヘナナデ?,厚:8mm,他:くびれ平底。	D-17東トレ第4層(仮)下南,台040628-6

<凡例>「観察事項」の項目(口:(口縁部の形態)、質:(砂質・泥質)、表:(色)、裏:(色)、混種:(混入物の種類)、混量:(混入量)、混大:(混入物の大きさ)、焼:(焼成)、調:(器面調整)、厚:(器厚)、他:(その他など)「地区・台帳番号」の項目(台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに4連結)

表17 縄文晩期・貝塚後期土器観察一覧⑥

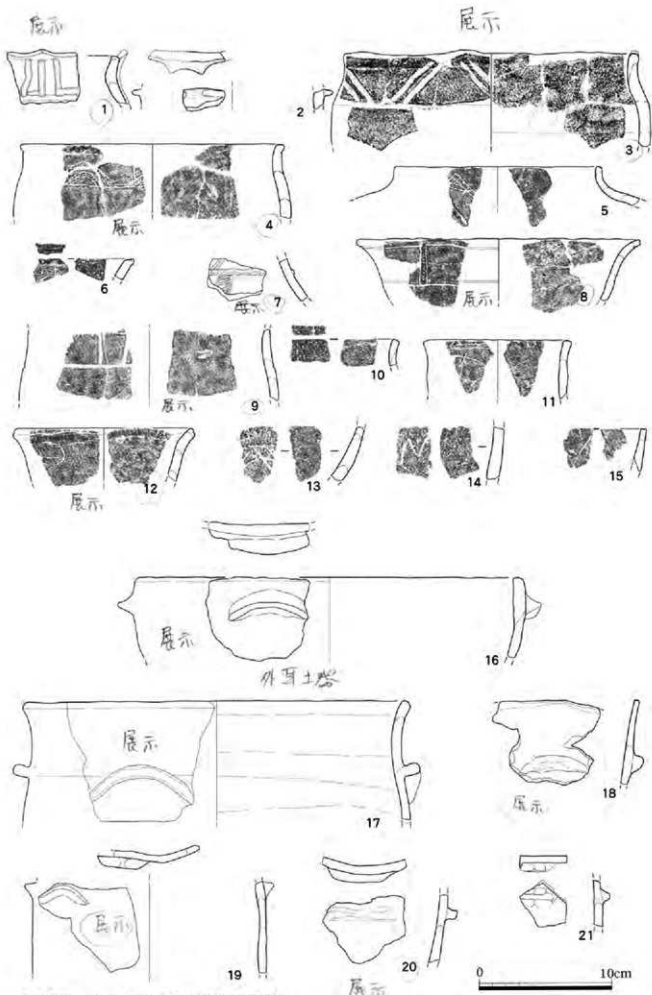
図版番号	種別	時期	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号		
113	土器	後	底	尖A		質:中。表:橙褐。裏:暗茶。混種:白色細粒。混大:細。混量:少。焼:良。調:表指圧痕。	H-G-19北東西横溝落。台050629-1		
						底:3.4cm	質:砂質。表:淡黄。裏:淡黄。混種:白。混大:細。混量:多。焼:中。調:表指圧痕。積痕:有。	F-19第4層中～第5層上。台031209-6	
						底:3cm	質:中。表:橙褐。裏:黄褐。混種:橙色粒。白色粒。混大:2mm。混量:少。焼:良。調:表指圧痕。厚:10mm。積痕:有。	C-19-20第4層土壁西。台050802-1	
						尖B	底:1.9cm	口:尖底。質:砂>泥。表:暗赤。裏:淡灰。混種:石英。混大:2mm。混量:中。焼:良。調:ナデ。厚:7mm。他:尖底。	E-19第4層(仮)F65。台021105.06-1
						尖B	底:2.6cm	質:泥質。表:赤茶。裏:黄茶。混種:石英。混大:3mm。混量:少。焼:中。調:ナデ。指圧痕。厚:7mm。積痕:有。	C-19-20第4層飯黒砂。台040308-10
						尖B	底:3cm	口:丸。質:泥質。表:黄橙。裏:黄橙。混種:チャート。混大:粗。混量:多。焼:良。調:表:ユビ。裏:ハケ。厚:6mm。他:丸。平底。	E-20平盤埴。台030924-33
						尖B	底:2cm	質:中。表:橙褐。裏:橙褐。混種:黒。混大:細。混量:少。焼:良。調:表指痕。積痕:有。厚:7mm。	F-19東ト黒砂。台040225-13
						尖B	底:10cm	質:砂<泥。表:暗緑。裏:暗褐。混種:石英。混大:1～5mm。混量:少。焼:中。調:ナデ。指圧痕。厚:9mm。他:尖底。	C-18(以)北横粘土掘下。台040622-12
						尖B	底:1.4cm	口:尖。質:砂>泥。表:淡赤。裏:黄茶。混種:石英。チャート。粘板岩。混大:粗。混量:多。焼:中。調:ナデ。厚:9mm。積痕:有。他:尖底。	C-D-18黒砂。台040310-5
						尖B	底:2.4cm	口:尖底。質:砂<泥。表:暗茶。裏:淡黒。混種:石英。石灰質。混大:1～10mm。混量:中。焼:良。調:ナデ。厚:7mm。他:尖底。	C-18第4層(仮)。台051212-6
						尖B	底	質:砂>泥。表:黄灰。裏:黄白。混種:黄色粒。混大:2mm。混量:少。焼:中。調:ナデ。	C-18第4層～第5層(仮)。台031218-27
						尖B	底:1.5cm	質:中。表:暗茶。裏:暗茶。混種:橙色粒。白色粒。混大:細。混量:少。焼:中。調:ナデ。厚:3mm。積痕:有。他:丸の1 4次の窪み。	C-19第3下溝状遺構。台031201-11
						尖B	底	文:尖凸。質:砂<泥。表:赤赤。裏:暗茶。混種:石英。混大:2mm。混量:少。焼:良。調:表:ユビ。他:5角形の窪み。	F-19東ト米塚土。台040310-22
						尖B	底	質:中。表:赤。裏:暗灰。混種:橙色粒。透明。混大:細。混量:少。焼:中。調:表:ユビ。厚:4mm。他:平上。浮状。弥生様か？	E-19南横溝除。台050912-19
						平A	底:6.6cm	質:砂<泥。表:明茶。混種:金雲母。混大:細。混量:中。焼:良。調:表刷毛目調整痕。厚:5～6mm。積痕:有。他:平底。	D-19第5層(仮)白砂。台040109-3
						平A	底:11cm	質:砂質。表:明茶。裏:明茶。混種:チャート。混大:1mm。混量:少。焼:良。調:裏:ハケ。厚:6mm。他:平。	C-19第4層(仮)石集北黒砂。台040323-12
						平A	底:9.3cm	質:砂質。表:明茶。裏:暗灰。混種:黄。白色細粒。混大:細。混量:少。焼:良。調:裏:ユビ。厚:7mm。他:平。	D-19犬家埋設土。台031128-1
						平A	底:12cm	質:砂質。表:明茶。裏:黄茶。混種:石英。黒。混大:3mm。混量:少。焼:中。調:表指ナデ。厚:10mm。積痕:有。他:平底。	E-20第4層(仮)D265土塊5。台030124-70
						平A	底:6.2cm	質:砂>泥。表:赤赤。裏:赤茶。混種:石英。混大:2mm。混量:中。焼:良。調:表:丁。厚:6mm。他:平底。	E-22-23黒褐マーブル。台040108-19
						平A	底:5.6cm	質:中。表:灰質。裏:灰褐。混種:石英。混大:3mm。混量:多。焼:良。調:ナデ。厚:5mm。積痕:有。他:平底。	F-19第4層(仮)下バ以南。台050225-1
						平B	底:6.6cm	質:砂<泥。表:淡褐。裏:淡黒。混種:石英。混大:2mm。混量:少。焼:中。厚:9mm。積痕:有。他:平底。	C-19-20黒濁土。台040226-25
						平B	底:6cm	質:砂>泥。表:橙褐。裏:淡褐。混種:黒。混大:細。混量:中。焼:良。調:表:ユビ。他:平底。	C-19-20第4層東堀下。台040803-5
						平B	底	質:砂質。表:明灰。裏:明灰。混種:黒。透。混大:細。混量:中。焼:良。厚:5mm。他:平。丸。	E-20第4層(仮)。台020912-8
						平B	底:5cm	質:砂>泥。表:赤褐。裏:赤褐。混種:黒。混大:細。混量:少。焼:中。調:ナデ。他:平底。	C-19-20第4層飯黒砂。台040308-10
						平C	底:5.6cm	口:平。質:砂>泥。表:赤褐。裏:赤褐。混種:透明。白色細粒。混大:細。混量:少。焼:良。厚:6mm。他:平底。	E-18第3(仮)F?。台021028-9

<凡例> 観察事項の項目(口:口縁部の形態、質:(砂質・泥質)、表:(色)、裏:(色)、混種:(混入物の種類)、混量:(混入量)、混大:(混入物の大きさ)、焼:(焼成)、調:(器面調整)、厚:(器厚)、他:(その他など)
「地区・台帳番号」の項目(台)は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに取換。

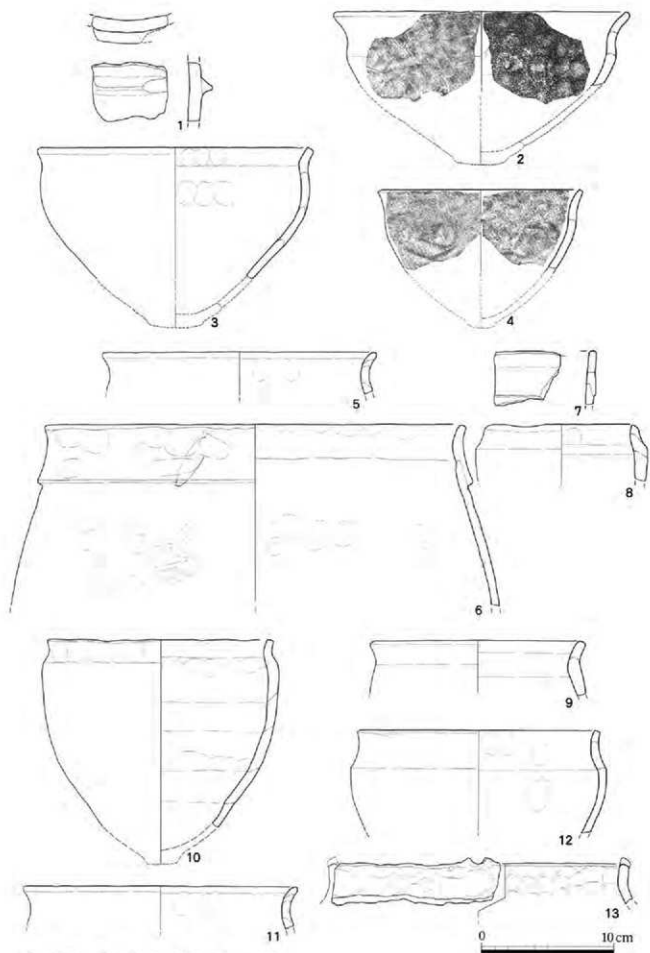
表17 縄文晩期・貝塚後期土器観察一覧⑦

図版番号	編年番号	時期	器形	部位	類	寸法	観察事項	地区・台帳番号
第91回国版	35	後	底	平C	底:6.8cm	質:砂>泥。表:茶黄。裏:茶黄。混種:黒。透明。白色細粒。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表:ナデ。厚:3mm。横痕:有。	E-17第4層(仮)+E-18第4層(仮)。 台021113-20,021114-13	
	36	後	底	平C		質:砂<泥。表:黄白。裏:黄白。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:良。調:ヘラナデ?。厚:6mm。横痕:有。他:移入土器。	5トレ濱場マン混。 台020301-24	
	37	後	底	平C	底:4.6cm	質:混質。表:暗赤。裏:暗黒。混種:黒。混大:粗。混量:少。焼:良。調:表:ナデ。厚:6mm。他:くびれ。脚?を蛇の目状に貼付。	C-19-20第4層仮中央~南サブ3m層上。台040312-28	
	38	後	底	平D		質:砂<泥。表:淡茶。裏:淡茶。混種:石英。混大:3mm。混量:多。焼:良。調:丁寧。厚:9mm。横痕:有。	C-19-20第4層仮中央~東。 台040311-43	
	39	後	底	平D		質:砂>泥。表:暗茶。裏:暗茶。混種:石英。混大:粗。混量:多。焼:中。調:表丁寧。厚:2.4mm。他:平底。	D-17第4層下黒砂掘下。 台060210-23	
	40	後	底	平D		質:中。表:灰黄。裏:茶褐。混種:橙色粒。白色細粒。混大:細。混量:僅少。焼:中。	E-20第4層(仮)上。F-19東ト レ黒砂 台021114-7,040226-13	
	41	後	底	平D	底:7.2cm	質:砂質。表:明橙。裏:明橙。混種:石英。混大:2mm。混量:少。焼:悪。調:ナデ。	H-G-19西東北壁。 台050728-2	
	42	後	底	平D	底:6.1cm	文:尖底+平底。質:中。表:淡茶。裏:茶褐。混種:石英。混大:細。混量:少。焼:良。調:ナデ。厚:10mm。他:くびれ平底。	D-17東トレ灰粘土。 台040226-4	
	43	後	底	平D		質:中。表:暗灰。裏:明黄。混種:透明。混大:2mm。混量:少。焼:良。他:くびれ。	D-19南壁粘質。 台040312-22	
	44	後	底	平D	底:3cm	質:砂質。表:茶黄。裏:黄白。混種:石英。輝石。混大:粗。混量:少。焼:中。調:表:エヒナデ。厚:4~6mm。他:平底。	E-18第4層(仮)南壁崩落。 台050915-2	
45	後	底	平D	底:5.7cm	質:中。表:明橙。裏:明橙。混種:石英。混大:2mm。混量:少。焼:良。調:刷毛目。底面光沢有。厚:7mm。他:平底。	E-19南壁粘質。 台050912-19		

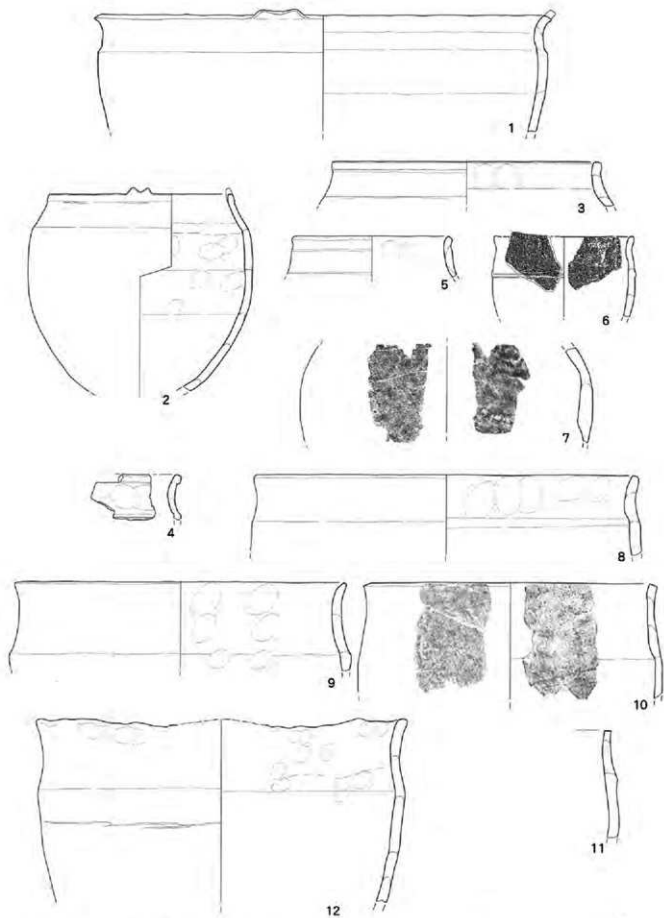
<凡例>「観察事項」の項目□: (口縁部の形)。質: (砂質・泥質)。表: (色)。裏: (色)。混種: (混入物の種類)。混量: (混入量)。混大: (混入物の大きさ)。焼: (焼成)。調: (器面調整)。厚: (器厚)。他: (その他など)
「地区・台帳番号」の項目「台」は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録



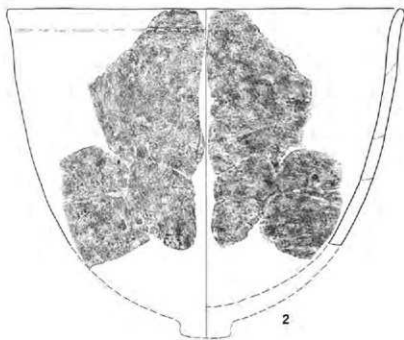
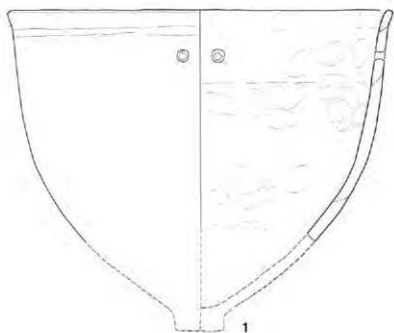
第83圖 縄文晩期・貝塚後期土器①



第84図 縄文晩期・貝塚後期土器②

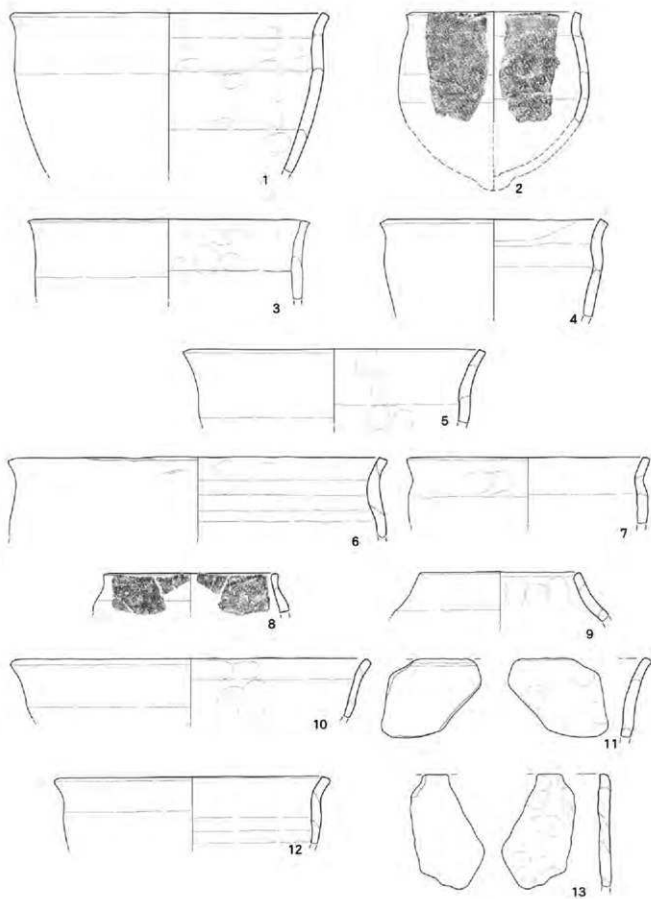


第85図 縄文晩期・貝塚後期土器③



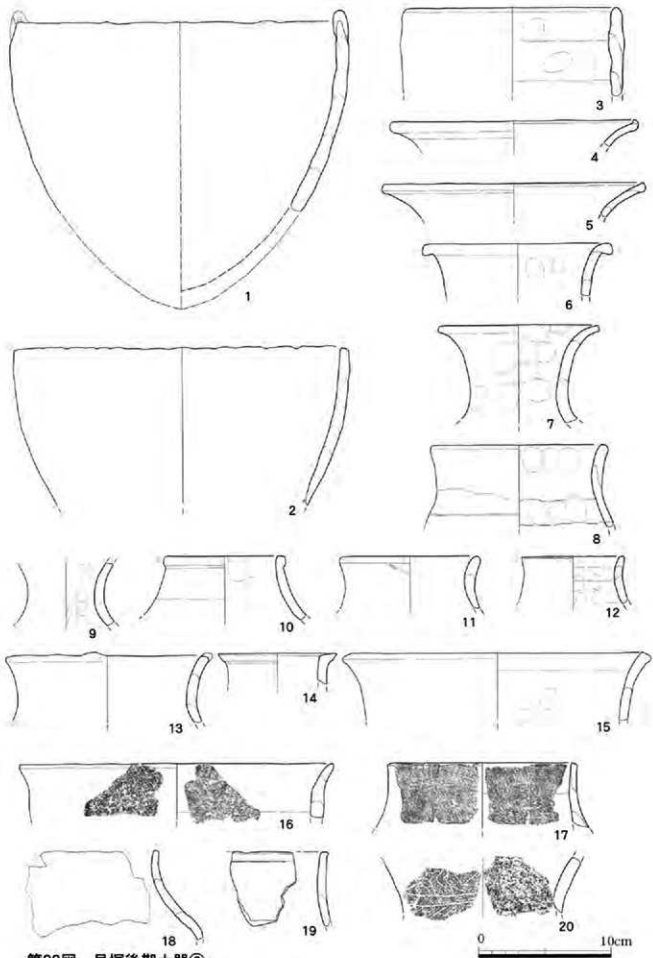
第86図 貝塚後期土器④

0 10cm



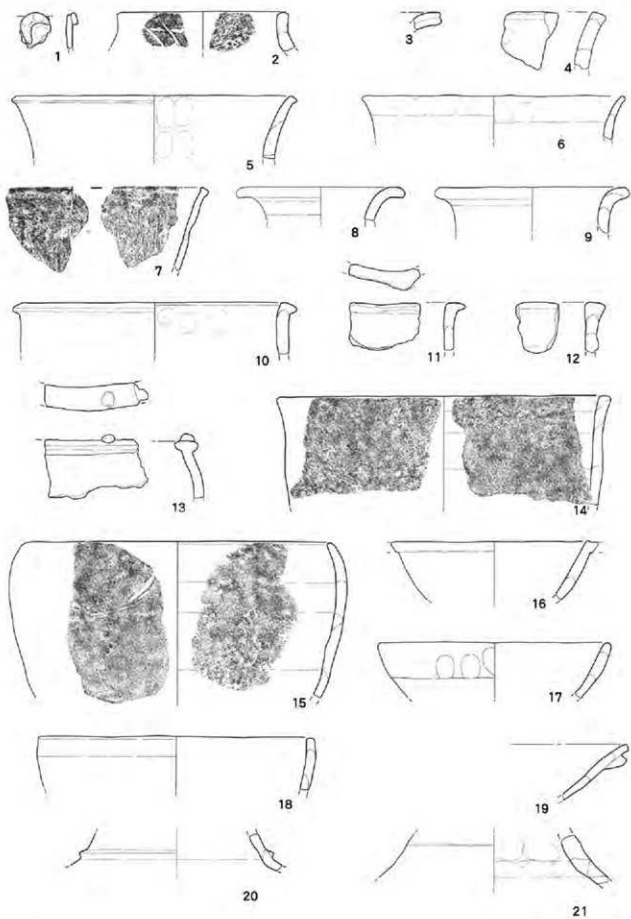
0 10cm

第87図 貝塚後期土器⑤



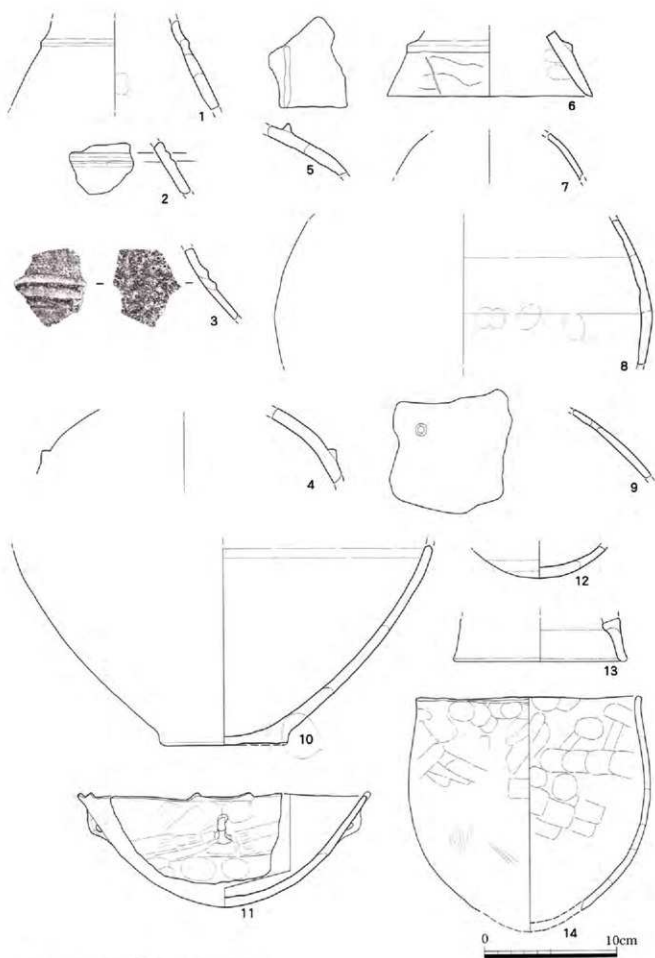
第88圖 貝塚後期土器⑥

0 10cm

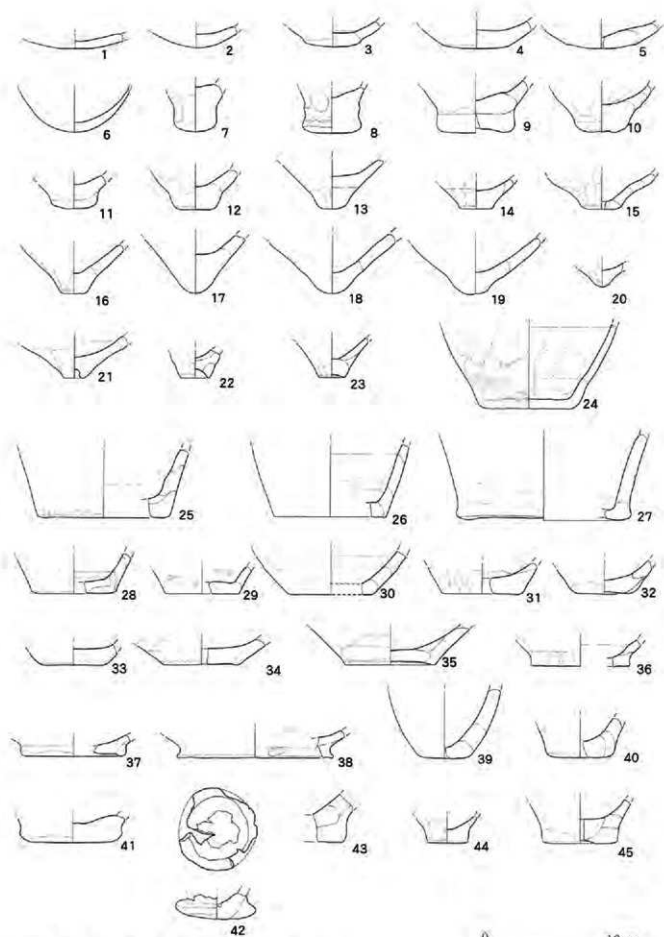


第89図 貝塚後期土器⑦

0 10cm



第90圖 縄文晩期・弥生土器⑧



第91圖 縄文晩期・貝塚後期土器・底部⑨

0 10cm

2. 石器

砂丘区出土の石器は、スレート製品1個、石斧231個、くほみ石31個、石皿37個、敲き石219個、すり石32個、石錘1個、円盤石器6個、礫石器1個の計652個出土した。代表的な石器については図版115～121に掲載し、表18に観察一覧を示した。以下、主な石器について略述する。

1) 石斧

打製石斧(72個)、半磨製(22個)、磨製(13個)の計106個で最も出土の多い器種である。以下、各器種について略述する。

打製石斧は図版115-9が輝緑岩製の小形の片刃石斧、図版117-33が砂質片岩製の短冊形両刃である。後者は石皿を縦に打ち割って製作されたもので時期の古いE-22付近で出土している。

半磨製石斧のほとんどは片刃である。図版115-12・13は礫石の縁を削り取り、周縁を打割調整し、刃をつけたもので、楕円を呈する。両刃は図版115-17・図版117-36で、いずれもバチ形である。36は全体に表面部分がはがれているようである。

短冊形は図版115-7と図版115-32で、前者は刃部の先端が尖る。後者は板状であるが、調整は粗い。図版117-40・41・43は石斧に含めているが、円礫を利用し、裏面を平らにするなど共通する部分も多いことから、別の形での分類も可能と思われるが今回は石斧で記述する。図版116-37は片刃、バチ形で表裏面は未調整で未完成と思われる。図版116-19は片刃、逆バチ形で表裏面は丁寧に研磨され、刃は明瞭な片刃である。

局部磨製石斧は両刃(図版117-39)と片刃(図版115-2・3・6・8)があり、中でも2・3は小型である。形はバチ形と短冊形がある。

磨製石斧は図版115-4のバチ形、45の隅丸形、図版116-23～27は片刃で短冊形、図版117-44は両刃、短冊形を呈するものである。また、図版116-23・24・27はかなり磨かれた定角式石斧が一括で出土している。

石斧未製品には短冊形(図版116-30・31)、荒削(図版116-32～図版117-34)で、特に33は石皿を縦に打ち割り、二次利用している。

2) 尖頭器(図版117-38)：礫を利用し、周縁を打割調整し、ポイント状に加工したものである。他に礫を利用したものに、バチ形(同図版117-39)、未製品(図版117-40～42)がある。尖頭器(図版117-38)はすり石や敲き石などを削り取り、打割調整によって先端を尖らしたものである。

3) すり石：33個出土した。大きさ(重量)別にみると300～500g台12個、600～700g台17個、1000g以上が3個である。形状は楕円(図版119-68)、隅丸方形(図版119-72)、略三角形(図版119-69)である。石質はサンゴ塊、砂岩(図版119-66～68)、角閃岩安山岩(図版119-72)、ひん岩がある。

4) 敲き石：大きさ(重量)別にみると100～200g台13個、300g～500g台5個、6000g台1個がある。特に図版119-89は特に重く、重しなどの可能性もある。形状は円盤状(図版118-49・58・59・60)、球状(図版118-56)、棒状(図版118-52・53・54・55)、楕円(図版118-57・63・64・65)、台形(図版118-43・47)、略三角形(図版119-69)がある。中には石斧を転用した(図版117-46・図版118-49・50)、凹みを転用したもの(図版117-40・48・図版118-51)があり、小さい方に多いようである。石質は角閃岩安山岩(56・64・69)、輝緑岩(47・60)、砂質片岩(52)、

砂岩 (片岩) (54)、礫質砂岩 (43)、砂岩 (40・51・55・56・59・63・65) がある。

5) くぼみ石 (図版118-61・62) : 17個出土した。いずれも楕円形で、ほぼ中央に浅い凹みがみられる。いずれも砂岩製であるが、他に安山岩が出土している。また、E-20伊跡②からくぼみ石の破片が検出され、剥離の形状を考慮すると打製石器の未製品とも考えられる。

6) 石皿 (図版120) : 破片を含めると41個出土した。形状は厚みのあるタイプ (図版120-74)、薄いタイプ (同図75)、やや小ぶりで扁平のタイプ (図版119-73) がある。石質をみると火山岩、黒色片岩、砂岩 (図版119-71・図版120-75・図版121-77)、砂岩 (細粒) (図版120-74)、砂岩 (石灰質)、(片状)、(シルト) 図版119-73・図版120-76、など砂岩が多く用いられている。

7) 石錘 : 1個出土した。砂岩 (細粒) 製で、大きさは縦:98mm、横:62mm、厚:49.9mm、重:390gを測り、E-20、第4層 (仮) 土坑5 Dot上げで出土。

8) 礎石 (図版121-78) : 大きさが20cm大、重さ10Kgの結晶質石灰岩 (古生代石灰岩) の自然に穿孔された石である。穿孔端に紐ズレがあり礎石に利用された可能性が考えられる。出土地はH・G-19第5層 (仮) 南側石集積とD-17黒色土層下で出土。

9) 石製品 (図版125)

2個出土した。1は石灰岩?、2は粘板岩製である。1は光沢が強く、半環状に整形したものである。色は乳色で光沢があり、一見、骨製品と類似、骨の海綿組織が確認できないのでここで報告する。半環状の端部で5mm前後の孔を2孔有する。出土地は東壁崩落土。

2は粘板岩製で厚さ3~5mm程度の板状の製品で、中央に径5mm前後の孔を有する。他に加工痕なく、平面は不定形である。出土地不明。

まとめ

石器の量は低湿地区より多く、特に石皿やすり石など敲打器類が多い。

円礫の縁を割り取り、打割調整し、石斧にしたものが複数例 (図版115-12・13)、円礫を大きく割り取り、打製石器に加工したもの (図版117-40~43) がみられ、いずれも県内では初出である。

弥生時代の定角式片刃石斧が3個一括出土 (図版116) した。低湿地区の同タイプの石斧 (図版54) よりは幅が大きく、薄手である。両者の土器の出土状況を勘案すると本区の定角式石斧が先行するタイプと想定される。

表18 石器観察一覧①

図版	番号	器種	分類大	分類小	残存	寸法	石質	観察事項	出土地
115	1	スレート製品			完形	縦36mm 横19mm 厚3.05mm 重3.35g	砂質片岩	平面一短冊形、断面一扁平。表裏面：自然。上下面：研磨あり。側面は磨耗。	2トレ、盛土（表採）台20212-5
	2	石斧	局部磨製	両刃	刃一部	縦35mm 横38mm 厚6mm 重21.84g	砂質片岩	両凸刃、刃縁一凹刃。平面一短冊形、断面一扁平。表面及び下部は研磨、表面は打削、上部破損、左右打削調整、右側は挟られる。	C-19.20、崩落土台50712-6
	3	石斧	局部磨製	両刃	完形	縦76mm 横32mm 厚11.9mm 重41.95g	砂岩（片状）	両凸刃、刃縁一凹刃。平面一やや湾曲、短冊形、断面一扁平。打製石斧を二次利用。表裏面は自然、上部は打削、下部は研磨、右側は刃部の痕跡が残り、弧状を呈する。	B-23、盛土台41207-3
	4	石斧	磨製	片刃	完形	縦51mm 横39mm 厚11.1mm 重30.71g	輝緑岩	弱平短平片刃、刃縁一直刃。平面一バチ形、断面一扁平。表裏面、下部一研磨、上：打削。横斧と思われる。	C-19.20、西側掘り下げ黒色土層第4層（仮）台40318-27
	5	石斧	磨製	両刃	刃部欠	縦62mm 横29mm 厚8.8mm 重31.32g	輝緑岩	平面一短冊形、断面一扁平。表裏面及び上部、側縁は研磨、下部破損。	3トレ、盛土（表採）第3層、台20214-12
	6	石斧	局部磨製	両刃	完形	縦110mm 横67mm 厚19.4mm 重173g	輝緑岩	両凸刃、刃縁一凹刃。平面一バチ形、断面一凹状。表面及び下部は研磨。表面は大きく破損、上部及び側縁は打削。使用直は刃部に垂直、横斧。	B-24、盛土（黒）台40930-8
	7	石斧	半磨製	片刃	完形	縦98mm 横44mm 厚13mm 重82.51g	砂質片岩	片凸刃、刃縁一凹刃。平面は短冊形、断面一扁平。表裏面及び下部は研磨。側縁は2段の研磨。	F-19東トレ、米軍埋設土、台40310-23
	8	石斧	局部磨製	片刃	完形	縦101mm 横54mm 厚20.1mm 重164g	斑レイ岩	片凸刃、刃縁一直刃。平面一バチ形、断面一板状。表面研磨。周縁は打削。横斧。	E-18、北側崩落土台50920-12
	9	石斧	打製	両刃	完形	縦99mm 横61mm 厚22.3mm 重215g	輝緑岩	両凸刃、刃縁一直刃は斜めか。平面一バチ形、断面一レンズ状。表裏面は研磨。上下及び側縁は打削。刃縁の中央は使用のため、凹む。形状から縦斧の可能性が高い。	不明、不明台0-63
	10	石斧	磨製	片刃	完形	縦122mm 横50mm 厚19.5mm 重176g		両凸刃、刃縁一直刃、中央は欠。平面一短冊形、断面一板状。表裏面及び下部は部分研磨、上面は打削、側縁は打削。裏面は平らになる。横斧。	G-19、米軍埋設土台40910-4

<凡例>「観察事項」の項目「石斧の観察は低湿地区の第32回石斧分類の様式（佐原真：1977）に準じる。」
「出土地」の項目「台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録」

表18 石器観察一覽②

国版	番号	器種	分類大	分類小	残存	寸法	石質	観察事項	出土地
国 版 115	11	石斧	半磨製	片刃	完形	縦:135mm 横:61mm 厚:21.2mm 重:314g	砂質片岩	両凸刃、刃縁一直刃。平面一短冊形、断面一板状。表裏面は部分研磨。上部は打削。側縁は打削後、研磨。横脊。	E-19、第4層(仮) ドットあび 台21105.06-2
	12	石斧	半磨製	片刃	一部欠	縦:120mm 横:65mm 厚:23.8mm 重:183g	砂岩	両凸刃、刃縁一円刃。平面一楕円、断面一レンズ状。表面研磨、表面自然、側縁は裏面方向に打削調整。下部は刃刃のため研磨。礫石を利用。	C-19・20 西側奥石清掃中 台41222-12
	13	石斧	半磨	片刃	刃部	縦:77mm 横:64mm 厚:15.6mm 重:106.65g		片凸刃、刃縁一円刃。平面一楕円、断面一扁平で上部に細くなる。表面は研磨、表面及び側縁は細かい打削調整後、研磨する。刃縁は研磨と剥離がある。	C-19・20 西側奥石清掃中 台41222-12
	14	石斧	磨製	片刃	完形	縦:74mm 横:49mm 厚:19.1mm 重:111.03g	斑レイ岩	小型、両凸刃、刃縁は直刃。平面一バチ形、断面一板状。全面研磨、上部に若干鼓きが見られる。横脊。	E-13、灰色土層? 台41201-17
	15	石斧	磨製	片刃	完形	縦:106mm 横:56mm 厚:21.9mm 重:196g	斑レイ岩	両凸刃、刃縁一直刃。平面一バチ形、断面一板状。ほぼ全面研磨。上半分に鼓きが見られる。使用痕か。刃縁に対して垂直方向に明確な使用痕が残る。横脊。	D-19、両側石集積 台50513-2
	16	石斧	磨製	両刃	完形	縦:97mm 横:48mm 厚:26mm 重:162g	輝緑岩	両平刃、刃縁一円刃。平面一バチ形、断面一レンズ状。表裏面研磨。上部は鼓き痕。側縁は打削後、研磨。片側はくびれる。横脊か。	E-19、崩落土 台0-0
	17	石斧	半磨製	両刃	刃へ体部	縦:77mm 横:67mm 厚:36.7mm 重:251g	輝緑岩	両凸刃、刃縁一円刃。平面一バチ形?断面一レンズ状。表裏面及び側面研磨。表面の形は平面。上部破損。	ATP-20、台40106-0
国 版 116	18	石斧	磨製	片刃	完形	縦:125mm 横:66mm 厚:29.4mm 重:317g	砂質片岩	弱凸強平片刃、刃縁一円刃。平面一短冊形、断面一緩やかな弓状、横断面は方形。全面研磨。裏面に研磨痕。上半分は鼓き痕、使用のためか。	C-24、赤色粘質土 台40223-2
	19	石斧	半磨製	片刃	完形	縦:117mm 横:45mm 厚:25mm 重:251g	輝緑岩	片平刃、刃縁は円刃。頭部は弧状に丸く研磨。平面一短冊状、断面一板状。根に割れる。そのまま再利用か不明。破損面以外は研磨。使用痕はに垂直にあり。	TP-(B-23?)、 表採(黒色砂層) 台40612-2
	20	石斧	磨製	両刃	完形	縦:113mm 横:67mm 厚:25mm 重:342g	輝緑岩	両平刃、刃縁一円刃。刃の両端は欠損。平面一長方形、断面一レンズ状。ほぼ全面研磨。上部は鼓き痕。	E-17、台30902-5

<凡例>「観察事項」の項目「石斧の観察は低地地区の第32国石斧刃分類の模式(佐原真:1977)に準じる。」
「出土地」の項目「台」は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録

表18 石器観察一覧③

図版	番号	器種	分類大	分類小	残存	寸法	石質	観察事項	出土地
図 版 116	21	石斧	半磨	片刃	ほぼ完形	縦:93mm 横:75mm 厚:28mm 重:395g	安山岩 (角閃石)	片凸刃、凹刃。平面-正方形、断面-レンズ状。全面、打割調整後研磨。刃縁に対して垂直に使用痕が確認でき、数回の研磨が確認される。	F-19、米軍埋設土 台41125-14
	22	石斧	磨製	片刃	体-頭部	縦:153mm 横:76mm 厚:31.9mm 重:630g	閃緑岩	平面-短冊形、横断面-楕円。全体に研磨は弱い。周縁は打割が見られる。刃部破損するが、表裏面とも刃縁方向に平らで薄くなる。	2トレ、淡茶褐色成 混下、台20312-6
	23	石斧	磨製	片刃	完形	縦:67mm 横:48mm 厚:12mm 重:81g	輝緑岩	片平刃、刃縁-直刃。頭部直線的。平面-幅広く短冊形、断面-板状。全面研磨。24、27と一括で出土。刃部付込使用痕は縦位、研磨痕は横位に確認できる。	E-18、台40701-0
	24	石斧	磨製	片刃	完形	縦:85mm 横:54mm 厚:15.4mm 重:142g	輝緑岩	片平刃、刃縁-直刃。平面-短冊形、断面-扁平。全面研磨。23と27と一括で出土。	E-18、台0-0
	25	石斧	磨製	片刃	完形	縦:93mm 横:53mm 厚:19mm 重:194g	輝緑岩	弱凸強平片刃、刃縁-直刃、頭部-丸味。平面-短冊形、断面-扁平。(ほぼ全面研磨)。	C-19北トレ 黒色土層(第4層・ 飯) 台40310-11
	26	石斧	磨製	片刃	完形	縦:130mm 横:40mm 厚:12mm 重:78.08g	砂質片岩	両凸刃、刃縁-直刃。平面-短冊形、断面-扁平。表面研磨、周縁は打割調整。表面は粗磨。	C-19.20 第4層(飯) 黒色土層 台40319-9
	27	石斧	磨製	片刃	完形	縦:96mm 横:46mm 厚:16.7mm 重:146g	角閃岩	弱凸強凸片刃、刃縁-直刃、頭-直線。平面-短冊形、断面-扁平。全面研磨だが、石の凹み部分は自然面が残る。使用痕、明瞭、刃縁に対して垂直。23・24と一括で出土。	E-18、第4層(飯) 台21113-16
	28	石斧	磨製	片刃	完形	縦:70mm 横:52mm 厚:19.2mm 重:129g	輝緑岩	両凸刃、刃縁-直刃、頭部-丸味。平面-短冊形、横断面-レンズ状。(ほぼ全面研磨、研磨の検明瞭。上部に敲き痕)。	C-17、No002 台50201-18
	29	石斧	打製	片刃	完形	縦:92mm 横:35mm 厚:12mm 重:57.24g		未製品。凹平刃、刃縁-凹刃。平面-長指門、断面-中央ふくらむ。表面が凹むことから凹み石を利用か。表面研磨。他は粗製。	E-14、清掃中 台41116-2
	30	石斧	磨製	片刃	完形	縦:81mm 横:49mm 厚:14.7mm 重:103.92g	輝緑岩	凹平刃、刃縁-直刃、頭部-丸味。平面-短冊形、断面-扁平。打割調整後研磨、若干の打割面残る。岩脈縦に走る。使用痕あり。頭部敲打痕。	2トレ、盛土(表採) 台20212-10

<凡例>「観察事項」の項目「石斧の観察は低湿地区の第32図石斧刃分類の模式(佐原真:1977)に準じる。」「出土地」の項目「台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録」

表18 石器観察一覧④

国版	番号	器種	分類大	分類小	残存	寸法	石質	観察事項	出土地
116	31	石斧	磨製	片刃	完形	縦:81mm 横:64mm 厚:25.2mm 重:226g	輝綠岩	片凸刃、刃縁一直刃。ややバチ形、断面一レンズ状、全面研磨。頭部に打痕。使用痕、刃縁に対して垂直平面。	E-19、第5層(仮) 北西側石・貝集積部分ドット上げ 台90109-14
	32	石斧	半磨製	片刃	完形	縦:106mm 横:54mm 厚:17.4mm 重:134g		未製品か、平面一翅形、断面一板状。全面粗磨。	E-19、第5層(仮) 北西側石・貝集積部分ドット上げ 台90109-14
117	33	石斧	打製	両刃	完形	縦:154mm 横:76mm 厚:27.4mm 重:552g	砂質片岩	片凸刃、刃縁一直刃。石肌を再利用。両刃、刃縁は直線、頭部一方形。平面一翅形、断面一扁平。一石肌を縦に打割、打製石斧にする。表表面打割、側面に石肌を研磨面残る。	E-22、客土表探 台31219-22
	34	石斧	打製	片刃	刃部	縦:87mm 横:77mm 厚:30.3mm 重:338g	黒レイ岩	平面一方形、横断面一レンズ状。表面の一部研磨、裏面は打割。	E-20、第4層(仮) ドットあげ 台21081-11
	35	石斧	磨製	両刃	完形	縦:96mm 横:45mm 厚:23.1mm 重:144g	緑色片岩	片凸刃、刃縁一両刃、平面一バチ形、断面一陥凹状。全体に磨面がはがれた状態。縦斧。	不明、不明 台0-53
	36	石斧	半磨製	両刃	完形	縦:117mm 横:58mm 厚:23mm 重:197g	安山岩 (角閃石)	両平刃、刃縁一直刃。平面一バチ形、断面一扁平。表裏面は自然、上部は研磨。刃部は打割。	E-20 北東側崩落土 台51101-4
	37	石斧	半磨	片刃	完形	縦:144mm 横:63mm 厚:33.1mm 重:424g	黒レイ岩	弱平強凸片刃、刃縁一直刃。未完成のためか磨面はゼロザクする。片刃、刃縁はやや弧状。側面の角明瞭。平面一バチ形、断面一板状。表面は自然。横斧。	H・G-19 米軍建設土 台41029-18
	38	尖頭器	打製		完形	縦:97mm 横:45mm 厚:20mm 重:87.96g		平面一棒形、断面一レンズ状。表面は研磨、周縁及び裏面は打割調整。隕石器の一部を利用か。	E-20、台30731-1
40	39	石斧	局部磨製	両刃	完形	縦:103mm 横:79mm 厚:20mm 重:194g		片凸刃、刃縁一両刃。平面一バチ形、断面一扁平。刃部周縁を研磨、他は打割調整。	盛土、盛土表探 台21128-48
	40	敲き石	転用		破	縦:87mm 横:69mm 厚:28.1mm 重:215g	砂岩	両平刃、刃縁一直刃。平面一隅丸方形、断面一マウンド状。表面研磨、他は自然か、裏面は平ら。	F-19、第3～4層中 台31209-4

≪凡例≫「観察事項」の項目「石斧の観察は低湿地区の第32回石斧刃分類の模式(佐原真:1997)に準じる。」
「出土地」の項目「台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに取替

表18 石器観察一覧⑤

図版	番号	器種	分類大	分類小	残存	寸法	石質	観察事項	出土地
117	41	石斧	半磨	片刃	完形	縦:97mm 横:66mm 厚:26.5mm 重:230g	砂岩	片凸刃、刃縁-直刃。平面-隅丸方形。断面-マウンド状。表面研磨、裏面及び側面は打割調整。	B-24、盛土(黒) 台40930-8
	42				破	縦:103mm 横:88mm 厚:27.05mm 重:297g		平面-楕円、断面-マウンド状。表面研磨、裏面は平ら。	E-15、第3層(仮) 落ち込み 台20821-7
	43	敲き石			破	縦:7.7mm 横:8.2mm 厚:3.36mm 重:292g	輝質砂岩	平面-台形、断面-楕円。表面研磨、裏面自然。磨縁打割。	E-20、台51120-7
	44	石斧	磨製	両刃	完形	縦:83mm 横:54mm 厚:19.2mm 重:96.36g	輝緑岩	両凸強片刃、刃縁-直刃。平面-短方形、断面-楕円。表裏面研磨。	E-20、貝集積北西 掘り下げ 台40902-2
	45	石斧	磨製	両刃	完形	縦:88mm 横:50mm 厚:19.6mm 重:150g	輝緑岩	両凸刃、刃縁-直刃。平面-隅丸方形、断面-レンズ状。全面研磨。頭部破損。	E-20南東 台30902-15
	46	敲き石	転用		完	縦:75mm 横:50mm 厚:24.7mm 重:150g		平面-楕円、断面-楕円。表裏面:研磨。上下破損。石斧の二次利用。	E-19 第5層(仮)上 台21125-3
	47	敲き石			完	縦:61mm 横:45mm 厚:26mm 重:120g	輝緑岩	平面-台形、断面-。表面に敲直、裏面研磨。上下は敲き痕。	E-20、第4層(仮) 台20802-9
	48	敲き石	転用	凹み	完	縦:82mm 横:55mm 厚:38.1mm 重:242g		平面-楕円、断面-レンズ状。表裏面は極かに研磨あり。上面は打割、下面および左右に敲き痕。	E-18、第4層(仮) 台21114-11
118	49	敲き石	転用	円盤	完	縦:68mm 横:61mm 厚:20.5mm 重:148g		平面-円形、断面-板状。表裏面および下面研磨。右側に敲き痕。左側面は若干研磨。	F-19東トレ、第4層(仮)掘り下げ 台40917-6
	50	敲き石	転用		完	縦:103mm 横:56mm 厚:23.8mm 重:263g		平面-楕円、断面-板状。表裏面:研磨。上下面:敲き痕。右左は打割。	E-17、米軍埋設土 台20808-1

<凡例>「観察事項」の項目「石斧の観察は低湿地区の第32図石斧刃分類の模式(佐原真:1977)に準じる。」
「出土地」の項目「台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録」

表18 石器観察一覧⑥

図版	番号	器種	分類大	分類小	残存	寸法	石質	観察事項	出土地
四 版 118	51	敲き石	転用		完	縦:112mm 横:67mm 厚:26.6mm 重:279g	砂岩	平面-楕円、断面-レンズ状。表面:研磨、裏面および上下面:打割。	4トレ、淡茶色 台20513-1
	52	敲き石		棒状	完	縦:149mm 横:35mm 厚:35.3mm 重:355g	砂質片岩	平面-棒状、断面-板状。表裏面:研磨、上下面敲き痕。	1トレ、黄土表採 台20626-6
	53	敲き石			完	縦:82mm 横:38mm 厚:32mm 重:187g	砂岩	平面-棒状、断面-楕円。横断面はマウウド状。表裏面:研磨、上下左右面:敲き痕。	C-19,20、黒色砂層 (4・仮) 台40308-8
	54	敲き石			完	縦:89mm 横:50mm 厚:35mm 重:236g	砂岩 (片状)	平面-棒状、断面-隅丸方形。表裏面研磨。上下研磨および敲き痕、稜線あり。	E-16、第4層(仮) 台21105-18
	55	敲き石			完	縦:111mm 横:48mm 厚:48.05mm 重:510g	砂岩	平面-棒状、断面-円形。表裏面研磨。上下左右に敲き痕。頭部一部破損	E-17、白砂 台41129-25
	56	敲き石		球状	完	縦:69mm 横:60mm 厚:45.9mm 重:268g	安山岩 (角閃石)	平面-円形、断面-マウウド状。表裏面:研磨、上下左右敲き痕。裏面平ら。	C-19北トレ、黒色 土層掘り下げ(第4 層・仮)、台40311- 12
	57	敲き石			完	縦:87mm 横:58mm 厚:28mm 重:195g	砂岩	平面-楕円、断面-板状。表裏面:研磨。上下左右敲き痕。右側くびれあり。	E-20、第4層(仮) ドットあげ 台21105-50
	58	敲き石		円盤	破	縦:66mm 横:69mm 厚:25mm 重:176g		平面-円形、断面-板状。表面研磨、裏:破損か、上下左右に敲き痕。	H・G-19、階段掘り 下げ黒色土~黄灰色 粗砂マンガン混 台41201-S3
	59	敲き石		円盤	完	縦:77mm 横:65mm 厚:27.8mm 重:199g	砂岩	岩層が有る。平面-円形、断面-板状。表裏面:研磨。上下左右に	E-19・20趾、第4 層(仮) 台30829-9
	60	敲き石		円盤	完	縦:88mm 横:79mm 厚:39.2mm 重:488g	輝緑岩	平面-円形、断面-板状。表面:中央僅かにタタキ有り。裏面研磨、上下左右:敲き痕。	E-17、第5層(仮) Dot上げ。 台30821-14

<凡例>「観察事項」の項目「石質の観察は低湿地区の第32回石斧刃分類の模式(佐原真:1977)に準じる。」
「出土地」の項目「台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録」

表18 石器観察一覧⑦

図版	番号	器種	分類大	分類小	残存	寸法	材質	観察事項	出土地
図版 118	61	凹石			完	縦:89mm 横:66mm 厚:38.9mm 重:375g	砂岩	平面一楕円、断面一板状。 表裏面研磨、周縁敲き痕、 両側顕著。	E-20、台30925-9
	62	凹石			完	縦:127mm 横:104mm 厚:68.5mm 重:1000g	砂岩	平面一楕円、断面一楕円。 表:中央僅かにタタキ有り、 裏面研磨。上下側面敲きあり。	H・G-19 第5層(仮)黄白色 砂層 台41013-5
	63	敲き石			完	縦:75mm 横:61mm 厚:54.5mm 重:380g	砂岩	平面一楕円、断面一円形。 表裏研磨、上下面敲き痕明 瞭、特に下面は凹みが強い。	C-19・20 西側集石清掃中 台41222-12
	64	敲き石			完	縦:120mm 横:71mm 厚:38.8mm 重:510g	安山岩 (角閃石)	平面一楕円、断面一楕円。 表裏側面:研磨、上面:敲 き痕、下面:敲き。	B-23、盛土(黒) 台41001-7
図版 119	65	敲き石			完	縦:106mm 横:75mm 厚:51.4mm 重:342g	砂岩	平面一楕円、断面一方形。 表裏:研磨、上下側面敲き 痕。	D-17東トレ 北側黒色砂層下 台40629-28
	66	すり石			完	縦:117mm 横:88mm 厚:74mm 重:1036g	砂岩	平面一楕円、断面一円。全 面研磨、上面、側面一敲き。	E-20、第4層(仮) ドットあげ 台21031-11
	67	すり石			完	縦:144mm 横:96mm 厚:68.5mm 重:1300g	砂岩	石ケン状。平面一楕円、断 面一楕円。	試験穴近く盛土より 台0-22
	68	すり石			完	縦:133mm 横:115mm 厚:81.3mm 重:1500g	砂岩	平面一略三角形、断面一楕 円。表裏面研磨、上下面敲 き痕。	5トレ ドット上げ&2 台20226-40
	69	敲き石			完	縦:165mm 横:210mm 厚:119mm 重:6000g	安山岩 (角閃石)	平面一略三角形、横断面一 楕円。表裏上下面にキ、上: 打、下:打一敲き、右、左、 側:打、B.C.D、端	D-19、東側第4層 (仮)掘り上げ 台40316-14
	70	有孔製品			完	縦:82mm 横:43mm 厚:28mm 重:61g	サンゴ塊	平面一長楕円、断面一方形。 有孔一外径0.8cm 内径0.3c m。ほぼ全面研磨。上下面 敲き痕。	ATP-20、台40109-0

<凡例>「観察事項」の項目「石斧の観察は低湿地区の第32図石斧刃分類の模式(佐原真:1977)に準じる。」「出土地」の項目「台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録」

表18 石器観察一覽⑧

図版	番号	器種	分類大	分類小	残存	寸法	石質	観察事項	出土地
図版119	71	石皿	転用		破	縦:13.9mm 横:9.4mm 厚:6.9mm 重:200g	砂岩	平面一短冊形、断面一方形。表裏面研磨か、上下面は打削し、下部は斜めにカットし、刀状に細くなる。大型で、類似がなく、詳細は不明。	F-19、井戸状遺構内、台31213-1
	72	すり石			完	縦:73mm 横:67mm 厚:45.1mm 重:374g	安山岩 (角閃石)	平面一隅九方形、断面一三角形。表及び側面は研磨、裏面は打削調整。上下面は破損、三角柱状の敲石。	D-19、南側 石集積掘り下げ第5層(仮) 台31224-18
	73	石皿			破	縦:195mm 横:199mm 厚:42.1mm 重:2500g	砂岩 (片状)	表裏面とも利用。平面一方形、断面一板状。表面一部は磨痕あり、裏面研磨、縁の一部破損。	D-19、第5層(仮) 白砂、台40106-8
図版120	74	石皿			破	縦:157mm 横:204mm 厚:9.7mm 重:700g	砂岩 (細粒)	平面一略三角形。表面の凹みは楕円形でやや深い。他面は自然。	H・G-19、表灰色砂層、台41126-14
	75	石皿			完	縦:230mm 横:368mm 厚:42.9mm 重:5000g	砂岩	平面一長方形、断面一板状。表面の凹みは楕円形でやや深い。表面は自然、周縁は磨う、石皿では薄い方である。	E-19、Dot、509 台86915-7
	76	石皿			破	縦:300mm 横:316mm 厚:126mm 重:12600g	砂岩シルト岩→巨礫状の一部	平面一三角形、断面一板状。表面の凹みは円形で深きは23mmと他に比べて深い。他は加工は認められない。	E-18、第5層仮白砂 台40613-3
図版121	77	石皿			完	縦:185mm 横:248mm 厚:179mm 重:14500g	砂岩	平面一方形、断面一台形。表面の凹みは37mmを測る。また、幅6mmの「V」字状の溝が弧状に走る。	E-19、米軍埋設土 台50124-26
	78	錠石			破	縦:164mm 横:215mm 厚:13.3mm 重:11600g	結晶質石灰岩	径2.5cmの孔が貫通、自然の孔を利用か。平面一方形、断面一方形。他は自然	D-17、黒色土層削下、台40629-26

＜凡例＞「観察事項」の項目「石弁の観察は低湿地区の第32図石弁刃分類の模式（佐原真：1977）に準じる。」

「出土地」の項目「台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録」

3. 骨製品

骨製品は製品および未製品を含めて総数は230個出土している。

骨製品の素材の種類はイノシシ（下顎大歯、腓骨）、サメ歯、クジラやジュゴン、ウミガメ、イルカなどの海獣骨、アカエイ科の尾棘、サカナなどが用いられている。主な製品については略述し、表19に観察および出土一覧を示した。なお、図版の提示されているものは図版番号、そうでないものは遺物番号で示す。また、図および図版に示した遺物については表19骨製品観察一覧の「観察事項」その番号を示した。

1) 装飾品と考えられるもの

装飾品と考えられるものでは垂飾、腕輪、他が出土している。

a 垂飾

・サメ歯有孔製品：サメ歯の基部に小孔を施したもので7個出土した。イタチザメとアオザメがある。イタチザメタイプは穿孔が3個（第93図・図版123-15）、2個（3106）、1個（3164、3105）がある。また、3164は基部の両端に抉りが確認できる。アオザメタイプは穿孔が2個（同図14）と1個（3113）がある。（3164）はエナメル質に細かいアバタがみられる。3003はE-20炉跡4から出土している。その他にアオザメの歯（3068）が出土したが、加工は認められない。

・サメ椎体：サメ目の椎体の中央に孔を施したもので8個出土した。椎体の大きさは大（12-20mm）、中（10mm前後）、小（10mm以下）に分けられる。出土する割合はほぼ同じである。類似するものに径13mm、厚さ14mmの大型魚の椎骨の中央に穿孔し、さらに側面の骨質の薄い部分を削るものである。

・イノシシ下顎大歯製品：イノシシのオスの上顎と下顎大歯に穿孔あるいは研磨を施したもので25個出土した。本品は基本的に大歯の形状をそのまま利用のものであるが、①イノシシの下顎大歯の形状に沿うように横位に薄く半裁し、エナメル部分の両端に小孔を穿孔したもの（3002）、さらにその周縁に鋸歯状の抉りを施したもの（3028）、②基部に穿孔したもの（第93図・図版123-22）、③先端に穿孔したもの（第93図23）、④先端を抉りで円繞したもの（図版123-24）、⑤縦位に半裁し、細く仕上げ、両端に側面から孔を施したもの（図版123-25）など、複数の加工がみられる。この中で同図版25はジュゴンの製品（図版122-7）と酷似するものである。他にオスの上顎大歯に小孔を施したもので、外面は光沢が出るほど研磨されるものがある。（3038）古我地原貝塚に出土するが報告例は少ない。

・半環状製品：クジラやジュゴンの骨を半環状に加工したもので、単体で用いるものと複数で用いるものがある。

〈単体〉

①クジラの骨を板状にし、一見「U」字状に加工したもので、孔は製品に対して垂直方向に施すものである。平面形は左右アンバランスである（第92図・図版122-5）、②はジュゴンの肋骨を緩やかな半環状に加工し、両端の外縁をさらに削り、湾曲を強調したものである。孔は製品に対し、平行に施す。（第92図・図版122-4）。（第92図・図版122-3）は前者に比べて環が明瞭なものであるが、裏表面とも部分的に自然面を残すことからジュゴンの椎体を用いたものと思われる。穿孔の方向は前者と同じく製品に対して平行である。（図版122-6）はクジラの頭骨を加工したもので半

環あるいは環状の製品と考えられるものである。

〈複式〉

ジュゴンの肋骨を半環状に加工し、製品に対して平行に穿孔するものである。(第92図・図版122-1・2)は、大きさも同じでE-20で一括出土したことから考慮すると2個を組み合わせて環状に用いるものと思われる。しかし、形態的には内縁は角張り、挟りも浅いことから、腕輪と考えるには疑問が残ることから用途については類例資料の追加を待ちたい。

本品の穿孔の位置から前述の図版122-7、3021も複式の可能性がある。

・彫刻かんざし

クジラの肋骨か椎骨を用い、上面形は楕円形、横断面がL字状を呈するもので、側面に「8」字を横にしたような陽刻文が施されている。片面は「8」字を横に1個、反対側は「8」字を横に2個連続配置したような意匠で、文様は丸みがあり、立体的で、下面の突起の部分には略菱形の孔が3個確認される。(第94図・図版124-31)形状からかんざしが想定される。E-20第4層(仮)Do1201で出土した。素材であるクジラの骨もE-20第4層で187個(1880.3g)、全体の30%が得られて、本品も未完成であることからE-20付近で製作された可能性が高いと思われる。

・かんざし

クジラの骨を棒状に加工し、頭部を有するものである。頭部が段をなすもの(第92図・図版122-10)、頭部はH状に挟りをなし、さらにその下部は沈線を2条横位に圍繞させ、その下部に径4mmの孔を施すもの(第92図・図版122-12)、先端部分で有段を呈し、その形状は楕円を呈するもの(第92図・図版122-8)である。

・板状製品

クジラやウミガメの骨を板状に加工したものである。(第93図・図版123-26)はクジラ骨製で、中央に穿孔する。(第93図・図版123-27)はウミガメ製と考えられるもので形状は前者と類似する。(第93図・図版123-30)はクジラ製で角は丸みを持つものである。(第93図・図版123-28)はやや厚みのあるもので横断面は楕円を呈する。

・その他

小型の製品でジュゴンやクジラなどの骨を球または方形に加工したものである。

(第93図・図版123-16)はジュゴンの肋骨を径2cm弱の球状に加工し、中央に径8mmの孔を有する。(第93図・図版123-17)はクジラの骨を麻雀パイ状に加工したもので、中央に径5mmの孔を有するものである。

(第93図・図版123-18)は厚さ4mmの素材に表裏面に彫刻を施し、鎖のような文様を現すもので、文様は面縄東洞式土器の構図(第81図67)と類似するものであるが小破片のため、用途についてははっきりとしない。(図版124-32)はイノシシの大腸骨を半裁し、側面に凸状の突起を3個配したものである。沖縄本島では初出、形状からも推察できない。骨も削りだし、厚さは1~2mmと薄い。厚さや形状から実用的な要素は少ない。

2) 実用品と考えられるもの

・ヤス

(第93図・図版123-19) はイノシシの腓骨を斜めにカットし、三角形に仕上げ、両端を尖らしたものである。先端部の片側に幅1mm程度の溝を3条施し、そのカット面は平らにし、他面は丸みを持つ。平らの面と3条の溝は組み合わせための加工の可能性も考えられる。

(第93図・図版123-20) も前者より幅が細い、柳葉状を呈するもので、片側に海綿組織を残すことからイノシシ四肢骨と考えられる。その他に1個出土している。

・骨針

イノシシの腓骨を用いたもので完形品はなく、先端部と頭部の部分が図示した。(第94図・図版124-43) と(同図-44) は先端部でいずれも片刃的で、後者の方が骨は大きいようである。(同図-40) と(同図-41) は遠位部に穿孔したものである。他に先端16個、体部10個、頭部4個出土している。

・骨錐

クジラやジュゴンの骨を棒状に加工し、先端部を尖らしたものである。沖縄諸島の先史時代にはイノシシの四肢骨を用いたものもあるが、本地区では検出されなかった。

(第94図-35) はクジラの肋骨を円錐状に加工したものである。(第94図・図版124-36) はジュゴンの肋骨を棒状に加工したもので、側面は肋骨の形状を示すように若干湾曲する。先端部は前者同様、円錐状に尖らし、頭部は中央に径5mmの孔を有するものである。形状からかんざしの下部とも想定されるが横断面が丸みを持つことから錐として扱った。

・篋状

(第94図・図版124-34) はクジラの骨を板状に加工し、先端部を篋状に加工したものである。基部は細くなり、茎とも考えられる。全体に削りが粗く、製作途中と思われる。(同図-46) はエイの尾棘の先端部を両面から研磨し、V字状に尖らしたものである。他に2個出土している。

・鉤状

イノシシ四肢骨を半裁し、板状に加工、先端部をやや太くして鉤状にしたものである。全体に研磨されているが、類例がなく用途は不明である。(第94図・図版124-33)。

3) 未製品

砂丘区では、7832-6gのクジラ骨の破片が出土し、その4割程度が何らかの加工が加えられているもので、そのうちの3個を図示した。

(第94図・図版125-47) はクジラの椎体を方形に加工し、上下部分は特に打ち削りが多く施されている。(第94図・図版124-49) もやはり板状加工されている、他の2個に比べ、炭化がみられる。表面の研磨は顕著である。割れは短冊形になる。この割れの幅は骨錐とほぼ同じ大きさである。(第94図・図版124-48) はクジラの肋骨を荒削りしたものである。特に裏面の削りは顕著で、破片から肋骨の径を復元すると8.6cmを推定される。

(図版125-50) はシカの角で、先端は丸味を帯び、基幹部の一部も摩耗する。角座がの一部が残る。3カ所で接合できる。先端部から5cmの所を「V」字状に切り込まれ圍繞する。E-19第5層出土。沖縄本島では生息してなく、現在のシカの生息の北限である屋久島以北からの移入品と思われる。

表19 骨製品観察一覧①

番号	製品名	材質	完破	タテ	横	厚さ	重量	観察事項	出土地	遺 No
1	有孔製品	イヌ、歯	完	33.4	7.4		1.25	有孔・孔-2mm	盛土	3200
2	有孔製品	イノシシ、 ♀犬歯		3087	10	6	0.83	前臼歯、エナメル部分研磨か、側面から穿孔、貫通しない	E-19第4層仮	3038
3	未製品	イノシシ、 ♀下顎犬歯	破	18.2	10.5		0.99	3ヶ所から孔、エナメル質、光沢有り。	E-20第4層(仮)下西側	3219
4	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	破				9.96	基部と先端部に穿孔。基部の端に研磨痕有り	盛土1	8057
5	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	破	8	18		0.21		C-19第3〜4層(仮)北 壁崩落	3085
6	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	破				0.88	半截エナメル部分を利用。裏面-顕著に研磨	C-19掘り下げ第4層 (仮)	3104
7	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯	破				6.09	内縁に研磨痕	C-19東側第4層(仮)掘 り下げ	3118
8	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	破				11.81	基部と先端部、穿孔	C-19北側第4層(仮)西 側掘り下げ	3042
9	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯	破				6.38	先端部、穿孔	C-19・20南西側サブト レンチ 黒色土層(第 4層・仮)	3117
10	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯	破				3.37	先端部、穿孔、外縁に削りの痕	C-19北側石集積付近	3065
11	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L			17.55	10	7.25	基部穿孔、歯先端部分に研ぎ痕。骨の老レイ。 孔-5.2mm	C・D-19東側崩落土第3 & 4層仮	3041
12	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯	破		3.3		1.05	淡灰色	D-19第4層(仮)下	3123
13	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯	完	17	12	6.5	0.44	半截、エナメル面を利用。基部に穿孔孔-6.2mm	D-19第4層仮南東平掘 下	3063
14	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	破				1.59	接合	D-19米軍埋設土	3041
15	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	破				1.73	基部に穿孔	D-19米軍埋設土	3044
16	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯R	完				15.09	基部と先端に穿孔。孔は両側から穿孔	D-19米軍埋設土	3056
17	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯R		18.3	12	6.36		基部に穿孔、端部も研磨。老レイ。孔の近くに 穿孔途中の孔有り	D-19米軍埋設土	3058
18	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	破		17	9	7.1	基部穿孔。穿孔は両側から基部・両面穿孔	D-19米軍埋設土	3076
19	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	破				0.44	半截、基部、穿孔・孔-5mm	D-19米軍埋設土	3079
20	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	破	8	37		1.73	先端部のエナメル面、研磨しエナメル面がない	D-19米軍埋設土	3103
21	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯	破	12	35		2.17	先端部を外縁、尖った部分を研磨する。類例なし	E-19第4層(仮)	3091
22	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯R	破		16		2.11	基部穿孔・孔-5.8mm	E-19第4層(仮)直上	3077
23	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯	破				2.87	先端部、穿孔	E-19第4層(仮)直上	3122
24	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	破		58		3.12	半截しエナメル面を使用。裏面-顕著に研磨	E-19第5層南西	3048
25	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯	破	33.2		12.5	3.63	先端部、穿孔。全体的に光沢有り。研磨顕著、 跡も無くなる。焼け	E-20第4層(仮)	3119
26	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯	破				0.61	半截し、縁に歯肉の切り込みを入れて、加工。表面 に僅かにエナメル質が残る。第93図・図版123-13	P-19東トレ第4層仮液 砂	3028
27	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	完				14.05	基部の先端に穿孔。孔は両側から穿孔	P-19東トレ掘削時	3043
28	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯	破				2.96	先端部に研磨痕有り	P-19東トレ盛土表採	3121
29	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯	破				3.52		盛土盛土表採	3120
30	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯R	完				3.97	半截し両面に穿孔。裏面も丁寧に研磨。孔の大き さは他と比べて小さい。いずれも裏面から穿 孔。図版123-21	C-19	3002
31	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	完				10.25	基部、穿孔の先端部は孔の穿孔途中の痕跡がみ とめられる。図版123-22	E-20北-東崩落土	3001
32	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	完				17.99	先端部穿孔、基部はなし 第94図・図版123-23	E-19溝	3008
33	牙製品	イノシシ、♂ 下顎犬歯L	破	26.7	12.8	1.7	0.72	自然の可能性が高い。	北西盛土	3170

<凡例>「観察事項」の項目に図版番号を含めた。「出土地」の項目「台」は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録

表19 骨製品観察一覧②

番号	製品名	材質	完 成 破	タテ	横	厚 さ	重 量	観察事項	出土地	遺 跡 No.
34	牙製品	イノシシ、 ゴ下顎大歯	破				3.55	先端部は挟りと穿孔が見られる。基部は破損。 第93図・図版123-24	E-19第4層(仮)	3031
35	牙製品	イノシシ、 ゴ下顎大歯	完	63	7.5	9	5.05	内径4mm 外面穿孔。第93図・図版123-25	E-19第4層(仮)下	3111
36	牙製品	イノシシ	破	33	9		1.21		不明盛土	3092
37	牙製品	イノシシ、 下顎切歯	破				0.45	エナメル質部分、横位に研磨。硝碧痕明瞭。削り明瞭。	C・D-19第3～4層仮 東壁崩落土 除去時	3168
38	有孔製品	イノシシ、 四肢骨	破	25	12		0.73	有孔	盛土表探	3081
39	有孔製品	イノシシ、 四肢骨	破		16	3.5	1.93	半裁加工	E-19第4層(仮)	3036
40	管状製品	イノシシ、 大腸骨?		31.9	25.7	3	2.82		不明	3127
41	ヤス状	イノシシ、 四肢骨	完	30	4	3	0.32	柳葉状四肢骨を幅5。第93図・図版123-20	不明	3016
42	ヤス状	イノシシ、 脚骨	先端	26.2	6.3	4	0.48		不明	3180
43	ヤス状	イノシシ、 脚骨	完	34	6	3	0.75	三角形骨体、片側に幅1cmの溝を三英造す。その面は平である。他方は丸味を帯びる。第93図・図版123-19	E-20第4層(仮)	3007
44	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	23	3.7	3.4	0.24		盛土表探	3134
45	骨針	イノシシ、 脚骨L	先端				3.16	製品ではない	ATP-20	3171
46	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	48	5.9	4	1.61		ATP-20黒色土層	3124
47	骨針	イノシシ、 脚骨	体部	6.35	44.6	4	1.56		ATP-20黒色土層	3145
48	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	53	8.2	4	2.27	大きい	ATP-20盛土表探	3060
49	骨針	イノシシ、 脚骨	体部				0.3		C-18第4層(仮)	3132
50	骨針	イノシシ、 脚骨不	頭部		11.6	4	0.43	骨端に穿孔・有孔	C-18-20東部第4層	3062
51	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	27	5	3.7	0.43		C-19・20中央～西側50cm サブレンチ黒色土層	3075
52	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	25.9	5.1	4	0.49		D-19東壁 崩落土	3129
53	骨針	イノシシ、 脚骨	頭部				0.12	粗削り。有孔	E-17第5層(仮)	3172
54	骨針	イノシシ、 脚骨	先端				0.67		E-18溝	3227
55	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	13.4	5.4	3.5	0.22		E-19北遊清掃中	3133
56	骨針	イノシシ、 脚骨	体部	45	8	3	1.44		E-20第4層(仮)下平面 清掃中	3084
57	骨針	イノシシ、 脚骨	体部				0.45		E-20盛土表探	3175
58	骨針	イノシシ、 脚骨	体部	23.5	5.6	2.4	0.55	表面研磨。塊けあり。	E-20南壁個サブレン チ(東壁)	3179
59	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	60.1	5.2	4	1.59		E-20平面清掃中しみ① 南壁	3049
60	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	60.4	5.5	3	1.31		E-20炉址②	3116
61	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	18	7	3	0.39		E-23-23溝の盛土	3086
62	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	30	5	3.2	0.52		F-19東トレスコンボ掘削 土	3046
63	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	21	3	3	0.24		F-19東トレス盛土フレイ	3034
64	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	11.7	3.3	2.4	0.11		F-19東トレス盛土ふるい かけ	3136
65	骨針	イノシシ、 脚骨	先端	19.4	5.1	3.5	0.34		F-19東トレス白砂上面	3150
66	骨針	イノシシ、 脚骨	体部	18	3	2	0.13		F-19東トレス崩落土コン ボ掘削土	3033

<凡例>「観察事項」の項目に図版番号を含めた。「出土地」の項目(白)は右欄番号を示す。砂丘区右欄番号はCDに収録

表19 骨製品観察一覧③

番号	製品名	材質	完 成 破	タ テ	横	厚 さ	重 量	観察事項	出土地	遺 No.
67	骨針	イノシシ、 髌骨	破	24.8	6.1	4	0.59	側面研磨。	不明	3190
68	骨針	イノシシ、 髌骨	体部	28.5	9.5	4	0.86	表面面研磨。有孔	不明	3192
69	骨針	イノシシ、 髌骨	頭部				1.82	第94図・図版124-40	F-19東トレ東壁清掃中 崩落土	3009
70	骨針	イノシシ、 髌骨	頭部	19	14	7	1.33	第94図・図版124-42	ATP-20黒色土層	3071
71	骨針	イノシシ、 髌骨	頭部	95	9	3	2.56	第94図・図版124-43	1トレNo127	3094
72	骨針	イノシシ、 髌骨	尖端				3.55	第94図・図版124-44	C-18・20石集積中央西側	3017
73	骨針	イノシシ、 髌骨?	体部				0.13	有孔	D-19東側第4層掘り下げ	3128
74	鹿状	イノシシ、 髌骨?	体部	6.9	45.7	3	1.07	板状に加工	C-18北西側淡黒色土	3162
75	鹿状	イノシシ、 四肢骨	体部	64.1	7.7	3.1	1.39	板状に加工	C-18人骨上部北西側清掃中	3155
76	鹿状	イノシシ、 四肢骨	先端	37.6	13.5	4	8.08	平面清掃中	E-20第5層(仮)西側 平面清掃中	3137
77	鹿状	イノシシ、 髌骨	体部	44.4	6.75	3	1.02	ほぼ全面研磨。下面は平ら。	C-18壁面清掃	3181
78	鹿状	イノシシ、 髌骨?	先端	24.8	4.2		0.21		不明	3220
79	鹿状	イノシシ、 四肢骨	頭				1.98	研磨	E-20米軍埋設土	3141
80	鹿状	イノシシ、 四肢骨	体部				0.36	研磨加工	E-20第4層(仮)西側	3194
81	鹿状	イノシシ、 四肢骨	体部	56.3	16.2	3	4.65	削り後、摩耗。先端部を鹿状に削る	3トレ白砂	3214
82	鹿状	イノシシ、 髌骨	尖端	32.5	6.8	3	0.79	ほぼ全面研磨。	E-18第4層(仮)F	3125
83	鹿状	イノシシ、 髌骨	尖端	56.5	7.4	4	2.21	研磨	E-20第4層(仮)東側	3174
84	鹿状	イノシシ、 髌骨、四肢骨	体部	21	6	2	0.47		F-19東トレエンボ掘削土	3078
85	骨簞	イノシシ、 四肢骨	破	81.1	14	7	7.27	図版124-45	E-19溝9	3138
86	骨簞	イノシシ、 不明	破				0.51		E-20第4層(仮)下東側 レリーフ骨製品近く	3114
87	棒状	イノシシ、 四肢骨	破	11.0	12.4 (5.8)	4.0	2.51	狭りあり。イノシシ四肢骨を手直し。上部は幅12.1mmの 頭部を形成。孔径5mm。かんだし? 第94図・図版124-41	盛土	3011
88	棒状	イノシシ、 髌骨	体部	19.8	4.6	3.5	0.36		C-18第4層(仮)	3131
89	板状	イノシシ、 下頰骨	破	18.5	61	5.2	4.6	半円扁平周縁を研磨。図版123-29	E-19第5層(仮)	3108
90	板状	イノシシ、 四肢骨	体部	16.4	7.8	3	0.22	可能性有り	E-17溝5	3144
91	板状	イノシシ、 四肢骨不	破	19	8		0.53	有孔	E-19第4層(仮)中央	3102
92	板状	イノシシ、 四肢骨	破				0.22	研磨	E-20貝集積西側サフト レンチ掘り下げ	3144
93	板状	イノシシ、 大頰骨	破				5.5	凹凸有り、図版124-32	E-19北東壁崩落土	3055
94	未製品	イノシシ、 管骨(四肢骨)	完				0.91		E-20第4層(仮)西	3224
95	未製品	イノシシ、 四肢骨	完				1		C-19北レンチ第4層 (仮)黒土下	3221
96	未製品	イノシシ、 四肢骨	先端				0.62		E-18第4層(仮)	3217
97	未製品	イノシシ、 髌骨	完				0.54		D-19溝3層仮下～第4 層仮上東掘下	3223
98	未製品不明	イノシシ	破	20.6	12		0.83		E-19第4層(仮)	3110
99	不明	イノシシ、 四肢骨	先端				0.72	光沢あり。	E-16平面清掃中	3229

<凡例>「観察事項」の項目に図版番号を含めた。「出土地」の項目「台」は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録

表19 骨製品観察一覧④

番号	製品名	材質	完 破	タ テ	横	厚 さ	重 量	観察事項	出土地	遺 No
100	不明	イノシシ、 四肢骨	破	14	13	4	0.68	鎖状。第94図・図版2-18	E-19第4層(仮)直上	3090
101	不明	イノシシ、 四肢骨	破	20.9	11.2	5	1.36	表及び側面研磨。	C-18人骨上部黒色土層 第4層(仮)	3140
102	不明	イノシシ	破				0.18		E-20第4層(仮)下 東 ③	3135
103	未製品	イノシシ OTリ、腓骨か	破				0.91	ほぼ全面研磨。	E-20炉②	3220
104	鹿状	エイ、尾椎	先 頭部	24.7	7.9	4	0.63	板状研磨先端尖る。	C-D-19壁面清掃	3169
105	鹿状	エイ、尾椎	先 頭部	18.2	12.3	3	0.83	板状研磨	E-20第4層(仮)西側	3109
106	鹿状	エイ、尾椎	先 頭部				0.71	先端部を鹿状に研磨、第94図・図版124-46	F-19東トレ盛土	3030
107	未製品	エイ、尾椎	先 頭部				0.07		F-19東トレ第5層(仮) 灰色砂層	3225
108	未製品	ウミガメ、 腓骨	体 部	57.9	21.6	29.9	14.76	前鳥口骨(SL)	米軍埋設土	3196
109	板状	ウミガメ、 背甲板	破				0.62	彫刻有り。	C-19北トレ3m拡張部分 黒色砂(第4層仮)層	3191
110	板状	ウミガメ、 不明	破				1.12	研磨	E-17第5層(仮)上	3166
111	板状	ウミガメ	破				6.8	表裏及び側面研磨。有孔。側面に挟り。接合後 10.81g、第93図・図版123-27	2	3027
112	板状	ウミガメ?			24	5	3.84	表裏及び側面研磨。中央に挟り。	E-20崩落土	3051
113	半環状	クジラ、頭骨	破				3.42	表及び側面研磨。第92図・図版122-11	E-20北東崩落土	3006
114	半環状	クジラ、肋骨	完	20	72.5	15	21.05	緩やかな湾曲型。平にする。表裏面部分的に研 磨。孔径 左6mm 右5.4mm、図版122-3	ATP-20盛土表探	3054
115	骨針	クジラ、椎体	体 部	22.9	9		1.35	表裏及び側面研磨。接合。	盛土表探	3183
116	骨針	クジラ、肋骨	体 部	10.3	6	1.33		有孔、図版124-39	E-19第4層(仮)下	3069
117	骨錐	クジラ、肋骨	体 部			10	2.2	表裏面研磨。研磨	E-20第4層(仮)下 西 側	3188
118	骨錐	クジラ、肋骨	先 頭部	32.4	6.7	6	1.49		E-20第4層(仮) 東側	3125
119	骨錐	クジラ、肋骨	先 頭部	30.4	6.9	5	0.99		E-20平面清掃中	3115
120	骨錐	クジラ、肋骨	体 部				1.54		盛土表探	3201
121	骨錐	クジラ、肋骨	体 部	12.5	8.8	7	0.99	表裏研磨。	1トレ暗茶褐色層	3157
122	骨錐	クジラ、肋骨	先 頭部				0.96		2トレ盛土(表探)下	3142
123	骨錐	クジラ、肋骨	破	26.9	9	8.1	1.95	表裏-研磨。棒状に加工。	E-19-20第1層? 盛 土表探	3186
124	骨錐	クジラ、肋骨	頭 部				1.39		E-20第4層(仮)西側	3178
125	骨錐	クジラ、肋骨	体 部	42.3	11.1	10	8.08	全面研磨。	E-20第5層(仮)西側 平面清掃中	3195
126	骨錐	クジラ、肋骨	体 部	15	7.95		1.04	研磨あり。	E-20盛土表探	3176
127	骨錐	クジラ、肋骨	体 部				1.79		E-20炉址④	3177
128	尖頭状	クジラ、肋骨	破	44	8		2.8		ATP-20壁清掃	3089
129	尖頭状	クジラ、肋骨	破		6.1	6.1	0.74		C-19掘り下げ第4層 (仮)下	3050
130	尖頭状	クジラ、肋骨	先 頭部				2.83		C-19北トレ(+3メートル 拡張部)	3207
131	有孔製品	クジラ、肋骨	完	18	13	6.5	1.71	長方形。全面-研磨。有孔。第93図・図版123-17	E-20第4層(仮)	3097
132	有孔製品	クジラ、頭	破	38.4	28.3	16.3	8.73	全面研磨。有孔。	F-19南側第4層(仮)掘 り下げ米軍パイプ近く	3182

<凡例>「観察事項」の項目に図版番号を含めた。「出土地」の項目|台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録

表19 骨製品観察一覧⑤

番号	製品名	材質	完 破	タ テ	横	厚 さ	重 量	観察事項	出土地	遺 No.
133	半環状	クジラ、椎体	破				2.06		E-19-20第4層	3244
134	半環状	クジラ、不明	ほぼ 完				25.59	骨は密、縦位にキズ有り。骨の海綿組織は表面に比べて驚い、半分程度は自然に凹む。側面研磨。有孔。重節。図版122-5	不明	3020
135	半環状	クジラ、肋骨	破				4.79	表面研磨。	E-20第4層(仮)西	3243
136	半環状	クジラ、肋骨?	体 部				2.06	表面研磨。焼け有り	E-19-20唯第4層(仮)	3255
137	板状	クジラ、肋骨	破	32		2.4	5.7	板状か	1トレ 暗茶褐色	3242
138	板状	クジラ、椎体	破	81.7	51.4	24.8	37.94	板状に加工、研磨は明瞭でない。打ち割りのみ。	4トレNo403D	3238
139	板状	クジラ、椎体?	破				82	表面研磨。裏面海綿組織露出。焼け有り、図版3-49	E-20Dot.No654	3204
140	板状	クジラ、肋骨	破				15.61	全面研磨。有孔。図版123-26	E-20Dot.上7No466	3012
141	板状	クジラ、肋骨	破				15.71	平面は台形。断面はカマゴコ状。表及び側面研磨。表面切断。切断丸味肋骨を半截。未製品、図版123-28	E-19第5層(仮)南朝平面	3018
142	板状	クジラ、肋骨	破				34.78	研磨及び削り(切断)痕有り。焼け、灰色、図版123-30	E-20Dot.上7No465	3013
143	板状	クジラ、肋骨	破	56	28.6	12.5	16.62	研磨研磨研磨明瞭周縁研磨	不明	3240
144	板状	クジラ、肋骨	破	32.4	20	6	1.47	表面研磨。径6mmの孔、穿孔途中。穿孔の痕有	C-19北トレ黒色土層下(第4層・仮)	3206
145	板状	クジラ、肋骨	破				1.73	全面研磨。有孔。加工「U」字状に加工。端部に側面から穿孔。	E-20第4層(仮)下 平面清掃中	3074
146	板状	クジラ、肋骨	破				4.93	研磨あり。焼け	E-20盛土表探	3147
147	板状	クジラ、肋骨	破			13	12.1	全面研磨。有孔。3074と接合	E-20西側第5層(仮)上	3096
148	板状	クジラ、肋骨	破	37	10.6	14	5.33	全面研磨。焼け黒～灰色。	E-20平面西側り下げ灰色しみ⑤第5層(仮)	3032
149	板状	クジラ、肋骨	完	56	28	11	32.74	岩化。	E-20跡跡②	3099
150	板状	クジラ、肋骨	破				1.36	表及び上面研磨。	一盛土表探	3154
151	板状	クジラ、肋骨	破	85.2	32	21	43.16	隅丸。周縁研磨、隅丸。	E-19石集積	3239
152	板状	クジラ、肋骨?	破	33.1	13.5	8.9	2.1		E-19-20盛土	3151
153	板状	クジラ、肋骨?	破	21	10		1.12	丸味・隅磨り側面丸味。研磨。赤味に注意。	C-19-0北西落ち込み1	3101
154	棒状	クジラ、椎体	体 部				0.82		2トレ 暗茶褐色カワニシ混雑移積	3184
155	棒状	クジラ、椎体	体 部				1.07		2トレ盛土(表探)上	3156
156	棒状	クジラ、肋骨	破	57.1	15	13.5	8.46	棒状に加工平わずかに湾曲。図版122-9	不明	3241
157	棒状	クジラ、肋骨	破	29.8	12	9	3.41	有孔・2孔タテ8.2mm タテ4.7mm 径6mm 3.5mm 接合の可能性有り。図版124-37	E-19米軍施設	3059
158	棒状	クジラ、肋骨	体 部	51.1	8.6	6	2.38	接合 両端削り。	2トレ盛土表探	3185
159	棒状	クジラ、肋骨	体 部	26.3	9.5	7	1.37		ATP-20黒色土層上面	3153
160	棒状	クジラ、肋骨	破	12	52	7.8	3.15	横9mm	C-19-20第4層(仮)東側	3066
161	棒状	クジラ、肋骨	体 部	53.2	5.9	6	1.28	平坦研磨	E-20第4層(仮)下 西側	3126
162	棒状	クジラ、椎体	破				1.6		E-19第4層(仮)	3256
163	棒状	クジラ、肋骨?	破				2.46		E-19清掃	3237
164	棒状	クジラ、肋骨?	破				1.76		E-19-20西側前	3258
165	棒状	クジラ、肋骨?	破				1.15		E-20第4層表探	3259

<凡例>「観察事項」の項目に図版番号を含めた。「出土地」の項目|台は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録

表19 骨製品観察一覧⑥

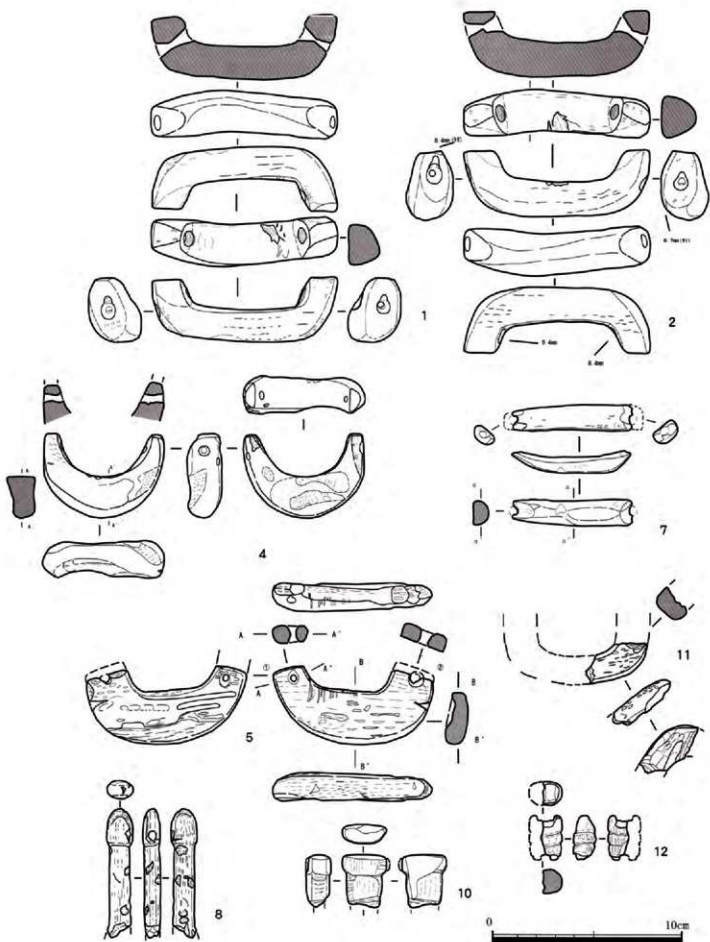
番号	製品名	材質	完 成	タ テ	横	厚 さ	重 量	観察事項	出土地	遺 No
166	棒状	クジラ、肋骨?	破				2		E-20第5層(仮)平瀬西 灰	3260
167	棒状	クジラ、肋骨	破				1.07		E-20#4b	3261
168	棒状	クジラ、肋骨	体 部				4.96		ATP-20黒土	3262
169	棒状	クジラ	体 部				0.83		1トレ層茶褐色 下層	3158
170	未製品	クジラ、椎体	完	138	99.5	27	250	方形羽虫周縁は打ち削り 未製品、第94図・図版124-47	E-20淡茶褐色スミ混下	3202
171	未製品	クジラ、椎体	破				3.11	表面研磨。	C-19・20第4層(仮)中 央～東黒土	3209
172	未製品	クジラ、肋骨	破	26.5	14	9	2.3	研磨端部に研磨	E-20北東壁崩落土	3107
173	未製品	クジラ、肋骨	破				4.13	溝状・表及び上面に研磨。	E-20北壁崩落土(第4 層)	3063
174	未製品	クジラ、肋骨	完	170	28.5	19.5	55	棒状粗削り四面尖る未製品、第94図・図版124-48	E-20第4層(仮)Dot288 土坑7Dot上げ	3203
175	未or不明	クジラ、肋骨?	破	41.2	15.1	18	10.17		HC-19東壁崩落土	3146
176	未or不明	クジラ、肋骨	破				1.49		2トレ盛土(表採)上	3152
177	未or不明	クジラ、肋骨	破	49.6	40.5	17	23.91	加工は表面のみ?他に加工無	C-19・0中央～東側第4 層(仮)層掘下け	3205
178	未or不明	クジラ、肋骨	先 端				0.48		E-20第4層(仮) E-20-h	3169
179	未or不明	クジラ、肋骨	体 部				1.1	小さい方	E-20第4層(仮)下東	3222
180	未or不明	クジラ、肋骨	破	28.1	12.4	7.6	2.64		E-20第4層(仮)下東骨 製近	3212
181	未or不明	クジラ、肋骨	先 端				0.62		盛土表採	3159
182	未or不明	クジラ、肋骨?	完	33.9	37.4	19	8.59	表裏面とも研磨。表面の骨質は密で裏は粗になるが3020程、密くない加工3020と同じ、端部に穿孔。孔は上位に向けて傾スレ有り。表面の骨質は密で、裏は疎になるが3020程粗くない。	盛土表採	3047
183	篋状	クジラ、肋骨	先 端	46.9	10.7	6	2.58	表面研磨。裏及び側面は削り。先端は細くなる。	3トレNo304中央部	3187
184	篋状	クジラ、肋骨	先 端				2.71	有蓋、第94図・図版124-34	ATP-20黒色砂層	3024
185	簞状	クジラ、頭部 は有段	破				5.31	ほぼ全面研磨。第92図・図版122-10	盛土表採	3015
186	簞状	クジラ、肋骨	破				1.84	有孔頭部一横位に沈線、第92図・図版122-12	盛土表採	3026
187	簞状	クジラ、肋骨?	頭 部				2.54		E-9北壁崩落	3263
188	簞状	クジラ	破				8.52	第94図・図版124-31	E-20第4層(仮)Dot201	3025
189	骨針	クジラ? 不明	体 部				0.5		不明	3232
190		クジラ?		22	60	12	11.86		E-20第4層下(仮)8.94 4Dot	3029
191	有孔製品	サカナ、椎体	完		11	13.9	0.81	鋳鉄付着	ATP-20黒色砂層	3167
192	有孔製品	サメ、歯	完	12.7	13.3		0.21	第93図・図版123-14	F-19南側第4層(仮)掘 り下げ米軍パイプ近く	3014
193	有孔製品	サメ、歯	完	20.9	23.65		1.14	第93図・図版123-15	E-20中層2前掘	3003
194	有孔製品	サメ、歯	完	20	11.9		0.61	有孔 加工-基部に穿孔。孔は11mm。孔の位置から2孔と想定される。基部の一部破損。イタチザメ。	C-19	3106
195	有孔製品	サメ、歯	先 端				0.35	基部研磨、炭化焼け		3215
196	有孔製品	サメ、歯	破				0.6	有孔1孔、イタチザメ。	C-19	3105
197	有孔製品	サメ、歯	完	15	14.4	3	0.37		D-19第3層下	3164
198	有孔製品	サメ、歯	完	18.2	18	3.8	0.39		F-19東トレ第5層(仮) 灰色砂層	3113

<凡例>「観察事項」の項目に図版番号を含めた、「出土地」の項目(台)は台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録

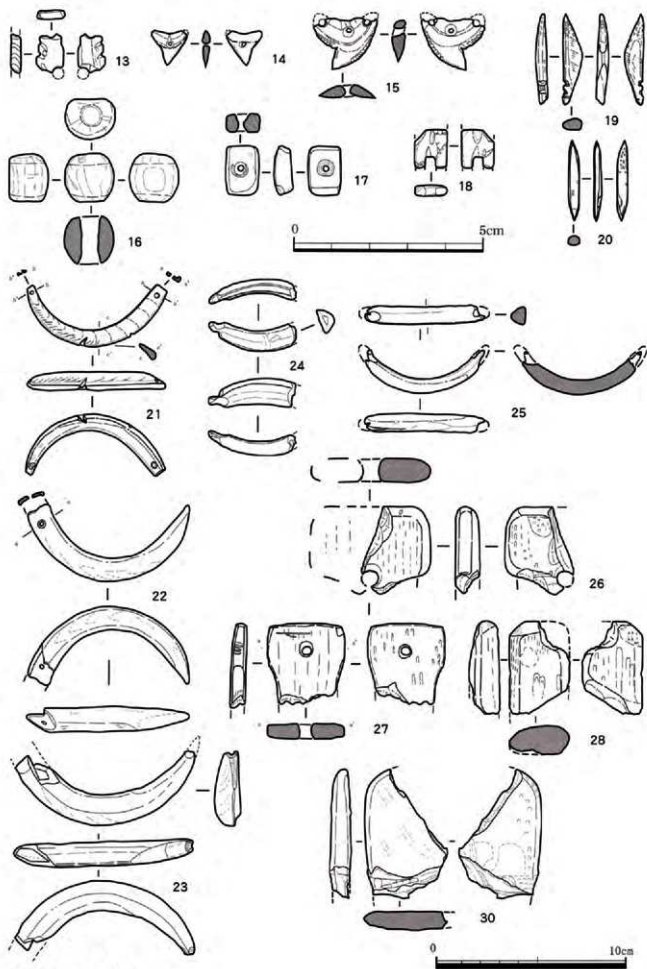
表19 骨製品観察一覧⑦

番号	製品名	材質	完破	タテ	横	厚さ	重量	観察事項	出土地	遺 No.
199	有孔製品	サメ、椎体	破	24.4	23	12	2.63		C-19・20第4層東側掘下げ	3112
200	有孔製品	サメ、椎体	完	18.3	8	1.41			C-19・20第4層西平掘	3035
201	有孔製品	サメ、椎体	完	12.6	5	0.5			D-19東側第4層下掘り下げ	3163
202	有孔製品	サメ、椎体		6	3	0.05	有孔		E-19第4層(仮)	3039
203	有孔製品	サメ、椎体		11.1	4.8	0.54	有孔		E-19南壁崩落跡	3037
204	有孔製品	サメ、椎体	破	6.8	3	0.01			E-20第4層(仮)E-20-f	3166
205	有孔製品	サメ、椎体		10.85	5.2	0.27	有孔		F-19第4層しみバ以南淡茶褐色	3040
206	有孔製品	サメ、椎体		21.8	11	0.89			HG-19北・東・西壁崩落土エッジ掘削時盛土	3087
207	豆	ジュゴン、肋骨	完	17.5	18.5	14.7	4.1	第93図・図版123-16	F-19	3019
208	半環状	ジュゴン、椎体	完	15.7	57.3	12.6	11.29	加工・軸椎を「U」字状に加工、両端に穿孔片溝は、2個の孔、横断面はコマゴコ状内縁は角、外縁は丸味をおびる。(孔 右4.7mm)	E-19第4層(仮)直上	3045
209	半環状	ジュゴン、頭骨	完	19.4	68.9	16.5	17.65	部分的に自然面を残す基端は水平にカットされる。横断面は溝状孔径左5mm 右3.4mm。椎体を加工、骨の自然面を部分的に残す両面に穿孔。穿孔の方向は、それぞれ異なる。遠部は丁寧に研磨されている。内縁は角、外縁は丸味を帯びる。図版122-6	E-20盛土	3053
210	半環状	ジュゴン、椎体	完				31.47	表面研磨、削り(切断)若干自然面残る。有孔。腕輪。	ATP-20黒色砂層	3021
211	半環状	ジュゴン、肋骨	完				51.06	ほぼ全面研磨。有孔。腕輪、第92図・図版122-1	E-20	3062
212	半環状	ジュゴン、肋骨	完				51.41	ほぼ全面研磨。有孔。腕輪、第92図・図版122-2	E-20	3067
213	半環状	ジュゴン、肋骨	ほぼ完				8.08	緩やかな湾曲に加工、両端を穿孔する。内縁は角、外縁は丸味を帯びる。孔は外縁を一透削った後に穿孔する。両端の削りは「U」に似せる為のものか、第92図・図版122-7	E-20第4層(仮)f	3061
214	棒状	ジュゴン、肋骨	先端			12	2.53	ほぼ全面研磨。削り跡3ヶ所	E-19溝9	3189
215	棒状	ジュゴン、肋骨	破				6.56	第92図・図版122-8	C-19	3022
216	棒状	ジュゴン、肋骨		64	21	14	13.94	有孔接合可能	E-17第4層(仮)	3098
217	棒状	ジュゴン、肋骨	破				7.54	有孔頭部に孔。第94図・図版124-34	E-18溝9-a	3004
218	棒状	ジュゴン、肋骨	体部	43.8	11.1	8	5.66	内縁・両端。白化→焼け	E-20第4層(仮)骨製品出土付近	3064
219	有孔製品	ジュゴン、上顎切歯?		36	19.2	12.2	6.2	研磨孔は7mm 基部・研磨接合か	F-19東トレ南西側第4層(仮)淡茶褐色土	3010
220	有孔製品	ジュゴン、肋骨		45.5	17	13	10.42	有孔4mm孔-9.6 未貫通。(孔 右8.2)	HG-19第5層仮黄色砂層下	3095
221	骨髄	ジュゴン・オクシラ、肋骨	先端	64.4	18.5	12	12.65	研磨有孔研磨or切断面。	E-20第3層(仮)下・第4層(仮)上	3072
222	骨髄	ジュゴン、肋骨	先端				0.78		E-18盛土フルイかけ	3193
223	骨髄	ジュゴン、肋骨	先端	41.1	11.3	10	4.67	孔径5.8mm。第94図・図版124-38	E-18第5層(仮)上	3143
224	骨髄	肋骨、肋骨?	破	16	8		0.81		E-19第4層(仮)土	3082
225	骨髄	軟骨(クジラ?)肋骨	先端				1.82	第94図・図版124-35	C-19・20黒色砂層(第4層・仮)	3005
226	骨状	軟骨(イナシ以外から)、四肢骨	先端				5.16	第94図・図版124-33	E-19南壁崩落土	3025
227	未製品	ジュゴン、肋骨	体部	52.6	22.4	18	21.74	削りあり。	第4層(仮)下	3197
228	未製品	シカ、角	完	220	17.6	13.6	24	の角湾曲削り、体部は複数の削り面、未製品、図版125-50	E-19第5層(仮)南側平面	3080
229	未製品	骨?	破	15.2	20.9		2.52		D-19第4層(仮)東風下	3210
230	未製品	サメ、歯		43	33	8	6.58	三角形基部破損。化石「落ちサメ」	C-19-a	3068

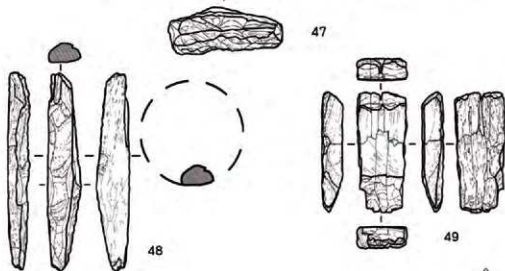
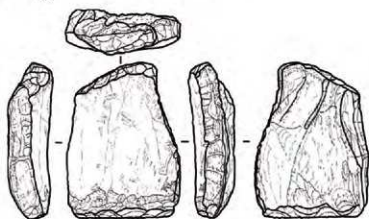
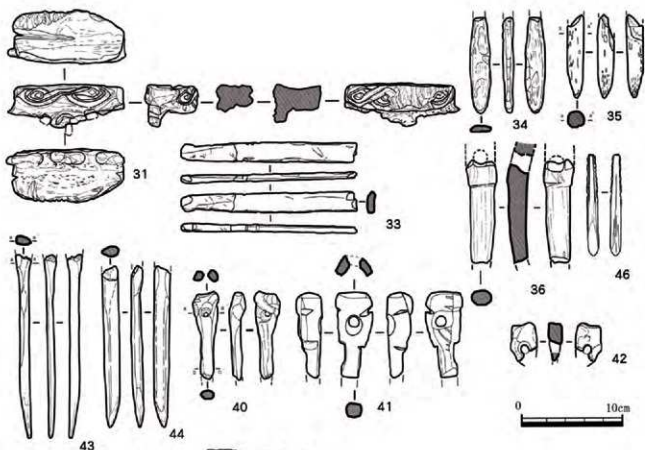
<凡例>「観察事項」の項目に図版番号を含めた。「出土地」の項目には台帳番号を示す。砂丘区台帳番号はCDに収録



第92图 骨製品①



第93图 骨製品②



第94図 骨製品③

4. 貝製品

砂丘区出土の貝製品は装飾品と考えられるもの、実用品と考えられるものがある。用途が明瞭なものは製品ごとにはっきりしない製品は貝種ごとに略述した。貝製品については表20観察一覧を示した。

1) 装飾品

装飾品と考えられるものにはタケノコガイ製品、イモガイ製品などがある。

第95図1はクモガイあるいはスジガイの突起を利用した製品で2個の小孔がみられる。H・G-19、北東礫石集積に関連して出土。

同図2はホシダカラの殻底の片側を用い、半月形を呈するもので、直線部分に鋸歯状の模様が残る。顕著に研磨されるが、貝殻の自然面を部分的に残すものである。古我地原貝塚に類例がある。

同図3はイモガイの外唇に近い部分を、札状に加工し、均等に2孔を配したものである。孔には上下方向に紐ずれが確認できる。類例は浦添貝塚がある。

同図4はクロチョウガイなど真珠質の貝を三角形に象ったもので「貝鏃」と呼ばれているものである。本品は破損し、基部近くが残る。F-19東トレンチで出土。類例は熟田原貝塚がある。

タケノコガイ製品(第95図5～7)の3個である。

螺塔を両面から研磨するもので、5と7は特に顕著である。6はアバタもみられ、打ち上げ貝を利用したものであろう。本品は長浜金久第二遺跡(1984)で人骨の足下から出土している。本区では1トレンチとE-20第5層で出土。

マクラガイ製品:第96図30は貝をそのまま利用し、螺塔部を全面研磨したもので、貝殻には細かいアバタが認められる。

イモガイ製品:イモガイの小・中型とマガキガイを利用した製品をここにまとめる。貝の形をそのまま利用するものをaタイプ、螺塔部を用いるものをbタイプ(貝小玉)とした。以下、それぞれについて略述する。

・イモガイa(第96図28・29)イモガイの形をそのまま生かし、螺塔に小孔を有し、螺塔部を研磨したものである。28は螺塔を摩耗するが、明瞭な研磨は確認できない。肩部は丸味を持つ。

29はナンヨウクロミナシガイで螺塔部を研磨する。研磨面は2面に分かれ、肩部は明瞭な角を形成し、殻頂部に小孔を施す。

・イモガイb(貝小玉)(第96図11～26):小型の巻き貝の体層あるいは螺塔部を切り取り研磨し、玉状に仕上げたもので17個出土した。本品の素材は主に小型イモガイが主体であるが、今回、タケノコガイ類の体層を用いたものも確認された。(同図11・12・19)

体層利用(11～17・19)と螺塔利用(18・20～24)があり、大きさは前者の方が小さいようである。螺塔利用にはマガキガイ(25・26)がある。

18は小型イモガイの螺塔部で有るが、研磨が顕著で更に焼けて、灰白色を呈する。

同図25・26は螺塔が螺旋状に低くなることからマガキガイと思われる。螺塔利用のものは摩滅が大きくアバタもみられることから砂浜で容易に採取できる打ち上げ貝が用いられている。出土はF-19・D-19で多く出土している。

・イモガイb中型(第96図27):中型のイモガイの螺塔を研磨したもので、他に加工痕はみられない。

アンボンクロザメ:(第96図31)大型イモガイの代表で貝輪や貝符などの素材の貝である。31は螺

塔部はかなり研磨されているが、他に加工痕はなく、貝輪の未製品と考えられる。C-17表採品で、他にE-17米軍埋設土、黄白色砂で得られ、計3個出土である。本地区ではイモガイの貝集積遺構などは検出されてなく、自然貝の出土も少ないようである。

貝輪：貝輪はオオベッコウガサの一枚貝とサラサバテイラ、ゴホウラ、大型イモガイなどの大型巻き貝を用いたものがある。

・オオベッコウガサ(第99図42)：貝殻の外縁を幅1cm弱残し、輪状にしたものである。内縁は打割後の加工は認められない。

・サラサバテイラ貝輪(第95図9・10)：サラサバテイラの殻底の内側を取り除きリング状に整形したもので、2個出土した。

いずれも未製品である。10は内縁の打割が明瞭に残るものである。いずれもA-T.P.20で出土している。

・イモガイ(第99図42)大形イモガイの螺塔部をリング状に加工したもので、表裏面とも丁寧の磨かれている。

・ゴホウラ

貝輪と未製品が出土した。さらに貝輪は腹面型と背面型が出土している。

〈腹面型〉(第97図32・33・第98図34・35・37)は5個出土した。32・33・34はE-19第4層(仮)で重なった状態(図版86)で出土している。規格化されたように見事に大きさや幅が同じである。腹面型にはいくつかのタイプがあり、これらの貝輪は諸図型に分類されるものである。沖縄島では初めて確認され、九州では弥生前期に比定される。

同図35は前述と同じ腹面を利用した貝輪である。研磨面は内外縁とも水平で、小形のゴホウラか大形イモガイを用いた可能性を残すもので図ではイモガイを想定し、復元を試みた。出土もD-17東トレンチ淡黒色砂層で得られ、出土する場所も前3個とは異なる。

第97図37は幅14mmの薄いタイプである。加工についてみると表面は研磨顕著で裏面はやや自然面が残る。内縁は研磨面は垂直に施され、外縁は横断面が舌状を呈する。

〈背面型〉(同図36)は幅11mmで細いタイプで、螺塔から袖部が残存する。殻の肩部から螺塔に径2mm程度の大きなアバタが見られる。横断面をみると内縁は舌状、外縁は内傾する。一般に外縁の研磨は製品に対して水平面に施されており、本品は加工の方法あるいは工具がこれまでとは異なる可能性がある。

〈未製品〉(第99図38・39・40)はいずれも腹面型で、内外縁は打割で調整される。39の方がより貝輪に近い形態を示すが、調整は38の方が細かい。殻は39は貝色が残り、アバタは両者とも顕著に見られる。同図41はゴホウラの螺塔及び袖部である。貝の螺塔に沿うように割りとりられたもので、製品製作の残骸と思われる。ただし、残存部のアバタはかなりの多い。F-19井戸状遺構内(図版85)から出土したが、遺構との関わりははっきりしない。

2) 実用品

容器としてはホラガイ有孔製品、ヤコウガイ製貝匙、利器としてヤコウガイ蓋貝斧、スイジガイ製利器、その他に二枚貝有孔製品が出土した。

ホラガイ有孔製品（第100図46）は腹面に径2cm弱の孔を施すもので、出土した中では最も小さい。外唇も平らになるように調整されている。5個出土している。E-17とE-14から得られ、そのうち1個はE-17柱穴（Na17018）から検出されている。

ヤコウガイ製貝匙（第100図43～45）いずれもヤコウガイも破片で、主にE-20で出土している。

ヤコウガイ蓋製貝斧（第100図47～49）ヤコウガイの蓋の薄い部分を連続して剥離して、附刃したもので5個出土している。50はかなり、内側まで打ち削りしたものである。

スジガイ製利器（第100図50・51）

4個出土した。51はほぼ完成形で、突起は上原分類（1980）の①の突起が研磨される。

二枚貝有孔製品（第101図）

二枚貝の殻頂近くに粗孔を施すものである。シャコガイ（52～55）リュウキュウサルボウ（56～59）、カワラガイ（60・61・63・65）、リュウキュウザルガイ（62・64）、リュウウキュウマスオ（68）、スタレハマグリ（66）、サメザラガイ（67）等がある。

本品の出土総数は33個で、最も多い貝種はカワラガイ12個である。18・19ラインで多く出土している。ヒメジャコは5個出土したが、主に14・16ラインに多い。リュウキュウサルボウはC・Dラインに多い。用途についてみると最も多いカワラガイは縄文時代後期に相当する所から得られ、裝飾的な可能性が考えられ、ヒメジャコは貝塚後期に相当する所から得られ、漁網繩の可能性が高い。

・まとめ

本区からは69点の貝製品が出土した。そのうち、縄文時代中～後期に伴う製品は第95図に示したもので、浦添貝塚や古我地原貝塚で類例が報告されている。

弥生時代相当期のもは第97・98・99・100・101図に示したものである。しかし、第96図に示したイモガイb（貝小玉）は両方の時期で報告されており、時代の決め手に欠けるものである。

貝製品の状態をみるとほとんどに細かいアバタが見られ、製品製作のものではなく、海水に長期的に浸っていたために細かなアバタができたと思われる。しかし、第95図6や第99図39のように製作時点からアバタを有するものもある。

本区で出土したゴホウラ製貝輪は弥生時代中期前半（木下1996）に属する諸類型の貝輪で、しかも一括して出土することからゴホウラの貝交易にその開始時期、あるいは製作場所など問題を投げかける資料となるであろう。

引用・参考文献

- ・新田重清 1970「浦添貝塚調査概報」『南島考古』創刊号 沖縄考古学会
- ・上原 静 1981「いわゆる南島出土の貝製利器について」『南島考古』No.7pp.4-46 沖縄考古学会
- ・弥生久志・青嶋和憲・小片丘彦・分部哲秋・松下孝幸・松本・四宮昭彦・行田義三 1985.3「長浜金久遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(32) P95 鹿児島県教育委員会
- ・島袋 洋・島 弘・島袋春美 1987「古我地原貝塚-沖縄自動車道(石川-那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)」『沖縄県文化財調査報告書』第84集 沖縄県教育委員会
- ・木下尚子 1996「南島貝文化の研究-貝の道の考古学-」法政大学出版局
- ・島袋春美 2004「奄美・沖縄諸島の漁網繩の形態的研究(その3)-考古資料-」『南島考古』第23号 沖縄考古学会

表20 貝製品観察一覧①

第 図	標記番号	製品名	種類	完形・破損	縦径高 (mm)	横径長 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	観察事項	出土地
第 95 図	1	有孔製品	クモガイカスイシガイ	完形	40.4	5	4	1.5	突起。2個の孔。表裏面:研磨、側面:自然。孔:縦4.7mm×横4.3mm	H-G-19, 北東洞石集積箇所上清掃中, 台050119-1
	2	有孔製品	タカラガイ	完形	66	19	6	12.32	ホシダカラの殻底が直線部分に剛曲状の折り。表裏面:研磨。板状、裏材の自然面。円上孔:縦4.1mm×横4.2mm	E-20, 台030320
	3	札状製品	イモガイ	完形	3.3	3.8	1	1.69	殻は扁平化。イモガイ外層。板状。孔は上下に2個。全面研磨。孔形円、外縁は紐ずれ。孔位置均等。孔:縦3.1mm×横3.15mm	
第 96 図	4	貝殻	クロチヨウガイ?	破損	1.8	1.7	1	0.93	三角形。表面:自然、裏面および周縁:研磨。孔は円形。孔は基部側。孔:縦2.7mm×横2.9mm	F-19東, 盛土表探, 台041116-42
	5	装飾品	タケノコガイ	破損	30	1.3	1	1.69	体層表裏面:研磨、研磨孔:縦1.1mm×横1.3mm	1トレンチ, No125, 台020318-18
	6	装飾品	タケノコガイ	完形	60	1.7	1.8	7.47	表面:摩耗、裏面:アバタ有り。	E-19, 第5層(仮), 台030827
第 126 図	7	装飾品	タケノコガイ	完形	8.1	1.7	1.6	11.41	表裏面:研磨、側面:自然。孔:縦1.5mm×横1.6mm	E-19, 第5層(仮), 台030827
	8	貝殻?	不明	破損	3.6	1.1	4	2.61	貝の成長線は表面は横、裏面は縦。側面:研磨。	A-TP20, 盛土, 台040114-14
	9	貝輪(未)	サラサハテイラ	破損	4.2	1.2	5	2.88	殻底の一端突起。周縁打ち削り。	A-TP20, 黒色土層上面, 台031217-62
第 127 図	10	貝輪(未)	サラサハテイラ	破損	84.2	18	1.5	25.27	色浅。殻底を利用。内縁打削、調整の単位明瞭	A-TP20, 盛土, 台040109-21
第 96 図	11	貝小玉	小型イモガイ	完形	4	4	1	0.02	体層を利用。表裏面:研磨。孔:縦2.4mm×横2.2mm	D-19, 東側掘り下げ第4層(仮), 台041216-23
	12	貝小玉	タケノコガイ	完形	4	4	1.5	0.11	筋有り。体層利用。表裏面:研磨、側面:均一。孔:縦2.1mm×横1.5mm	F-19東トレ, 盛土
	13	貝小玉	タケノコガイ	完形	7	6.8	1.7	0.11	筋有り。体層を利用。表裏:研磨、厚さは不均一。孔:縦3mm×横3mm	F-19東トレ, 盛土
	14	貝小玉	タケノコガイ	完形	4.5	4.4	1	0.03	表面研磨、裏面一部折り、側面:均一。孔:縦2.1mm×横2.1mm	
	15	貝小玉	小型イモガイ	完形	6	5.9	1	0.04	表裏面:研磨。孔:縦3.3mm×横3.2mm	F-19, 盛土, 台041124-23
	16	貝小玉	小型イモガイ	完形	3	3	1	0.05	表裏面:研磨。孔:縦3.8mm×横3.7mm	
	17	貝小玉	小型イモガイ	完形	8.35	8.15	1.1	0.08	表裏面:研磨。孔:縦5.1mm×横4.3mm	F-19東トレ, 盛土, 台041126-15
	18	貝小玉	小型イモガイ	完形	8.1	7.8	3.1	0.31	アバタ有り、焼け、灰白色。彫彫明瞭。表裏面:研磨。孔:縦2.6mm×横2.5mm	
	19	貝小玉	小型イモガイ	完形	8.55	8.25	2	0.14	表裏面:研磨。孔形は円、自然か。孔:縦4.15mm×横4.3mm	D-19, 米軍
	20	貝小玉	小型イモガイ	完形	10.2	9.7	2	0.29	側面:均一。孔:縦4.1mm×横3.9mm	D-19, 第4層東側掘り下げ, 台041221-47
	21	貝小玉	小型イモガイ	完形	15.1	15.2	5	0.65	上面:殻頂近く研磨、表面:摩耗、アバタあり。孔:縦6.3mm×横6mm	H-G-19, 第5層(仮)南東洞石集積周辺, 台041111-8
第 127 図	22	貝小玉	小型イモガイ	完形	13	13	5	0.83	アバタ有り。表面研磨、表面摩耗。孔:縦2mm×横2mm	E-20, 貝集積北西側掘り下げ, 台040902-4
23	貝小玉	小型イモガイ	完形	14	15	1.2	0.65	層間丸味、研磨による。孔:縦4mm×横3mm	盛土表探, 台030310-6	

<凡例>「観察事項」の項(貝殻の状況、加工、特に二枚貝有孔製品については孔の形、位置、穿孔方向、大きさ、腹縁の状況)「出土地」の項目(台は台帳番号を示す。)

表20 貝製品観察一覧②

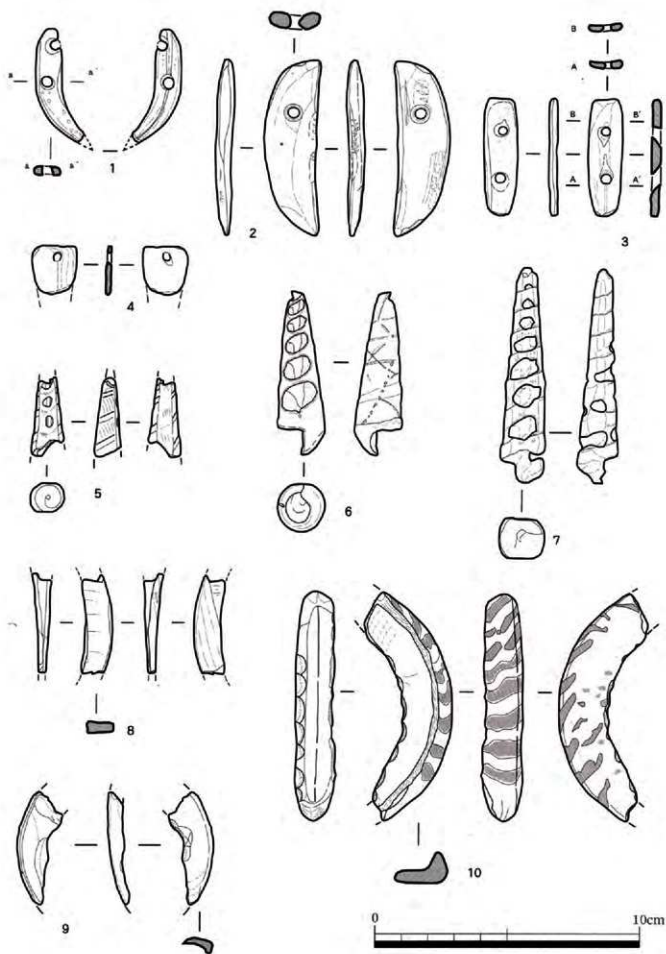
第99回 国・ 版	種別	製品名	種類	定形・ 破損	縦 殻高 (mm)	横 殻長 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	観察事項	出土地
第96回 国・ 版	24	貝小玉	小型 イモガイ	完形	16	17	12	1.36	殻頂を利用。中央に穿孔。裏面：自然。孔形・楕円。孔：縦6mm×横7mm	灰色砂しみの暗黒褐色灰色砂層部分，台040726-28
	25	貝小玉	マガキガイ	完形	19	21	11	3.75	殻頂外→内 水平に研磨。円形孔：縦4mm×横4mm	F-19, 第5層(仮) 灰色砂層，台041116-37
	26	貝小玉	マガキガイ	完形	23	24	10.1	7.22	細かいアバタが表面に見られる。殻頂、円形、孔縦4mm×横4mm	1トレンチ，盛土表探，台020625-3
	27	円盤状製品	中型 イモガイ	完形	3.3	3.2	0.6	6.42	風化。殻頂は研磨	1トレンチ，黒褐色シルト層，台020220-7
	28	イモガイα	マダライモ ガイ	完形	2.6	1.7		6.1	死貝かアバタ突起。体層は破損。肩部平坦か丸味。孔：縦0.2mm×横0.2mm	台041020-0
	29	イモガイα	ナンヨウ クロミナシ	完形	4.4	2.6		21.66	細かいアバタ有。残り体層殻頂研磨。穿孔研磨顕著。2面円形。単孔・外→内。外殻破損。孔：縦0.3mm×横0.2mm	C-19,20, 東側第4層(黒色土層)，台040330-38
第97回 国・ 版	30	イモガイα	マクラガイ	完形	3.3	1.8	10.5	6.46	アバタ有り。全面研磨(螺塔)→単孔。孔縦0.6mm×横0.7mm	D-18, 西側崩落土，台050912-31
	31	未製品	アンボンク ロザメ	完形	11.8	6.7		299	色若干残る。殻頂部研磨。	C-17, 表探，台060112-9
	32	貝輪	ゴホウラ	完形	94	70	22	67.6	風化気味。腹面型。殻輪も丁寧に研磨。内・外縁とも舌状。楕円、孔：縦67mm×横48mm	E-19, 第4層(仮) 西畦近く，台021204-0
第98回 国・ 版	33	貝輪	ゴホウラ	破損		98	20.2	44.29	風化気味。腹面型。殻輪も打削。内外縁に丁寧研磨。肩部に径5×5mmの孔。孔の形状から自然の可能性が高い。表面：自然。	E-19, 第4層(仮) 上，台020919-0
	34	貝輪	ゴホウラ	完形			30	13.65	腹面型。	E-19, 第4層(仮) 西畦近く，台021204-0
	34	貝輪	ゴホウラ	完形	99		23.0	46.69	腹面型。殻輪丁寧に研磨。	E-19, 第4層(仮) 西畦近く，台021204-0
第99回 国・ 版	35	貝輪	ゴホウラ	破損			20	21.64	腹面型。風化気味。内外縁丁寧に研磨。研前面は水平。表面：自然。孔：楕円	D-17東，淡黒色砂層
	36	貝輪	ゴホウラ	破損			10.9	7.56	背面型。アバタは肩部から螺塔に見られる。内縁は舌状。外縁は内側が内屈する。	D-18, 第4層(仮) 灰色砂層，台040329-17
	37	貝輪	ゴホウラ	破損			20	7.22	腹面型。表面研磨顕著。やや自然面が残る。内縁は研磨面垂直。外縁は舌状。研磨面は内に傾く。孔：楕円	C・D-18, 淡黒色砂層(第4層・仮)，台040812-5
第100回 国・ 版	38	未製品	ゴホウラ	完形	10	6.6		98.72	腹面型。殻輪も粗く打ち削る。内縁・外縁・打削。孔：縦3.3mm×横3mm	D-17, 南側淡黒色砂層第4層(仮) 下，台040628-8
	39	未製品	ゴホウラ	完形	8	6.7		41.61	アバタも腹面型。内・外縁打削調整。39より粗く、外縁の調整は丸味がある。やや縦長の円。孔：縦4.2mm×横3.7mm	E-18, 米軍埋設土，台030325-14
	40	未製品	ゴホウラ	破損	130.5	70.7	60.3	198	アバタ。螺塔に沿うように削り取る。	F-19, 井戸状遺構，台051129-0
第101回 国・ 版	41	貝輪	オオベッコ ウガサ	破損		6.3		4.41	アバタ無。色残り。外縁を利用。孔：縦4.9mm	C-17, 南西側白砂，台050113-25
	42	貝輪	大形 イモガイ	破損	40.6	9	5	5.96	アバタ無。殻頂利用	C-17, 北東側白砂(粗い)，台050201-2
第102回 国・ 版	43	貝匙	ヤコウガイ	破損	40.4	30	10.1	13.1	外殻研磨。体層利用。	E-20, 南壁面，台050821-6
	44	貝匙	ヤコウガイ	破損	40.5	20.4	2	3.41	真珠層。体層利用。外殻は真珠層まで研磨。周縁も研磨顕著。	不明。
	45	貝匙	ヤコウガイ	破損	40.8	30.1	2	11.21	外殻の螺肋及び周縁研磨。	E-20, 第4層(仮) 盛土，台050207

＜凡例＞「観察事項」の項(貝殻の状況、加工、特に二枚貝有孔製品については孔の形、位置、穿孔方向、大きさ、殻縁の状況)「出土地」の項目(台は台帳番号を示す)

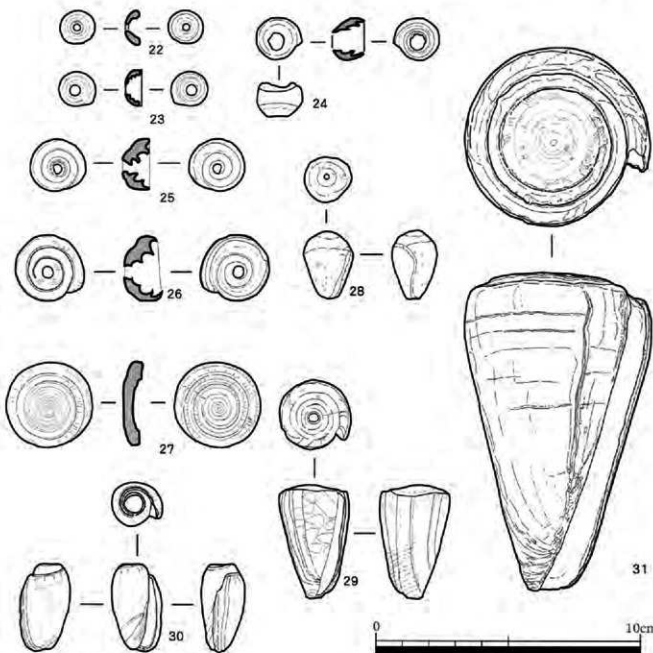
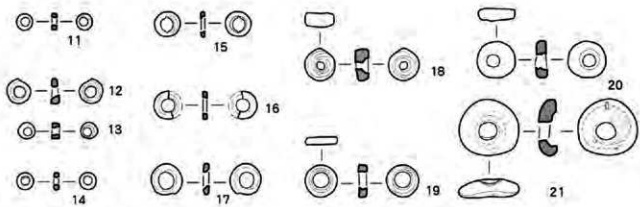
表20 貝製品観察一覧③

種別	種別番号	製品名	種類	定形・破損	縦径高 (mm)	横径長 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	観察事項	出土地
第100国・ 130	46	有孔製品	ホラガイ	定形	18.8	7.3	60	97.1	色残り。腹面穿孔、殻頂・欠外唇破損。孔:縦1.1mm×横1.9mm	E-17, 第5層(仮), 台030730-1
	47	螺蓋貝芥	ヤコウガイの蓋	定形	7.7	8.1	20.1	188	打割調整で削刃。	北東側崩落土, 台050120-16
	48	螺蓋貝芥	ヤコウガイの蓋	定形	7.4	8	30	173	打割調整で削刃。	E-17, 不明
	49	螺蓋貝芥	ヤコウガイの蓋	定形	6.1	7	20	131	かなり使い込む。打割調整で剥離・深い風化	E-19, 米軍埋設土, 台030320-13
	50	スイジガイ製利器	スイジガイ	定形	11.9	9.6	50.7	390	アバタ有り利用・体層。孔:縦11.7mm×横80mm	D-19, 東側第4層下掘り下げ, 台041224-9
	51	*	スイジガイ	破損	50.7	10.6	10.5	17.48	細かいアバタ有り突起部分削刃、刃縁一直。	D-, 黒色粘質土層(貝片混じり)層, 台040318-15
	52	二枚貝有孔製品	ヒメジャコ	定形	7.3	5	10.5	26.34	不定形・内→外孔位置:上・後複孔×左孔:縦1mm×横1.1mm	E-14, 第4層(仮)下東側→中央, 台021105-22
	53	二枚貝有孔製品	ヒメジャコ	定形	5.2	8.1	10.7	28.35	左上・ヒビ不定形・内→外・孔位置:上・中複孔×右孔:縦1.1mm×横1.5mm	E-18, 第4層(仮)平面清掃中, 台030115-3
	54	二枚貝有孔製品	ヒメジャコ	定形	8.5	6	10.9	34.94	ヨコ楕円。孔位置:上・中複孔・内→外×左孔:縦1mm×横1.5mm	E-14, 第5層(仮), 台030128-4
	55	二枚貝有孔製品	ヒメジャコ	定形	9.3	7.3	20	51.7	円形。孔位置:上・中複孔×左孔:縦1.7mm×横1.7mm	D-19, 東側掘り下げ第4層(仮), 台041216-22
第101国・ 131	56	二枚貝有孔製品	リュウキユウザルゴウ	定形	6.5	4.3		18.5	孔は方形。孔位置:上・中・複孔×右孔:縦1.8mm×横1.4mm	A-TP-20, 灰色マンガン混じり, 台031225-25
	57	二枚貝有孔製品	リュウキユウザルボウ	定形	5.4	4.1	10.9	13.99	円形。孔位置:殻頂×右孔:縦1.1mm×横0.9mm	D-17, 米軍埋設土, 台050210-26
	58	二枚貝有孔製品	リュウキユウザルボウ	定形	8	5.9	20.5	53.54	楕円。孔位置:上・下複孔×左孔:縦1.6mm×横1.1mm	D-19, 南, 台031210-19
	59	二枚貝有孔製品	リュウキユウザルボウ	定形	7.4	5.6	20.5	49.42	方形 左孔:縦1.3mm×横1.6mm	E-17, 第5層(仮)上, 台030227-11
	60	二枚貝有孔製品	カワラガイ	定形	2.7	2.6	5	1.58	円形。孔位置:上・中・複孔・中→後、右孔:縦0.6mm×横0.5mm	H・C-19, 北東西側崩落土 ユニゾケ掘削時盛土, 台051011-2
	61	二枚貝有孔製品	カワラガイ	定形	4	3.6	10.5	6.43	方形。孔位置:上・中×左孔:縦0.9mm×横1.2mm	F-19, 南壁 崩落土, 台050630-29
	62	二枚貝有孔製品	リュウキユウザルガイ	定形	4.7	4.3	10.6	7.66	不定形。孔位置:中中、複孔。腹縁割れ有り。 左孔:縦1.7mm×横1.2mm	C-18, バイブ以北崩落土, 台040805-1
	63	二枚貝有孔製品	カワラガイ	定形	5.2	4.2	20	13.93	不定形。孔位置:中・中複孔×右孔:縦1.4mm×横1.2mm	C-18, 第4層(仮), 台031217-18
	64	二枚貝有孔製品	リュウキユウザルガイ	定形	5.2	4.8	10.9	14.47	不定形。孔位置:中・中複孔×右孔:縦1mm×横1.2mm	C・D-18, 灰色砂(貝片混じり)層, 台040311-1
	65	二枚貝有孔製品	カワラガイ	定形	5.6	4.9	20.1	18.01	楕円。孔位置:上・中・複孔。腹縁割れ有り。 右孔:縦1.5mm×横0.9mm	E-18, 第5層(仮)上 東側, 台030116-2
第102国・ 132	66	二枚貝有孔製品	スタグレハマグリ	定形	3.6	4.4	10.1	7.97	楕円。孔位置:中・前複孔×左孔:縦0.9mm×横0.5mm	バイブ以北 黒色土層第4層(仮), 台040702-9
	67	二枚貝有孔製品	サメザラガイ	定形	4.5	3.8	7	4.48	円(外→内)孔位置:上中、複孔。腹縁割れ有り。 孔:縦0.8mm×横0.9mm	D-19, 第5層(仮)-2層, 台031218-24
	68	二枚貝有孔製品	リュウキユウマスオ	定形	4.8	7.3	10.7	15.13	不定形。孔位置:中・中複孔×左孔:縦0.9mm×横1.1mm	壁面清掃中, 台041221-25
	69	二枚貝有孔製品	シテナシジマ	定形	6.9	6.4	10.8	23.7	方形(内→外)テテ上・ヨコ中・複孔×右孔:縦1.1mm×横0.9mm	E-15, 第4層(仮)下東側, 台021015-21

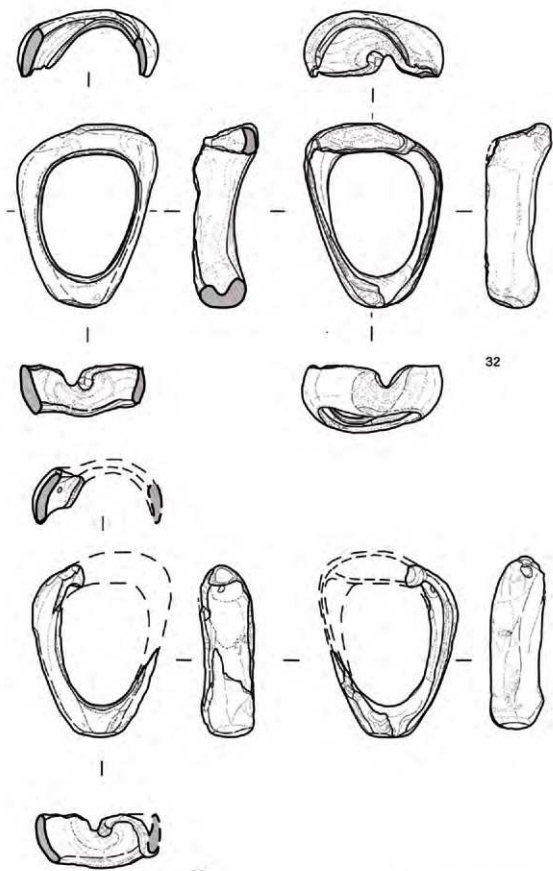
<凡例>「観察事項」の項(貝殻の状況、加工(特に二枚貝有孔製品については孔の形、位置、穿孔方向、大きさ、腹縁の状況)「出土地」の項目(台は台帳番号を示す。)



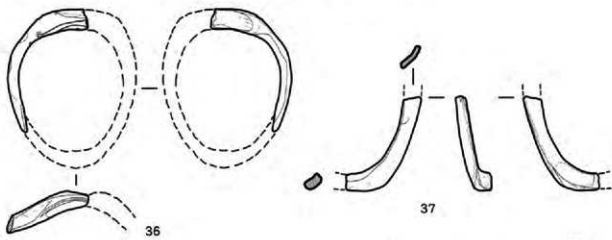
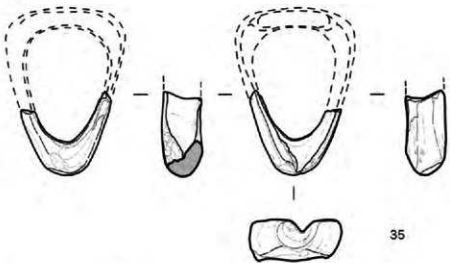
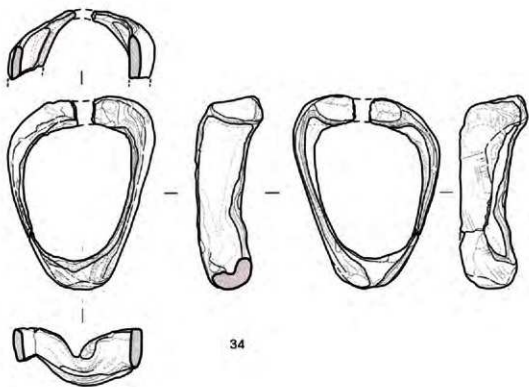
第95図 貝製品①



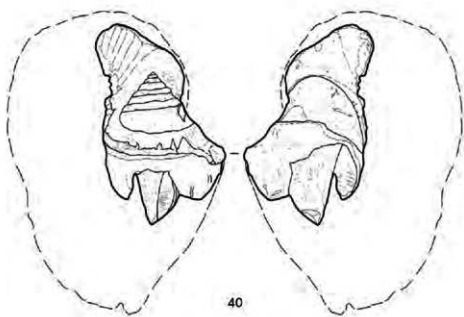
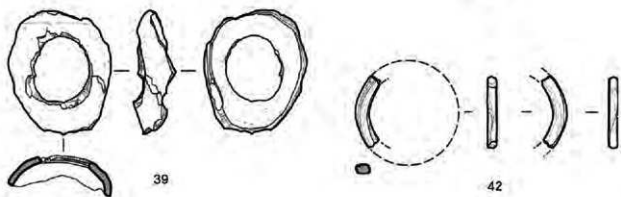
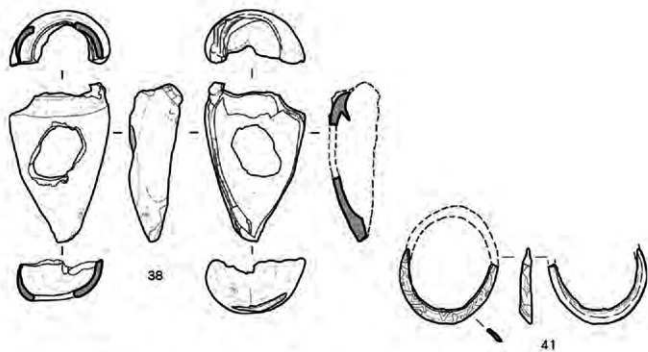
第96図 貝製品②

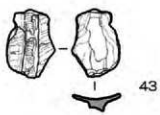


第97図 貝製品③-a

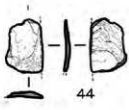


第98図 貝製品③-b

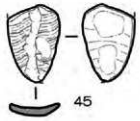




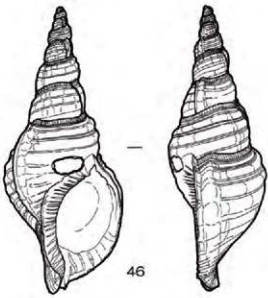
43



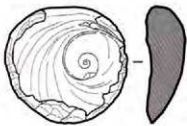
44



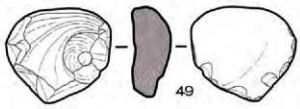
45



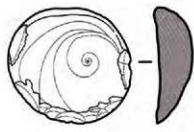
46



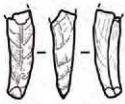
47



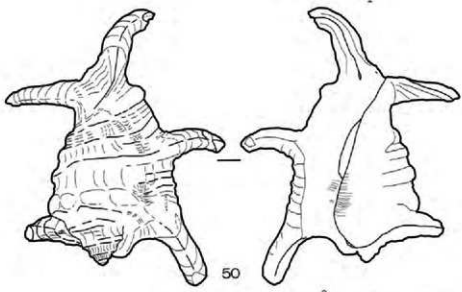
49



48



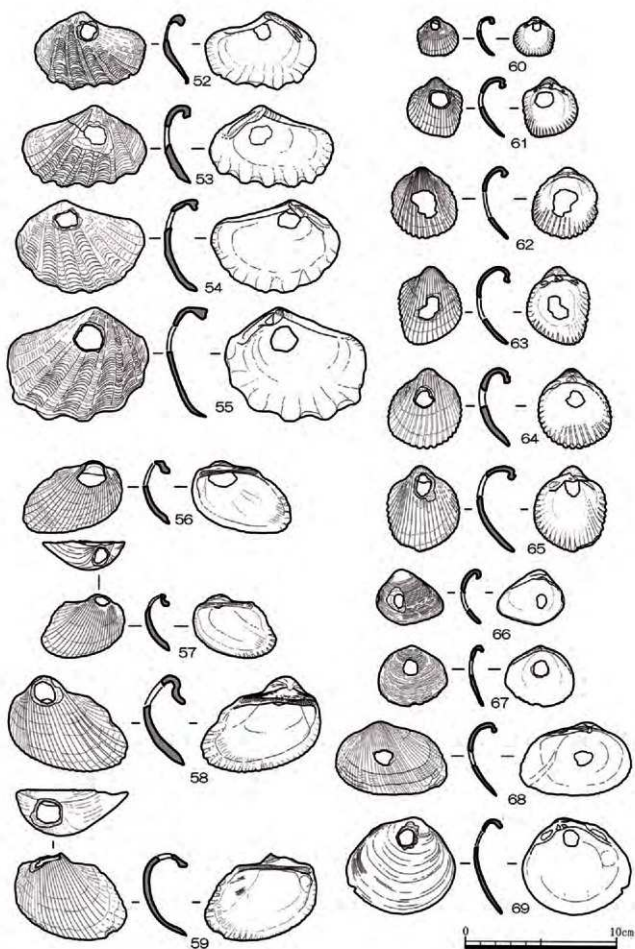
51



50



第100図 貝製品⑤



第101圖 貝製品⑥ (二枚具有孔製品)

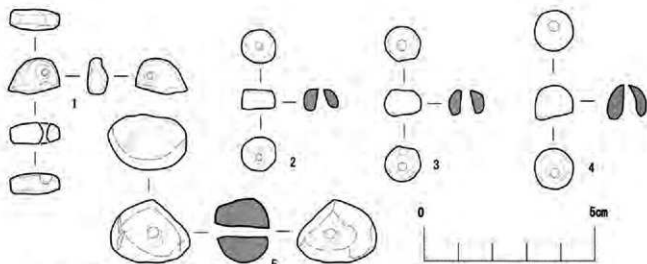
5. 翡翠製品

翡翠の製品は4個、石質不明の製品1個の計5個である。形状から台形状（aタイプ）と玉状（bタイプ）、略三角形（cタイプ）の3種がある。

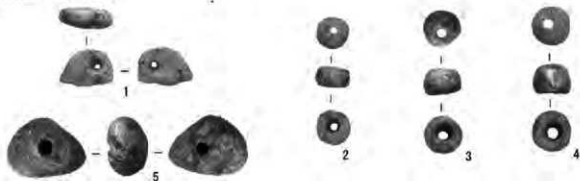
aタイプ（第102図・図1）：1個の出土で、下面に2個の穿孔の痕が確認でき、二次利用のものと思われる。平面形は台形を呈し、全体的に円味を帯びる。中央よりはやや上方に径1.9mm孔を施し、両面から穿孔する。

bタイプ（同図2、3、4）：玉状は3個得られ、大きさはいずれもは約10mm前後である。形状は上面が平坦、下面が円味を帯びる。孔の大きさは上部が径2mm、下部が4mmで、下方が大きいことから孔は下面から上面に穿孔し、その後、上面を研磨し、孔を貫通させているようである。

cタイプ（同図5）：素材は翡翠ではないが、形状が翡翠製品に近いことからここで報告する。孔径は3mmで、孔の縁が剥離する。孔の大きさは内外径はほぼ均一である。出土地はF-19で2個、C-19・20第4層（仮）である。穿孔方法が類似しているなどから、ヒスイ製品は同じ時期のものと考えられる。出土例は本町のクマヤー洞穴遺跡（1989）、沖縄諸島では西長浜原遺跡（2006）、城間古墓群9号墓（1986）で出土している。分析の結果、産地は新潟県糸魚川ということである。（図版132）



第102図 翡翠製品



図版132 翡翠製品

引用・参考文献

- ・安里嗣淳・宮城長信・瀬戸哲也・山本正昭・豊里友也・榎泉岳二・黒住耐二・新里貴之・久貝弥嗣・伊藤 圭
2006「西長浜原遺跡―範囲確認調査報告書―」「沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書」第39集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- ・中村 悠 1989「砂辺貝塚・クマヤー洞穴遺跡」〔北谷町史〕北谷町教育委員会
- ・下地安広・松川 章・比嘉 聰 1990「城間古墓群―牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書―」〔浦添市文化財調査報告書〕浦添市教育委員会

6. チャート

チャートは製品と剥片が出土している。

製品：石畿は図版133-1, 3, 7の3個、未製品は同図5, 6, 8, 9の4個、ドリル状製品は同図4, 11の2個、器形不明の未製品は同図10。チャートの礫を利用した製品は図版134-13が出土した。

ドリル状の製品は低湿地区・古我地原貝塚で出土している。

剥片に対してみると製品の量は少ない。他の製品については表21に示した。

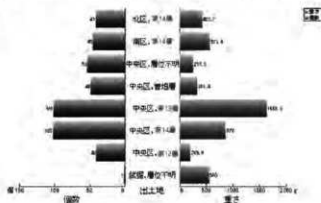
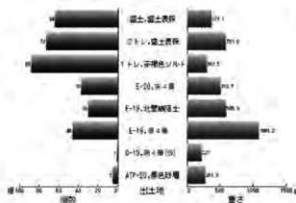
剥片：チャートの剥片は砂丘区で1731個、重さ12093.9g、低湿地区では3416個、25550.9g出土している。この出土量は沖縄県内で類をみないものである。(第103図a・b)

砂丘区で最も大きい破片は723g (図版133-8) でE-22-23黒褐色砂層で出土した。最も小さい破片は0.01gで、多数出土している。大きい順にみると4トレンチ盛土 (3) 443g (図版134-15)、2トレ278g、AT.P-20黒色砂層227g、D-19第4層 (仮) 227g、E-19第4層207g、E-20第4層 (仮) 203gがあげられる。

地区別にはE-19・20第4層 (仮) に多く得られた。その中でも炉址④の周辺に多いようである。これらの破片は縞模様が多く、石畿の素材としては質が落ちるようである。

出土状況を見るとE-19・20で多く、細片は1・2トレンチに多いようである。チャートの剥片 (はくへん) は浦添貝塚 (2006) や古我地原貝塚 (1987) で多数出土しているが、本遺跡のように大きな破片が多数出土するのは初めてである。

低湿地区の出土をみると中央区第12層 (705.61g)・第13層 (2370.3g)・第14層 (2082.4g) (図b)



図a：砂丘区チャート出土状況 (多い順)

図b：低湿地区チャート出土状況 (多い順)

第103図 チャート出土状況

表21 チャート観察一覧

図版	番号	製品名	種類	縦/mm	横/mm	厚/mm	重量/g	観察事項	トレンチ	層序
133	1	石炭	チャート	15.8	18.5	5.3	1.2	略三角形、断面はレンズ状。暗灰色と暗黄褐色の縞模様。先端部欠損。表ややマウンド、裏は平坦。側縁は剥離調整。	E-19	第5層(仮)上
	2	未製品	石英	14.4	8.66	5.6	1.6	石炭。不定形、断面はレンズ状。白色。	2トレンチ下	盛土(表採)
	3	石炭	チャート	17	14.7	3	0.9	三角形、断面は扁平。明灰色と縞模様。両端剥離、先端部は尖る。表はややマウンドを呈し、裏面はリングが顕著に認められる。側縁の調整は丁寧。下面は尖る。	F-19	崩落土
	4	ドリル	黒曜石	27.2	12.8	4	1.4	長方形、断面は扁平。暗灰色。	E-20	第4層(仮)東側
	5	未製品	チャート	30.5	23.5	6	3.9	石炭。五角形、断面はレンズ状。黒縞模様が斜めに走る。	C-24	西側清掃中
	6	未製品	チャート	19.7	22.5	4.3	1.9	石炭。ハート型、断面はレンズ状。暗灰色。	1トレンチ	暗茶褐色層
	7	石炭	チャート	49	41.5	11	23.5	略三角形、断面はレンズ状。暗灰色と黄褐色の縞模様。表面は縦位に剥離が走る。背面は横位に剥離が走る。先端部は尖り、表面はマウンド状、裏面は平坦、側縁は打削調整で整える。石質は粘りがある。	4トレンチ	暗灰褐色カワナ混じり層
	8	未製品	チャート	36	31	9.5	9.7	石炭。弧状、断面はレンズ状。暗灰色。上方にマウンド、表面やや平ら、側縁は薄く、刃状、下縁やかに尖る。	C-24	北西側掘り下げ黒色土層
	9	未製品	チャート	48	46.8	17	38.8	石炭。五角形、断面扁平。明灰色と縞模様。裏面は大きく剥離。	2トレンチ下	盛土表採
	10	未製品	チャート	34.4	19.5	16.5	11.6	略三角形、断面は台形。緑色認められない。表面から外縁方向に数本の剥離調整。周縁剥離。製作途中。		盛土表採
134	11	ドリル	チャート	42	16	12	8	長三角形、断面は三角形。明灰色と縞模様。先端部は僅かに欠損。裏面は平坦。剥離調整が顕著。	E-19	第4層(仮)下
	12	石核	チャート	38	46.5	27.5	54.3	断面は蒲鉾状。暗灰色、斜めに縞模様。表面に大きな剥離。側縁は縦位に剥離。	5トレンチ	黄土色
	13	礫	チャート	56	60.5	34.7	157	略方形、断面は楕円。裏面に大きな剥離。下面に複数の吹き痕。	C-24	東側坂西茶褐色粘質土
	14	石核	チャート	92.5	42.5	38.3	227	長方形、断面方形。灰色。特に加工痕認められない。	D-19	第4層(仮)
	15	石核	チャート	97.5	88.5	40.5	443	やや方形、断面は扁平。灰色、一部、暗灰色。表面は自然。縞模様は縦に走る。下面に大きな剥離、2カ所。	4トレンチ	盛土(表採)第3層
	16	石核	チャート	133.5	67.7	50	723	平面断面とも長方形。暗緑色。上下面、中間に見られる。加工はみられない。側面に叩きの痕。	E-22.23	黒褐色砂層

に多いようである。最も大きい破片は北区淡緑灰層出土の1500.00gであるが、加工は認められない。

引用・参考文献

- ・島袋 洋・島 弘・島袋春美 1987「古我地原貝塚-沖縄自動車道(石川-那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)」『沖縄県文化財調査報告書』第84集 沖縄県教育委員会
- ・新田重清・比嘉賀盛・島袋春美・仲幸久宜 2005「浦添貝塚-第一・二次発掘調査のまとめ」『沖縄県立博物館 紀要』第31号 沖縄県立博物館

7. 軽石 (第104図・図版135)

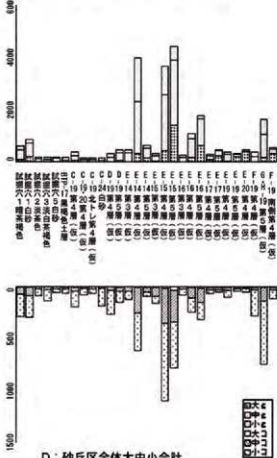
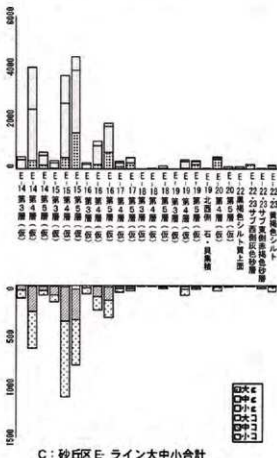
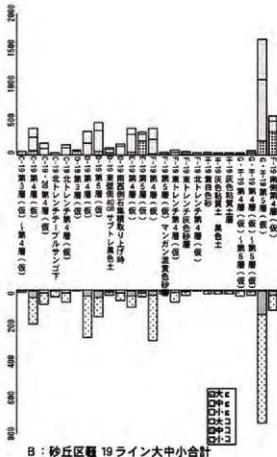
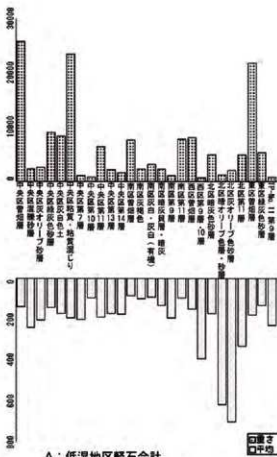
砂丘区のものに関しては、始めに大(径7cm以上)、中(径3cm以上)、小(径3cm未満)に分け、それぞれで個数を確認し、計量した。総重量44.03kg(コンマ3桁以下省略)、25コンテナ分となった。種類としては4つに分けられる。色・きめ・手触り・特徴は以下のとおり。

- A 茶褐色。ややきめが粗く、少しガサガサしている。貝片や雲母片が入る。量が多い。
- B 黄白色。きめが細かく、サラサラしている。混入物が見られない。
保水性が強く、乾きにくい。鉄分が付着したものもある。
- C 黒色。きめが粗く、ガサガサしている。スコリアと言われるものか?
- D 橙色。きめが細かく、もろい。量はとても少ない。

砂丘区では、E-14第4層・E-15第4層・E-15第5層のものが特に多く、ついでE-16第5層・HG-19第5層に多い。現在の海側から山手側に行くにつれ軽石の量が少なくなり、役場側からウチヌカ側に行くにつれ多い→少ない→やや多いと変化していることがわかった。

一方低湿区のものに関しては、袋ごとの計量のみ行った。総重量60.13kg(コンマ3桁以下省略)、20コンテナ分となった。種類としては、12個に分けられる。色・きめ・手触り・特徴は以下のとおり。

- A 黒色。きめが粗く、ザラザラしている。雲母?などが入る。
- B 暗褐色。ややきめが細かく、もろい。
- C 暗褐色。ややきめが粗く、ザラザラしているが、表面はスベスベしている。
雲母などは見られないが、軽石自体がキラキラ光っている。量が多い。スコリアと言われるものか?
- D 褐色。きめが細かく、サラサラしている。雲母?と小礫・長石?が多く入る。量が多い。
- E 褐色。ややきめが細かく、ややザラザラしている。
- F 灰色。とてもきめが細かく、サラサラしている。石英が入る。量がとても少ない。
- G 黄灰色。とてもきめが細かく、サラサラしている。
- H 黄灰色。とてもきめが細かく、サラサラしている。石英が入る。
- I 黄白色。きめが細かく、サラサラしている。植物の繊維などが入る。
- J 黄白色。ややきめが粗く、ややザラザラしている。雲母?と石英が入る。
- K 白色。きめが細かく、ややザラザラしている。混入物はない。
木質に見られるようなスジが確認できた。一点のみ。



第104図 軽石出土状況

L 白色。ややきめが細かく、ややザラザラしている。黄色のスジが入る。量が少ない。

低湿区では、曾畑層のものが特に多く、ついで灰埋土（中央区灰白色土・同じく粘質・粘質混じり）・緑灰色砂層・第14層に多く見られるという結果になった。軽石製品の可能性があるものが数点あるが、断定するにはいたらなかった。低湿地のものの特徴としては、2～3mm程の厚さのカルシウム分が付着していて、一見軽石には見えないものが約7kgあった。整理作業中にカルシウム分が剥がれているものを見なければ気がつかなかった。

8. グスク時代以降の遺物

今回1121点確認した。ほとんどが小片であり、遺構に伴うものも少ない。時期は11世紀～20世紀頃と幅広い。滑石製石鍋・カムイヤキ・玉縁白磁碗などが見られるⅠ期（11～13世紀）、雷文帯碗など青磁が台頭するⅡ期（13～15世紀）、染付が増加し、青磁の棧花皿や華南三彩などが見られるⅢ期（15～16世紀）、沖繩産陶器が見られるⅣ期（17世紀～）、クロム青磁や砥部焼、明治期の瓦が見られるⅤ期（～戦前）、ガラス瓶などが見られるⅥ期（戦中～戦後）のものに分けられる。

1 中国産

白磁（第105図・図版136-1～8）

24点確認した。C-17灰色粘質土層（第3層飯）で玉縁碗の底部（4）、BTP-12黒色粘質土（第4層飯）で泉州窯の皿の口縁部などがある。E-14第3層と第4層下～第5層上、E-15第3層に多い。

青磁（第105図・図版136-9～22）

121点確認した。C-17の柱穴No2で線刻細蓮弁文碗の口縁～胴部（10）、E-16第3層で弦文帯碗口縁（13）、E-17溝5で弦文帯碗胴部が出ている。E-17溝6で雷文帯碗の胴部（14）と棧花皿（外反する口縁、内面に5mm幅の蓮弁文（19））が出ているが、沖繩施釉・無釉陶器も混在する。E-14第3層、E-15第3層、C-24に多い。

染付（第105図・図版136-23～26）

55点確認した。E-16第3層で鐏反皿底部、E-17第3層で鐏反碗口縁部、E-14第3層で瓶の胴部、E-14第4層で基筒底の皿底部（24）が確認できた。E-14第3層に多い。

褐釉陶器（第105図・図版136-27）

59点確認した。胴部の小片が多く、器種の断定は難しい。E-14第3層とE-15第3層に多い。

華南三彩（第105図・図版136-29）

1点確認した。琴高仙人型水滴の台と思われる破片である、F-19東トレンチで壁面崩落土や重機掘削土をふるったときに確認。類例が悪石島や浦添原に見られる。

天目茶碗（第105図・図版136-30）

2点出土していて、1点は口縁部でE-14第4層から。もう1点は底部であるが形態から円盤状製品とした、詳しくは円盤状製品の項で述べる。

瑠璃釉（第105図・図版136-31）

小片を1点確認している。碗の口縁部か？

2 タイ産陶器 (第105図・図版136-28)

胴部9点と耳1点(壺か?)の合計10点確認。E-14・15・17の第3層から4点出土。

3 沖縄産

施釉陶器 (第105図・図版136-32-35)

102点確認した。碗・小碗・八角杯・皿・鉢・鍋・瓶・急須(32)・酒器と多様であるが、碗が目立つ。E-15第3層に多い。

無釉陶器 (第105図36-38・第106図3-10・図版137-1-11)

132点確認した。甕・壺・すり鉢などがあるがほとんど小片で、器種不明。E-15第3層に多い。第105図3は内面に同心円状の叩き目が見られ、本土産の須恵器の可能性も考えている。第105図9と10は沖縄県立埋蔵文化財センターの金城亀信のご教示により、急須の可能性を考えている。

陶質土器

600°ほどの低温で焼かれた赤い土器が13点出土している。いずれも小片であるが、うち2点の外面にススが付着していてナベと思われる。E-15第3層に多い。

4 徳之島産

カムイヤキ

4点確認した。口縁部や底部はなかった。胎土は赤褐色できめが細かく、白色粒子がわずかに入るものと、赤褐色と灰白色のマーブル状で、白色粒子と赤色粒子がわずかに入るものの二種類にわかれる。E-14第3層に多い。

5 本土産

本土産陶磁器 (第106図11-16・図版137-14-19)

382点出土確認した。備前焼と思われるすり鉢やクロム青磁が4点、客土から底部外面に「東和硬質磁器」、見込みに「新進利久 富久娘 明治ミルク 立川商店」と記名された灰皿を212点確認した。昭和初期～戦中に岐阜県などで造られた口縁直下に緑のラインが二本引かれた磁器碗を三個体分と、破片で26点確認した。砥部焼は7点、うち1点は形態から円盤状製品とした。

6 羽 口 (第106図17・図版137-26)

10点確認した。E-18第3層(仮)下から、外径6.0cm、内径2.8cm、厚さ1.6-2.0cm、重量95.23gのものが出土しており、これを図化した。鉄滓が付着しているものはなく、径が小さいほうの外面が黒化したり、軽石のようにすかすかになったりしている。鉄滓は確認できなかった。

7 滑石製品 (第106図18-22・図版137-20-24)

13点確認した。うち7点にススが付着している。大きくても手のひらに収まるサイズである。第106図18は広島県の草戸軒遺跡などに見られる温石(温めて布などに包みカイロにするもの)の可能性も考えている。

8 滑石混入土器 (第106図23・図版137-25)

H-19清掃中に出土、胴部1点。胎土は黒褐色やや粗粒子、滑石粒が多く入り、つるつるしている。

9 円盤状製品 (第106図24、25・図版137-27、28)

2点出土。1点は天目碗底部、E-17米軍埋設土で確認。もう1点は砥部焼の胴部、H-19米軍埋設土で確認。

10 キセル (第106図26、27・図版137-29、30)

2点出土していて、1点は石製品で火皿部分、1点は沖縄施釉陶器で吸い口部分である。

11 瓦

明治以降に沖縄で製造されたと思われる赤瓦が180点あり、うち123点がE-15第3層より出土している。以前付近を試掘調査した際に戦前の建物跡を確認している。漆喰が付着したものが24点、布目があるものが97点ある。

12 ガラス製品

3点確認した。1点は化粧容器と思われる小瓶で、プラスチック製の小さい蓋に「LPCO」というアルファベットが確認できた。1点は注ぎ口があるガラス容器の口縁部である。もう1点はコココーラ瓶で、暗闇で触ってもすぐにわかるという「コンツアポトル」である。この瓶は1915年以降に作られたもの。

以上のように、砂丘区ではグスク時代から戦中～戦後にいたるまでの遺物が確認できたが、後兼久遺跡(現北谷町役場庁舎)の遺物と比べるとI期とした、11～13世紀のものはとても少ない。この時期の遺構が確認されている小堀原遺跡は現在発掘調査中である。砂丘区と低湿区の遺物を合わせて考えると、伊札原遺跡は長期間にわたって、ウーチヌカーを拠り所とする人々が集まる住みよいところだったのではないだろうか。

引用・参考文献

- ・新垣 力・瀬戸哲也 2005 「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理」『紀要 沖縄郷土研究3』
沖縄県立埋蔵文化財センター
- ・沖縄県教育委員会 1986 『下田原貝塚・大泊浜貝塚』
- ・沖縄県教育委員会 1988 『首里城』
- ・沖縄県教育委員会 1995 『湯田古廬Ⅱ』
- ・沖縄県教育委員会 1987 『砂辺サーク原遺跡』
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『伊佐前原第一遺跡』
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『後兼久原遺跡』
- ・下地安広 1994 「沖縄から出土する近代磁器―浦添の遺跡を中心に」『南島考古 No.14』 沖縄考古学会
- ・下地安広 2002 「沖縄の遺跡から出土する統制経済下の磁器」『南島考古 No.21』 沖縄考古学会
- ・杉井 健 2003 「沖縄諸島における居住形態の変遷とその特質」『先史琉球の生業と交易』 熊本大学文学部
- ・玉城村教育委員会 1991 『余敷城跡』
- ・北谷町教育委員会 2003 『後兼久原遺跡』
- ・今帰仁村教育委員会 1983 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』
- ・豊見城村教育委員会 1987 『伊良波東遺跡』
- ・那覇市教育委員会 1991 『海廻工所跡』
- ・那覇市教育委員会 1996 『那崎原遺跡』
- ・西原町教育委員会 1983 『我羅遺跡』

表22 互観察一覧

グリット	層序	取り上げ%	点数 (個)	漆喰 (個)	布目 (個)	部分	重さ (g)	丸か 平か
E-14	第3層(仮)	214	4	—	—	—	44.07	平
E-14	第3層(仮)	242	1	—	1	角	15.61	平
E-14	東側第4層(仮)	838	1	—	—	—	5.29	平
E-15	第3層(仮)	171	12	1	7	—	78.2	
E-15	第3層(仮)	196	28	3	15	角2・端2	638	丸1
E-15	第3層(仮)	200	76	7	34	角6・端8	607	
E-15	第3層(仮)	211	7	2	7	端2	165	丸1
E-15	第4層(仮)層下 中央側	707	2	—	1	—	7.81	平
E-15	平面清掃	1619	2	—	2	—	37.57	
E-15	平面清掃	1659	3	1	2	—	22.92	
E-15	表掃	2082725	3	2	1	—	93.23	丸
E-17	米軍埋設土	2167	1	—	1	—	37.6	平
E-17	北 崩落土	30591	2	1	2	—	84.08	平
E-18	第4層(仮) 黒色	66	1	—	1	—	4.57	
E-19	溝10	1599	1	—	1	角	97.92	平
E-19	米軍埋設土	300	2	—	2	角1	104.61	
E-19	米軍埋設土	413	3	—	2	—	109.46	平
E-19	米軍埋設土	965	4	3	3	角1	107.7	
E-19	米軍埋設土	1394	1	1	1	端	55.79	
E-19	米軍埋設土	1421	2	—	2	角1	92.09	平
E-20	第4層(仮) 上	1052	1	—	—	—	27.63	
E-20	南壁崩落土	5070107	1	—	1	—	28.57	
F-19西	井戸周辺	3120327	1	—	—	—	8.19	平
F-19・ F-19東トレ	崩落土・ユンボ掘崩土	5080202	1	—	1	—	6.52	平
1トレンチ	壁面清掃	122	1	—	1	—	29.54	平
1トレンチ	盛土表採	555	1	—	1	—	9.48	
1トレンチ	盛土表採	985	1	—	1	—	46.31	平
	壁面清掃中	4	10	—	—	端1	97.13	
	盛土表採	1577	2	—	2	—	27.56	
	盛土表採	1653	1	—	1	—	8.84	平
	盛土表採	1932	1	1	1	端	26.34	平
	盛土表採	2297	1	—	1	—	46.24	丸
	盛土表採	31104	2	2	2	—	47.66	平
合 計			180	24	97	—	2874.96	

表23 グスク時代以降遺物観察一覧①

第 図	番号	種類	器種	部分	法量 (cm)	胎土・特徴	釉色・釉調・貫入	出土地
第 105 図 ・ 図 版 136	1	白磁	碗	口縁部	口:16.3, 底:-, 器高:2.7, 器厚:-	白色微粒子。わずかに微細な黒褐色粒子を含む	釉色:灰白色の釉が薄くかかる。釉調:内外にあり。貫入:内外に細かく入る	表採
	2	白磁	碗?	口縁部	口:12.6, 底:-, 器高:13.4, 器厚:-	灰白色やや粗粒子	釉色:灰白色の釉がやや薄くかかる。釉調:内外にあり。貫入:なし	E-14 第4層(仮) 下~第5層(仮) 上
	3	白磁	碗	底部	口:-, 底:6.4, 器高:2.9, 器厚:-	黄白色やや微粒子。わずかに微細な黒褐色粒子を含む	釉色:浅黄色の釉がとても薄くかかる。釉調:外面には見られない。内面割部まで。貫入:見られない	E-14 第4層(仮)下~ 第45層(仮)上
	4	白磁	碗	底部	口:-, 底:6.4, 器高:2.9, 器厚:-	灰白色堅緻	釉色:灰白色の釉が薄くかかる。釉調:内外にあり。登付け・高台内無釉。貫入:見られない。外面に釉垂れ	C-17 第3層(仮) 灰粘質
	5	白磁	皿	口縁部	口:18.7, 底:-, 器高:1, 器厚:-	にぶい黄褐色微粒子	釉色:浅黄色の釉がとても薄くかかる。釉調:内外にあり。貫入:内外に細かく入る	D-18東トレ 灰色粘質土層
	6	白磁	皿	口縁部	口:11, 底:-, 器高:1.9, 器厚:-	灰白色やや微粒子	釉色:灰白色の釉が薄くかかる。釉調:内外にあり。貫入:内外に細かく入る	E-15 第3層(仮)
	7	白磁	皿	口縁~ 底部	口:18.2, 底:10.8, 器高:3.9, 器厚:-	灰白色堅緻	釉色:灰白色の釉がやや薄くかかる。釉調:登付けのみ無釉。貫入:なし	E-14 第4層(仮)下~ 第5層(仮)上
	8	白磁	皿	底部	口:-, 底:12, 器高:1.5, 器厚:-	灰白色やや微粒子	釉色:灰白色の釉がやや厚くかかる。釉調:内外にあり。貫入:高台内無釉?	E-14 第3層(仮)
	9	青磁	碗	口縁部	口:16.4, 底:-, 器高:2.9, 器厚:-	灰白色やや微粒子	釉色:灰オリーブ色の釉がやや薄めにかかる。釉調:内外にあり。貫入:見られない	C・D-18 東トレレンチ掘削 後上面平面清掃 中
	10	青磁	碗	口縁部	口:13.7, 底:-, 器高:4.3, 器厚:-	灰白色粗粒子	釉色:灰白色の釉がやや厚くかかる。釉調:内外にあり。貫入:内外に大きめに入る	C-17 SP02
	11	青磁	碗	口縁部	口:13.2, 底:-, 器高:4.7, 器厚:-	灰白色粗粒子	釉色:灰白色の釉がやや厚めにかかる。釉調:内外にあり。釉垂れ内外に。貫入:内外に細かく入る	BTP-17 BTP17016
	12	青磁	碗	口縁部	口:13.7, 底:-, 器高:2.5, 器厚:-	灰白色やや微粒子	釉色:オリーブ灰色の釉が厚くかかる。釉調:内外に厚くかかる。気泡が多い。貫入:見られない	E-15 第4層下(仮) 東側
	13	青磁	碗	口縁部	口:13, 底:-, 器高:2.4, 器厚:-	灰白色やや粗粒子	釉色:オリーブ灰色の釉がやや厚めにかかる。釉調:内外にあり。貫入:見られない	E-15 第3層(仮) 落ち込み?

表23 グスク時代以降遺物観察一覽(2)

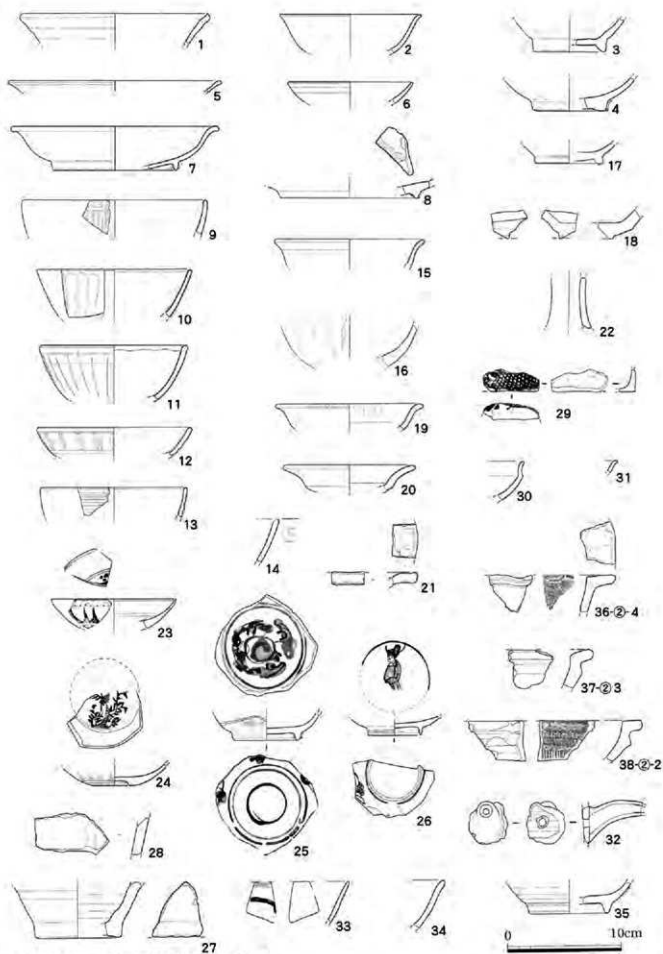
第 図	番号	種類	器種	部分	法量 (cm)	胎土・特徴	釉色・輪周・貫入	出土地
第 105 図 ・ 図 版 136	14	青磁	碗	胴部	口:-, 底:-, 器高:3.7, 器厚:0.45	灰白色やや微粒子	釉色:灰オリーブ色の釉が厚くかかる。輪周:内外にあり、貫入:内外に大きめに入る	E-16 溝 6
	15	青磁	碗	口縁部	口:13.2, 底:-, 器高:2.3, 器厚:-	にぶい橙色やや微粒子	釉色:灰オリーブ色の釉がやや厚くかかる。輪周:内外にあり、貫入:なし	E-14 第 3 層 (仮)
	16	青磁	碗	胴部	口:-, 底:-, 器高:3.6, 器厚:-	灰白色やや粗粒子	釉色:灰オリーブ色の釉がやや厚くかかる。輪周:内外にあり、貫入:内外に大きめに入る	H-19 黒色粘質土、 砂質土
	17	青磁	碗	底部	口:-, 底:6, 器高:1.6, 器厚:-	灰白色やや粗粒子	釉色:灰色の釉がやや厚くかかる。輪周:全面施釉、貫入:見られない	E-15 第 3 層 (仮)
	18	青磁	碗	底部	口:-, 底:-, 器高:2.4, 器厚:0.9	灰白色やや微粒子	釉色:オリーブ灰色の釉がやや厚くかかる。輪周:内外にあり、貫入:外面に大きめに入る	BTP-15 黒色土層
	19	青磁	細かな 絞花皿	口縁部	口:13, 底:-, 器高:2.3, 器厚:-	白色堅緻。わずかに微細な黒褐色粒子を含む	釉色:灰白色の釉が厚くかかる。輪周:内外にあり、貫入:見られない	E-20 第 4 層 (仮) 西側溝 6
	20	青磁	皿	口縁部	口:11.8, 底:-, 器高:2.3, 器厚:-	明黄褐色やや微粒子	釉色:黄色の釉が薄くかかる。輪周:内外にあり、貫入:見られない	ATP-20 黒色土層上面
	21	青磁	碗	口縁部	口:-, 底:-, 器高:1.2, 器厚:0.9	灰白色やや粗粒子	釉色:灰オリーブ色の釉がやや厚めにかかる。輪周:内外に厚くかかる。貫入:見られない	E-16 第 3 層 (仮)
	22	青磁	瓶	頸部	口:-, 底:-, 器高:4.4, 器厚:0.65	灰白色やや微粒子	釉色:灰オリーブ色の釉がやや厚くかかる。輪周:内外にあり、貫入:内外に細かく入る	E-14 南壁清掃中
	23	染付	蒔筒底皿	口縁部	口:11, 底:-, 器高:2.5, 器厚:-	灰白色やや粗粒子	釉色:灰白色の釉がやや厚くかかる。輪周:内外にあり、口縁部は無釉、貫入:なし	TP-12 第 4 層 (仮) 西
	24	染付	蒔筒底皿	底部	口:-, 底:3.4, 器高:1.7, 器厚:-	灰白色微粒子	釉色:灰白色の釉がやや厚くかかる。輪周:皿付けのみ無釉、貫入:なし	E-14 第 4 層 (仮)
	25	染付	碗	底部	口:-, 底:5.6, 器高:2.3, 器厚:-	白色堅緻	釉色:明緑灰色の釉がやや厚くかかる。輪周:内外にあり、皿付け無釉、貫入:見られない	試験No3 伊礼原。テニス コート西側
	26	染付	碗	底部	口:-, 底:4.8, 器高:1.6, 器厚:-	白色堅緻	釉色:灰白色の釉がやや薄くかかる。輪周:皿付けのみ無釉、貫入:見られない	E-13 北壁清掃中
27	褐釉陶器	壺	底部	口:-, 底:7.7, 器高:4.8, 器厚:-	灰黄色やや微粒子。わずかに白色粒子、黒色粒子、赤褐色粒子を含む	釉色:オリーブ黒色の釉が薄くかかる。輪周:外面のみあり。貫入:外面に細かく入る	E-14 第 4 層 (仮)	

表23 グスク時代以降遺物観察一覧③

第 図	番号	種類	器種	部分	法量 (cm)	胎土・特徴	釉色・釉調・貫入	出土地
第 105 図 ・ 図 版 136	28	鳩軸陶器	壺	胴部	口:-, 底:13, 器高:7.8, 器厚:-	灰黄色やや粗粒子。 黒色粒子と赤褐色粒 子をやや多く含む	釉色:緑黒色の釉がやや 薄くかかる。釉調:外面 のみあり、貫入:外面に 細かく入る	E-14 第4層(仮)下~ 第5層(仮)上
	29	華南三彩	琴高仙人 型?水滴	底部	口:-, 底:-, 器高:1.9, 器厚:0.3	浅黄褐色やや粗粒子	釉色:深い緑色の釉が薄 くかかる。釉調:外面に あり、底部無釉。貫入: 細かく入る	F-19東トレ 崩落土・重機掘 削土 ふるい
	30	天目	碗	口縁部	口:-, 底:-, 器高:3.4, 器厚:-	褐灰色やや微粒子	釉色:黒色の釉がやや厚 くかかる。釉調:内外に あり、貫入:なし	E-14 第4層(仮)
	31	瑠璃釉	碗?	口縁部	口:-, 底:-, 器高:1, 器厚:0.8	白色堅緻。わずかに 微細な黒褐色粒子を 含む	釉色:内面に明オリープ 灰色、外面に深い青色の 釉がかかる。釉調:内外 にあり、貫入:見られない	E-14 第3假層
	32	沖繩産施 釉陶器	急須	注口	口:-, 底:-, 器高:3.7, 器厚:-	浅黄褐色やや粗粒子	釉色:灰白色の釉が厚く かかる。注口と胴部の継ぎ 目に深い緑色の釉と白化 斑土?をかけた。釉調: 外面にあり、貫入:外面 に細かく入る	E-17 溝6
	33	沖繩産施 釉陶器	碗	口縁部	口:-, 底:-, 器高:3.6, 器厚:0.35	灰白色微粒子	釉色:灰黄色の釉が厚く かかる。釉調:内外に あり、胴部下平には見 られない。貫入:見られ ない	E-15 第3層(仮) 落ち込み
	34	沖繩産施 釉陶器	碗	口縁部	口:-, 底:-, 器高:4.2, 器厚:0.5	白色やや微粒子	釉色:灰白色の釉が薄く かかる。釉調:内外に あり、貫入:内外に細 かく入る	E-17 溝6
35	沖繩産施 釉陶器?	碗	底部	口:-, 底:7, 器高:2.6, 器厚:-	浅黄褐色やや微粒子	釉色:灰オリープ色の釉 が薄くかかる。釉調: 外面下半から露出。 貫入:見られない	020728、No183 壁面清掃中	
第 105 図 ・ 図 版 137	36 (4)	沖繩産無 釉陶器	すり鉢	口縁部 (注口)	口:-, 底:-, 器高:3.2, 器厚:-	明赤褐色やや微粒子。 わずかに赤褐色粒子 を含む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	F-19・F-19東 トレ 崩落土
	37 (3)	沖繩産無 釉陶器	すり鉢	口縁部	口:-, 底:-, 器高:3.2, 器厚:-	赤褐色やや微粒子。 わずかに白色粒子・ 黒色粒子を含む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	E-17 溝6
	38 (2)	沖繩産無 釉陶器	すり鉢	口縁部	口:-, 底:-, 器高:3.6, 器厚:-	浅黄褐色やや粗粒子	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	E-18 西側落ち込み
第 108 図 ・ 図 版 137	3	沖無? 本土産?	壺	胴部	口:-, 底:-, 器高:2.6, 器厚:0.5	赤褐色やや微粒子。 わずかに白色粒子を 含む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	盛土表探
	4	沖繩産無 釉陶器	すり鉢	口縁部	口:31.8, 底:-, 器高:3.6, 器厚:-	灰赤色やや微粒子。 わずかに白色粒子を 含む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	盛土表探
	5	沖繩産無 釉陶器	鉢	口縁部	口:14.4, 底:-, 器高:2.1, 器厚:-	にぶい赤褐色やや微 粒子。わずかに白色 粒子を含む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	F-19・F-19東 トレ 崩落土

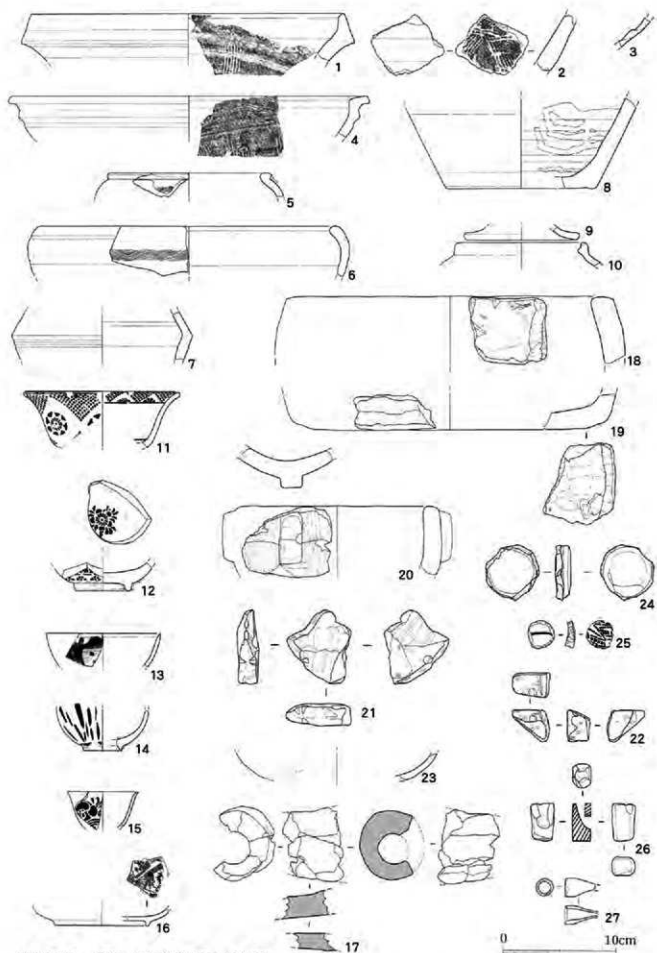
表23 グスク時代以降遺物観察一覧④

第 図	番号	種類	器種	部分	法量 (cm)	胎土・特徴	釉色・釉調・貫入	出土地
第 106 図 ・ 第 137	6	沖繩産無 釉陶器	鉢	口縁部	口:26.6, 底:-, 器高:4.2, 器厚:-	明赤褐色やや粗粒子。 わずかに白色粒子を含 む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	E-14 第4層(仮)下~ 第5層(仮)上
	7	沖繩産無 釉陶器	火炉	胴部	口:-, 底:-, 器高:4.1, 器厚:0.8	にぶい赤褐色微粒子 (サンドイッチ)。わ ずかに白色粒子を含 む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	C-24 東御坂 茶褐色粘質土層
	8	沖繩産無 釉陶器	壺	底部	口:-, 底:13.4, 器高:7.9, 器厚:-	暗灰色やや微粒子。 白色粒子と石英粒を 多く含む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	H・G-19 崩落土
	9	沖繩産無 釉陶器	急須蓋	口縁部	口:10.2, 底:-, 器高:1.1, 器厚:-	赤褐色やや微粒子。 わずかに微細な白色 粒子を含む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	E-14 第3層
	10	沖繩産無 釉陶器	急須	口縁部	口:11.8, 底:-, 器高:2, 器厚:-	灰色やや粗粒子。黒 色粒子をやや多く含 む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	E-14 第3層
	1	甕前焼?	すり鉢	口縁部	口:27.2, 底:-, 器高:4.2, 器厚:-	にぶい橙色やや微粒 子。白色粒子をやや 多く含む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	E-14 第4層(仮)
	2	木陶	すり鉢	底部	口:-, 底:-, 器高:4.8, 器厚:1.4	明赤褐色粗粒子。わ ずかに白色粒子を多 量に、赤褐色粒子を 含む	釉色:-, 釉調:-, 貫入:-	E-14 第3層(仮)
	11	砥部焼	碗	口縁部	口:13.8, 底:-, 器高:4.8, 器厚:-	灰白色やや微粒子	釉色:灰白色の釉が薄 くかかる。釉調:内外 にあり、貫入:見られ ない	3トレンチ 壁面清掃
	12	砥部焼	碗	底部	口:-, 底:4.8, 器高:2.5, 器厚:-	灰白色微粒子	釉色:灰白色の釉が薄 くかかる。釉調:登付 け、高台と胴部の境 は無釉、貫入:なし	表採 南側
	13	本土産 磁器?	小碗	口縁部	口:10, 底:-, 器高:2.9, 器厚:-	白色微粒子	釉色:灰白色の釉がや や厚くかかる。釉調: 内外にあり、貫入: なし	H-19 清掃中
	14	本土産 磁器	クロム 青細小碗	底部	口:-, 底:3.4, 器高:3.5, 器厚:-	白色堅緻	釉色:淡い緑色の釉が やや厚くかかる。釉 調:高台のみ無釉、 貫入:見られない	E-14 第3層(仮)
	15	白磁 色絵?	小碗	口縁部	口:6.5, 底:-, 器高:3, 器厚:-	灰白色微粒子	釉色:灰白色の釉が薄 くかかる。釉調:内外 にあり、貫入:なし	E-14 第4層(仮)下~ 第5層(仮)上
	16	本土産 磁器?	皿	底部	口:-, 底:8.2, 器高:1.6, 器厚:-	灰白色微粒子	釉色:灰白色の釉が薄 くかかる。釉調:内外 にあり、貫入:なし	E-14 第3層(仮)



第105図 グスク時代以降の遺物①

白磁・青磁・染付・褐釉陶器・華南三彩・天目・瑠璃軸・沖繩施軸陶器・沖繩無軸陶器

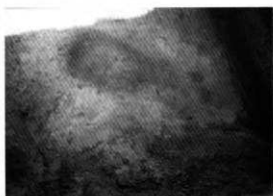
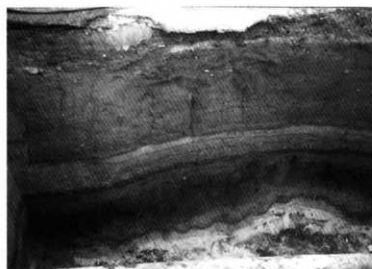
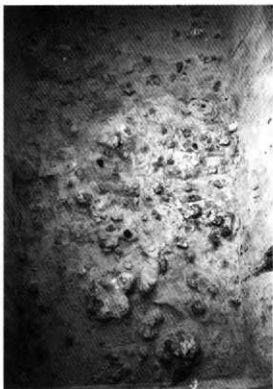


第106図 グスク時代以降の遺物②

備前焼・本土産陶器・沖縄無軸陶器・砥部焼・本土産磁器・滑石製品・滑石混入土器・円盤状製品・キセル

砂丘区

図版



図版81：砂丘区調査状況1

上左：No.1試掘穴東壁面

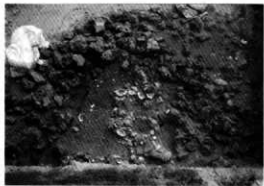
中左：No.2試掘穴東壁面

下左：No.4試掘穴東壁面

上右：No.1試掘穴白砂層下レキ面検出状況

中右：No.3試掘穴平面 炉址検出状況

下右：No.4試掘穴平面 炉址検出状況



図版82：砂丘区調査状況 2

上左：E-19グリット第1号住居址検出状況

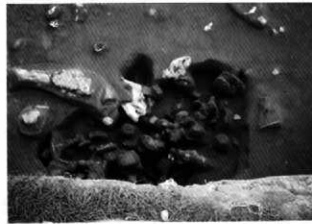
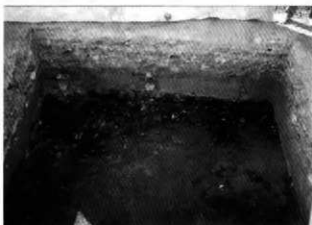
下左：C・D-18グリット第2号住居址検出状況

上 右：E-19グリット第1号住居址検出状況

中上右：E-20グリット炉址及びび貝集積検出状況

中下右：C-19北グリット第1号集石検出状況

下 右：C-19・20グリット第2号集石検出状況



図版83：砂丘区調査状況 3

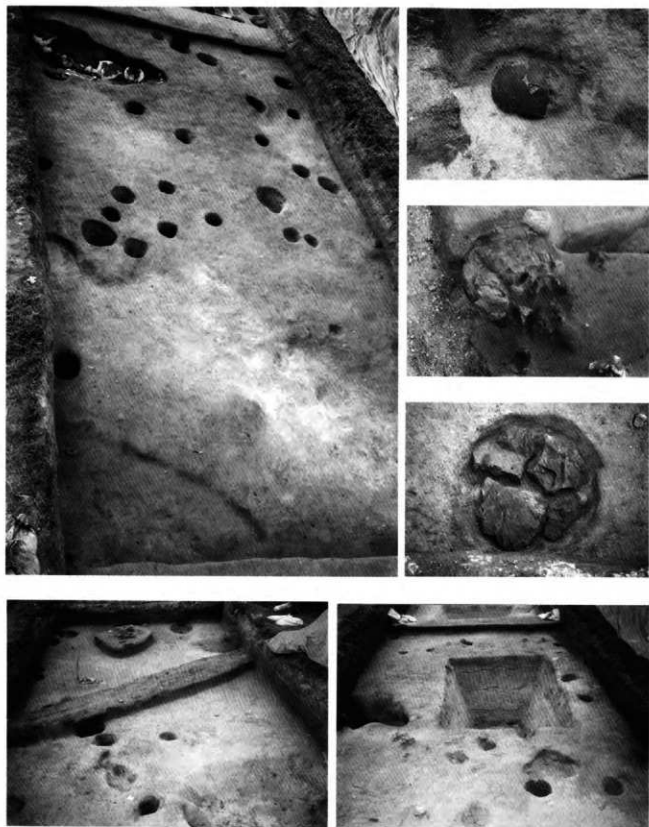
上：GH-19グリット第4号石集積検出状況

上右：ATP-20グリット

中左：GH-19グリット第3号石集積検出状況(北東角)

下右：E-20グリット炉址内の状況(縄文晩期)

下左：E-20グリット土坑及び炉址の状況



図版84：砂丘区調査状況 4

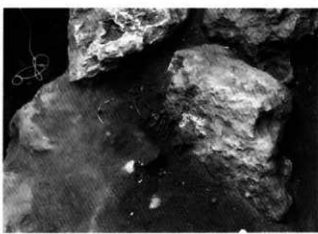
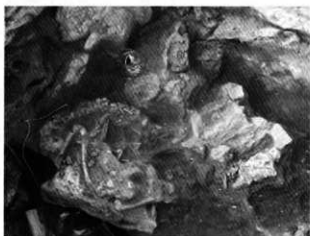
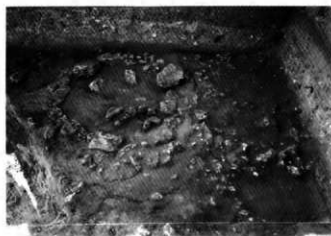
上左：E-16グリット柱穴完掘状況（グスク時代）

下左：E-14グリット柱穴完掘状況（グスク時代）

上右・中上右：C-18グリット人頭蓋骨検出状況
（縄文晩期～弥生期）

中下右：E-14グリット柱穴内の礎敷状況
（グスク時代）

下右：E-15グリット柱穴と下層の堆積状況



図版85：砂丘区調査状況 5

上左：F-19グリッド井戸状遺構上面検出状況

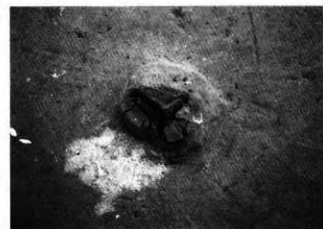
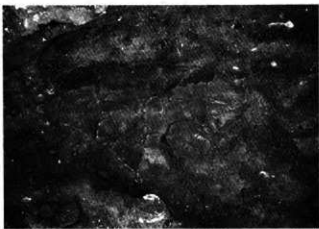
中左：井戸状遺構内の状況

下左：井戸状遺構完掘状況

上右：犬骨検出状況

中右：犬骨検出状況（下位）

下右：井戸状遺構石積み状況



図版86：砂丘区調査状況 6

上左：E-20グリット海獣骨（クジラ）検出状況

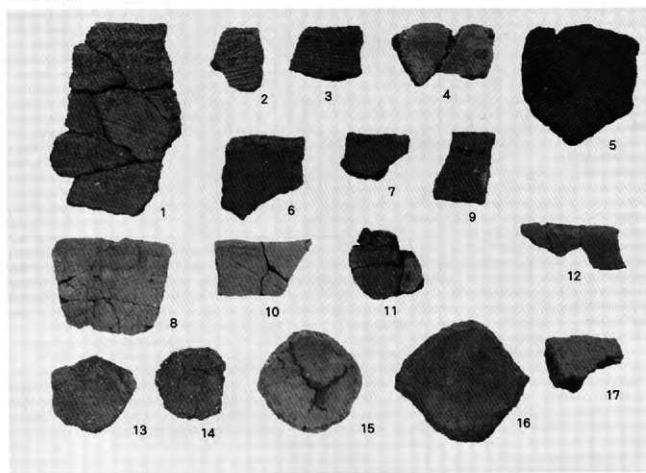
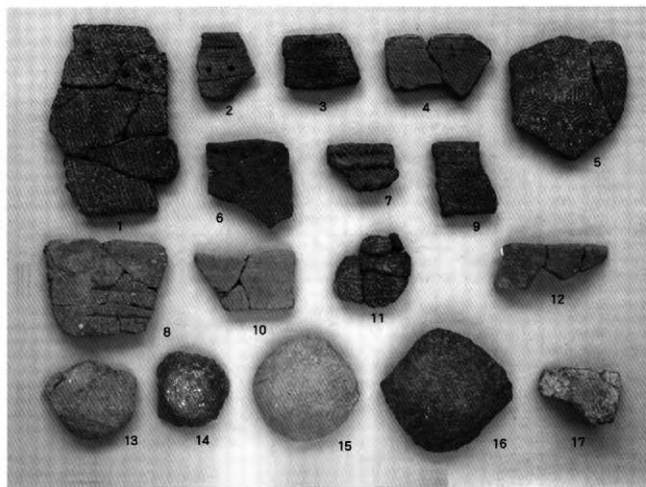
中左：E-19グリット貝輪検出状況

下左：E-19グリット市来式土器検出状況

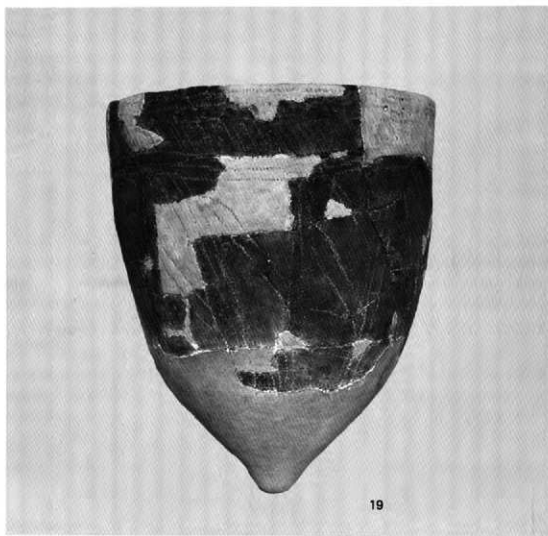
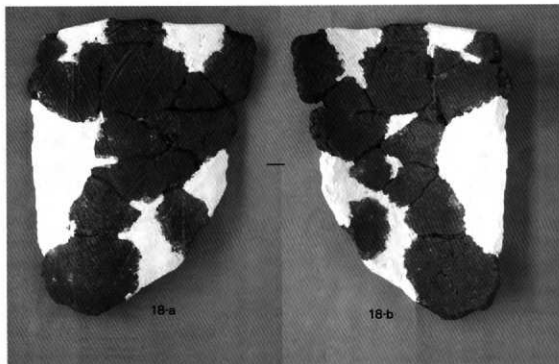
上右：C-18グリット海亀胸骨検出状況

中右：E-18グリット石斧3点検出状況

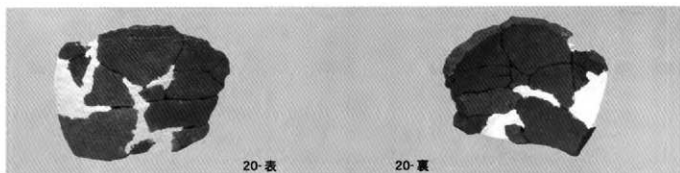
下右：H-19グリット仲泊式土器検出状況



図版87 室川下層式土器① 上：表面 下：裏面
-371-

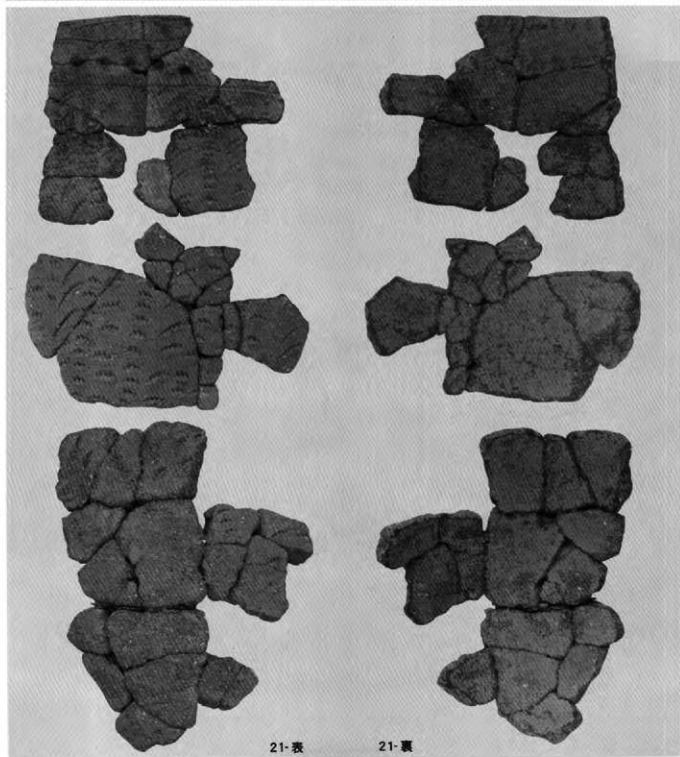


図版88 室川下層式土器② 上：表裏面 下：復元土器



20-表

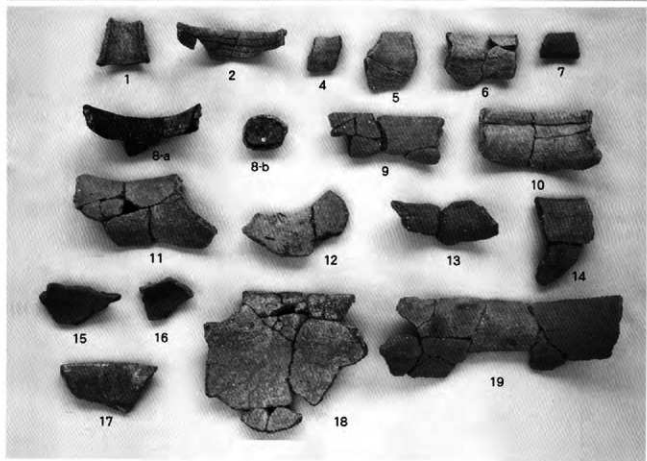
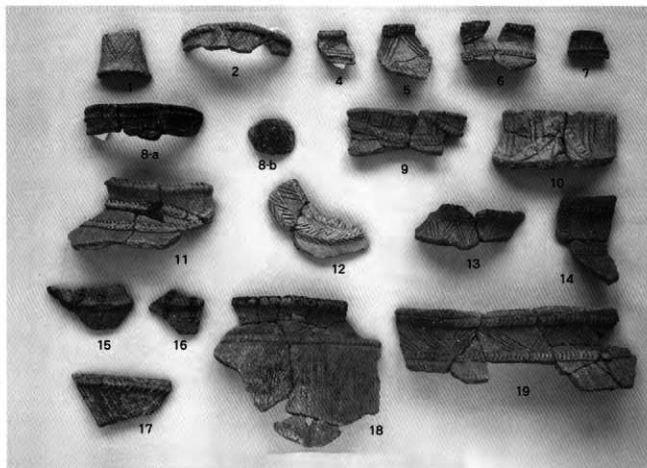
20-裏



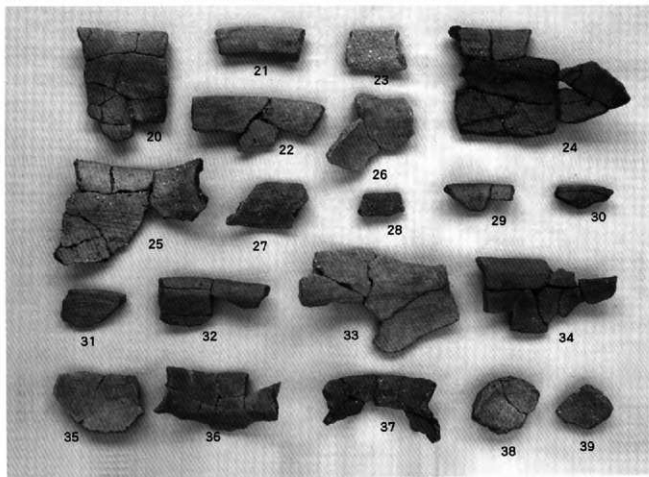
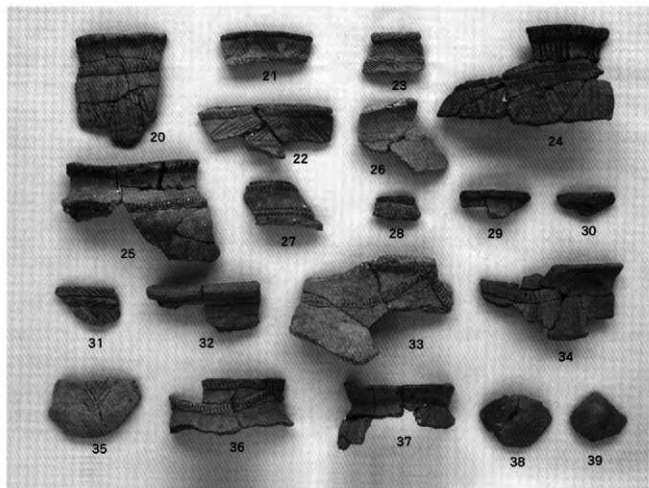
21-表

21-裏

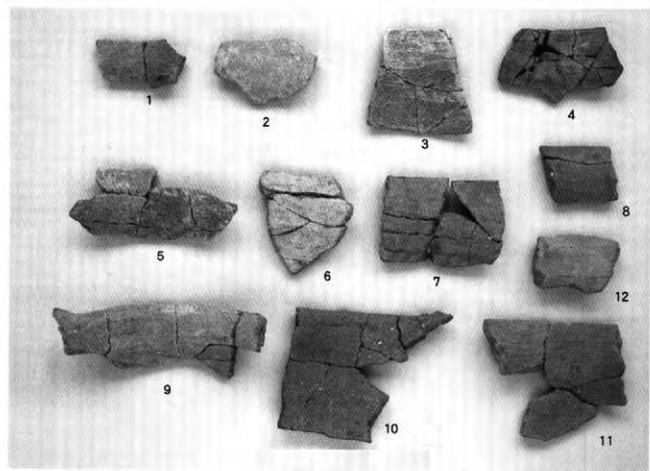
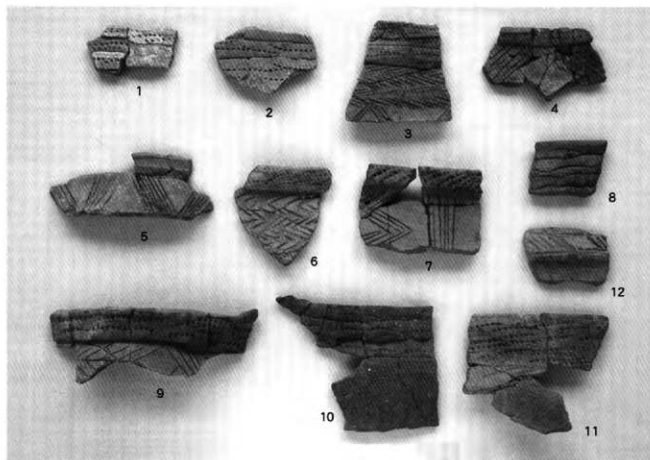
図版89 室川下層式土器③ 上：表裏面 下：表裏面



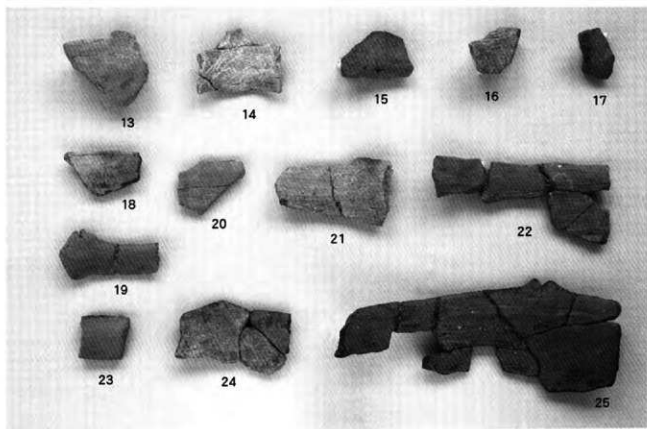
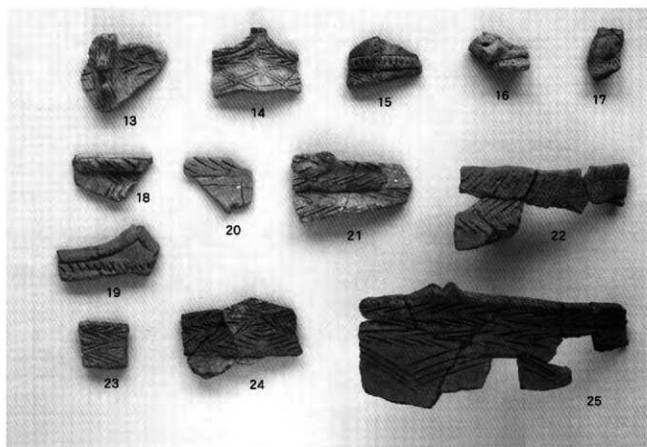
図版90 面縄前庭式土器① 上：表面 下：裏面



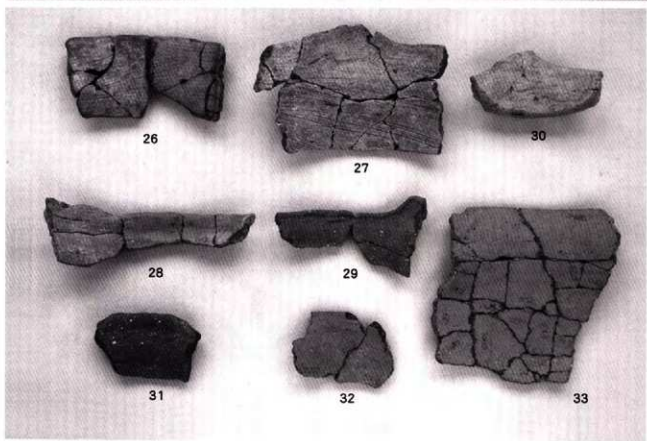
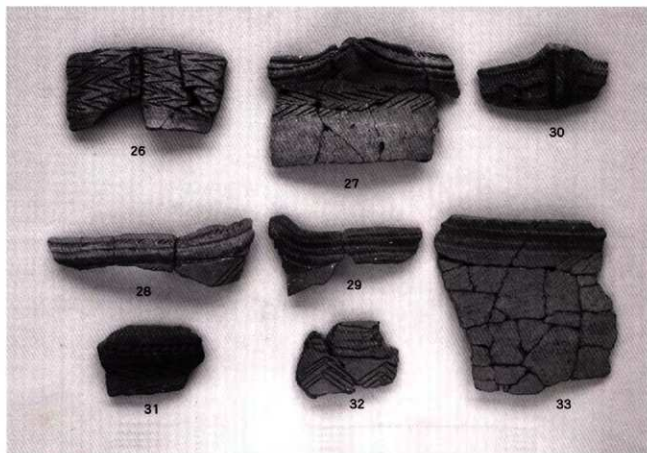
図版91 面縄前庭式土器② 上：表面 下：裏面



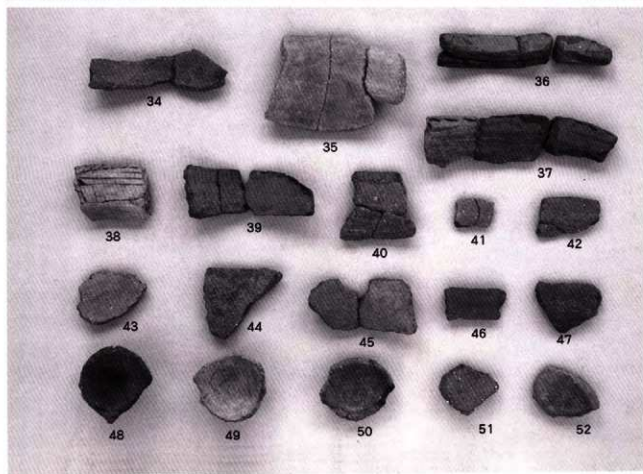
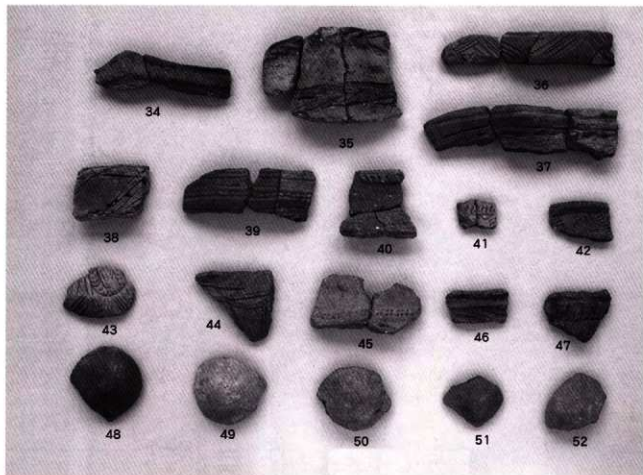
図版92 仲泊式土器① 上：表面 下：裏面



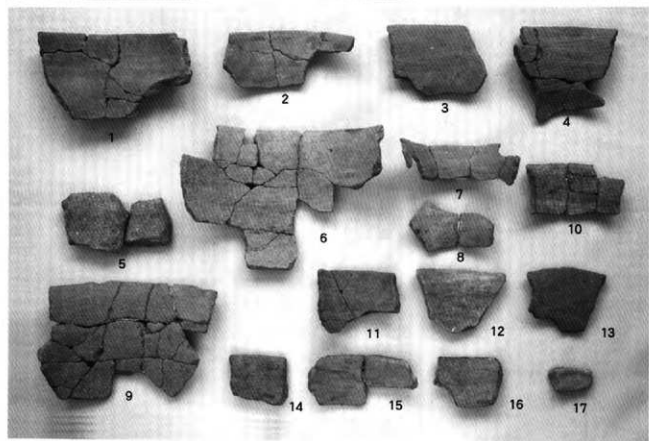
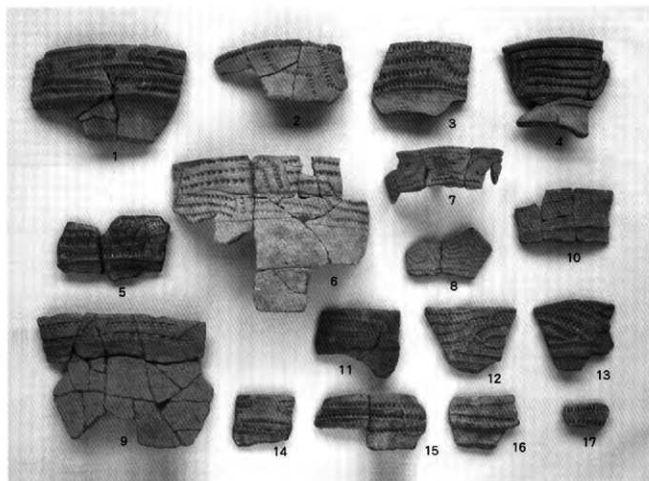
図版93 面縄前庭式土器・仲泊式移行型式土器② 上：表面 下：裏面



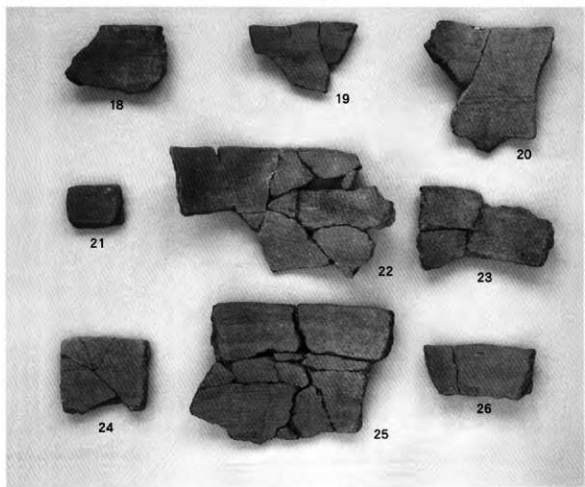
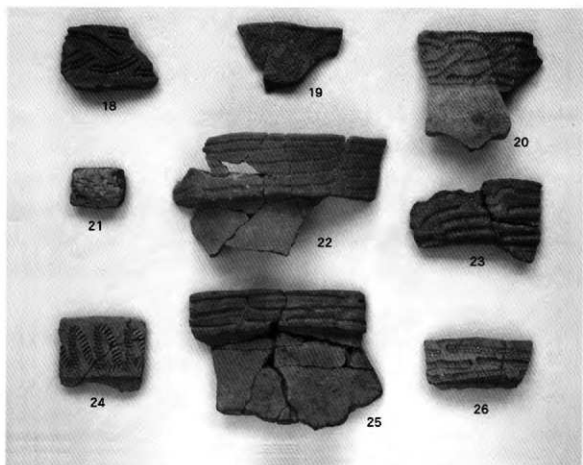
図版94 仲泊式土器・市来式土器移行型式土器③ 上：表面 下：裏面



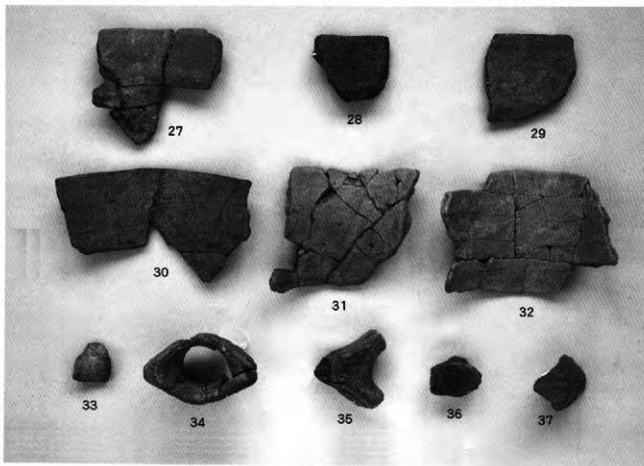
図版95 面縄前庭式土器・仲泊式移行型式土器④ 上：表面 下：裏面



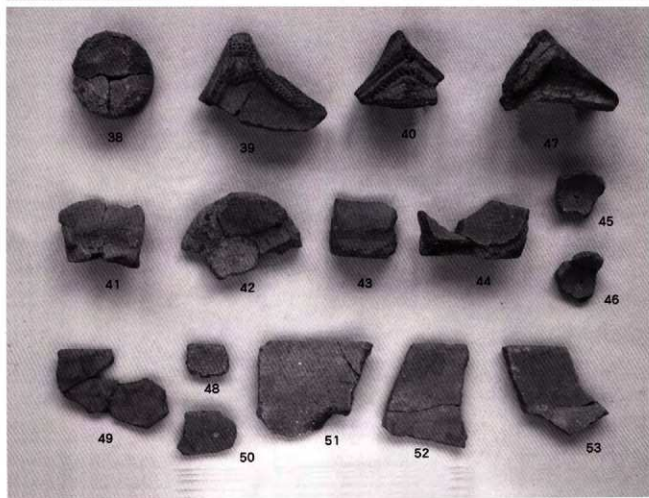
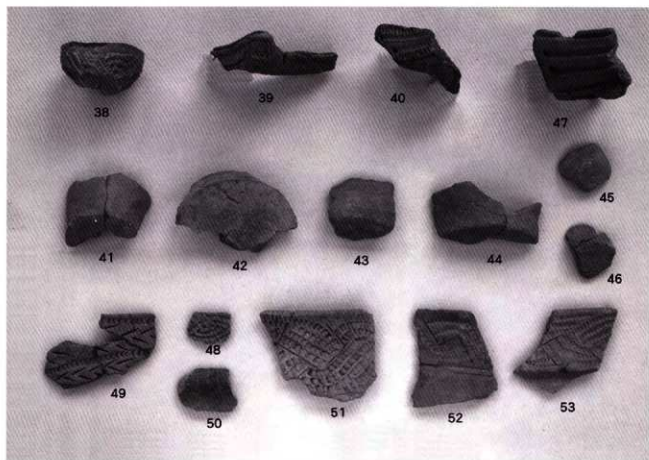
図版96 面縄東洞式土器① 上：表面 下：裏面



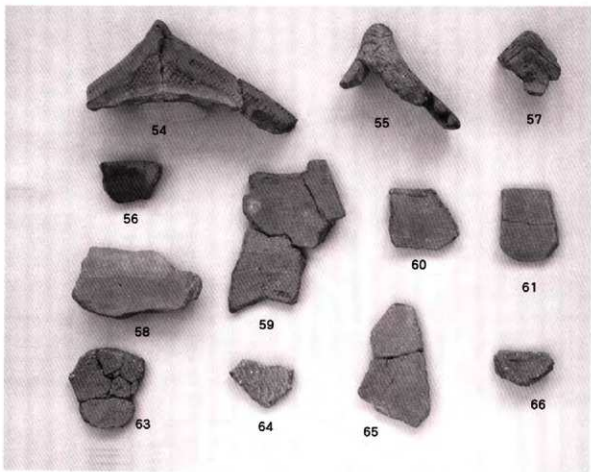
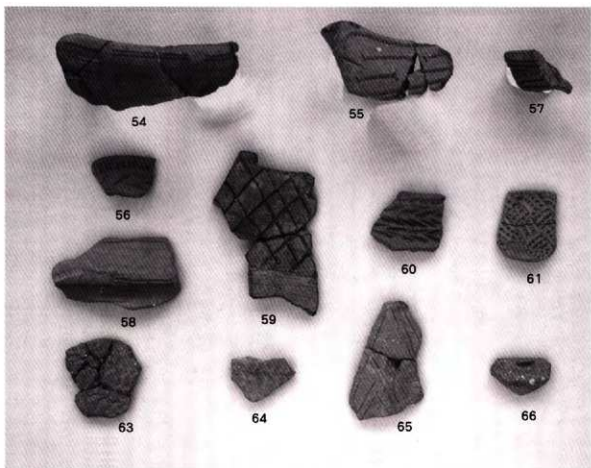
図版97 面縄東洞式土器a 上：表面 下：裏面



図版98 面縄東洞式土器b 上：表面 下：裏面



図版99 面縄東洞式土器・嘉徳Ⅰ式土器・市來式土器③ 上：表面 下：裏面



圖版100 面繩東洞式土器・嘉徳I式土器④ 上：表面 下：裏面



面縄東洞式土器(68)

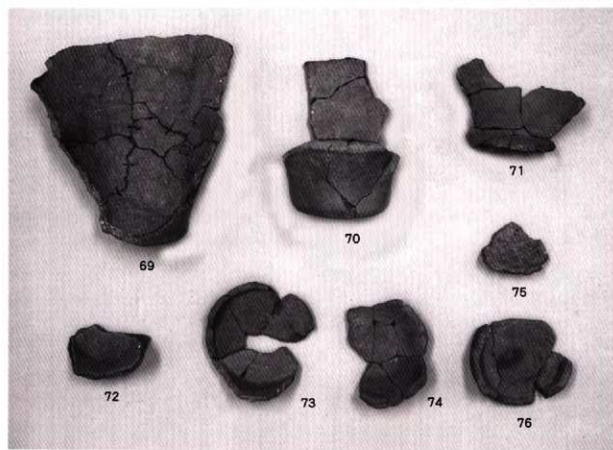
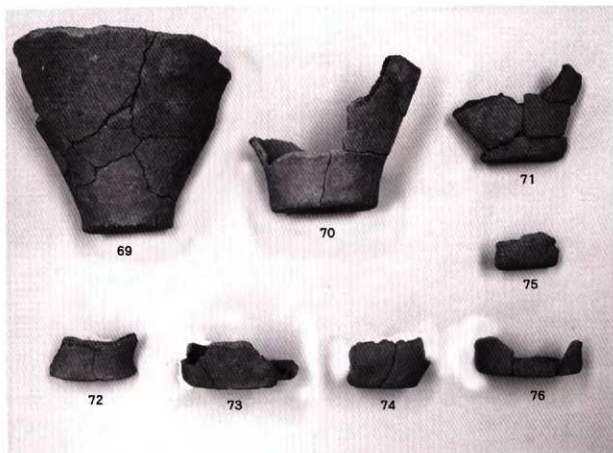


面縄東洞式土器(67)



荻堂式土器(3)

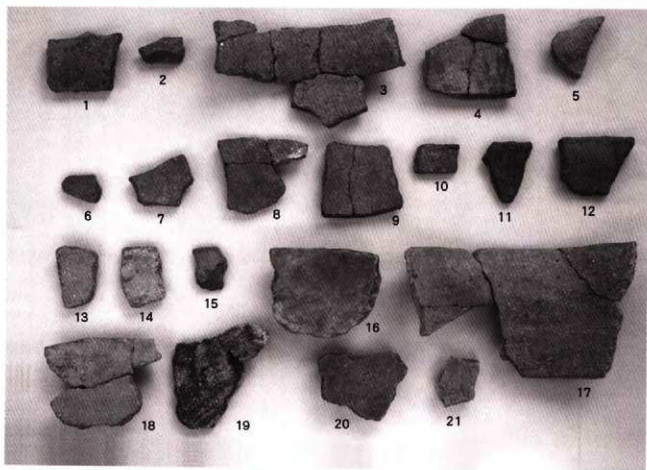
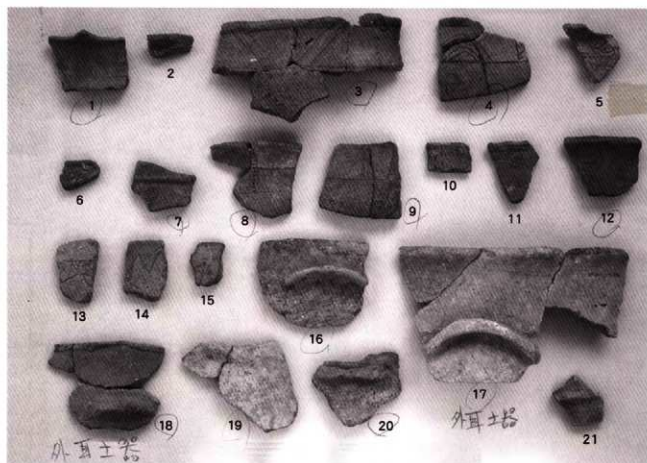
図版101 面縄東洞式土器（上：第81図68・下左：第81図67） 荻堂式土器（下右：第82図3）



図版102 面縄東洞式土器・嘉徳I式土器・底部⑤ 上：表面 下：裏面

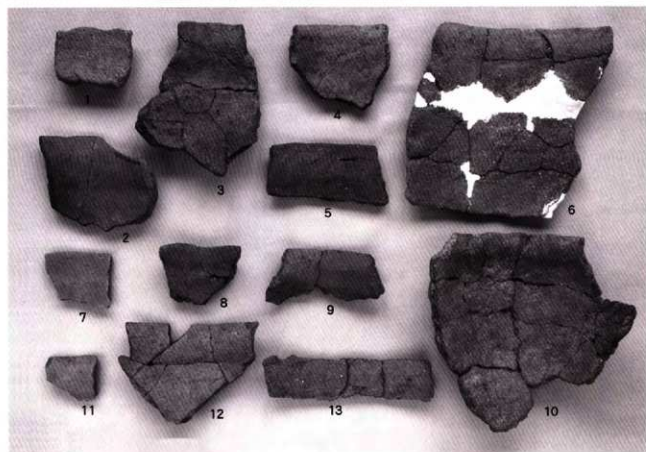
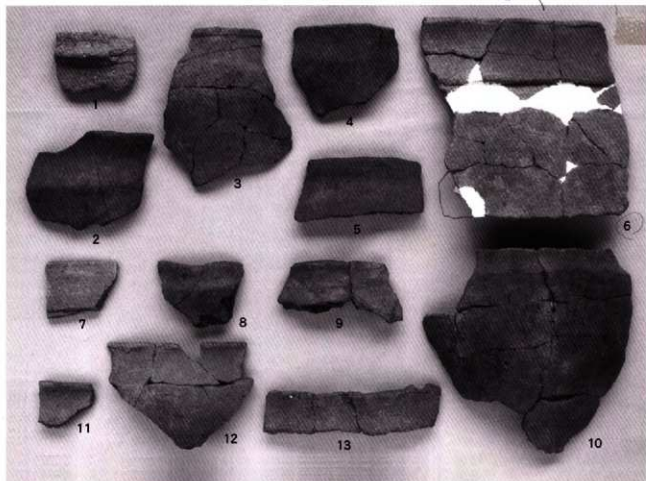


図版103 伊波式土器・萩堂式土器・カヤウチバンタ式土器 上：表面 下：裏面
-387-



図版104 縄文晩期・貝塚後期土器① 上：表面 下：裏面

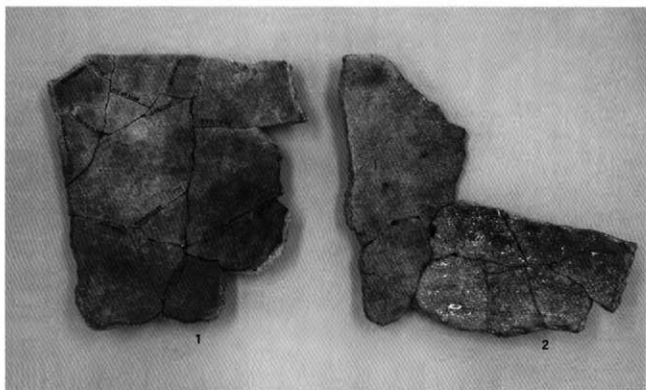
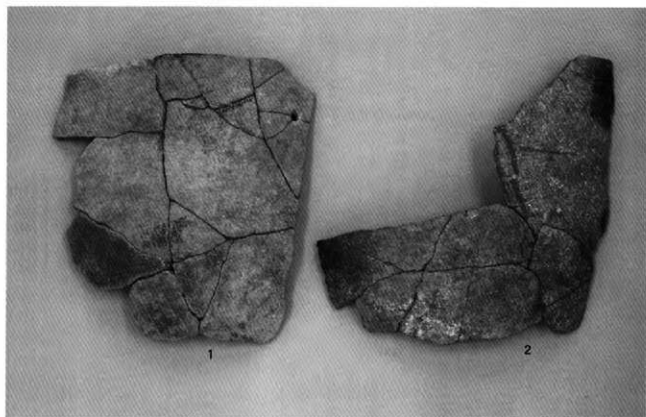
屈示



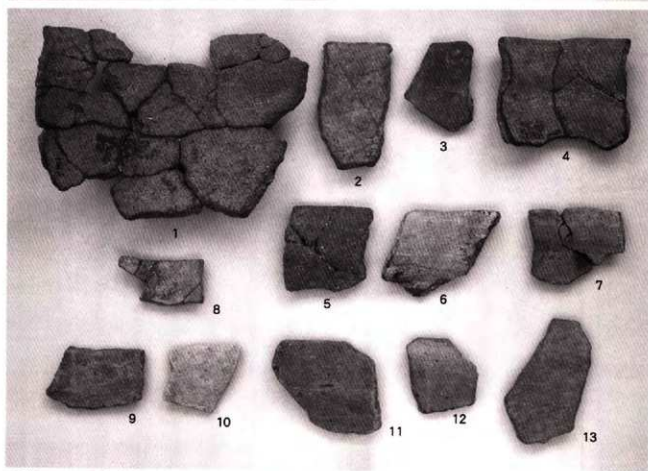
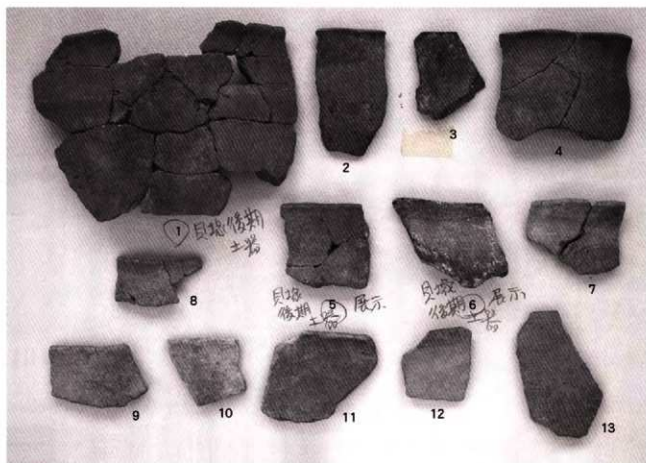
図版105 縄文晩期・貝塚後期土器② 上：表面 下：裏面



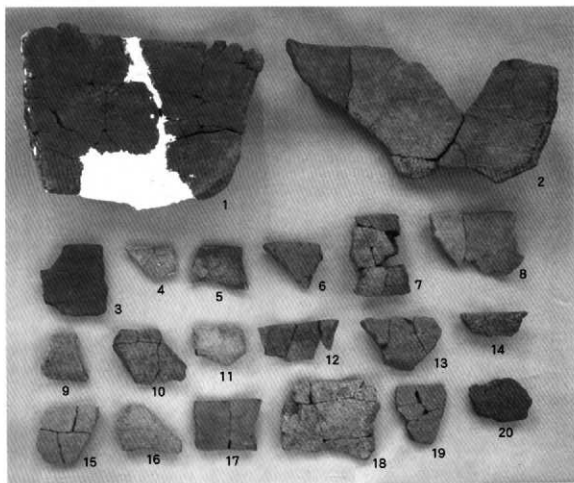
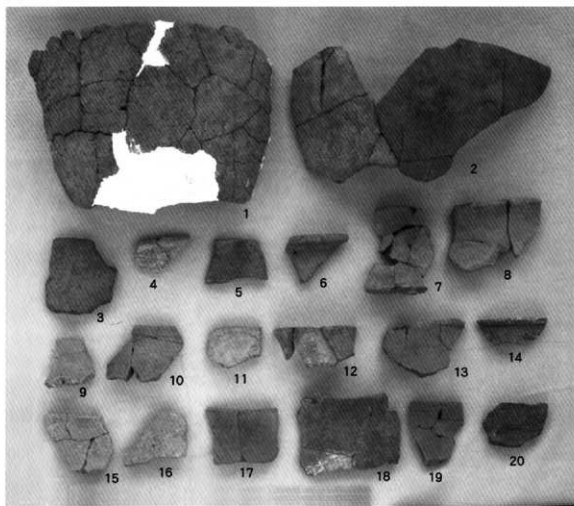
図版106 晩期・貝塚後期土器③ 上：表面 下：裏面



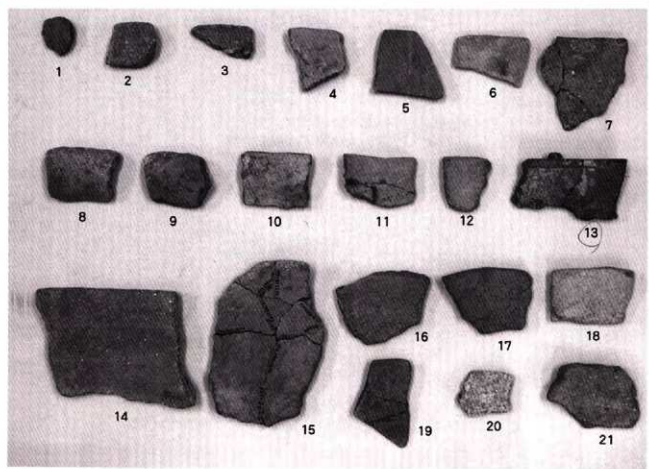
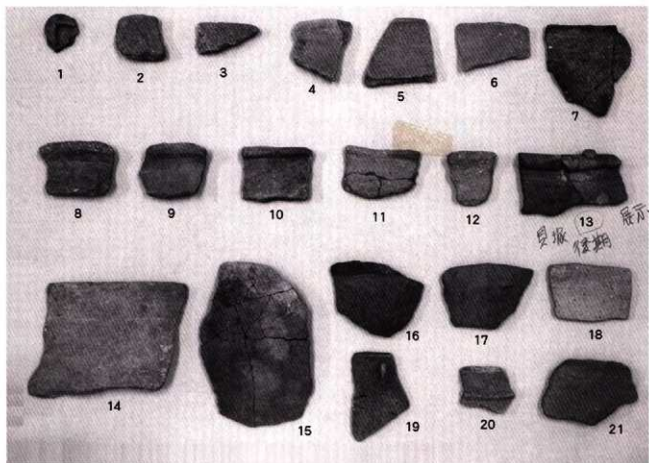
圖版107 貝塚後期土器④ 上：表面 下：裏面



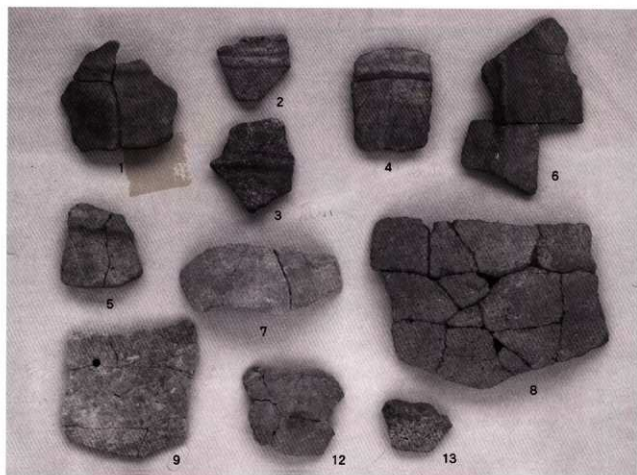
圖版108 貝塚後期土器⑤ 上：表面 下：裏面



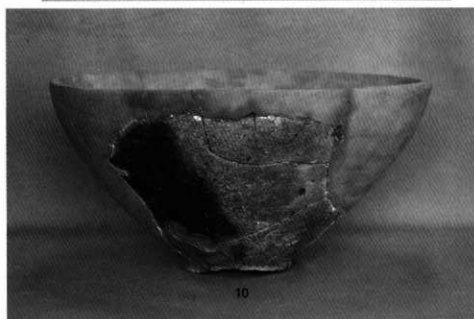
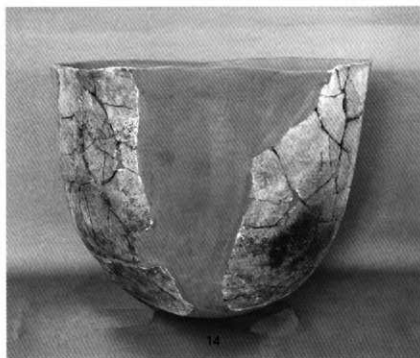
図版109 貝塚後期土器⑥ 上：表面 下：裏面



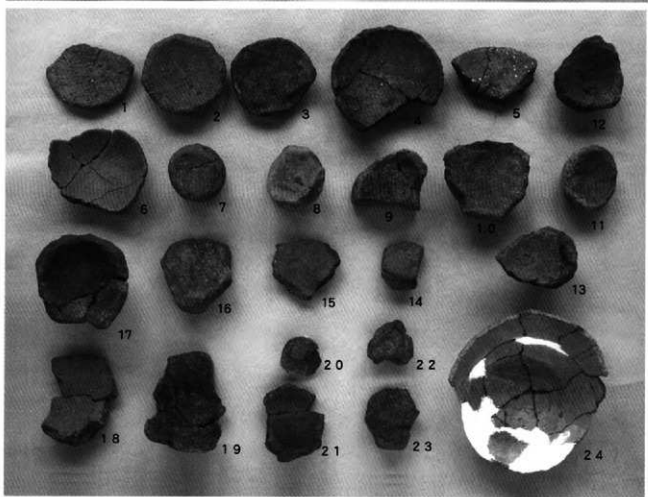
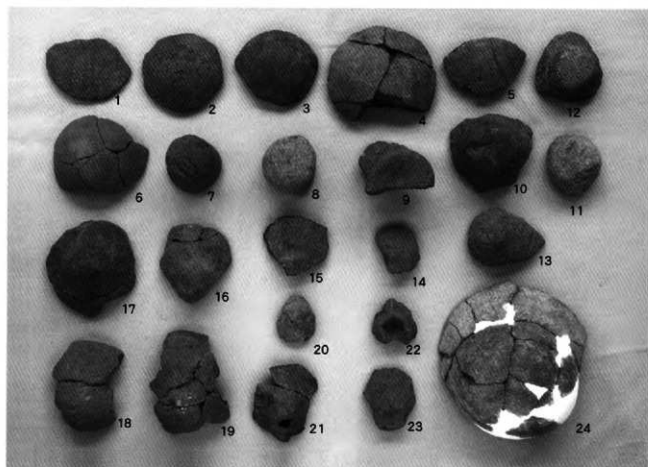
図版110 貝塚後期土器⑦ 上：表面 下：裏面



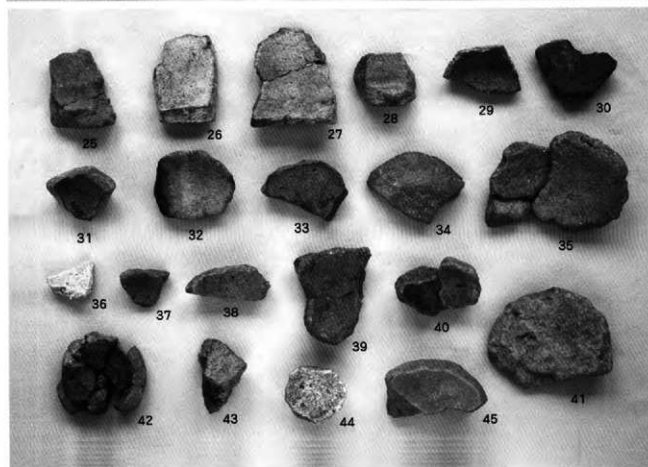
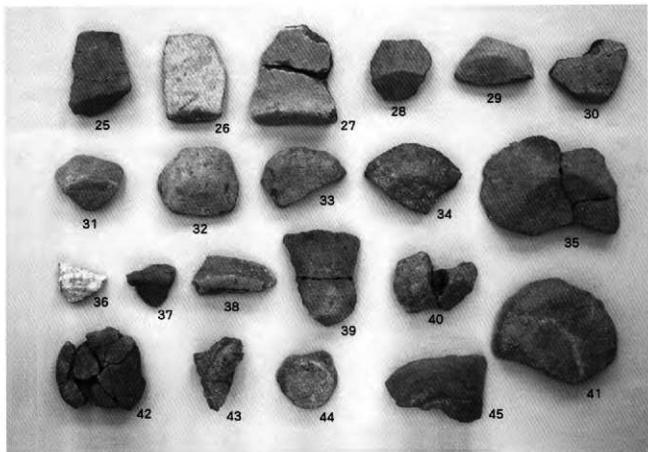
図版111 縄文晩期・弥生土器⑨-a 上：表面 下：裏面



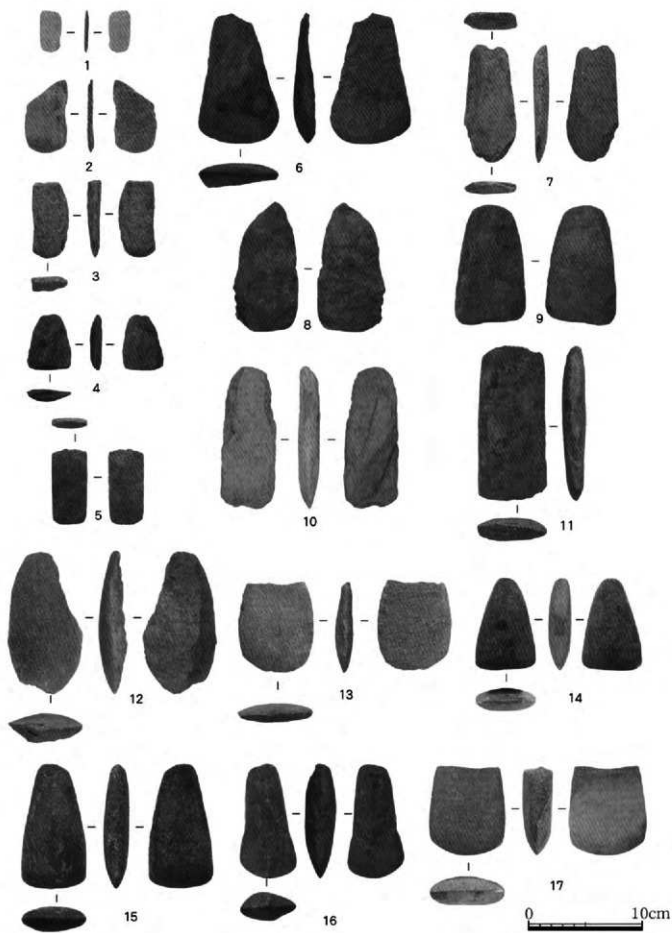
図版112 縄文晩期・弥生土器⑧-b 上：縄文晩期土器 中：浅鉢土器 下：弥生壺底部



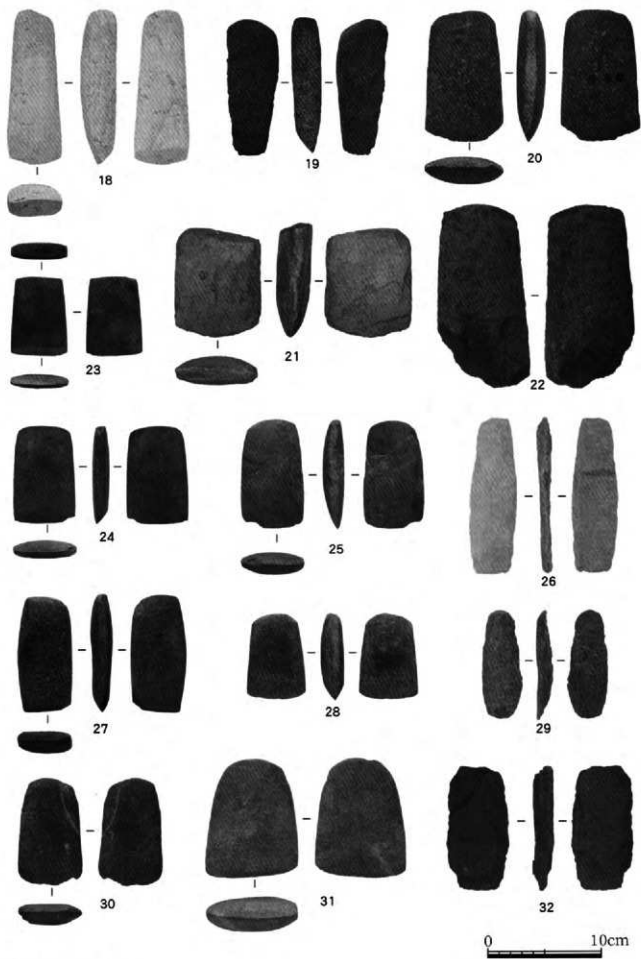
図版113 縄文晩期・貝塚後期土器・底部㊟a 上：表面 下：裏面



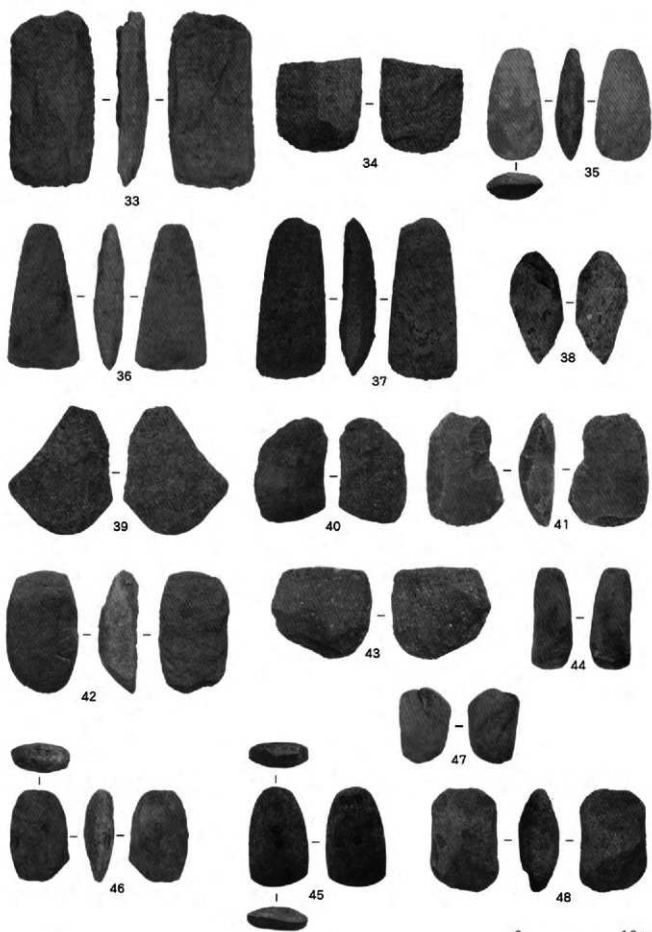
図版114 縄文晩期・貝塚後期土器・底部㊟b 上：表面 下：裏面



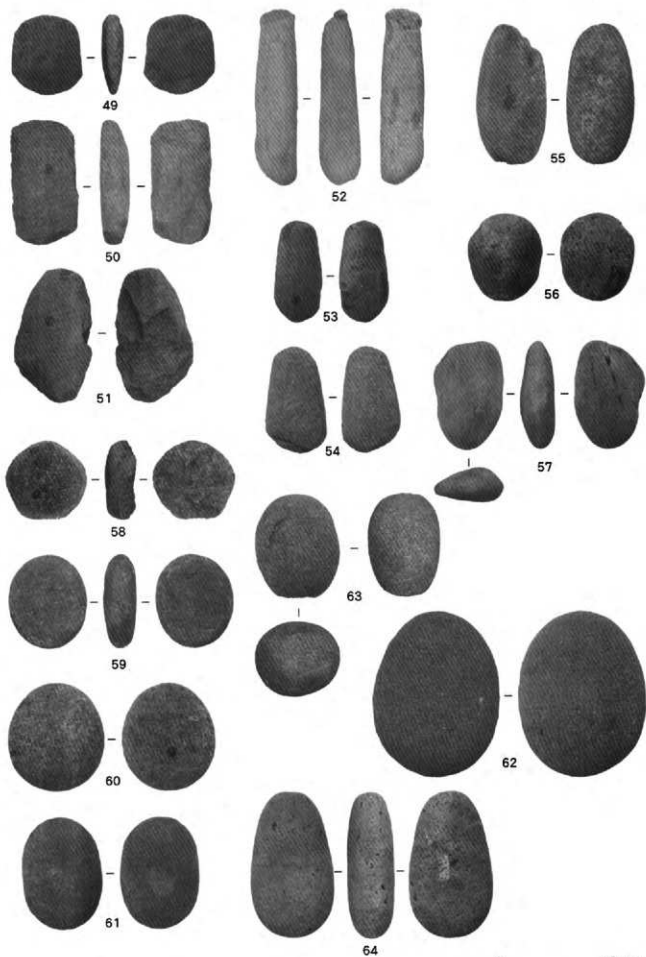
図版115 石器①



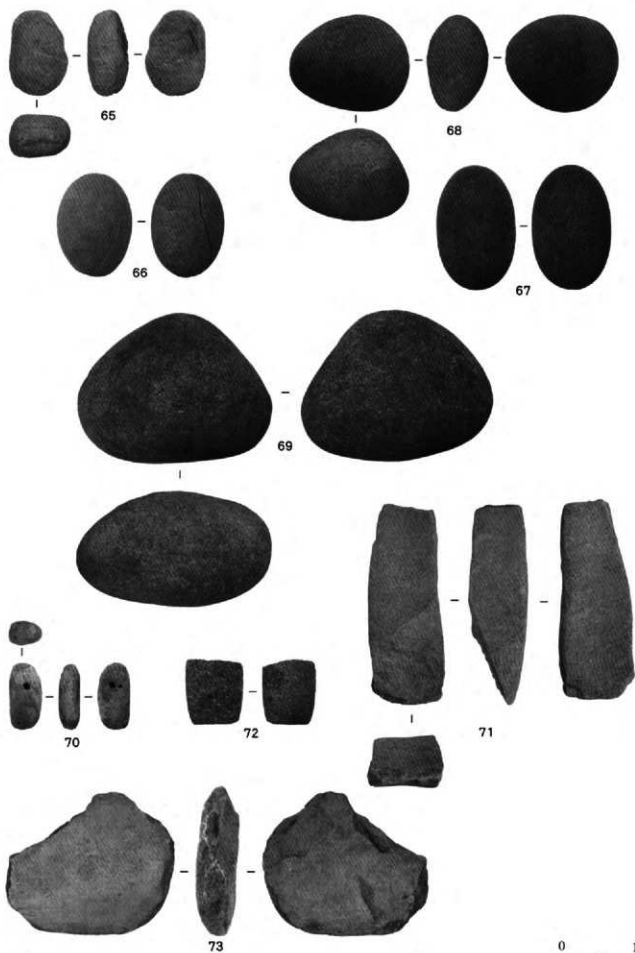
图版116 石器②



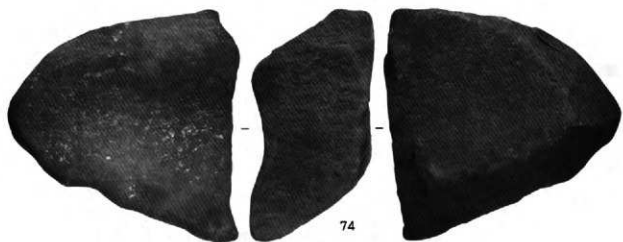
図版117 石器③



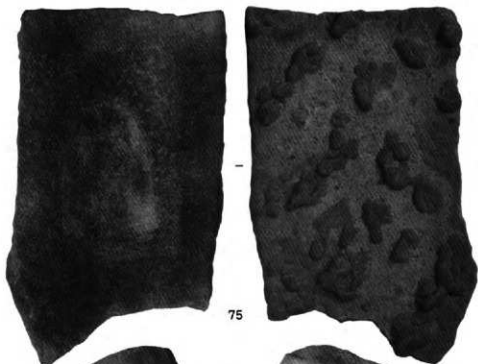
图版118 石器④



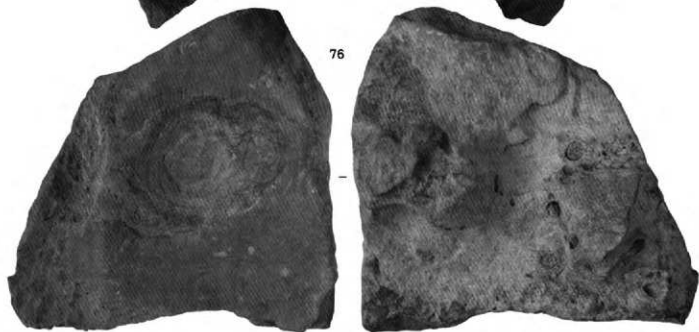
図版119 石器⑤



74



75



76

図版120 石器⑥

0 10cm



I



I



77



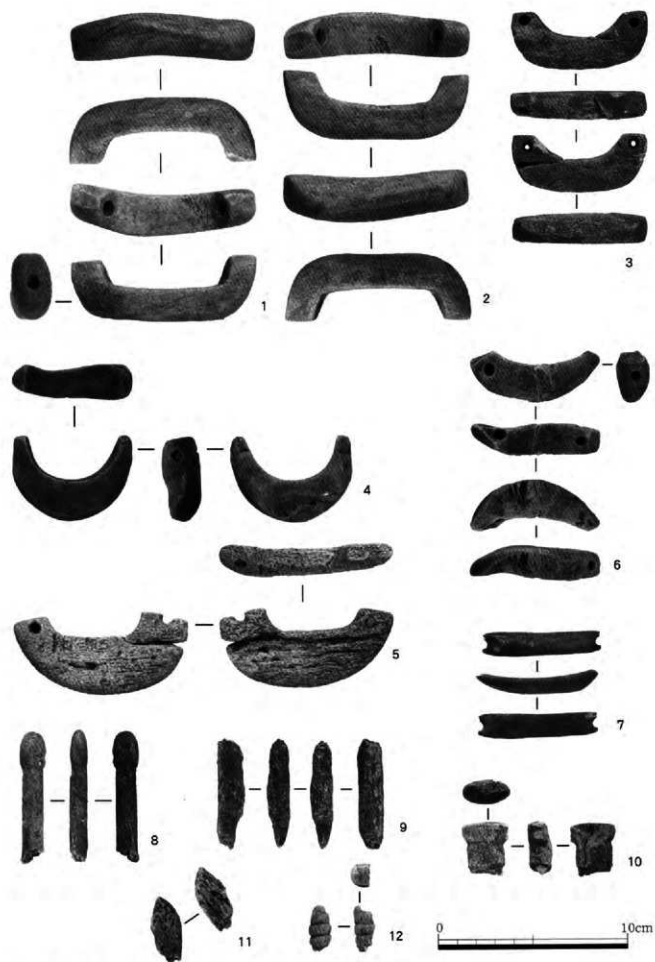
I



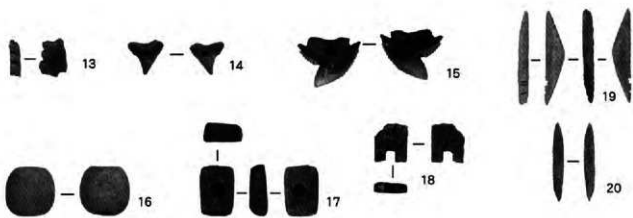
I



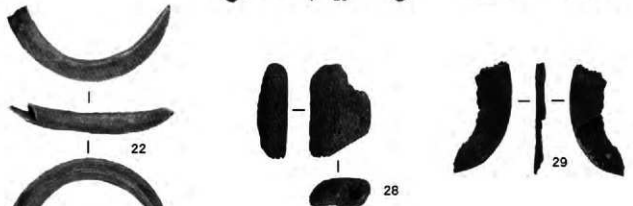
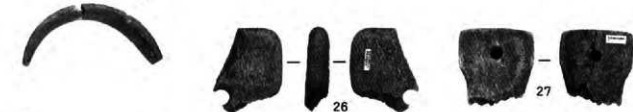
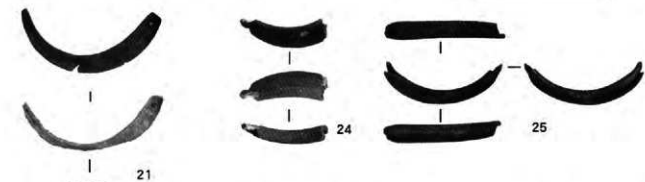
78



図版122 骨製品①

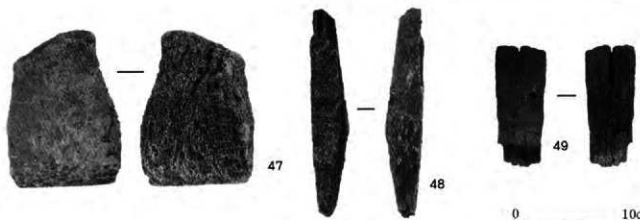
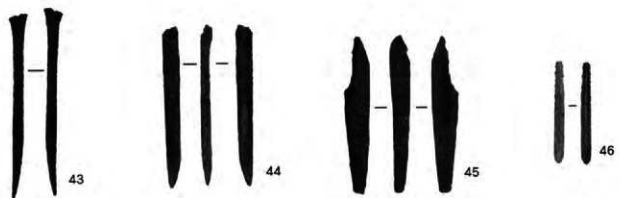
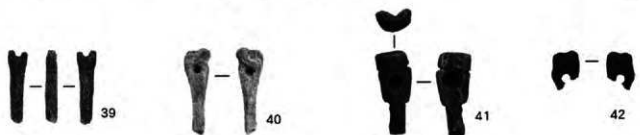
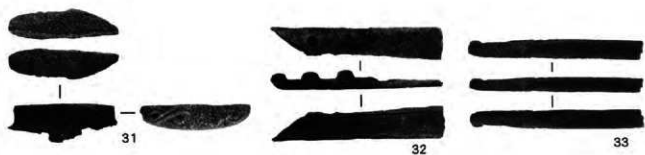


0 5cm

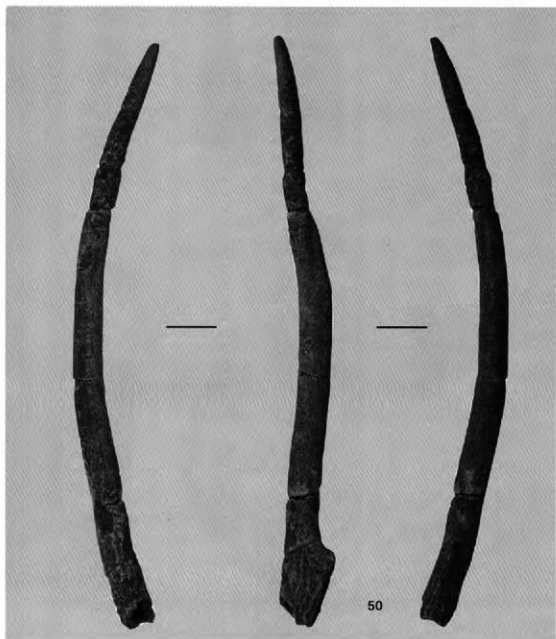
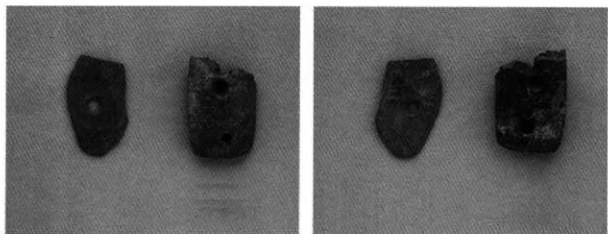


0 10cm

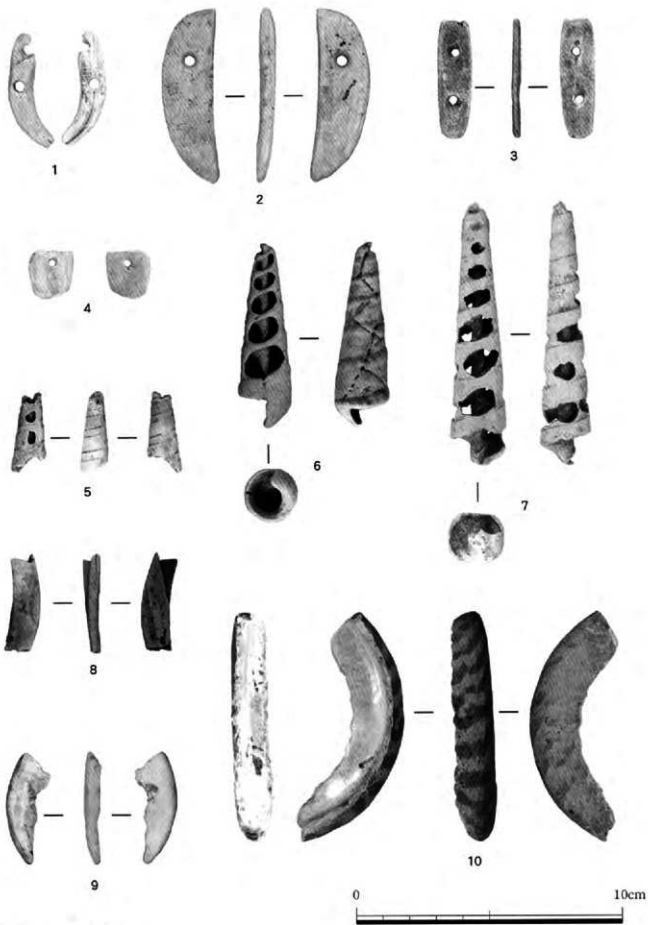
図版123 骨製品②



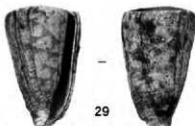
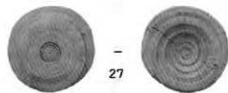
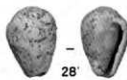
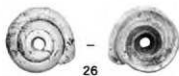
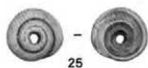
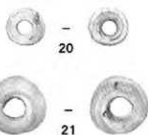
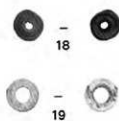
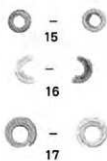
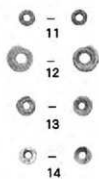
図版124 骨製品③



図版125 骨製品④・石製品 上左：表・上右：裏



図版126 貝製品①



図版127 貝製品②



32



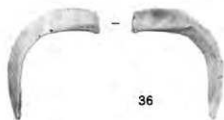
33



34



35



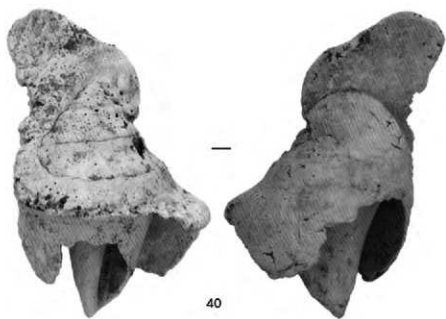
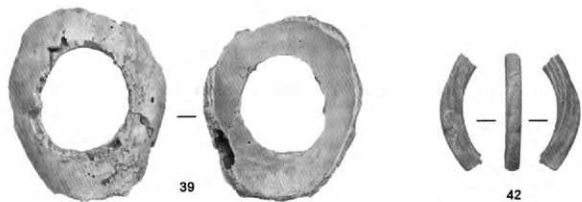
36



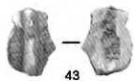
37



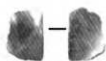
図版128 貝製品③



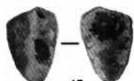
図版129 貝製品④



43



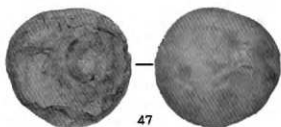
44



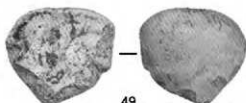
45



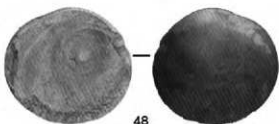
46



47



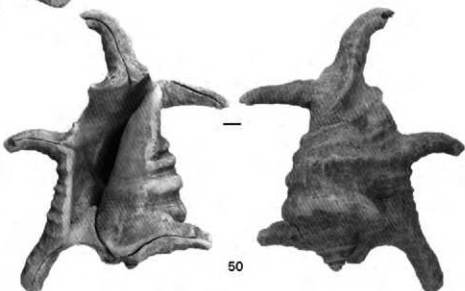
49



48

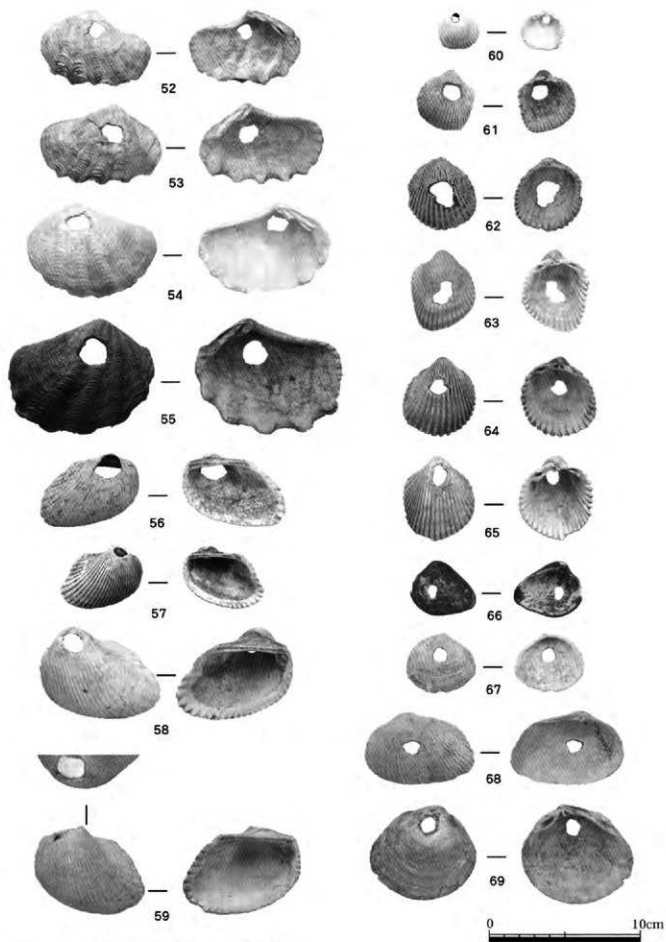


51



50

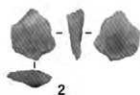




図版131 貝製品⑥ (二枚具有孔製品)



1



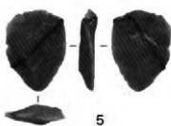
2



4



3



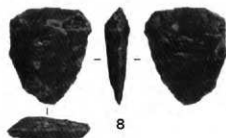
5



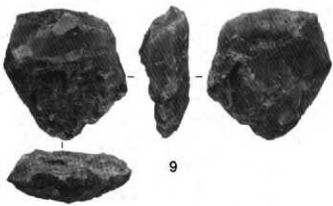
6



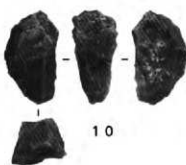
7



8



9



10



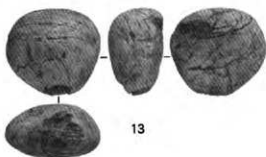
11



図版133 チャート①



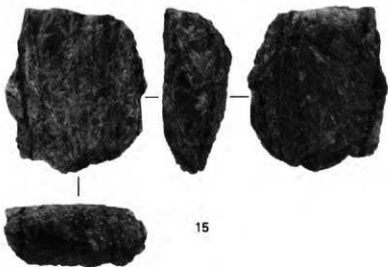
12



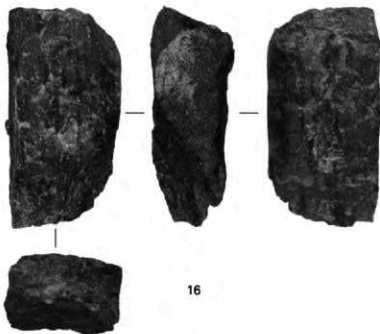
13



14



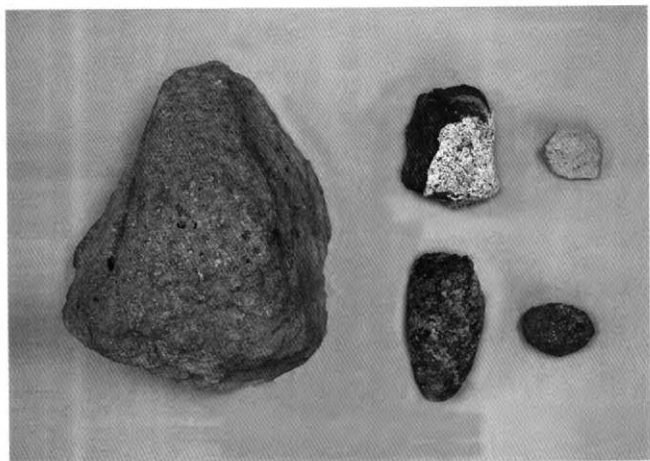
15



16



図版134 チャート②



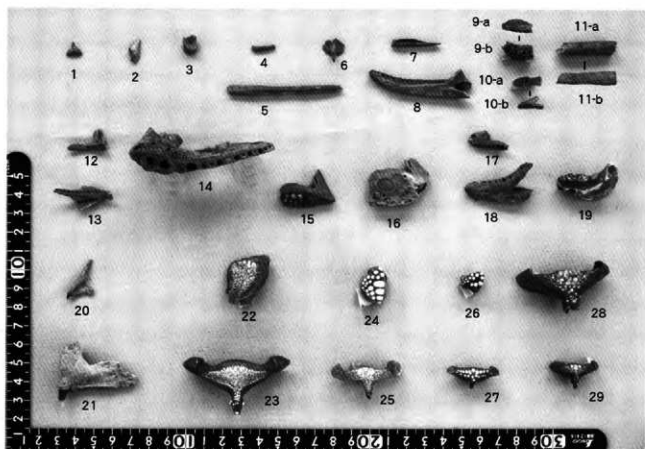
図版135 軽石 (上:各種サイズ・下:集石)



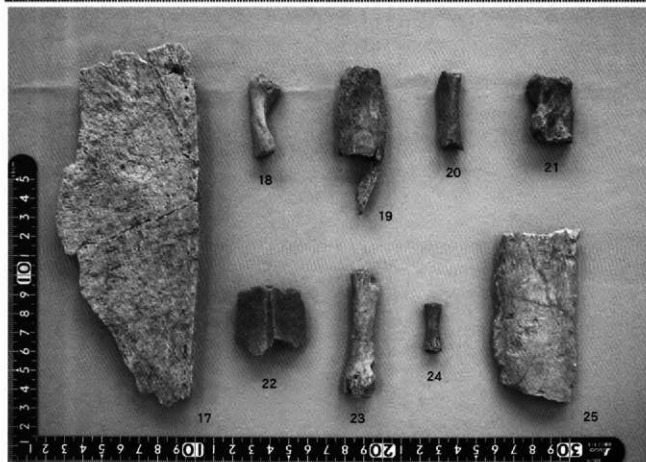
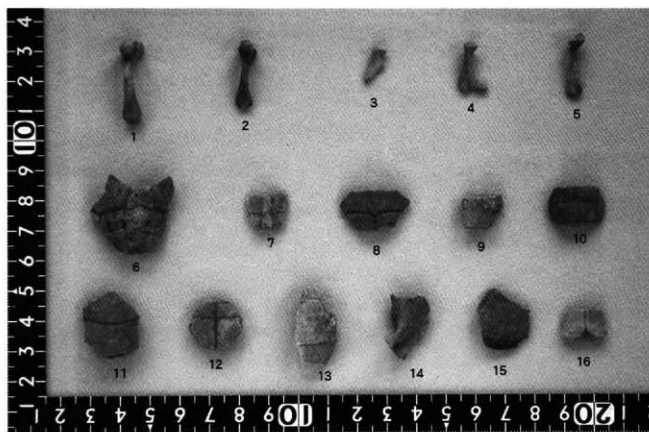
図版136 グスク時代以降の遺物①



図版137 グスク時代以降の遺物②

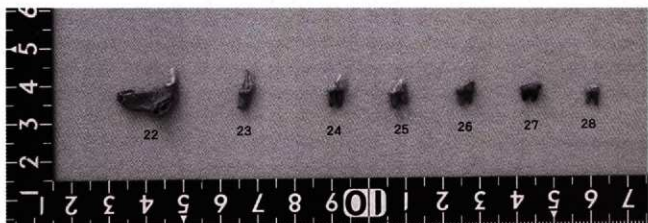
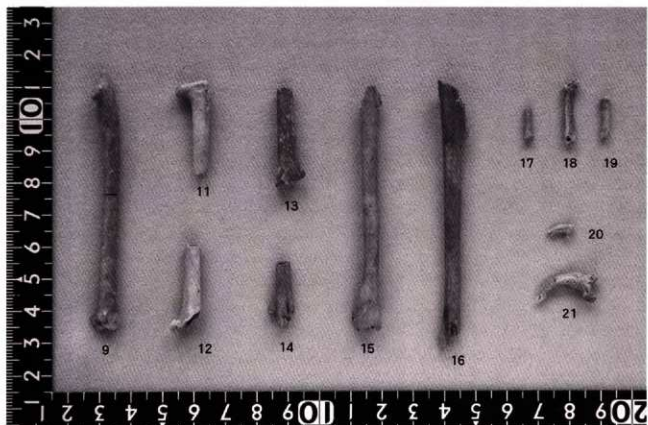
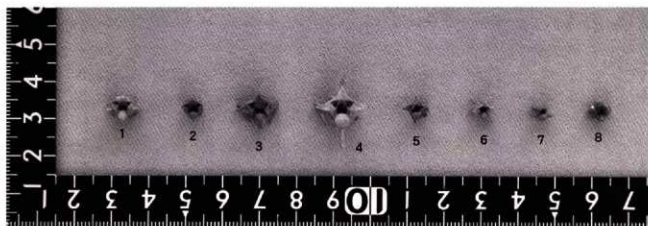


図版138 魚1・2 1サメ歯a, 2サメ歯b, 3サメ椎骨, 4エイ椎骨, 5, 6エイ尾, 7ウツボa上顎骨, 8ウツボ歯骨(R), 9ウツボb前歯骨, 10ウツボ歯骨, 11ダツ前上顎骨(R), 12ハタ前上顎骨(L), 13ハタ歯骨(L), 14フエダイ前上顎骨(R), 15ミナミクロダイ前上顎骨(L), 16クロダイ前上顎骨(L), 17ペラ上顎歯骨(R), 18フエキダイ歯骨(R), 19ヨコシマクロダイ歯骨, 20ペラ前上顎骨(R), 21ペラ前上顎骨, 22, 24ペラ上顎歯骨(L), 23, 25ペラ上顎歯骨, 26ペラ上顎歯骨(R), 27~29ペラ下顎歯骨, 30ブダイ前上顎骨(L), 32ブダイ前上顎骨(R), 31, 33~36ブダイ歯骨, 37, 39イロブダイ上顎歯骨, 38イロブダイ下顎歯骨, 40ナンヨウブダイ下顎歯骨, 41ブダイ上顎歯骨(R), 42ナガブダイ下顎歯骨, 43モンガラカワハギ科前上顎骨, 44, 45モンガラカワハギ骨鱗, 46フグ前上顎骨, 47, 48ハリセンボン上顎骨, 49ハリセンボン下顎骨, 50, 51鱈科尾椎骨, 52鯖科歯, 53, 54ギンガメアジ類前上顎骨, 54オニオコゼ科主體蓋骨, 55バブツニ



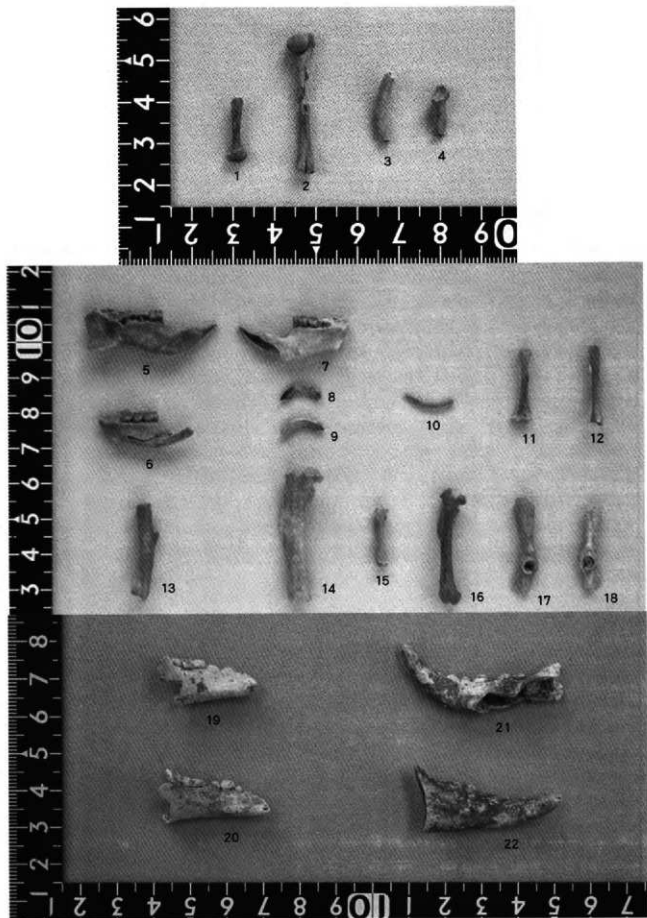
図版139 リクガメ・ウミガメ

1 上腕骨(L), 2 大腿骨(R), 3 恥骨(L), 4 腸骨(L), 5 鳥口骨+肩甲骨(R), 6 頂骨板, 7 椎骨板, 8 椎骨板最後尾, 9 縁骨板
 10 肋骨板, 11 上腹板(R), 12 内腹板, 13 中腹板(R), 14 下腹板(R), 15 剣状腹板(R), 16 髯骨板, 17 背甲板
 18 尺骨, 19 腓骨(R), 20 桡骨, 21 中足骨, 22 背甲板, 23, 24 指骨, 25 剣状



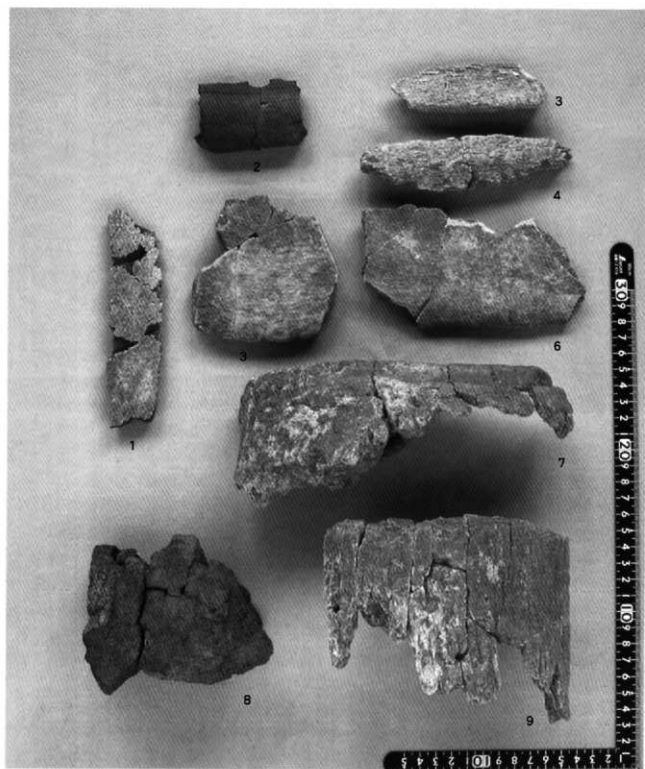
図版140 ヘビ・鳥類・コウモリ

1~8ヘビ椎骨, 9カラス尺骨, 10カラス大腿骨(L), 11カラス大腿骨(R), 12カモメ尺骨(遠位端-R)
 13カモメ中足骨(L), 14鳥類脛骨(R), 15鳥類脛骨, 16鳥類指骨, 17鳥類指骨, 18鳥類指骨, 19鳥類末節骨
 20コウモリ末節骨, 21オオコウモリ下顎骨(L), 22オオコウモリ上歯(R), 23~27オオコウモリ臼歯



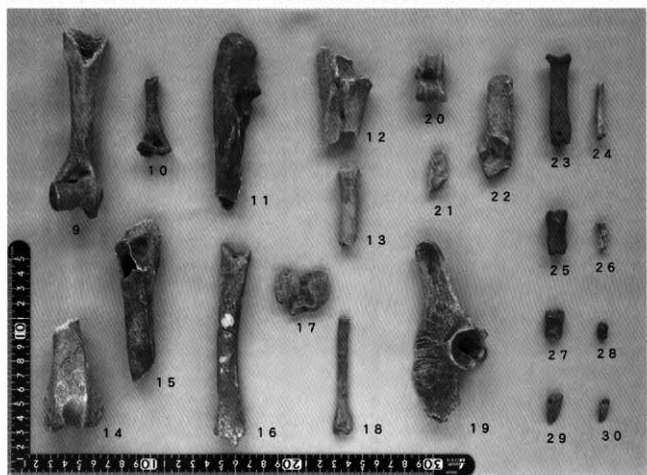
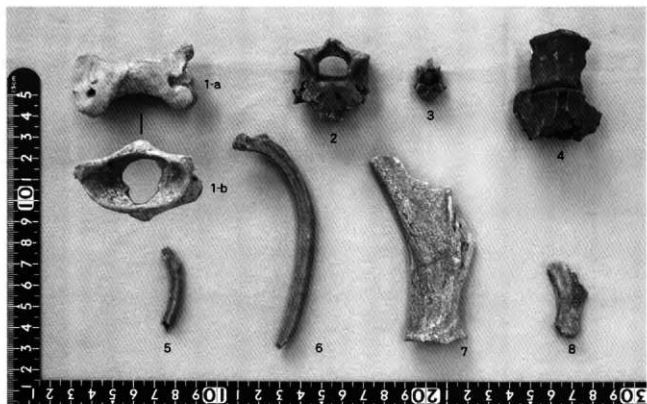
図版141 カエル・ネズミ・カニ

1上腕骨, 2上腕骨(L), 3桡尺骨, 4四肢骨, 5, 6ケナガネズミ下顎骨(L), 7ケナガネズミ下顎骨(R), 8ケナガネズミ上顎切歯(R)
 9ケナガネズミ上顎切歯(L), 10ネズミ下顎切歯(R), 11ネズミ上腕骨(L), 12ネズミ脛骨(R), 13ケナガネズミ脛骨(R)
 14ケナガネズミ大腿骨(L), 15, 16ネズミ大腿骨(R), 17, 18ネズミ寛骨, 19~22カニ爪



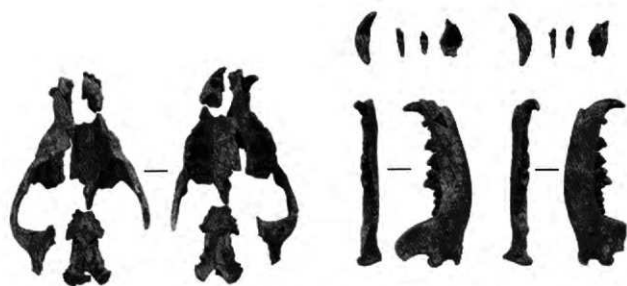
図版142 クジラ

1~4肋骨、5~9椎骨

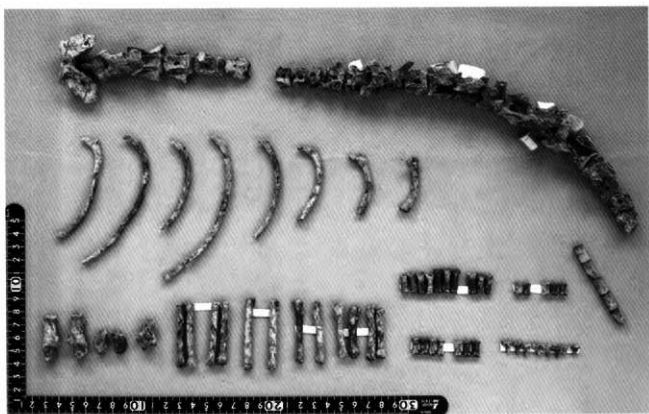


図版143 イノシシ1・2

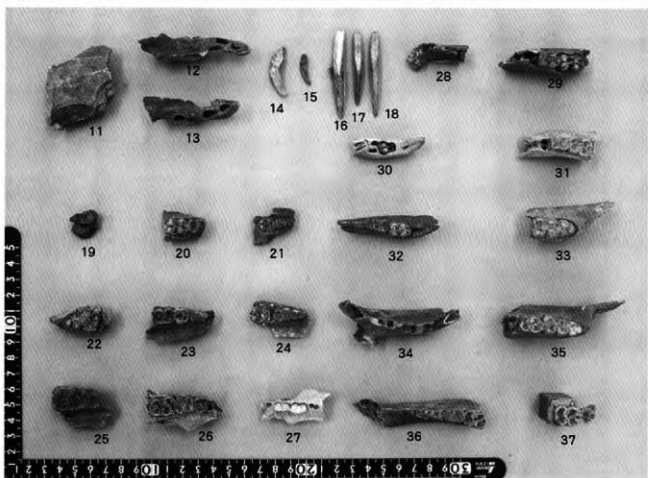
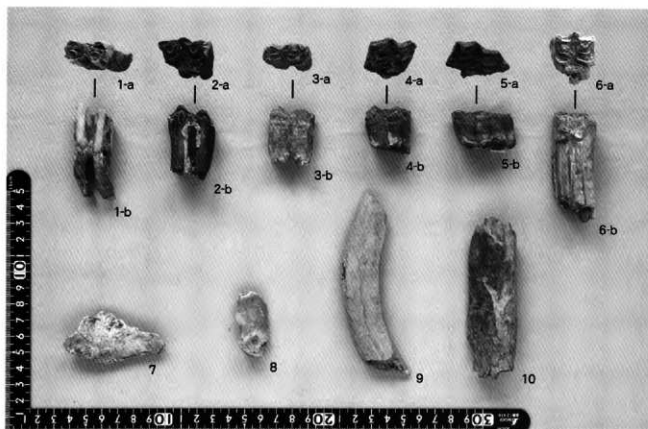
1 環椎、2~4 椎体、5、6 肋骨、7、8 肩甲骨、9 上腕骨、10 上腕骨(幼)、11、12 尺骨、13 桡骨、14 大腿骨(遠位端)、
15 大腿骨(近位端)、16 脛骨、17 脛骨(近位骨端)、18 腓骨、19 寛骨、20 距骨、21 踵骨、22 踵骨(R)、
23、24 中手骨、25、26 基節骨、27、28 中節骨、29、30 末節



図版144 イヌ 上：頭骨及び歯牙 下：四肢骨

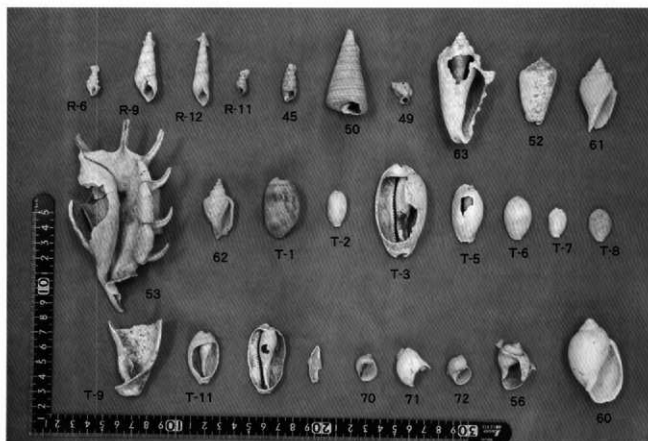


図版 145 上イヌ：イヌの椎骨及び指骨(井戸状遺構内検出・F-19グリット)
 下ジユゴン・イルカ：1牙, 2頭骨, 3後頭骨, 4耳骨, 5上腕骨, 6尺骨, 7橈骨(R)
 8~16肋骨, 17イルカ下顎骨

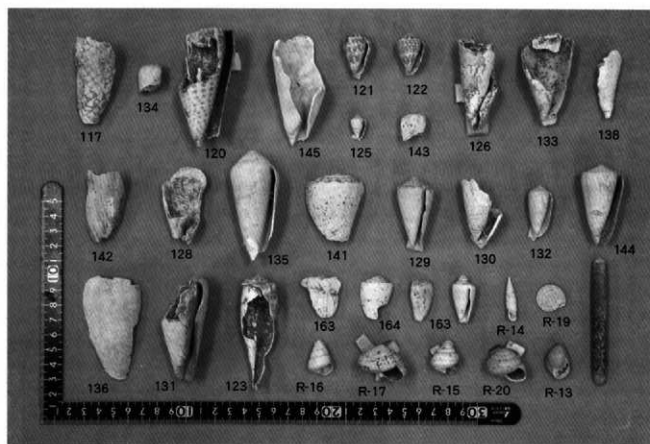
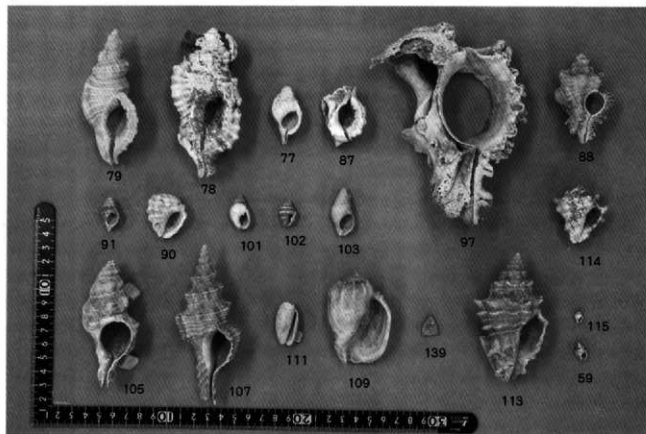


図版146 馬・牛・イノシシの歯

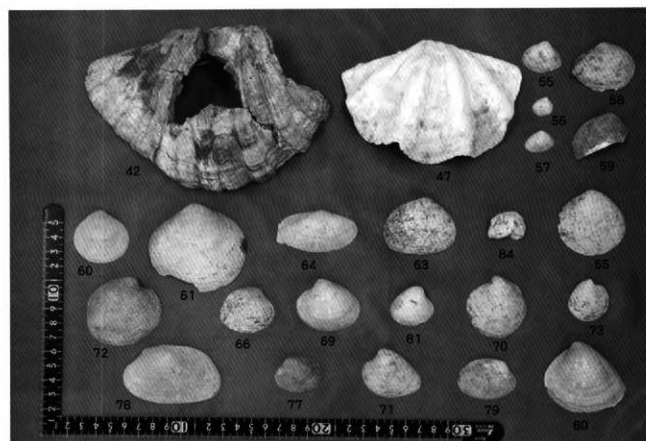
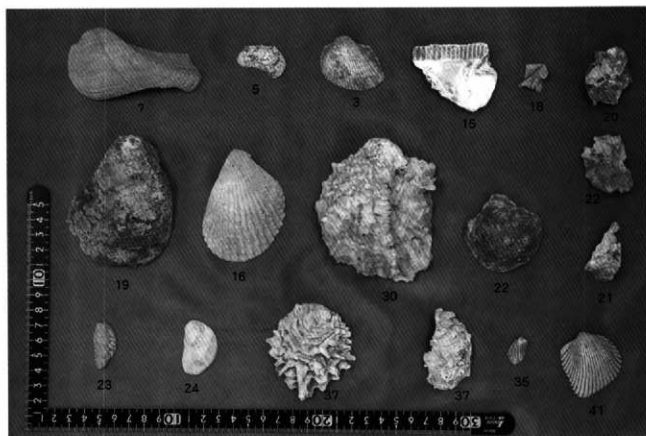
1 牛or馬歯破片(M3), 2 牛歯(M2-R), 3 牛歯(M1), 4 馬歯(M2-M3-R), 5 牛四肢骨破片, 6 馬上顎頰歯(L), 7 肋骨破片
 8 指骨破片, 9 牛or馬助骨破片, 10 牛or馬部位不明, 11 後頭骨, 12 上顎切歯(R), 13 上顎切歯(L), 14, 15 上磨
 16~18 切歯, 19 耳骨, 20 上顎骨(M1-R), 21 上顎骨(R), 22 上顎骨(M3-R), 23 上顎骨(p4-R)
 24 上顎骨(dm3-M1-M2-R), 25 上顎骨(M1-R), 26 上顎骨(p4-R), 27 上顎骨(p3-R), 28~37 下顎骨



図版147 貝類① (一枚貝・巻貝)



図版148 貝類② (巻貝・他)



図版149 貝類③ (二枚貝)

第V章 理化学的分析

I 伊礼原遺跡の植物遺体群

辻 誠一郎 (東京大学)
大 松 しのぶ (早稲田大学)
辻 圭子 (国立歴史民俗博物館)

植物遺体群の概要

伊礼原遺跡では、平成9(1997)年3月18日の縄文時代前期の低湿地遺跡発見の際に土器に伴う動物遺体群とともに種実遺体群が包含されていることが分かり、動植物遺体群を総合的に調査できる遺跡として注目された。その中心となる試掘穴No143では、ブロックで採取された堆積物試料の水洗選別が4月から予察的に進められ、大量の動植物遺体群を得ることができた。さらにその後の発掘調査においても、現地で直接取り上げられた植物遺体群の調査を進めてきた。これまでの調査の結果、縄文時代前期を中心に、シイ属、マテバシイ属、オキナワウラジロガシやウラジロガシのアカガシ亜属などからなる照葉樹林の存在、それら照葉樹林の資源利用について新しい事実が明らかになってきた。ここでは、花粉遺体群と主に種子や果実からなる種実遺体群の調査結果とそれらから分かってきたことをまとめておきたい。

植物遺体群は主として花粉遺体群、種実遺体群、木材遺体群、植物珪酸体群、珪藻遺体群からなっている。植物珪酸体群はイネ科を中心とする植物群の主として葉の器官の細胞に形成された植物珪酸体からなるもので、イネ科植物群がつくる草地植生や農耕地の探索に有効である。最後の珪藻遺体群は、水域に生活する緑藻植物珪藻類の細胞の遺体である珪殻からなるもので、水域環境の探索に有効である。はじめの三つの遺体群は、主として種子植物のさまざまな遺体群からなるもので、陸上の生態系をつくっているのもので、人間を取り巻いている植生・景観や、人間の植物利用の探索に有効である。伊礼原遺跡の調査では、これらすべての遺体群の検討を進めてきたが、後ろの2者は、石灰岩地域であるため遺体が溶解して著しく保存が悪いことが判明し、断片的な資料しか得られなかった。これらについては追加検討を行って、改めて取り上げる機会を期したい。木材遺体群については調査方法や人間の利用の仕方も異なるので、別の項目で詳述される。

花粉遺体群の組成

花粉遺体群の調査は、試掘穴No143から層位に沿って採取された堆積物について行った。花粉外膜が不規則に溶解し、彫紋が観察できないなど花粉遺体群の保存は著しく悪かった。比較的保存が良かった曾畑式土器包含層である第14層と上部のヌノメカワニナ遺体を多産する第5層の花粉組成を百分率で示すことができた。

第14層の花粉組成は、花粉・胞子総数に占める木本類が51%で、不明花粉が22%を占めた。その

他は草本類とシダ類であった。木本類51%のうち40%をシイ属—マテバシイ属が占め最優占した。アカメガシワ属、モチノキ属、グミ属、クワ科がその他の木本類を占めたが、アカガシ亜属は稀であった。第11層の上部泥炭層および第16層の下部泥炭層はともに不明花粉が多産するもののシイ属—マテバシイ属花粉の産出が目立ち、しばしば数十個の花粉塊が検出されるなどシイ属—マテバシイ属花粉の産出が第14層と同様に目立った。

一方、上部の第5層の花粉組成はそれらとは大きく異なり、花粉・胞子総数に占める木本類は0.8%であるのに対して草本類は90%、シダ類は8.1%を占めた。草本類の大半はイネ科とカヤツリグサ科が占め、ヨモギ属、アブラナ科、ミズアオイ属、他のキク科が随伴した。これは森林植生の貧弱さに対して草地植生が旺盛なことを示している。

限られた資料ではあるが、曾畑式土器包含層とその上下の泥炭層では木本類が優勢で、シイ属—マテバシイ属の優占が示唆される。

種実遺体群の組成

種実遺体群の調査は、平成9(1997)年3月の最初の試掘穴№143調査でのブロック試料の水洗選別で得られた遺体群、およびその後の発掘調査に伴って採取された現地取り上げの遺体群およびいわゆる「どんぐり塚」の遺体群について行った。まず「どんぐり塚」の遺体群と糺み物でできたザル(パーキ)内の遺体群の内容を述べ、そのあと、水洗選別と現地取り上げで得られた遺体群を記述する。

1. 「どんぐり塚」とパーキ内どんぐり

曾畑式土器包含層には、各所でおびただしいブナ科果実の破片からなるいわゆる植物塚が挟入する。後述するようにこれらの破片の大半はシイ属果実やオキナワウラジロガシあるいはウラジロガシの果皮からなっているので、ここではその内容を的確に、かつ理解しやすいように「どんぐり塚」と呼ぶことにする。「どんぐり塚」の垂直断面を写真に示したが、マトリクスに褐色砂質の堆積物が相当量占めるものの、果皮の破片が重なり合うように密集し、容積では果皮量のほうが砂質堆積物をはるかに上回っている。また、果皮の破片は同じ方向に配列するように堆積しているため、砂質堆積物とともに水流に多少とも移動し、混在して堆積したものといえる。各所で検出される「どんぐり塚」は、単数あるいは複数の廃棄単位からなるものと思われるが、それらを明瞭に捉えられる断面観察や層位発掘調査は行われていないので、1廃棄単位の量や広がりについては分かっていない。

放射性炭素年代測定を行った2箇所(試料番号RH-224, RH-225)の「どんぐり塚」の水洗選別後の種実遺体群の産出状況を写真に示した(図版150下)。ほとんどの果実が3分の1もしくはそれよりも小さな破片に砕かれている。おおむね縦筋の方向に割れていることが多く、また不規則に割れているため、たたき石などによる打撃によって破砕されたものと考えられる。

果実の形態から「どんぐり塚」を構成している種はシイ属、ウラジロガシ、およびオキナワウラジロガシからなると考えられる。①果皮と基部の境が帯で波状になり、上部の果皮が境部で少しへこむ。果皮の表面は不規則な縦の筋で凹凸の紋様をつくり、基部はこぶ状で維管束痕が境部まで達

していることからシイ属と同定できる。②果皮と基部の境が線で波状になり、上部の果皮が境部で少しへこむ。果皮の表面は縦の筋で縞模様をつくるが凹凸は無く、基部は維管束痕が縄状を呈することからウラジロガシと同定できる。③果皮に凹凸がほとんど無く果皮のみの大きな破片で、果皮はウラジロガシに比べて薄い。また、基部だけで産出しているものの、平坦で維管束痕ははっきりせず、こぶ状粒のみからなる。このことからオキナワウラジロガシと同定される。

2箇所の種実遺体群は、どんぐり類に含められる果皮以外に、チシャノキの核を多量に含んでいた。試料 RH-224 では、堆積物500cc中にチシャノキ属核が70個、試料 RH-225 では堆積物500cc中に49個が検出されている。これは特異な産出状況ではあるが、植物資源利用の対象とされたかどうかは検討の余地がある。ただ、堆積域にチシャノキの個体が生育していたとすれば、大量の果実が落下堆積したと考えられるので、堆積の過程で混在した可能性もある。

一方、曾畑式土器包含層内で発見されたバーキの内部から検出されたどんぐりは写真に示したものである。どれも個体が大きく、長さが最小のもので長さ22.7×幅21.0mm、最大のもので長さ31.8×幅19.7mmであった。これらはいずれもオキナワウラジロガシの果実に同定された。ほぼ完全な形で産出しているので、バーキ内に何らかの理由で保存もしくは貯蔵されていたものと考えられる。

2. 水洗選別と現地取り上げ種実遺体群

平成9(1997)年4月から6月にかけて試掘穴No143から採取されたブロックの水洗によって得られた縄文時代前期の曾畑式土器を多量に包含していた第14層の種実遺体群、およびその後の調査で採取された種実遺体群の組成と産出状況は以下に列記するとおりである。前者については大松・辻(2001)で予察的な記載がなされたが、その後の新たな事実もあるため改めて記載をしておきたい。種実遺体群の大きな特徴は、上記の「どんぐり塚」を構成していたシイ属果実がきわめて多量に含まれていたこと、シイ属以外のオキナワウラジロガシやウラジロガシ、ウバメガシ、マテバシイ属といったブナ科植物群の果実遺体も多産し、多様な照葉樹林とその資源利用を示したことである。植生・景観と資源利用の理解のために、最初に木本類を列記し、その後草本類を列記する。

A. 木本類

ソテツ *Cycas revoluta* Thunberg: 種子、長さ37×幅25mmの扁平で、両側にかすかな稜があり、表面には不規則で大きな枝状紋様がある。稀産。

アダン *Pandanus odoratissimus* L. fil.: 果実、完全形の側面は逆台形から方形、横断面は丸みのある菱形から五・六角形。長さ21-30×幅18-28×厚さ15-21mm。外果皮は果実の上部で5裂片に分かれ、表面は平滑。中果皮は繊維質。内果皮は堅く、果実の上部が磨耗して内果皮が露出するものが多い。内果皮の底面には数個の穴が開く。果実下部に内果皮の中の間隙が露出するものがあり、食害を受けたものと思われる。一部が燃焼によって炭化したものもある。極めて多産。

ヤマモモ *Myrica rubra* Sieb. et Zucc.: 核、側面は角の丸い菱形、横断面は狭楕円形。稀産。

オキナワウラジロガシ *Quercus miyagii* Koidz.: 果実、既述、極めて多産。

ウバメガシ *Quercus phillyraeoides* Asa Gray: 果実、半分に破損した果実が稀産、長さ28×幅10mm、表面には強弱のある縦方向の溝が目立つ。果皮は薄い。着点は平らで、山形の維管束痕をもつ。稀産。

ウラジロガシ *Quercus salicina* Blume: 果実、半分に破損した果実が多産、平均の長さ30×幅15mm、横断面は楕円形、肩部が無い。着部が直径12mmと大きく、盛り上がるが中央部はかすかにくぼむ。維管束痕は山形を呈して多数ある。多産。

シイ属 *Castanopsis*: 果実、既述、極めて多産。

マテバシイ属 *Pasania*: 果実、すべて破片で完全な形では産しない。側面は釣鐘形、基部は切形、横断面は半円形、平均の長さ23×幅14×厚さ8mm。他のブナ科果実より果皮が厚く、とくに基部付近の果皮は肥厚し、着点は少しくぼむ、果皮外面は滑らかで光沢あり、縦の溝は目立たない。多産、幼果および殻斗も稀産。

ブナ科 *Fagaceae*: 果実、殻斗、幼果の破片群で、科以下の同定が困難なものが多産。大部分は果実の破片で、横断面が角ばり、外面に光沢があり、縦方向の細かな溝が目立つ特徴をもつものが多い。このことから破片の大半はシイノキ属果実の破片である可能性が高い。ただし、果実の着部が円形で維管束の穴が輪状に並ぶコナラ属と同定できるものや、殻斗鱗片が着部を中心に同心円状に重なるアカガシ亜属に同定できるものもわずかに認められる。極めて多産。

ウラジロエノキ属 *Trema*: 核、側面はややいびつな円形、横断面は角の丸い菱形。平均の長さ2×幅2×厚さ1.5mm、網目状のなだらかな隆線が走り、縦方向の隆線が目立つ。多産。

クワ属 *Morus*: 果実、側面は広倒卵形、横断面は丸みのある三角形。長さ約2×幅約1.5×厚さ約1mm。多産。

カジノキ *Broussonetia papyrifera* (L.) Vent.: 核、側面は広倒卵形、横断面は角の取れた扇形。長さ約2×幅約2×厚さ約1mm。多産。

オガタマノキ *Michelia compressa* (Maxim.) Sarg.: 種子、側面は広円形、断面は両凸レンズ形、平均の長さ8×幅11×厚さ5mm、先端はやや尖り、基部にへそがある。全面に縦方向に走る溝が何本もある。稀産。

クスノキ科 *Lauraceae*: 子葉、片側のみ。概形は半円形、向軸側の平坦面は楕円形、長さ9×幅7×厚さ5mm。比較的大型のため、タブノキ *Michelia thunbergii* Sieb. et Zucc.の可能性がある。稀産。

イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.: 果実、さく果の裂片。概形は半球形、長さ12×幅10×厚さ5mm、平坦な向軸面に2枚の内果皮が見られる。稀産。

バラ科 *Rosaceae*: 核、側面はいびつな楕円形、横断面は円形。ヘビイチゴ属 *Duchesnea* の核に酷似する。稀産。

サクラ属 *Prunus*: 核、縫合線に沿って裂けた半分、概形は半円形、長さ4×幅4×厚さ1.5mm。縦方向の明瞭な筋が何本もあり、基部は斜めにくぼむ。内果皮は厚い。稀産。

クロヨナ *Pongamia pinnata* (L.) Pierre: 果実、一部破損、概形は両端がやや尖る楕円形、扁平。長さ26×幅16×厚さ1mm。稀産。

カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.: 種子、側面はややいびつな卵形、横断面は円形。平均の長さ3.5×幅3×厚さ2.5mm、表面に不定形の目の粗い網目紋様があり、起伏に富む。多産。

サンショウ属 *Zanthoxylum*: 種子、側面は上下がやや尖る卵形、横断面は円形、平均の長さ3

×幅3×厚さ2mm、表面に縦方向が目立つ網目紋様があり、光沢がある。多産。

センダン *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. : 核、側面は両端が平坦な卵形、横断面は五ないし七角形、平均の長さ14×幅10mm。5ないし7本の稜が縦に走る。両端に穴がある。多産。

アカメガシワ属 *Mallotus* : 種子、概形はやや扁平な球形、平均の長さ2.5×幅3.5×厚さ3.5mm、頂部に目だつ突起がある。表面は大きさの揃った細かな突起で覆われる。種皮は薄いが固く、断面では内側で屈曲する柵状組織が目立つ。多産。

ヤンバルアカメガシワ *Melanolepis multiglandulosa* (Reinw.) Reichb. Fil. et Zoll. : 種子、側面は一部が尖るいびつな円形、横断面は偏円形、平均の長さ6×幅5×厚さ4mm。3本の稜が集まり、三角形の突起をつくる。表面に円形の明瞭なくぼみがあり、内部の突起と対応する。種皮は厚くて固い。極めて多産。

モチノキ属 *Ilex* : 核、側面は広楕円形、横断面は扇形。稀産。

ツルメモドキ属 *Celastrus* : 種子、側面は長楕円形、横断面は膨れた扇形。稀産。

ショウベンノキ *Turpinia ternata* Nakai : 種子、側面は基部が直線状にゆがんだ円形、横断面は楕円形、平均の長さ5×幅4.5×厚さ2mm、基部に大きなへそがある。多産。

アワブキ属 *Meliosma* : 核、概形はややつぶれた球形。基部から頂部へと走る明瞭な稜が1本ある。多産。

ブドウ属 *Vitis* : 種子、側面はやや細長い倒卵形、横断面は半円形。平均の長さ4.5×幅3.5×厚さ2.5mm。丸みのある背軸側に楕円形に浅くくぼむへそが、平坦な向軸側に二つの細長い溝がある。多産。

ホルトノキ *Elaeocarpus sylvestris* (Lour.) Poir. : 核、側面は長楕円形、横断面は円形、平均の長さ17×幅8×厚さ8mm、表面に細くて浅い溝が縦横に何本も走り、不明瞭な網目紋様を呈す。基部と先端を結ぶ3本の直線的な細い溝がある。多産。

コバンモチ *Elaeocarpus japonicus* Sieb. et Zucc. : 核、側面は一端がやや平坦な楕円形、横断面は円形、長さ9×幅5×厚さ5.5mm。細い溝が縦横に走り、起伏に富む。稀産。

シマサルナシ *Actinidia rufa* (Sieb. et Zucc.) Planch. : 種子、側面は長楕円形、横断面は偏円形、平均の長さ2.5×幅1.5×厚さ1mm、表面に不定形のくぼみが不規則に並び、明瞭な網目紋様を呈す。多産。

イイギリ *Idesia polycarpa* Maxim. : 種子、側面は細長い卵形、横断面は円形、平均の長さ2×幅1.5×厚さ1mm、基部は円形で縁がありくぼむ。基部に小さな突起がある。多産。

シマウリノキ *Alangium premnifolium* Ohwi : 核、側面は楕円形で上端が裂ける。横断面は偏円形。平均の長さ10×幅6.5×厚さ5mm。縦方向に1周する浅い溝があり、溝の中には円形のくぼみが並ぶ。壁は厚く、固い。多産。

モモタマナ *Terminalia catappa* L. : 果実、長さ35×幅35mm、表面は平滑でかすかに光沢あり、内果皮はコルク質で円形の種子が溶けたような状態を呈す。完形が破片で産するが稀産。

ハイノキ属 *Symplocos* : 核、やや扁平な球形の胴をもつ逆壺形。長さ4×幅5.5×厚さ5mm、頂部と底部に穴があく。稀産。

エゴノキ *Styrax japonicus* Sieb. et Zucc. : 種子、側面が楕円形で横断面が円形のもの、側面が長楕円形で横断面が円形のもの、側面が楕円形で横断面が半円形のものがある。長さ11-15×幅6-8×厚さ5-7mm。基部のへそは大きく明瞭、基部から頂部の間を幅広く浅い溝が3本走る。表面に細かないは状突起が密生する。多産。

チシャノキ *Ehretia ovalifolia* Hassk. : 核、半円形、平均の長さ3×幅3×厚さ1mm、内部は2室に分かれる。丸みのある背軸面には縦方向が目立つ明瞭な網目紋様がある。平坦な向軸面にはハの字形をした細長い突起がある。極めて多産。

ミフクラギ *Cerbera manghas* L. : 種子、長さ42×幅35×厚さ25mm、強靱な繊維質で覆われ、特徴的な双こぶの形状をもつ。稀産。

ムラサキシノブ属 *Callicarpa* : 核、側面は一端のやや尖る卵形、平均の長さ4×幅3mm。多産。

クサギ近似種 *Clerodendrum* cf. *trichotomum* Thunb. : 核、破片のみ、長さ4.5×幅3mm、丸みのある背軸面に目が大きい不定形の網目紋様がある。稀産。

ハマクサギ属 *Premna* : 果実、直径約4mmのややいびつな球形。円形もしくは縦に長いこぶ状の突起に覆われる。縦方向に1周する細い溝が2本ある。稀産。

B. 草本類

ヒルムシロ属 *Potamogeton* : 果実、稀産。

イバラモ属 *Najas* : 種子、側面は披針形、横断面は円形。多産。

オモダカ科 *Alismataceae* : 果実、稀産。

イネ科 *Poaceae* : 穎、側面は長披針形で扁平。稀産。

スゲ属 *Carex* : 果実、稀産。

ホタルイ属 *Scirpus* : 果実、側面は倒卵形、横断面は片凸レンズ形。多産。

カラムシ *Boehmeria nipononivea* Koidz. : 果実、側面は卵形、横断面も卵形。長さ・幅とも1mm。片方の側面に明瞭な稜があり、上部に明瞭な突起がある。多産。

ヒユ属 *Amaranthus* : 種子、側面は円形、横断面は楕円形、径約1mm。稀産。

ナデシコ科 *Caryophyllaceae* : 種子、円盤形で基部が裂ける。稀産。

カタバミ属 *Oxalis* : 種子、側面は一端が尖る卵形、扁平。稀産。

セリ科 *Umbelliferae* : 果実、側面は長楕円形。稀産。

ナス属 *Solanum* : 種子、側面は曲がった楕円形で扁平、長さ2×幅1.5mm。稀産。

カラスウリ近似種 *Trichosanthes* cf. *cucumeroides* (Ser.) Maxim. : 種子、側面は両側面に突起のある楕円形で、両端が丸い円筒を幅広く帯で挟む形。横断面は楕円形。長さ9×幅7.5×厚さ4mm。帯の部分がカラスウリより大きい。稀産。

モミジカラスウリ *Trichosanthes multiloba* Miq. : 種子、側面は基部が平坦で、ややいびつな楕円形、扁平。長さ10×幅6.5×厚さ2mm。稀産。

スズメウリ属 *Melothria* : 種子、側面は基部が突出した倒卵形、扁平で縁取りがある。平均の長さ5×幅3.5mm。整然と並んだ表皮細胞が目立つ。多産。

オキナワスズメウリ *Diplocyclos palmatus* (L.) C. Jeffrey : 種子、縫合線に沿って半分に割れる。側面は基部が長く伸びた楕円形。長さ7×幅4.5×厚さ3mm。縁は盛り上がり、縁に開まれ

た内部が大きく突出する。稀産。

ヒョウタン *Lagenaria siceraria*: 種子、側面は先端がややくびれた細長い逆三角形で頂部は波打つ。横断面はやや偏平な楕円形。長さ10×幅6×厚さ1.5mm。

ソクズ *Sambucus chinensis* Lindl.: 核、側面は基部がやや尖る楕円形、横断面は広三角形。平均の長さ3×幅2×厚さ1mm。表面には突起と隆線が目立ち、横方向が目立つ網目紋様を呈す。ニワトコより突起が大きく目立つ。多産。

キク科 Compositae: 果実、稀産。

これら以外にも不明な種実遺体群が少なくとも16分類群もあることが分かっている。これらについては保管はもとより継続的な検討を進めていきたい。

植生復元と人間の植物利用

曾畑土器包含層の縄文時代前期の植生・景観について考えてみよう。種実遺体群では圧倒的なシイ属の果実とともに、ブナ科のアカガシ亜属に属するオキナワウラジロガシ、ウラジロガシ、ウバメガシ、それにマテバシイ属の果実が多数検出された。種実遺体群の産出状況に呼応するように、花粉遺体群もシイ属-マテバシイ属花粉が優占するので、遺跡周辺にはシイ属か、シイ属にマテバシイ属を伴った照葉樹林（常緑広葉樹林）が成立していたと考えることができる。虫媒性のシイ属やマテバシイ属に対して主に風媒性のアカガシ亜属の花粉が目立たないことから、アカガシ亜属の高木層からなる照葉樹林は遺跡周辺には乏しく、遺跡から多少とも隔たった場所や内陸に分布していた可能性が高い。このような複数のブナ科植物群からなる照葉樹林は、現在の北谷町やその周辺では見ることができないものである。現在の沖縄島では、中部のくびれ以南の石灰岩分布域にはヤブニツケイ、シロダモ、タブノキなどのクスノキ科植物やホルトノキなどからなる森林植生が残存し、シイ属、マテバシイ属、アカガシ亜属からなる照葉樹林は以北の内陸部を中心とした地域に分布が限られているが、縄文時代では石灰岩分布域の南部にも照葉樹林が成立していたことを示す重要な事実である。

アダンの果実の多産から、アダン群集と呼ぶべき植生が付近に分布していたといえよう。アダン群集は琉球列島の海岸砂丘低木林として重要な位置を占めており、海岸砂丘のもっとも内陸側に成立する。砂丘を「アダンバヤマ」と呼ぶように、地理景観としても重要な存在である。縄文時代前期ではまだ砂丘の発達は見なかったと考えられるが、海岸線に沿ってアダン低木林が成立していたであろう。

その他の木本類ではクワ属、カラスザンショウ、アカメガシワ、ヤンバルアカメガシワ、ショウベンノキ、エゴノキ、チシャノキの果実や種子の産出が目立っている。これらは日当たりのよい場所で二次林を形成する植物群であり、遺跡周辺にこのような種構成をもった二次林的な植生が成立していたであろう。

草本類にはイバラモ属、ホタルイ属、ヒルムシロ属といった沼沢地性の植物群が見られるので、現在と同じようなウーチヌカーから流下した沼沢地が存在したことが示唆される。

一方、人間の植物資源利用に関して、「どんぐり塚」とパーキ内のどんぐり遺体群は食料としての利用を示すものとして重要である。海洋に取り巻かれた沖縄島の、しかも沿岸部においても、ア

ンブン供給源であるブナ科果実が積極的に利用されていたことを示すもので、タンパク供給源となる海棲・陸棲動物群だけでなくデンプン供給源も摂取していたことになる。宜野座村で発見された縄文時代後・晩期のバーキ内の大量のオキナフウラジロガシの利用（大松・辻、1999；辻、2000）とともに沖縄島における植物利用の重要な資料となる。伊礼原遺跡ではシイ属が目立つものの、オキナフウラジロガシやマテバシイ属もふつうに利用されていたことは「どんぐり塚」の内容から知ることができる。また、アダンの果実にも利用の痕跡の可能性が指摘されるが、直接的な利用の状況証拠が得られておらず、多産するチシャノキなどとあわせて、食料以外の利用も考慮して検討する必要があるといえよう。

引用文献

- ・大松しのぶ・辻誠一郎（1999）前原遺跡から産出した大型植物遺体群「前原遺跡」、223-241、宜野座村教育委員会
- ・大松志伸・辻誠一郎（2001）沖縄県北谷町伊礼原C遺跡の縄文時代前期相当期の大型植物遺体群「植生史研究」、第10巻、17-32、日本植生史学会
- ・辻誠一郎（2000）沖縄県前原遺跡から産出した縄文時代後期のオキナフウラジロガシ「植生史研究」、第8巻、1、日本植生史学会



シイ属果実



灰内のオキナワウラジロガシ果実



オキナワウラジロガシ果実



オキナワウラジロガシ殻斗



マテバシイ属果実



オガタマノキ種子



—アダン果実



クロヨナ果実



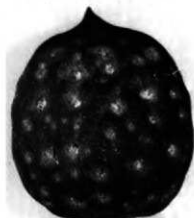
カラスザンショウ種子



アカメガシワ属種子



セندگان核



ヤンバルアカメガシワ種子



イスノキ果実



ショウベンノキ種子





ホルトノキ核



コバンモチ核



シマサルナシ種子



イイギリ種子



シマウリノキ核



エゴノキ種子



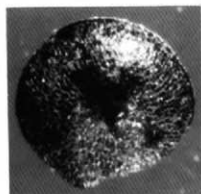
ハイノキ属核



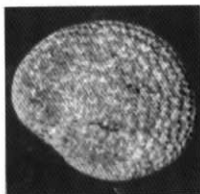
テシャノキ核



ムラサキシキブ属核



ヒユ属種子



ナス属種子



カラスウリ近似種種子



モミジカラスウリ種子



スズメウリ属種子



ウリ科種子



オキナワスズメウリ種子



ヒョウタン種子



ソクズ核

II 伊礼原遺跡から出土した木材の樹種

能 城 修 一 (森林総合研究所木材特性研究領域)

伊礼原C遺跡は沖縄県中頭郡北谷町桑江に位置し、琉球石灰岩からなる丘陵と現在の海に挟まれた古い海食段丘上の沖積低地に見いだされた。木製品と加工木、自然木は縄文時代前期の曾畑式土器を包含する第14層の最下部と、縄文時代中期の年代値が得られた第14層上部の礫層、平安時代の埋没林の層準であるXI層下部で見いだされた。第14層最下部の曾畑層と上部の礫層とは暗褐色シルト層を間に挟むもののほぼ重なっており、木材の出土層準の認定は出土時点での記録によるものの、両層準のものが混じっている可能性がある。ここでは1997年までに採取されてNoshiro (2000)に予備的に報告した木材に、それ以降に出土した木材を加えて、伊礼原C遺跡とその周辺からの出土木材の樹種を報告する。

樹種同定用のプレパラートの作製は、試料から片刃カミソリをもちいて横断面、接線断面、放射断面の切片を切り取り、ガムクロラル (抱水クロラル50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物) で封入して行った。各プレパラートにはOKI-番号を付して標本番号とした。標本は森林総合研究所木材標本庫に保管されている。資料176点中には42分類群が認められた。以下には各分類群の木材解剖学的な記載をおこない、代表的な標本の顕微鏡写真を載せて、同定の根拠を示す。

1. マキ属 *Podocarpus* マキ科 図版154: 1a-1c (枝・幹材, OKI-172)

枝・幹材: 仮道管と樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材。早材の仮道管の径は小さく比較的厚壁で、早材から晩材への移行は緩やかで晩材は量少ない。樹脂細胞は年輪内に散在し、樹脂は少なく、水平壁はほぼ平滑。分野壁孔は中型のヒノキ型で1分野に1~2個。

2. マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科

図版154: 2a-2c (枝・幹材, OKI-325)

枝・幹材: 垂直・水平樹脂道を持つ針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は量多い。樹脂道の分泌細胞は薄壁で部分的にしか残っていない。分野壁孔は大型の窓状で1分野に1~2個。放射仮道管の水平壁には鋸歯状の突起が著しい。

3. コウヨウザン属 *Cunninghamia* スギ科 図版154: 3a-3c (枝・幹材, OKI-120, 121)

枝・幹材: 仮道管と樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材。早材は薄壁で径の大きな仮道管からなり、早材から晩材への移行は緩やか。晩材は厚壁であるが内腔が明瞭にあいた仮道管からなり、量やや多い。樹脂細胞には黒褐色の樹脂が詰まり、早材の終わりから晩材に散在し、水平壁はほぼ平滑。放射組織には黒褐色の樹脂が多く、分野壁孔は大型のスギ型で1分野に2個。

4. ヒノキ・台湾ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科

図版154: 4a-4c (枝・幹材, OKI-166)

枝・幹材: 仮道管と樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材。早材は小径でやや厚壁の仮道管からなり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量少ない。樹脂細胞には黒褐色の樹脂が詰まり、早材の終わりから晩材に散在し、水平壁はごく低い突起をもつ。分野壁孔は中型のトウヒ型~ヒノキ型で1分野に2個。

5. ショウナンボク *Calocedrus macrolepis* Kurz ヒノキ科

図版154: 5a-5c (枝・幹材, OKI-143, 142)

枝・幹材: 仮道管と樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材。早材は薄壁で径の大きな仮道管からなり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量少ない。晩材の仮道管の内腔は明瞭で、年輪界はやや不明瞭。樹脂細胞には黒褐色の樹脂が詰まり、早材の後半から晩材に散在し、水平壁は明瞭な突起をもつ。放射組織には黒褐色の樹脂が多く、単壁孔が著しく末端壁は数珠状で、分野壁孔は中型のヒノキ型で1分野に2個。

6. オキナワジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima ex Yamazaki et Mashiba

ブナ科 図版154: 155: 6a-6c (枝・幹材, OKI-161), 7a (根材, OKI-216)

枝・幹材: やや大~中型で丸い孤立道管が数個ずつ塊をなして年輪のはじめに断続的に配列し、晩材では薄壁の小道管が火災状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな短接線状で著しい。放射組織は同性で、単列の小型のものと複合状の大型のものとからなる。

根材: やや大型~小型の孤立道管が年輪のはじめの塊から徐々に径を減じながら緩やかな火災状に配列する半環孔材。

7. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

図版155: 8a-8c (枝・幹材, OKI-315)

枝・幹材: 中型で厚壁の丸い孤立道管が放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔細胞は数細胞幅のいびつな帯状。道管は周囲状仮道管で囲まれる。放射組織は同性で、単列の小型のものと大型の集合状のものとからなる。道管と放射組織との壁孔は櫛状。

8. エノキ属 *Celtis* エノキ科 図版155: 9a-9c (枝・幹材, OKI-134)

枝・幹材: 中型~小型で丸い道管が単独あるいは2~3個複合して徐々に小型化しながら斜めに連なる傾向を見せて散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は周囲状~連合翼状。放射組織は異性で7細胞幅くらいとなり、不完全な鞘細胞をもつ。

9. イヌビワ類 *Ficus* cf. *erecta* Thunb. クワ科 図版155: 10a-10c (枝・幹材, OKI-136)

枝・幹材: やや大型で丸い道管が単独あるいは2~4個ほど放射方向に複合して疎らに散在する散孔材。年輪界は不明瞭。木部柔組織は数細胞幅の帯状で、規則正しく木繊維と入れ替わる。道管

の穿孔は単一。放射組織は上下端の1~2細胞が直立する異性で7細胞幅くらいとなる。

10. イタビカズラ類 *Ficus cf. nipponica* Franch. et Sav. クワ科

図版155:11a-11c (枝・幹材, OKI-296)

枝・幹材:大型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合し、小型の道管が数個放射方向に2~3個複合して、両者が密に散在する散孔材。年輪界は不明瞭。木部柔組織が基本組織の半分以上を占め、木繊維の束がその中に散在する。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の1~2細胞が直立する異性で4細胞幅くらい、背が高くしばしば1mmを越える。

11. クワ属 *Morus* クワ科 図版154・156:12a-12c (枝・幹材, OKI-174)

枝・幹材:大型で丸い道管が単独あるいは2~3個複合して年輪のはじめに1~2列配列し、晩材では小型で丸い道管が単独あるいは2~数個複合して散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状~翼状。放射組織は上下端の1細胞が直立する異性で7細胞幅位となり、直立細胞には菱形結晶をもつ。

12. タブノキ属 *Machilus* クスノキ科 図版156:13a-13c (枝・幹材, OKI-101)

枝・幹材:中型でやや角張った厚壁の道管が単独あるいは2~3個複合してやや密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は周囲状および散在状で、しばしば大型の油細胞をもつ。放射組織は異性で4細胞幅位となり、しばしば大型の油細胞をもつ。

根材:中型でやや角張った厚壁の道管が単独あるいは2~3個複合して疎ら散在する散孔材。周囲状の木部柔組織が目立つ。

13. ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版156:14a-14c (枝・幹材, OKI-106)

枝・幹材:小型で角張った孤立道管が年輪内で小型化しながら密に散在する散孔材。道管の穿孔は10数本ほどの横棒からなる階段状。木部柔組織は短接線状。放射組織は異性で背が低く3細胞幅となり、上下端にしばしば大型の結晶細胞をもつ。

14. モッコク *Ternstroemia gymnanthera* (Wright et Arn.) Beddome ツバキ科

図版156:15a-15c (枝・幹材, OKI-125)

枝・幹材:小型で角張った孤立道管が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30~40本ほどの横棒からなる階段状。木部柔組織は散在状~短接線状。放射組織は異性で背が高く3細胞幅になる。

15. イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科

図版156:16a-16c (枝・幹材, OKI-163)

枝・幹材:小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は10本ほどの横棒からなる階段状。木部柔組織は接線状~2細胞幅の帯状。放射組織は異性で2~3細胞幅。

16. シャリンバイ *Rhaphiolepis indica* (L.) Lindl. ex Ker バラ科

図版156・157:17a-17c (枝・幹材, OKI-287)

枝・幹材: 小型で丸い孤立道管が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は散在状。放射組織は異性で2細胞幅。

17. クロヨナ *Pongamia pinnata* (L.) Pierre マメ科 図版157:18a-18c (枝・幹材, OKI-149)

枝・幹材: 大型～中型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～4個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は帯状で、木繊維と同じくらいの量がある。放射組織は同性で2～4細胞幅。小型の放射組織と柔細胞ストランド、道管要素は層階状に配列する。

18. ハマセンダン *Tetradium glabrifolium* (Champ. ex Benth.) T.G.Hartley var. *glaucum* (Miq.) T.Yamaz. ミカン科 図版157:19a-19c (枝・幹材, OKI-281)

枝・幹材: 大型で丸い道管が年輪のはじめに単独あるいは2個複合して緩く集合し、晩材では小型で薄壁の道管が数個ずつかたまっただけに散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状～翼状。放射組織は同性で5細胞幅位となる。

19. サンショウ属 *Zanthoxylum* ミカン科 図版157:20a-20c (枝・幹材, OKI-140)

枝・幹材: 小型でやや厚壁の丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で3細胞幅くらい。

20. センダン *Melia azedarach* L. センダン科 図版157:21a-21c (枝・幹材, OKI-154)

枝・幹材: 大型で丸い道管がほぼ単独で年輪のはじめに3列ほど集合し、大径管のあいだや早材では小型で薄壁の道管が放射方向～接線方向にのびる塊をなして散在する環孔材。道管の穿孔は単一で小径管の内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状および散在状で、散在状のものは鎖状結晶をもつ。放射組織は同性にちかい異性で6細胞幅になる。

21. フシノハアワブキ *Meliosma arnottiana* (Wight) Walp. subsp. *oldhamii* (Maxim.)

H.Ohba アワブキ科 図版157:22a-22c (枝・幹材, OKI-314)

枝・幹材: 中型で薄壁の道管が単独あるいは2～数個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一および10本ほどの横棒からなる階段状。木部柔組織は周囲状。放射組織は異性で6細胞幅くらいとなり、背は高く3mmを越える。

22. モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 図版158:23a-23c (根材, OKI-185)

根材: 小型で角張った道管が単独あるいは放射方向に2～数個複合してやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は10本ほどの横棒からなる階段状。木部柔組織は短接線状で、しばしば多室の結晶細胞をもつ。放射組織は異性で5細胞幅くらい。

23. ニシキギ属 *Euonymus* ニシキギ科 図版158:24a-24c (枝・幹材, OKI-111)

枝・幹材:ごく小型の孤立道管が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

24. ショウベンノキ *Turpinia ternata* Nakai ミツバウツギ科

図版158:25a-25c (枝・幹材, OKI-294)

枝・幹材:やや小型で角張った孤立道管が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30~40本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で8細胞幅くらいとなり、多列部は幅広い紡錘形となり不完全な鞘細胞をもつ。

25. オオハマボウ *Hibiscus tiliaceus* L. アオイ科 図版158:26a-26c (枝・幹材, OKI-135)

枝・幹材:中型で丸い厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2~5個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は接線状で著しい。放射組織は上下端の1~2細胞が直立する異性で5細胞幅位となり、大型のものは鞘細胞をもつ。小型の放射組織と、道管要素、柔細胞ストランドは層階状に配列する。

26. サキシマスオウノキ *Heritiera littoralis* Dryand. アオギリ科

図版158:27a-27c (枝・幹材, OKI-263)、28a (根材, OKI-151)

枝・幹材:大型でやや厚壁の丸い道管が単独あるいは放射方向に2~4個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は周囲状および短接線状~接線状で著しい。放射組織は上下端が直立する異性で6細胞幅くらい。小型の放射組織と、道管要素、柔細胞ストランドは層階状に配列する。

根材:大型でやや厚壁の丸い道管が単独あるいは放射方向に2~4個複合して疎らに散在する散孔材。年輪界は不明瞭。

27. サガリバナ *Barringtonia racemosa* (L.) Spreng. サガリバナ科

図版159:29a-29c (枝・幹材, OKI-138)、30a (根材, OKI-133)

枝・幹材:やや小型でやや角張った道管が単独、あるいはときに2~3個複合して散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は短接線状。放射組織は異性で5細胞幅くらい、背は高く5mm以上となる。

根材:中型の道管が密に散在する散孔材。道管の穿孔は普通単一で、ときに10本ほどの横棒からなる階段状。

28. オヒルギ *Bruguiera gymnorrhiza* (L.) Lam. ヒルギ科

図版159:31a-31c (枝・幹材, OKI-285)

枝・幹材:小型で厚壁の丸い道管が単独あるいは放射方向に2~3個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は10本ほどの横棒からなる階段状。同乾燥後壁孔は階段状。放射組織は異性で4

細胞幅くらい。

29. ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai ウコギ科

図版159: 32a-32c (枝・幹材、OKI-112)

枝・幹材：年輪のはじめには大型で丸い孤立道管が断続的に1列に並び、その間や晩材では小型で薄壁の道管が2～数個ずつ複合して接線方向に配列する傾向をみせる環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の1細胞が直立する異性で4細胞幅くらい。

30. ギーマ *Vaccinium wrightii* A. Gray ツツジ科 図版159: 33a-33c (枝・幹材、OKI-137)

枝・幹材：小型で角張った孤立道管が均一に密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一および10本ほどの横棒からなる階段状で、道管の内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は短接線状。放射組織は異性で5細胞幅くらい、背は1.5mmほどになる。

31. モクタチバナ *Ardisia sieboldii* Miq. ヤブコウジ科 図版159: 34a-34c (枝・幹材、OKI-302)

枝・幹材：小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合してやや密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一および10本ほどの横棒からなる階段状。木部柔組織は随伴状。放射組織は異性で10細胞幅以上となり、背は高く5mm以上となる。

32. タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* Lev. ヤブコウジ科

図版160: 35a-35c (枝・幹材、OKI-291)

枝・幹材：小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合してやや密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は随伴状。放射組織は異性で10細胞幅以上となり、背は高く5mm以上となる。

33. イズセンリョウ属 *Maesa* ヤブコウジ科 図版160: 36a-36c (枝・幹材、OKI-118)

枝・幹材：小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～10個複合してやや密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で4細胞幅くらい、不規則な輪細胞をもつ。

34. ヤエヤマコクタン *Diospyros egbert-walkerii* Kosterm. カキノキ科

図版160: 37a-37c (枝・幹材、OKI-275)

枝・幹材：小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～4個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は接線状で、しばしば菱形結晶をもつ。放射組織は多列部と単列部の幅が等しい異性で2～3細胞幅。

35. シマトネリコ *Fraxinus griffithii* C.B. Clarke モクセイ科

図版160: 38a-38c (枝・幹材、OKI-181), 39a (根材、OKI-177)

枝・幹材：中型～小型でやや厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して成長輪内で

小型化しながらやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は周囲状、短接線状、生長量輪界状。放射組織は上下端の1～2細胞が直立する異性で2細胞幅。

根材：やや小型～小型でやや厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材。

36. クチナシ *Gardenia jasminoides* Ellis アカネ科 図版160:40a-40c (枝・幹材, OKI-312)

枝・幹材：小型で丸い孤立道管がほぼ単独でやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で3細胞幅くらい、離接放射柔細胞壁が目立つ。

37. ミサオノキ *Aidia cochinchinensis* Lour. アカネ科 図版161:41a-41c (枝・幹材, OKI-198)

枝・幹材：ごく小型で角張った孤立道管が疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は散在状～短接線状。放射組織は単列部が多列部よりも長い異性で3細胞幅、離接放射柔細胞壁が目立つ。

38. チシャノキ類 *Ehretia cf. ovalifolia* Hassk. ムラサキ科

図版161:42a-42c (枝・幹材, OKI-132), 43a (根材, OKI-108)

枝・幹材：大型で丸い道管が単独あるいは2～3個複合して年輪のはじめに2列ほど並び、晩材では中～小型で丸い道管が単独あるいは2～3個複合して不規則に散在する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状で著しい。放射組織は同性で4細胞幅くらい。

根材：中～小型で丸い道管が単独あるいは2～3個複合して不規則に散在する散孔材。木部柔組織は周囲状およびいびつな不規則な接線状～帯状。

39. ムラサキシキブ属 *Callicarpa* クマツヅラ科 図版161:44a-44c (枝・幹材, OKI-122)

枝・幹材：小型で丸いやや厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で3細胞幅くらい。

40. 半環孔材A *Semi-ring porous wood A* 図版161:45a-45c (枝・幹材, OKI-298)

枝・幹材：やや大型でやや厚壁の丸い道管が年輪のはじめに単独あるいは2～3個複合して緩く集合し、晩材では徐々に小型化した道管が単独あるいは2～数個かたまって疎らに散在する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性4細胞幅くらい。

41. 広葉樹根材A *Dicotyledon rootwood* 図版161:46a-46b (根材, OKI-193)

大型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で8細胞幅くらい、不規則な鞘細胞をもつ。

42. タケ亜科 Subfam. Bambusoideae イネ科 図版161:47a (OKI-107)

維管束の中心には1対の小型のまるい管孔が接線方向に並び、それと直行して内側に原生木部間

隙が、外側に篩部がある。これらを取り囲んで厚膜組織が内側および外側に楕円形の塊をなして維管束が形成される。こうした維管束が互いに接することなく散在する。基本組織の柔細胞も木化しており厚膜である。

同定できた木材全174点中には42分類群が見いだされた。このうち5分類群は針葉樹で、36分類群が双子葉植物、1分類群が単子葉植物である。針葉樹には琉球列島に生育しない分類群が含まれており、コウヨウザン属とショウナンボクは現在、台湾と中国にしか生育せず、またヒノキ・タイワンヒノキは屋久島以北の九州、四国、本州と台湾にしか生育しない。この3分類群と同定に到っていない2分類群を除くと、それ以外の樹種はいずれも現在、琉球列島に生育しているものである。

層序ごとの違いは明瞭ではなく、第14層下部から出土した分類群と第11層の分類群はほぼ共通しており、両者に植物相や生育環境で大きな違いは認められない。特徴的なのは、サキシマスウノキやオヒルギ、サガリバナといったマングローブの中から周縁に生育する樹種の存在で、サキシマスウノキとサガリバナは根材を伴っていた。一方、オキナワジイやタブノキ、シマトネリコ、チシャノキといった陸上に生育する樹種にも根材が見いだされていて、ほかにも様々な陸上に生育する樹種が共伴していることから考えると、丘陵の縁でマングローブの縁でもあるような生育環境が成立していた想定される。

一方、種実類の組成は木材とことになっており、アダンを除くとマングローブに生育するものではなく、淡水の水域に生育する分類群が見いだされている (大松・辻, 2001)。また樹木でもより二次林に多い分類群が見いだされている。木材と種実で見いだされた分類群を総合して考えると、丘陵上の林とマングローブのほか淡水の水域と、より攪乱された植生の存在が想定され、多様な植生が当遺跡の周辺に存在していたようである。

琉球列島に現在生育していない樹種の存在については、海流による運搬と人為による運搬の二つが考えられる。コウヨウザン属とヒノキ・タイワンヒノキは、台湾では、1300~2800mの温帯から亜高山帯に生育しており、とショウナンボクは300~1900mの亜熱帯から温帯に生育している (Li and Keng, 1994)。この3分類群がいずれも第14層下部から出土したこと考えると、ほぼ同時に一緒にもたらされた可能性が高い。これがどのように運搬されてきたのかは、氏家 (1998) や Ujiié & Ujiié (1999) が議論しているような最終水期以降における琉球-台湾陸橋の消滅と黒潮変動や、考古遺物から見た人の動きとの関連で今後、明らかにするべき問題である。

引用文献

- Li, H.-L. & Keng, H. 1994. Taxodiaceae, Cupressaceae. "Flora of Taiwan. 2nd ed. Vol. 1" (Editorial Committee of the Flora of Taiwan Second Edition, ed.), 582-595. Editorial Committee of the Flora of Taiwan Second Edition, Taipei.
- Noshiro, S. 2000. Wooden artifacts and natural woods recovered from the Ireibaru C Site, Okinawa, of the Early Jomon Period and their implication on overseas transport. *Japanese Journal of Historical Botany* 9: 29-42.
- 大松志伸・辻 誠一郎. 2001. 沖縄県北谷町伊礼原C 遺跡の縄文時代前期相当期の大型植物遺体群. 植生史研究

10: 17-32.

氏家 宏. 1998. 陸橋と黒潮変動: 沖縄トラフからの発信. 第四紀研究37: 243-249.

Ujiié, H. & Ujiié, Y. 1999. Late Quaternary course changes of the Kuroshio Current in the Ryukyu Arc region, northwestern Pacific Ocean. *Marine Micropaleontology* 37: 23-40.

表24 伊礼原遺跡(低温地区)等から出土した木材の一覽①

OKI-	No.	標名	SR	製品群	製品名	製品番号	木取り	遺跡名	W No.	Grid	層序	集計層序	備考
OKI-	101	タブノキ属	S	板	板目板			伊礼原C遺跡		No.143			XIV層下部
OKI-	102	タブノキ属	S	板	板目板			伊礼原C遺跡		No.143			XIV層下部
OKI-	103	タブノキ属	S	板	板目板		板目	伊礼原C遺跡		No.143			XIV層下部
OKI-	104	タブノキ属	S	板	板目板			伊礼原C遺跡		No.143			XIV層下部
OKI-	105	ニシキギ属	S	継	丸木継			伊礼原C遺跡		No.143			XIV層下部
OKI-	106	タブノキ属	S	板	板目板			伊礼原C遺跡		No.143			XIV層下部
OKI-	107	タケ藪科	?	バーキ	バーキ			伊礼原C遺跡		No.143			XIV層下部
OKI-	108	チシャノキ属	R	木片	材片	径5cm		伊礼原C遺跡	WN-1009	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	109	サキシマスオウノキ	R	自然木	板材			伊礼原C遺跡	WN-1009	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	110	サガリハナ	R	自然木	板材	径3.5cm		伊礼原C遺跡	WN-1009	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	111	ニシキギ属	S	自然木	丸木	径1cm		伊礼原C遺跡	WN-1009	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	112	ハリギリ	S	自然木	丸木	径5cm		伊礼原C遺跡	WN-1009	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	113	チシャノキ属	S	自然木	丸木	径5cm		伊礼原C遺跡	WN-1009	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	114	タブノキ属	S	板	板目板片			伊礼原C遺跡	WN-1009	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	115	チシャノキ属	S	自然木	丸木	径1.5cm		伊礼原C遺跡	WN-1000	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	116	オホハマゴウ	S	自然木	丸木	径1.5cm		伊礼原C遺跡	WN-1000	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	117	センダン	S	板	板目板片			伊礼原C遺跡	WN-1006	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	118	イズセンリョウ属	S	自然木	丸木	径4cm		伊礼原C遺跡	WN-1005	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	119	サガリハナ	R	自然木	板材	径3cm		伊礼原C遺跡	WN-1005	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	120	コウヨウゼン属	S	板	板目板片			伊礼原C遺跡	WN-1005	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	121	コウヨウゼン属	S	板	板目板片			伊礼原C遺跡	WN-1005	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	122	ムササキシキギ属	S	自然木	丸木	径1.5cm		伊礼原C遺跡	WN-1002	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	123	シマトネリコ	R	自然木	丸木	径5cm		伊礼原C遺跡	WN-1002	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	124	センダン	S	板	板目薄板			伊礼原C遺跡	WN-1001	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	125	モッコク	S	板	板目薄板			伊礼原C遺跡	WN-1001	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	126	モッコク	S	板	板目薄板			伊礼原C遺跡	WN-1001	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	127	センダン	S	板	板目薄板			伊礼原C遺跡	WN-1001	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	128	サガリハナ	R	自然木	丸木	径3cm		伊礼原C遺跡	WN-1007	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	129	センダン	S	板	板目薄板			伊礼原C遺跡	WN-1007	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	130	イヌビロ組	S	自然木	丸木	径1cm		伊礼原C遺跡	WN-1007	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	131	榎皮	?	板	板目薄板			伊礼原C遺跡	WN-1007	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	132	チシマノキ属	S	自然木	丸木	径1cm		伊礼原C遺跡	WN-1007	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	133	サガリハナ	R	自然木	丸木	径2.5cm		伊礼原C遺跡	WN-1007	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	134	ニノキ属	S	自然木	丸木	径2cm		伊礼原C遺跡	WN-1007	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	135	オホハマゴウ	S	自然木	丸木	径4cm		伊礼原C遺跡	WN-1008	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	136	イヌビロ組	S	自然木	丸木	径2.5cm		伊礼原C遺跡	WN-1008	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	137	ギョウマ	S	自然木	丸木	径4.5cm		伊礼原C遺跡	WN-1008	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	138	サガリハナ	S	自然木	丸木	径5.5cm		伊礼原C遺跡	WN-1008	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	139	サキシマスオウノキ	R	自然木	丸木	径6cm		伊礼原C遺跡	WN-618-2	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	140	サンショウ属	S	自然木	丸木	径5cm		伊礼原C遺跡	WN-618-2	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	141	サキシマスオウノキ	R	自然木	丸木	径2cm		伊礼原C遺跡	WN-618-2	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	142	シヨウナンゴク	S	木片	材片			伊礼原C遺跡	WN-618-2	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	143	シヨウナンゴク	S	木片	木片			伊礼原C遺跡	WN-618-2	No.143	普通層		XIV層下部
OKI-	144	イヌビロ組	S	自然木	丸木	径2.5cm		伊礼原C遺跡	WN-618-2	No.143	普通層		XIV層下部

表24 伊礼原遺跡(低温地区)等から出土した木材の一覧②

OKI	No.	樹種名	SR	製品群	製品名	製品備考	木取り	遺跡名	W No	Grid	層序	発出層序	備考
OKI	145	ニシキヤ属	S	自然木	丸木	径1cm		伊礼原C遺跡	WN-618-2	No.145	發出層	XIV層下部	
OKI	146	サキシマスオウノキ	R	自然木	丸木	径6.5cm		伊礼原C遺跡	WN-1011	No.146	發出層	XIV層下部	
OKI	147	サキシマスオウノキ	R	自然木	丸木	径7cm		伊礼原C遺跡	WN-1011	No.147	發出層	XIV層下部	
OKI	148	サザリハナ	R	自然木	丸木	径5cm		伊礼原C遺跡	WN-1011	No.148	發出層	XIV層下部	
OKI	149	クロコナ	S	自然木	丸木	径4cm		伊礼原C遺跡	WN-1011	No.149	發出層	XIV層下部	
OKI	150	サザリハナ	R	自然木	丸木	径4.5cm		伊礼原C遺跡	WN-1011	No.149	發出層	XIV層下部	
OKI	151	サキシマスオウノキ	R	自然木	丸木	径5cm		伊礼原C遺跡	WN-1011	No.149	發出層	XIV層下部	
OKI	152	タブノキ属	S	新材	角材片			伊礼原C遺跡	WN-1014	No.149	發出層	XIV層下部	
OKI	153	タブノキ属	S	板	板目板片			伊礼原C遺跡	WN-1014	No.149	發出層	XIV層下部	
OKI	154	センダン	S	板	板目薄板			伊礼原C遺跡	WN-1014	No.149	發出層	XIV層下部	
OKI	155	シマトネリコ	S	板	板目板片			伊礼原C遺跡	WN-1014	No.149	發出層	XIV層下部	
OKI	156	サザリハナ	SR	新材	新材			伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.27
OKI	157	サザリハナ	SR	自然木	丸木破片	断面径1cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.27
OKI	158	ヒノキ・タイワンヒノキ	S	板	板目板片			伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.27
OKI	159	センダン	S	木片	木片			伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.27
OKI	160	オキナワジイ	S	自然木	丸木	径7cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.04.01
OKI	161	オキナワジイ	S	自然木	丸木	径5cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.04.01
OKI	162	オキハマダウ	S	自然木	丸木	径4cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.04.01
OKI	163	イスノキ	S	自然木	丸木	径1cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.04.01
OKI	164	オキハマダウ	S	自然木	丸木	径3.5cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.04.01
OKI	165	サザリハナ	R	新材	角材片			伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.28
OKI	166	ヒノキ・タイワンヒノキ	S	新材	新材			伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.28
OKI	167	サザリハナ	R	自然木	丸木	径5cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.04.01
OKI	168	オキハマダウ	S	自然木	丸木	径3cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.04.01
OKI	169	オキナワジイ	S	木片	材片			伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.28
OKI	170	シマトネリコ	SR	木片	材片			伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.28
OKI	171	チシャノキ属	S	自然木	丸木	径4cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.27
OKI	172	マナ属	S	木片	材片			伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.04.08
OKI	173	チシャノキ属	S	自然木	丸木	径1cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.04.08
OKI	174	クツ属	S	板	板目薄板			伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.04.08
OKI	175	イヌビロ属	S	自然木	丸木	径5cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.04.24
OKI	176	サザリハナ	R	新材	半新材		芯持ち	伊礼原C遺跡	WN-1013	No.149	發出層	XIV層下部	97.03.25
OKI	177	シマトネリコ	R	自然木 (自然木)	丸木 (自然木)	径2cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18
OKI	178	シマトネリコ	SR	自然木 (自然木)	丸木 (自然木)	径5cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18
OKI	179	シマトネリコ	S	自然木 (自然木)	丸木 (自然木)	径5cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18
OKI	180	サザリハナ	R	自然木 (自然木)	丸木 (自然木)	径5cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18
OKI	181	シマトネリコ	S	木片	破片	径3cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18
OKI	182	シマトネリコ	S	自然木 (自然木)	丸木 (自然木)	径2.5cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18
OKI	183	モチノキ属	R	自然木 (自然木)	丸木 (自然木)	径3cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18
OKI	184	タブノキ属	S	自然木 (自然木)	丸木 (自然木)	径5cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18
OKI	185	モチノキ属	R	自然木 (自然木)	丸木 (自然木)	径5cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18
OKI	186	シマトネリコ	S	自然木 (自然木)	丸木 (自然木)	径5cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18
OKI	187	シマトネリコ	S	自然木 (自然木)	丸木 (自然木)	径4cm		伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18
OKI	188	タブノキ属	R	自然木	新材			伊礼原C遺跡		No.149	發出層	XIV層下部	97.03.18

表24 伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した木材の一覧③

OKI	No.	樹種名	SR	製品部	製品名	製品備考	木取り	遺跡名	W No	Grid	層序	発出層序	番号
OKI	189	イヌビロ楡		自然木	丸太 (自然木)			キャンプ池江		No. 64			96.03.29
OKI	190	サガリバチ	R	自然木	丸太 (自然木)	径13cm		キャンプ池江		No. 58			96.03.29
OKI	191	クワ属	S	木片	木片			キャンプ池江		No. 122			96.03.27
OKI	192	クワ属	S	自然木	丸太 (自然木)	径13cm		キャンプ池江		No. 31			96.02.28
OKI	193	榎材A	R	自然木	丸太 (自然木)	径5cm		伊礼原		No. 36			97.10.24
OKI	194	クロコナ	S	自然木	丸太 (自然木)	径5cm		伊礼原		No. 66			97.10.24
OKI	195	オキナワジイ	S	木片	木片			伊礼原		No. 36			97.10.24
OKI	196	クロコナ	S	自然木	丸太 (自然木)	径5cm		伊礼原		No. 36			97.10.24
OKI	197	オキナワジイ	S	木片	材片			伊礼原		No. 66			97.10.24
OKI	198	ミサオノキ	S	丸木部	丸木部	光澤剥り		伊礼原		No. 54-A			97.10.24
OKI	199	ツバキ属	S	木片	材片			伊礼原		No. 64-A			97.10.24
OKI	200	オキナワジイ	S	自然木	丸太	径2.5cm		伊礼原		No. 54-A			97.10.24
OKI	201	サガリバチ	S	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	1	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	202	シマトネリコ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	2	No.147	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	210	イヌビロ楡	S	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	8	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	211	サキシマスオウノキ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	4	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	212	サガリバチ	S	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	5	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	213	サキシマスオウノキ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	6	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	214	サキシマスオウノキ	SR	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	7	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	215	イヌビロ楡	S	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	8	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	216	オキナワジイ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	9	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	217	オキナワジイ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	10	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	218	サキシマスオウノキ	S	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	11	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	219	シマトネリコ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	12	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	220	シマトネリコ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	13	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	221	シマトネリコ	SR	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	14	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	222	サキシマスオウノキ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	15	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	223	サキシマスオウノキ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	16	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	224	シマトネリコ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	17	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	225	サキシマスオウノキ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	18	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	226	シマトネリコ	S	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	19	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	227	サキシマスオウノキ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	20	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	228	シマトネリコ	S	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	21	No.143	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	229	サガリバチ	SR	自然木	自然木			伊礼原C遺跡	22	北トレンチ	埋没林	XI層	2000.3.23採
OKI	275	ギユウマツカタン	S	葉	葉			伊礼原C遺跡		No.143	2000 B.C.	XIII層	2001.1.10 東門跡
OKI	276	ショウナンゴク	S	香部	榎?			伊礼原C遺跡		No.143の南段	埋没中(中層)	XIV層埋没	2001.1.10 東門跡
OKI	277	タイムナタバチ	S	杖	丸木杖	煎取り		伊礼原C遺跡		バーキ周辺		XIV層下部	2003.3.11採
OKI	278	ナチナシ	S	板	板目板	芯持ち		伊礼原C遺跡		バーキ周辺		XIV層下部	2003.3.11採
OKI	279	ナチナシ	?	バーキ	バーキ			伊礼原C遺跡		バーキ周辺		XIV層下部	2003.3.11採
OKI	280	ハマセンダン	S	板	漆板状	煎目		伊礼原C遺跡		バーキ周辺		XIV層下部	2003.3.11採
OKI	281	ハマセンダン	S	板	漆板状	煎目		伊礼原C遺跡		バーキ周辺		XIV層下部	2003.3.11採
OKI	282	ショウベンノキ	S	加工木	丸木	光澤剥り		伊礼原C遺跡		バーキ周辺		XIV層下部	2003.3.11採
OKI	283	オヒルギ	S	薪材	薪材	芯持ち		伊礼原C遺跡		バーキ周辺		XIV層下部	2003.3.11採
OKI	284	イヌビロ楡	S	自然木	自然木	煎取り	丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺		XIV層下部	2003.3.11採

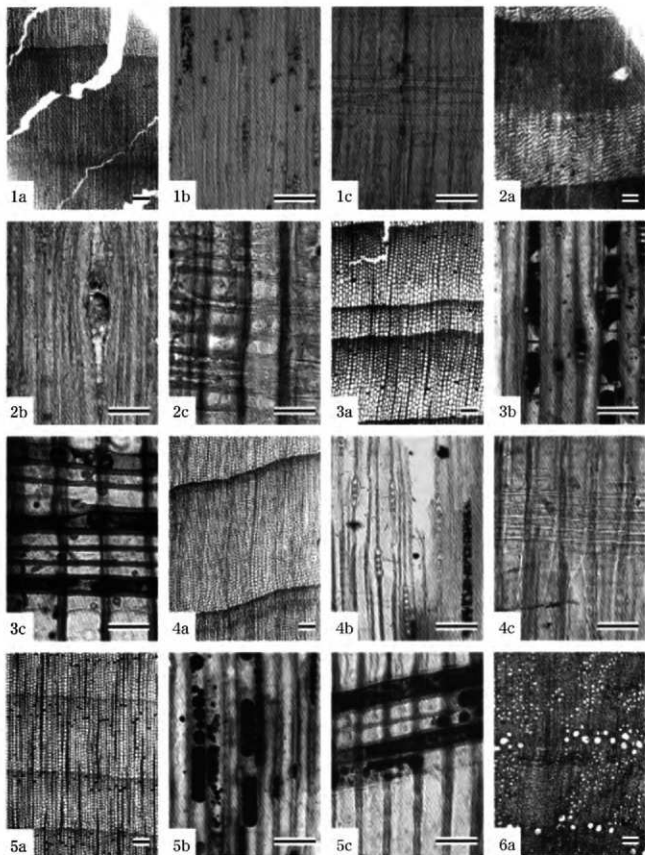
表24 伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した木材の一覧④

OKI-No.	標識名	SR	製品群	製品名	製品備考	木皮有	産地名	W No	Grid	層位	発出層位	備考
OKI-285	オヒルギ	S	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-286	サガリハナ	R	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-287	シャリンバイ	S	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-288	サガリハナ	R	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-289	チヤマノキ類	S	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-290	サガリハナ	R	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-291	タイムミタナハナ	S	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-292	サガリハナ	R	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-293	ネネナワジ	S	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-294	ショウベンノキ	S	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-295	オオハマボウ	S	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-296	イタヒカズラ類	S	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-297	サガリハナ	R	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-298	甲斐丸材A	S	新材	新材	先染黒け		伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-299	サガリハナ	R	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-300	イヌビワ類	S	木片	材片			伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-301	ショウベンノキ	S	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-302	モクダチハナ	S	自然木	自然木	皮付き	丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-303	サガリハナ	R	自然木	自然木	皮付き	丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-304	サガリハナ	R	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-305	ショウベンノキ	S	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-306	サガリハナ	R	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-307	サガリハナ	R	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-308	オヒルギ	S	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-309	イヌビワ類	S	自然木	自然木	削片	丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-310	サガリハナ	R	自然木	自然木		丸木	伊礼原C遺跡		バーキ周辺	XIV層下部	3003.3.119F	
OKI-311	マキ属	S	棒	編出し棒	芯なし	みかん類	伊礼原C遺跡		東トレンチ	雑種(中・外層)	XIV層雑種	3002.3.277F
OKI-312	タチナシ	S	石碎柄	石碎柄			伊礼原C遺跡		中央区サブトレンチ	炭粉雑種	XIV層雑種	3002.3.277F
OKI-313	ショウベンノキ	S	自然木	丸木	先染黒け		伊礼原C遺跡		東区サブトレンチ	炭粉雑種	XIV層雑種	3002.3.277F
OKI-314	フノノハアワナキ	S	自然木	丸木	先染黒け		伊礼原C遺跡		東区南壁	樹皮屑	XI層	3002.3.277F
OKI-315	フナノハアワナキ 炭種	S	新材	みかん類	削片	みかん類	伊礼原C遺跡		東区サブトレンチ	炭粉雑種	XIV層雑種	3002.3.277F
OKI-316	サガリハナ	R	自然木	自然木			伊礼原C遺跡		東区サブトレンチ	炭粉雑種	XIV層雑種	3002.3.277F
OKI-317	ショウナンボク	S	自然木	自然木			伊礼原C遺跡		東区サブトレンチ	炭粉雑種	XIV層雑種	3002.3.277F
OKI-318	イヌノキ	S	棒	丸木類			伊礼原C遺跡		東区サブトレンチ	炭粉雑種	XIV層雑種	3002.3.277F
OKI-319	オキシマスユノキ	S	板	削片板		板目	伊礼原C遺跡		中央区東南隅	削代	XIV層下部	3002.3.277F
OKI-320	ツバキ属	S	木片	木片		板目	伊礼原C遺跡		中央区東南隅	削代	XIV層下部	3002.3.277F
OKI-321	オキナツヅイ	S	板	板目削片		板目	伊礼原C遺跡		中央区東側	XI層	XI層	3002.3.277F
OKI-322	オキナツヅイ	S	板	板目削片		板目	伊礼原C遺跡		中央区東側	XI層	XI層	3002.3.277F
OKI-323	X	S	自然木	丸木			伊礼原C遺跡		伊礼原C遺跡	管型削 シイ 類(丸木類)	XIV層下部	3002.3.277F
OKI-324	ショウナンボク	S	板	板目削片		板目	伊礼原C遺跡		中央区東側	XI層	XI層	3002.3.277F
OKI-325	マツ属雑種(東区東側)	S	木片	木片	先染黒け		伊礼原C遺跡		中央区東側	XI層	XI層	3002.3.277F
OKI-326	ショウベンノキ	S	自然木	丸木			伊礼原C遺跡		中央区東南隅	削代の棒	XIV層雑種	3002.3.277F
OKI-327	イタヒカズラ類	S	自然木	丸木	先染黒け		伊礼原C遺跡		南区	雑種(上部)XIV層	XI層	3002.3.277F
OKI-328	ショウベンノキ	S	自然木	丸木			伊礼原C遺跡		中央区東側	管型削 シイ 類(丸木類)	XIV層下部	3002.3.277F

表25 伊札原遺跡（低湿地区）ほかから出土した木製品と自然木の樹種

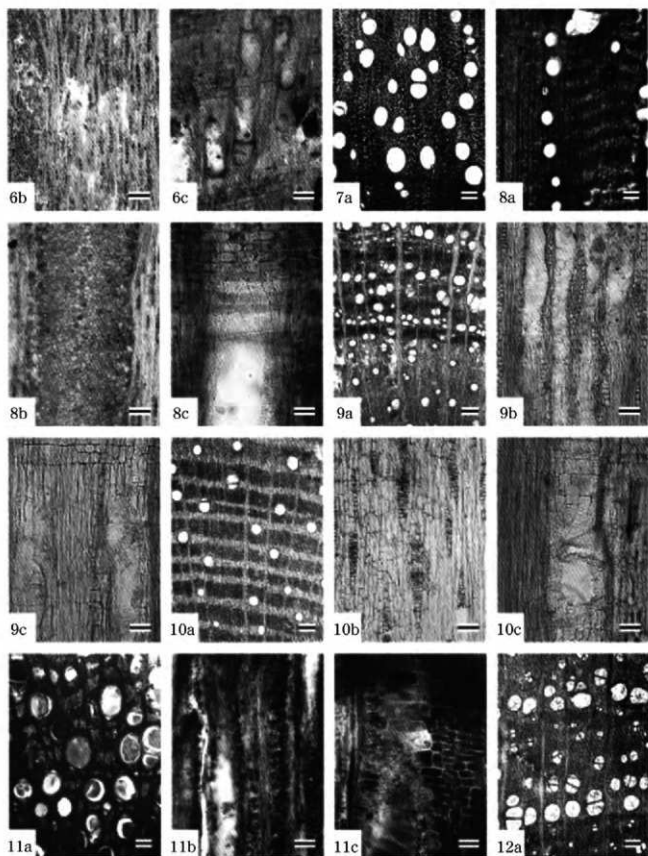
樹種名	SR	伊札原C遺跡														伊札原		キヤンボウ江					
		XIV層下部					XIV層上部					XIII層		XII層		木片	木片	木片	木片				
		板	棒	杖	割材	加工木	パキ	自然木	木片	器	釘	柄	柄	木片	木片								
マキ属	S							1		1													
マツ属残穂管束系属	S															1							
コウヨクザン属	S	2																					
ビノキ・タイワンビノキ	S	1		1																			
ショウナンゴク	S						2	1			1				1								
オキナワジ	S						3	1							2		1	1					
	R																						
コナラ属アカガシ亜属	S										1												
エノキ属	S						1																
イスビツ類	S						6	1							2				1				
イタビカズラ類	S						1								1								
クワ属	S	1																	1				
タブノキ属	S	6		1			1												1				
	R						1																
ツバキ属	S	1						1											1				
モシコク	S	2																					
イスノキ	S						1				1												
シャリンバイ	S						1																
クロコナ	S						1										2						
ハマセンダン	S	2																					
サンショウ属	S						1																
センダン	S	5						1															
フシノハアワブキ	S														1								
モチノキ属	R						2																
ニシキ属	S		1																				
ショウベンノキ	S				1		4					2											
オオハマボウ	S						6												1				
サキシマスオウノホ	S	1													1								
	SR														1								
	R						6								6								
ウガリハチ	S						1								2								
	SR			1			1								1								
	R			2			19				1								1				
オヒルギ	S			1			2																
ハリギリ	S						1																
ギョーマ	S						1																
モクダチハチ	S						1																
タイミンタチハチ	S						1																
イズセンリョウ属	S						1																
ヤエヤマコクタン	S																						
シマトネリコ	S	1					4	1							2								
	SR						1	1							1								
	R						2								4								
クナナシ	S	1									1												
ミヤオノキ	S																		1				
チシヤノキ類	S						6																
	R							1															
ムラサキシキブ属	S						1																
手堀孔材A	S				1																		
広葉樹類材A	R																		1				
タケ類材	?						2																
総計		23	1	1	7	1	2	79	10	1	1	2	1	4	1	3	24	1	1	4	3	8	1

S: 杖・幹材, SR: 根幹材, R: 根材



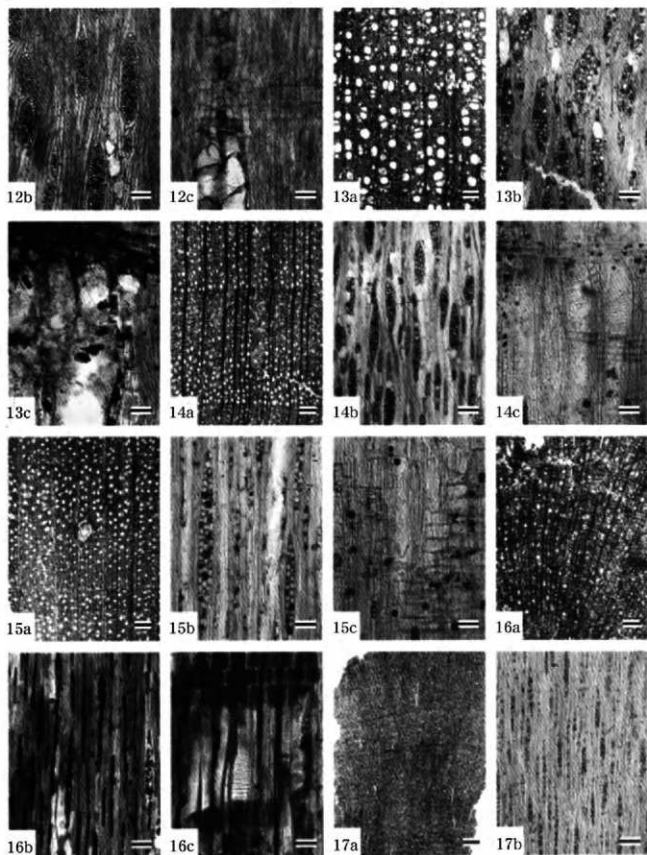
図版154 伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した木材の顕微鏡写真(1)

1a-1c: マキ属(枝・幹材, OKI-172), 2a-2c: マツ属複雑管束重属(枝・幹材, OKI-325), 3a-3c: コウヨウザン属(枝・幹材, OKI-120, 121), 4a-4c: ヒノキ・タイワンヒノキ(枝・幹材, OKI-166), 5a-5c: ショウナンボク(枝・幹材, OKI-143, 142), 6a: オキナワジイ(枝・幹材, OKI-161). a: 横断面(スケール=200 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=50 μ m).



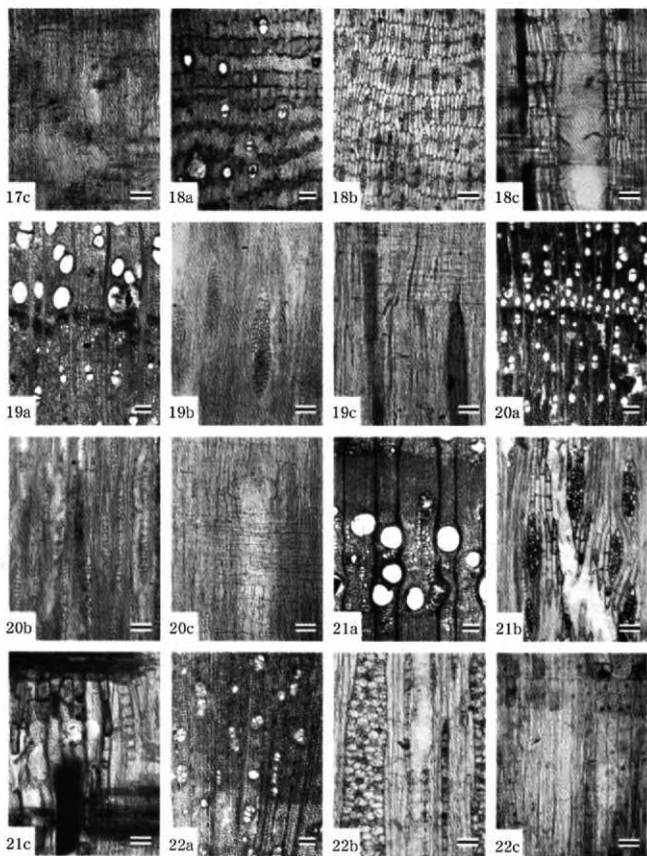
図版155 伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した木材の顕微鏡写真(2)

6b-6c: オキナワジイ(枝・幹材, OKI-161), 7a: オキナワジイ(根材, OKI-216), 8a-8c: コナラ属アカガシ亜属(枝・幹材, OKI-315), 9a-9c: エノキ属(枝・幹材, OKI-134), 10a-10c: イヌビワ類(枝・幹材, OKI-136), 11a-11c: イタビカズラ類(枝・幹材, OKI-296), 12a: クワ属(枝・幹材, OKI-174), a: 横断面(スケール=200 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=50 μ m).



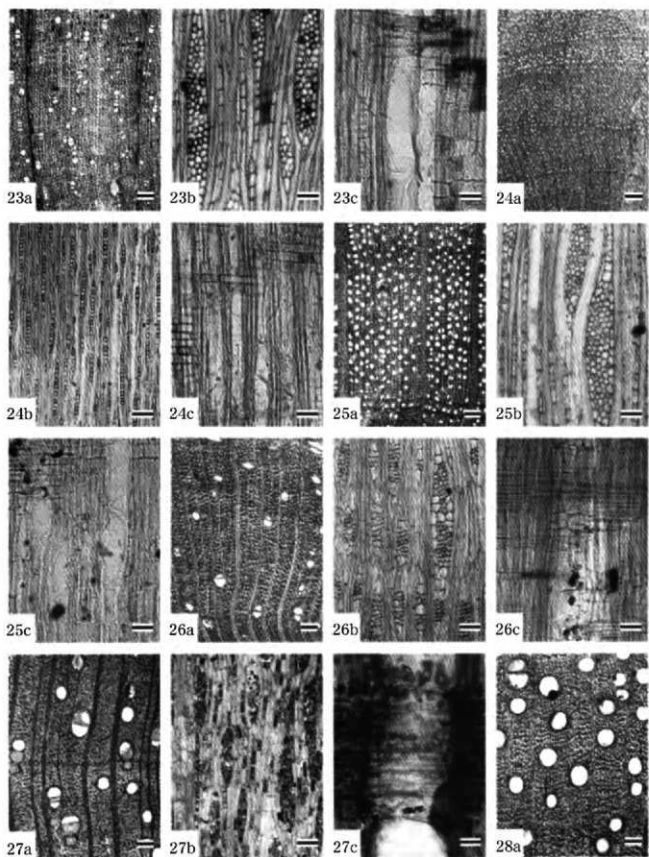
図版156 伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した木材の顕微鏡写真(3)

12b-12c: クワ属(枝・幹材, OKI-174), 13a-13c: タブノキ属(枝・幹材, OKI-101), 14a-14c: ツバキ属(枝・幹材, OKI-106), 15a-15c: モッコク(枝・幹材, OKI-125), 16a-16c: イスノキ(枝・幹材, OKI-163), 17a-17b: シャリンバイ(枝・幹材, OKI-287). a: 横断面(スケール=200 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=50 μ m).



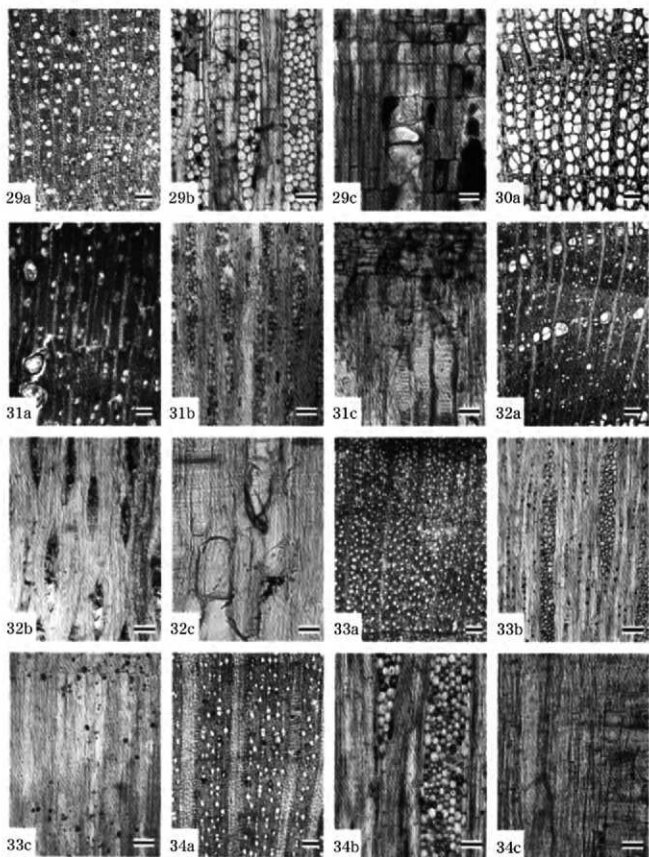
図版 157 伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した木材の顕微鏡写真(4)

17c: シヤリンバイ(枝・幹材, OKI-287), 18a-18c: クロヨナ(枝・幹材, OKI-149), 19a-19c: ハマセンダン(枝・幹材, OKI-281), 20a-20c: サンショウ属(枝・幹材, OKI-140), 21a-21c: センダン(枝・幹材, OKI-154), 22a-22c: フシノハアワブキ(枝・幹材, OKI-314). a: 横断面(スケール=200 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=50 μ m).



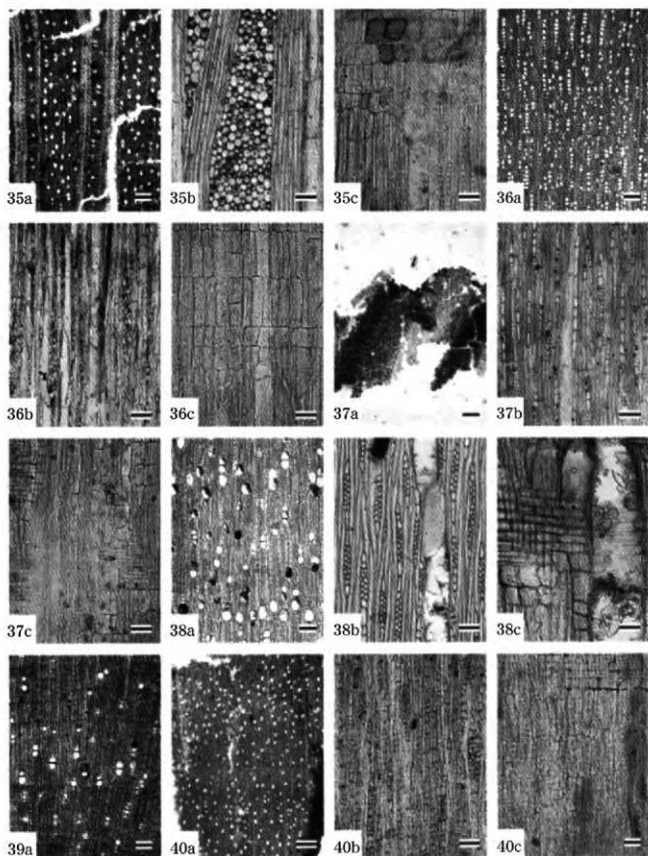
図版 158 伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した木材の顕微鏡写真(5)

23a-23c:モチノキ属(根材, OKI-185), 24a-24c:ニシキギ属(枝・幹材, OKI-111), 25a-25c:ショウベンノキ(枝・幹材, OKI-294), 26a-26c:オオハマボウ(枝・幹材, OKI-135), 27a-27c:サキシマスオウノキ(枝・幹材, OKI-263), 28a:サキシマスオウノキ(根材, OKI-151), a:横断面(スケール=200 μ m), b:接線断面(スケール=100 μ m), c:放射断面(スケール=50 μ m).



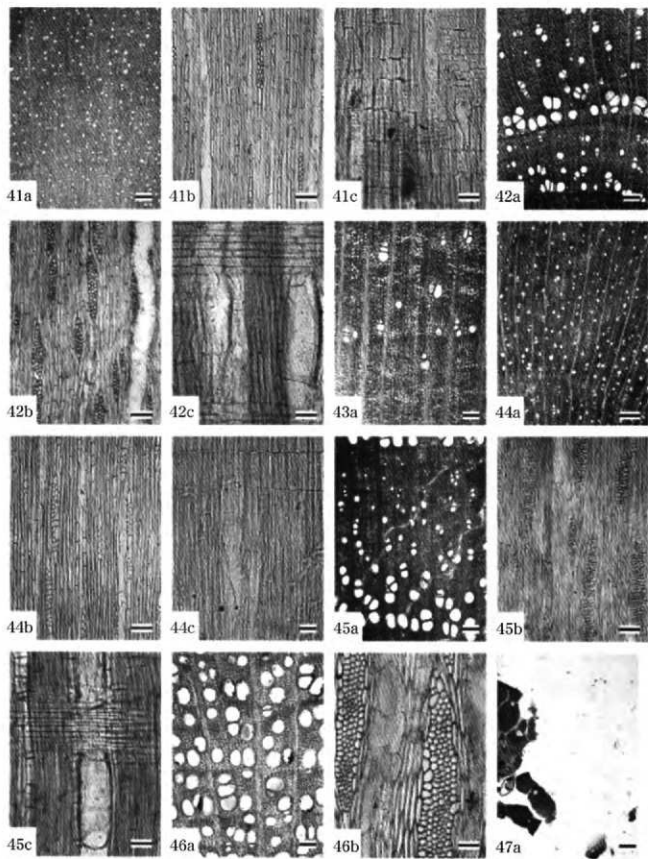
図版159 伊礼原遺跡(低湿度地区)等から出土した木材の顕微鏡写真(6)

29a-29c: サガリバナ (枝・幹材, OKI-138), 30a: サガリバナ (根材, OKI-133), 31a-31c: オヒルギ (枝・幹材, OKI-285), 32a-32c: ハリギリ (枝・幹材, OKI-112), 33a-33c: ギーマ (枝・幹材, OKI-137), 34a-34c: モクタチバナ (枝・幹材, OKI-302), a: 横断面 (スケール=200 μ m), b: 接線断面 (スケール=100 μ m), c: 放射断面 (スケール=50 μ m),



図版160 伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した木材の顕微鏡写真(7)

35a-35c: タイミンタチバナ(枝・幹材, OKI-291), 36a-36c: イズセンリョウ属(枝・幹材, OKI-118), 37a-37c: ヤエヤマコクタン(枝・幹材, OKI-275), 38a-38c: シマトネリコ(枝・幹材, OKI-181), 39a: シマトネリコ(根材, OKI-177), 40a-40c: クチナシ(枝・幹材, OKI-312). a: 横断面(スケール=200 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=50 μ m).



図版 161 伊礼原遺跡(低湿地区)等から出土した木材の顕微鏡写真(8)

41a-41c: ミサオノキ(枝・幹材, OKI-198), 42a-42c: チシャノキ類(枝・幹材, OKI-132), 43a-43c: チシャノキ類(根材, OKI-108), 44a: ムラサキシキブ属(枝・幹材, OKI-122), 45a-45c: 半環孔材A(枝・幹材, OKI-298), 46a-46b: 広葉樹根材A(根材, OKI-193), 47a: タケ亜科(OKI-107), a: 横断面(スケール=200 μ m), b: 接線断面(スケール=100 μ m), c: 放射断面(スケール=50 μ m).

III 沖縄県北谷町伊礼原遺跡出土の縄文人骨

松下孝幸* (土井ヶ浜人類学ミュージアム)

【キーワード】：沖縄県、縄文人骨、中・晩期、頭蓋、超短頭型

はじめに

沖縄県北谷町字桑江に所在する伊礼原遺跡(砂丘区)の2004年(平成16年)におこなわれた基地返還に伴う試掘調査で人骨が出土した。出土した人骨はわずか3点にすぎないが、沖縄県では例数が少ない縄文時代人骨なので、資料としてはきわめて貴重である。

沖縄県で、筆者が調査に加わったり、報告をおこなった縄文時代相当期人骨としては、宜野湾市・真志喜安座間原遺跡(松下・他、1992)、同・テラガマ洞穴、伊是名村・具志川高遺跡群(松下・他、1993a)、北谷町・クマヤ洞穴(松下・他、1989b)、同・伊礼原B遺跡(松下・他、1989c)、嘉手納町・野国遺跡、具志頭村・ガルマンドウ原洞穴から出土した人骨がある。しかし、縄文晩期人骨が多く、縄文前・中期人骨の例数は著しく少なく、沖縄人の起源や形質変化を連続して追究できない状態が続いている。

今回、伊礼原遺跡から量は少ないが、保存良好な人骨が出土し、観察や計測ができたので、若干の考察をおこなうことができた。その結果、非常に興味ある所見を得たのでを報告しておきたい。

資料

2004年(平成16年)の調査で出土した人骨は表26に示すとおり、3点の人骨である。3点とも検出されたときは埋葬状態を保っていなかった。頭蓋は、頭蓋のみで逆さまの状態出土した。大腿骨と脛骨は単独で出土した。従って、人骨の部位は重複していないが、頭蓋と大腿骨・脛骨は出土層位が異なるので、別個体である。また大腿骨と脛骨は同一個体とする根拠をみいだすことができないので、一応3体分の人骨とみなしておきたい。各骨の所属時代・時期は考古学的所見から、頭蓋は縄文晩期に、大腿骨と脛骨は縄文中期に属する人骨と推測されている。また、性別は所見の項で後述しているとおり、頭蓋は男性骨である。大腿骨と脛骨は骨体は細いが、形態的特徴から男性骨と推定した。

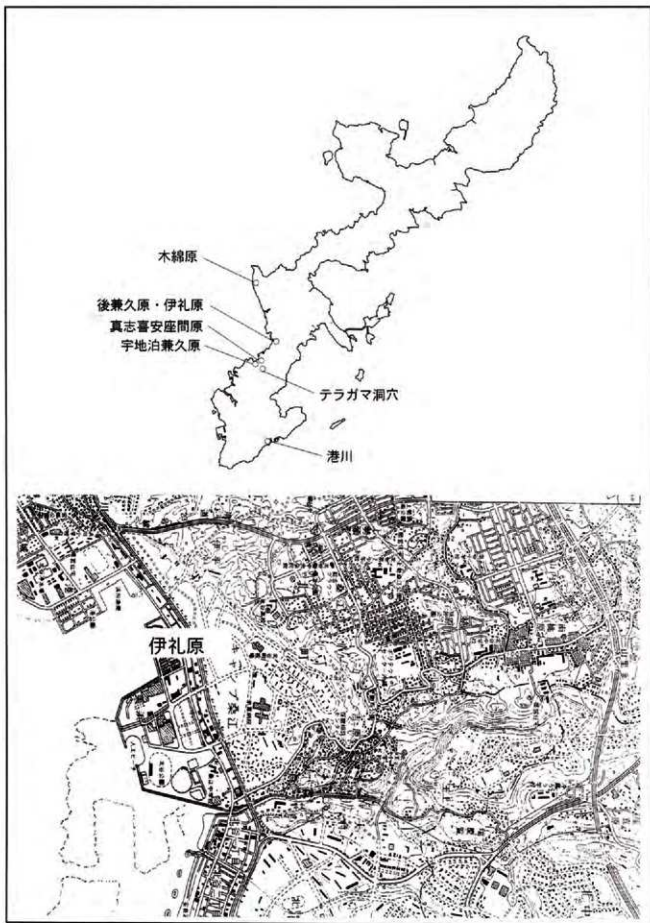
年齢区分については、表27に示すとおりである。

表26 出土人骨一覧 (Table 1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	時代・時期	備	考
SK-1	男性	壮年	縄文・晩期	頭蓋	
FE-1	男性	不明	縄文・中期	右側大腿骨	
TB-1	男性	不明	縄文・中期	右側脛骨	

*Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]



第107図 遺跡の位置 (1/25000) (Fig. 1 Location of the Irebaru site,
Chatan Cho, Okinawa Prefecture)

計測方法は、Martin-Saller (1957) によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については松下ら (1983) の方法で計測した。

所見

各人骨の残存部は第108図に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

表27 年齢区分 (Table 2. Division of age)

年齢区分		年 齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

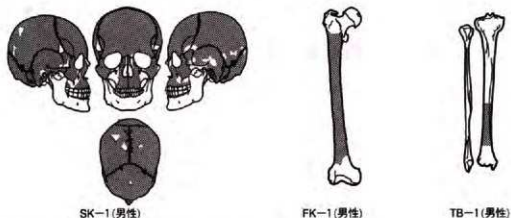
SK-1 (男性・壮年)

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨後頭鱗の一部を欠損している以外はほぼ完全である。骨壁はやや厚く、堅牢である。外後頭隆起の発達はあまりよくない。乳様突起は細長く鋭い。左側の外耳道が観察できたが、骨腫は存在しない。三主縫合とも内外両板はまだ分離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が169mm、頭蓋最大幅は154mmである。バジオン・プレグマ高は計測できないが、観察したところ低そうである。頭蓋長幅示数は91.12となり、超短頭型 (ultrabrachykran) に属している。また、頭蓋水平周は515mm、横弧長は324mmで、正中矢状弧長は計測できない。



第108図 人骨の残存部 (アミかけ部分)

(Fig.2 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are Preserved)

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は両側の上顎骨と鼻骨の一部および左側の頬骨弓を欠損している。眉上弓の隆起は強くないが、眉間はやや膨隆している。前頭結節もやや発達している。鼻骨は短いが、強く隆起しており、頬骨の外側への張り出しは強い。

顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅は〔73mm×2=146mm〕、上顔高は63mmで、顔面の高径は低く、幅径は広い。中顔幅と顔高は計測できない。上顔示数は43.15(K)となり、顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。眼窩示数は(71.43)(右)で、低眼窩(chamaekonch)に、鼻示数は52.00で、低鼻(chamaerrhin)に属している。

側面角は、全側面角が89度、鼻側面角が91度、歯槽側面角は80度で、歯槽性突顎の傾向は認められない。また、鼻頬骨角は152度である。

鼻根部は左側鼻骨と左側上顎骨の前頭突起を失っているため、計測はできないが、前頭突起の向きは矢状方向で、鼻骨も隆起しており、鼻根部は縄文人の特徴を示している。

すなわち、この顔面頭蓋は顔全体のプロポーションも鼻根部の形態も縄文人そのものである。

2. 歯

上顎骨には一部歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示した。

⑧ ⑦ 6 ⑤ ④ ③ ② ① | ① ② ③ ④ ⑤ 6 ⑦ ⑧

●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 /:不明 △:先天性欠損、番号は歯種

[1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小臼歯、5:第二小臼歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯]

残存していた両側の第一大臼歯の咬耗度はBrocaの2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)である。

なお、上顎には風習的抜歯の痕跡は認められない。

3. 特殊所見

脳頭蓋には顕著な特徴が認められる。頭蓋を側面からみるとよくわかるが、頭頂の後ろが急角度で下方に傾斜して、後頭部が断崖絶壁状になっている。このために頭蓋最大長が短くなり、同時に幅径が広いので、頭型は超短頭型を示すことになってしまった。実は後頭部は左右対称ではなく、右側がより圧迫されたように前方へ押しやられている。この形状は、中国山東省の大文口人骨と同じで、人口頭蓋変形の疑いが強い。

4. 性別・年齢

性別は、頭蓋の径が大きいため男性と推定した。眉上弓の隆起がそれほど強くないが、これは人口頭蓋変形が影響した結果と推断している。年齢は、三主縫合とも内外両板が開離していることから、壮年と思われる。

F E - 1 (男性・年齢不明)

右側の大腸骨体である。粗線は、幅は狭いが、外側唇の発達はきわめて良好である。骨体遠位部の後面には外側唇の内側になかなか大きな窪みが認められる。また、骨体遠位部は内側に、骨体近位部前面は外側に強く回旋している。これほど近位部が外側に捻れた大腸骨はあまりみることがない。

計測値は、骨体中央矢状径が27mm(右)、横径は25mm(右)で、骨体中央断面示数は108.00(右)

となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はやや良好である。骨体中央周は82mm(右)で、骨体は細い。また、上骨体断面示数は82.76(右)となり、骨体上部の扁平性は弱い。

T B-1 (男性・年齢不明)

右側骨体の中央部が残存していた。骨体は細いが、後面に一稜が認められる。

計測値は、中央最大径が26mm(右)、中央横径は18mm(右)で、中央断面示数は69.23(右)となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は70mm(右)で、骨体は細い。

性別は、骨体は細いが、形態的特徴と後面に一稜を形成していることから、男性と推定した。年齢は不明である。

考 察

頭蓋、大腿骨および脛骨について検討してみた。

1. 頭蓋(SK-1)

(1) 脳頭蓋

表28は脳頭蓋の比較表である。比較資料として、具志頭村の港川、縄文人の例として北谷町のクマヤ洞穴、伊是名村の具志川島、九州本土の例として市来、弥生人の例として、読谷村の木綿原、宜野湾市の真志喜安座間原、種子島の広田と鳥の峯の各遺跡から出土した人骨を用いた。本例の頭蓋長幅示数は91.12を示し、頭型は超短頭型に属している。この示数値は広田の89.4を含めたすべての比較資料よりは大きく、本頭蓋の特徴を端的に示している。沖縄県では港川人、クマヤ洞穴人、具志川島人、木綿原人、真志喜安座間原人すべてが80.00を超えており、沖縄の縄文・弥生人の頭型は短頭型と考えてもさしつかえないが、その強弱についてはばらつきがあり、本例は沖縄県内でもっとも頭蓋長幅示数が大きい例になった。

(2) 顔面頭蓋

表29は顔面頭蓋の比較表である。本例は計測できた部位が少ないが、特徴は明瞭で、幅径が広く、高径が低い「低・広顔」型の顔面である。頬骨弓幅は表29では最大値となる。上顔高は63mmで、真志喜安座間原39-A、鳥の峯、市来、具志川島、木綿原、クマヤ洞穴よりは小さく、港川 I に一致し、真志喜安座間原と広田とも大差ない。上顔示数(K)は、港川 I にほぼ一致し、その他の資料よりは小さい。また、眼窩示数は港川 I よりは大きい、その他の資料よりは小さく、眼窩の高径がかなり低いことがわかる。ところが鼻高が意外と高いので、鼻示数は52.00と、それほど大きな値とはならず、この値は具志川島、市来、真志喜安座間原よりは大きい、広田などその他の資料よりは小さい。

2. 四肢骨

(1) 大腿骨(FE-1)

表30は大腿骨の比較表である。まず骨体中央周で、骨体の太さを見てみよう。本例は82mmで、骨体は細いが、ガルドマン洞原穴、真志喜安座間原、広田よりは大きく、脇舄、阿高よりは小さく、港川 I、木綿原、鳥の峯と大差ない。骨体中央断面示数は108.00で、鳥の峯はほぼ一致し、阿高、脇舄、真志喜安座間原に次いで大きな値となり、骨体両側面の後方への発達は比較的良好である。

上骨体断面示数は82.76で、阿高に次いで大きく、骨体上部の扁平性は弱い。数値では表せないが、骨体近位部前面が外側へ強く捻れているのも本大腿骨の特徴である。このような形態は大分県枳田穴出土の縄文前期人にみられた特徴である。

(2) 脛骨(TB-1)

表31は脛骨の比較表である。本脛骨は中央最大径、中央横径がテラガマ洞穴5号に一致し、骨体周もほとんど差がない。すなわち、大きさと形態がテラガマ洞穴5号とほとんど一致する脛骨である。

改めて表31をみると、骨体周は表31では最小となり、中央断面示数は脇岬よりは大きいものの、鳥の峯、木綿原、野国よりは小さく、テラガマ洞穴5号に一致し、またガルマンドウ原洞穴、広田、港川Iともほとんど大差ない。

要 約

沖縄県北谷町字桑江にある伊礼原遺跡(砂丘区)の発掘調査で、2004年(平成16年)に人骨が出土した。出土人骨は沖縄県では出土例がきわめて少ない縄文時代人骨であることから、その形質的特徴が注目される。人類学的観察と計測をおこない、以下のような興味ある結果を得た。

1. 出土人骨は3体分で、残存していたのは頭蓋、大腿骨および脛骨である。頭蓋は縄文時代晩期に、大腿骨と脛骨は縄文時代中期に属する人骨と推測されている。骨質は堅牢で、保存状態は各骨とも良好である。
2. 頭蓋(SK-1)は男性頭蓋で、下顎骨を欠いているが、その他はよく残っていた。頭蓋最大長169mm、頭蓋最大幅154mmで、頭蓋長幅示数は91.12となり、頭型は超短頭型(ultrabrachykran)に属している。
3. 顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅[146mm]、上顔高63mmで、上顔示数は43.15(K)となり、顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。眼窩示数は(71.43)で、低眼窩に、鼻示数は52.00で、低鼻に属している。なお、前頭突起の向きは矢状方向で、鼻骨も隆起しており、鼻根部には縄文人特有の特徴が認められる。
4. 大腿骨は男性の右側大腿骨体で、骨体は細く、骨体上部の扁平性は弱い、粗線や骨体両側面の後方への発達はやや良好である。また、骨体遠位部後面には大きな窪みが認められ、骨体は近位部前面が外旋しており、近位部は強く捻れている。このような形状はきわめて珍しい。
5. 脛骨は男性の右側脛骨体で、やはり骨体は細い。骨体後面には一稜が認められるが、縄文人骨にしては扁平性が弱い。野国前期人脛骨にはまったく扁平性が認められなかったことから、沖縄県の縄文人では脛骨の扁平性はあまり強くないのかもしれない。
6. 本縄文人骨の特徴は明瞭である。頭蓋は超短頭型であるが、左右非対称で人工頭蓋変形の疑いがある。顔面は著しい低・広顔傾向が認められ、鼻根部は縄文人的である。クマヤ洞穴や具志川島の縄文人も短頭型であるが、これほどまで強い短頭性は示さない。この頭型は山東省の大ふん口や種子島の広田に通じる頭型であるが、資料数が少ないので、現状では両者との関係には言及できない。また低・広顔傾向もかなり強い。沖縄県での縄文人の形質を考えるうえで重要な資料になるものである。

大腿骨も特徴的である。骨体は細いが、外側唇の発達が良好で、骨体後面には大きな窪みが存在し、骨体は強く捻れている。きわめて珍しい形態をしており、本大腿骨も沖縄県の縄文人の形質を考える上で貴重な資料である。これまで沖縄県では縄文時代の人骨が少なく、とくに前期、中期の人骨は皆無に近かった。今回伊礼原遺跡（砂丘区）から縄文時代中期および晩期の人骨が出土し、その形質の一端が明らかになったことで沖縄人のルーツや沖縄県での形質変化の考察に関して新たな展開が期待できそうである。

謝辞

＜獨筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた北谷町教育委員会の皆様方に感謝致します。＞

《参考文献》

1. Baba, H., b. Endo, 1982: Postcranial Skeleton of the Minatogawa Man. The Minatogawa Man (The university Tokyo, bulletin, 19): 61-195.
2. 金岡丈夫、1929: 沖縄県那覇市外城嶽員塚より発見せる人類大腿骨に就いて。人類学雑誌、44: 217-230.
3. 九州大学医学部解剖学第二講座、1988: 日本民族・文化の生成、2、九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨 資料集成。六興出版、東京。
4. MARTIN-SALLER, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart: 429-597.
5. 松下孝幸・他、1989a: 沖縄県宜野湾市真志喜安座間原第1遺跡出土の縄文・弥生相当期の人骨(予報)(会)。人類学雑誌、97: 265.
6. 松下孝幸・他、1989b: 沖縄県北谷町クマヤ洞穴出土の古人骨(縄文時代晩期相当期人骨)(会)。解剖学雑誌、64: 362.
7. 松下孝幸・他、1989c: 沖縄県北谷町伊礼原B遺跡出土の人骨。伊礼原B遺跡-旧メイモスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査(北谷町文化財調査報告書第8集): 39-48.
8. 松下孝幸・他、1990a: 沖縄県読谷村木場原遺跡出土の弥生時代人骨(会)。解剖学雑誌、65: 244.
9. 松下孝幸・他、1992: 沖縄県宜野湾市真志喜安座間原遺跡出土の縄文・弥生時代人骨。謝名Ⅱ(真志喜土地区画 整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 [1]) (宜野湾市文化財調査報告書第15集): 第5章: 1-99.
10. 松下孝幸・他、1993a: 沖縄県具志川島遺跡群出土の古人骨。具志川島遺跡群(伊是名村文化財調査報告書第9集): 215-244.
11. 松下孝幸、2001c: シャレコウベが語る、日本人のルーツと未来、長崎新聞社(長崎新聞社新書)。
12. 松下孝幸、2003: 沖縄県読谷村木場原遺跡出土の弥生時代人骨。南島考古、No.22: 67-108.
13. 松下孝幸、2004: 「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』: 444-454. 朝倉書店
14. 松下孝幸、宜野湾市テラガマ洞穴遺跡出土の縄文・グスク時代人骨。(投稿中)
15. 鈴木尚、1963: 日本人の骨。岩波書店、東京。
16. SUZUKI, H., 1982: Skull of the Minatogawa man. The Minatogawa Man (The University Museum, The University Tokyo, Bulletin, 19): 7-49.

表28 脳頭蓋計測値 (男性、mm) (Table3. Comparison of male calvarial measurements and indices)

		伊礼原C 縄文晩期人 沖繩県		瀬川 田石墓人 沖繩県 (群馬)		クマヤ洞穴 縄文晩期人 沖繩県 (松下・他)		長志川島 縄文人 沖繩県 (松下・他)		市来 縄文人 鹿児島県 (松下)		本郷原 弥生人 沖繩県 (松下・他)		清志喜安塚埋蔵 縄文晩期~弥生人 沖繩県 (松下・他)		広田 弥生~古墳人 鹿児島県 (九州大学)		鳥の峯 弥生人 鹿児島県 (九州大学)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	頭蓋最大長	189	182	4	175.75	4	180.75	1	180	4	(175.25)	7	174.14	183	23	184.4	2	178.0	
0	頭蓋最大幅	154	148	6	145.30	4	146.25	1	147	4	15.350	6	146.83	151	23	146.8	2	151.5	
17.	バソロン・ブレグマ高	-	134	2	143.60	3	141.33	1	144	1	142	2	137.00	-	16	129.9	2	136.0	
8/1	頭蓋長軸率	91.12	81.3	4	87.58	4	85.92	1	76.45	4	(87.87)	6	84.78	87.51	23	88.4	2	85.0	
17/1	頭蓋長高率	-	73.6	1	81.50	3	78.37	1	77.94	1	78.02	2	78.14	-	16	78.0	2	76.2	
17/8	頭蓋幅高率	-	90.5	2	96.71	3	96.94	1	97.90	1	91.03	2	92.65	-	16	88.4	2	89.9	
17+17/3	頭蓋モリス	-	154.7	1	152.33	3	160.00	1	156.67	1	160.03	2	153.50	-	-	-	-	-	
23	頭蓋水平角	515	523	2	522.50	4	525.25	1	530	2	526.50	4	511.75	535	17	497.8	1	525	
24	傾斜角	324	303	4	327.25	4	336.00	1	331	2	319.00	4	320.25	339	19	321.8	2	308.0	
25	正中矢状角	-	368	1	364	3	373.33	1	369	2	366.50	2	368.50	384	12	344.6	2	357.0	

表29 顔面頭蓋(男性、mm、度) (Table4. Comparison of male facial measurements and indices)

		伊礼原C 縄文晩期人 沖繩県		瀬川 田石墓人 沖繩県 (群馬)		クマヤ洞穴 縄文晩期人 沖繩県 (松下・他)		長志川島 縄文人 沖繩県 (松下・他)		市来 縄文人 鹿児島県 (松下)		本郷原 弥生人 沖繩県 (松下・他)		清志喜安塚埋蔵 縄文晩期~弥生人 沖繩県 (松下・他)		広田 弥生~古墳人 鹿児島県 (九州大学)		鳥の峯 弥生人 鹿児島県 (九州大学)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
4E.	顔長	-	102	-	-	2	95.50	1	104	1	105	1	98	1	98	8	95.9	-	-
4E.	顔幅可縮	(146)	144	-	-	3	142.67	1	140	2	(143.00)	5	138.00	(137)	7	137.7	-	-	
4E.	中顔幅	-	105	1	108	2	(104.50)	1	104	2	(105.50)	2	103.50	105	8	98.9	2	102.5	
4E.	顔高	-	107	-	-	2	115.00	1	116	2	116.00	3	112.67	124	9	108.3	3	112.9	
4E.	上顔高	63	63	1	66	2	65.50	1	68	2	65.50	3	62.33	71	10	62.2	2	68.5	
47/45	顔字数 [G]	-	74.3	-	-	2	82.37	1	82.00	1	84.72	3	80.83	(80.51)	2	78.9	-	-	
48/45	上顔字数 [G]	43.15	43.8	-	-	2	45.35	1	47.14	1	48.61	2	45.37	61.02	7	45.6	-	-	
47/46	顔字数 [V]	-	101.8	-	-	2	(113.00)	1	111.54	1	106.69	2	106.71	118.10	7	111.6	2	109.9	
48/48	上顔字数 [V]	-	60.0	1	61.32	2	62.68	1	63.46	1	60.87	2	59.84	67.62	8	63.4	3	68.0	
40+45+47/3	顔面モリス	-	117.7	-	-	2	121.00	1	120.00	1	123.67	1	111.67	-	-	-	-		
50.	前顔度傾角	-	19	2	215.0	2	186.0	1	20	2	21.00	4	18.75	20	-	-	-		
84.	両眼高幅	-	112	1	102	2	106.00	1	100	2	100.00	5	98.40	101	-	-	-		
50/44	眼字距小率	-	17.0	1	18.61	2	18.52	1	20.00	2	20.36	4	20.08	19.80	-	-	-		
51/41	眼字距幅 [G]	42	46	1	43	2	43.00	1	41	2	42.50	6	41.90	43	-	-	-		
51/41	眼字距幅 [G]	-	46	1	43	2	43.00	1	43	3	41.33	5	40.80	48	8	42.1	1	46.0	
52.	眼字距高 [G]	(30)	30	1	31	2	34.00	1	31	2	33.00	3	30.33	(32)	-	-	-		
	[G]	-	30	2	31.50	2	33.00	1	(34)	2	32.00	2	31.33	32	9	31.9	-	-	
52/51	眼字距率 [G]	(71.43)	66.7	1	72.09	2	78.06	1	76.1	2	77.88	3	74.06	(74.72)	-	-	-		
	[G]	-	85.2	1	72.09	2	78.57	1	(75.56)	2	78.53	3	77.88	71.11	8	74.2	-	-	
54.	鼻幅	26	(26)	1	28	2	25.00	1	25	2	28.50	3	24.00	27	10	26.1	2	25.0	
55.	鼻高	59	49	1	52	2	50.50	1	51	2	50.00	4	48.75	54	10	45.2	2	48.5	
54/56	鼻字数	52.00	(53.1)	1	53.85	2	49.53	1	49.02	2	56.96	3	49.55	50.00	9	57.0	2	53.3	
72.	全顔面角	-	-	1	86	2	85.00	1	73	2	81.00	3	82.00	88	7	84.1	-	-	
73.	鼻側面角	-	-	1	87	2	91.00	1	73	2	84.50	3	84.33	88	6	81.2	-	-	
74.	鼻背面角	-	-	1	70	2	82.50	1	73	2	70.50	3	73.00	77	6	66.0	-	-	

表30 大腿骨計測値 (男性、右、mm) (Table5. Comparison of measurements and indices of male right femora)

	伊礼原C 織文中期人 沖縄県		池川 田石器人 沖縄県 (馬場・他)		ガルマンドウ 織文晩期人 沖縄県 (松下・他)		野 田 織文晩期 長縄県 (松下)		野 田 織文中期人 熊本県 (大森)		本橋原 弥生人 沖縄県 (松下・他)		真志喜安原遺跡 織文晩期-弥生人 沖縄県 (松下・他)		志 田 弥生-古墳人 鹿児島県 (九州大学)		鳥の巣 弥生人 鹿児島県 (九州大学)	
	FE-1	I	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 最大長	-	390 (左)	-	2 434.50 (左)	2	417.33	3	417.33	1	411	2	407.00 (左)	9	394.0	2	393.0		
2. 自然短全長	-	393 (左)	-	2 427.50 (左)	3	411.67	1	408	2	404.50 (左)	9	372.5						
3. 骨体中央矢径	27	26.5	6	26.00	2	30.50 (左)	10	30.07	3	26.00	14	25.93 (左)	19	25.3	6	26.8		
4. 骨体中央横径	25	26	6	24.50	2	26.50 (左)	15	25.00	3	25.33	14	23.29 (左)	19	24.0	6	24.8		
5. 骨体中央周	82	83	6	79.82	2	90.80 (左)	15	86.73	3	92.33	14	77.43 (左)	19	76.3	6	91.7		
6. 骨体上縁径	29	29	6	28.67	5	31.80	15	30.53	4	28.75	13	27.85 (左)	19	26.8	6	30.7		
7. 骨体上矢状径	24	23	5	23.00	5	25.00	15	25.53	4	23.25	13	21.62 (左)	19	22.1	6	22.7		
8/7 骨体中央部示数	108.00	101.9	6	106.73	2	115.17 (左)	15	117.58	3	102.40	13	112.12 (左)	19	105.4	6	108.2		
10/a 上脛体指数示数	62.70	79.3	5	80.57	5	78.68	15	83.73	4	80.83	12	78.49 (左)	19	76.9	6	74.2		

表31 脛骨 (男性、右、mm) (Table6. Comparison of measurements and indices male right tibiae)

	伊礼原C 織文中期人 沖縄県		池川 田石器人 沖縄県 (馬場・他)		テラガマ遺穴 織文中期以前 沖縄県 (松下)		ガルマンドウ 織文晩期人 沖縄県 (松下・他)		野 田 織文中期人 沖縄県 (松下)		編 野 織文人 長縄県 (松下)		本橋原 弥生人 沖縄県 (松下・他)		真志喜安原遺跡 織文晩期-弥生人 沖縄県 (松下・他)		志 田 弥生-古墳人 鹿児島県 (九州大学)		鳥の巣 弥生人 鹿児島県 (九州大学)	
	TB-1	I	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1. 骨体全長	-	-	-	-	-	-	3	345.67 (左)	1	336	1	336	1	316.7	1	344				
1 a. 股骨最大長	-	(122)	-	-	-	-	3	353.00 (左)	1	345	-	-	6	314.2	1	347				
2. 中央最大径	26	27	26	5 29.00	1	29 (左)	3	33.03 (左)	3	28.00	7	28.71	6	28.0	2	27.5				
3 a. 栄養孔直径最大径	-	(3)	-	3 32.00	-	-	4	37.25 (左)	3	30.00	6	31.00	19	31.8	5	32.0				
4. 中央横径	18	19	18	5 20.00	1	22 (左)	3	20.33 (左)	3	21.33	7	19.43	6	18.3	2	21.5				
5 a. 栄養孔直径横径	-	23	-	3 23.00	-	-	4	21.75 (左)	3	22.00	7	21.57	19	22.0	5	22.2				
6. 骨体周	70	78	71	5 78.00	1	80 (左)	3	86.67 (左)	3	77.67	7	76.43	6	75.2	2	79.0				
10 a. 栄養孔直径	-	(88)	-	3 87.67	-	-	4	95.00 (左)	3	82.33	6	83.33	19	86.5	5	88.4				
10 b. 骨小梁	-	71	-	5 71.00	-	-	4	76.25 (左)	3	71.33	5	67.80	18	69.7	2	72.0				
9/8 中央部示数	69.23	79.4	69.23	5 86.32	1	75.86 (左)	3	81.60 (左)	3	76.22	7	67.90	6	69.6	2	78.5				
9 a/9 a 栄養孔直径指数	-	(87.7)	-	3 77.00	-	-	4	58.40 (左)	3	73.55	6	69.31	18	68.2	5	68.4				
10 b/1 骨厚指数	-	(21.6)	-	-	-	-	3	21.93 (左)	1	22.62	-	-	3	21.7	1	20.8				

表32 脳頭蓋 (mm) (Calvaria)

	伊礼原 C SK-1 男性	
1.	頭蓋最大長	169
β.	頭蓋最大幅	154
17.	バジオン・プレグマ高	-
8/1	頭蓋長顯示数	91.12
17/1	頭蓋長高顯示数	-
17/8	頭蓋幅顯示数	-
1+8+17/3	頭蓋モズルス	-
5.	頭蓋腔長	-
9.	最小前頭幅	100
10.	最大前頭幅	122
11.	両耳幅	-
12.	最大後頭幅	112
13.	乳突幅	-
7.	大後頭孔長	-
16.	大後頭孔幅	-
16/7	大後頭孔数	-
23.	頭蓋水平高	515
24.	横乳長	324
25.	正中矢状腔長	-
26.	正中矢状前額蓋高	126
27.	正中矢状頭頂蓋長	143
28.	正中矢状後額蓋長	-
29.	正中矢状前額蓋長	110
30.	正中矢状頭頂蓋長	118
31.	正中矢状後額蓋長	-
29/26	矢状前顯示数	87.30
30/27	矢状頭頂顯示数	82.52
31/28	矢状後顯示数	-

表34 鼻根部 (mm, 度) (Nasal root)

	伊礼原 C SK-1 男性	
50.	前額隆起幅	-
50 A.	鼻根伸張長	-
50/50A	鼻根伸張顯示数	-
57.	鼻骨最小幅	-
4A.	両眼幅幅	-
50/44	眼窩間顯示数	-
a.	前額突起上幅(右)	12
	(左)	-
b.	前額突起水平斜角	-
c.	B-H 投影距離]
d.	鼻根角	-
e.	G-R 距離	-
f.	鼻線高	-
f/a	鼻根突出顯示数	-
77.	鼻根角	152
F a.	f m o 間距離	100
F h	鼻線高	12
F h / F a	鼻根突出顯示数	12.00

表33 顔面頭蓋 (mm, 度) (Facial skeleton)

	伊礼原 C SK-1 男性	
40.	顔長	-
41.	側顔長	-
42.	下顔長	-
43.	上顔幅	111
45.	頬骨弓幅	(145)
46.	中顔幅	-
47.	顔高	-
48.	上顔高	63
47/45	顯示数 (K)	-
48/45	上顯示数 (K)	43.15
47/46	顯示数(V)	-
48/46	上顯示数(V)	-
40+45+47/3	顔面モズルス	-
50.	前額隆起幅	-
44.	両眼幅幅	-
50/44	眼窩間顯示数	-
51/	眼窩幅(右)	42
	(左)	-
52.	眼窩蓋(右)	(30)
	(左)	-
52/51	眼窩顯示数(右)	(71.43)
	(左)	-
54.	鼻幅	26
55.	鼻骨長	50
54/55	鼻顯示数	52.00
55 (1)	梨状口高	-
56.	鼻骨長	-
57.	鼻骨最小幅	-
57(1)	鼻骨最大幅	-
60.	上顎骨槽長	-
61.	上顎骨槽幅	-
62.	口蓋長	-
63.	口蓋幅	38
64.	口蓋高	-
61/60	上顎骨槽顯示数	-
63/62	口蓋顯示数	-
64/63	口蓋高顯示数	-
72.	全側面角	89
73.	鼻側面角	91
74.	後槽側面角	80

表35 大腿骨 (mm) (Femur)

		伊礼康 C Fe-1 男性 右
1.	最大長	-
2.	自然位全長	-
3.	最大軀子長	-
4.	自然位軀子長	-
5.	骨体中央矢状径	27
6.	骨体中央横径	25
8.	骨体中央周	82
9.	骨体上横径	29
10.	骨体上矢状径	24
15.	頭直直径	-
16.	頭矢状径	-
17.	頭周	-
18.	頭直直径	-
19.	頭横径	-
20.	頭周	-
21.	上脣幅	-
B/2	長厚示数	-
6/7	骨体中央断面示数	108.00
10/3	上骨体断面示数	82.76

表36 脛骨 (mm) (Tibia)

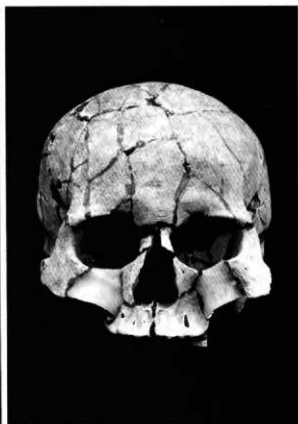
		伊礼康 C T B-1 男性 右
1.	脛骨全長	-
1 a.	脛骨最大長	-
1 b.	脛骨長	-
2.	脛距距距離	-
3.	最大上端幅	-
3 a.	上内關節面幅	-
2b.	上外關節面幅	-
4 a.	上内關節面深	-
4 b.	上外關節面深	-
6.	最大下端幅	-
7.	下端矢状径	-
8.	中央最大徑	26
8 a.	榮養孔位最大徑	-
9.	中央横徑	19
9 a.	榮養孔位横徑	-
10.	骨体周	70
10 a.	榮養孔位周	-
10 b.	最小周	-
B/B.	中央断面示数	69.23
B a/B a	榮養孔位断面示数	-
10 b/1	長厚示数	-

表37 形態小變異 (Non-metric crania variants)

	伊礼康 C SK-1 男性	
	右	左
1. Medial pterine canal	/	/
2. Pterygospinous foramen	/	/
3. Hypoglossal canal bridging	-	-
4. Ovoid bridging	/	/
5. Condyle canal absent	/	/
6. Tympanic dehiscence, Foramen of Husztkel (>1mm)	/	/
7. Jugular foramen bridging	/	/
8. Precondylar tubercle	-	-
9. Supra-orbital foramen (colofrontal foramen)	-	-
10. Accessory infraorbital foramen	/	/
11. Zigo-facial foramen absent	-	-
12. Auril exostosis	/	-
13. Mentoem	-	-
14. Os inciae	+	-
15. Cricoid at the lambda	+	-
16. Parietal notch bone	-	-
17. Transverse zygomatic suture (>5mm)	-	/
18. Astenic occide	-	-
19. Occipitomastoid occide	-	-
20. Epipneic occide	/	/
21. Frontotemporal articulation	/	/
22. Basiotic suture (>10mm)	-	-
24. Accessory mental foramen	/	/
25. Mandibular torus	/	/
26. 滑車上孔	/	/



頭蓋骨上面 (Superior view of the Skull)



頭蓋骨正面 (Frontal view of the Skull)



頭蓋骨側面 (Lateral view of the Skull)

伊礼原C, SK-1 (男性・壮年)

(The Ireibaru C, SK-1, young adult male)



大腿骨（右）（The femur）
伊礼原C, FE-1（男性）
（The Irebaru C, FE-1, male）



脛骨（右）（The Tibia）
伊礼原C, TB-1（男性）
（The Irebaru C, TB-1, male）

IV 伊礼原遺跡から出土した脊椎動物遺体群

桶 泉 岳 二 (早稲田大学)

はじめに

伊礼原遺跡では、これまでの発掘調査で低湿地区 (おもに縄文時代前期層準) および砂丘区 (おもに縄文中期～弥生時代相当期層準) より多数の脊椎動物遺体 (骨類) が出土している。ここではこれらの骨類の同定結果と特徴について概要を報告する。

I. 低湿地区

1. 資料と分析方法

(1) 出土地区・層準・年代

骨類の出土状況を地区別にみると、大部分は試掘穴No.143を中心に設定された「中央区」・「東区」・「西区」・「南区」・「北区」の各トレンチから出土している。なかでも中央区からの出土量が最も多く、南区がこれに次ぐ。東区・西区・北区では比較的少ない。

層別の出土傾向については、現段階では層序・年代の詳細を検討中とのことであり、全容を把握できていないが、出土層準が明確な資料のみ限り、大半が第9層～第13層および第14層 (「曾畑層」) から出土している。とくに「曾畑層」からの出土資料が圧倒的に多く、ほかに第11層付近からも比較的多くの資料が出土している。ただし、その他に層位的な位置づけが未確定の層準 (たとえば「緑灰色砂層」・「混雑砂層」など) からの出土資料が大量にある。このため資料の年代別の検討は今後の課題だが、全体としては縄文時代前期 (曾畑式期) の資料を主体として、縄文時代中期から弥生～平安時代相当期にわたる各期の資料が含まれていると推定される。

(2) 資料の採集方法

資料の採集方法については、発掘現場において手で拾いあげられたもの (以下「ピックアップ資料」) と、堆積物サンプルの水洗選別によって回収されたもの (以下「水洗選別資料」) がある。

ピックアップ資料 分析資料の大部分はピックアップで採集されたものである。なお、発掘された堆積物の一部はフルイがけされ、資料が回収されたとのことであるが、ピックアップされた資料とフルイがけされた資料を区別できなかったため、ここではすべて「ピックアップ資料」として一括した。

水洗選別資料 試掘調査の際に、試掘穴No.143の第14層 (曾畑式期層準) から2点の堆積物サンプルが採集され、1mmメッシュを用いた水洗選別によって資料が回収されている。

(3) 分析方法

同定方法は、現生標本との比較を基本とした。魚類の同定対象部位は、主上顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨、主髻蓋骨、椎骨を必須部位とした。その他の部位についても、分類群ごとの骨格的特徴に応じて、可能なものは適宜同定対象とした。魚類以外については部位の判定可能な資料を同定対象とした。鳥類・哺乳類の計測方法はDriesch (1976) に準拠した。以下の記載中の計測値の単位はmmである。

集計方法は、上記のとおり現段階では層序・年代に関する詳細な検討が未了のため、今回は暫定的に全地区・全資料を一括して集計した。ただしイノシシの顎骨・歯については個々の標本の詳細を示した。

2. 分析結果

魚類・両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類が同定された。魚類と哺乳類が大半を占める。

(1) 標本の記載

a. 魚類

ピックアップ資料の同定結果を表38に、水洗資料の同定結果を表47・48に示した。同定標本数(目以下のレベルで分類群を特定できた資料の数)は、ピックアップ資料が合計約1500点、水洗資料が合計94点である。そのほかに、目以下のレベルで分類群を特定できていない真骨類標本(表に「真骨類(未同定)」・「真骨類(保留)」と示したもの)がピックアップ資料で15点、水洗資料で39点ある。同定された分類群の数は、ピックアップ資料で軟骨魚綱(板鰓類)7、硬骨魚綱(真骨類)27、水洗資料で板鰓類2、真骨類13、総計38分類群となった。以下、主要種および同定結果に注釈を要する分類群について簡単に記載する。

サメ類 歯と椎骨が検出された。歯でイタチザメ・メジロザメ科?・ミズワニ科?・アオザメ属・ホホジロザメ?・およびその他が同定された。イタチザメの歯は全体的に大型である。「ホホジロザメ?」としたものは大型のエナメル質破片で、直線的な鋸歯縁をもつ。「サメ類(その他)」としたものは幅が狭く3尖である。椎骨では、星状椎体の特徴とするネズミザメ科のほか、メジロザメ科に類するタイプを「サメ類A」、メジロザメ型だが側扁するものを「サメ類B」、ホシザメ・ドチザメに類するものを「サメ類C」とした。「サメ類A」は径・長さや弓溝形態にかなりの変異があり、多数の種が混在している可能性がある。サメ類A椎体径は6mm~25mmで、10~18mm程度のものが多い。量的には、歯ではイタチザメ・メジロザメ科?、椎骨ではサメ類Aが大半を占める。

トビエイ科・エイ目 歯・椎骨が検出された。歯はすべてトビエイ科で、V字形に強く屈曲するものを「トビエイ科A」、屈曲しないものを「トビエイ科B」とした。エイ目とした椎骨は、サメ類のような明確な弓溝(神経・血管弓門の脱落痕)をもたないものである。大半は小型(タイプA)だが、サメ類と同様の大型標本(タイプB)が1点みられた。

ニシン科 水洗資料から角骨・主鰓蓋骨・基後頭骨・椎骨が検出されている。頭部骨格はいずれもニシン亜科のもので、基後頭骨はマイワシ現生標本に近似する。ミズン *Herklotsichthys quadrimaculatus* またはヤマトミズン属 *Amblygaster* の可能性が高い。椎骨はニシン科としたが、これらも同一種と推定される。

ウツボ科 前鰓骨板・主上顎骨・歯骨の大部分は一般的なウツボ類に見られるタイプであり、「ウツボ科A」とした。その他に前鰓骨板の後部に多数の歯が密生して広い歯帯を形成するものが1点あり、「ウツボ科B」とした。他の部位はウツボ科として一括した。

トウゴロウイワシ科? 水洗資料からギンイワシ現生標本に近似する角骨が検出された。近縁の分類群との比較検討が不十分だが、暫定的にトウゴロウイワシ科?とした。

ハタ科 前上顎骨・歯骨・角骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨にはマハタ現生標本に近似するものと、バラハタ現生標本に近似するものの2タイプがみられた。前者を「ハタ科A」、後者を「ハタ科B」とした。量的にはハタ科Aが大半である。ハタ科Bの前上顎骨は頰側に強大な歯列が1列あり(特に前端のものは大きく発達する)、舌側に絨毛状歯帯が伴う。前鰓蓋骨では、ハタ科Aは後縁下部に鋸歯がやや発達するが、ハタ科Bでは後縁にごく微小な鋸歯がみられるのみである。主鰓蓋骨では、ハタ科Aは関節から後方へ伸びる稜が直線的であるのに対し、ハタ科Bでは下方に湾曲する。その他の部位はハタ科として一括した。ただし椎骨については、第1椎骨を除き、フエダイ科との判別が確実でないため、「ハタ型」とした。

ギンガメアジ属 主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨にはカスミアジ現生標本に酷似するものと、カスミアジに近似するが別種のもの(一部ギンガメアジに近似)の2タイプがみられた。暫定的に前者をギンガメアジ属A(カスミアジ近似種)、後者をギンガメアジ属Bとした。判別困難なものは「ギンガメアジ属」とした。本属またはその近似種と考えられる大型の稜鱗に2つの小穿孔を施した製品が数点確認されている。また水洗資料からは小型別種と考えられる歯骨が1点確認されている。なお、椎骨にはアジ科だが詳細不明の椎骨が若干ある。

フエダイ科 前上顎・歯骨・方骨が検出された。前上顎骨・歯骨は、頰側に大型歯列が1条あり(とくに前から第2歯が著しく肥大する)、舌側に絨毛状歯帯が伴う。ニセクロホシフエダイ現生標本と基本構造は一致するが、細部が異なる。

フエフキダイ科 前上顎骨・歯骨でヨコシマクロダイが、また前上顎骨でフエフキダイ属が同定された。フエフキダイ属前上顎骨には、ハマフエフキ現生標本に近似するもの、柄状突起が短く上方に伸びる(顎骨体との角度が大きい)もの、顎骨体が細くアマミフエフキ現生標本に近似するものの3タイプがみられた。ここではそれぞれ「フエフキダイ属A・B・C」とした。量的にはフエフキダイ属Aが大半である。その他の部位はフエフキダイ科として一括したが、その多くはフエフキダイ属のものと同定される。

タイ型 フエフキダイ科とタイ科の尾椎(とくに後半部)は類似性が強く判別が難しかったため、「タイ型」として一括した。多くはフエフキダイ科と思われるが、クロダイ属や他の類似種も混じる可能性がある。

マグロ類似種 ビックアップ資料から尾椎が3点検出されている。大型のサバ科でマグロに類似するが、別種である。今のところ種類を特定するに至っていない。

ニザダイ科 ヒラニザ現生標本に近似する尾椎が2点確認された。

ペラ科 咽頭骨には「コブダイ型」・「タキペラ型」・「ペラ科A」・「ペラ科B」の各タイプ(金子(1996)を一部修正。榎泉2005)およびその他のタイプがみられた。量的には「コブダイ型」が主体である。なお「コブダイ型」とした標本の中には、コブダイ現生標本とは歯列や突起などの形状が異なるものがあり、シロクラペラなどの類似種が含まれていると考えられる。その他の部位はペラ科として一括したが、前上顎骨・歯骨などにはかなりの形態変異がみられ、多数の種が混在していると考えられる。

ブダイ科 咽頭骨・前上顎骨・歯骨でイロブダイ属、アオブダイ属が同定された。量的にはアオブダイ属が大半である。アオブダイ属の下咽頭骨には、歯列面両側縁が平行で歯は密で直線的に配

列するもの、歯列面両側縁はほぼ平行で歯はやや粗で弧状に配列するもの、歯列面両側縁は前方で狭まり歯はやや粗で弧状に配列するものなどの変異があり、複数種が含まれると推定されるが、ここでは一括した。その他の部位はブダイ科として一括したが、主上顎骨・角骨にはかなりの形態変異がある。

ハリセンボン科 棘はすべてハリセンボン属のもので、明らかにイシガキフグと判定されるものはみられなかった。顎骨の歯板部分のみの破片は前上顎骨・歯骨の判別が困難のため「前上顎骨/歯骨」とした。なお、椎骨はフグ科との判別に関してさらに比較検討を要するため、「フグ科/ハリセンボン科」としてまとめた。

未同定の真骨類 ビックアップ資料のうち「前鰓蓋骨？」としたものは三日月形で硬質堅牢、外縁は著しく発達し、外面にヤスリ状の細顆粒が密である。おそらくオニオコゼ科またはその近縁種と推測されるが確定していない。尾椎には大型資料（椎体後面横径22.3~22.4、長さ30.2）が2点みられた。椎体はやや長く中央でくびれ、椎体側面下方に太い隆起帯をもつ。血管棘は椎体中央下より発する。

b. 両生類・爬虫類

両生類ではカエル類が、爬虫類ではヘビ類、ウミガメ類、リクガメ類（リュウキュウヤマガメ）が確認された。とくにウミガメ類・リクガメ類の出土量が多い。

カエル類 ビックアップ資料から3点が検出されたのみである。自然の遺骸と考えられる。

ヘビ類 椎骨が同定された。水洗資料（サンプル B）では17点がまとめて検出されており、きわめて大型の個体もみられることから、食用とされていた可能性も考えられる。

ウミガメ類 ビックアップ資料から多数の遺体が検出されている。下顎骨でアオウミガメと他の種類（未特定）が各2点同定された。剣状腹板はおそらくアオウミガメと推定される。最も多くの資料が得られた上腕骨でもアオウミガメに合致するものが多いが、他の種も混じる。挽骨・尺骨・前烏口骨などにはアカウミガメに近似するものもみられた。全体として、アオウミガメを主体とし、アカウミガメなども含まれていると推測される。いずれもかなり若い個体から老成した大型個体までが混在している。

リクガメ類 主にビックアップ資料から多数の遺体が検出されている。リュウキュウヤマガメと推定されるが、かなりの形態変異（たとえば頂骨板では全体のプロポーション、鱗板間溝の形状など）がみられる。同種内の個体変異と思われるが、下腹板には通常のタイプのほかに、かなり大型で頑強なものが1例ある。

c. 鳥類

カラス属・ワシ科・カモ類・サギ科・キジ科（ヤマドリ?）が同定された。いずれも出土量は少ない。

ワシ科 左尺骨が2点得られた。1点は完存資料でGL=110.9。トビ現生標本よりかなり小さく、小型種である。他の1点は遠位端破片でDid=18.3、オオワシ現生標本（Did=20.9）よりやや小さい。

カモ科 烏口骨が1点得られた。マガモ・カルガモとコガモの中間大で、中型のカモ類である。

サギ科 右尺骨完存資料。GL=205+。アオサギ現生標本（GL=195.3）よりやや大型である。

ヤマドリ? 鳥類遺体の中では特筆される資料である。キジ科の左大腿骨(台帳番号6768)と左中足骨(台帳番号611)が各1点得られた。後者は曾畑式層準からの出土であり、前者もその可能性が高い(中村憲氏のご教示による)。左大腿骨は完存標本で $GL=67+$ 、 $SC=5.1$ 、左中足骨は遠位端破片で $Bd=9.7$ 。いずれも形態・サイズはヤマドリ現生標本に近似し、キジとは異なることから、ヤマドリである可能性が高い。ただし、近縁種で中国南部~東南アジアに分布するセキショクヤケイとの比較検討が未了のため、ここでは「ヤマドリ?」としておく。ヤマドリは日本固有種で、現在の分布は本州・四国・九州に限られる(小林1983)ことから、九州から持ち込まれたものである可能性が高い。なお、本標本の同定に関しては江田真毅氏(鳥取大学医学部)のご教示を得た。

d. 哺乳類

ケナガネズミ? 大型のネズミ亜科の上顎臼歯・下顎骨が得られた。右下顎骨は第1頰歯長4.5、第2頰歯長3.5、第1-2頰歯列長17.7で、ドブネズミよりかなり大きく、ケナガネズミである可能性が高い。他にも同程度の大きさのネズミ科左上顎切歯(幅3.7)、右下顎切歯(幅3.0)、右上腕骨遠位端($Bd=11.3$ 、 $SD=4.0$)、左大腿骨遠位端($Bd=10.5$)、左脛骨近位端(骨端未癒合脱落。骨端離脱面の最大幅8.6)があり、これらもケナガネズミと推測される。なお、そのほかに小型のネズミ科の切歯がわずかに採集されている。

オオコウモリ科 頰歯2点と上腕骨が得られた。頰歯の同定には前田(1986)を参照した。上腕骨は右近位端で $Bp=11.0$ である。

イヌ 右上顎第2乳臼歯(台帳番号8092)・右上顎犬歯・右橈骨(完存。成獣。台帳番号5816)・左橈骨(骨幹部のみ。右とは別個体。台帳番号738)が各1点得られた。右橈骨は中央区「曾畑層」からの出土、他の標本も曾畑式期のものと推定される(中村憲氏のご教示による)。いずれも散乱骨で、埋葬を示す証拠はない。計測値は、上顎右犬歯全長33.4、右橈骨 $GL=99.5$ 、 $Bp=12.3$ 、 $SD=8.1$ 、 $Bd=15.2$ 、左橈骨 $SD=8.6$ である。奄美大島宇宿小学校構内遺跡第4文化層(条痕文土器期)の埋葬犬(雄?)の橈骨は $GL=122.7$ 、 $Bp=15.1$ 、 $SD=10.8$ 、 $Bd=18.9$ で(茂原・土肥2003)、本遺跡出土の橈骨2点はこれよりかなり小さい。

リュウキュウイノシシ 膨大な数の遺体が出土している。MNIの全資料合計は上腕骨遠位端で約350個体、顎・歯で約230個体に達し、他の主要部位でも200~100個体前後が得られている。

下顎M3長(最小~最大:平均値±標準偏差)は、全資料の合計では18.7~31.8:24.7±2.56($N=279$)、出土層準が明確な資料に限定すると、第14層・「曾畑層」では20.5~28.6:23.9±2.30($N=47$)、第13層では20.7~29.0:23.2±3.55($N=6$)、第12層~第10層では21.8~31.8:26.9±2.59($N=27$)、第9層では20.0~28.4:25.2±3.12($N=9$)となった(第109・110図)。第14層・「曾畑層」と第13層では小さく、第12層~第10層でやや大型化の傾向が認められる。縄文時代早期~前期(爪型文~条痕文土器期)の野国貝塚B地点の下顎M₃長は平均値で約23mm(川島・村岡1984)、また第109図には示していないが、縄文時代早期(爪型文土器期)の新城下原遺跡(金子・久貝2006)でも21~24mmで野国貝塚と同様である。国頭産現生リュウキュウイノシシ(川島・村岡1984)では約26~27mmである。本遺跡出土資料と比較すると、「曾畑層」資料は野国貝塚B地点・新城下原遺跡とほぼ同様なしはわずかに大型であり、第12層~第10層資料は現生種に近い。

下顎骨の臼歯前出状況から林ほか(1977)に従って年齢構成を推定すると、全体としては年齢段

階Ⅳ (M3萌出完了=約3.5歳)以上の成獣が半数以上を占めており、年令段階Ⅱ・Ⅲ (1.5~2.5歳前後)も普通である。第3乳臼歯を残す幼獣 (年令段階Ⅰ=約0.5歳)も見られるが少数である。犬歯の性比はおおむねオス:メス=2:1である。ただし年令構成・性比の層位・年代別の検討については今後の課題である。主要四肢骨は骨端関節を欠いているものが多く、これらはおそらく人為的に打ち割られたものと推定される。

クジラ目 (イルカ・クジラ類) イルカ類は頭蓋破片・顎歯・椎骨・肋骨が検出された。MNIは2個体 (連合頭椎)である。椎骨の大半は椎体横径2.7~4.3cmで中・小型のイルカ類が主体だが、5.1~5.9cm (ゴンドウクラス)の資料が2点ある。そのほかに、大型クジラ類の頭骨破片と部位不明破片も普通に検出されている。

ジュゴン 上顎骨・切歯骨・椎骨・肋骨が検出されている。その他に骨質から見てジュゴンと思われるが部位の特定にいたっていない小破片がわずかにある。

(3) 遺体群の組成と特徴

a. ビックアップ資料

脊椎動物全体 脊椎動物遺体の全体的組成 (MNI比)をみると (表46・第111図)、イノシシと魚骨がおおむね同数で圧倒的に優占している。リクガメ類もかなり多く、ウミガメ類も普通である。以上は第14層「曾畑層」~第9層の資料を合算した結果であり、現段階では層別の詳細を把握できていないが、出土層準が明確な資料でみる限り、魚骨・イノシシ・リクガメ類ともに「曾畑層」・第14層からの出土量がもっとも多いことから、曾畑式期の様相をかなりの程度反映していると思われよう。

これに対し、縄文時代早期~前期 (爪形文土器・条痕文土器期)の野国貝塚B地点 (盛本1984)ではMNIで661個体に達する膨大な量のイノシシが集中的に出土しているが、魚骨は25点 (MNI計5個体)とごく少ない。第111図には示していないが、同じく縄文時代早期 (爪形文土器期)の新城下原遺跡第9層 (金子・久貝2006)でもイノシシ70個体に対し、魚骨は4点のみ (MNI=1個体)で、野国貝塚と同様にイノシシが圧倒的多数を占める。いっぽう、縄文時代中期以降の諸遺跡では魚類が70~90%前後と圧倒的に優占するようになり、イノシシが大きく減少する。これらと本遺跡を比較すると、イノシシがきわめて多数である点では野国貝塚や新城下原遺跡と同様だが、魚骨が多い点では縄文時代中期以降の遺跡に類する傾向も認められ、中間的な様相である。

魚類 以上からもわかるように、本遺跡は、多数の魚類遺体が検出された遺跡としては沖縄で最古に位置づけられる。すなわち、本遺跡の魚骨資料は沖縄における魚類利用の発展開始期の様相を知るうえで重要である。魚類の組成 (MNI)をみると (表46・第112図)、ハリセンボン科が88で最も多く、ハタ科58、ベラ科55、フエフキダイ科51がこれに次ぐ。ウツボ科28もやや多く、ほかにブダイ科13、クロダイ属10、サメ類・モンガラカワハギ科各5、ギンガメアジ属4も普通である。サメ類は、最小個体数は多くはないが、イタチサメ・メジロザメ科?の歯や椎骨の出土がかなり目立つ (最小個体数が少ないのは、サメ類の骨格が最小個体数に適した部位をもたないためと思われる)。一般に、沖縄諸島の縄文時代中期以降の遺跡では、サンゴ礁海岸に面した地域ではブダイ科、金武湾・中城湾といった内湾砂底域に面した地域ではフエフキダイ科・ベラ科が卓越する傾向が広く認

められるが(第112図)、これらと比較して本遺跡の魚類組成は他に例のない独特の様相を呈している。

具体的にみると、現在の本遺跡前面の海岸は干瀬とイノーが発達する典型的なサンゴ礁海岸であり、このため第112図でも暫定的に「サンゴ礁海岸」のグループに含めてあるが、ブダイ科は少なく、むしろフエフキダイ科やベラ科が優先する点で内湾沿岸の遺跡にやや近い傾向を示している。実際、出土したフエフキダイ科とベラ科の大多数を占めるフエフキダイ属A・ベラ科(コブダイ型)には、内湾砂底域を好むハマフエフキ・シロクラベラが多く含まれている可能性が高い。本遺跡の最多種であるハリセンボン科も、現在イノーや港湾内などに多くみられる。以上から、本遺跡の魚類相は、全体としては内湾的な様相を強く示していると考えられるが、ハリセンボン科が最多種となる点で他の「内湾型」の遺跡とは明確に異なる。

なお、貝類では閉鎖的な内湾泥底に生息するハイガイが多数出土しているのに対し、こうした環境を好むクロダイ属などは多くない。これは縄文時代中期以降の遺跡にも一貫して認められる特徴である。

岩礁～サンゴ礁性のハタ科やウツボ科が多い点も本遺跡の特徴といえる。ハタ科が多い傾向は、縄文時代前期～中期の奄美大島宇宿小学校構内遺跡(条痕文土器期～縄文中期。名島2003)や古我地原貝塚(縄文中期中心。金子1987)でも認められることから、縄文前期～中期の時代的な特徴である可能性も考えられる。いっぽう、ブダイ科に代表される典型的なサンゴ礁要素は、これらの遺跡よりかなり貧弱である。ハタ科やウツボ科は肉食性であり、サンゴ礁への依存度はブダイ科ほど強くないことからみて、上記の特徴は曾畑式期の本遺跡周辺においてサンゴ礁がまだ発達過程にあったことを示している可能性がある。ただし、この点については貝類遺体や地質・地形との比較検討が必要である。

サメ類やギンガメアジ属(または近縁の大型アジ類)が目立つ傾向は、野国貝塚B地点(盛本1984)でいっそう明確に認められる。すなわち野国貝塚では魚骨の出土量はごく少ないものの、種類が判明している標本9点中サメ類椎骨(メジロザメ型)が5点を占めている(ただし歯は確認されていない)。また写真図版からみて、「種不明」とされている椎骨17点の中に大型アジ類のものが数点確認できる。新城下原遺跡で採集された唯一の椎骨も、写真図版によって大型アジ類(おそらくギンガメアジ属)に同定できる。サメ類や大型アジ類は縄文時代中期以降の遺跡でも数点程度は出土するのが普通だが、魚骨全体に占める比率は一般にごく低い。したがって、これらが目立つ点は縄文時代早期～前期の時代的な特徴である可能性も考えられる。

爬虫類・鳥類 爬虫類ではリクガメ類(リュウキュウヤマガメ)がかなり多い点の特徴である。この点は野国貝塚・新城下原遺跡だけでなく縄文時代中期以降の諸遺跡と比較しても際立っており、本遺跡に固有の特徴といえる。リュウキュウヤマガメは現在の山原のような状態のよい照葉樹林を生息地としており、当時の遺跡周囲にそうした森林環境が広がっていたことが推定される。ウミガメ類が普通である点は野国貝塚や新城下原遺跡と同様である。ほかにヘビ類がわずかに検出されている。鳥類は少ないが、ヤマドリ?2点の出土が特筆される。九州から持ち込まれたものと推定される。ほかにカラス属・ワン科・サギ科・カモ類がみられたが、いずれも少数である。

哺乳類 「曾畑層」を中心に大量のイノシシが出土しており、先述のとおり新城下原遺跡、野国

貝塚B地点と類似の様相である。下顎M3の計測値も、「曾畑層」に限定すれば野国貝塚B地点や新城下原遺跡とはほぼ同様である。同時代の九州のイノシシよりはるかに小さく、持ち込まれた個体の存在は考えにくい。年齢・性比の層別の検討は今後の課題だが、年齢構成は、全体としては乳歯を残す幼獣もみられるものの、M3萌出完了（咬耗開始）以後の成獣が主体であり、飼育を示唆する傾向はとくに認められない。この点も野国貝塚や新城下原遺跡と同様である。性比は雄：雌が約2：1で、野国貝塚・新城下原遺跡（おおむね1：1）より雄が多い。また、本遺跡出土イノシシの主要長骨には骨端関節を欠損した資料が多く、人為的に打ち割られた可能性が高い。同様の特徴は野国貝塚でも指摘されており（川島・村岡1984）、類似の方法で骨髄抽出が行われた可能性がある。

イヌは、少数ではあるが、「曾畑層」からの出土が確認された。奄美・沖縄諸島におけるイヌ遺体の最古例としては、これまでに奄美大島宇宿小学校構内遺跡第4文化層（条痕文土器期）から検出された埋葬犬2体が知られているが（中山2003、茂原・土肥2003）、本遺跡の資料はこれらよりも古く、沖縄諸島へのイヌの導入が曾畑式期まで遡ることが確認された。小型犬で、縄文犬と同系統である可能性強いが、形質・系統の詳細についてはさらに検討を要する。

陸生哺乳類では、ほかにケナガネズミとその他のネズミ科・オオコウモリ科が若干検出されている。ケナガネズミはリュウキュウヤマガメと同様の鬱蒼とした照葉樹林を生息地とするが、出土数はリクガメ類に比べてごくわずかであった。なお、製品としてニホンジカの角が1点出土している。ヤマドリ？と同様に九州方面から持ち込まれたものと推定される。

海生哺乳類ではジュゴン、イルカ類、クジラ類が検出された。いずれも最小個体数は1～2と少ないが、破片は普通であった。

b. 水洗選別資料

試掘穴No.143の「曾畑層」から採取された2点の堆積物サンプル（A・B）の水洗選別によって、多数の小型骨が回収されている（表47・48）。とくにサンプルBからの検出数が多い。いずれも魚類を主体として、イノシシも多くみられる。サンプルBではリクガメ類・ヘビ類も普通であり、ほかにウミガメ類・イルカ類およびヒトの歯がわずかに検出されている。ピックアップ資料と比較すると、魚類・イノシシが主体をなし、リクガメ類を普通に伴う点では共通しているが、魚骨の比率がけっこう高い。これは、以下に述べるように、ピックアップでは見落とされてしまうような小型魚骨が多数回収されているためと考えられる。

魚類の内容をみると、サンプルAではハタ科・ニシン科が普通であり、ほかにサメ類・ウツボ科・フエフキダイ科・ブダイ科・モンガラカワハギ科・ハリセンボン科が検出された。サンプルBでもハタ科が最も多く、サメ類・ニシン科・ウツボ科・アジ科・フエフキダイ科・ブダイ科も普通であり、トウゴロウイワシ科・カマス科？・クロダイ属？・ペラ科？・モンガラカワハギ科・ハリセンボン科が若干混じる。全体として小型魚（小型種または幼魚）が主体である。ハタ科・ブダイ科は大小の個体が混在しているが、ハタ科では小型魚がとくに目立つ。これに対し、フエフキダイ科はすべて成魚クラスであり、傾向が異なる。

ピックアップ資料と比較すると、ハタ科の幼魚やニシン科のような小型魚が目立つ反面で、ハリセンボン科やペラ科が少ない。小型魚が多い点については、いうまでもなくピックアップ資料ではこれらが採集漏れとなっているためと考えられる。いっぽうハリセンボン科やペラ科が少ない点に

については、これらが大型魚に偏っていたためとも考えられるが、水洗選別したサンプル量が少ないことから、偶然の偏りに起因する可能性も考えられる。

これまでに水洗選別で多数の小型魚骨が検出された例としては、縄文時代後期の伊是名貝塚（金子2001）および津堅島キガ浜貝塚（沖縄県教育委員会編1978、菅原2006）がもっとも古い。いっぽう、爪形文土器期の野国貝塚 B 地点Ⅳa 層（盛本2004）および新城下原遺跡（金子・久貝2006）でも水洗選別が行われているが、魚骨はほとんど検出されていない。したがって本遺跡の事例は、沖縄における小型魚類の本格的な利用の開始期が曾畑式期に求められること、またこの段階ですでに大小さまざまな魚類の捕獲に適した多様な漁労技術が存在したことを示唆している。なお、伊是名貝塚では小型のハタ科・ブダイ科が多数検出されている点で本遺跡と類似しており、両者の関連に関心もたれる。

なお、黒住耐二氏が貝類分析用に第14層より採集したブロックサンプル（1350cc。最小メッシュ 1mm 使用）を観察させていただいた結果、魚骨は少なく、サメ類歯 3 点、タイ型（フエフキダイ科？）歯 5 点、ハタ科主上顎骨左右各 1 点、ハリセンボン科棘 1 点が得られたのみであった。上記のサンプル A・B の体積や黒住氏のサンプルとの層位的・位置的な関係を確認していないため、直接の比較はできないが、「曾畑層」における魚骨の包含状況にはかなりのムラがあった可能性も考えられる。

II. 砂丘区

砂丘区では、E-20グリット「貝集積土坑」をはじめとする遺構および遺構外の堆積層から多数の骨類が採集されている。また、F-19グリット「井戸状遺構」からは 1 体分のイヌの骨が交連状態で検出されている。ここではそれぞれに分けて、分析結果を記載する。

1. 「貝集積土坑」

(1) 資料と分析方法

この遺構は E-20グリットの中央付近から検出された。直径約 2m、深さ約 50cm のほぼ円形で、覆土内に貝殻や骨が高密度で包含されていた。周辺に柱穴があることから、円形整穴住居跡の可能性が指摘されている（北谷町編2005）。面縄前庭式土器を伴う。発掘は、まずサブトレンチが東西・南北に入れられ、さらに北西側 1/4 が掘り下げられている。また南東区画の覆土内より炉が検出されている（「炉 8」）。資料は「西側」・「東側」・「北側」・「北西側」・「炉 8 周辺」に分けて採集されている。

資料の採集方法は、ピックアップと水洗選別が併用されている。水洗選別による採集資料について、試験フルイを使用して再度篩別を行った結果、4mm メッシュを通過するものは多数であったが、2mm メッシュを通過したのほぼ微小骨片のみであったことから、おそらく 2～3mm 目程度のフルイが使用されたと推定される。

ピックアップ資料については、これまでにほぼ全ての資料の分析を終えているが、水洗選別資料については、これまでに分析を終えたのは全体の 56%（重量比）である（表50）。同定対象部位・同定方法については、基本的に低湿地区と同様である。なお、ピックアップ資料・水洗選別資料ともに、層別に分けられているものと、一括されているものがあるが、ピックアップ資料については

層別の集計は行わなかった。

(2) 分析結果

魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類が同定された。全体的な組成 (MNI) をみると、ピックアップ資料では魚類が31と圧倒的に多く、以下リクガメ類4、イノシシ3、ヘビ類・ネズミ亜科・イヌ・クジラ類が各1である (表49)。水洗資料では魚類が54とさらに多く、ほかはリクガメ類・イノシシ各2、ヘビ類1と少ない (表51)。なお、採集資料では確認されなかったが、現地での観察によれば、未発掘部分の覆土中に人骨数点とジゴンの頭蓋骨が含まれていることを確認している。

魚類の組成をみると、ピックアップ資料ではブダイ科が14 (アオブダイ属13、イロブダイ属1) で圧倒的に多く、以下ハタ科5、フエフキダイ科・ハリセンボン科各3、クロダイ属2、他はすべて1である。水洗資料でもブダイ科が20 (アオブダイ属18、ミゾレブダイ・ブダイ属各1) とさらに卓越し、以下ハタ科6、フエフキダイ科5、アイゴ属・ベラ科各3、ニシン科・ウナギ属各2、他はすべて1である。なお、ニシン科にはサツパに近似する角骨のほか、これとは別種と考えられる大型で頑丈な尾椎があり、「ニシン科A」とした。ドロクイの可能性もある。アジ科腹椎には、マアジに近似するものと、マアジに似るが椎体が短いものの2タイプがあり、後者を「アジ科A」、前者を「アジ科B」とした。いずれもマアジとは別種と思われる。

魚類主要種のサイズをみると、アオブダイ属は下咽頭骨の歯列面幅はピックアップ資料4.7~10.6、水洗資料4.3~7.5で、小型~中型の個体が大半であり、とくに小型魚が多い。ハタ科も小~中型が主体であり、とくに水洗資料では歯骨連合部高3.0~4.7mm程度の小型魚が大多数を占める。フエフキダイ科は大小の個体が混在しており、水洗資料では若魚が大半だが、ピックアップ資料ではハタ科やブダイ科に比べて大型の個体もやや目立つ。ベラ科・アイゴ属・ニザダイ科も小型魚が大半である。

リクガメ類 (おそらくリュウキュウマガメ) とイノシシは全身の骨格がみられ、部位組成にとくに偏りはないようである。イノシシは焼骨が目立った。

(3) 「貝集積土坑」の脊椎動物遺体群の特徴

低湿地区と比較すると、魚類が多く、とくにブダイ科が圧倒的に卓越する点、ベラ科・ハリセンボン科が少ない点で、明確な違いが認められる。こうした特徴は縄文時代中期以降の諸遺跡に一般的のものであり、曾畑式期にみられた特異性は、本遺構ではかなり薄くなっている。ただし、ハタ科とリクガメが多い点は低湿地区と共通しており、曾畑式期に引き続き、本遺跡を特徴づける傾向といえそうである。また、すでに述べたとおり、ハタ科が多い点は同時代の古我地原貝塚と類似しており、この時代の特徴である可能性も考えられる。

2. 遺構外出土資料

(1) 資料と分析方法

ここでは「貝集積土坑」以外から採集された資料を「遺構外出土資料」として一括した。これらの資料の中には、厳密には柱穴などの遺構内出土資料も若干含まれるが、その数はごく少ない。

遺構外出土の骨の分布状況を見ると、試掘穴No. 1~試掘穴No. 3、ATP・BTP、C-17~24グリット、D-17~19グリット、E-14~23グリット、F-19グリット、G・H-19グリットなど広い範囲から出土しているが、とくにC~F-19・20グリットに集中している。層位・年代的な検討は今後の課題

だが（このため表54～表64に示した層名は仮のものである）、上記集中範囲ではとくに第7層（仮層名の第4層）からの出土量が多い。年代的には、全体として縄文時代中期から弥生時代相当期にわたる資料が含まれていると考えられるが、上記集中範囲では縄文時代後期～晩期の資料が主体をなしている可能性が高い。

資料の大部分はピックアップで採集されたものだが、E列トレンチの壁面4箇所から採取したブロックサンプルの水洗選別によって若干の資料が得られている。

なお、遺構外出土資料の同定については、今後さらに検討を要する部分がある。また、上記のとおり、層序に関する詳細な検討も今後の課題であり、組成の検討に際しては層準を区別せず、全資料を一括して扱っている。したがって、ここで示した同定結果・および記載は暫定的なものであり、今後の分析によってある程度修正される可能性がある。

(2) 分析結果（暫定結果）

a. ピックアップ資料

集計結果を表54～表64に示した。脊椎動物遺体全体の組成（MNI）をみると、魚類が約1100（暫定値。さらに要検討）で圧倒的に多く、次いでイノシシ149、リクガメ類48、ウミガメ類11、鳥類7、ネズミ科5、オオコウモリ科4、カエル類3、イヌ2、ジユゴン1である。ほかにヘビ類の椎骨が（総計685点）およびクジラ類の骨方が多数出土しているがMNIの算定が困難である。

魚類の内訳をみると、ブダイ科が350と最も多く、ベラ科が290、フエフキダイ科が174でこれに次ぐ。ハリセンボン科86、ハタ科50、クロダイ属39、モンガラカワハギ科34なども多い。

イノシシは左上腕骨遠位端で149個体が算定された。ただし、他の主要部位では歯が下顎M3で52（暫定値）、四肢骨でも50～60前後で、上腕骨に比べてかなり少ない。年齢構成の詳細は検討未了だが、下顎M₁が左右計104点あるのに対し、下顎dm₁は27点と少ないことから、大まかには成獣が主体であると推定される。

b. 水洗選別資料

分析結果を表52～表53に示した。縄文時代中期層準から採取したサンプルからの骨類の検出数はごく少なく、縄文時代晩期層準のサンプルでは皆無であった。これは、前者が砂丘、後者がバームと推定される堆積物（松田順一郎氏のご教示による）からのサンプルであり、人間の活動域からはずれていたことによるものかもしれない。

弥生時代相当期層準のサンプルではやや多くの骨が検出されたが、それでもハタ科・フエフキダイ科・ブダイ科・モンガラカワハギ科・ハリセンボン科・リクガメ類などが1～数点確認されたのみであった。サンプルを採取した層は腐植質の遺物包含層で、貝・土器なども多く含まれていたことから、この時期における本遺跡での漁労（魚類利用）や狩猟活動の低下を示す可能性がある。

(3) 遺構外出土の脊椎動物遺体群の特徴

ピックアップ資料を「貝集積土坑」と比較すると、魚類が圧倒的に多く、イノシシがこれに次ぐ点では共通するが、リクガメ類は他の遺跡に一般的なレベルまで減少する。魚類の内容をみても、ハタ科が減少し、ブダイ科を筆頭にベラ科・フエフキダイ科を加えた3種が組成の大半を占めており、サンゴ礁海岸の遺跡に普遍的なパターンとなる。このように遺構外出土資料では、低湿地区や「貝集積土坑」にみられた本遺跡の独自性はほぼ完全に失われ、ごく平均的な内容に変化している。

なお、魚類ではベラ科の急増が目立ち、他のサンゴ礁海岸の遺跡よりもかなり高い値となっているが、この点についてはベラ科の詳細なタイプ分析を踏まえた上で改めて検討したい。

3. F-19グリット「井戸状遺構」から出土したイヌに関するコメント

F-19グリット「井戸状遺構」(第86図)では、覆土の中層よりイヌの全身骨格が検出された。骨格は交差状態を良く保っており、おそらく埋没時の体勢がほぼ保存されていると推定される。頭骨と環椎がやや離れており、他にも一部の部位が本来の位置からずれているが、埋没後の二次的な移動によるものであろう。横臥姿勢だが、首～頭はまっすぐに伸びて背側に強く屈曲しており、不自然な姿勢であることから、埋葬されたものかは微妙である(個人的な印象としては、井戸に投げ込まれたまま埋没したもののように見える)。永久歯の萌出および四肢骨骨端の癒合は完了しており、成獣である。右脛骨には骨幹の湾曲と膨らみがみられ、骨折治癒などによる変形と考えられる。実物標本の検討が未了のため、詳細の記載は改めて行うこととしたい。沖縄の縄文時代～平安時代相当期遺跡のイヌは散乱状態で出土するのが一般的であり、本資料がこの時代のものであるとすれば、この時期のイヌの形質的特徴を知るうえできわめて貴重な標本である。

謝辞：調査・分析に際しては、中村 憲氏・東門研治氏・鳥袋春美氏(北谷町教育委員会)、西本豊弘氏・小林蘭子氏(国立歴史民俗博物館)、辻 誠一郎氏(東京大学)、黒住耐二氏(千葉中央博物館)、松田順一郎氏(東大阪市文化財協会)、江田真毅氏(鳥取大学)より多くのご教示・御協力を賜った。とくに鳥袋春美氏には、今回の同定・集計ほか一連の分析作業に際して全面的なご支援・ご教示を賜った。本遺跡の骨の出土量は膨大であり、鳥袋氏のバックアップがなければ全体にわたる分析はとうてい不可能であった。末筆ながら、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 沖縄県教育委員会編(1978)『津堅島キガ浜貝塚』沖縄県教育委員会。
- 金子浩昌(1987)「節足・脊椎動物遺存体」『石川市古我地原貝塚-沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)-』沖縄県教育委員会、pp.363-387。
- 金子浩昌(1996)「平敷屋トウバル遺跡出土の動物遺体(軟体動物を除く)」『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県教育委員会、pp.168-205。
- 金子浩昌(2001)「伊是名貝塚の動物遺体」『伊是名貝塚』勉誠出版、pp.346-361。
- 金子浩昌・久貝英嗣(2006)「動物遺体」『新城下原第二遺跡-キャンピング場整備工事現場建設に係わる緊急発掘調査報告-』沖縄県立旭琉文化財センター、pp.261-285。
- 川島由次・村岡 誠(1984)「野国貝塚B地点出土の獣骨について」『野国-野国貝塚B地点発掘調査報告-』沖縄県教育委員会、pp.181-199。
- 小林桂助(1983)『原色日本鳥類図鑑 新訂増補版』保育社。
- 茂原信夫・土肥直美(2003)「笠利町字宿小学校構内遺跡出土の埋葬犬骨(縄文時代前期、鹿児島県)」『奄美考古5』53-60。
- 菅原広史(2006)「津堅島における生業と環境-津堅島キガ浜貝塚出土動物遺体の再分析データを基に-」第10回動物考古学研究会発表要旨。

- 北谷町編 (2005) 『低湿地区保全整備基本構想策定業務報告書』北谷町。
- 樋泉岳二 (2005) 「津堅貝塚から出土した脊椎動物遺体群」『津堅貝塚—中城港湾 (アギ浜地区) 港湾改修事業に伴う緊急発掘調査報告書—』勝連町教育委員会, pp.47-69。
- 中山清美 (2003) 「調査の概要」奄美考古5: pp.14-52。
- 名島弥生 (2003) 「宇宿小学校構内遺跡出土の動物遺存体について」奄美考古5: pp.61-72。
- 林 良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂 (1977) 「日本産イノシシの歯牙による年令と性の判定」日本獣医学雑誌39(2): pp.165-174。
- 前田喜四雄 (1986) 「翼手類 (目)」『蘭の比較解剖学』医歯薬出版株式会社, pp.144-148
- 盛本 勲 (1984) 「動物遺体」『野国—野国貝塚B地点発掘調査報告—』沖縄県教育委員会, pp.23-68
- von den Driesch, A. (1976) "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites" Peabody Museum Bulletin 1, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.

表38. 伊礼原遺跡(低湿地区)の魚類遺体(全資料一括)

種別	部位	左	右	NSP	MNI
イタナギサ	骨	34	34	1	
メジロサズメ?	骨	26	26	1	
カホシロサズメ?	骨	1	1	1	
アオサズメ	骨	3	3	1	
ネズミサズメ	骨	7	7	-	
サメ類(その他)	骨	3	3	1	
サメ類	前(伊?不明)	14	116	-	
サメ類	骨(伊? A)	95			
サメ類	骨(伊? B)	5			
サメ類	骨(伊? C)	1			
トビエイ科A	骨	5	5	1	
トビエイ科B	骨	6	6	1	
トビエイ科	骨	12	12	-	
エイ目	骨	1	14	-	
エイ目	骨(伊? A)	10			
エイ目	骨(伊? B)	1			
エイ目	骨	2			
エイノサズメ	骨	9	9	-	
ウツボ科A	前鰓骨/皮	8	2	66	27
ウツボ科A	主上鰓骨				
ウツボ科B	前鰓骨	24	27		
ウツボ科	角骨	1	1	1	
ウツボ科	角骨	2	2	13	
ウツボ科	舌鰓骨	2	1		
ウツボ科	鱗骨	4			
ウツボ科	鱗骨	1	1	1	
カマス科	前上鰓骨	1	0	2	1
カマス科	鰓骨	1	0		
ハタ科A	前上鰓骨	40	31	372	58
ハタ科A	鰓骨	47	66		
ハタ科A	角骨	13	13		
ハタ科A	前鰓骨	11	13		
ハタ科A	主鰓蓋骨	7	8		
ハタ科B	前上鰓骨	1	1		
ハタ科B	鰓骨	0	1		
ハタ科B	角骨	1	2		
ハタ科B	前鰓骨	1	1		
ハタ科B	主鰓蓋骨	3	2		
ハタ科	主上鰓骨	11	16		
ハタ科	角骨	7	10		
ハタ科	鰓骨	19	17		
ハタ科	第1椎骨	1			
ハタ類	鱗骨	15			
ハタ類	鱗骨	12			
ハタ類?	鱗骨	0	12		
ギンガメアジ属A	鰓骨	0	1	4	2
ギンガメアジ属A	角骨	0	2		
ギンガメアジ属A	方骨	1	0		
ギンガメアジ属B	主上鰓骨	1	0	7	2
ギンガメアジ属B	前上鰓骨	1	2		
ギンガメアジ属B	角骨	0	1		
ギンガメアジ属B	前鰓骨	1	0		
ギンガメアジ属B	主鰓蓋骨	0	1		
ギンガメアジ属	主上鰓骨	1	1	69	
ギンガメアジ属	前上鰓骨	1	2		
ギンガメアジ属	鰓骨	3	1		
ギンガメアジ属	角骨	1	0		
ギンガメアジ属	方骨	2	1		
ギンガメアジ属?	鱗骨	10			
ギンガメアジ属?	鱗骨	6			
ギンガメアジ属?	鱗骨	40			
アジ類	鱗骨	1	4	1	
アジ類	鱗骨	3			
フエダイ科	前上鰓骨	0	1	4	1
フエダイ科	鰓骨	0	1		
フエダイ科	方骨	1	0		
フエダイ科?	鱗骨	1	1		
ヨシシマクログイ	前上鰓骨	0	2	7	2
ヨシシマクログイ	鰓骨	1	2		
ヨシシマクログイ	鱗骨	1	2		
フエフキダイ属A	前上鰓骨	46	77	73	46
フエフキダイ属A	前上鰓骨	3	4	2	1
フエフキダイ属C	前上鰓骨	1	2	4	
フエフキダイ科	主上鰓骨	7	10	180	
フエフキダイ科	鰓骨	25	19		
フエフキダイ科	角骨	5	9		
フエフキダイ科	方骨	11	9		

(右欄につづく)

表38 (つづき)

種別	部位	左	右	NSP	MNI
フエフキダイ科	口蓋骨	4	7		
フエフキダイ科	前鰓蓋骨	6	11		
フエフキダイ科	主鰓蓋骨	8	12		
フエフキダイ科?	鱗骨	6			
フエフキダイ科?	鱗骨	5			
クロダイ属	主上鰓骨	1	1	34	10
クロダイ属	前上鰓骨	4	10		
クロダイ属	鰓骨	8	5		
クロダイ属	角骨	1	0		
クロダイ属	方骨	0	1		
クロダイ属	口蓋骨	0	1		
クロダイ属	主鰓蓋骨	1	1		
タイ目	尾椎	24	24		
マグロ類(他)	鱗骨	3	3	1	
アイゴ属	鱗骨	1	3	1	
アイゴ属	鱗骨	2			
ニザダイ科	尾椎	2	2	1	
ペラ科(コブダイ類)	上鰓鰓骨	13	13	82	38
ペラ科(コブダイ類)	下鰓鰓骨	36			
ペラ科(タキペラ類)	下鰓鰓骨	2	2	2	
ペラ科A	下鰓鰓骨	1	1	1	
ペラ科B	上鰓鰓骨	1	8	11	8
ペラ科B	下鰓鰓骨	1			
ペラ科(その他)	上鰓鰓骨	7	2	10	8
ペラ科(その他)	下鰓鰓骨	8			
ペラ科	主上鰓骨	1	0	54	
ペラ科	前上鰓骨	7	7		
ペラ科	鰓骨	5	10		
ペラ科	犬歯	0	14		
ペラ科	角骨	0	0		
ペラ科	方骨	0	0		
ペラ科	前鰓蓋骨	2	1		
ペラ科	主鰓蓋骨	1	0		
ペラ科?	下鰓鰓骨	1			
ペラ科?	鱗骨	5			
イロブダイ属	前上鰓骨	1	1	5	1
イロブダイ属	鰓骨	1	0		
イロブダイ属	下鰓鰓骨	1			
イロブダイ属	下鰓鰓骨	1			
アオブダイ属	前上鰓骨	7	8	65	12
アオブダイ属	鰓骨	5	6		
アオブダイ属	上鰓鰓骨	9	7		
アオブダイ属	下鰓鰓骨	12			
ブダイ科	主上鰓骨	2	1	15	
ブダイ科	角骨	1	1		
ブダイ科	方骨	1	0		
ブダイ科	前鰓蓋骨	1	1		
ブダイ科	主鰓蓋骨	0	1		
ブダイ科	鱗骨	1			
ブダイ科	尾椎	5			
モンガラカワハギ科	尾椎	5	5	5	
ハリセンボン科	前上鰓骨	41	179	88	
ハリセンボン科	鱗骨	56			
ハリセンボン科	前上鰓骨/鱗骨	29			
ハリセンボン科	角骨	0	1		
ハリセンボン科	舌鰓骨	1	1		
ハリセンボン科	鱗骨	1	1		
フグ科	前上鰓骨	1	1	9	3
フグ科	鰓骨	3	1		
フグ科	鱗骨/鱗片	1	1		
フグ科	口蓋骨	0	1		
フグ科	舌鰓骨	0	1		
フグ科/ハリセンボン科	鱗骨	1	4	4	
真骨類(未決定)	前上鰓骨	1	11		
真骨類(未決定)	鰓骨	1			
真骨類(未決定)	角骨	1			
真骨類(未決定)	方骨	1	1		
真骨類(未決定)	前鰓蓋骨?	1			
真骨類(未決定)	主鰓蓋骨	1			
真骨類(未決定)	鱗骨	2			
真骨類(未決定)	尾椎	3			
真骨類(未決定)	鱗骨	4	4		
真骨類(同定不可)	前上鰓骨	1	27		
真骨類(同定不可)	角骨	1	1		
真骨類(同定不可)	前鰓蓋骨	1			
真骨類(同定不可)	第1椎骨	1			
真骨類(同定不可)	鱗骨	22			
合計		1537	1537	280	

表39. 伊礼原遺跡(低湿地区)の両生類・爬虫類遺体
(全資料一括)

種別	部位	左	右	NSP	MNI
カエル類	仙椎	1	3	1	
	鱗片骨	1			
	鱗骨	1			
ヘビ類	椎骨	6	6	0	1
リュウケツウヤマガシ	高口骨+腹甲骨	5	1	2749	75
	前鼻口骨	/	/	1	
	上顎骨	/	/	2	
	尺骨	1	/	1	
	脛骨	4	/	4	
	蹠骨	/	/	1	
	大腸骨	2	/	2	
	上顎骨/大腸骨破片	4	4		
	脛骨	/	/	2	
	蹠骨破片	54			
	鱗骨破片	434			
	趾骨破片	611			
	椎骨破片	93			
	椎骨破片(前後尾)	23			
	鱗骨破片	4			
	背甲破片	121			
	上腹板	44	/	36	
	内腹板	22			
	中腹板	76	/	69	
	中腹板(左右不明破片)	12			
	下腹板	63	/	54	
	下腹板(左右不明破片)	2			
	肘状蓋板	54	/	45	
	肘状蓋板(左右不明破片)	5			
	腹甲破片	272			
	甲壳類+腹甲類	628			
アオウミガメ	下顎骨	2	/	2	(2)
ウミガメ類(その他)	下顎骨	1	/	1	(1)
ウミガメ類	上顎骨	1	/	609	17
	下顎骨	1	/	1	
	下顎骨?破片	1	/	1	
	鱗骨	1	/	3	
	前頰骨	1	/	1	
	後部鱗骨	1	/	3	
	高口骨+腹甲骨	2	/	3	
	高口骨	1	/	6	
	背甲骨	4	/	1	
	肋骨	1	/	1	
	前鼻口骨	5	/	5	
	前鼻口骨(左右不明破片)	2			
	上顎骨	13	/	17	
	上顎骨(左右不明破片)	3			
	脛骨	2	/	4	
	尺骨	6	/	7	
	中手骨?	3	/	3	
	蹠骨(趾骨?)	1	/	1	
	大腸骨	3	/	4	
	趾骨	1	/	2	
	趾骨	1	/	3	
	手足骨	1	/	1	
	指骨			23	
	末節骨	3			
	趾骨	2			
	趾骨	9			
	趾骨破片	49			
	趾骨破片	3			
	趾骨破片	136			
	背骨破片	3			
	上腹板	/	/	1	
	上腹板(左右不明破片)	1			
	内腹板	2			
	下腹板	1			
	肘状蓋板	2			
	腹甲破片	23			
	甲壳類片(消費不明)	187			
	部位不明破片	88			

表40. 伊礼原遺跡(低湿地区)の鳥類・哺乳類遺体
(イノシシを除く。全資料一括)

種別	部位	残存位置	左	右	NSP	MNI
カラス属	上顎骨		/	/	3	1
カラス属	尺骨	近位端	1			
カラス属?	尺骨	骨髄	1			
ウシ科	尺骨	完存	1	/	2	1
ウシ科	尺骨	完存	1	/		
	中手骨	完存	/	/	1	1
カニ科(日本産)	胸骨	完存	/	/	1	1
ヤマトリノ	大腸骨	完存	1	/	2	1
ヤマトリノ	中足骨	遠位端	1	/		
鳥類・両足不明	長後趾骨		6	6		
ケナガネズミ?	上顎切歯		1	/	9	2
ケナガネズミ?	上顎臼歯(前)		3	/		
ケナガネズミ?	上顎臼歯(中)		1	/		
ケナガネズミ?	下顎骨		/	/	1	
ケナガネズミ?	下顎切歯		/	/	1	
ケナガネズミ?	上顎骨	遠位端	/	/	1	
ケナガネズミ?	大腸骨	遠位端	1	/		
ケナガネズミ?	脛骨	遠位端	2	/		
ネズミ科	上顎切歯		/	/	4	2
ネズミ科	下顎切歯		3	/		
オオコウモリ科	頰骨		2	/	3	1
オオコウモリ科	上顎骨	遠位端	/	/	4	1
	イヌ	上顎C	/	/	1	
	イヌ	脛骨	/	/	1	
	イヌ	脛骨	骨髄	1	/	
イルカ類	後頭骨破片		2	/	56	2
イルカ類	耳骨		/	/	1	
イルカ類	上顎骨破片		1	/		
イルカ類	頭骨破片		3	/		
イルカ類	歯		6	/		
イルカ類	連合頰骨		1	/		
イルカ類	連合頰骨破片		1	/		
イルカ類	椎骨		24	/		
イルカ類	肋骨破片		3	/		
イルカ類	椎骨破片		0	/		
イルカ類	肋骨		1	/		
イルカ類	肋骨破片		4	/		
クジラ類	頭骨破片		1	/	34	1
クジラ類	下顎骨破片		1	/		
クジラ類	部位不明破片		32	/		
ジュゴン	上顎骨		1	/	36	1
ジュゴン	上顎骨		1	/		
ジュゴン	椎骨		1	/		
ジュゴン?	肋骨破片		4	/	13	
ジュゴン?	椎骨		3	/		
ジュゴン?	部位不明破片		6	/		
ヒト	腕3中足骨	遠位端	1	/	1	1

表41. 伊礼原遺跡(低湿地区)のイノシシ上顎骨の詳細②

*○・アルファベットのあるものは歯が残存、アルファベットは歯の収斂段階 (金子 (1996) に準拠)

台帳 番号	地区	標準	左右	数	性	備考	歯骨残存範囲、歯の残存状態および収斂段階*													
							U1	U2	U3	C	P1	P2(am)	P3(am)	dm4	P4	M1	M2	M3		
6194	中央区	骨伝導	R	1																
6194	中央区	骨伝導	L	1	♂					欠		○								
6624	中央区	骨伝導	L	1		6624・5234埋合														
7532	中央区	骨伝導	R	1																
7572	中央区	骨伝導	R	1																k
7581	中央区	骨伝導	L	1		幼獣(乳歯)														g
8367	中央区	骨伝導	L	1						欠	○	○	欠							e d
929	中央区	骨伝導上部	L	1																e h
6262	中央区	調整時	R	1									○							g i
8428	中央区	粘質	L	1																d
8526	中央区	粘質	L	1		幼獣(乳歯)														d
952	中央区	粘質(埋合)	L	1	♀					欠	○		○							d
953	中央区	粘質(埋合)	L	1	♀					欠	○		欠		○					d
940	中央区	不明	R	1	♀															e
940	中央区	不明	R	1	♂					欠		○								
940	中央区	不明	R	1																g
940	中央区	不明	R	1																c
940	中央区	不明	L	1		幼獣(乳歯)														d
940	中央区	不明	L	1																f
940	中央区	不明	L	1																h e
940	中央区	不明	L	1																j 欠
940	中央区	不明	L	1																c f
940	中央区	不明	L	1		幼獣(乳歯)						○	○							欠 g
940	中央区	不明	L	1					○	欠	欠			○	○					
940	中央区	不明	R	1																f
940	中央区	不明	R	1																g
940	中央区	不明	R	1		幼獣(乳歯)														
950	中央区	不明	L	1	♂					欠			○	○	欠	j				c
950	中央区	不明	R	1		幼獣(乳歯)						○	○							e a
950	中央区	不明	L	1								○	○							e
950	中央区	不明	R	1								○	○							e f d a
950	中央区	不明	R	1									○	○						c a
950	中央区	不明	L	1		幼獣(乳歯)							○	○						c
950	中央区	不明	L	1																e
4721	中央区	不明	R	1																g h g w
4721	中央区	不明	L	1	♂					欠		○	○							g h g
5775	中央区	不明	R	1																e f e c
6096	中央区	不明	R	1																欠 f d
6163	中央区	腐落土	R	1		幼獣(乳歯)							○							
6282	中央区	腐落土	L	1	♂					欠	欠	○	欠							
7866	中央区	腐落土	L	1																g h g h
2102	中央区	木の葉	L	1		幼獣(乳歯)														h c
2144	中央区	木の葉	R	1																
1442	中央区	緑灰色砂層	R	1																g h
3871	中央区	緑灰色砂層	L	1								○								g i h
3871	中央区	緑灰色砂層	R	1																g h
3871	中央区	緑灰色砂層	R	1																
4404	中央区	緑灰色砂層	L	1																h g
4741	中央区	緑灰色砂層	L	1																欠
4801	中央区	緑灰色砂層	L	1																e h
4839	中央区	緑灰色砂層	R	1	♂					欠	欠	○	○							
4839	中央区	緑灰色砂層	R	1																d
4856	中央区	緑灰色砂層	R	1																f c
4882	中央区	緑灰色砂層	R	1	♀					欠		○	○							g
4885	中央区	緑灰色砂層	L	1		幼獣(乳歯)							○	○						h
4885	中央区	緑灰色砂層	L	1						欠	○	○	○							e h e a
4885	中央区	緑灰色砂層	L	1	♂															g f e a c
4897	中央区	緑灰色砂層	L	1																g j h f
4943	中央区	緑灰色砂層	L	1																g j h f
5466	中央区	緑灰色砂層	L	1																g j h f
5475	中央区	緑灰色砂層	L	1		幼獣(乳歯)						○								
5475	中央区	緑灰色砂層	R	1																f
5475	中央区	緑灰色砂層	L	1																j h
5484	中央区	緑灰色砂層	R	1																k
5484	中央区	緑灰色砂層	L	1	♂					欠	欠	○	○							
5485	中央区	緑灰色砂層	L	1																f
5641	中央区	緑灰色砂層	R	1	♂					欠	○	○	○							欠
5790	中央区	緑灰色砂層	L	1																h h f
6084	中央区	緑灰色砂層	L	1																欠 g c
6100	中央区	緑灰色砂層	L	1																c d c
6297	中央区	緑灰色砂層	R	1																f d
5099	東区	骨伝導	R	1																欠
5099	東区	骨伝導	R	1																d 欠
5100	東区	骨伝導	L	1																f i e
5729	東区	骨伝導	L	1																g i e
5729	東区	骨伝導	L	1																h f
5729	東区	骨伝導	L	1								欠	○							

表41-②へつづく

表44. 伊礼原遺跡(低湿地区)のイノシシ下臼齒数(全資料一括)

部位	顎骨		遊離歯		合計		MNI
	左	右	左	右	左	右	
下顎 dm4	19	25	16	13	35	38	38
下顎 P4	60	52	23	30	83	82	(83)
下顎 M1	79	72	47	52	126	124	(126)
下顎 M2	74	68	91	74	165	142	(165)
下顎 M3	76	72	95	124	171	196	196

表45. 伊礼原遺跡(低湿地区)のイノシシ遺体(顎・歯以外、全層準一括)

*位置のp・dは、それぞれ近位端・遠位端(それぞれ骨端未癒合および骨端関節を欠損する資料を含む)。

部位	位置*	TP-11		西区		中央区		東区		南区		北区		その他		不明	合計		
		左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右				
頭蓋骨	破片数	13	58	706		30		176		1				68			1052		
下顎骨	破片数	9 / 13		252 / 203		9 / 12		88 / 84		2 / 1				15 / 15			375 / 328		
	左右不明	(2)	(7)	(122)		(10)		(54)		(1)				(9)			(205)		
歯槽		8		121		24		38						5			186		
歯槽		1		15				4		1				4			26		
椎骨	椎体	12		36		450		20		112		4		4			111	749	
肋骨	破片数	23		25		338		14		118				2			41	561	
肩甲骨	関節部	1	2	6	5	93	89	10	6	35	25	1			6	9	154	137	
	p		2	2	7	96	115	8	8	36	28	2			20	7	166	167	
上腕骨	p	1	1	7	17	185	240	16	9	67	60	3	3		1	23	17	311	348
	d	1	1	7	3	105	89	4	5	25	22	1			1	8	5	152	126
尺骨	d		1	7	4	85	76	4	3	18	21				1	9	7	123	113
	p			6	8	97	67	1	4	41	19			1		6	13	154	106
橈骨	d			8	7	55	50	1	3	32	16			1		8	7	103	83
	p			1	1	14	3	118	104	9	5	61	29	1			17	14	220
大腿骨	p	1		5	2	85	71	7	5	32	32					9	7	139	117
	d	1		8	2	110	95	5	4	37	36	1		1		14	13	175	140
胫骨	p	1	2	5	15	146	117	8	6	39	48	1				20	12	220	200
	d	1	1	2	13	125	111	7	8	44	50		1	1		22	20	202	204
腓骨	p			1		12	15			10	4					2		25	19
	d					8	24	2		9	8					5	1	24	31
踵骨				1	2	71	65	4	2	23	16					2	9	101	94
距骨				3	54	52	1	3	11	16						5	5	71	79
手根/足根骨				6	46	4	20	1								5		81	
中手/中足骨		1	19	282	16	74										30		402	
基節骨		1	7	48	5	11										3		76	
中節骨			3	17	2	2							1			5		30	
末節骨			1	5		1												7	
合計		73	359	5410	303	1731	25	14	637									8551	

表46. 伊礼原遺跡(低湿地区)の脊椎動物遺体の組成 (全資料一括)

分類群	NSP	(%)	* MN	(%)
軟骨魚類				
イタチザメ	34	(0.21)	1	(0.13)
メジロザメ?	26	(0.16)	1	(0.13)
ホウゴザメ?	1	(0.01)	1	(0.13)
アオザメ	3	(0.02)	1	(0.13)
ネズミザメ	7	(0.04)	-	-
サメ類(その他)	3	(0.02)	1	(0.13)
サメ類	115	(0.7)	-	-
トビエイ科	23	(0.14)	2	(0.25)
エイ目	14	(0.09)	-	-
エイ/サメ類	9	(0.06)	-	-
硬骨魚類				
ウツボ科 A	66	(0.4)	27	(3.42)
ウツボ科 B	1	(0.01)	1	(0.13)
ウツボ科	13	(0.08)	-	-
ダツ科	1	(0.01)	1	(0.13)
カマス科	2	(0.01)	1	(0.13)
ハタ科	372	(2.28)	58	(7.36)
ギンガメアジ属 A	4	(0.02)	2	(0.25)
ギンガメアジ属 B	7	(0.04)	2	(0.25)
ギンガメアジ属	69	(0.42)	-	-
アジ類	4	(0.02)	1	(0.13)
フエダイ科	4	(0.02)	1	(0.13)
ヨコシマクロダイ	7	(0.04)	2	(0.25)
フエフキダイ属 A	73	(0.45)	46	(5.83)
フエフキダイ属 B	7	(0.04)	4	(0.51)
フエフキダイ属 C	2	(0.01)	1	(0.13)
フエフキダイ科	150	(0.92)	-	-
クロダイ属	34	(0.21)	10	(1.27)
タイ型	24	(0.15)	-	-
マダコ類似種	3	(0.02)	1	(0.13)
アヒコ属	3	(0.02)	1	(0.13)
ニガダイ科	2	(0.01)	1	(0.13)
ベラ科(コアベラ型)	62	(0.38)	36	(4.56)
ベラ科(タキベラ型)	2	(0.01)	2	(0.25)
両生類				
カエル類	3	(0.02)	1	(0.13)
爬虫類				
ヘビ類	6	(0.04)	1	(0.13)
リュウキュウヤマガメ?	2749	(16.8)	75	(9.51)
アオウミガメ	2	(0.01)	(2)	(-)
ウミガメ類(その他)	2	(0.01)	(1)	(-)
ウミガメ類	610	(3.73)	17	(2.15)
鳥類				
カラス属	3	(0.02)	1	(0.13)
ウシ科	2	(0.01)	1	(0.13)
サギ科	1	(0.01)	1	(0.13)
カモ科(カモ類)	1	(0.01)	1	(0.13)
ヤマドリ?	2	(0.01)	1	(0.13)
哺乳類				
ケナガネズミ?	9	(0.06)	2	(0.25)
ネズミ科(その他)	4	(0.02)	3	(0.38)
オオコウモリ科	3	(0.02)	1	(0.13)
イヌ	4	(0.02)	1	(0.13)
イノシシ	11307	(69.2)	348	(44.1)
ニホンジカ	(1)	(-)	(1)	(-)
ジュゴン	49	(0.3)	1	(0.13)
イルカ類	56	(0.34)	2	(0.25)
クジラ類	34	(0.21)	1	(0.13)
合計	16342	(100)	789	(100)

表47. 伊礼原遺跡(低湿地区)(試掘穴 No.143)堆積物サンプル A から水洗選別で検出された脊椎動物遺体

和名	部位	位置	左右	N	計測	備考
ミズウニ科?	上蓋	-	L	1	L=4.8	小型
サメ類	椎骨	-	-	1	D=40	大型、メジロザメ?
サメ類	椎骨	-	-	1	D=25	中型
板蛭類	椎骨	-	-	2	D=6.0-8.3	エイ類または小型のサメ類
ニシン亜科	基椎環骨	-	-	1	-	マイワシ近似
ニシン科	頭椎	-	-	2	-	-
ニシン科	尾椎	-	-	2	-	-
ウツボ科	歯骨	-	R	1	-	中型
ハタ科	前上顎骨	-	L	1	-	小型種/未成熟
ハタ科	歯骨	-	R	1	D=9.2	成熟
ハタ科	歯骨	-	R	1	D=6.3	成熟
ハタ科	方骨	-	L	1	-	成熟
ハタ科	方骨	-	L	1	-	小型種/未成熟
ハタ科	擬椎骨	-	L	1	-	小型種/未成熟
ハタ科	擬椎骨	-	R	2	-	小型種/未成熟
フエフキダイ科	主眼蓋骨	-	L	1	-	成熟
フエフキダイ科	上眼蓋骨	-	L	1	-	未成熟
モンガラカワハダ科	鱗	-	-	1	-	-
ハリセンボン科	鱗	-	?	1	-	-
真骨鱗(真骨)	鱗	-	?	1	-	タイ型
真骨鱗(真骨)	鱗	-	-	2	-	小型
真骨鱗(固定不可)	鱗	-	-	1	-	-
真骨鱗(固定不可)	鱗	鱗片	-	6	-	-
リュウキュウヤマガメ?	甲板	鱗片	?	2	-	-
イノシシ	上M2	-	R	1	L=15.2, B=12.1	-
イノシシ	下M2	-	L	1	-	-
イノシシ	大白歯	鱗片	?	1	-	-
イノシシ	肋骨	-	L	1	-	-
イノシシ	手袋骨	-	R	1	-	-
哺乳類	歯骨	鱗片	L	1	-	種、小型、幼獣?

表48. 伊礼原遺跡(低湿地区)(試掘穴 No.143) 堆積物サンプルB から水洗選別で検出された脊椎動物遺体

種名	部分	位置	左右	N	計測	遺体
メジロザメ属A	上顎歯	-	右	1	L=8.5	メジロザメ属?、小型
メジロザメ属A	上顎歯	-	右	1	L=8.0	メジロザメ属?、小型
メジロザメ属B	上顎歯	-	右	1	L=5.3	小型
サメ類	歯	破片	?	2		
ニシン類	椎骨	-	-	4	B=4±~12.2	エイ類または小型のサメ類
ニシン類	椎骨	-	-	1		
ニシン類	主軸歯骨	-	-	1		
ニシン類	椎骨	-	-	3		
ニシン類	尾椎	-	-	1		
ニシン類	尾椎	-	-	1		
ワウボ科	前肋骨板	-	-	1		
ワウボ科	肋骨+椎骨	-	右	1		
ワウボ科	肋骨	-	右	1		
ワウボ科	椎骨	-	右	4		
ワウボ科	方骨	-	右	1		
トウゴロウイワシ科?	椎骨	-	右	1		
カマス科?	歯	-	右	1		鱈
ハタ科	前上顎骨	破片	右	1		成魚
ハタ科	歯	-	右	1	D=7.2	成魚
ハタ科	歯	-	右	1	D=5.4	小型種/未成年
ハタ科	歯	-	右	1	D=3.3	小型種/未成年
ハタ科	歯	-	右	1	D=2.0	小型種/未成年
ハタ科	角骨	-	右	1	L=24.3	未成年
ハタ科	前脛骨	-	右	1		小型種/未成年
ハタ科	主脛骨	-	右	1		小型種/未成年
ハタ科	主脛骨	-	右	1		小型種/未成年
ハタ科	翼状骨	-	右	1		成魚
ハタ科	腹椎	-	右	2		
ハタ科	尾椎	-	右	1		
キンガメアジ属?	主脛骨	-	右	1		幼魚
キンガメアジ属?	主脛骨	-	右	1		幼魚
キンガメアジ属?	尾椎	-	右	2		幼魚
アジ科(小型種)	椎骨	-	右	1		
アジ科	腹椎	-	右	2		
アジ科	尾椎	-	右	1		
フコギイ属?	方骨	-	右	1		成魚
フコギイ属?	前上顎骨	-	右	1	L=45.0	成魚
フコギイ科	椎骨	-	右	3		成魚
フコギイ科	方骨	-	右	1		成魚
フコギイ科	主脛骨	-	右	1		成魚
ペラ科?	下顎歯?	破片	右	1		大型種
ペラ科?	上顎歯?	破片	右	1		小型種/未成年
アオダ目	下顎歯	-	右	1	L=10.5, B=15.3	幼魚
アオダ目	下顎歯	破片	右	2		成魚
アオダ目	前上顎骨	-	右	2		成魚・幼魚各1
ブダイ目	方骨	-	右	1		
ブダイ科?	腹椎	-	右	1		
ブダイ科?	尾椎	-	右	1		
モンガラカワハダ科	鱗	-	-	6		
ハリセンボン科	鱗	-	右	3		
真骨鱗(未同定)	主上顎骨	-	右	1		小型
真骨鱗(未同定)	主上顎骨	-	右	1		小型
真骨鱗(未同定)	前上顎骨	-	右	1		小型
真骨鱗(未同定)	歯	-	右	1		小型
真骨鱗(未同定)	歯	-	右	1		小型
真骨鱗(未同定)	角骨	-	右	3		P2 07(方)和近辺
真骨鱗(未同定)	角骨	-	右	1		P2 07(方)和近辺
真骨鱗(未同定)	背椎	-	右	2		小型
真骨鱗(未同定)	主脛骨	-	右	1		小型
真骨鱗(保原)	椎骨	-	-	23		小型
真骨鱗(同定不可)	椎骨	-	-	9		
真骨鱗(同定不可)	椎骨	破片	-	6		
ヒレ類	椎骨	-	-	17	OLPa=2.1±0.5	
フミガメ科?	不明	破片	?	5		
リュウキュウマダガモ?	鱗	鱗骨・真骨鱗	?	1		
リュウキュウマダガモ?	甲殻	破片	?	26		
ヒト	上顎M3	-	右	1		馬甲
イルカ	歯	-	?	1	L=24.8	
イノシシ	前肋骨	前肋骨部	右	1		
イノシシ	後肋骨	後肋骨	右	1		結合未適合
イノシシ	上顎I1	-	右	1		未萌出
イノシシ	上顎I1	-	右	1		
イノシシ	上顎I1	-	右	1		咬耗歯口
イノシシ	上顎P3	-	右	1		咬耗歯口
イノシシ	上顎M1	-	右	1		未萌出
イノシシ	上顎M1	-	右	1	L=12.1, B=10.5	咬耗歯口
イノシシ	下顎	連合部	L+R	1		
イノシシ	下顎C	-	右	1		咬耗あり
イノシシ	下顎C	-	右	1		確・未萌出/萌出中
イノシシ	下顎P3	-	右	1		未萌出
イノシシ	下顎P4	-	右	1	L=10.8, B=8.3	咬耗あり
イノシシ	下顎M1	-	右	1	L=11.3, B=8.1	W=
イノシシ	第4中手骨	近位端	右	1		
イノシシ	中手/中足骨	遠位端	右	1	Bp=12±	
イノシシ?	歯	不明	?	6		
イノシシ?	腹椎	椎骨	-	1		未適合
イノシシ?	腹椎	椎骨	-	1		未適合
イノシシ?	腹椎	椎骨	-	1		未適合
イノシシ?	肋骨	破片	?	2		

表50. 伊礼原遺跡(砂丘区) E-20グリット「貝集積」フルイ資料の重量と分析率

位置	層序	総重量	分析重量		分析率(%)
			11g	100	
西側	淡～濃灰色砂	7	0	0	
	濃灰色粘質砂	131	111	85	
	マンガン遊離灰色砂	26	25	96	
	マンガン遊離灰色粘質砂	92	0	0	
	合計	256	136	53	
東南	濃灰色粘質砂	39	22	56	
	マンガン遊離灰色砂	46	38	83	
	合計	85	60	71	
北西側	マンガン遊離灰色砂	69	68	99	
	掘り下げサンプル土	21	0	0	
	不明	647	291	45	
	合計	737	359	49	
総計		1196	673	56	

表51. 伊礼原遺跡(砂丘区) E-20グリット「貝集積」フルイ資料の同定結果①

種別	部位	西側		東南		北西側		不明	伊礼原遺	合計
		濃灰色粘質砂	マンガン遊離灰色砂	濃灰色粘質砂	マンガン遊離灰色砂	マンガン遊離灰色砂	不明			
メソゾイナ	上層部					1	1			2
粘粒	堆積	1								1
サツバ近縁種	角骨						1	/		1
ニシン科	腹骨					3				3
ニシン科?A	腹骨	5	1				1			7
ウツボ科	角骨						/	/		/
ウツボ科	腹骨						1			1
ウツボ科	椎骨									1
ウツボ科	角骨						1	/		1
ウツボ科	角骨						1	/	1	2
ウツボ科	腹骨	1					3			4
ウツボ科	腹骨						3			5
ウツボ科	腹骨	6		1			2		1	14
ダツ科	前上頸骨						2	4		1
トビウオ科	腹骨				4		1		9	12
ボソ科	腹骨	1								1
ハタ科 (マハタ型)	前上頸骨	1	/				3	/	1	4
ハタ科 (マハタ型)	腹骨	1	/				4	/	2	6
ハタ科 (マハタ型)	腹骨	1	/				1	/	1	1
ハタ科	前上頸骨	1	/			1	/			2
ハタ科	角骨									1
ハタ科	角骨			1	/		1	/		1
ハタ科	角骨					1	/			1
ハタ科	腹骨					1	/	2	1	3
ハタ科	腹骨	3					3		1	6
ハタ科	腹骨	1	1	2			12			18
アジ科A	腹骨	1					3			3
アジ科B	腹骨				3					3
アジ科	前上頸骨								1	1
アジ科	角骨						1	/		1
アジ科	角骨						1	/		1
アジ科	腹骨								2	2
アジ科?	腹骨	2	3			2		4		11
エモジ科	角骨						1	/		1
クロダイ属	角骨							/	1	1
クロダイ属	角骨	1	/							1
クロダイ属	角骨		/							1
フエボキダイ属	前上頸骨	1	/							1
フエボキダイ属	角骨									1
フエボキダイ属	口蓋骨	1	/			1	/	1	2	4
フエボキダイ科	前上頸骨	1	/			1	/	1	1	4
フエボキダイ科	腹骨	1	/			1	/	2		3
フエボキダイ科	角骨					1	/	2		3
フエボキダイ科	角骨	1	/			1	/	1		3
フエボキダイ科	腹骨	1		1		1		6		12
フエボキダイ科	腹骨					1		1	1	3
フエボキダイ科	腹骨	7		1		2		15		25
アイゴ属	椎骨	1	/							1
アイゴ属	主眼蓋骨								1	1
アイゴ属	第1椎骨									1
アイゴ属	腹骨	6	3	2			11	1	3	40
アイゴ属	腹骨	10	5	1			17	32	7	72
ニギザイ科	前上頸骨					1				1
ニギザイ科	主眼蓋骨							1		1
ニギザイ科	第1椎骨							1		1
ニギザイ科	角骨							1		1
ニギザイ科	腹骨	3		1						4
ニギザイ科	腹骨	11		2		8		14	3	38
ニギザイ科	腹骨	2								2

表51-2へ

表52. 伊礼原遺跡(砂丘区) Eトレンチで採集した堆積物サンプルの概要

試料 No.	位置	層相	年代	総重量 (g)	水洗後重量 (g)	遺失物		貝		土器		動物骨	魚骨
						g	%	2mm	4mm	4mm	4mm		
No.1	E-20東壁	砂礫	縄文中期	560	30	550	94.8	2	16.0	0	1.10	0	0
No.2	E-17北壁	砂礫	(縄文晩期)?	710	97	644	90.6	1	0	0	0	0	0
No.3	E-17北壁	腐植質砂	弥生	3300	569	2732	82.8	269	44.0	60.0	1.40	0.90	
No.4	E-17北壁	腐植質砂	弥生	2320	816	1706	73.5	406	12.8	60.5	4.85	0.35	

表53. 伊礼原遺跡(砂丘区) Eトレンチの堆積物サンプルから検出された脊椎動物遺体

試料	位置	年代	メッシュ	種類	部位	左右	数
No.1	E-20東壁	縄文中期	4mm	イノシシ	上顎 P3	R	1
No.1	E-20東壁	縄文中期	2mm	同定不可	不明破片		+
No.1	E-20東壁	縄文中期	1mm	同定不可	不明破片		+
No.2	E-17北壁	(縄文晩期)?	4mm	検出資料なし			-
No.2	E-17北壁	(縄文晩期)?	2mm	検出資料なし			-
No.2	E-17北壁	(縄文晩期)?	1mm	検出資料なし			-
No.3	E-17北壁	弥生	4mm	哺乳類・同定不可	不明破片		+
No.3	E-17北壁	弥生	4mm	ハタ型	踵骨		1
No.3	E-17北壁	弥生	4mm	フエフキダイト	前上肢骨破片	7	1
No.3	E-17北壁	弥生	2mm	タイ型	歯	7	1
No.3	E-17北壁	弥生	2mm	ペラ科	下顎歯骨破片		1
No.3	E-17北壁	弥生	2mm	アオブダイト	上顎歯骨破片		1
No.3	E-17北壁	弥生	2mm	真骨類・同定不可	椎骨		1
No.3	E-17北壁	弥生	1mm	ハタ科?	主上肢骨	L	1
No.3	E-17北壁	弥生	1mm	タイ型	歯	?	6
No.3	E-17北壁	弥生	1mm	ハリセンボン属	踵		1
No.3	E-17北壁	弥生	1mm	真骨類・同定不可	椎骨		1
No.4	E-17北壁	弥生	4mm	哺乳類・同定不可	不明破片		+
No.4	E-17北壁	弥生	4mm	リクガメ類	甲板破片		1
No.4	E-17北壁	弥生	2mm	モンガラワハキ科	歯		1
No.4	E-17北壁	弥生	1mm	タイ型	歯	?	1
No.4	E-17北壁	弥生	1mm	真骨類・同定不可	椎骨		3

表54. 伊礼原遺跡(砂丘区) 出土魚類遺体の同定結果 (CD収録)

表55. 伊礼原遺跡(砂丘区) 出土カエル類・ヘビ類遺体の同定結果

種類	トレンチ	層	部位	数	
カエル類	E-20	IV (仮)	四肢骨*	1	
	E-20	IV	上肢骨	2	
	E-20	崩落土	上肢骨	1	
	H-G-19	-	上肢骨	1	
	-	-	上肢骨	1	
	-	-	鱗尺骨	1	
合計					7
ヘビ類	1H	緑茶褐色層	椎骨	4	
	C-17	栗色土層	椎骨	2	
	C-18	栗色土層	椎骨	17	
	C-19	II	椎骨	5	
	C-19-20	盛採	椎骨	7	
	C-19-20・北ハ	IV (仮)	椎骨	31	
	C-18	人骨上部および周辺	椎骨	304	
	D-19	IV (仮)	椎骨	45	
	D-19	崩落土	椎骨	6	
	E-19	崩落土	椎骨	2	

種類	トレンチ	層	部位	数
ヘビ類	E-20	IV (仮) 石・貝累積	椎骨	12
	E-20	IV (仮)	椎骨	31
	E-20	IV (仮) 下	椎骨	30
	E-20	盛採・崩落土	椎骨	16
	E-20	伊址②	椎骨	3
	E-20	伊址③遷土	椎骨	1
	E-20	伊址④	椎骨	2
	E-20	伊址⑤	椎骨	1
	F-19東ハ	IV (仮)	椎骨	3
	F-19東ハ	V	椎骨	5
	F-19東ハ	灰色砂層	椎骨	1
	F-19東ハ	盛採・崩落土	椎骨	39
	F-19	井戸内	椎骨	11
H-G-19	盛採	椎骨	1	
-	不明	盛採	椎骨	10
-	-	不明	椎骨	86
合計				685

表57. 伊礼原遺跡(砂丘区)出土ウミガメ類遺体の同定結果 frは左右不破裂片。

トレンチ	層	項目	風口・ 西半片		尺骨		橋骨		上腕骨		趾骨		指骨 ♀	四肢骨 ♀	鱗骨 ♀	背甲板 ♀	胸甲板 ♀	肩/腹 甲板	背/腹 甲板	合計		
			左	右	左	右	左	右	左	右	左	右										
1H	暗茶褐色層							2	1											7		
1H	暗緑層													1		1				3		
2H	暗茶褐色成層シロ													1						1		
ATP-20																				0		
θ-23-23	暗緑層							1							1					2		
BTP-15	黒色土層														1		2			3		
BTP-17	IV (破)																1			1		
BTP-17	暗緑層																	1		1		
C-17	砂																	1		1		
C-18	IV (破)												1	2		1				4		
C-18	淡赤粘質土層												1							1		
C-18	黒色土層															1				2		
C-18	粘質土													1		2		1		4		
C・D-16	灰色砂層							1												1		
C-18	砂																		2	2		
C-18	IV (破)	2													1	2				5		
C-18北片	褐色砂層		1					2		1	1				4	1	1	1		11		
C-18北片	淡赤褐色砂マンガング層																		1	1		
C-18北片	黒色土層							1												1		
C-18北片	石巻種寄辺													1	1					2		
C-18北片	IV (破)							1					3	1	1	4	2			11		
C-18北片	黒色砂質土層													1						1		
C・D-19															2	2		1		5		
C-19-20	IV (破)												2	1	1	4	1	2		11		
C-19-20	暗緑層														4	1				5		
C-24	灰色砂層	1																		1		
D-17	黄色砂層															1				1		
D-17東片	淡黒色砂層		1																	1		
D-19	砂																	2		4		
D-19	IV (破)												2	1		2			1	10		
D-19	V														2	1	1			4		
D-19	粘質土							1												1		
E-14	IV (破)		1					1						1						3		
E-14	V														1			1		2		
E-15	IV (破)																	1		1		
E-15	暗緑層																	1		2		
E-16	IV (破)												1		3					4		
E-17	IV (破)														2	5				7		
E-17	V													1	1					2		
E-19	IV (破)															1				1		
E-19	溝?																	1		1		
E-19	暗緑層																			2		
E-19	砂							1	1				1							3		
E-19	IV (破)							1	1				1		5			1	2	13		
E-19	V		1					1												2		
E-19	溝?															1				1		
E-19	溝?							1										1		2		
E-19	暗緑層														1					1		
E-19	原簿土													1			1			3		
E-19															1					1		
E-19-20層	暗緑層														1					1		
E-20	IV (破)												1		1	7	1	1		12		
E-20	V			1									1		4					6		
E-20															1	2				4		
F-19	IV (破)														3			1		4		
F-19	暗緑層							1												1		
F-19	白砂															1				1		
F-19東片	IV (破)													1						1		
F-19東片	暗緑層							1					1		2	2	1			7		
H・G-19	V														1					1		
H・G-19	暗緑層																1			3		
H・G-19	暗緑層																			3		
跡土	暗緑層																			12		
合計			1	3	2	2	1	1	2	11	5	1	2	3	18	14	21	93	11	23	4	219

表58. 伊礼原遺跡(砂丘区)出土鳥類遺体の同定結果 p・dはそれぞれ近位端・遠位端。

トレンチ	層	カラス属								ワキ科		カモメ科		未同定		同定不可		合計
		尺骨p		尺骨d		大腿骨p		大腿骨d		上脛骨p	上脛骨d	尺骨p	中足骨p	脛骨d	脛骨p	中足骨d		
		左	右	左	右	左	右	左	右	右	右	右	左	左	右	左		
A1P-20	紫色砂層			1										1				2
C-18	IV (仮)						1											1
C-18	V		2															2
C-18	人骨上部					1												1
C-18	清掃中															1		1
C-18	淡紫色土層					2												2
C-18	崩落土			1														1
C-19北址	盛採												1					1
D-19	崩落土													1			1	2
E-19	V									4								4
E-19・20	盛採		1															1
E-20	IV (仮)										1							1
E-20	V				1													1
F-19東址	盛採			1														1
北西盛土	盛採								1									1
-	-		1											1				2
合計		1	3	1	3	2	1	1	1	4	1	1	1	2	1	1	1	24

表59. 伊礼原遺跡(砂丘区)出土ネズミ科遺体の同定結果

トレンチ	層	上顎骨		上顎切歯		下顎骨		下顎切歯			上腭骨		寛骨		大腿骨		尾骨	合計	
		左	右	左	右	左	右	左	右	不明	左	右	左	右	左	右			
C-18	V																	1	1
C-19	III																	1	1
C-19	IV (仮)					1												1	1
C-19北址	IV (仮)																	1	1
C-19北址	盛採													1				1	1
C-19・20	IV (仮)		1		1	1							1					4	4
C-19・20	盛採								1									1	2
C・D-18	灰色砂層															2		2	2
D-19	IV (仮)	1																1	1
D-19	盛採					1			1									2	2
E-19	溝10					1												1	1
E-19	IV (仮)				1	1		1	1			1	1	1				8	8
E-19	崩落土												1					1	2
E-20	IV (仮)		1	1		1			1	1				1				6	6
E-20	V																	1	1
E-20	崩落土					1								1				2	2
E-20	伊勢川															1	1	2	2
F-19東址	崩落土					1									1			2	2
F-19東址	IV (仮)													1				1	1
H・G-19	V																	1	1
盛土	盛採																1	1	1
-	盛採	1													1			2	2
合計		2	2	1	1	5	4	1	3	1	1	1	3	2	5	5	7	44	44

表60. 伊礼原遺跡(砂丘区)出土オオコウモリ科遺体の同定結果

トレンチ	層	上顎C		下顎骨		下顎C		遊離臼歯	合計
		左	右	左	右	左	右		
C-18	人骨部分上							1	1
C-19北址	IV (仮)					1		1	2
C・D-19	III					1		1	1
D-19	IV (仮)	1	1	1	1			13	17
D-19	崩落土						1		1
E-19	崩落土							2	2
E-20	IV (仮)			1				4	5
合計		1	2	1	3	1	1	21	29

表62. 伊礼原遺跡(砂丘区)出土イノシシ(歯以外) 一覧②

位置	遺事	焼骨		煮骨		大腸骨						肋骨	趾骨						計			
		左		右		左		右		左			右		左		右					
		w	p	s	d	w	p	s	d	w	p		s	d	w	p	s	d		w	p	s
116	盛採			1	2	2	1	4	2				1	4	1	1					6	46
116	暗茶褐色土層	3		2	1	3	1					2	4	2	2						27	102
116	白砂		2	2	1	3	1	1				1	1	1	2	2					3	16
116	柱穴																				1	4
116	暗茶褐色土層											1	1								1	4
216	盛採			1		2		2	3	1		2	1	1	1	1	2	1			3	11
216	暗茶褐色土層			1		1						2	1	1	1	1	2	1			3	11
216	白砂	1				1															1	1
216	白砂(浅)																					1
216	淡茶色							2														1
216	白砂(貝くす洞)	1				1																1
216	淡茶褐色																					1
216	淡褐色土層											1										1
216	暗茶褐色土層																					1
216/F7	白砂																					1
316	盛採																					2
316	淡白茶褐色									1												1
316	中央部																					1
316	白砂																					1
316	暗茶褐色土層																					1
316	II											1										2
316	淡茶色																					1
416	盛採																					2
416	柱穴																					2
416	淡茶色																					1
416	中央部																					1
416	淡褐色土層																					1
416	淡白茶褐色																					1
ATP-20	盛採							4					1	1	1							5
ATP-20	茶色土層									3		1				1						17
ATP-20	茶色土層																					3
ATP-20	白砂																					1
B-23・B-24	盛採																					3
BTB-17	盛採																					1
C-17	盛採																					2
C-17	II																					7
C-17	白砂																					4
C-17	褐色粘質砂層	1																				1
D-17	茶色粘砂																					1
C-17	茶色土層																					4
C-17北1	茶色土層	1																				5
C-18	盛採																					4
C-18	II	1																				2
C-18	IV (仮)																					4
C-18	V																					3
C-18	II層																					4
C-18	III層																					1
C-18	茶色土層																					6
C-18	茶色土層 (新位置)																					1
C-18	茶色粘質土層																					1
C-18	人骨上部																					12
C-18	茶褐色土 (東側の粘質土)																					1
C-18	淡茶色土層																					2
C-18	白砂																					5
C-D-18	盛採																					1
C-D-18	黄灰色粘質土層																					2
C-D-18	淡色砂層																					2
C-D-18	黄砂 (貝片混)																					1
C-D-18	IV層																					1
C-19	盛採																					2
C-19	II																					9
C-19	IV (仮)																					2
C-19	V																					1
C-19	淡茶褐色土層																					1
C-19北1	盛採	1																				4
C-19北1	溝埋中																					4
C-19北1	IV (仮)																					2
C-19北1	テールサンゴ	2																				8
C-19北1	石敷階段																					2
C-19北1	茶色土層																					4
C-19北1	黄灰色粘質土層																					2
C-19北1,3m 盛採	盛採																					1
C-19北1,3m 盛採	IV (仮)																					3
C-19北1,3m 盛採	黄砂																					1
C-19北1,3m 盛採	淡褐色土層																					3

表62-②へ

表62. 伊礼原遺跡(砂丘区)出土イノシシ(歯以外)一覧⑤

位置	遺構	遺物	下層層			土層	層位	層厚	出土	前層層						上層層						穴倉								
			h	左	右					h	r	左			右			左			右			左		右				
												w	d	s	w	d	s	w	d	s	w	d	s	w	d	s	w	d		
E-19	IV (80)		8	11	2	15	1	4	26	17		6	1	3	3	1	7	1	1	7		2	1	5	3	1	2			
E-19	V		2	1				4	14	9																				
E-19	溝		1	1	1		1																							
E-19	溝1		1																											
E-19	溝2																													
E-19	溝10		1					3	3																					
E-19	溝11							1																						
E-19	溝14							1																						
E-19	溝10~13							1																						
E-19	パイプ以南							1																						
E-19	石貝集積							8	1																					
E-19	石炭層		2					5	5																					
E-19	壁面遺構中							1																						
E-20-19	遺構		1																											
E-19-20	遺構		1		2			1	1	3																				
E-19-20	IV (80)																													
E-20	遺探		3	2	5	5		2	9	19		2					1	1		4		1	2		1	2	1	2		
E-20	溝							1																						
E-20	IV (80)		8	6	4	7	2	1	3	36	55		3		7	1				7		11	1	3	1	2		2	5	
E-20	IV		8	1	2	8			4	13		3																		
E-20	灰色砂しみ								1																					
E-20	灰白色砂層																													
E-20	貝集積								4																					
E-20	炉址①		1																											
E-20	炉址②		1	1					5	6																				
E-20	炉址③		1	1	1				1																					
E-20	炉址④		1						1																					
E-20	柱穴								1																					
E-20	東側骨製品出土付近								1																					
E-20	平庭盛り下げ								1																					
E-20	東側骨製品部掘土								1																					
E-20	溝跡中								1																					
E-20	溝跡中								1	2																				
E-2077	マンガン遺探灰色砂層								1	2																				
E-2077	灰色砂層								1																					
E-22~23	黄褐色ノリ土層																													
E-22~23	黄褐色土層																													
E-22~23	黄色砂層																													
E-22~23	遺探		1																											
F-19	遺探								1																					
F-19	溝								4	5																				
F-19	IV (80)		8	2	1	2			3	6	3																			
F-19	V																													
F-19	溝跡中								1																					
F-19	井戸内		2						3	1																				
F-19	壁面・平庭遺跡中																													
F-19	パイプ以北壁																													
F-19遺址	遺探		4	2	1	4		1	2	13	36																			
F-19遺址	IV (80)		3	1		4			2	16	10		1		2	1				1		7		3		1	1	1	1	
F-19遺址	V		1	1						10	15																			
F-19遺址	IV-V (80)																													
F-19遺址	落ち込み001																													
F-19遺址	灰色砂層																													
G-18	黄褐色色層砂		1																											
H・G-19	遺探																													
HG-19	遺探																													
H・G-19	遺探																													
H・G-19	IV (80)		1	1																										
H・G-19	黄褐色土層																													
H・G-19	黄褐色土層																													
H・G-19	黄褐色土層																													
H・G-19	黄褐色土層																													
H・G-19	黄褐色土層																													
H・G-19	黄褐色土層																													
H・G-19	黄褐色土層																													
H-19	黄褐色土層																													
H-19	黄褐色土層																													
H-19	黄褐色土層																													
H-19	黄褐色土層																													
TP-8	黄褐色土層																													
XTP-22	黄褐色土層																													
遺探	遺探		11	2	8	8		3	25	63		1	1	2	1		8				6									
合計			162	67	58	164	9	6	177	467	1	46	2	144	18	9	6	133	121	9	9	108	20	16	23	32	10	44	17	35

表62-⑤へ

表62. 伊礼原遺跡(砂丘区)出土イノシシ(歯以外)一覧⑥

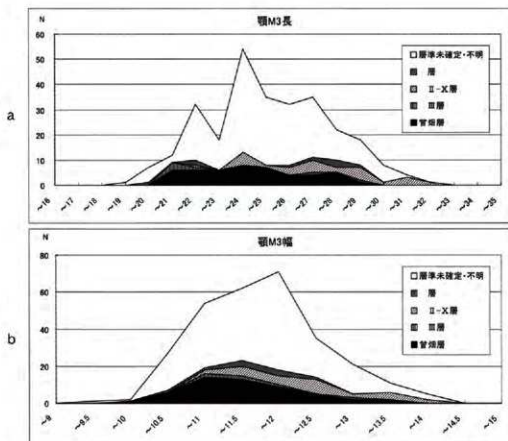
位置	遺跡	焼骨										大獣骨										鹿骨	計骨										計骨	合計						
		左					右					左					右						左					右												
		w	p	s	d	g	w	p	s	d	g	w	p	s	d	g	w	p	s	d	g		w	p	s	d	g	w	p	s	d	g			w	p	s	d	g	
E-19	N (6)				1		1		2	5	1	3			1	1	1	1	4		2	1	1		2						1	20	181							
E-19	V				2		1		3	1					1	1	1	1			1	1	1	1						1	2	48								
E-19	溝																														1	1	19							
E-19	溝1																														1	1	4							
E-19	溝10				1					1																					1	1	19							
E-19	溝13																															5	5							
E-19	溝14				1																											2	2							
E-19	溝10-13				1																											1	1							
E-19	パイプ以南																															3	3							
E-19	石灰層				1																											14	14							
E-19	壁面清掃中																															17	17							
E-20-19	盛採																															1	4							
E-19-20	盛採									1	1	1	1	1																	1	3	21							
E-19-20期	N (6)																														1	5	5							
E-20	盛採	1			1				1	2	3	1	1					2	1				1	1	1	2					1	5	22	106						
E-20	H								4																								1	8						
E-20	N (6)				5			5	2	4	1	1	3				5	1	5	3				1	3							6	2	50	20					
E-20	V								1	2	1		1												2	2							1	3	3					
E-20	反色砂しみ								1	1																							1	7	7					
E-20	反白色砂層																																	4	4					
E-20	貝層																																	4	4					
E-20	伊砂①				1				1	4	1		1												1								1	11	11					
E-20	伊砂②								1	2	3	2																						4	43					
E-20	伊砂③																																	1	6	6				
E-20	伊砂④								3																									2	8					
E-20	柱穴																																	7	7					
E-20	東側骨製品出土付近																																	2	2					
E-20	平置掘り下げ																																	3	8					
E-20	東側骨製品部盛土																																	2	2					
E-20?	溝跡中									1																								1	4	14				
E-20?	マンガン浸染反色砂層																																	1	4	14				
E-22~23	反色砂層																																	1	1	1				
E-22~23	黒褐色ノゾミ層																																	1	1	1				
E-22~23	黄褐色土層																																	1	1	1				
E-22~23	黒色砂層																																	1	1	1				
E-22~23	盛採																																	1	1	1				
F-19	盛採									1																								1	1	22	2			
F-19	H																																		1	1	1			
F-19	N (6)				1					1																									8	41	3			
F-19	V									1																									2	5	5			
F-19	溝跡中																																			2	14	2		
F-19	井戸内									1																									1	2	1			
F-19	壁面・手面清掃中																																			1	1	1		
F-19	パイプ以北壁																																			1	1	1		
F-19期北	N (6)				1				1	2		2													2	1	2							4	4	2	1	11	16	
F-19期北	V									3	1																									6	73	3		
F-19期北	盛採									1																										1	1	1		
F-19期北	N-V (6)				1					1																										1	7	7		
F-19期北	落ち込み001																																			1	1	1		
F-19期北	反色砂層																																			1	2	1		
F-19	両面反色粗砂																																			1	1	1		
H-G-19	盛採									1																										1	12	7		
H-G-19	H																																			7	7			
H-G-19	N (6)																																			1	1	1		
H-G-19	V																																				1	1	1	
H-G-19	栗色土~黄褐色粗砂マンガン浸																																				1	1	1	
H-G-19	黄白色砂層																																				2	2	2	
H-G-19	礫石層																																				3	3	3	
H-G-19	黄白色砂層																																				2	2	2	
H-G-19	黒石層																																				1	1	1	
H-G-19	踏面下層土																																				1	1	1	
H-19	N (6)																																				1	1	1	
H-19	淡灰色砂層																																					1	1	1
H-19	黄白色砂層																																					2	2	2
TP-8	反綠色層																																					2	2	2
XTP-22	黒色土層																																					2	2	2
盛採	盛採				2	1	1	2	1	1	2	2	5		5	1	1	1	3		1	1	1	1	1	1	2							3	3	1	1	48	45	
合計					12	13	3	37	9	27	24	69	147	69	7	10	37	16	12	12	38	20	20	37	18	20	15	21	9	43	1	2	61	48	16	21	117	100		

表63. 伊礼原遺跡(砂丘区)出土ウマ・ウシ遺体の同定結果.

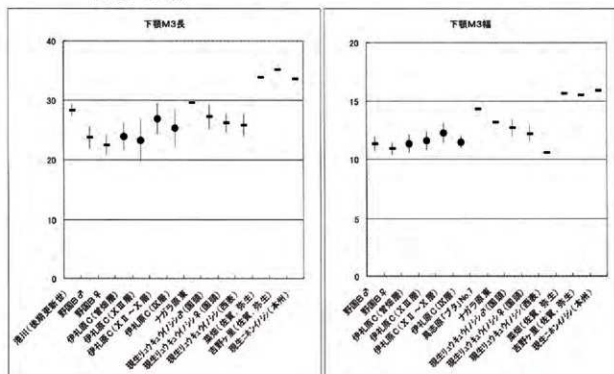
位置	層名	ウマ			ウシまたはウマ						合計	
		下顎M3 区	脛骨	尺骨d 区	歯 骨片	下顎骨 骨片	歯 骨片	臼歯骨 骨片	中手/中足骨 骨片	趾骨 骨片		肋骨 骨片
1b	赤褐色M層										1	1
1b	緑泥										1	1
3b	黄褐色V層					1						1
C-19	赤色土層						1					1
C-18	IV (飯)						1					1
C-24	腐土	1										1
C-24	スロープ			1			1					2
E-13	緑泥						1	1				2
E-14	III						1	2				3
E-14	IV	1										1
E-14	V (飯)					1				3		4
E-15	III						3					3
E-16	III						1					1
E-16	IV						1					1
E-19	III		1					3				4
E-19	V (飯)							2				2
E-19	V								1			1
E-19	溝2		1	1				2				3
E-19	腐葉堆積土			1								1
E-19	腐葉							1				1
C-19-20層	腐葉									3		3
E-20	III						5	1				6
F-19	IV (飯)							1				1
F-19	IV		2									2
G-19	III		1									1
H・G-19	西原片岩堆積土				2							2
H・G-22	腐葉						3	3			1	7
H-19	灰色粘質土層							3				3
腐葉	腐葉					1					2	3
-	III						1					1
-	-				2							2
合計		1	6	1	5	2	21	12	1	3	7	64

表64. 伊礼原遺跡(砂丘区)出土ジュゴン遺体の同定結果.

トレンチ	層	頭骨	切歯	臼歯	尺骨長	橈骨	骨節	不明	合計
T-1	白砂土層				1				1
T-1	腐葉堆積土M層						1	1	2
ATP-20	腐葉						1		1
ATP-20	赤色砂層						1		1
C-16	III	1							1
C-16	人骨上部						1		1
C-19	III						1		1
C-19	IV (飯)						1		1
C-19	北原堆積土						1		1
C-19北1	赤色土層						1		1
C-19北1	IV (飯)						1	1	2
C-19北1	III	1							1
C-19-20	東原溝溝中						3		3
C-19-20	IV (飯)	3					4	1	8
C-19-20層	腐葉砂質土層	1							1
D-19	IV						1		1
D-19	IV (飯)		1	1			2	2	6
E-16	III						1		1
E-16	IV (飯)						1		1
E-17	IV						3		3
E-18	III							1	1
E-18	IV (飯)		1				1		2
E-19	IV (飯)					1		1	2
E-19	IV (飯)						1	1	2
E-19-20層	腐葉							1	1
E-20	III						1		1
E-20	IV (飯)						2		2
E-20	腐葉	1							1
F-19東1	腐葉土						1		1
G-19	III						2		2
G-19	IV (飯)						1		1
H・G-19	腐葉土						1		1
H・G-19	V						1		1
TP-12	平原溝溝						1		1
不明								1	1
合計		7	2	1	1	1	27	9	64

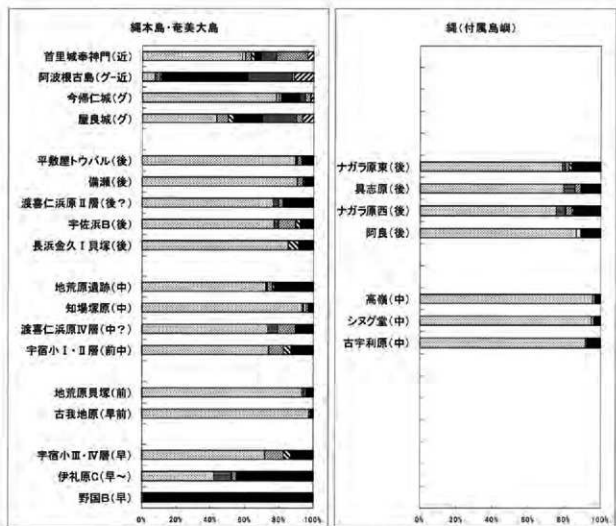


第109図 伊礼原遺跡(低湿地区)におけるイノシシ下頤第3大臼歯の計測値の分布 (a:長・b:幅)



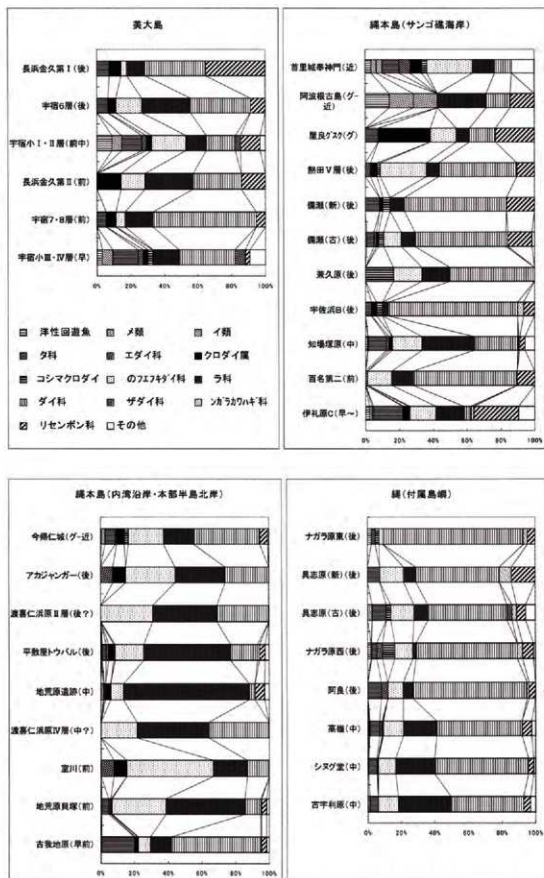
第110図 計測値の比較 (平均±標準偏差)

伊礼原C遺跡・沖縄先史時代・弥生時代遺跡度イノシシおよび現生イノシシの下頤第3大臼歯計測値の比較 (平均±標準偏差)
 データの出自: 長谷川ほか(1979)、川島・村岡(1984)、西(1993)、松井(1997)、中川(1999)



第111図 伊礼原遺跡(低湿度地区)と他遺跡の脊椎動物遺体群の比較

ビックアップ資料、最小個体数(MNI)による、イノシシは報告で「ブタ」と記載されているものも含む。



第112図 伊礼原遺跡(低湿地区)と他遺跡の魚類遺体群の比較

V 貝類遺体からみた伊礼原遺跡

黒住 耐 二 (千葉県立中央博物館)

伊礼原遺跡は、沖縄島中部西海岸の北谷町に位置する貝塚時代早期(縄文時代早期)から近・現代まで、多くの時代の遺物を含む遺跡である。特に、縄文時代前期の曾畑式土器が大量に出土し、低湿地で堅果類や籠・桶等の木製品も認められ、また縄文時代中期の土器も多く得られた貴重な遺跡である(東門, 2000; 中村, 2006)。これまで、前者の曾畑式土器を出土させる地点を伊礼原C遺跡、後者の縄文時代中期等の地区を伊礼原A遺跡と区別されていたが、その後の調査で、両者は同一の遺跡と認識され伊礼原遺跡とされたので(東門ら, 2005; 中村, 2006)、ここではこの表記に従うことにしたい。

今回、報告者は本遺跡の貝類遺体を検討する機会を与えていただいたので、ここに報告したい。特に、食用に利用された貝類、食用種を含む海産種からみた海域環境、さらに陸産貝類から想定される遺跡周辺の植物景観に焦点を当ててみたい。

報告に先立ち、遺跡および遺物の検討の機会を与えて頂いた北谷町教育委員会の中村 恵・東門 研治の両氏、多くの貝類遺体の同定や集計でお世話になった島袋春美・細川 愛の両氏、発掘から整理・集計まで行って頂いた皆様に感謝したい。国士館大学の中井達郎氏にはサンゴ礁地形に関してご教示いただいた。早稲田大学の榎泉岳氏には発掘現場でのアドバイスや出土遺体の情報に関して、(財)東大阪市文化協会の松田順一郎氏には堆積層の理解について、様々な形でお世話になった。これらの方々に備してお礼申し上げます。

材料および方法

今回の伊礼原遺跡の貝類遺体サンプルは、1996年から現在年まで様々な発掘調査のサンプルを含んでいる。以下の記述では、これまで伊礼原C遺跡とされてきた曾畑式土器の多い試掘 No.143周辺を低湿地区、海側の伊礼原A遺跡とされてきた地域を砂丘区と表記する。

まず、調査の全過程で発掘中に取り上げられた(ピックアップ法; 現場資料)膨大な標本があり、これらは種を同定し、完形・殻頂・体層・左右殻・破片等に識別し、それぞれの個体数をカウントした。砂丘区の一部では、1.4mmメッシュで、乾燥状態で篩った残りのものも対象とした。以上のサンプルの処理は、北谷町教育委員会で行い、時に報告者が同定し、最終的に同一種として抽出されたほとんどの種も報告者が再同定した。

次に、報告者が得た様々な地点の土壌サンプルがある。これらは、低湿地区では少量であったがおよそ系統的にサンプリングできたが、砂丘区では余り系統でできなかった。この土壌サンプルは、報告者の通常の処理方法(黒住, 1997)で、9.5・4・2・1の各メッシュで水洗選別を行い、浮き上がったもの(浮遊選別: フローテーション)も0.5mm未満のメッシュネットで回収した。これらは、4mm以上のものを食料残渣の検討に、フローテーションで得られたものを陸・淡水産貝類の解析に用いた。

最後に、低湿地区の2つの剥ぎ取り断面上で認められた貝類の観察を行った。この時、南区東壁(中村, 2006; 図版29; ただし、この図版では第12層までしか図示されていない)では最下部から最上部までを対象としたが、中央区南壁(中村, 2006; 図版28)では、水田である第7層より上部は対象としなかった。ただ、第7層より上部は、ほぼグスク時代以降の水田であり、両剥ぎ取り断面は同様な堆積状況と貝類の産出状況を示していた。確認された貝類は、種名と出土部位・個体数等を記録した。

なお、層序の時代区分および表記に関しては、これまでの報告書(中村, 2006)に従い、縄文時代前期等とした。その中で、曾畑層より下の灰青シルト層(中村, 2006; 図版28の第14層下の灰色層)は暫定的に縄文時代早期と表記した。

結果および考察

1 出土貝類リスト

これまでの調査で得られた貝類遺体(一部他の無脊椎動物を含む)のリストを表65に示した。貝類では、少なくとも腹足類46科164種、ツノガイ類1科2種、二枚貝類23科64種、多板類1科1種、頭足類1科1種、甲殻類2科2種、ゴカイ類1科1種、ウニ類1科1種が得られた。低湿地区から得られた食用貝類は表2~5に、土壌サンプル等から得られ環境推定に用いた貝類は表6~9に示した。それら以外の種は、主に砂丘区から出土したものである。

後述する食用遺体や環境復元に関係した種以外にも、装飾品として用いられた種や明らかに現代の種等も認められたので、ここで簡単に述べておきたい。

ア 装飾品利用のツノガイ類

本遺跡からは2種のツノガイ類が得られた。これらは、装飾品として利用されたものと考えられる。マルツノガイ類と同定したものは、殻が太く、殻表に太く、密な縦肋を有するもので、石川市古我地原貝塚から出土し、化石とされたもの(高袋, 1987a)と同種と考えられる。本種は、海岸に打上げられることがない種であり、サメ菌製品で鳥袋(1987b)が想定したのと同様に、沖縄島の鳥尻層群からもたらされたものと考えられる。

一方、ツノガイ?とした種は、マルツノガイ類より細く、殻表に肋を持たない別種である。今回出土した種と同様なツノガイ類は、琉球列島周辺では打ち上げられることはなく、また、鳥尻層群でも少ない。ただ、出土した標本は、脆くなっている鳥尻層群由来と考えた化石のマルツノガイ類とは明らかに殻質が異なり、現生かマルツノガイ類より新しい時代の化石と考えられる。沖縄周辺からはこのツノガイ?が得られないことから、本遺跡の標本は他所からの搬入品と考えられる。出土する土器などから、ツノガイや殻形態の類似した種は九州由来の可能性が高いように思われる。ただ、これらのツノガイ類が打ち上がる海岸は九州でもかなり稀であり、打ち上がる浜は限定されている可能性が高い。そのため、今後先史時代のツノガイ製品の採集/供給遺跡が特定されることも考えられる。

イ 現代の貝類

今回湿地を含む比較的大い面積から貝類が得られたことから、明らかな現代の貝類も認められた。これらには、食用になり黄海等から輸入されているシナハマグリ、移入産産貝類のオナジマイマイ

等が含まれる。また、近年の移入種と考えられる淡水産のヒメタニシも得られた。

ウ その他

今回の資料中には、これまで沖縄の遺跡からは正式な報告のなかったオニフジツボが含まれていた。この大形のフジツボは、クジラ類の皮膚に半ば埋没して生活する種である（内海, 1965）。本遺跡からはクジラ類（桶泉, 本報告書）も比較的多く得られており、このフジツボはクジラ類に付着していたものと考えられる。また、オニフジツボが得られたことから、本遺跡のクジラの一部は「骨付き肉」としてではなく、一頭を得ていたことは確実である。ただ、生きた個体を捕獲したのか、打上げられた個体を得たのかは、明らかではない。

2 食用貝類遺体の変遷

ここでは、まず食用貝類遺体に関して、時期ごとに見てみたい。対象としたものは、低湿地区のは表66-69に示したピックアップ法、土壌サンプル（4 mm 以上；表70）および剥ぎ取り断面（表72）と、砂丘区の土壌サンプル（4 mm 以上；表70）である。対象個体数が25個体以上得られた縄文時代前期・中期および弥生時代併行期のいずれかの時期に全体の10%以上得られた種を優占種とした。この時、僅かではあるが破損等により、種レベルまで同定できなかったグループでも、固定できた出土した種の割合によって、出土個体数を配分した。

ア 縄文時代前期

ここでは低湿地区の曾畑式土器の出土層位を曾畑層と表記する。ピックアップ法で曾畑層ととして取り扱ったものは、低湿地区の表66-69で曾畑層とされたもの以外にも、中村（2006：図12；図版28、29）を参照し、一部後述するハイガイの出土が認められた層も曾畑層に含めた。具体的には、表66-69の西区：第13層、中央区：第13層・第14層・パーキ周辺、東区第13層、南区：シイの実、灰白（有機）・暗灰貝層・灰褐色・第14層である。

このピックアップ調査の結果、優占種はマガキガイ（約45%）・チョウセンサザエ（約12%）・サラサバテイラ（約12%）・ハイガイ（約12%）であり（第113図）、クモガイ・シマガキ（ミナミマガキ・アイアデルガキ）・センニンガイ・シレナシジミ・リュウキュウマスオも100個体以上得られた。ここでは、これまで奄美・沖縄の遺跡では多量の出土が認められておらず、現在では絶滅した二枚貝のハイガイ（セイタカハイガイ型；黒住, 2006a）が優占していることが特徴的である。ただ、この曾畑層では、水に浸かっていたこともあり、貝殻は一部溶解しており、小形/薄質個体は過小評価になっている可能性もある。

土壌サンプルの曾畑層でも個体数は少ないが、およそ同様な結果であった（表70）。ただ、剥ぎ取り断面での観察では、優占種は得られているが、特に下部でカンギク・オキナワイシグタミ・タママキといった内湾の小形種のみが見られ、その上部にはサラサバテイラ・チョウセンサザエ・マガキガイ等のサンゴ礁の中・大形種がハイガイやイソハマグリとともに確認されていた（表71）。この剥ぎ取り断面での下部から上部への変化は、他のサンプルでは曾畑層内の層位を細別した例がなかったので詳細には検討できなかったが、もしかすると本遺跡への人々の定着当初はヤマトの貝塚と同様に内湾での採集を行っており、暫くしてからサンゴ礁域での採集を開始したと考えることも可能なのかもしれない。今回、九州各地での曾畑式土器の貝塚の貝類組成を詳細に検討すること

ができなかったので、詳細は今後の検討に委ねねばならないが、標識遺跡の曾畑貝塚では、遺跡前面が有明海の泥干潟であり、この場所に多く生息する潮間帯のマガキ（シカメ型）・ハイガイが優占種となっている（菊池、1976）。やはり、曾畑貝塚では、他の多くの遺跡で認められているような干潟での貝類採集のみと考えられ、伊礼原遺跡でのサンゴ礁に相当するような岩礁域での採集は想定されなかった訳である。今後、沖縄において本時期の遺跡を検討する場合には、曾畑層内の上下での食用貝類遺体の出土状況にも注意を払う必要がある。

イ 縄文時代中期

砂丘区では、縄文時代中期からグスク時代まで様々な時期の包含層や遺構が認められ、出土した貝類遺体の組成は表73～76に報告されている。ただ、時間の都合上、この結果を詳細に解析することはできなかったので、以下の砂丘区の結果は、縄文時代前期と同じ土壌サンプルのデータを用いた。

縄文時代中期、面縄前庭式土器の時期には貝集中部が確認されており（本報告書）、量的には少なかったが、この遺構からのサンプルの結果を表70に示した。その結果、オキシジミが35%と最も多く、次いでイソハマグリが13.5%、マガキガイが8.1%となっていた（第113図）。サンプル中には出現しなかったが現地での観察ではスダレハマグリも目立っていた。この時期になると、曾畑層とは異なり、オキシジミやスダレハマグリといった二枚貝が優占するようになり、マガキガイはある程度得られているものの、サラサバテイラやチョウセンサザエ等の干潟の貝類は減少する傾向にある。

ウ 縄文時代後・晩期

この時期の食用貝類遺体は、砂丘区の土壌サンプルから僅かな個体しか得られなかった（表71）。その内容として、イソハマグリ・ニシキウズ・カンギク等が認められ、チョウセンサザエ・サラサバテイラ・オキシジミ・スダレハマグリ・ハイガイ・センニンガイ等は認められなかった。

エ 弥生時代併行期

この時期でも、僅かにイソハマグリを中心にキヌカツギイモ・ハナヒラダカラ・アラスジケマン等が、砂丘区の土壌サンプルから確認されただけであった（表71）。やはり縄文時代後・晩期で指摘したチョウセンサザエ等は得られなかった。

オ グスク時代

グスク時代の砂丘区の土壌サンプルからは、少数ながら上記2時期よりは多くの食用貝類遺体が抽出された（表70）。イソハマグリが優占しており、カニモリガイ類等も認められた。グスク時代になると、ウミノナ類を含めてカニモリガイ類等の小形・塔型の貝類（現在も一部地域で方言名チンポーラと呼ばれている仲間）の増加することが知られており（黒住、1991）、本遺跡でも他の時代には小形カニモリガイ類はほとんど出土しておらず、この時代の傾向を示しているものと考えられる。また、前時期から引き続き、オキシジミ等の種は出土していない。

カ 生息場所類型組成

上記で優占種を示したが、これらを生息場所類型（黒住、1987）に基づいて区分し、食用貝類遺体をまとめてみた（第114図）。生息場所類型では、当然優占種に左右されることになるが、曾畑層では、サンゴ礁域のイノーが全体の1/2を占め、同じく干潟と磯砂面も10%を超え、河口干潟・マングローブ域は約20%で、他の2類型は極めて僅かであった。それが、面縄前庭層では、河口干

潟-マングローブ域が40%近く、内湾-転石域も20%を超え、この2類型で全体の約6割に達し、サンゴ礁域より多かった。弥生時代になると、サンゴ礁域の潮間帯(約70%)とイノー(約20%)で全体の9割となっていた。

本遺跡で認められた各時期の優占種と生息場所類型は、絶滅したハイガイとこれまで貝塚の優占種としての報告のなかったオキシジミを除くならば、沖縄島の貝塚での類似例を認めることができよう。つまり、縄文時代前期では、ハイガイが優占種となっていること以外では、本遺跡と近距離に位置する嘉手納町の野国貝塚B地点での縄文時代を通してのマガキガイが優占する組成(盛本, 1984)に類似していると考えられることも可能だと思われる。縄文時代中期では金武湾南部の古我地原貝塚(花城, 1987)で、キバウミナ類を優占種とする河口干潟-マングローブ域の貝類が卓越するパターンに、弥生では本部半島北岸の具志堅貝塚(上地, 1986)のイソハマグリが優占する傾向と同様であろう。もちろん、各時期で異なる組成や類型を有する貝塚も多数認められる。ただ、伊礼原遺跡が他遺跡と極めて異なっていない訳である。

ただ、縄文時代中期以降、砂丘区の土壌サンプルから干潮のチョウセンサザエや礁斜面のサラサバテイラの破片も得られなかったことから、本遺跡では、海城のこれらの環境での貝類採集は盛んであったことが示されていると考えられる。

当然このことは、貝類の生息場所類型が人間の圃の採集空間を示すことから、遺跡前面の海岸環境に規定されている訳である。本遺跡では、堆積物等の情報を中心に潮間帯を中心とした浅海域から海浜部の環境変遷が示されている(中村, 2006; 松田, 本報告書)。後述する淡水産・陸産貝類の情報を加味して、貝類遺体から想定される環境変遷に関しては最後にまとめて述べたい。

3 淡水産貝類遺体

ア 縄文時代早期

剥ぎ取り断面(表71:第16層/第15層)と土壌サンプル(表71, 73)では、この層準では、トウガタカワニナが多く、カワニナが少数確認されたのみであった。トウガタカワニナは棘を持つタイプであった。

イ 縄文時代前期

この層でも、土壌サンプルから得られたのは下部の層と同様に、棘を持つトウガタカワニナとカワニナであり、前種が多数で、後種は1/20程度であった(表72)。フローテーションによって1個体のみであったが、ヒラマキマミズマイ属の種(ハブタエヒラマキ?)が得られた。これは琉球列島の本属の確実な記録としてかなり古いものと思われる。一方、この層からは、ヌノメカワニナ・マルタニシ・タイワンモノアラガイの3種もピックアップ法で得られている(表69)。ただ、ヌノメカワニナは、ミズイモに伴って貝塚時代前期から中期に南から持ち込まれたと考えており(黒住, 2007)、マルタニシもグスク時代に水田稲作とともに移入された想定しており(黒住, 2002)、水田に多いタイワンモノアラガイ(表71, 72参照)を含め、この3種は曾畑層のものではなく、報告者は後代の落ち込み/混入と考える。

ウ 縄文時代中期

面裡前庭層からは、僅かではあるが、オカヤドカリ類の宿貝ではあったトウガタカワニナとカワ

ニナが得られており(表70)、他の種は土壌サンプルから確認されなかった。

エ 縄文時代後・晩期/弥生時代併行期

この時代のサンプルは、砂丘区で得られているので、土壌サンプルから淡水産貝類は得られなかった。ただ、縄文時代中期とこの時代の区分は不明瞭であるが、ピックアップ法でイガカノコ・シマオカイシマキ(ベニオカイシマキ)・フネアマガイ・シャジクカワニナ?・スグカワニナが得られている。これらの種の全てが、幼生は海に流され、再び河口に定着し、成貝は淡水域で活動するというアユと同様な両側回遊という生活史を持つと考えられている(黒住, 2003a)。また、これらの種のうち、シマオカイシマキ・シャジクカワニナ?は沖縄島からの正確な記録はなく、スグカワニナは現在の生息地が極めて少ない種である。このことから、スグカワニナは沖縄県のレッドデータブックで絶滅危惧IB類とされ(沖縄県文化環境部自然保護課, 2005)、前2種はレッドデータブックに記載されてもいない。

オ グスク時代

この時代の淡水貝類遺体は、低湿地区で多量に得られ、砂丘区でも多く確認された(表69, 70, 71, 72)。低湿地区では、ヌノメカワニナが極めて多くなり、棘を持たないトウガタカワニナ・カワニナ・タイワンモノアラガイ等も比較的多く得られた。その他にも、オキナワミズゴマツボ・ヒメモノアラガイ?・トウキョウヒラマキ?・オキナワドブシジミ等の多くの種が確認された。これらの種のほとんどは、水田等の止水域に生息する種であり(黒住, 1984)、トウガタカワニナのほとんどの個体は無棘であった。

4 陸産貝類遺体

陸産遺体も低湿地区・砂丘区から様々な方法により得られている。ただ、低湿地区の下部の首畑層等では、前述のように淡水産貝類が多く得られており、淡水域で形成された堆積層と考えられ、陸産貝類では殻が薄く、溶解した個体も多いと考えられる。この要因もあつてか、剥ぎ取り断面からは陸産貝類は確認できなかった。

ア 縄文時代早期

この層の土壌サンプルからは(表72)、比較的多くの種と個体が得られた。溶解が認められたので、正確には種まで同定できなかったが、タネガシマヒメベッコウ?やリュウキュウカドベッコウ属?とベッコウマイマイ科の種が多く、僅かに海浜性のクビキレガイも得られた。

イ 縄文時代前期

土壌サンプルからはほとんど陸産貝類は得られなかったが、ピックアップ法では(表69)、オキナワヤマタニシが多く、シュリマイマイ・カツレンマイマイ・オキナワヤマタカマイマイ(本島中部型)も得られている。

ウ 縄文時代中期

E-20の砂丘の土壌サンプルからは林内生息種のクニガミゴマガイと海浜部生息種のスナガイ等が僅かに得られた。この時期の貝集中部の土壌サンプルでは、ノミギセルが極めて多く、スナガイやバンドナマイマイ/オキナワウスカワマイマイも多かった。フローテーション以外の土壌サンプルでは、上記の種以外にオキナワヤマタニシ・シュリマイマイが少数認められた。

エ 縄文時代後・晩期

市来式土器層の砂丘土壌から陸産貝類は得られなかったが、E-17のバームクレストや砂丘堆積物からは、ナガケシガイ・スナガイ・オカチヨウジガイ類等（表72）やオキナワウスカワマイマイ・パンダナマイマイ・オキナワヤマタニシ（表70）が認められた。

オ 弥生時代併行期

この時代の土壌サンプルは、弥生時代のもの1つのみであったが、ほぼ縄文時代後・晩期のものと類似した組成であった。ただ幼貝のため同定が不確実であったが、ノミギセルと考えられる種の得られている点が異なっていた。

カ グスク時代

この時代になると、砂丘区で得られた個体数も多く（表70, 72）、ホソオカチヨウジガイ？とヒメベッコウ類似属が優占しており、パンダナマイマイとオキナワウスカワマイマイも幼貝を中心に多数得られた。一方、この時期の低湿地区サンプルでは、陸産貝類はほとんど得られなかった。

キ 陸産貝類遺体群の生息場所類型組成

土壌サンプルからフローテーションで得られた陸産貝類遺体1リットルあたりの個体数と、表72に示した生息場所類型ごとの割合を第115図に示した。ただ第115図では、表72で同定が不確実なので〔 〕で示した推定される類型を、それぞれの類型に含めて計算してある。

陸産貝類の得られなかったサンプルは、曾畑層の堅果層、市来層の砂区層、低湿地区上部の2つのグスク時代層であった。逆に個体数の多かったのは、面縄前庭層の貝集中部で265個体、砂丘区のグスク層の約90個体であり、他は1桁程度であった。この個体数の多寡に関しては、後述の遺跡周辺環境のところで議論したい。

第115図から、下部の縄文時代早期と中期で林内生息種の割合が半数を超えていたが、他のサンプルでは林内とした種は認められなかった。同様に、下部から中部で林縁生息種の割合が高く、上部になるに従い開放地生息種の割合が増加する傾向があった。さらに、砂丘区の多くのサンプルで、海浜部生息種が20%程度と比較的安定して出現していた。

5 貝類から想定される伊礼原遺跡周辺の環境

ここでは、上述の海産・淡水産・陸産貝類遺体を総合して、遺跡周辺の古環境を推定してみたい。

ア 縄文時代早期—曾畑層より下部—

この層からは淡水産および陸産貝類遺体のみが得られており、海域の状況は不明である。淡水産のトウガタカワニナとカワニナが得られたことと、堆積層は泥質であることから、低地部淡水域の緩やかな流れのよどみか、止水域で形成されたことがわかる。そして、この層のトウガタカワニナは、確認できた個体の全てが棘を持つものであった。貝類の棘は、捕食者からの回避のために発達したという考えがある（Vermeij, 1974）。報告者の琉球列島におけるこれまでの定性的な観察結果でも、河口等の海域と連続した低地部の水体に生息するトウガタカワニナでは棘を有し、台地部や水田等では同種でも無棘の群が生息しており、貝類を捕食する可能性のある魚類の存在によって、棘の有無が異なるっていた。また、本遺跡の例でも、前述のように土壌サンプル等のグスク時代の層から得られたトウガタカワニナはほとんど無棘であった。このことから、この層は海域に開いた

河口を持っていたと考えられる。また、海域に近かったことは、海浜部に生息するクビキレガイが得られたことから裏付けられる。一方で、純淡水域にのみ生息するカワニナが得られていることから、遺跡の低湿地区は河口に近いものの純淡水であったことは確実である。なお、中村 (2006) の剥ぎ取り断面 (図版28、29) では、今回対象とした層の下にマングローブ樹根層の存在を示しているが、この層からのサンプリングを行えなかったこともあり、貝類遺体から直接的なマングローブ林の環境を復元することはできなかった。

遺跡周辺の林は、抽出された標本の状態が悪かったために同定には不確実さが残るがタネガシマヒメベッコウ・リュウキュウカドベッコウの林内生息種の存在から、海浜部まで人間による改変があまり及んでいない自然度の高い森林が存在していたと考えられる。

イ 縄文時代前期—曾畑層—

この層からは、マガキガイ・チョウセンサザエ・サラサバテイラ等のサンゴ礁海域の貝類が食用の優占種であり (第113図)、現在と同じようなサンゴ礁が遺跡周辺に存在していたと考えられる。ただ、食用種として泥質潮間帯に生息するハイガイや大形のシマガキ、さらにはマングローブに棲むセンニンガイ・キバウミナが比較的多く得られていることから、遺跡前面には泥干潟が広がり、その後背地の河口にはマングローブの成立していたことがわかる。特に、シマガキは20cmを超える個体が多数得られ、これらは泥底に直立する生活様式 (例えば鎮西, 1997; 樋泉ら, 2000参照) を持っていたと考えられることも、循環論法的ではあるが、泥質干潟の存在を認めるものであろう。

また、本遺跡からは黒住 (2006a) がセイタカハイガイ型と呼んだ厚質で、殻高の大きいという特徴的な殻形態を持つハイガイが多数出土しているが、本種は現在までのところ、この時期から認められており、短い期間に沖縄諸島から絶滅したと考えられている。この種の分散ルートは黒潮に由来するものではなく、東中国海沿岸を經由したものと考えられている (黒住, 2006a)。この分散ルートと時期に関して、他分野の研究結果との関連は述べられておらず、詳細は不明である。参考になる状況としては、氏家・中村 (1996) は、海底堆積物中に黒潮主流に特徴的な浮遊性有孔虫 *Pulleniatina* が約3800年前を中心とする数百年間、ほぼゼロとなり、陸橋に近い状況が何らかの地殻変動で生じて、黒潮主流が東中国海に流入できなかった *Pulleniatina minimum event* を報告している。セイタカハイガイ型の分散年代とは合わないが、このイベントよりは小さい変動によりセイタカハイガイ型が分散してきた可能性は否定できないように思われる。

一方、サンゴ礁域の貝類が多数得られていることは、当時、現在と同様か、類似したサンゴ礁環境が遺跡の隣接地域に存在していたことを示していると考えられる。この約5000年前に、現在と同様/類似したサンゴ礁が成立したという想定は、現在のサンゴ礁地形の研究から支持されない (例えば茅根・米倉, 1990)。報告者は、以前にも、現在でも黒潮域の暖温帯域の非サンゴ礁岩礁にはチョウセンサザエやサラサバテイラ・アンボンクロナメ類をほとんど欠くので、逆に主に野国貝塚B地点からこれらの種が出土している (盛本, 1984参照) ということは、当時も現在とほぼ同様なサンゴ礁が存在していた可能性が高いと考えた (黒住, 2002)。今回、新たに年代と出土状況の明らかな曾畑層の貝類遺体を検討できた結果、以前の想定と同様にサンゴ礁の貝類が多く、遺跡周辺には現在と同様/類似したサンゴ礁の存在という想定が誤りだったわけではないことが明らかになったと考えられる。

このサンゴ礁地形発達の研究と、遺跡出土貝類組成との齟齬は、どのように理解されるのだろうか。北限域のサンゴ礁を議論した中井(1990)は、このような地域では不連続なサンゴ礁が波当りの弱い小内湾や島影に分布すると指摘した。このような北限域のものと同様なサンゴ礁が約5000年前の伊礼原遺跡周辺に形成されていたと考えられるのではないだろうか。そうだとすると、サンゴ礁の発達が悪い場所もあり、一方で現在のサンゴ礁と同様な地点も存在したことになる。本遺跡でも指摘した暖温帯域ではほとんど認められないチョウセンサザエやサラサバテイラ・アンボンタロザメ類は、一部に形成されていたサンゴ礁域で採集されたと考えられる。このように考えると、当時(沖縄貝塚時代早期)の遺跡は、本遺跡の場合、サンゴ礁が形成されている地点周辺を選択していた可能性も想定される。沖縄におけるこの時期の遺跡の立地に関して今後の検討が望まれる。

ただ、現在はサンゴ礁の良く発達している沖縄島南部、旧知念村の縄文時代後期併行期の遺跡では、百名第二貝塚(安里ら, 1981)・熱田原貝塚(高宮・Meighan, 1992; 大城, 2004)・下上原貝塚(大城, 1994)のいずれでも、河口干潟のアラスジケマンの優占していることが報告されている。つまり、貝塚の形成された時代には、サンゴ礁が形成されていなかったという従来の地理学的な結果と整合するとも考えられる。この地域では、イノー幅が広いというサンゴ礁の形態を有しており、伊礼原遺跡とは異なったサンゴ礁の発達史が存在していたと考えたい。ただ伊礼原遺跡でも、この時期にはサラサバテイラ等がほとんど見られず、全局的な環境の変化や地殻変動の可能性も全く否定される訳ではない。このような遺跡出土貝類という視点から、琉球列島のサンゴ礁発達を再度考察したいと考えている。

なお、サンゴ礁とマングローブ域の貝類相からの環境復元に関する議論を行ったが、今回かなり多くの種が得られているにもかかわらず(表65参照)、センニンガイ等の従来から知られていた絶滅種(Ohgaki and Kurozumi, 2000)が認められたのみで、新たな琉球列島からの絶滅種や九州等からの持ち込み由来すると考えられる種は認められなかった。このことは、時代は下るが上記の旧知念村の各遺跡でも絶滅種等は認められていない。つまり縄文時代前期でも、沖縄島において南から「縄文海進」期に分散してきて、その後絶滅した種はハイガイを除いて認められなかった訳である。関東地方等においては、縄文海進期の暖温帯種の分布拡大と縮小は見事に示されている(松島, 1984)。このように考えてくると、曾畑層の堆積した時代の沖縄諸島では、ヤマトと異なり、縄文海進期に、現在とはほぼ同様な貝類相が形成されていた訳である。つまり、本諸島においては、縄文海進期に熱帯性種の増加という現象は認められず、むしろヤマトへの黒潮支流により分散する浅海性海洋生物の供給源となっていた可能性も指摘できよう。今後、より古い時代の遺跡の貝類遺体群や完新世の貝化石群を詳細に検討することによって、上記の縄文海進期に沖縄諸島では現在と同じ貝類相が形成されていたという想定を検証することができよう。なお、人間活動による絶滅に関しては、後述する。

淡水産の貝類では、早期と同じ種が得られており、低湿地区は引き続き、同様な絶淡水域の止水的な環境にあったものと考えられる。両側回遊性の貝類の増加も認められないことも、河口域の環境に大きな変化は認められなかったことを示していよう。中村(2006)の図版29では、曾畑層中の礫の由来は、松田氏の見所として「浅海の堆積物を含んでいないので高潮時の暴浪で掃き集められたのではないかと」されている。しかし、貝類遺体からは、絶淡水域の止水的な環境と規定された。

表71に示した海産貝類は、下部の内湾域の小形種とサンゴ礁域の中・大形種であり、いずれも食用種と考えられた。つまり、海岸部に打ち上げられていたと考えられる河口干潟の貝類は認められず、礫の由来は海岸部からとは考えにくいように思われる。なお、松田（本報告書）も本層の礫の由来を海岸部からと考えていない。

陸域の環境は、出土個体数は少なかったものの土壌サンプルでの陸産貝類の生息場所類型から林縁の種のみが得られていることから（第115図）、遺跡周辺は人間の改変を受けた林となっていたと考えられる。この想定は、大形植物遺体から復元されている環境（大松・辻，2001）と矛盾しない。ただ、絶滅種のカツレンマイマイがピックアップ法で得られていることから、遺跡から少し離れた場所には、早期のような自然度の高い森林が形成されていた可能性が高い。

ウ 縄文時代中期一面縄前庭層一

この時期に優占していたオキシジミは泥質の干潟に生息し、現在の沖縄島では漫漶等の限られた地域にのみ生息している（名和，2000）。またスタレハマグリは、オキシジミよりも砂質な底質を好む。一方、干潟に生息する大形のカキ類の出土個体数は減少している。これらのことから、面縄前庭層の時期には干潟が広がっていたものの、曾畑層堆積時にハイガイが生息していた泥質干潟よりも砂が多くなるという変化が生じたと推測される。センニンガイ等のマングローブに生息する種とチョウセンサザエヤサラサバテイラ等のサンゴ礁の貝類が少ないということは、嗜好の問題とともに、採集場所が縮小していたり、より遠くなった可能性も想定できる。沖縄島では、縄文時代中期の貝類組成の報告は少ないが、石川市の古我地原貝塚ではキバウミナ等の大形ウミナ類が極めて多い（花城，1987）。縄文時代後期（＝貝塚時代前期）の貝塚の例では、伊是名村の伊是名貝塚（黒住，2001）では、サンゴ礁の種が多い。これらのことから、報告者は、本遺跡の縄文時代中・後期に見られた貝類の組成は、嗜好というよりも遺跡前面の環境の影響が大きいと考えたい。このように考えるならば、この時期の伊礼原遺跡周辺では、マングローブの発達が悪く、サンゴ礁は遠かったと推測される。ただ、今後の詳細な貝類遺体の検討が必要であり、またこの変化は伊礼原遺跡前面だけのかなりローカルな現象ということも想定される。

淡水貝類遺体は得られなかったので、状況は不明である。

陸産貝類遺体では、砂丘区の土壌サンプルから、林内・林縁・海浜部と様々な環境にすむ種が得られていることから、比較的的自然度の高い森林が海岸砂丘部後背に存在していたことがわかる。貝集中部からはノミギセル類が多数得られており、この地点はそれ程開けていなかった可能性が高く、ノミギセル類はここで繁殖していたと考えられる。

エ 縄文時代後・晩期と弥生時代併行期

今回、報告者が確認できたこれらの時代のサンプルは少なく、海域環境を明瞭に示すことは難しい。ただ、砂丘区の土壌サンプルでは、これらの時代を通して、縄文時代中期の内湾一転石域のものが多い状況からサンゴ礁域の潮間帯砂底に生息するイソハマグリが食用貝類遺体として優占していた。そして、干瀬や礁斜面の種がほとんど得られず、採集空間として干瀬での活動が低下した可能性と、干瀬が遠くなった可能性が考えられる。これまで貝塚時代後期には、サンゴ礁域の干瀬や礁斜面での貝類採集活動が盛んであった例が沖縄島各地で報告されており、本遺跡周辺でも大作原古墓群のくびれ平底土器層では、マガキガイの優占するもの、チョウセンサザエヤサラサバテイ

ラの僅少な貝類遺体群が確認されている (黒住, 2003b)。つまり、縄文時代中期のオキシジミ・スダレハマグリが多かった干潟はイノーに変わり、マガキガイ採集が増加したと考えられるのかもしれない。ただ、縄文時代中期と同じく、干潟や壙斜面の貝類が少なかったことは同様であった。

淡水産貝類としては、ベニオカイシマキ・シャジクカワニナ?・スガカワニナといった現在琉球列島のほとんど地域で認められない種が砂丘区から得られた。これらの種の成貝は、淡水域で生活し、産卵するが、幼生は一度海に出て、河口域に定着する両側回遊の生活史を持つと考えられ、現在では河口域の開発等により絶滅や絶滅に瀕している (黒住, 2003a)。これらの種が生存していたということは、当時の良好な河口環境を示している。

陸域では、前の時代より開放地のオカチョウジガイ類の占める割合が多くなり、開けた環境であったと考えられる。そして、スナガイ等の海浜部の種も認められることから、当然海岸部にサンプリング地点が位置していたと考えられる。

この海岸部でのサンプリング地点の堆積層から想定される砂丘形成 (松田, 本報告書) を出土した陸産貝類の側からみてみたい。E-17グリッドのバームクレストと砂丘 (表72)、さらに弥生時代上部層は出土個体数が少ないこともあり、比較的類似した種組成・量的組成を示している。その中には、海浜性のスナガイの出土があり、さらに林縁部にも生息するバンダナマイマイも得られている。一方、縄文時代後期の市来式土器期の砂丘 (E-19/20グリッド) からは陸産貝類は得られなかった。前者のバームクレストと砂丘サンプルの2-1mmメッシュに残った土壌 (砂) の重量比は全体の7-約10%、後者の砂丘の同メッシュ上では0.4%であった (表72)。バームクレストは波による管力で形成される層であり、砂丘は風成の層である。しかし、前述のように陸産貝類からは、E-19/20グリッドの砂丘で貝類が認められず、逆にバームクレストからは陸産貝類が認められている。つまり、波の影響のある地点でも林縁性の種が認められたわけであり、想定された堆積層と少し距離があるように思われる。つまり、縄文時代後・晩期のE-17グリッドのバームクレスト・砂丘では、堆積物の粒度が粗いものの、陸産貝類が生息できるようなある程度の安定帯の植生が成立していたと考えられる。一方、E-19/20の砂丘では、粒度の細かい風成の砂で形成されていたので、陸産貝類の生息場所としては不適と考えられ、植生も余り発達していなかった可能性が高い。今回のE-17グリッドと同様な陸産貝類と堆積層の観察結果は、奄美大島のマツノト遺跡でも確認されている (黒住, 2006a; 松田, 2006も参照)。今後、このような堆積層とその層から出土する陸産貝類遺体との比較検討データが集積されることが望まれる。

オグスク時代

この時代の海産貝類遺体は、量的に少なく、組成は弥生時代併行期のものに類似していた。つまり、人間の側の貝類採集活動が大きく変化していないとすれば、弥生時代と海域の変化も大きなものとは考えにくい。

一方、淡水産貝類は低湿地区から多数、砂丘区でも少数ではあったが得られた。砂丘区で淡水産貝類が得られたことは、黒住 (2003c) が隣接した後兼久原遺跡のI/II層から報告したように、オグスク時代より後の攪乱 (近代以降の水田が想定される) による可能性も考えられる。その組成は、スノメカワニナが優占し、棘を持たないトウガタカワニナ・カワニナ・タイワンモノアラガイ等も比較的多く得られた。これらは黒住 (1984) で示したように止水に生息する種であり、剥ぎ取り断

面(中村, 2006)のコメントでも明らかなように、「水田」を示すものである。つまり、グスク時代には、水田が形成されていたことがわかる。

この水田に関して、後兼久原遺跡では、下部の層ではミズイモの、上部の層ではイネの栽培が想定されている(黒住, 2003c)。しかし、今回も、栽培植物に関して、炭化穀類の分析等の新たな情報の追加はなく、この想定を検証は行われていないと考えられる。

この時期には、陸産貝類遺体は極めて多くなり、開放地に生息するホソオカチョウジガイ?とヒメベッコウ類似属が優占するようになり、林縁から海岸まで広く生息するバンダナマイマイとオキナワウスカワマイマイも幼貝を中心に多数得られた。つまり、農耕開始に伴い、周辺地域での森林の伐採により自然度の低い環境になったことが分かる。しかし、個体数・種数の増加は明瞭であり、このことと農耕を重ねて考えると、現在でも見られる耕作地周辺の木陰・作業小屋あるいは雑草の積み上げ・物資の積み上げといった湿った環境が逆に増加したために開放地性の陸産貝類が増加したと考えられる。

以上、伊礼原遺跡出土貝類遺体から、概略としての環境変遷を示してきた。北谷町の西海岸では、様々な時代の遺跡出土貝類遺体の組成が報告されているので、今後より詳細にそれぞれの遺跡出土貝類の組成を再検討し、環境変遷を明らかにできればと考えている。

引用文献

- 安里嗣淳・上原 静・大城秀子・花城潤子, 1981. 百名第二貝塚の試掘調査, 沖縄県文化財調査報告書, (38): 1-24, 17 pls. 沖縄県教育委員会.
- 鎮西清高, 1997. 牡蠣(カキ)は熟って進化する. *In* 奥谷番司(編), 貝のミラクル, pp. 19-38. 東海大学出版会, 東京.
- 花城潤子, 1987. 貝類遺存体. *In* 高袋 洋(編), 古我地原貝塚, 沖縄県文化財調査報告書, (84): 327-345. 沖縄県教育委員会.
- 菊池泰二, 1976. 貝類の分類および分析結果について. *In* 隈 昭志・江本 直・西町圭子・津川栄美(編), 飯雨・曾畑, 熊本県文化財調査報告, (19): 29-30, 155. 熊本県教育委員会.
- 黒住耐二, 1984. 沖縄の淡水貝類. *In* 沖縄の生物. 日本生物教育会全国大会記念誌, pp. 115-118. 日本生物教育会沖縄大会実行委員会, 沖縄.
- 黒住耐二, 1988. 遺跡出土貝類の生息場所類型(型)化の試み. *In* 高袋 洋(編), 古我地原貝塚, 沖縄県文化財調査報告書, (84): 359-362. 沖縄県教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二, 1991. 貝類遺存体. *In* 金武正紀ら(編), 今帰仁城跡発掘調査報告書, II, 今帰仁村文化財調査報告書, (14): 340-351. 今帰仁村教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二, 1997. 1996年の用見崎遺跡調査でコラムサンプルから得られた貝類遺存体. *In* 若杉竜太・尾上博一(編), 用見崎遺跡 III, 考古学研究室報告, (82): 35-41. 熊本大学考古学研究室.
- 黒住耐二, 2001. 伊是名貝塚の貝類分析. *In* 伊是名貝塚学術調査団(編), 伊是名貝塚, pp. 328-345. 勉誠出版, 東京.
- 黒住耐二, 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活. *In* 木下尚子(編), 先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp. 67-86. 熊本大学文学部.

- 黒住耐二. 2003a. 軟体動物. In 西田 睦・鹿谷法一・諸喜田茂光 (編), 琉球列島の陸生生物, pp. 167-180. 東海大学出版会, 東京.
- 黒住耐二. 2003b. 貝類遺体. In 山城安生・島袋春美 (編), 大作原古墓群, 北谷町文化財調査報告書, (22): 163-171. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 黒住耐二. 2003c. 沖縄における貝類遺体からみた湿地堆積物の検討—後兼久原遺跡のコラムサンプリング調査—. In 山城安生・島袋春美 (編), 後兼久原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (21): 401-405. 沖縄県北谷町教育委員会.
- 黒住耐二. 2006a. 琉球列島において絶滅した完新世ハイガイ類 (軟体動物門: 二枚貝綱) の分類学的検討と生存年代. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告, 9 (1): 24-30.
- 黒住耐二. 2006b. 貝類遺体からみた遺跡の立地環境と生活. In 木下高子 (編), 先史琉球の生業と交易 2—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp. 115-134. 熊本大学文学部.
- 黒住耐二. 2007. 胎生淡水産貝類からみた先史時代の沖縄諸島における根栽農耕の可能性. 南島考古, (26) (印刷中)
- 茅根 創・米倉伸之. 1990. サング礁を掘る. In サング礁地域研究グループ (編), 日本のサング礁. 1. 熱い自然, pp. 176-185. 古今書院, 東京.
- 松田順一郎. 2006b. マツノト遺跡の砂丘堆積物の分析. In 木下高子 (編), 先史琉球の生業と交易 2—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp. 41-58. 熊本大学文学部.
- 松島義章. 1984. 日本列島における後氷期の浅海性貝類群集—特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷—. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学) (15): 37-109.
- 盛本 勲. 1984. 動物遺体. In 岸本義彦 (編), 野国. 野国貝塚群B地点発掘調査報告書, 沖縄県文化財調査報告書 (57): 23-68, pls. 13-20. 沖縄県教育委員会.
- 中井達郎. 1990. 北限地域のサング礁—サング礁とは. In サング礁地域研究グループ (編), 伊日本のサング礁. 1. 熱い自然, pp. 57-65. 古今書院, 東京.
- 中村 恵 (編). 2006. 伊礼原遺跡—図録集—, 北谷町文化財調査報告書, (25): 1-104. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 名和 純. 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. WWF Japan Science Report, 4:1-44.
- Ohgaki, S. & T. Kurozumi. 2000. Historical decline of the mangrove gastropods, *Telescopium* and *Terebralia* in the Ryukyu Islands and Taiwan: evidence from shell middens. *Asian Marine Biology*, 17: 125-135.
- 沖縄県文化環境部自然保護課 (編). 2005. 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 (動物編) —レッドデータ沖縄—. x + 561 pp. 沖縄県文化環境部自然保護課.
- 大松志伸・辻 誠一郎. 2001. 沖縄県北谷町伊礼原C遺跡の縄文時代前期相当期的大型植物遺体群. 植生史研究, 10 (1): 17-32.
- 大城秀子 (編). 1994. 下上原貝塚, 知念村文化財調査報告書, (6): 1-63. 知念村教育委員会, 沖縄.
- 大城秀子 (編). 2004. 熱田原貝塚, 知念村文化財調査報告書, (10): 1-129. 知念村教育委員会, 沖縄.
- 島袋春美. 1987a. 貝製品. In 島袋 洋 (編), 石川市古我地原貝塚, 沖縄県文化財調査報告書, (84): 278-301. 沖縄県教育委員会, 沖縄.
- 島袋春美. 1987b. 化石サメ歯製品について. 南島考古だより, (57): 4.
- 高宮廣新・C. W. Meighan. 1992. 熱田原貝塚採集の貝類と魚骨. 沖縄国際大学文学部紀要. 社会科学編, 19 (1/2).
- 植桑岳二・黒住耐二・山谷文人・切通雅子. 2000. 貝類遺体. In 阪本太一 (編), 中里塚, 北区埋蔵文化財調査報

告書, (26), pp. 99-171. 東京都北区教育委員会.

東門研治, 2000. 伊礼原C遺跡. 考古学ジャーナル (454): 26-31.

東門研治・中村 暁・島袋春美, 2005. キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査, 北谷町文化財調査報告書, (23): 1-160. 北谷町教育委員会, 沖縄.

上地千賀子, 1986. 貝類遺存体. In 岸本義彦 (編), 具志堅貝塚調査報告, 本部町文化財調査報告書, (3): 25-34. 本部町教育委員会沖縄.

氏家 宏・中村俊夫, 1996. 最終氷期以降における, 黒潮の沖縄トラフ流入の変遷. 月刊地球, 18 (8): 524-530.

内海富士夫, 1985. オニフジツボ. In 岡田 要 (編), 新日本動物図鑑 [中], p. 516. 北隆館, 東京.

Vermeij, G. J. 1974. Marine faunal dominance and molluscan shell form. *Evolution*, 28: 656-664.

	縄文前期	縄文中期	弥生併行期 (N = 29)
サンゴ礁域：潮間帯 (I-1)	2.74	21.62	68.97
サンゴ礁域：イノー (I-2)	49.57	16.22	20.69
サンゴ礁域：干瀬 (I-3)	11.82	0	0
サンゴ礁域：礁斜面 (I-4)	12.8	0	0
内湾一転石域 (II)	4.79	24.32	6.9
河口干潟-マングローブ域 (III)	18.28	37.84	3.45

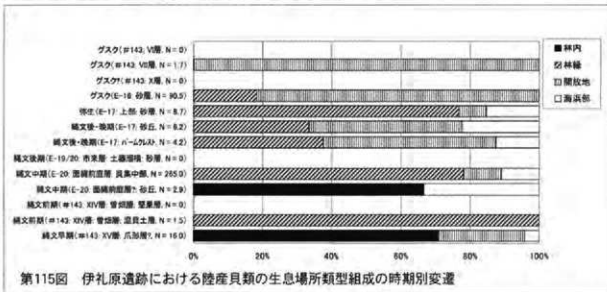
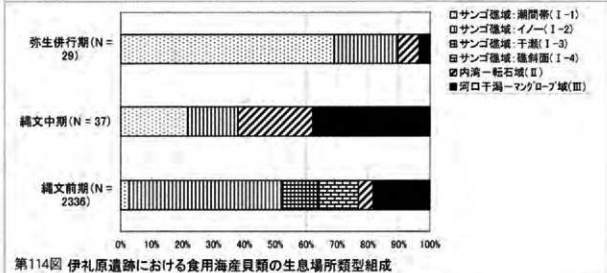
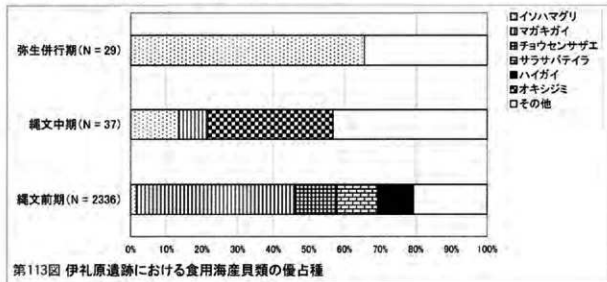


表65 伊礼原遺跡出土貝類とその生息場所類型

Japanese name	Scientific name	生息場所 類型	Japanese name	Scientific name	生息場所 類型
軟体動物門	Mollusca		スミマヅ科	Stenothyridae	
腹足綱	Gastropoda		スミマヅノミヅ	<i>Stenothyra basiangulata</i>	I-4-c
ツツノ科	Nacellidae		スミマヅノミヅ	Strombidae	
ツツノイ	<i>Celana testudinaria</i>	I-1-a	スミマヅノミヅ	<i>Strombus (Canarium) mutabilis</i>	I-2-c
ツツノイ	<i>Celana grata?</i>	I-1-a	スミマヅノミヅ	<i>Strombus (Canarium) ureum</i>	II-2-c
ツツノイ	Turbinidae		スミマヅノミヅ	<i>Strombus (Gibb.) g. gibbosus</i>	II-1-c
ツツノイ	<i>Turbo (Marm.) angustostomus</i>	II-3-a	スミマヅノミヅ	<i>Strombus (Conomurex) luhuanus</i>	I-2-c
ツツノイ	<i>Turbo (Lunata) marmorata</i>	II-4-a	スミマヅノミヅ	<i>Strombus (Lentigo) lentiginosus</i>	I-2-c
ツツノイ	<i>Lunella moniformis</i>	II-1-b	スミマヅノミヅ	<i>Strombus (Tricoma) latissimus</i>	I-4-c
ツツノイ	<i>Astralum rhodostoma</i>	I-2-a	スミマヅノミヅ	<i>Lambis lambis</i>	I-2-c
ツツノイ	<i>Colosia costulosa</i>	I-2-c	スミマヅノミヅ	<i>Harpago chagra</i>	I-2-c
ツツノイ科	Trochidae		スミマヅノミヅ	Hipponacidae	
ツツノイ	<i>Trochus (s.s.) maculatus</i>	I-2-a	スミマヅノミヅ	<i>Sabia acuta</i>	I-3-a
ツツノイ	<i>Trochus (s.s.) stellatus</i>	I-3-a	スミマヅノミヅ	<i>Antisabia foliacea</i>	I-3-a
ツツノイ	<i>Trochus (Trochus) pyramis</i>	I-4-a	スミマヅノミヅ	Vermetidae	
ツツノイ	<i>Trochus (Trochus) conus</i>	I-4-a	スミマヅノミヅ	<i>Dendropoma maximum</i>	I-2-a
ツツノイ	<i>Trochus (Trochus) nitidus</i>	I-4-a	スミマヅノミヅ	<i>Serpulorhis</i> sp.	I-2-a
ツツノイ	<i>Mondonta labo</i>	II-1-b	スミマヅノミヅ	Cypraeidae	
ツツノイ	<i>Iwakawatrochus urbanus</i>	II-2-d	スミマヅノミヅ	<i>Cypraea (Monetaria) moneta</i>	I-1-a
ツツノイ科	Nemidae		スミマヅノミヅ	<i>Cypraea (Monetaria) annulus</i>	I-1-a
ツツノイ	<i>Natta (Pitena) heliconides</i>	I-0-a	スミマヅノミヅ	<i>Cypraea (Eronia) eronias</i>	I-2-b
ツツノイ	<i>Natta (Pitena) striata</i>	I-1-a	スミマヅノミヅ	<i>Cypraea (Erosiana) erosa</i>	I-2-b
ツツノイ	<i>Natta (Pitena) plicata</i>	I-0-a	スミマヅノミヅ	<i>Cypraea (Ravitrina) caputsepuentes</i>	I-3-a
ツツノイ	<i>Natta (Theiostylis) albicollis</i>	I-1-b	スミマヅノミヅ	<i>Cypraea (Maurita) mauritiana</i>	I-1-a
ツツノイ	<i>Natta (Theiostylis) squamulata</i>	II-1-b	スミマヅノミヅ	<i>Cypraea (Aratica) arabica</i>	I-2-a
ツツノイ	<i>Natta (Theiostylis) charmaeleon</i>	I-1-b	スミマヅノミヅ	<i>Cypraea (s.s.) tigris</i>	I-2-c
ツツノイ	<i>Natta (Arpinneta) polita</i>	I-1-c	スミマヅノミヅ	<i>Cypraea (Mytastopoda) virella</i>	I-2-a
ツツノイ	<i>Cithon sowerbianus</i>	III-0-e	スミマヅノミヅ	Naticidae	
ツツノイ	<i>Cithon corona</i>	IV-5	スミマヅノミヅ	<i>Polinices turidus</i>	I-2-c
ツツノイ	<i>Nantina (Vittada) variegata</i>	IV-5	スミマヅノミヅ	<i>Mermis melanostoma</i>	I-2-c
ツツノイ	<i>Nematodyas dubia</i>	IV-6	スミマヅノミヅ	<i>Notiochelis guianensis</i>	II-1-c
ツツノイ	<i>Septana porosiana</i>	IV-5	スミマヅノミヅ	Tonidae	
ツツノイ科	Vivipandae		スミマヅノミヅ	<i>Tonna cepa</i>	I-4-c
ツツノイ	<i>Chipangopeludina chinensis laeta</i>	IV-6	スミマヅノミヅ	Ranelidae	
ツツノイ	<i>Snotta quadrata hestica</i>	IV-6	スミマヅノミヅ	<i>Cyrtarium (Cyrtarion) nicobaricum</i>	I-2-a
ツツノイ科	Cydothoridae		スミマヅノミヅ	<i>Cyrtarium (Septa) mundum</i>	I-2-a
ツツノイ	<i>Cyclophorus turigus</i>	V-8	スミマヅノミヅ	<i>Cyrtarium (Guttarium) mundum</i>	I-2-a
ツツノイ科	Diplomatnidae		スミマヅノミヅ	<i>Cyrtarium (Monoplex) pleare</i>	I-4-a
ツツノイ	<i>Diplomatina (Sinea) l. lyrata</i>	V-7	スミマヅノミヅ	<i>Cyrtarium (Litoria) litorum</i>	I-4-a
ツツノイ科	Cerithiidae		スミマヅノミヅ	<i>Charonia tritonis</i>	I-4-a
ツツノイ	<i>Cerithium (s.s.) modulosum</i>	I-2-c	スミマヅノミヅ	Bursidae	
ツツノイ	<i>Cerithium (s.s.) columinum</i>	I-2-a	スミマヅノミヅ	<i>Bursa bufonis dunkeri</i>	I-3-a
ツツノイ	<i>Cypraeomorpha zonatus</i>	II-2-c	スミマヅノミヅ	Cassidae	
ツツノイ	<i>Cypraeomorpha bifasciata</i>	I-1-b	スミマヅノミヅ	<i>Cassina erinacea</i>	I-4-c
ツツノイ	<i>Cypraeomorpha batillanaeiformis</i>	II-1-b	スミマヅノミヅ	Mucidae	
ツツノイ	<i>Cypraeomorpha cherrinitziana</i>	I-1-b	スミマヅノミヅ	<i>Chicoreus butunneus</i>	I-2-a
ツツノイ科	Cerithiidae		スミマヅノミヅ	<i>Chicoreus ramosus</i>	I-4-a
ツツノイ	<i>Cerithiopsis ogulata</i>	III-1-c	スミマヅノミヅ	<i>Crona crassinata</i>	II-1-b
ツツノイ	<i>Terebrala parvius</i>	III-1-c	スミマヅノミヅ	<i>Mancinella tuberosa</i>	I-3-a
ツツノイ	<i>Terebrala sulcata</i>	III-1-c	スミマヅノミヅ	<i>Drupa (s.s.) monum</i>	I-3-a
ツツノイ	<i>Telescopium telescopium</i>	III-0-c	スミマヅノミヅ	Vasidae	
ツツノイ科	Batillidae		スミマヅノミヅ	<i>Vasum ceramium</i>	I-3-a
ツツノイ	<i>Batillana fectopsonata</i>	II-1-c	スミマヅノミヅ	<i>Vasum tubulinum</i>	I-2-a
ツツノイ	<i>Batillana zonalis</i>	III-1-c	スミマヅノミヅ	Columbellidae	
ツツノイ科	Planaxidae		スミマヅノミヅ	<i>Euplicia vesicolor</i>	II-2-d
ツツノイ	<i>Planaxis sulcatus</i>	I-0-a	スミマヅノミヅ	Bucconidae	
ツツノイ科	Thaeridae		スミマヅノミヅ	<i>Engina (Pusostoma) medicensis</i>	I-1-a
ツツノイ	<i>Thaera scabra</i>	IV-5,6	スミマヅノミヅ	<i>Jacuszithia ongulata</i>	II-1-b
ツツノイ	<i>Melanoides tuberculata</i>	IV-6	スミマヅノミヅ	Nassaridae	
ツツノイ	<i>Stenomelania uniformis</i>	IV-6	スミマヅノミヅ	<i>Nassarius coronatus</i>	II-1-c
ツツノイ	<i>Stenomelania plicata</i>	IV-6	スミマヅノミヅ	<i>Nassarius</i> sp. cf. nodifer	II-2-c
ツツノイ	<i>Stenomelania hastulata?</i>	IV-6	スミマヅノミヅ	<i>Noth semiculauta</i>	I-1-c
ツツノイ	<i>Semlya roulei</i>	III-1-c	スミマヅノミヅ	Fasciolaridae	
ツツノイ科	Pleurocidae		スミマヅノミヅ	<i>Pleurotopia trapezium</i>	I-2-a
ツツノイ	<i>Semiscoprea bensoni</i>	IV-5,6	スミマヅノミヅ	<i>Pleurotopia filamentosa</i>	I-2-a
ツツノイ科	Assimineidae		スミマヅノミヅ	<i>Littorax becheri</i>	I-3-a
ツツノイ	<i>Solenophthalma debilis</i>	IV-6	スミマヅノミヅ	<i>Bemmelus fastigium</i>	I-2-a
ツツノイ	<i>Agastassinea</i> sp. cf. satumana	II-0-b	スミマヅノミヅ	<i>Fusius nicobaricus</i>	I-2-c
ツツノイ科	Truncatellidae		スミマヅノミヅ	Olividae	
ツツノイ	<i>Truncatella cuneata</i>	V-10	スミマヅノミヅ	<i>Olivia annulata</i>	I-2-c

表65 伊礼原遺跡出土貝類とその生息場所類型(つづき-1)

Japanese name	Scientific name	生息場所 類型	Japanese name	Scientific name	生息場所 類型
ツツガキ科	Harpidae		ツツガキ	<i>Bradybaena similis</i>	V-9
ハコバネ科	<i>Harpa harpa</i>	I-4-c	ツツガキ	<i>Acusta d. despecta</i>	V-8
ツツガキ科	Mitridae		ツツガキ	<i>Avigata scapularia</i>	V-7
ツツガキ	<i>Strigatella litterata</i>	I-1-a	肥後綱	Scaphopoda	
ツツガキ	<i>Strigatella virgata</i>	I-1-a	ツノガイ科	Dentalidae	
ツツガキ	<i>Pterygia dactylus</i>	I-1-b	ツノガイ	<i>Dentalium wenkauffi?</i>	VI
ツツガキ			ツノガイ類	<i>Dentalium</i> sp. 1 cf. <i>P. venardi</i>	VI
ツツガキ科	Conidae		二枚貝綱	Bivalvia	
ツツガキ	<i>Conus (Viroconus) ebraeus</i>	I-1-a	ツツガキ科	Arcidae	
ツツガキ	<i>Conus (Viroconus) chaldaeus</i>	I-1-a	ツツガキ	<i>Arca ventricosa</i>	I-2-a
ツツガキ	<i>Conus (Viroconus) fulgetrum</i>	I-1-a	ツツガキ	<i>Arca avellana</i>	I-2-a
ツツガキ	<i>Conus (Viroconus) coronatus</i>	I-1-a	ツツガキ	<i>Barbatia (Abarbatia) lima</i>	I-1-a
ツツガキ	<i>Conus (Viroconus) flavidus</i>	I-2-a	ツツガキ	<i>Barbatia (Ustulercia) cruciata</i>	I-1-b
ツツガキ	<i>Conus (Viroconus) lividus</i>	I-2-a	ツツガキ	<i>Barbatia (Savignyarca) obtusoides</i>	I-1-b
ツツガキ	<i>Conus (Viroconus) emaciatius</i>	I-2-c	ツツガキ	<i>Acer plicatum</i>	I-2-a
ツツガキ	<i>Conus (Viroconus) distans</i>	I-2-c	ツツガキ	<i>Anadara (s.s.) antiquata</i>	I-2-c
ツツガキ	<i>Conus (Viroconus) terebraq</i>	I-4-c	ツツガキ	<i>Anadara (Teglicarca) granosa</i>	III-1-c
ツツガキ	<i>Conus (Pheoconus) miles</i>	I-3-a		form obesa	
ツツガキ	<i>Conus (Pheoconus) captaneus</i>	I-4-c	(ツツガキ科)	Mytilidae	
ツツガキ	<i>Conus (Pheoconus) mustelina?</i>	I-4-c	ツツガキ	<i>Sapellus exocis</i>	I-2-b
ツツガキ	<i>Conus (Pheoconus) veillum</i>	I-4-c	ツツガキ科	Pteridae	
ツツガキ	<i>Conus (Pinoconus) megas</i>	I-2-c	ツツガキ	<i>Pinctada margaritifera</i>	I-4-a
ツツガキ	<i>Conus (Darioconus) perniciosus</i>	I-2-c	ツツガキ	<i>Pinctada panassense</i>	I-1-a
ツツガキ	<i>Conus (Darioconus) textile</i>	I-2-c	ツツガキ科	Isoگونム科	
ツツガキ	<i>Conus (Stroconus) striatus</i>	I-2-c	ツツガキ	<i>Isoگونム</i>	I-2-b
ツツガキ	<i>Conus (Gastrium) geographus</i>	I-2-c	ツツガキ科	Limidae	
ツツガキ	<i>Conus (s.s.) marmoratus</i>	I-2-c	ツツガキ	<i>Lima vulgaris</i>	I-2-a
ツツガキ	<i>Conus (Leptoconus) generalis</i>	I-2-c	ツツガキ科	Pectinidae	
ツツガキ	<i>Conus (Punctoile) pulcherrimus</i>	I-2-c	ツツガキ	<i>Gloripallium pallium</i>	I-2-b
ツツガキ	<i>Conus (Punctoile) arenatus</i>	I-2-c	ツツガキ	<i>Pectinidae</i> gen. et sp.	VI-12
ツツガキ	<i>Conus (Lithoconus) tessellatus</i>	I-2-c	ツツガキ科	Spondyliidae	
ツツガキ	<i>Conus (Lithoconus) obtusus</i>	I-2-c	ツツガキ	<i>Spondylus</i> sp.	I-2-a
ツツガキ	<i>Conus (Lithoconus) litteratus</i>	I-2-c	ツツガキ科	Gryphaeidae	
ツツガキ	<i>Conus (Lithoconus) leopardus</i>	I-2-c	ツツガキ	<i>Hyotissa hyotis</i>	I-1-a
ツツガキ科	Bullidae		ツツガキ科	Ostrinidae	
ツツガキ	<i>Bulla venicosa</i>	I-2-c	ツツガキ	<i>Ostrea fluctigera</i>	I-2-c
ツツガキ科	Eschschidae		ツツガキ	<i>Crassostrea bilineata</i>	III-1-c
ツツガキ	<i>Pythia pantherina</i>	II-0-a	ツツガキ	<i>Saccostrea echinata</i>	I-1-b
ツツガキ	<i>Carychium cymatoplax</i>	V-8	ツツガキ	<i>Saccostrea oronouta</i>	I-1-b
ツツガキ科	Lymnaeidae		ツツガキ	<i>Dendrostrea folium</i>	II-2-a
ツツガキ	<i>Radix auriculana swinhoei</i>	IV-6	ツツガキ科	Lucinidae	
ツツガキ	<i>Austropelex okla?</i>	IV-6	ツツガキ	<i>Codakia rigens</i>	I-2-c
ツツガキ科	Planorbidae		ツツガキ	<i>Anodonta</i> sp. cf. <i>edentula</i>	II-2-c
ツツガキ	<i>Gyraulus tokyoensis?</i>	IV-6	ツツガキ科	Chamaeidae	
ツツガキ科	Puzosidae		ツツガキ	<i>Chama brassica</i>	I-4-a
ツツガキ	<i>Gastrocopta armigerella</i>	V-10	ツツガキ	<i>Chama lazarus</i>	II-2-a
ツツガキ科	Clausiliidae		ツツガキ科	Carditidae	
ツツガキ	<i>Zatipyx hyperoptyx</i>	V-8	ツツガキ	<i>Cardita leana</i>	I-2-b
ツツガキ	<i>Luchuphaedusa callistochia</i>	V-7	ツツガキ科	Cardidae	
ツツガキ	<i>Luchuphaedusa p. praedra</i>	V-8	ツツガキ	<i>Fragum unedo</i>	II-2-c
ツツガキ科	Achatinidae		ツツガキ	<i>Fragum bochoomorum</i>	II-2-c
ツツガキ	<i>Achatina fulca</i>	V-9	ツツガキ	<i>Rogozara flavum</i>	II-2-c
ツツガキ科	Subulinidae		ツツガキ科	Tridacnidae	
ツツガキ	<i>Alopeces pyrula?</i>	V-9	ツツガキ	<i>Tridacna maxima</i>	I-2-a
ツツガキ sp. 1	<i>Alopeces</i> sp. 1	[V-8]	ツツガキ	<i>Tridacna squamosa</i>	I-2-c
ツツガキ sp. 2	<i>Alopeces</i> sp. 2	[V-8]	ツツガキ	<i>Tridacna deirata?</i>	I-4-c
ツツガキ	<i>Pariopeas achatinaceus</i>	V-9	ツツガキ	<i>Tridacna crocea</i>	I-2-a
ツツガキ科	Helicariidae		ツツガキ	<i>Hippopus hippopus</i>	I-2-c
ツツガキ	<i>Parakolima?</i>	V	ツツガキ科	Mactridae	
ツツガキ	<i>Decoconulus?</i> sp.	V-9	ツツガキ	<i>Mactra maculata</i>	II-2-c
ツツガキ	<i>Yamatochlamys tanegashimae?</i>	V-7	ツツガキ	<i>Mactra cuneata?</i>	II-1-c
ツツガキ	<i>Noponochlamys subelmaeus?</i>	V-7	ツツガキ	<i>Meropseta nicobarica</i>	II-2-c
ツツガキ	<i>Luchuconulus?</i> sp.	V-7	ツツガキ科	Mesodesmatidae	
ツツガキ科	Trochomorphidae		ツツガキ	<i>Acteocorda striata</i>	I-1-c
ツツガキ	<i>Videnedia h. horionphala</i>	V-8	ツツガキ	<i>Davilia plana</i>	I-1-c
ツツガキ科	Caenaidae		ツツガキ科	Donacidae	
ツツガキ	<i>Satsuma (s.s.) m. mercatorum</i> var.	V-8	ツツガキ	<i>Latona cuneata?</i>	I-1-c
ツツガキ	<i>Satsuma (s.s.) m. katsuranensis</i>	V-7	ツツガキ	<i>Latona faba</i>	I-1-c
ツツガキ	<i>Satsuma (Luchu.) tergilieri</i> var.	V-8	ツツガキ科	Tellinidae	
(本島中部型)			ツツガキ	<i>Quidnapis pilatum</i>	II-1-c
ツツガキ	<i>Satsuma (Luchu.) amano-</i>				
ツツガキ科	Bradybaenidae				
ツツガキ	<i>Bradybaena granulata</i>	V-8			

表65 伊礼原遺跡出土貝類とその生息場所類型（つづき-2）。

Japanese name	Scientific name	生息場所 類型	Japanese name	Scientific name	生息場所 類型
サガラ	<i>Scuterocephala scobinata</i>	I-2-c	環形動物門	Annulata	
サガサガラ	<i>Cydotellina remes</i>	I-2-c	多毛綱	Polychaeta	
アサシガイ科	Semelidae		カガシノ貝科	Serpulidae	
サガサガラ	<i>Semele carnicolor</i>	II-1-c	丁貝類 (櫻管)	gen. et sp. (tube)	VI-11
イサシガイ科	Psammobidae		棘皮動物門	Echinodermata	
サガサガラ	<i>Asaphis violacea</i>	II-1-c	ウニ綱	Echinozoa	
サガサガラ	<i>Psammonea elongata</i>	II-1-c	ナガウニ科	Echinometridae	
ツバガイ科	Trapezidae		ハイツウニ (鞍)	<i>Heterocentrotus mammillatus</i> (spn.)	I-3-a
サガサガラ	<i>Trapezium subaequatum</i>	II-1-b			
ツバガイ科	Corbiculidae		生息場所類型 (Habitat)		
ツバガイ	<i>Gelone erosa</i>	III-0-c	I: 外洋-サンゴ礁域		
ツバガイ科	Pisididae		II: 内海-乾石域		
ツバガイ	<i>Sphaerium (Musculum) oknawaense</i>	IV-6	III: 河口干潟-マングローブ域		
ツバガイ科	Veneridae		IV: 淡水域		
メノガイ	<i>Periglypta puerpera</i>	II-2-c	V: 陸域		
ツバガイ	<i>Gafrarium pectinatum</i>	II-1-c	VI: その他		
ツバガイ	<i>Gafrarium tumidum</i>	III-1-c	0: 潮間帯上部(ではノッチ, IIではマガロ-ア)		
ツバガイ	<i>Pitar striatum</i>	II-2-c	1: 潮間帯中・下部		
ツバガイ	<i>Pitar lineatum</i>	II-2-c	2: 亜潮間帯上縁部(ではイノ-)		
ツバガイ	<i>Bonartema hismo</i>	II-2-c	3: 干潟(にのみ適用)		
ツバガイ	<i>Tapes literatus</i>	II-2-c	4: 礁斜面及びその下部		
ツバガイ	<i>Tapes belcheri</i>	II-2-c	5: 止水		
ツバガイ	<i>Ruditapes variegata</i>	II-1-c	6: 流水		
ツバガイ	<i>Kataysia japonica</i>	II-1-c	7: 林内		
ツバガイ	<i>Meretrix lamercki?</i>	II-2-c	8: 林内・林縁部		
ツバガイ	<i>Meretrix petechialis</i>	VI	9: 林縁部		
ツバガイ	<i>Cyclina sinensis</i>	III-1-c	10: 海岸部		
			11: 打ち上げ物		
			12: 化石		
多板綱	Polyplacophora		a: 岩礁/岩盤		
ツバガイ科	Chitonidae		b: 乾石		
ツバガイ	<i>Acanthopleura</i> sp.	I-1-a	c: 礫/砂/泥底		
頭足綱	Cephalopoda		d: 植体上		
ツバガイ科	Sepiidae		e: 淡水の流入する礫底		
ツバガイ	<i>Sepia latimeria?</i>	I-2			
節足動物門	Arthropoda				
甲殻類	Crustacea				
藤節類	Cirripedia				
ツバガイ	<i>Coronula didema</i>	VI-11			
短尾類	Brachyura				
ツバガイ	<i>Soilia serrata?</i>	III-0			

表71 伊礼原遺跡の剥ぎ取り断面（中村, 2006）で確認された貝類.

南区東側壁面		(XI層より上部の剥ぎ取り未図示)													
伊礼原遺跡:図版28	樹根層②	貝層													
開き取った層序 コメント等	XVI層	XV層	XIV層 下部:礎小	XIV層 上部:礎大 中央区の 管燧層の 下の部分*1	XIV層 最上部: 礎極小 三角の 落込み	XII層	XI層 縄物遺体 増加	IX層 0- 10cm*3	VIII層 15- 15cm	VI+VII層 35- 52cm	35- 52cm 乾湿を繰り返す*2	52- 70cm 水田	70- 75cm	75- 100cm	100- 110cm
										中央区の 水田③?7		中央区の 水田②?7			
海産貝類															
カンギク			1f												
オキナワシダタミ			1f												
ヒザラガイ類			1iv												
タマキ?			1v												
サラサバテイル				5											
チョウセンサザエ				1. ?1											
ヤコウガイ(フタ)				1											
イソハマグリ				1v											
マガキガイ?				1											
ハイガイ				1v											
アラスジケマン				1f											
淡水産貝類															
トウガタカワニナ	19	2								6	4	2		2	
カワニナ		1				2			4	4	4	6	6	4	
ヌノメカワニナ									4	44	44	62	10	16	62
タイワンモノアラガイ										8	2			2	
トウキョウヒラマキ?														2	2
中央区南壁面															
伊礼原遺跡:図版28	樹根層②	爪形文土器層 XVII層	管燧式土器層 XIV層 シイの実層		樹根層①										
コメント等			管燧層の 下の部分*1	管燧層の 上の部分*1	層を掘削: 遺構*2										
海産貝類															
二枚貝?			4f	1f											
シレナシジミ?			1f												
サラサバテイル					1f										
淡水産貝類															
カワニナ					1f						3				

*1: 中村, 私債. *2: 松田, 私債. *3: 剥ぎ取り2枚目下部からの高さ. f: 破片. iv: 中間板. v: 片殻. 数字の前の?は同定の不確実なもの.

表72 伊礼原遺跡（低湿地区）のフローテーションで得られた貝類遺体（同定標本数：NSP）。

地点 層序	#143 XV層 管畑層の下	#143 XIV層 管畑層 混貝土層 縄文前期	#143 XIV層 管畑層 堅果層 縄文前期	#143 X層	#143 VII層	#143 VI層	E/20 貝集中・ 面縄前庭土器	E/20 砂丘	E19/20 市来式土器 土器溜積/砂層 縄文後期	E17 ハ〜Mリスト [縄文後/晩期]	E17 砂丘 [縄文後/晩期]	E17 弥生 /上部
時代					G/G	G/G	縄文中期	縄文中期	縄文後期	[縄文後/晩期]	[縄文後/晩期]	弥生
土壌量 cc	1500	1350	550	550	600	600	1000	1050	1850	1900	1450	1500
土壌重量 kg	1.50	1.41	0.49	0.61	0.77	0.72	1.03	1.03	2.56	2.83	2.14	1.78
2-1 mmの割合(%)	7.0	4.8	1.4	1.3	0.5	0.4	3.5	0.4	0.4	6.9	9.7	3.6
腹足綱(陸産)												
クニガミゴマガイ								2				
タネガシマヒメベッコウ?	5											
リュウキュウカドベッコウ属?	2											
ベッコウマイマイ科不明	10											
ノミギセル							176					??
ハリマキビ属							7			??		
オカチヨウジガイ類sp. 1	2											
ホソオカチヨウジ?								1		2	3	1
オカチヨウジガイ類sp. 2												
オカチヨウジガイ類sp. 3												
オカチヨウジガイ類(卵)												
ヒメベッコウ属類似種	4											
不明1(マルナタネ類?)	2					1					1	
ナガケンガイ		1										
バンダナマイマイ										1	1	1
バンダナ科?カサガ												
クビキレガイ	1											
スナガイ												
ウスイロオカチグサ												
腹足綱(淡水産)												
カワニナ		??				5						
トウガタカワニナ	5					10						
ヌノメカワニナ						1	10					
カワニナ類?						1	1					
オキナワミズゴマツボ						6	3					
タイワンモノアラガイ												
ヒメモノアラガイ?						1						
モノアラガイ類						2						
ヒラマキミズマイマイ属		1										
不明淡水巻貝						1						
二枚貝綱(淡水産)												
オキナワドブシジミ						3	1					
海産貝類												

VI 沖縄県伊礼原遺跡出土黒曜石製石器の化学分析による産地推定

角 縁 進^{*1}・小畑弘己^{*2}

I. 分析資料と遺跡の概要

遺 跡 名: 伊礼原 (いれいばる) 遺跡

所 在 地: 沖縄県中頭郡北谷町字伊平小字伊礼原

概 要: 北谷町字伊平小字伊礼原144番地のキャンプ委江内の沖積層 (標高5.7m) に形成された低湿地区と砂丘区の遺跡である。1999～2004年度にかけて、遺跡の範囲や性格の把握を目的とした発掘調査が実施されている。砂丘区では縄文中・後・晩期、弥生時代併行期の生活址が、低湿地区では縄文前期の曾畑式土器などを包含する文炭層が確認され、多くの遺物が検出されている。特殊泥炭層という遺跡の性格から有機質遺物の保存状態が良好で、土器や石器などの他、木製の櫛、ボール状製品、石斧の柄やオキナフウラジロガシやシイなどを主体とした堅果類の実の他、竹製の貯蔵容器の朶が検出されている。

資料の属性: 黒曜石は砂丘区の第3層下部～第4層より、縄文後・晩期に位置づけられている土器群などに伴って剥片13点が検出され、盛土から2点が採集されている。これら黒曜石製剥片15点 (第116図・図版164) は急角度の打角をもつ剥片類や両極打法によって剥離された剥片類を主とし、小さな碎片 (チップ) を含む。剥片のほとんどは頭部や側面を中心として使用痕が認められる。肉眼観察によれば腰岳産黒曜石を素材としたものと思われる (表77参照)。

試料番号: OK0015・OK0016・OK0017・OK0018・OK0062～OK0072 (表77参照)

試料の時期: 縄文時代後期後半相当期 (大山式)・不明

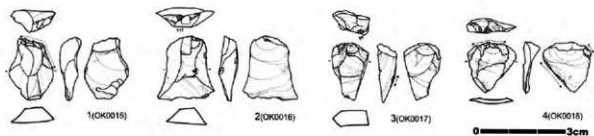
表77 資料の属性および試料番号・時期

番号	調査区・遺構	層位	時 期	器 種	長さ	幅	厚さ	重さ	欠損	伴出番号	備考
OK0015	E-20IX	第3層下部・第4層上部	縄文後期後半	UF	21.7	15.0	5.9	1.8	ガジリ	図1:1	
OK0016	C-19IX	第4 (仮) 層	縄文後期後半	UF	23.5	19.7	5.8	2.0		図1:2	
OK0017	C-19・20IX	第4 (仮) 層	縄文後期後半	UF	20.9	13.2	9.8	1.7		図1:3	
OK0018	C-24IX北側	盛土採集	不 明	UF	17.5	16.5	5.3	0.8		図1:4	
OK0062	C-19・20IX	第4層	縄文後期	UF	20.6	13.9	5.4	1.5		写真1:5	
OK0063	C・D-18IX	第4層	縄文後期	F	25.3	16.5	9.4	2.9	ガジリ	写真1:6	両極剥片
OK0064	C-19・20IX	第4層	縄文後期	Ch	8.2	12.0	1.8	0.2		写真1:7	
OK0065	D-19IX	東側約140cmサブトレンチ下部	縄文後期	UF	14.2	16.7	5.7	1.9	ガジリ	写真1:8	塊状
OK0066	H-18IX	第4層	不明	F	15.8	18.2	10.7	2.1	欠損	写真1:9	
OK0067	A-TP20	盛土表採	不明	UF	15.9	16.5	5.8	1.0		写真1:10	
OK0068	E-20IX	第4 (仮) 層	縄文後期後半	UF	12.8	13.5	5.3	0.9		写真1:11	
OK0069	A-TP20	黒色土上層	縄文後期	AH	16.2	19.1	6.0	0.6	欠損	写真1:12	
OK0070	E-18IX	盛土	ケヌク	UF	15.7	11.8	2.3	0.4	欠損	写真1:13	
OK0071	E-19・18IX	壁	グスター-縄文後期	Ch	14.8	8.9	6.2	0.5		写真1:14	磨耗
OK0072	C・D-18IX	灰色砂層	縄文後期	Ch	0.9	10.4	2.5	0.1		写真1:15	

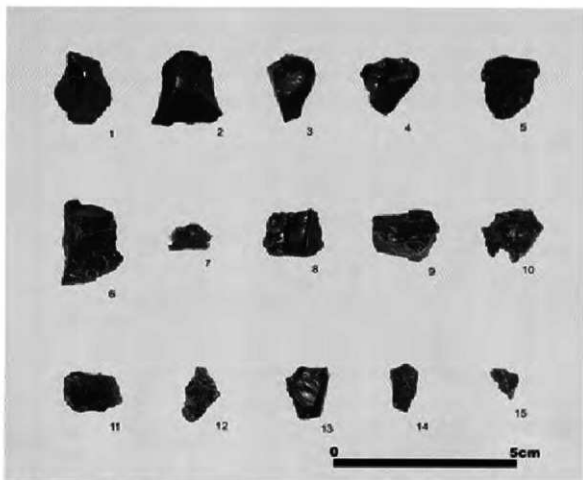
*UF:使用痕のある剥片, F:剥片, Ch:チップ, AH:石籜

*1 SUSUMU KAKUBUCHI 佐賀大学文化教育学部 kakubuch@cc.saga-u.ac.jp

*2 HIROKI OBATA 熊本大学埋蔵文化財調査室 totori@kumamoto-u.ac.jp



第116図 分析資料実測図



図版164 分析資料写真

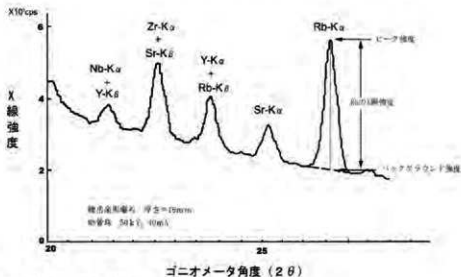
II. 化学分析とその結果

1. 方法

蛍光X線分析による石器石材の産地同定は一般にエネルギー分散型蛍光X線分析装置が用いられることが多い(例えば東村 1986; 望月1996など)が、波長分散型蛍光X線分析装置でも非破壊で元素測定ができることがわかっている(角縁・宇都宮 2002・2003)。波長分散型X線分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置に比べ照射するX線強度が高く、試料表面の薄い部分だけではなく、試料内部からの特性X線を測定することが出来るため、表面の水和層の影響はほとんど無視で

きることが利点といえる。

今回の測定ではNb, Zr, Y, Sr, Rb, Zn, Ni, Fe, Mn, Tiの10元素について非破壊による連続測定をおこなった。測定は基準試料に日本標準岩石試料JB-1を使用し、Merk社のSpectromelt A12を融剤に用い、岩石：融剤の割合が1：2となるように作成されたガラス円板との各元素の $K\alpha$ の位置および高角度側と低角度側の2点のバックグラウンド強度の計3点で測定し、第116図のように真の強度 ($K\alpha$ 線での測定強度/バックグラウンド強度)を計算し、基準試料と分析試料(石器資料)とのX線強度比を求めた。基準試料を測定に使用するのは、器械のX線強度の変動による分析精度の低下を無くすためである。求められたX線強度比はX線カウント数に換算し、各試料に含まれる測定元素同士の強度比を求めた。角塚・宇都宮(2003)は、波長の近接したRb-Sr-Zrに関しては本大学(佐賀大学)での測定と東村(1986)などによる京都大学で求められた産地の値とは大差がなく、産地データを共有できることを示したが、今回分析に加えたFe, MnおよびTiは検出器の感度の違いで、東村(1986)などのデータとはそのままでは比較できない。



第117図 X線ラインプロファイル

2. 測定

今回の分析は佐賀大学文化教育学部設置の波長分散型蛍光X線分析装置(日本電子製JSX-60ST)を用いて分析をおこなった。測定にはRh管球を使用し、管電圧50kV、管電流40mAの条件で測定をおこなった。分光結晶にはLiF(200)、検出器はシーチレーションカウンターを使用した。黒曜石は試料ホルダーにセットした後、25 μ m厚のマイラーフィルムで押さえ測定中に動かないように固定した。試料表面の凹凸による影響を無くすため、測定はSample spin ONでおこなった。本装置には6個の試料を同時に入れることができるが、一番目の試料には必ず基準試料が入るため、同時に測定できる未知試料は5個である。未知試料5個の分析にかかる時間は約1時間である。

3. 分析結果および産地推定

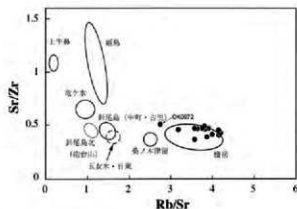
分析結果を表78に示す。測定によって求められた各元素のX線強度比をあらかじめ九州各地の黒曜石産地から得られた値と比較して産地推定をおこなった。同定にはすべての元素を用いて産地推

定をおこなうのを基本とするが、産地ごとの違いの大きく現れたRb/Sr-Sr/Zr図(第117図)およびRb/Sr-Fe/Zr図(第118図)を使用した。

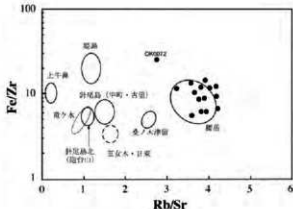
この結果、本遺跡出土黒曜石石器11点(OK0015・OK0016・OK0017・OK0018・OK0062~OK0072)の産地はすべて佐賀県伊万里市所在の腰岳と推定される。

表78 分析試料の元素組成比

Sample No.	OK0015	OK0016	OK0017	OK0018	OK0062	OK0063	OK0064	OK0065
Nb/Zr	0.257	0.218	0.247	0.255	0.263	0.249	0.186	0.215
Y/Zr	0.611	0.619	0.591	0.639	0.638	0.646	0.447	0.633
Sr/Zr	0.486	0.464	0.425	0.471	0.460	0.460	0.358	0.404
Rb/Zr	1.851	1.652	1.784	1.843	1.666	1.788	1.280	1.680
Zn/Zr	0.534	0.169	0.165	0.228	0.288	0.235	0.705	0.279
Ni/Zr	0.417	0.433	0.484	0.293	0.391	0.223	0.807	0.317
Fe/Zr	6.288	5.862	6.792	6.215	10.091	8.727	14.373	9.306
Mn/Zr	0.22	0.173	0.197	0.208	0.320	0.270	0.480	0.310
Ti/Zr	0.038	0.015	0.019	0.028	0.083	0.052	0.142	0.060
Rb/Sr	3.809	3.562	4.195	3.916	3.624	3.886	3.570	4.162
推定原産地	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳
Sample No.	OK0066	OK0067	OK0068	OK0069	OK0070	OK0071	OK0072	
Nb/Zr	0.2953	0.2691	0.2831	0.1977	0.227	0.255	0.133	
Y/Zr	0.6209	0.6813	0.5894	0.5234	0.538	0.499	0.496	
Sr/Zr	0.4601	0.4579	0.4439	0.4507	0.413	0.383	0.493	
Rb/Zr	1.7163	1.7392	1.8421	1.4325	1.651	1.485	1.345	
Zn/Zr	0.2732	0.3549	0.315	0.4959	0.519	0.746	0.914	
Ni/Zr	0.2921	1.0171	1.1724	0.6309	0.421	1.478	4.586	
Fe/Zr	8.4983	12.8207	13.2797	12.5148	12.260	15.685	27.836	
Mn/Zr	0.2603	0.3803	0.3676	0.3867	0.389	0.459	0.709	
Ti/Zr	0.068	0.0739	0.0618	0.109	0.161	0.148	0.187	
Rb/Sr	3.7302	3.7981	4.1494	3.1783	4.003	3.880	2.730	
推定原産地	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	腰岳	



第118図 Rb/Sr-Sr/Zr図



第119図 Rb/Sr-Fe/Zr図

III. 本資料の意義

筆者ら(小畑・盛本・角縁 2004)は、沖縄諸島62点(22遺跡)、徳之島20点(3遺跡)、奄美島36点(7遺跡)を中心に、参考資料として種子島22点(6遺跡)、屋久島6点(1遺跡)の計145点(39遺跡)を蛍光X線分析装置によって産地を推定した。その時点で集計された沖縄諸島・奄美諸島における黒曜石出土遺跡は36遺跡387点であった。これ以前に琉球列島域で行われた理化学的な分析は、仲泊遺跡(金武・安里ほか1977)、阿波連浦貝塚(藤科 1999)と伊是名貝塚・仲田上遺跡・ウフジカ遺跡(綱干ほか2001)の3つであり、その時点で分析された資料数は22点であった。

分析の結果、琉球列島南部(奄美諸島・沖縄諸島)への黒曜石の流入時期は縄文時代後期後半であり、それ以前の流入は考えられないこと、その内訳は腰岳が96%、針尾島と竜ヶ水が各2.6%と、腰岳および西北九州産黒曜石が主体であり、奄美を除くとすべて西北九州産黒曜石であることが判明した。この黒曜石産地の種類数の減少にみられる北から南への地理勾配は、流入時期や出土量の面にも想定できる可能性がある。晩期になると一つの集落に黒曜石が集中する傾向も認められた。

しかし、分析資料をもとに推算した黒曜石重量は320gを超えず、きわめて量的に少なかったのが実情である。この量的な少なさや、石器自体が小型である点、使用率の高さ、楔形石器が多い点、石鏃の模倣品の存在などを勘案すると、本地域と九州島との間には、常に情報や人が往来するような恒常的な黒曜石交易が行われた可能性は少なかったものと考えた(小畑・盛本・角縁 2004)。

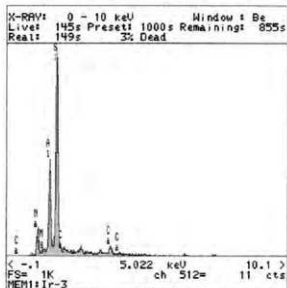
本資料もこれら仮説の裏づけの根拠の一つを構成している。それは、剥片の6割が使用されているという使用率の高さ、小さな剥片の使用、両極打法による剥片の生産、石鏃未製品(模倣品)の存在など、石材産地から遠い地域でみられる石器上に現れる顕著な現象が認められる。

【参考文献】

- 綱干 守・二宮修治・小田静夫・丑野 毅・吉田 学 2001「伊是名貝塚出土の黒曜石分析」『伊是名貝塚』312-316頁、勉誠出版。
- 小畑 弘己・盛本 勲・角縁 進 2004「琉球列島出土の黒曜石製石器の化学分析による産地推定とその意義」[Stone Sources] 4, 101-141頁、石器原産地研究会。
- 角縁 進・宇都宮 恵 2002「蛍光X線分析による黒曜石の産地同定(1)」、『佐賀大学文化教育学部研究論文集』vol. 7, No. 1, 49-52頁。
- 角縁 進・宇都宮 恵 2003「蛍光X線分析による黒曜石の産地同定(2)」、『佐賀大学文化教育学部研究論文集』vol. 7, No. 2, 47-58頁。
- 金武正紀・安里嗣淳・常真綱一 1977「仲泊遺跡」, 沖縄県恩納村文化財調査報告書 第1集。
- 東村武信 1986「石器産地推定法」, 考古学ライブラリー, 47, ニューサイエンス社, 89p。
- 望月明彦 1996「蛍光X線分析による中部・関東地方の黒曜石産地の判別」『X線分析の進歩』28, 157-168頁。
- 藤科哲男 1999「阿波連浦貝塚出土の黒曜石製遺物の原産地分析」『沖国大考古』12, 195-202頁, 沖縄国際大学文学部考古学研究室。

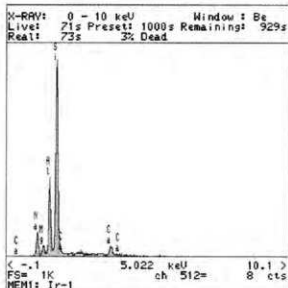
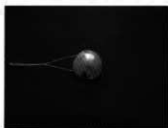
Ⅶ ヒスイ分析

新里貴之 (鹿児島大学埋蔵文化財室)

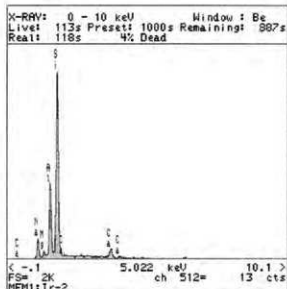


Ir-3 (0908) (小勾玉状): ヒスイ輝石 cf. コタミあり。

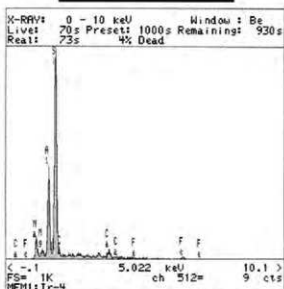
ヒスイ本体にはあまり入らないニッケル・塩素・カリウム値が高い



Ir-2 (0101) (丸玉): ヒスイ輝石



Ir2- (0528) (丸玉): ヒスイ輝石



Ir4 (0309) (丸玉): ヒスイ輝石 cf. Al/Caが低く、Feが多い。珍しい。

第VI章 総 括

I 環境と生業

辻 誠一郎 (東京大学)

1. 遺跡とそれを取り巻く生態系史

伊礼原遺跡のこれまでの調査で明らかになってきた地質層序と堆積環境の移り変わり、および動物遺体群から明らかになってきた景観あるいは生態系の移り変わりをまとめると以下のようになる。

縄文時代早期の活動期と海面変動期：遺物からは縄文時代早期の爪形土器（ヤブチ式土器）をもつ人々の活動期である。遺跡の中央部においてこれまでに確認された爪形土器包含層あるいは曾畑式土器包含層より明らかに下位の堆積物にはサンゴ砂礫からなる堆積物は認められず、一般碎屑物としての砂の厚い堆積物が確認できる。このことから、海面は上昇期にあり、あったとしてもサンゴ礁は人々の活動域からはるかに隔たった沖合いに位置していたと考えられる。この頃の植生復元の手がかりとなる資料は今のところ得られていない。

縄文時代前期の活動期と照葉樹林：曾畑式土器の多量の出土によって知ることができるといえる縄文時代前期中頃までに海面が上昇していたことが、サンゴ砂礫からなる堆積物とそれが覆う標高0m前後の基盤岩の波蝕台地形から知ることができるといえる。ただし、波蝕台地形がいつ頃形成されたかを知る年代資料は今のところ得られていない。曾畑式土器に随伴する貝類遺体群にはマガキガイ、チョウセンサザエ、サラサバテイル、ハイガイが主体となり、シヤコガイも多産することから、サンゴ礁が形成されていたことが示唆される。魚類遺体群ではブダイ科などの典型的なサンゴ礁要素は少なく、サンゴ礁がまだ発達段階にあった可能性も指摘されるが、伊礼原遺跡が内湾的地形に位置しており、フエフキダイ科やベラ科といった内湾沿岸に面した遺跡での特徴も見られるので、地形の反映である可能性も指摘される。花粉分析による花粉遺体群は、シイ属の最優占が認められ、「どんぐり塚」を構成する種実遺体群ではシイ属果実が大半を占めたことから、周辺域にはシイ属からなる照葉樹林が形成されていたと考えられる。他のブナ科、すなわちオキナワウラジロガシ、ウラジロガシ、ウバメガシ、マテバシイ属の果実破片も含まれるので、周辺域にこれらをともなった照葉樹林が存在したものと推察される。アダン果実の多産からは、沿岸にアダン群集が成立していたことが推察される。陸産貝類からは遺跡が林内もしくは林縁であったことが示唆され、植物遺体群からの推察と調和的である。

縄文時代後半期と砂堆・砂丘形成期：曾畑式土器包含層の堆積後は、枝状・塊状サンゴ砂礫からなるバーム堆積物やそれを覆う砂丘堆積物が標高2m前後の高まりを形成しており、約4400炭素年以降、すなわち縄文時代中期以降に砂堆・砂丘形成期に入ったことが示唆される。遺跡の北東側の低湿地区では、水平方向に層相の変化が著しい薄層の第13・第12層が堆積し、その年代が外側の砂堆・砂丘形成期に対応することから、両者は同時異相か低湿地区が二次堆積した可能性が示唆され

る。人々の活動は低湿地区にも砂丘区にも認められる。貝類遺体群はイソハマグリやオキシジミを主体とし、河口干潟が広がっていったことが示唆される。魚類遺体群ではブダイ科などが多産し、サンゴ礁沿岸環境を示唆した。また、シイ属やオキナワウラジロガシなどの照葉樹林要素が遺体群として検出されるので、依然として照葉樹林の景観は存続していたと推察される。陸産貝類も依然として林内か林縁の環境を示唆し、調和的である。

グスク時代と森林の衰退：約1000炭素年前頃、低湿地区では泥炭が堆積し、湿地林が成立する沼沢地の環境であった。外側では砂地・砂丘地が海側に拡大し、海は外側に大きく後退したと考えられる。その後のグスク時代では、低湿地区は湧水に涵養された沼沢地が拡大し、ヌノメカワニナが繁殖した。陸産貝類からは開放地が拡大したことが示唆され、森林の後退が推察される。このことは花粉遺体群からも示唆され、木本花粉がほとんど出現せず、イネ科とカヤツリグサ科の花粉のみで花粉・胞子の80%以上を占め、ヨモギ属やアブラナ科が随伴した。

2. 動植物遺体群からみた縄文時代前期中頃の生業

骨細式土器包含層の動植物遺体群から、縄文時代前期中頃の生業を考えてみよう。

まず、貝類遺体群のうち食用海産貝類ではマガキガイ、チョウセンサザエ、サラサバテイラ、ハイガイが優占し、サンゴ礁域に生息する貝類が主体に採取されていることが分かる。また、脊椎動物遺体群についてみると、イノシシと魚骨がおおむね同量で圧倒し、リクガメ類もかなり多く、ウミガメ類も普通に産する。イノシシが多産する点ではこれまでに知られる縄文時代早期の遺跡での産出状況に似るが、魚骨が多産する点では縄文時代中期以降の遺跡での産出状況に類する傾向が認められ、縄文時代前期の事例としては沖縄最古のものといってもよいだろう。その意味で、沖縄における魚類利用の発展開始期の様相を示すものとして注目される。魚類の内容を見てみると、ハリセンボン科が最多で、ハタ科、ベラ科、フエフキダイ科がこれに次ぐ傾向がある。ブダイ科のような典型的なサンゴ礁の要素は少ないのは、内湾沿岸域の遺跡に見られる傾向であり、本遺跡の地形的な立地を反映しているものと考えられる。

このほかにリュウキュウヤマガメが多産するという点で特異である。これは生態的に照葉樹林が周辺に存在していたことを示しており、森林性の動物群の利用を示している。イノシシの産出量も膨大で、九州のイノシシに比較してはるかに小型であり、九州から持ち込まれた可能性はきわめて低いことから、リュウキュウヤマガメ同様に陸上動物群の積極的な利用が示される。

一方、植物遺体群からは、どんぐりを生産するブナ科植物の果実利用が積極的に行われていたことを示している。とくに周辺域に優占していたと考えられたシイ属果実の利用はアンポン供給源としての植物利用を示すものである。シイ属とともにオキナワウラジロガシ、ウラジロガシ、ウバメガシ、マテバシイ属も「どんぐり塚」を構成していたことから、周辺域のブナ科植物はいずれも利用対象になっていたことを示している。沖縄においてこのようなブナ科果実の積極的な利用は、縄文時代後・晩期の宜野座村前原遺跡でオキナワウラジロガシやシイ属果実の利用が確認されていたが、縄文時代前期では初めてのものであり、かつ沖縄での最古の事例である。

ところで、「どんぐり塚」の大半をなしていたシイ属果実はほとんどすべてが破片として産出したが、大型のオキナワウラジロガシ果実は、筑内では完全な形で産出し、水洗で得られたものでも

完全形で得られた果実が目立った。これは、上述の宜野座村前原遺跡での筑内からの完全形の産出と合わせ考えると、オキナワウラジロガシはシイ属果実に比較してはるかにタンニンの含有率が高いため、泥中に埋めてあく抜きをしなければならなかったためではないかと考えられる。これに対してシイ属果実は破砕によって即時デンプンを利用できたのであろう。

本遺跡では「どんぐり塚」以外から得られた種子や果実の種類は相当量に及んでいるが、直接人々が利用したことを示す状況証拠は、上記の「どんぐり塚」構成種を除いては明らかになっていない。アダンの果実なども利用対象と考えられるし、植物遺体群で詳述されたように「どんぐり塚」から特異に随伴したチシャノキ果実も用途は不明であるが、何らかの利用があったものとして注目される。今後の調査における産出状況の把握によって、多様な植物資源の利用の実態が明らかになるものと思われる。

最後に木材遺体群から木材資源利用について触れておこう。今回は出土したわずかな木製品と自然木の樹種が検討されたが、周辺域に存在した照葉樹林からの利用が一般的に行われていたことを示している。ただし、琉球列島には現在自生しないコウヨウゼンなど針葉樹の木製品が出土したことは特記すべきであり、海流によって運ばれた木材が加工・利用されたものが、あるいは木製品として持ち込まれたものかのいずれかである。他の遺物とを合わせ考えると、交易によって持ち込まれた可能性は低く、漂着の木材が利用された可能性が指摘できる。

以上のことをまとめると、曽畑式土器期においては、すでに発達をみていたサンゴ礁生態系における魚介類資源の利用と、シイ属の優占する照葉樹林生態系における爬虫類・哺乳類資源ならびにデンプン供給源としての植物資源利用を積極的に行っていたといえよう。このような、海産動物資源のみならず陸産動物資源、陸産植物資源の利用体系が沖縄で明らかになったのは初めてのことであり、日本列島での縄文時代の動植物資源利用においても重要な比較資料になるといってよいだろう。

II 遺跡のまとめ

1. 伊礼原遺跡の概要のまとめ

伊礼原遺跡の低湿地区は平成11年度から平成14年度の4年間の範囲確認調査であった。前半は中央区の曾畑層までの層位の確認であったが、中盤は北区・東区・南区・西区の順に縦横に駆け低湿地区の堆積状況の把握に努めた。後半は各グリットを接合し、曾畑層以下は幅1mのサブトレンチを設け縦横に礫層と曾畑層の堆積状況やそれ以下の文化層の把握に努めた。しかし、低湿地区の発掘調査は地下水と壁面崩落との戦いであった。

砂丘区は平成14年度から平成16年度の3年間の範囲確認調査であった。前半は低湿地区との接点を求めてソフトボール場周辺部での試掘調査であったが、中盤からソフトボール場を横断するE-16~20グリットで砂丘形成と文化層との相関関係の把握に努めた。後半は地中探査の結果とその検証に努めた。やはり砂丘区も縦横に扶られた送水管の撤去後の凹砂地や覆乱土器が多少の雨水で崩落し、清掃・発掘の繰り返しであった。しかし、それらに増して大きな成果が多々あった。

低湿地区

低湿地地区は大まかに3区分の層に分けられる。樹根層を境とした上層の第3層~第10層の陸生の堆積層、樹根層から礫層上面までの第11層から第13層はウチヌカー湧水で常に水没し、流失・堆積を繰り返した層、礫層を主体とする第14層以下では礫層堆積前後の生活層の痕跡と有機質の堆積である。

これらを概観すると低湿地区では第3層~第9層まで褐色の混土砂層カワニナが伴い7枚の層はほぼ水平で14層に細別できるほど安定した堆積をなし、堆積学からは水田であるとの所見や、含まれる有機質が60%前後と安定した包含量からやはり人為的な条件下で堆積されたとする分析結果も得られた。出土土器はグスク土器がやや多く、面縄前庭式土器もみられるが土器は水曜を受けている。ほぼグスク時代の堆積時期だと判断される。下層の第11層の樹根層が14Cでは9世紀であることから、それ以後でグスク時代から近世の所産になるものであろう。

第11層の樹根層は14Cで1140±60の年代が出ており、北東区、北区、東区の北東側にはなく、西区、南区、中央区、東区の南西側の調査区の南西側にほぼ全体的に樹根群が検出できた。それらは自然的な景観であるがサキシマスオウノキ、サガリバナ、オヒルギの存在が確認されマングローブ林が生育する汽水地域の縁辺部であることが判明した。それらの樹根の根本や下位ではグスク土器も出土するが、基本的には「くびれ平底土器」が主体を占め、完形土器も中央区西壁面で出土した。土器編年でもほぼその時期と判断されており、フェンサ下層土器の時期を改めて確認でき、この時期のマングローブ林の低湿地をフェンサ下層土器期の人々は、その他の生活の痕跡がないことから鬱蒼と茂ったマングローブ林を捕食の為の採集する地域の景観であったと思われる。

その下層の淡褐色混砂泥炭層の第12層、灰色石英細砂層の第13層の状況は、長い間洗われて精錬された石英質の第13層がやっと水が定む安定期を迎え有機質が堆積する状況ができ、第11層の樹根層が形成されたと判断できる。下層の第14層に含まれる縄文土器からみると、この第13層、第12層が形成されるまでにはかなりの時間を経たことがうかがわれる。

第14層は暗褐色混礫泥質砂層で基本的に礫層である。これらの礫層の堆積によって低湿地区に土

手が形成され、結果的に上層の第11層の樹根層レベルまで湧水が湛えられ、水没した有機質が温存されたと考えられる。礫層は上中下の3枚の礫層に区分でき、また、時期区分の目安にもなった。礫質は石灰岩や石灰岩質岩で統一され、造礁サンゴ石灰岩やその他の石質は皆無であった。礫層は調査区の南西側半分のにみに拡がり北東側にはみられない。特に多いのが西区、南区で、中央区では南西角で厚く、三方へゆくにつれ薄くなり北区へは拡がらない。東区では散在した状態である。

3枚の内、上位の礫層は拳大のほぼ均一な半円礫で西区・南区では二重に密に堆積しているが中央区や東区ではまばらである。南区の南側でこの礫層上面に板状の樹木と石斧3点、面縄前庭式土器片が共に出土した。東側ではこの礫層を横転して噛んだ状態で木製容器が出土した。面縄前庭式土器の縄文時代中期との編年の位置づけや木製容器の14C年代の4480±50と4460±30との数値から、ほぼ縄文時代中期の時期として把握される。この上位の礫層と中位の礫層との間には10cm～30cmの緑灰褐色砂層の間層があり、南区では10cmと薄く、中央区の北側や東側、東区では20～30cmと厚く堆積していた。南区の東側サブトレンチでこの薄い間層に建築材が横積に出土し、面縄前庭式土器片も出土した。中央区の東側では面縄前庭式土器片や縄文晩期の土器片がみられ、東区のサブトレンチ東側では面縄前庭式土器片や仲泊式土器片が出土した。このとは南区の上位の礫層が密に堆積している部分では土器の混在がみられないが、まばらに堆積している部分では土器の混在がみられた。これらは流路による溝やポットホール、カニ穴等も多々みられることより考慮する必要がある。

中位の礫は拳大の礫も含むが、全体的に多いのは人頭大ほどの半円礫である。上位の礫層同様に南区、西区で50cmと厚く、中央区で40cm、東区で30cmほどである。その拡がりも同様で南区、西区、中央区、東区みられるが北区にはない。人頭大の礫層は上下に2～3重にほぼ重なってみられるが、東区では一重になる。中央区では上位の一重の人頭大の礫層レベルから曾畑式土器は出土するがまばらで、東側では縄文晩期土器も出土している。2重の礫層レベル上面から曾畑式土器が始めて貝殻、獣骨と共に出土し、下面で集中的に出土する。さらに2重の礫層レベルでは石灰岩礫以外の硬砂岩や安山岩質の石皿・磨石・石斧等の人為的に持ち込まれたものは全礫層中このレベルでしか出土がなく、この面が曾畑式土器期の生活面であることが判断できる。この2重の礫層下面に筍は検出された。筍の上面では人頭大の礫を3回取り外したことから指標的に置かれた様相とも受けとめられた。また、この2重の礫層下面から破砕されたシイの実がレンズ状に堆積して確認された。シイの実はその上位や下位層ではみられなく限られたレベルでしかみられなかった。特に、明瞭にみられたのは東区のサブトレンチ南壁面、中央区のサブトレンチ東側より南壁面、中央区の東壁面、筍の上面、南区のサブトレンチ北側より東壁面の範囲でレンズ状に堆積していた。南区のサブトレンチから中央区の南西側にかけては、この2重の礫層下面レベルで石皿や磨石・蔽石が目につき、その周辺で海獣骨や特にイノシシの四肢骨や下顎骨が集中して出土した。貝殻の出土もその周辺が最も多く北面して堆積している状態であった。この2重の人頭大礫層を掘り終えると人工遺物が極端に少なくなった。これらの2重の人頭大礫層面が曾畑式土器期の生活層であることが判断できた。

下位の礫層は鶏卵大の半円礫で均一で、礫層中で最も範囲が限れ、しかも小マウンドを形成していた。西区西角で傾斜しながら堆積し、南区の東壁面側と中央区の西側半分で厚さ40～50cmの堆

積をピークとして東側へは急激に20cmほどに薄くなっていく。北側へは中央区の真ん中ほどで一旦途切れ、2mの間をもって再び高さ1mのレンズ状の堆積をみせる。このレンズ状の堆積の盛り上がりは、平面的には中央区の北西隅に略東西に幅3mの帯状にみられる。さらに北側へは2mの間をもってたびあられ厚さ30cmの堆積になり、約3m続くと細まりながら消える。さらにその延長線上には後述の軽石層がつづいている。この途切れ部分の凹みや略東西に帯状に礫層が露頭する形状からウチヌカー湧水からの流路によって本来つづいていた礫層が切り開かれたものと判断される。これら下位の礫層は無遺物層である。

この下位の礫層は鶏卵大で均一であり、無遺物層であること。また西区西角で西側から登り上がるように堆積していることと、その登り口に幅80cm、厚さ20cmほどの横倒しになった大木があり、その大木が海水に生息する船食虫の穴が無数に開いていたことから明らかに流木であることが判断できた。近くにナガサガの河口を控えていることを考慮すると、直接、間接に海洋との接触が考えられ、鶏卵大の礫層も水圧によって押し上げられたものと判断される。それは後述の軽石層も同様な影響で調査区まで持ち上げられたものであろう。それらは曾畑式土器期の生活層が形成される以前の痕跡である。

第14層の礫層は当初、単一の層と理解していたが明確に上中下の3枚に分けられ、中層の人頭大の半円礫を伴うレベルが曾畑式土器期の水辺地域でのシイの実の保存策や破碎、礫面での貝殻・獣魚骨の解体等がおこなわれた生活址で、いわゆる水辺遺構とされる性格のものであろう。

礫層下の第15層は暗灰色砂層で基本的には無遺物層であるが、南区のサブトレンチの上面でローリングを受けた爪形文土器片が出土した。北区では鶏卵大の礫層の延長線上に幅約5mの間で、南側で標高2.2m、北側で2.6mの高低差40cmの間に黄褐色の軽石層が乗っている。南側でピンポン玉大で北側では数ミリ大で小粒になり、砂状に薄く変わる。この軽石層の消える延長ラインで爪形文土器片が数個体分出土しているが、木曜を多少受けている。このことから爪形文土器（東原式土器）は水位が上がる以前の時期であることが判断できる。

また、爪形文土器の北側（丘陵側）で直径約50cmの円形に数ミリの木炭片が集中する部分が確認されたが、台風で流されてしまった。土器の破損状況や出土状況から近くに生活址が考えられ、特に北側の丘陵部下の岩盤にノッチ状の岩陰があり、それを想定したが今回はそこまでの追跡調査ができなかった。

第16層は暗褐色泥炭層で南区や中央区のサブトレンチでは褐色で間層を挟み3枚の互層をなしているが中央区西壁・西区サブトレンチでは黒褐色を呈して樹種等も散見された。しかし、人工遺物は発見されなかった。

砂丘区

砂丘区では丘陵部（米軍隊舎399）麓の略南北のアスファルト道路割で5本の試掘調査穴で縄文中期の面縄前庭式土器期の炉址と柱穴群を皮切りに、低湿地区との間では海成砂から復元可能な条痕文土器をB-23試掘穴とC-24試掘穴で1個体ずつ得ることができた。これらを元にソフトボール場内を横断する形でE-13-20グリットの幅5m、長さ70mのトレンチを設定し、砂丘形成と遺跡形成過程を把握することに努めた。陸側のE-17-20グリットのプライマリーと考えた暗褐色砂層の第5層aはグスク時代・弥生時代・縄文晩期の各時期の遺物が混在し層に苦慮した。それは

ど後世の擾乱を受けていた。これは砂丘の背後地の凹地であることや、戦前までの地籍図では水田として利用されていることなどから地の利の良い地勢の特徴だと判断された。それらを暗示するかのごとく下層の第6層aではE-18グリットでは弥生時代前期の大型壺の下半部と扁平片刃石斧3点がセットのように検出された。また、E-19グリットではゴホウラ製の腕輪3点が一括遺物として検出された。E-20グリットの北東角では一抱えほどの石灰岩礫で「L字状」の石組みが露頭した。縄文晩期の遺構であった。その隣の東壁面では人頭蓋骨が露見されたが次回にゆだねることとした。このように第6層aでは弥生時代から縄文晩期の時期にかけて埋葬址を想定できるような遺物や遺構の検出がみられる。その周辺には同様な遺構が存在していることは明らかで、その可能性は高い。

E-20グリットでは深さ40~80cm、平面プランが80cm~2mほどの不定形土坑が7基検出された。特に炉址1を取り囲むようにして土坑3・4・7号があり、北側壁際には炉址2と土坑1号が接していた。土坑内には拳大の礫や貝殻が堆積していた。生活面とは判断できたが明確な性格は判断できなかった。炉址2は1.8mほどの不定型なプランで、深さは約30cmである。その上面には器形を復元できる土器があり浅鉢(皿形)(第90図・11)、深鉢、逆U字状の把手をもつ深鉢など仲原式土器(第83図・17)のセットが確認できる炉址である。大きさからみると堅穴住居址の下半部のプランの可能性も考えられる。

E-19グリット第7層aでは覆土に市来式土器・面縄東洞式土器・嘉徳I式土器、貝殻などを含む隅丸方形堅穴敷石住居址が検出された。礫は拳大から人頭大の大きさで暗灰色を呈している。地中探査をおこなった結果、同レベルの南北に礫群の陰影が確認され、検証発掘調査をおこなった。これら礫層群はC-19北グリットで1基、C-19・20グリットで2基、C・D-18・19グリットの中央部に1基、D-19グリット東壁面で1基、F-19グリットで1基、G・H-19グリットで2基と、略南北19トレンチを境として東側(丘陵側)に合計8基の集石遺構を検出できた。C・D-18・19グリットの中央部に1基を含め2基の堅穴敷石住居址と確認したが、他の集石群は住居址の可能性が高いと判断されたが、地中探査の検証ができたことで当初の目的は達成されたと判断し、次の発掘調査にゆだねることとした。これらの集石群は略西側(海側)には確認できず、第2章で堆積学の松田順一郎氏の報告によると、E-18グリットから略西側では高潮により挟られたとの見解であった。E-18グリット中央部に検証のため掘り下げたところ、表土下約2.5m下に傾斜した人頭大の礫が検出され、それを境として東西の砂層の堆積状況が全く異なっていた。

E-20グリットの中央部に第7層から掘り込まれた貝殻集積が検出された。約2.5mの不正円形で、中央部の深さが約30cmでスリ鉢状の断面観である。堆積状況は6枚に分けられるが大きくみると二枚貝と陸産マイマイ、二枚貝の互層、二枚貝と灰層に区別でき、放棄されて陸産マイマイが堆積できる期間があったようだ。二枚貝はオキシジミとスタレハマグリの見方で縄文前期・後期の貝種とは異なるようである。面縄前庭式土器と人骨片が出土した。落ち込みの下面に灰層をもつことや周辺に20cm大の円形と立石が3カ所に確認でき柱穴と判断されることから、面縄前庭式期の堅穴住居址の可能性が高いと判断される。類例なものとして旧石川市古地原貝塚検出の第2号遺構とされる円形堅穴住居址に近いものと判断される。

この面縄前庭式期の生活址は試掘穴3・4グリットの炉址や柱穴の検出からE-20グリットにか

けて存在すると考えられ、同時期の明確な生活址を把握するには今後の検証が必要である。

E-13~17グリット、海側の調査区では15~16世紀のグスク期の柱穴群が検出された。柱穴群の並びはみられるものの粗の状況であった。掘建柱住居跡のプランは把握できなかったが、集落の南はずれであることが判断でき、またトレンチ掘りの性格であることから拡張すればそのプランは確認できるものと判断される。これは北の伊礼原D遺跡のように柱穴群が密に成りすぎて逆にプランが把握できない状態の指標にもなりえるものと考えており、また、これまで15~16世紀のグスクの住居址プランや一般集落のデータが皆無であることからグスク研究にも一石を投じるものと思われる。

砂丘区の生活址は以上のように縄文中期や後期の生活址が展開された後、高潮にさらわれ、新たな砂丘形成により縄文晩期や弥生時代の柱穴が形成された後、二度目の高波にさらわれ、さらなる砂丘の形成ができ、グスク期の柱穴群の集落址が形成されるという。当初、砂丘形成の拡がり軌を一にして生活址の拡大がおこなわれたと判断したが、自然災害と遺跡の拡大であるという新たな視線で遺跡を見直す機会を得た遺跡であった。今後、沖縄県内の砂丘遺跡の立地や標高の低い遺跡の成立、ひいてはこれまで低島でみられた棲み分けの見解等にも一石を投じるものとなり、新たな見識で南島の遺跡の立地と編年体系を見直す切っ掛けを作った遺跡であり、学史に残りうる遺跡であると思われる。

砂丘区に低湿地区との関係を把握するのが当初の課題であった。つまり、低湿地区で発見された縄文前期の曾畑式土器期の生活址を確認することであった。今回、明確にはその関連を把握するのは至らなかったが、砂丘区の試掘穴1・2グリット第9層で曾畑式土器片を確認することができた。この周辺に生活址を確認できる予定が立ったので一応の成果があったものと判断できる。当地域は最も丘陵部に近く、砂丘の最も後背地にあたる地域にあたっていることである。

報 告 書 抄 録

ふりがな	いれいばる いせき							
書 名	伊 礼 原 遺 跡							
副 書 名	一伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業一							
巻 次								
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編 著 者 名	中村 聖・東門研治・高袋春美・松原智志・細川 愛・尾木 綾・仲村 毅 辻誠一郎・黒住耐二・橋本岳二・松田順一郎・長野真一・松下孝幸・大城逸朗							
編 集 機 関	沖縄県北谷町教育委員会							
所 在 地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発 行 年 月 日	2007年(平成19年) 3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
いれいばる いせき 伊礼原遺跡	沖縄県 北谷町 字伊礼原	473260	45	26° 19' 25"	127° 45' 21"	1997.4 ～ 2005.3.31	1,995	キャンプ桑江北側返還に伴う範囲確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
伊礼原遺跡	縄文時代						低湿地区と砂丘区との空間を利用し、縄文時代早期～晩期、弥生時代相当期、古スク時代・戦前の集落と継続的に使用された遺跡である。従って、南島における土器型式の殆どの土器は出土している。また、縄文時代前期より炭が検出、南島では初めて石斧の柄や縄文晩期の櫛が出土した。	
	早期				爪形文土器・磨製石斧			
	前期	炭			骨燧式土器・木製品・石器・貝殻・シイの実・樹種その他有機質			
	中期	炉址・貝殻積・柱穴			面縄前庭式土器・仲泊式土器 木製品・骨製品など			
	後期	壁穴石敷住居跡			面縄縄式土器・嘉徳式土器・伊波式土器・骨製品・貝製品など			
	晩期	石組み炉址			宇佐浜式土器・翡翠・黒曜石など			
	弥生時代	柱穴			移入土器・浜屋原式土器・ゴホウ製貝輪・磨製石斧など			
	古スク時代	柱穴			古スク土器・中国産陶磁器			
要 約	<p>伊礼原遺跡が特筆されるのは縄文時代早期から晩期、弥生時代相当期、古スク時代、戦前の集落と約7000年前から連綿と利用された複合遺跡であること。そして、沖縄本島は南島において初めての事例となることにある。また、遺跡は一気形成されたのではなく、時代が新しくなるにつれ砂丘が形成され、その過程に伴い遺跡も展開しているが、途中、自然現象により砂丘が削られ遺跡の一部が消滅して、再度砂丘が形成され遺跡が展開する状況が窺えるなど遺跡の立地変遷を考える上でも大変重要な遺跡である。</p> <p>出土遺物では低湿地区の主要となる縄文時代前期の層は圧巻である。骨燧式土器や木製品(柄、檜茶材など)、貯蔵穴などの出土は希有で、骨燧式土器は九州産、トカラ列島産、在地産の3種類に分けることができた。また、有機質の出土は膨大で種類も多く確認でき、本島に現存しない種類、九州からの持ち込みと考えられる瓢箪が確認されるなど、九州との関わり強い特色が見られた。砂丘区では縄文時代中期から晩期、弥生相当期、古スク時代までの遺物が他種類確認されている。土器は南島で確認されている土器の殆どは出土し、各土器に伴う骨製品や貝製品の中にこれまでに出土例のない資料も確認された。砂丘区では更に住居域や他の遺構の残存が認められ生活の様相が窺える。これら遺構は周囲広がる可能性を秘めており、今後の調査で詳細な情報が得られるものと期待している。</p>							

北谷町文化財調査報告書 第26集

伊礼原遺跡

— 伊礼原B遺跡ほか発掘調査 —

編集：北谷町教育委員会

発行年：2007年3月

〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地

TEL 098-936-3490 FAX 098-926-2871

印刷：有限会社 Skill

〒904-0322 沖縄県中頭郡読谷村字波平1732-1203号

TEL 098-958-1515 FAX 098-958-7322
